

青森県埋蔵文化財調査報告書 第169集

# 槻ノ木（1）遺跡

平成6年度

青森県教育委員会



青森県埋蔵文化財調査報告書 第169集

# つきつきのの木き（1）遺跡

—野辺地町近沢川砂防ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成6年度

青森県教育委員会



# 序

野辺地湾を臨む丘陵地や河岸段丘上には、数多くの遺跡が所在しています。とりわけ槻ノ木(1)遺跡は、昭和55年度には野辺地町教育委員会で、また、昭和56年度には本教育委員会が発掘調査を実施している広大な遺跡であります。

平成5年度は、遺跡の中を流れる近沢川の砂防ダム建設事業の実施に先立ち、記録保存を目的として本遺跡の一部を発掘調査しました。

今回の調査によって、縄文時代中期初頭の住居跡をはじめとした遺構やそれに伴う多量の遺物が出土しました。とりわけ円筒上層式土器と大木式系土器の好資料が出土し、当地方の歴史を知るうえで貴重な考古資料を得ることができました。

本書は、この調査結果をまとめたものでありますが、今後、埋蔵文化財の保護、活用、研究にいささかでも役立つところがあれば幸いです。

ここに、この調査の実施から報告書の刊行まで種々御指導、御協力をいただいた調査指導員をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

青森県教育委員会

教育長 佐々木

透



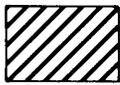
# 例 言

- 1 本報告書は、平成5年度に実施した野辺地町近沢川砂防ダムの建設事業予定地内に所在する「槻ノ木（1）遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査を実施した「槻ノ木（1）遺跡」は、青森県教育委員会が昭和53年度に刊行した『青森県遺跡地名表』に、遺跡番号 40001番として登録している周知の遺跡である。
- 3 本書の執筆者氏名は、依頼原稿については文頭に、その他については文末に記した。執筆者名の記載のないものについては、調査担当者の白鳥が担当した。
- 4 本書に掲載してある図版の縮尺は、できるだけ統一を図り、各図版ごとにスケールを表示している。写真図版の縮尺は、一部統一していない。
- 5 本文中及び表において使用した略称・スクリーントーン等の表示は次のとおりである。

住・住居跡・H－竪穴住居跡 土－土坑

また、遺構番号は、第○号の「第」と「号」を省略する場合もある。

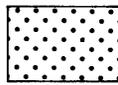
スクリーントーンの表示は、次のとおりである。



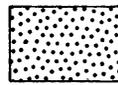
地山



焼土



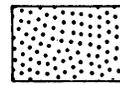
スリ



凹み



タタキ



タタキ+スリ

- 6 遺構の規模に関する計測値は、各遺構の妥当と考えられる部位を計るようにし、重複のため計測ができない場合は、残存値を記載した。遺構の計測値の単位は、「cm」とした。
- 7 遺構の覆土ほか、色調に関する表記は、『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1991）に基づいている。
- 8 試料の鑑定及び同定並びに分析は、次の方々に依頼した（順不同、敬称略）。

放射性炭素年代測定 学習院大学教授 木越 邦彦

炭化材の樹種同定 元奈良教育大学教授 嶋倉 巳三郎

石質鑑定 青森県立八戸高等学校教諭 松山 力

（現、八戸市文化財審議委員）

青森県立板柳高等学校教諭 山口 義伸

- 9 調査並びに報告書作成にあたり、次の機関・諸氏にご指導をいただいた。

（敬称略・順不同）

瀬川 滋、田中 寿明、長尾 正義、駒井 知広、遠藤 正夫、福田 友之、千田 和文、  
三宅 徹也、高橋 与右衛門、田村 俊之、東北歴史資料館、

# 目次

序  
例言  
目次

## 第I章 調査に至る経過と調査要項

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	3
第3節 調査方法	4
第4節 調査の経過	4

## 第II章 遺跡及び周辺の環境

第1節 遺跡周辺の地形及び地質	6
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	12

## 第III章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構と遺構内出土遺物	23
1 竪穴住居跡	23
2 土坑	56
3 屋外炉	79
4 埋設土器遺構	80
5 配石遺構	80
6 溝状ピット	87
第2節 遺構外出土遺物	89
1 土器	89
2 石器	171
3 土製品	277
4 石製品	286

## 第IV章 自然科学的分析

1 出土炭化材の樹種について	292
2 出土炭化材の放射性炭素年代について	294

## 第V章 分析と考察

まとめ 301

写真図版 303

報告書抄録

# 第 I 章 調査に至る経過と調査要項

## 第 1 節 調査に至る経過

野辺地町槻ノ木(1)遺跡は、古くから周知されていた埋蔵文化財包蔵地のひとつである。

県教育庁文化課の(県)埋蔵文化財包蔵地調査カードによると、最初の調査は、44年程前の昭和36年8月18日である。調査員は、二本柳正一氏(故人)で、ついで、昭和46年8月9日に小野忠明、盛田稔、井上久の各氏が、「むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財分布調査」の際、確認されている。また、角鹿扇三氏(故人)の所有された資料の中にも本遺跡から採集されたものが含まれていたようである。

昭和55年に「馬門槻ノ木遺跡発掘調査報告書」が、野辺地町教育委員会から刊行され、ついで、昭和56年に県教育委員会の調査(「県埋文報第77集」)が行われた。それらによって、本遺跡は、縄文時代前期中葉から晩期までと、さらに弥生時代を含む相当長期間にわたって営まれた複合遺跡であることが確認されていた。

「平成3年9月3日 野辺地町立歴史民俗資料館の駒井氏から(遺跡)付近で砂防工事があり、土器が出土しているとの連絡あり」

「平成3年9月13日 文化課の担当職員が、(地元)資料館の駒井氏らと現地を確認、砂防課から事業の説明をうける。上流部より土器多数発見。付替道路について緊急に発掘調査必要。5年度発掘に向け調整。」

「野辺地町教育委員会、水田部分等の試掘調査実施。水田部には(包含層等)なし。段丘面は包蔵地。」

「平成4年1月7日 (遺跡)範囲拡大の台帳提出。遺跡は拡大する。」(「県、埋蔵文化財包蔵地履歴カードから引用」)。

その後、土木部長名で県教育長あてに、「砂防事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査について(依頼)があった。ついで、平成5年11月12日付け、青砂第210号で、報告書刊行に要する費用の積算資料の作成が行われた。

概略、以上のような経緯があって、平成5年7月5日から発掘調査が実施されることになったのである。

(北林 八洲晴)



第 1 図 遺跡位置図

## 第2節 調査要項

### 1 調査目的

野辺地町近沢川砂防ダム建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する野辺地町槻ノ木  
(1)遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成5年7月5日から同年11月18日まで

3 遺跡名及び 槻ノ木(1)遺跡(青森県遺跡番号40001)  
所在地 青森県上北郡野辺地町字槻ノ木31、外

4 発掘調査面積 5,176平方メートル

5 調査委託者 青森県土木部(砂防課)

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関 野辺地町教育委員会、上北教育事務所

### 9 調査参加者

調査指導員 村越 潔 弘前大学教育学部教授(考古学)

調査協力員 中村 正久 野辺地町教育委員会教育長

調査員 高島 成侑 八戸工業大学教授(建築史)

市川 金丸 青森県立郷土館学芸課課長補佐(考古学)  
(現、青森県考古学会会長)

天間 勝也 平内町立茂浦小学校教頭(考古学)  
(現、平内町立山口小学校教頭)

山口 義伸 青森県立板柳高等学校教諭(地質学)

赤沼 英男 岩手県立博物館専門学芸員(保存科学)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

調査第一課 総括主幹

課長 北林 八洲晴

総括主査 白鳥 文雄(主担当)

主事 太田 秀文

(現、弘前大学教育学部附属小学校教諭)

調査補助員 高橋 昌也、相馬 優子

成田 和世、永澤 恵理子

## 第3節 調査方法

### 調査区の設定

道路建設用中心杭のNo260とNo280を通る線を基準軸線とし、これを延長してグリッドを設定した。1グリッドは4m×4mとした。グリッドの呼称は、南東から北西方向にアルファベットの大文字を、北東から南西方向に算用数字を付して、その組み合わせで示した。中心杭No260はI-65に相当する。グリッドの東西軸線はN-52°-Eである。

### 発掘方法

(粗掘り) 基準軸線(Iライン)及び5の倍数にあたるグリッドごとに土層観察用の「あぜ」を残して、各層ごとに掘り下げた。

標準土層(基本層序)にはローマ数字を付して呼称した。

(遺構の調査方法) 遺構は各種類ごとに、確認順に番号を付した。調査中に遺構と断定できないものについては欠番とした。

遺構内覆土の堆積状況を観察するためにセクションベルトを残し、規模の大小により四分法・二分法・その他を用いた。遺構内の堆積土は算用数字を付して呼称した。

遺構の実測の縮尺は、20分の1を基本としたが、規模の大小によって10分の1・その他とした。実測にあたっては、グリッド軸線を元にして、水糸による簡易遣り方実測を行った。記録保存のために、適宜写真撮影を行った。フィルムは、モノクロームとカラーリバーサルの2種類を用いた。

(遺物の取り上げ方法) 出土遺物は、遺構ごと及び層位ごとに取り上げることを原則とした。また、遺物の出土地点を記録し、層位・標高を台帳に記入した。遺構内出土遺物は遺構単位に、遺構外出土遺物はグリッド単位に、通し番号を記入し、出土層位・標高を記録した。

また、取り上げに際しては、色分けしたカード(土器-白・石器-青・その他-赤)を使用し、遺物番号・出土地点・層位・取り上げ期日等を明記した。

## 第4節 調査の経過

平成5年6月7日、県土木部砂防課、十和田土木事務所、県教育庁文化課、埋蔵文化財調査センターの担当職員により、現地の下見を行ない、今後の調査計画の打ち合わせを行なった。6月28日には、野辺地町馬門公民館において発掘調査作業員の雇用説明会を行なった。

7月5日、遺跡内へ調査資材等を搬入し、調査を開始した。調査は、調査区域の草刈りから始め、併行して、事務所付近の環境整備及びグリッド設定(杭打ち)を行った。

草刈りの終了した範囲から表土剥ぎを行い、4 mごとに試掘先行用のトレンチを設定した。表土中からの遺物の出土が多いため、まず、数区域を選定し、表土中の遺物の取り上げを先行して、遺物包含層の状況及び下部の遺構の有無を確認することに努めた。

全体の状況が見え始めた8月11日に、馬門公民館に関係機関が集まり発掘調査打合せ会議を行なった。会議では事業内容の説明の後、調査の経過が報告され、今後の問題点及び見通し等について意見が交換された。この中で、調査区対岸の一部に遺物の出土する部分があるとのことで対応が協議され、調査期間の中で処理することとなった。

8月下旬になり、遺物包含層が途切れた範囲から遺構らしい落ち込みが確認されはじめ、遺構確認作業を併行させた。9月初旬には、遺物の量が多くなったために、センターへ約200箱を搬送した。下旬には遺構が確認されはじめ、精査を中心に作業を行なった。

また、調査区対岸については、予定範囲が非常に狭く、この範囲内には数片の土器片が表土中に混在していただけであった。

10月に入り遺構精査も順調に進み、11月6日には、周辺の町民を対象として遺跡の現地説明会を開催し、野辺地町内外から約50人が見学に訪れた。

調査は順調に進み、11月18日、調査器材を搬出し、無事調査を終了した。

## 第Ⅱ章 遺跡及び周辺環境

### 第1節 遺跡周辺の地形及び地質

青森県立板柳高等学校教諭 山口 義伸

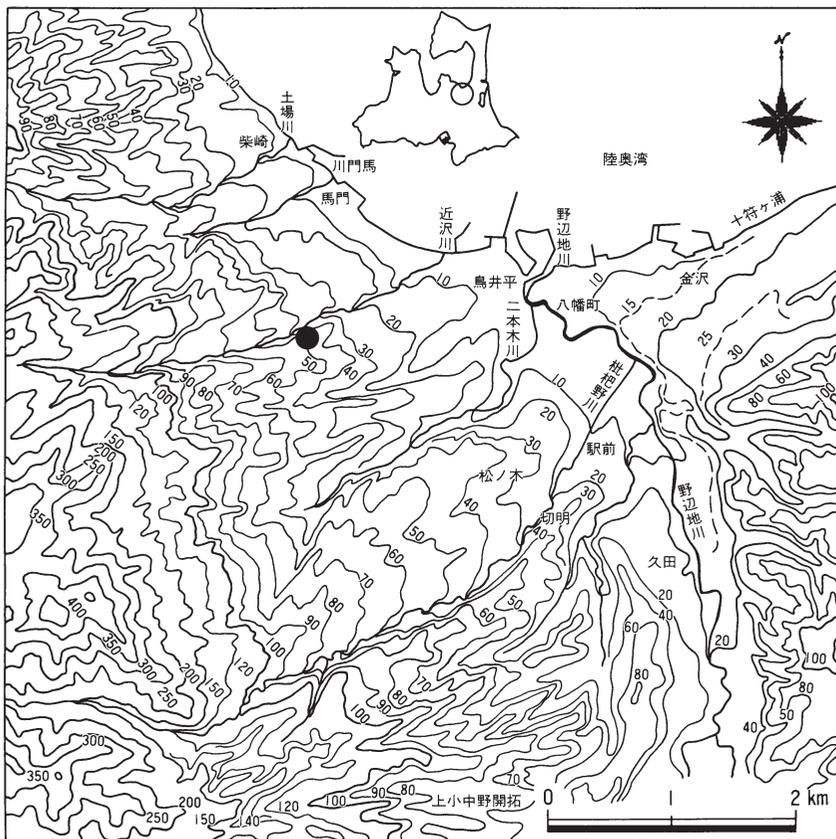
野辺地湾は陸奥湾南岸にあって、湾に突出した夏泊半島東側の湾奥部に位置している。湾奥部での主要河川は野辺地川であって、蛇行しながら北流して野辺地湾に注いでいる。支流としては主に野辺地川以西の二本木川、枇杷野川、与田川などがあげられ、いずれも東流して野辺地川下流部～河口付近にて合流している。野辺地川以東における小谷は上述の諸河川と比して規模が小さく河床勾配が急である。

野辺地町及びその周辺の地形は第2図の等高線図から判断できるように、およそ野辺地川を境にして東西両側では大きな差異が認められる。東側では湾岸に平行して中位段丘相当の野辺地段丘（標高17～35m）が約1kmの幅で発達している。侵食谷による開析が認められるが、起伏が小さく陸奥湾に向って緩く傾斜する段丘面である。なお、陸奥湾には比高17～18mの海崖でもって望み十符ヶ浦と呼ばれている。野辺地段丘の背後には比高約50mの急峻な段丘崖があって標高100～120mの高位段丘が広く展開している。この高位段丘は野辺地川西方では口広平段丘と呼ばれ、東方では長者久保段丘、甲地段丘と呼ばれている。面の高度、傾斜、開析度、構成物などの地形発達からみて2～3段に区分でき、一般には開析が著しいものの平頂な丘陵地をなしている。

一方、野辺地川西方では標高120～150mの等高線を境に地形に変化が認められる。標高120～150mより高所では等高線の間隔が極端に狭く入り込みも大きいことから、烏帽子岳山塊の急峻な地形を示していることが理解できる。この急峻な山塊外縁部にあたる標高120～150mの高度は北北西－南南東の方向性を示し構造的な要素をもっていると思われる。なお、本遺跡の北西方に位置する馬門温泉付近で北西－南東性に向きを変えている。標高120～150mより低い所では比較的等高線の間隔が狭く陸奥湾及び野辺地川に向かって徐々に高度を下げていることが認められる。この傾斜地は山塊外縁部に発達する口広平段丘であって、各河川の下刻作用によって分断されたり流域に分布する扇状地堆積物によって被覆されたりして河間の丘陵地として分布するのみである。なお、烏帽子岳山塊に源を発する枇杷野川及び近沢川流域には山塊の外縁部付近を扇頂部とする扇状地性の地形が認められる。扇状地前面には野辺地段丘があって、湾岸に沿って帯状に発達している。また、野辺地川流域及び近沢川、二本木川、枇杷野川など

の小河川の流域内には小規模ながら低位段丘（小湊付近では薬師野段丘と呼ぶ）が認められる。

槻ノ木遺跡は第3図に示したように野辺地町の西方約2km地点にあって、その調査区域は近沢川右岸沿いに位置している。背後には奥羽脊梁山脈北東端部の一角を占める烏帽子岳山塊が占めている。近沢川流域では山塊外縁部にあたる標高150m付近を扇頂部とする扇状地が展開していて、扇状地前面には野辺地段丘が位置し比高5～10mの段急崖で接している。これらの地形を分断して流れる近沢川流域内には低位段丘相当の古期氾濫原が認められる。古期氾濫原は原河床面と約5～6mの比高差が認められる。本遺跡の調査区域は近沢川右岸に分布する扇状地を被覆する古期氾濫原上に立地し、調査区域北端は近沢川に臨む比高4～5mの急崖となっている。調査区域からは、縄文時代中期の遺物密集部分が検出されており、これは、標準土層の第Ⅰ～Ⅲ層からの出土である。ただ本来の遺物包含層が雨水等に絡む崩落によって一部流された可能性があり、また薄く残った遺物包含層に、後世の崩落土（遺物を包含する）や耕作による土が被覆した部分も多く認められる。



第2図 遺跡周辺の等高線図



次に、本遺跡周辺の地質概要については青森県教育委員会（1983）に基づいて記述する。この地域の地質を要約すれば、下位より新第三紀中新世の四ツ沢凝灰岩類及び上位の小坪川安山岩類、鮮新世の砂子又層、第四紀の野辺地層及び上位の上北火山灰層、段丘堆積物そして沖積層で構成される。最下部の四ツ沢凝灰岩類は流紋岩及び同質の火砕岩からなり、背後の烏帽子岳山塊の中核をなし、山塊の中腹から山麓にかけては安山岩質凝灰角礫岩及び同質凝灰岩からなる小坪川安山岩類が堆積している。この基盤岩の外縁には半固結状態の砂子又層（主に凝灰質砂岩からなる）及び野辺地層（主に砂岩からなる）が堆積し、段丘群の基盤をなしている。

上記の各地層群を覆っているのが褐色火山灰層（ローム層）であって、段丘群との関係で、上北下部火山灰層、上北中部火山灰層、上北上部火山灰層の3つに区分できる。上北下部火山灰層は茶褐色を呈する粘土質火山灰であって、中部に厚さ1m程の濃橙色細粒浮石（甲地浮石と呼ぶ）を挟み、下半部には厚さ50cm程の白色浮石層が伴っている。一般に、高位段丘面を覆い、本火山灰層の下位には段丘堆積物と思われる角礫岩及び砂礫岩が認められる。上北中部火山灰層は中位段丘以上の段丘を覆う茶褐色の火山灰であって、3～4枚の粘土質浮石層をはさむほかに暗色帯及びクラック帯が伴っている。本火山灰基底部には風化して粘土化したオレンジ浮石（厚さ30～50cm）が堆積し鍵層となっている。本浮石の下位には砂礫層や砂層などから構成される段丘堆積物が認められる。上北上部火山灰層は沖積地以外の全地形面を覆う火山灰である。本火山灰層は上部が浮石粒の含む粗粒火山灰で、下部が厚さ30～50cm程の浮石層（基本層序の第IV層に相当し、千曳浮石層と呼ぶ）からなるが、本遺跡周辺では下部の浮石層のみが堆積している。上北上部火山灰層の上部には黒色腐植質土が堆積し、腐植土には十和田火山起源の十和田a降下火山灰（To-a）及びTo-a上位に堆積する白頭山起源の苦小牧火山灰（B-Tm）の2枚の薄い降下火山灰が認められることがある（第4図）。

最後に、調査区域内の基本層序について記述したい。

#### I層 黒褐色土 （厚さ10～20cm）

表土及び耕作土である。粘性・湿性がややみられる。やや堅固であるが締まりに欠け脆い。乾くと、層全体が黒灰色に変色し、さらさらした感触で崩れやすい。耕作土は乾くとクラックが発達してブロック状に割れやすくなる。

#### II層 黒色腐植質土 （厚さ10～30cm）

粘性・湿性がある。やや締まりがみられるが、全体的にソフトな感じがする。やや粘土質であるが、乾くとかたく締まり、亀裂の大きいクラックが発達する。ローム粒の混入が目立つ。

なお、本層下部から下位のIII層上面にかけては縄文時代中期を主体とする遺物包含層が形成されているが、特に急傾斜面において雨水等による崩落のために本来の包含層が

一部またはその上部が欠如している。また、薄く残った包含層上に、さらに上部斜面の遺物を包含する崩落土が被覆している部分も多くみられる。

### III層 暗褐色土 (厚さ20~30cm)

ローム層への漸移層であって、粒子状及びブロック状のロームが、多量に混入している。また、下位のIV層のブロックの混入も多い。本調査区域は近沢川の右岸にあって、この川沿いに小規模に発達する低位段丘面の北端部に位置し急傾斜地となっている。調査区域の地理的環境からみて、崩落土等の崖錐堆積物が多く一次的な堆積物の確認が困難である。

### IV層 黄褐色ラピリ質浮石 (厚さ10~20cm)

緻密堅固なラピリ質浮石で、上北上部火山灰基底部の千曳浮石(Cb, P)に相当する。調査区域内では崖錐等の自然の攪乱作用によりレンズ状の堆積状況を示している。ただ、緩傾斜面ほど面的な拡がり認められる。

### V層 黄褐色ローム (厚さ20~40cm)

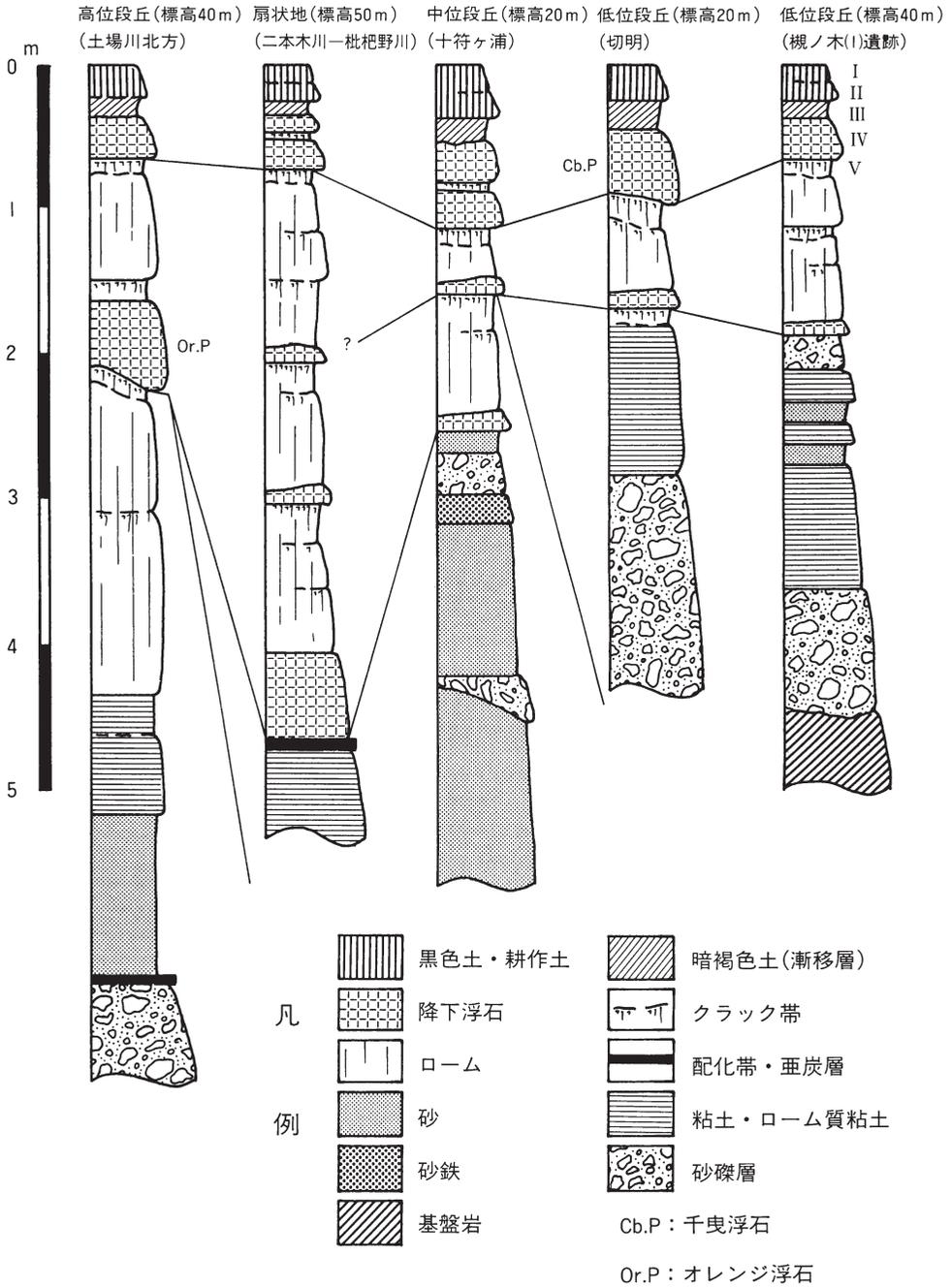
全体的によく締まった粘土質火山灰で、上北中部火山灰層に相当する。本層最上部はクラックの発達する暗色帯(厚さ10cm)であって、常にIV層直下に付随していて堅固な茶褐色を呈するハードロームである。なお、黄褐色ロームの下位には格子状の割れ目の発達する赤褐色ハードローム(厚さ20~30cm)が堆積している。全体として約100cmのロームが堆積し、最下部には細粒浮石質火山灰(厚さ約10cm)が認められる。ローム層の下位には砂礫層と砂質粘土の互層からなる段丘堆積層(厚さ2~3m)が堆積している。

### 引用・参考文献

東北地方第四紀研究グループ, 1967 東北地方における第四紀海水準変化 日本の第四系地団研専報No.15

中川久夫, 1972 青森県の地質 第二部 青森県の第四系 青森県

青森県教育委員会, 1983 松原・陣馬川原遺跡・槻ノ木遺跡 県埋文報告書第77集



第4図 遺跡周辺における露頭の模式柱状図

## 第2節 周辺の歴史的環境

### 周辺の遺跡

瀬川 滋（青森県考古学会会員）

槻ノ木（1）遺跡が位置する野辺地町では、平成3年度に「野辺地町遺跡分布調査」を行い、119カ所の遺跡を確認している。

野辺地町は、陸奥湾東側の最深部に位置し、東西に細長い弧状を呈して、陸奥湾に面している。地形的には、後方（南方）は、奥羽脊梁山脈から連なる最高位段丘と、長者久保段丘、甲地段丘などの高位段丘に取り囲まれている。

高位段丘からは、陸奥湾沿いに、中位段丘が平面的に発達している。海岸線には、野辺地段丘と称する海岸段丘が、平行して延びている。高位段丘からは、筋状に多くの小河川が陸奥湾に流入しているが、比較的規模の大きい沖積地を形成しているのは野辺地川だけである。

このような地形上に所在する遺跡の大半は、小河川の中流域にあたる中位段丘上に集中している。これらの遺跡の分布形態は、本町と海岸段丘が続いている隣接の横浜町にも、同様に連続している。この遺跡分布形態の中でも、特に、馬門地区を流れる小河川域（二本木川、近沢川、馬門川、土場川）に遺跡が密集しており、槻ノ木（1）遺跡もその一つである。

町の東側の中位段丘間にも、干草橋川、木明川、明前川、有戸川、砂沼川、などを有する小河川域が存在するが、馬門地区ほどの遺跡の密度はない。このようにこの地区に遺跡が密集するのは、これらの背後に形成された烏帽子岳山塊の存在に起因するものと思われる。縄文時代における複合遺跡や大規模遺跡の成立には自然的条件の付加が直接関係することは周知のことであり、馬門地区の遺跡密集地は、海と山の狭間にあり、当時においては生活環境の良好な地域であったものと考えられる。

槻ノ木（1）遺跡を筆頭に、比較的規模の大きい縄文時代の遺跡としては、寺ノ沢遺跡、槻ノ木（7）遺跡、獅子沢遺跡、柴崎（1）遺跡などが挙げられるが、これらは縄文時代前・中期に集中する傾向にある。縄文時代後期では、遺跡数が増え、全域に分布している。枇杷野遺跡のように高地（標高110～130メートル）にも分布が見られる。

また、陸奥湾岸地域では、発見例の少ない縄文時代早期の遺跡も、小規模ながら確認されている。向田（17）遺跡、向田（20）遺跡、春木場沢（1）遺跡、坊ノ塚遺跡の4カ所である。向田（17）遺跡は白浜系と早稲田5類、向田（20）遺跡はムシリ系と前期初頭の早稲田6類、春木場沢（1）遺跡はムシリ系、坊ノ塚遺跡はムシリ系と貝殻文系の土器が採集されている。

先土器時代（旧石器時代）の遺跡では、ブレードが出土した目ノ越遺跡が知らされているが、現在ではその出土地点は不明瞭である。また、槻ノ木（1）遺跡に隣接する獅子沢遺跡からも表採資料ではあるが、ナイフ型石器の出土例があり、今後、周辺において発掘調査の機会があるならば、ローム層中の調査も念頭にいれなければならないと考えている。

時代は前後するが、古代、中世においても、有戸雲雀牧場内からは古墳時代の遺物である剣形石製模造品の発見例（註1）や平安時代の明前館の、二十平館、坊ノ塚館など館跡の分布も確認されている。

この他、遺跡確認の困難な山林地にも、遺跡立地条件を備えた場所が多くあり、今後も遺跡の数が増えることは確実である。

註1：伊東信雄 昭和28年「東北地方に於ける石製模造品の分布とその意義」『歴史 第六集』

東北史学会



第5図 周辺の遺跡（遺跡番号は、表と対応している）

## 野辺地町遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現状	時代	出土遺物及び遺構
40001	槻ノ木(1)遺跡	字槻ノ木31、外	散布地	丘陵	畑山林	縄文時代前期・中期、弥生時代	縄文土器、石器、土偶、有孔石製品、土壇
40002	槻ノ木(2)遺跡	字槻ノ木84-48、外	散布地	丘陵	畑地	縄文時代前期・後期	縄文土器
40003	八幡町遺跡	字笹箱23、外	散布地	丘陵	宅畑地	奈良時代・平安時代	土師器、須恵器
40004	上与田川遺跡	字上与田5-1、 字中与田21-3、外	散布地	丘陵	山林	縄文時代後期	縄文土器、石器、甕形土製品
40005	明前(1)遺跡	国有林330林班	館跡	丘陵	山林	奈良時代・平安時代	土師器、耳皿、鉄製品、竪穴住居跡、堀
40006	寺ノ沢遺跡	字寺ノ沢15、外	散布地	丘陵	畑地	縄文時代前期・中期	縄文土器、石器
40007	有戸浜遺跡	字向田234、外	散布地	海岸丘陵	畑地 荒蕪地	奈良時代・平安時代	土師器
40008	陣馬川原(1)遺跡	字上河渡頭42-3、外	散布地	丘陵	畑地	縄文時代前期～晩期	縄文土器
40009	柴崎(1)遺跡	字柴崎8、外	散布地	海岸丘陵	畑地	縄文時代前期・中期	縄文土器、石器
40010	二十平(1)遺跡	字二十平1-1、外	館跡	丘陵	畑地	奈良時代・平安時代	土師器、須恵器、堀、竪穴住居跡
40011	野辺地代官所跡	字野辺地1	代官所跡	河段丘陵	道	江戸時代	堀
40012	坊ノ塚(1)遺跡	字坊ノ塚48-2、外	館跡	丘陵	山林	奈良時代・平安時代	土師器、堀、竪穴住居跡
40013	船橋遺跡	字船橋9	散布地	丘陵	山林	縄文時代後期	縄文土器、フレーク
40014	野辺地蟹田(1)遺跡	字蟹田33	散布地	丘陵	山林	縄文時代後期	縄文土器
40015	野辺地蟹田(2)遺跡	字蟹田38-1	散布地	海岸丘陵	野原	縄文時代前期、 弥生時代	縄文土器、弥生土器
40016	千草橋(1)遺跡	字千草橋16-2	散布地	丘陵	山林	縄文時代後期	縄文土器
40017	千草橋(2)遺跡	字千草橋16 字大谷地裏沢44、外	散布地	丘陵	畑地	縄文時代後期	縄文土器、フレーク
40018	千草橋(3)遺跡	字千草橋112、外	散布地	丘陵	山林	縄文時代後期	縄文土器

野辺地町遺跡一覧表 - 2

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現状	時代	出土遺物及び遺構
40019	陣馬川原(2)遺跡	字陣馬川原67-4、外	散布地	海岸丘陵	畑地 宅地	縄文時代晩期	縄文土器、石器
40020	白岩遺跡	字白岩7-1、外	散布地	河岸丘陵	畑地 宅地	縄文時代晩期	縄文土器
40021	二十平(2)遺跡	字二十平165-1 字獅子沢263-2、外	集落跡	丘陵	山林	奈良時代・平安時代、 縄文時代	土師器、須恵器、縄文土器、石器、竪穴住居跡
40022	獅子沢遺跡	字獅子沢48-1、外	集落跡	丘陵	畑地 道	奈良時代・平安時代、 旧石器時代	土師器、須恵器、竪穴住居跡、ナイフ形石器
40023	坊ノ塚一里塚	字坊ノ塚52、外	一里塚	丘陵	山林	江戸時代	一里塚
40024	十文字(1)遺跡	字十文字43、外	散布地	丘陵	畑地	縄文時代後期	縄文土器、石器
40025	向田(1)遺跡	字向田118-5、外	散布地	海岸	荒蕪地	16世紀～17世紀	陶磁器、キセル、斧、鏝銭
40026	木明(1)遺跡	字木明44、外	散布地	河岸丘陵	水田	縄文時代晩期	縄文土器、石器、土偶
40027	枇杷野遺跡	字枇杷野3-3、外	散布地	丘陵	山林 道	縄文時代後期	縄文土器、石器
40028	向田(2)遺跡	字向田472、外	散布地	丘陵	山林 道	縄文時代前期	縄文土器、フレーク
40029	向田(3)遺跡	字向田303-1、外	散布地	丘陵	山林	縄文時代	縄文土器、石器
40030	向田(4)遺跡	字向田576-2、外	散布地	丘陵	畑地	縄文時代後期	縄文土器
40031	観音林後遺跡	字観音林後25-3、外	散布地	丘陵	畑地 宅地	縄文時代晩期	縄文土器、フレーク
40032	野辺地蟹田(3)遺跡	字蟹田36-2、外	散布地	丘陵	山林 荒蕪地	奈良時代・平安時代	土師器
40033	陣馬川原(3)遺跡	字陣馬川原8、外	散布地	丘陵	畑地 道	縄文時代中期	縄文土器、石器
40034	四ツ森藩境塚	字柴崎8-81	境塚	海岸	山林	江戸時代	境塚
40035	木明(2)遺跡	字木明100-1、外	集落跡	河岸丘陵	荒蕪地 山林	奈良時代・平安時代	土師器、柱穴、竪穴住居跡
40036	向田(5)遺跡	字向田118-11	包蔵地	丘陵	山林	縄文時代後期、 奈良時代・平安時代	縄文土器、土師器、焼土遺跡

## 野辺地町遺跡一覽表

- 3

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現状	時代	出土遺物及び遺構
40037	向田(6)遺跡	字向田117	集落跡 包蔵地	台地	山林草地	奈良時代・平安時代、 縄文時代後期	土師器、縄文土器、竪穴住居跡、土壇
40038	向田(7)遺跡	字向田117	集落跡 包蔵地	台地	山林草地	奈良時代・平安時代	土師器、竪穴住居跡、土壇
40039	向田(8)遺跡	字向田117	散布地	台地	草地	縄文時代	石器
40040	向田(9)遺跡	字向田117	集落跡	丘陵	草地	時期不明	竪穴住居跡、土壇
40041	向田(10)遺跡	字向田118-71	散布地	丘陵	荒蕪地	縄文時代、 奈良時代・平安時代	縄文土器、土師器
40042	向田(11)遺跡	字向田118-5、118-72	包蔵地	丘陵	荒蕪地	縄文時代	縄文土器
40043	向田(12)遺跡	字向田118-5	散布地	海岸段	荒蕪地	縄文時代後期、奈良・ 平安・江戸時代	縄文土器、土師器、陶器、柱穴
40044	向田(13)遺跡	字向田451-1	散布地	海岸段	荒蕪地	縄文時代後期、 奈良時代・平安時代	縄文土器、土師器
40045	向田(14)遺跡	字向田557-1、外	集落地	台地	畑地 山林	奈良時代・平安時代	土師器
40046	向田(15)遺跡	字向田585	包蔵地	丘陵	山林	縄文時代後期	縄文土器
40047	向田(16)遺跡	字向田505、外	包蔵地	台地	山林 畑地	時期不詳	フラスコ状ピット
40048	向田(17)遺跡	字向田433、外	散布地	台地	畑地 山林	縄文時代早期・前期・ 後期、奈良・平安時代	縄文土器、石器、土師器
40049	向田(18)遺跡	字向田296、外	散布地	丘陵	水田 山林	縄文時代後期、 弥生時代	縄文土器、弥生土器
40050	向田(19)遺跡	字向田75-14、外	散布地	丘陵	水田 山林	縄文時代前期	縄文土器、石器
40051	向田(20)遺跡	字向田321-1、外	散布地	台地	荒蕪地 山林	縄文時代早期・前期	縄文土器、石器、土壇
40052	向田(21)遺跡	字向田146-4、外	散布地	丘陵	畑地	縄文時代後期、 奈良時代・平安時代	縄文土器、土師器
40053	向田(22)遺跡	字向田101-1、外	散布地	台地	畑地	奈良時代・平安時代	柱穴
40054	向田(23)遺跡	字向田106-15、外	散布地	台地	畑地 山林	奈良時代・平安時代	土師器

野辺地町遺跡一覽表

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現地	現状	時代	出土遺物及び遺構
40055	向田 (24) 遺跡	字向田59、外	包蔵地	台地	山道	山林路	縄文時代後期	縄文土器、フレーク
40056	向田 (25) 遺跡	字向田75-2、外	散布地	台地	畑地	山林	縄文時代	縄文土器
40057	向田 (26) 遺跡	字向田75-210、75-221	散布地	台地	畑地	山林	奈良時代・平安時代	土師器、竪穴住居跡
40058	向田 (27) 遺跡	字向田585、外	散布地	台地	山道	山林路	縄文時代	縄文土器
40059	向田 (28) 遺跡	字向田395-1、外	散布地	台地	草地	山林	縄文時代中期・後期	縄文土器
40060	下道 (1) 遺跡	字下道49、50、外	散布地	台地	墓地	畑地	縄文時代	縄文土器、石器
40061	小沢平 (1) 遺跡	字小沢平34-1 字中田34-3、外	集落跡	台地	山道	山林路	奈良時代・平安時代、 縄文時代後期	土師器、須恵器、 縄文土器、竪穴住居跡
40062	中新田 (1) 遺跡	国有林303林班	包蔵地	丘陵	山	山林	縄文時代前期	縄文土器、土壘
40063	中新田 (2) 遺跡	字向田247、 国有林330林班	散布地	台地	畑地	山林	縄文時代、 奈良時代・平安時代	縄文土器、土師器
40064	東太田沢 (1) 遺跡	字東太田沢1-264、 1-16、外、	包蔵地	丘陵	山道	山林路	縄文時代中期・後期	縄文土器、石器
40065	東太田沢 (2) 遺跡	字東太田沢1-17、外	散布地	台地	畑地	畑地	縄文時代後期	縄文土器
40066	野辺地蟹田 (4) 遺跡	字蟹田36-1、外	包蔵地	台地	山地	山林	縄文時代、 奈良時代・平安時代	縄文土器、土師器
40067	野辺地蟹田 (5) 遺跡	字蟹田24-5、34-143	包蔵地	台地	畑地	荒地	時期不明	Tピット、土壘
40068	野辺地蟹田 (6) 遺跡	字蟹田34-37	散布地	台地	畑地	畑地	縄文時代後期、 奈良時代・平安時代	縄文土器、土師器、須恵器
40069	野辺地蟹田 (7) 遺跡	字蟹田34-38、34-59	散布地	台地	畑地	畑地	縄文時代後期、 奈良時代・平安時代	縄文土器、土師器
40070	野辺地蟹田 (8) 遺跡	字蟹田34-147	散布地	台地	畑地	山林	縄文時代後期	縄文土器、石器
40071	野辺地蟹田 (9) 遺跡	字蟹田87-1、外	散布地	台地	畑地	畑地	縄文時代後期、 奈良時代・平安時代	縄文土器、土師器
40072	明前 (2) 遺跡	字明前80、84-3、 国有林330林班	散布地	台地	畑地	山林	縄文時代後期	縄文土器、石器

## 野辺地町遺跡一覧表

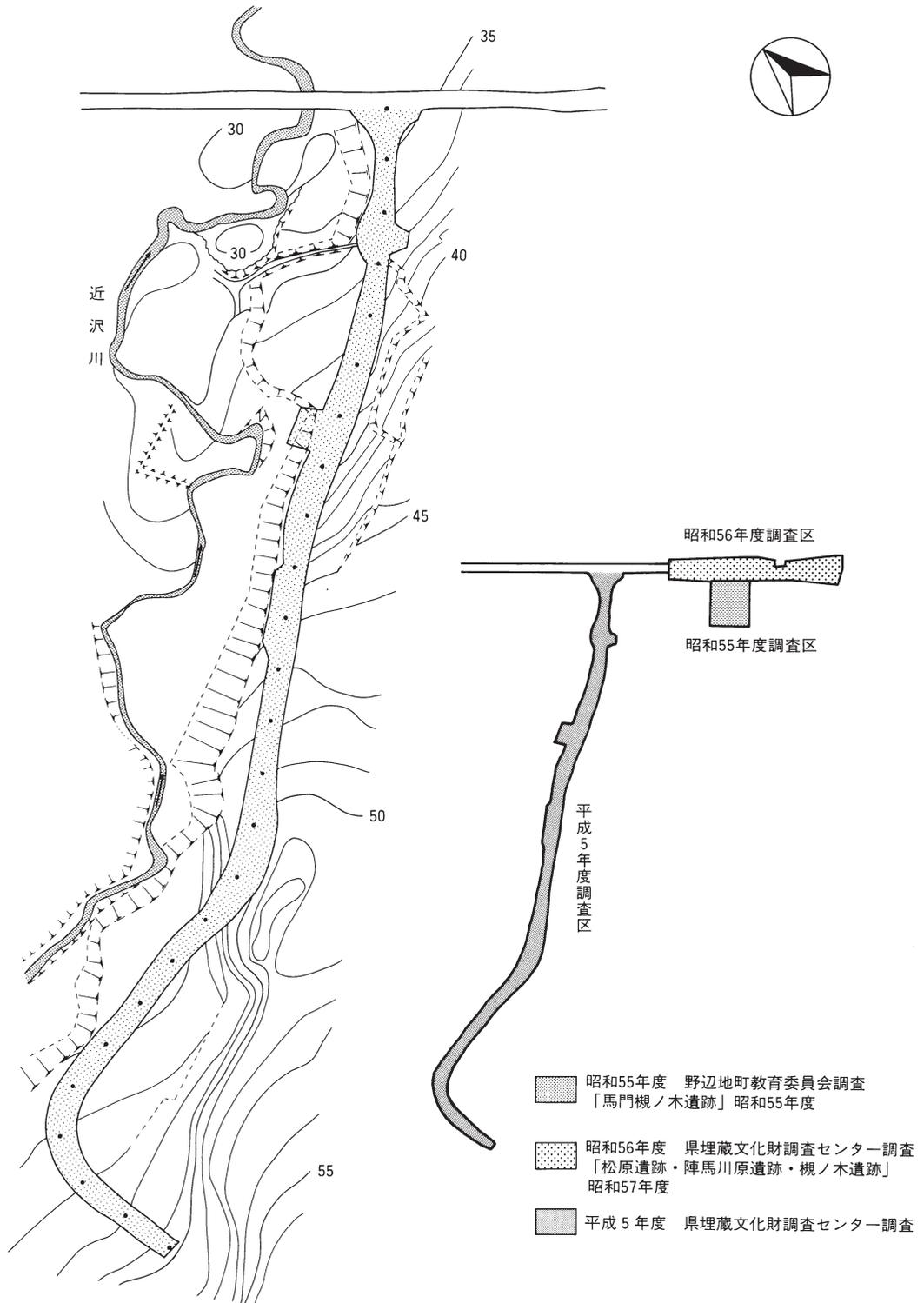
遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現状	時代	出土遺物及び遺構
40073	明前(3)遺跡	字明前72-1、72-9	包蔵地	台地	山林路	縄文時代後期	縄文土器
40074	古明前(1)遺跡	字古明前1-1、29-8、29-3、4-1	散布地	台地	畑地	縄文時代前期、奈良時代・平安時代	縄文土器、石器、土師器
40075	有戸鳥井平(1)遺跡	字有戸鳥井平281-1、外	散布地	台地	畑地	縄文時代後期、奈良時代・平安時代	縄文土器、土師器
40076	有戸鳥井平(2)遺跡	字有戸鳥井平64-22、64-23、64-1	包蔵地	台地	山林路	縄文時代後期、奈良時代・平安時代	縄文土器、石器、土師器
40077	有戸鳥井平(3)遺跡	字有戸鳥井平63	包蔵地	台地	山林路	縄文時代後期	縄文土器、石器
40078	千草橋(4)遺跡	字千草橋58-2	包蔵地	台地	山林路	縄文時代後期	縄文土器
40079	千草橋(5)遺跡	字千草橋64-5	散布地	台地	山林地	奈良時代・平安時代	土師器
40080	春木場沢(1)遺跡	国有林326林班	包蔵地	河段	山林路	縄文時代早期・中期・後期	縄文土器
40081	春木場沢(2)遺跡	国有林329林班	包蔵地	河段	山林路	縄文時代後期	縄文土器
40082	大谷地東沢(1)遺跡	字大谷地東沢3、12-2、12-6	散布地	台地	畑地	縄文時代後期	縄文土器
40083	大谷地東沢(2)遺跡	国有林326林班	包蔵地	台地	山林路	縄文時代	縄文土器
40084	大谷地東沢(3)遺跡	字大谷地東沢44、45	散布地	台地	畑地	縄文時代後期	縄文土器
40085	洞内(1)遺跡	字洞内6-19、外	包蔵地	台地	山林路	縄文時代	縄文土器
40086	タラノ木(1)遺跡	字タラノ木115-1、115-4、外	散布地	台地	畑地	縄文時代前期・中期・後期	縄文土器
40087	坊ノ塚(2)遺跡	字坊ノ塚13-6、外	散布地	台地	畑地	縄文時代早期・前期・中期	縄文土器
40088	戸田ノ沢(1)遺跡	字戸田ノ沢17-2、外	散布地	台地	畑地	縄文時代後期	縄文土器
40089	米内沢(1)遺跡	字米内沢28-1、外	散布地	台地	畑地	縄文時代後期	縄文土器
40090	浜掛(1)遺跡	字浜掛107-1、外	散布地	台地	畑地	縄文時代後期・晩期、奈良時代・平安時代	縄文土器、土師器

野辺地町遺跡一覽表 - 6

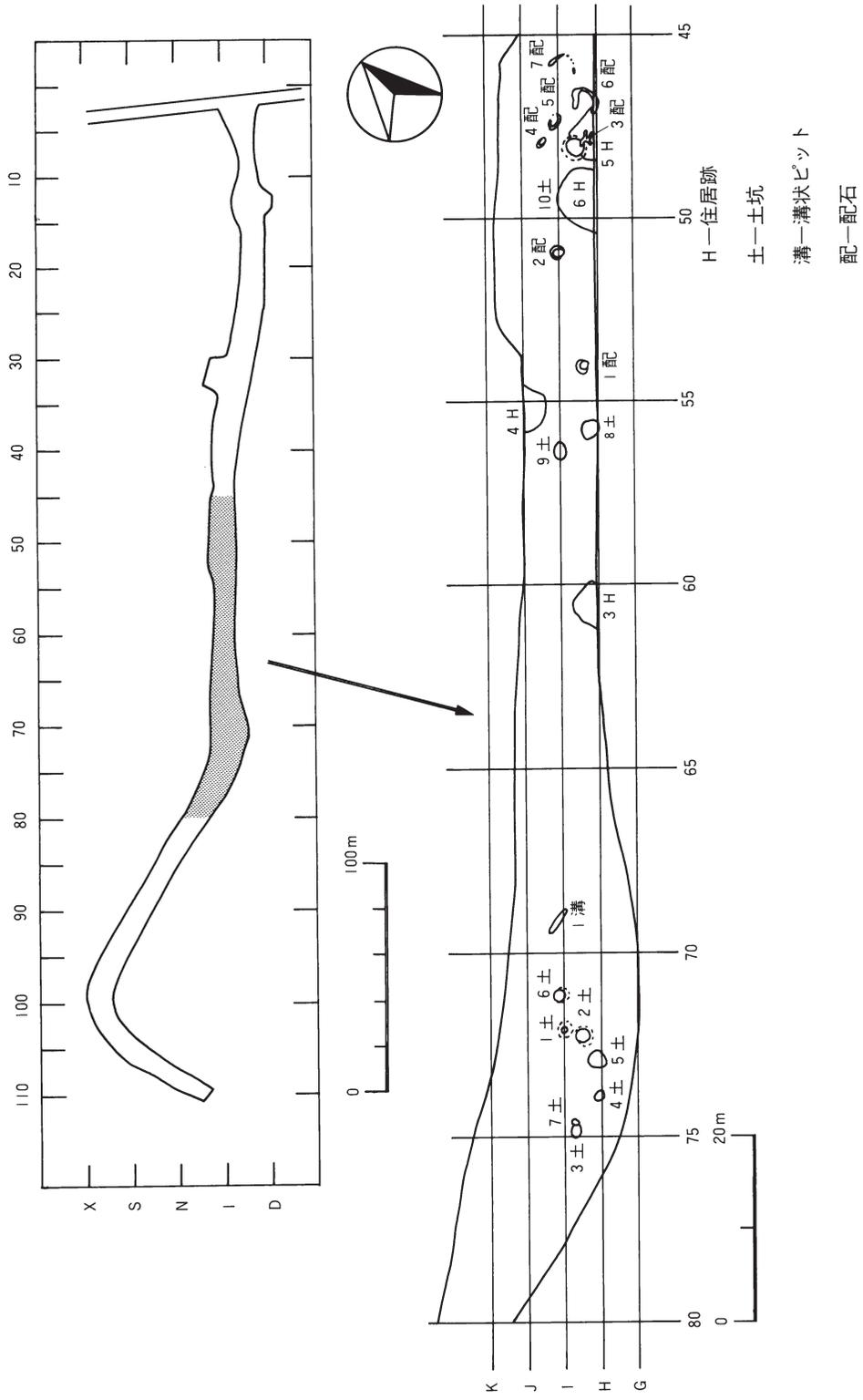
遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現地	現状	時代	出土遺物及び遺構
40091	上小中野(1)遺跡	字上小中野95、 字枇杷野3-1	散布地	台地	畑地 山林	畑地 山林	縄文時代、 奈良時代・平安時代	縄文土器、土師器
40092	下松ノ木平(1)遺跡	字下松ノ木27-1、外	散布地	丘陵	畑地 宅	畑地 地	縄文時代後期・晩期	縄文土器
40093	松ノ木(1)遺跡	字松ノ木114-2 字枇杷野51-17、外	包蔵地	台地	山林 道	山林 路	縄文時代後期	縄文土器
40094	陣馬川原(4)遺跡	字陣馬川原53、外	散布地	台地	畑地	畑地	縄文時代前期・後期	縄文土器
40095	家ノ上(1)遺跡	字家ノ式84-1、外	散布地	台地	畑地	畑地	縄文時代後期、 奈良時代・平安時代	縄文土器、石器、土師器
40096	槻ノ木(3)遺跡	字槻ノ木118-11、188-12、 外	散布地	丘陵	畑地 宅	畑地 地	縄文時代後期	縄文土器、フレーク
40097	槻ノ木(4)遺跡	字槻ノ木84-7、外	散布地	台地	山林 畑地	山林 地	縄文時代前期・中期・ 後期、奈良・平安時代	縄文土器、石器、土師器
40098	槻ノ木(5)遺跡	字槻ノ木130、134、外	包蔵地	台地	山林 道	山林 路	縄文時代中期・後期	縄文土器
40099	槻ノ木(6)遺跡	字槻ノ木75-24、外	散布地	台地	畑地 宅	畑地 地	縄文時代後期	縄文土器
40100	槻ノ木(7)遺跡	字槻ノ木1-1、 字大平下65-17、外	集落跡	丘陵	山林 道	山林 路	縄文時代中期・後期	縄文土器、石器、 円盤状土製品
40101	槻ノ木(8)遺跡	字槻ノ木152、外	包蔵地	台地	山林 道	山林 路	縄文時代後期	縄文土器、石器
40102	槻ノ木(9)遺跡	字槻ノ木72-1、外	包蔵地	台地	山林	山林	縄文時代後期	縄文土器
40103	十文字(2)遺跡	字十文字14、外	散布地	台地	畑地	畑地	縄文時代後期	縄文土器、石器
40104	大平下(1)遺跡	字大平下2-1、外	散布地	海岸 段丘	畑地 宅	畑地 地	縄文時代前期・後期、 奈良時代・平安時代	縄文土器、フレーク、 土師器
40105	大平下(2)遺跡	字大平下29-12、外	散布地	台地	畑地	畑地	縄文時代後期	縄文土器
40106	大平下(3)遺跡	字大平下115-1、外	散布地	台地	畑地 山林	畑地 林	縄文時代後期	縄文土器、フレーク、 土偶
40107	大平下(4)遺跡	字大平下65-107、65-75、 外	包蔵地	台地	山林 道	山林 路	縄文時代後期	縄文土器
40108	上河渡頭(1)遺跡	国有林78林班	包蔵地	台地	山林 道	山林 路	縄文時代後期	縄文土器、フレーク

野辺地町遺跡一覧表 - 7

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現状	時代	出土遺物及び遺構
40109	上河渡頭(2)遺跡	字上河渡頭21-3、 国有林78林班	包蔵地	台地	山林 道路	縄文時代後期	縄文土器
40110	湯沢尻(1)遺跡	字湯沢尻16、37-7、外	包蔵地	台地	山林 地	縄文時代前期・後期	縄文土器
40111	田端(1)遺跡	字田端58-1、外	散布地	台地	畑地	縄文時代前期・後期	縄文土器
40112	田端(2)遺跡	字田端30、31-3	散布地	台地	畑地	縄文時代後期、 奈良時代・平安時代	縄文土器、土師器
40113	田端(3)遺跡	字田端12-1、外	散布地	台地	畑地	縄文時代前期・後期	縄文土器
40114	中渡(1)遺跡	字中渡7-1、 字田端44-2、外	散布地	台地	畑地 道路	縄文時代前期・後期	縄文土器
40115	中渡(2)遺跡	字中渡220、外	散布地	台地	畑地	縄文時代後期	縄文土器
40116	中渡(3)遺跡	字中渡48-2、外	散布地	台地	畑地	縄文時代後期	縄文土器
40117	ハノ木谷地(1)遺跡	字ハノ木谷地31-1、30-3、 外	散布地	海岸 段丘	畑地 地	縄文時代後期	縄文土器、フレーク
40118	柴崎(2)遺跡	字柴崎10-20、外	散布地	台地	畑地 山林	縄文時代後期	縄文土器
40119	柴崎(3)遺跡	字柴崎17、18、外	散布地	台地	畑地 山林	縄文時代中期・後期	縄文土器



第6図 調査区の地形と調査範囲



第7図 遺構配置図

# 第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

## 第1節 検出遺構と遺構内出土遺物

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡4軒、土壇10基、屋外炉1基、埋設土器1基、配石遺構7基、溝状ピット1基である。

### 1 竪穴住居跡

確認順に番号を付していったが、第1・2号竪穴住居跡としたものは、調査の結果、自然の窪みと断定できたため欠番として扱った。したがって、本遺跡の竪穴住居跡は、第3号から第6号までの4軒である。

#### 第3号竪穴住居跡 (第8～14図)

[位置] H-60・61グリッドに位置する。

[平面形・規模] 南側半分以上が調査区外にあるため、全体形を確認できなかったが、主軸がほぼ南北方向の隅丸長方形を呈するものと考えられる。確認部分は、長軸で370cm、短軸で370cmである。

[壁] 第Ⅲ・Ⅳ層を壁としている。壁はほぼ垂直であり、上部はややもろく、下部はしまりがある。床面近くは若干粘性が認められる。

[床面] 第Ⅳ層を掘り込み、地山を床面としている。貼り床面の痕跡は確認できなかった。床面は若干粘性が認められ、全体緩やかな起伏がみられる。

[壁溝] 北東隅に幅10～15cmで、深さ7～10cmの溝が存在するが、木の根跡の可能性も考えられ、壁溝の一部とは断定し得ない。

[柱穴・ピット] 11個の柱穴及びピットを検出した。この内、ピット3・5の2個が主柱穴と考えられ、深さはそれぞれ78cm・88cmと非常に深い。1・2も柱穴と考えられるが、住居跡の全体像が不明のため、配置及び構成は不明である。8～11は根の痕跡の可能性が高い。4は緩やかなくぼみで、上部から土器が出土している。

[炉] 確認できなかった。

[付属施設] 調査した範囲内には存在しない。ただ、遺構内の床面上に20cm×50cmの範囲で、灰白色粘土のブロックが検出され、この周囲から小礫が数点出土していることから、なんらかの施設であった可能性も考えられる。

[堆積土] 14層に分層できた。上部には標準土層の第II層が堆積している。黒褐色土を主体としており、全体に炭化物粒を混入している。また、地山と同様のロームの層が数層堆積している。

[出土遺物] 確認面から床面まで遺物が出土している。

土器は、上部から床面近くまでは、第IV群1・2類（榎林・最花式）とした円筒土器以降のものが散発的に出土しており、床面及び床面直上からは、第III群1類（円筒上層a式）の土器が数個体出土している。

石器は、剥片石器では、石鏃が3点出土している。また、礫石器では、スリ石1点が出土している。このほかに玉髓の小礫を打ち欠いた両極石核が数点出土している。

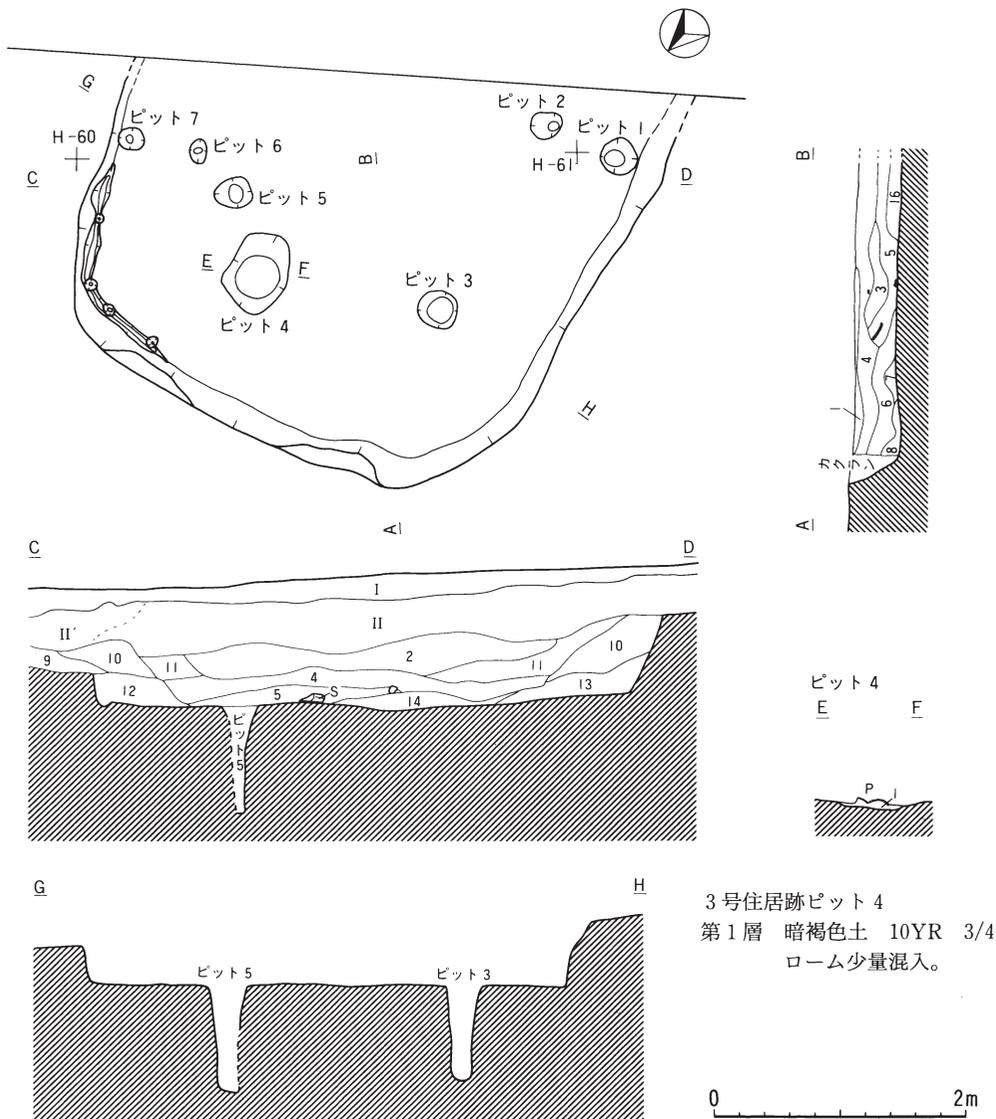
[小結] 本住居跡の廃絶時期は、床面からの出土土器の型式から、縄文時代中期初頭、円筒上層a式期と考えられる。また、柱穴の配置からは、確認部分内では、拡張（増築）はなかったと考えられる。

覆土中から出土の多量の土器片は、埋没過程において投げ込まれたか、表土の地滑りなどによって堆積したものかは明確に把握できなかった。

ピット計測表

(単位：cm)

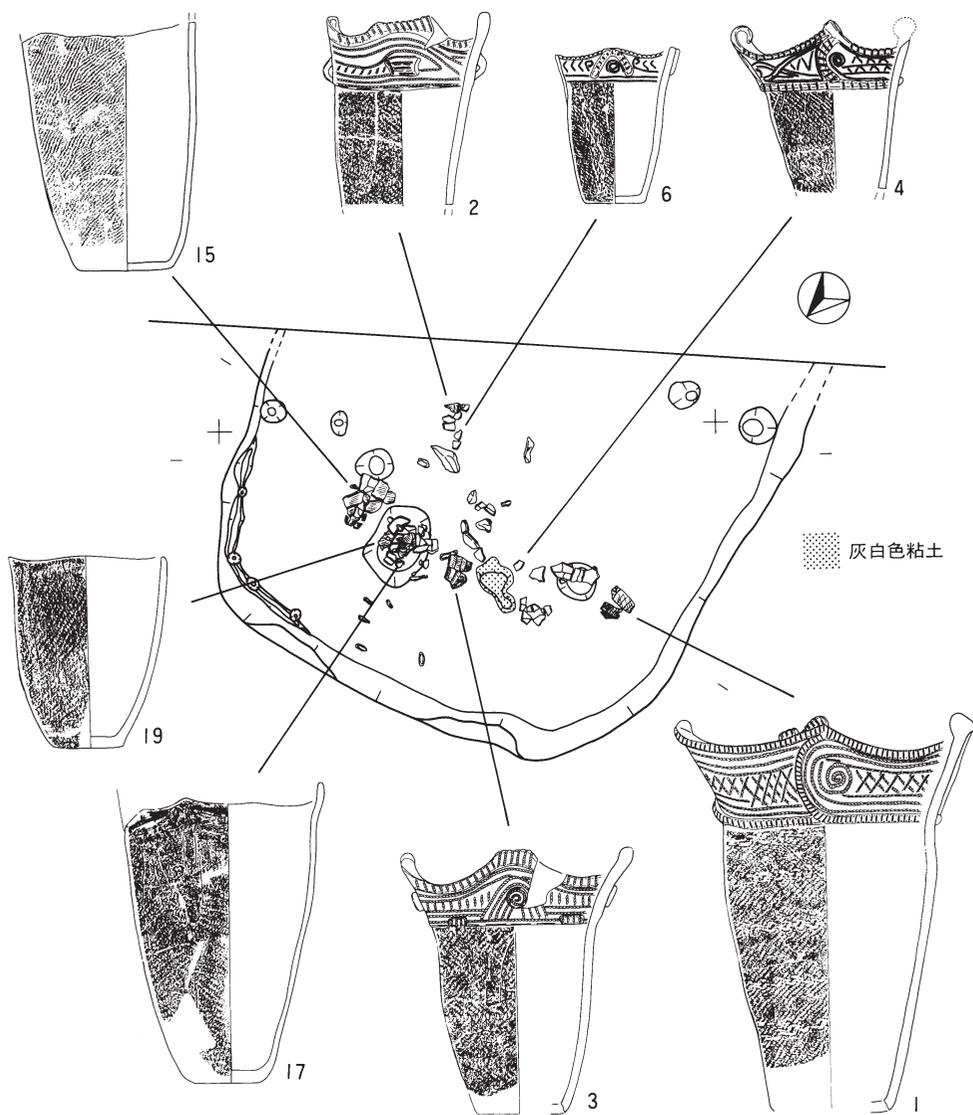
番号	長軸×短軸	深さ	備考	番号	長軸×短軸	深さ	備考
1	30	56	支柱穴	7	21×18	13	
2	25×22	15	支柱穴	8	7	8	根跡?
3	32×28	78	主柱穴	9	10	20	根跡?
4	66×52	5		10	12×8	9	根跡?
5	30×25	88	主柱穴	11	10	13	根跡?
6	20×14	11					



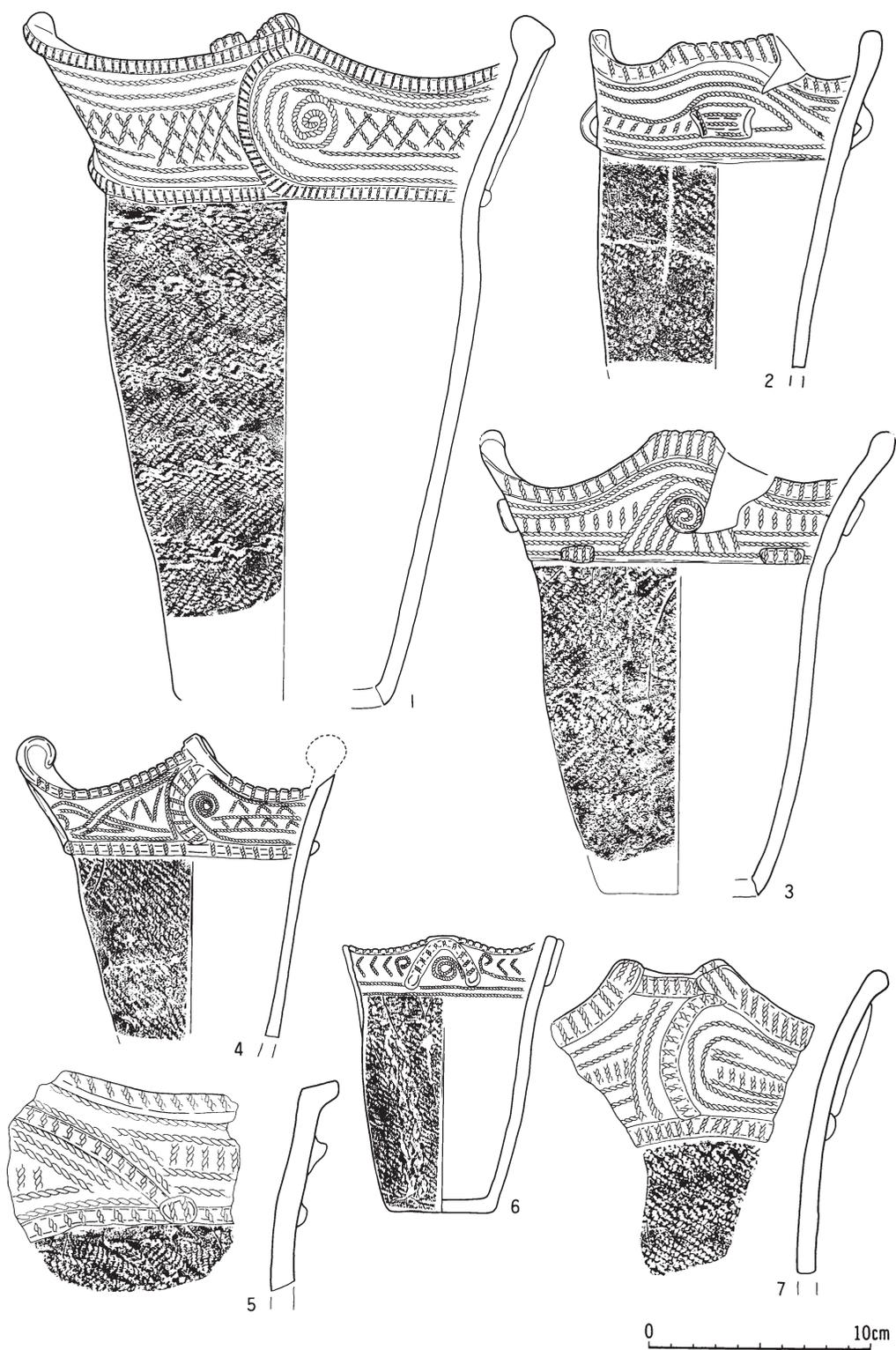
3号住居跡

- |      |      |      |     |                           |
|------|------|------|-----|---------------------------|
| 第1層  | 暗褐色土 | 10YR | 3/4 | ローム少量混入。炭化物粒・パミス少量混入。     |
| 第2層  | 黒褐色土 | 10YR | 3/2 | ロームブロック中量混入。パミス中量混入。      |
| 第3層  | 褐色土  | 10YR | 4/4 | 炭化物粒多量混入。パミス多量混入。焼土少量混入。  |
| 第4層  | 黒褐色土 | 10YR | 2/2 | 炭化物粒多量混入。パミス多量混入。         |
| 第5層  | 黒褐色土 | 10YR | 2/3 | 4層と類似するがローム粒が多量混入。        |
| 第6層  | 褐色土  | 10YR | 4/4 | ローム・パミス多量混入。              |
| 第7層  | 暗褐色土 | 10YR | 3/3 | 炭化物粒・パミス少量混入。             |
| 第8層  | 褐色土  | 10YR | 4/6 | ローム主体。黒色土少量混入。壁の崩落土と思われる。 |
| 第9層  | 褐色土  | 10YR | 4/4 | ローム多量混入。パミス少量混入。          |
| 第10層 | 暗褐色土 | 10YR | 3/4 | ローム・パミス多量混入。炭化物粒少量混入。     |
| 第11層 | 黒褐色土 | 10YR | 3/2 | 炭化物粒中量混入。パミス中量混入。         |
| 第12層 | 褐色土  | 10YR | 4/6 | ローム・パミス多量混入。              |
| 第13層 | 褐色土  | 10YR | 4/6 | 12層と類似するが、やや軟質。           |
| 第14層 | 暗褐色土 | 10YR | 3/4 | ローム中量混入。炭化物粒中量混入。         |

第8図 第3号竪穴住居跡平面図



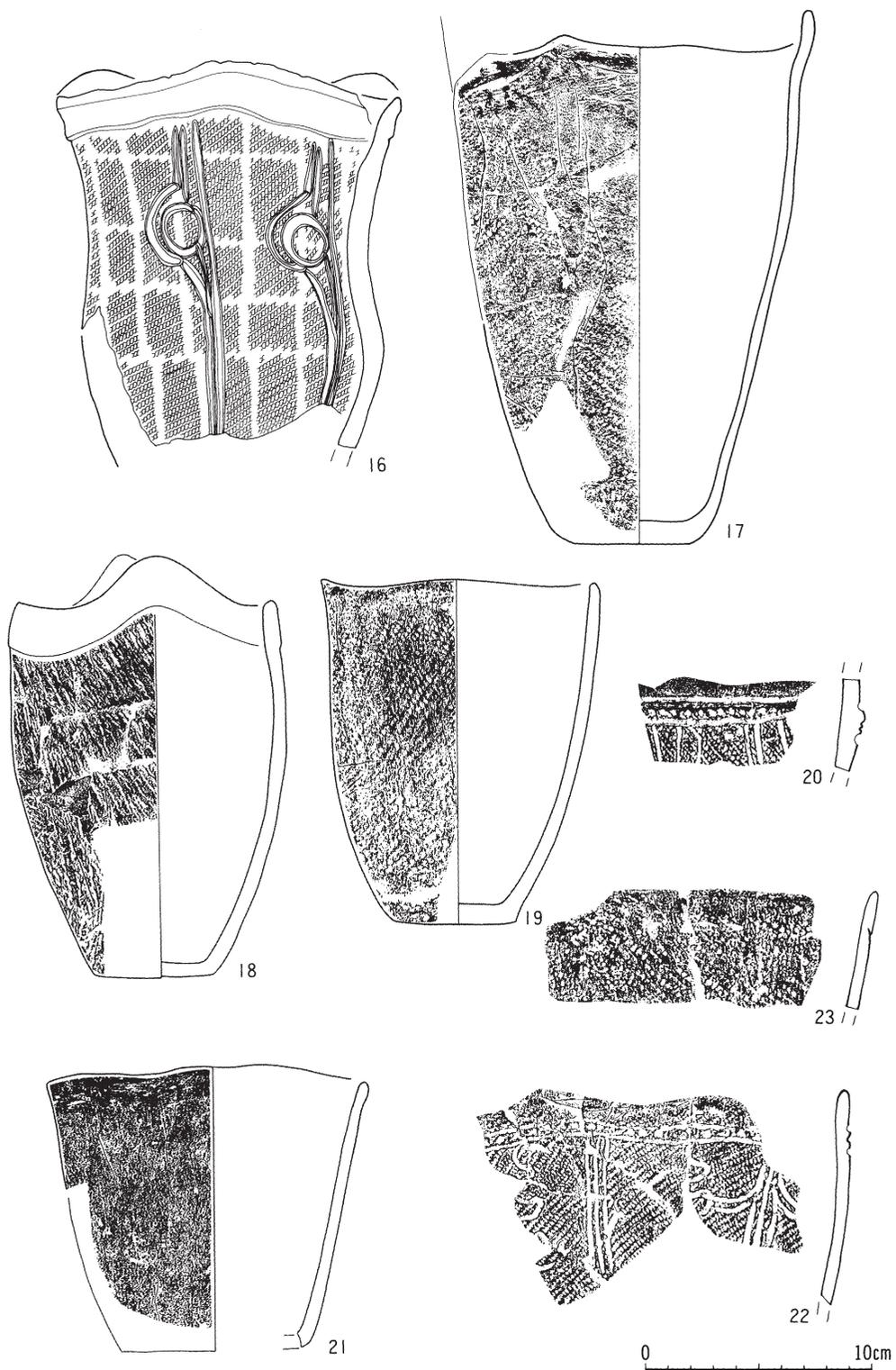
第9图 第3号竖穴住居跡遺物出土狀況



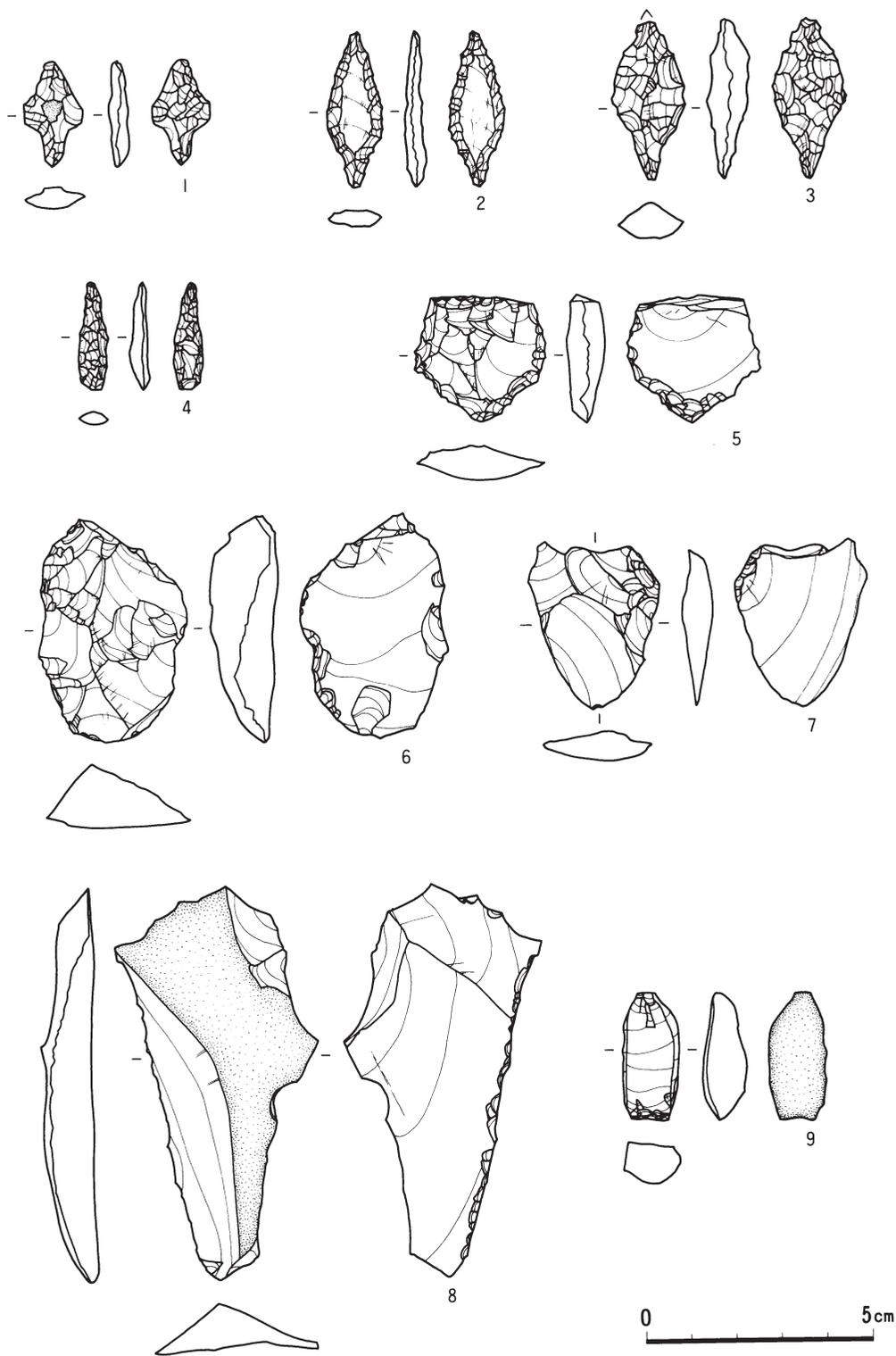
第10图 第3号竖穴住居迹出土土器—1



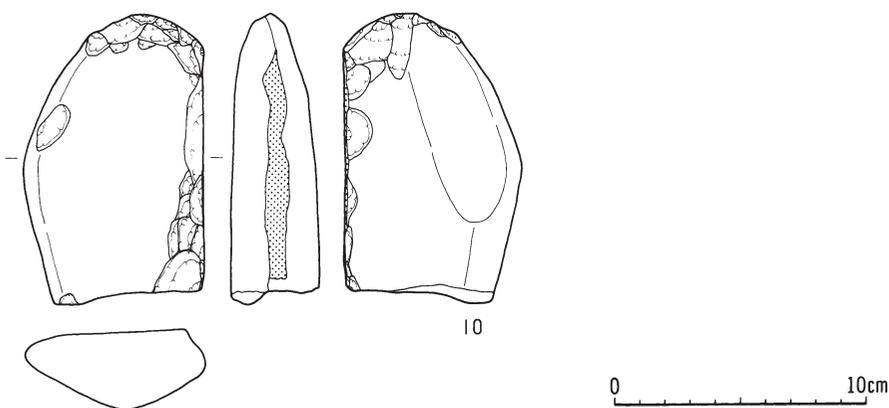
第11图 第3号竖穴住居迹出土土器—2



第12图 第3号竖穴住居迹出土土器—3



第13图 第3号竖穴住居迹出土石器—1



第14図 第3号竪穴住居跡出土石器-2

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第10図-1	3 H	フ	完形	波状口縁(4) 撚糸圧痕	斜縄文RL ループ	III群1類	110
-2	3 H	フ	略完形	波状口縁(4) 撚糸圧痕 橋状把手	羽状縄文	III群1類	37
-3	3 H	床	略完形	波状口縁(4) 撚糸圧痕 ボタン状突起	羽状縄文	III群1類	62
-4	3 H	フ	略完形	波状口縁(4) 撚糸圧痕	斜縄文RL	III群1類	18
-5	3 H	フ	口縁	波状口縁 撚糸圧痕		III群1類	206
-6	3 H	フ	略完形	波状口縁(4) 撚糸圧痕	斜縄文RL(無節) 縦位ループ	III群1類	13
-7	3 H	フ	口縁	波状口縁 撚糸圧痕		III群1類	204
第11図-8	3 H	フ	口縁	波状口縁 撚糸圧痕	羽状縄文	III群1類	200
-9	3 H	フ	口縁	波状口縁 撚糸圧痕		III群1類	207
-10	3 H	フ	口縁	波状口縁 橋状把手 ボタン状突起		III群1類	208
-11	3 H	フ	口縁	平口縁 撚糸圧痕		III群1類	205
-12	3 H	III	口縁	波状口縁 撚糸圧痕		III群1類	201
-13	3 H	フ	口縁	波状口縁 撚糸圧痕 橋状把手		III群1類	203
-14	3 H	フ	口縁	波状口縁 撚糸圧痕 橋状把手		III群1類	202
-15	3 H	フ	胴~底		斜縄文LR	III群6類	131
第12図-16	3 H	フ	略完形	波状口縁(4) 折り返し状口縁 無文	斜縄文LR わらびて文	IV群1類	64
-17	3 H	フ	略完形	波状口縁(3)	横位斜縄文LR	IV群1類	68
-18	3 H	フ	完形	波状口縁(2) 折り返し状口縁	綾絡文	IV群2類	35
-19	3 H	フ	完形	波状口縁(3)	斜縄文LR	IV群2類	36
-20	3 H	フ	口縁	刺突文 無文		IV群2類	211
-21	3 H	フ	略完形	平口縁	擦痕	IV群2類	33
-22	3 H	フ	口縁	波状口縁 刺突文		IV群2類	210
-23	3 H	フ	口縁	折り返し状口縁		IV群4類	209

図版番号	遺構名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	器種	整理番号
第13図-1	3H	フク土	23	13	5	1.1	玉髄質珪質頁岩	石鏃	95
-2	3H	フク土	35	12	5	1.6	玉髄	石鏃	119
-3	3H	床直	(36.0)	16	9.5	(3.6)	珪質頁岩	石鏃	361
-4	3H	床直	23.5	6.5	4.5	0.5	玉髄質珪質頁岩	石鏃	717
-5	3H	フク土	28	30	8	6.9	珪質頁岩	不定形	1292
-6	3H	フク土	50.5	33	15.5	21.4	珪質頁岩	不定形	1290
-7	3H	フク土	37	29	7	6.9	玉髄質珪質頁岩	不定形	1091
-8	3H	フク土	87.5	45.5	12.5	30.6	珪質頁岩	不定形	1288
-9	3H	フク土	28.5	13.5	10	4.9	珪質頁岩	両極	403
-10	3H	フク土	(117.0)	77	35.5	(409.2)	安山岩	スリ石	5031

#### 第4号竪穴住居跡 (第15～19図)

[位置] I-54・55グリッドに位置する。

[平面形・規模] 北側の半分、もしくはそれ以上が調査区外にあるため、全体形を確認できなかった。柱穴の配置及び東壁の形状から、隅丸方形か、またはやや南北に長い隅丸長方形を呈するものと考えられる。調査区の北側は約5メートルで急崖となるため、現段階では長楕円形は想定できないが、川岸の崩落が数カ所認められることから、構築時にはより川側に台地がのびていた可能性もあり断定し得ない。確認部分は、南北で360cm、東西で410cmである。

また、南東端が木根により攪乱を受けている。

[壁] 第三・IV層を壁としているが、最上部は不明瞭である。壁はほぼ垂直であり、上部はややもろく、下部はしまりがある。床面近くは若干粘性が認められる。

[床面] 第四層を掘り込み、地山を床面としている。貼り床面の痕跡は確認できなかった。床面は若干粘性が認められ、全体に緩やかな起伏がみられ、特に中央部がくぼんでいる。

[壁溝] 東壁で2箇所ほど途切れるが、他の部分は壁直下に、幅20～30cm、深さ約10～20cmの溝が存在する。

[柱穴・ピット] 14個の柱穴及びピットを検出した。この内、ピット10・11・14の3個が主柱穴と考えられる。ただ、この3個のピットは、深さが約60cm～80cmと非常に深いものであるが、直径が22～30cmと非常に細いものである。ピット1・3・4・5・7の5個が支柱の壁柱穴と考えられる。ピット9・12・13は、なんらかの付属施設と考えられる。

[炉] 調査区の境界線上から4個の礫が出土し、この下部に埋設土器を確認した。埋設土器は60×30cmの不整楕円形を呈するピットの東側に埋められている。土器は、頸部から胴部上半部までで、口縁部と底部を欠失している。ピットは深さ10cm程で、底面は平坦である。土器内部の堆積土は、浮石の多く混じった褐色土を主体としており、ピット内では、暗褐色土を主体

として、全体に炭化物粒を混入している。明瞭な焼土は確認できなかったが、土器埋設炉と考えられる。また、位置的には、住居の形状が隅丸方形の場合は、ほぼ住居の中央部分と考えられる。

[付属施設] ピット9・12・13が付属した施設と考えられるが、用途等は不明である。これらは、柱穴の近くに存在することから、柱との関連性が考えられる。

[堆積土] 22層に分層できた。黒褐色土及び暗褐色土を主体としており、全体に炭化物粒を混入している。上部は粘性がなく、しまりも少ないが、下部は、特に壁際及び床面直上は、粘性がありしまりも強い。

[出土遺物] 確認面から床面まで遺物が出土している。

土器は、上部からは、第Ⅳ群1・2類（榎林・最花式）が散発的に出土しているが、特に後者の出土が多い。床面及び床面直上からは、第Ⅲ群1類（円筒上層a式）の土器が数個体出土している。

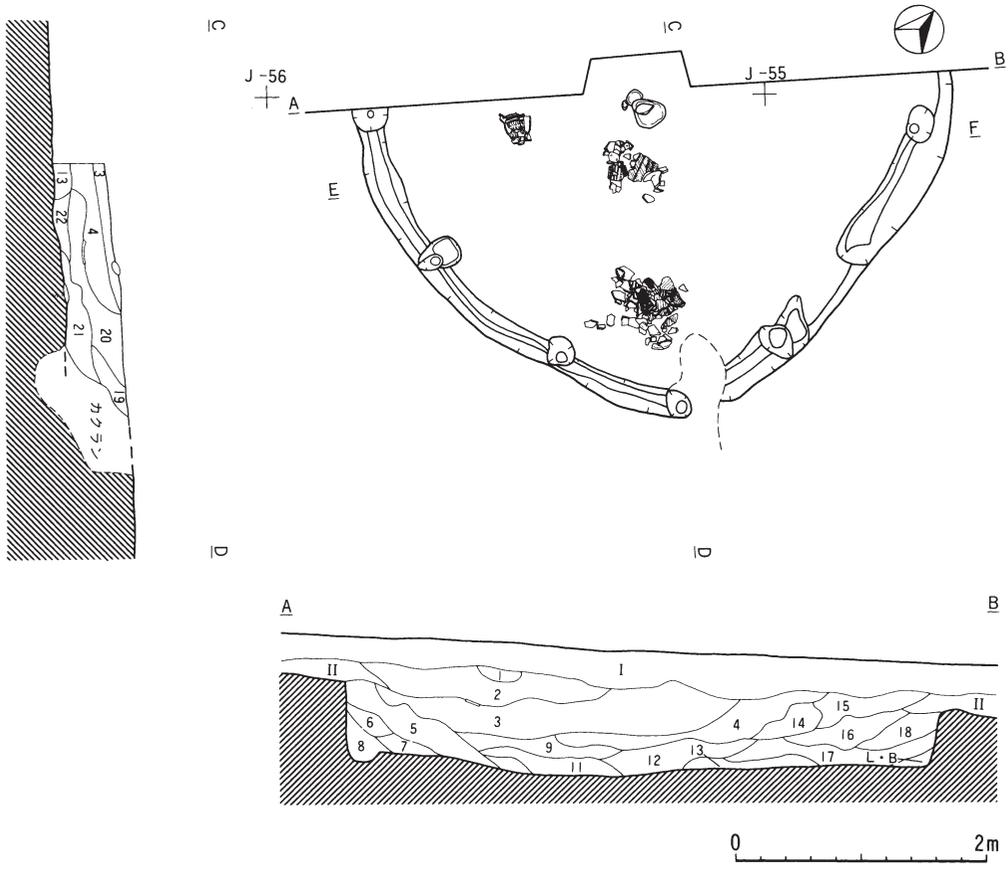
石器は、石鏃8点と軽石が出土している。このほかに玉髓の小礫を打ち欠いた両極石核が数点出土している。

[小結] 本住居跡の構築時期は、炉の埋設土器及び床面出土の土器型式から、縄文時代中期初頭、円筒上層a式期の後半と考えられる。また、柱穴の配置からは、拡張（増築）はなかったと考えられるが、東側の壁溝が一部途切れる部分は、出入口の可能性も考えられる。

ピット計測表

(単位：cm)

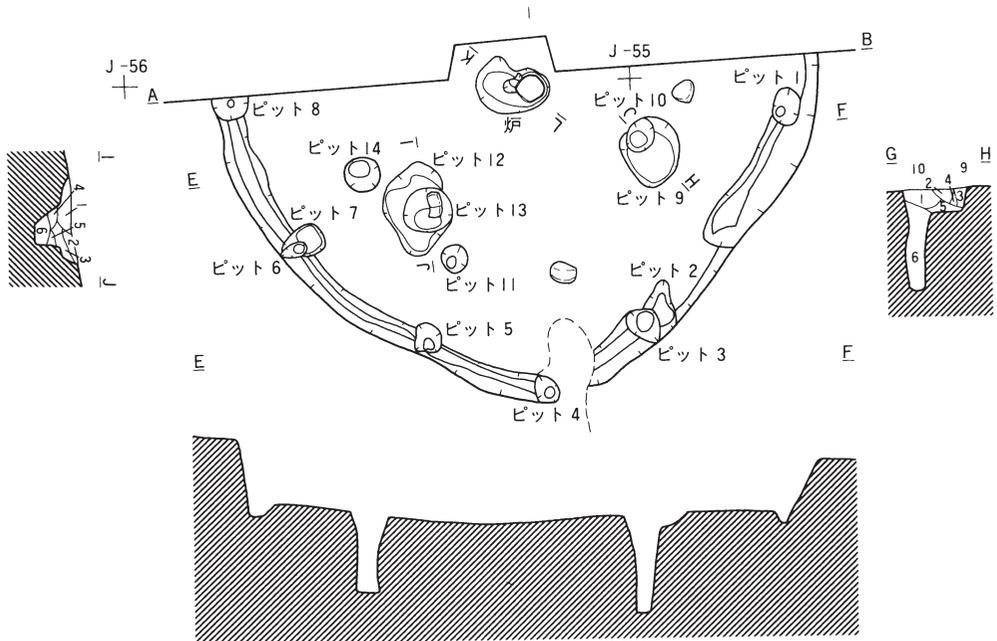
番号	長軸×短軸	深さ	備考	番号	長軸×短軸	深さ	備考
1	27×20	31	壁柱穴	8	26×(16)	14	壁溝の凹
2	38×26	20		9	58×46	20	
3	35×25	32	壁柱穴	10	30×22	83	支柱穴
4	26×18	31	壁柱穴	11	23×20	62	支柱穴
5	25×25	40	壁柱穴	12	78×55	12	
6	20×10	56	根跡?	13	36×30	29	
7	32×26	33	壁柱穴	14	28×30	65	支柱穴



4号住居跡

第1層	灰黄褐色土	10YR	4/2	炭化物粒若干混入。シルト質火山灰混入。
第2層	暗褐色土	10YR	3/4	炭化物粒微量混入。
第3層	黒褐色土	10YR	2/2	ローム・パミス少量混入。炭化物粒多量混入。焼土粒微量混入。
第4層	黒褐色土	10YR	2/2	ローム少量、炭化物粒・パミス多量、焼土粒少量混入。
第5層	暗褐色土	10YR	3/4	ローム・パミス多量混入。炭化物少量混入。
第6層	暗褐色土	10YR	3/4	ローム・パミス多量混入。炭化物中量混入。
第7層	暗褐色土	10YR	3/4	ローム・パミス多量混入。炭化物中量混入。
第8層	暗褐色土	10YR	3/3	ローム多量混入。炭化物粒・パミスごく少量混入。
第9層	黒褐色土	10YR	2/2	炭化物・パミスやや多量混入。
第10層	暗褐色土	10YR	3/4	ローム・パミス多量混入。炭化物少量混入。
第11層	黒褐色土	10YR	2/2	炭化物中量混入。パミス若干混入。
第12層	黒色土	10YR	2/1	炭化物多量混入。パミス若干混入。
第13層	黒褐色土	10YR	2/2	ローム少量混入。炭化物粒・パミス多量混入。粘性強い。
第14層	黒褐色土	10YR	2/3	炭化物・パミスやや多量混入。しまり大。
第15層	黒褐色土	10YR	3/2	炭化物・パミスやや多量混入。
第16層	暗褐色土	10YR	3/4	炭化物少量混入。パミスやや多量混入。
第17層	褐色土	10YR	4/4	ローム多量混入。炭化物・パミス・焼土粒少量混入。
第18層	暗褐色土	10YR	3/4	パミス中量混入。
第19層	黒褐色土	10YR	2/2	ローム・パミス少量混入。炭化物粒多量混入。
第20層	黒褐色土	10YR	2/2	ローム少量混入。炭化物粒・パミス多量混入。しまりやや強い。
第21層	黒褐色土	10YR	2/2	ローム少量混入。パミス多量混入。
第22層	暗褐色土	10YR	3/4	ローム・炭化物粒・パミス少量混入。粘性強い。

第15図 第4号竪穴住居跡遺物出土状況



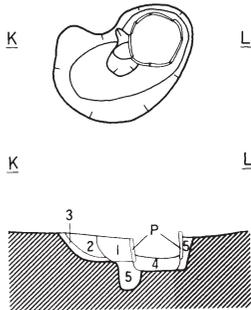
4号住居跡 ピット12

- 第1層 黒褐色土 10YR 3/2  
ローム・パミス多量混入。炭化物粒微量混入。
- 第2層 暗褐色土 10YR 3/3  
ローム・パミス多量混入。
- 第3層 暗褐色土 10YR 3/4  
ローム・パミス多量混入。炭化物粒微量混入。
- 第4層 暗褐色土と 10YR 3/3+10YR 4/5  
褐色土の混合土 ローム多量混入。パミス少量混入。
- 第5層 褐色土 10YR 4/5  
ローム多量混入。
- 第6層 褐色土 10YR 4/4  
ローム多量混入。炭化物粒・パミス少量混入。

4号住居跡 ピット9・10

- 第1層 暗褐色土 10YR 3/3  
ローム・パミス多量混入。炭化物粒少量混入。
- 第2層 暗褐色土 10YR 3/3  
ローム多量混入。炭化物微量混入。パミス少量混入。
- 第3層 暗褐色土と 10YR 3/3+10YR 4/4  
褐色土の混合土 ローム・パミス少量混入。
- 第4層 黄褐色土 10YR 2/3  
ローム多量混入。
- 第5層 褐色土 10YR 5/8  
パミス多量混入。暗褐色土少量混入。
- 第6層 暗褐色土 10YR 4/6  
ローム・パミス少量混入。炭化物粒ごく少量混入。

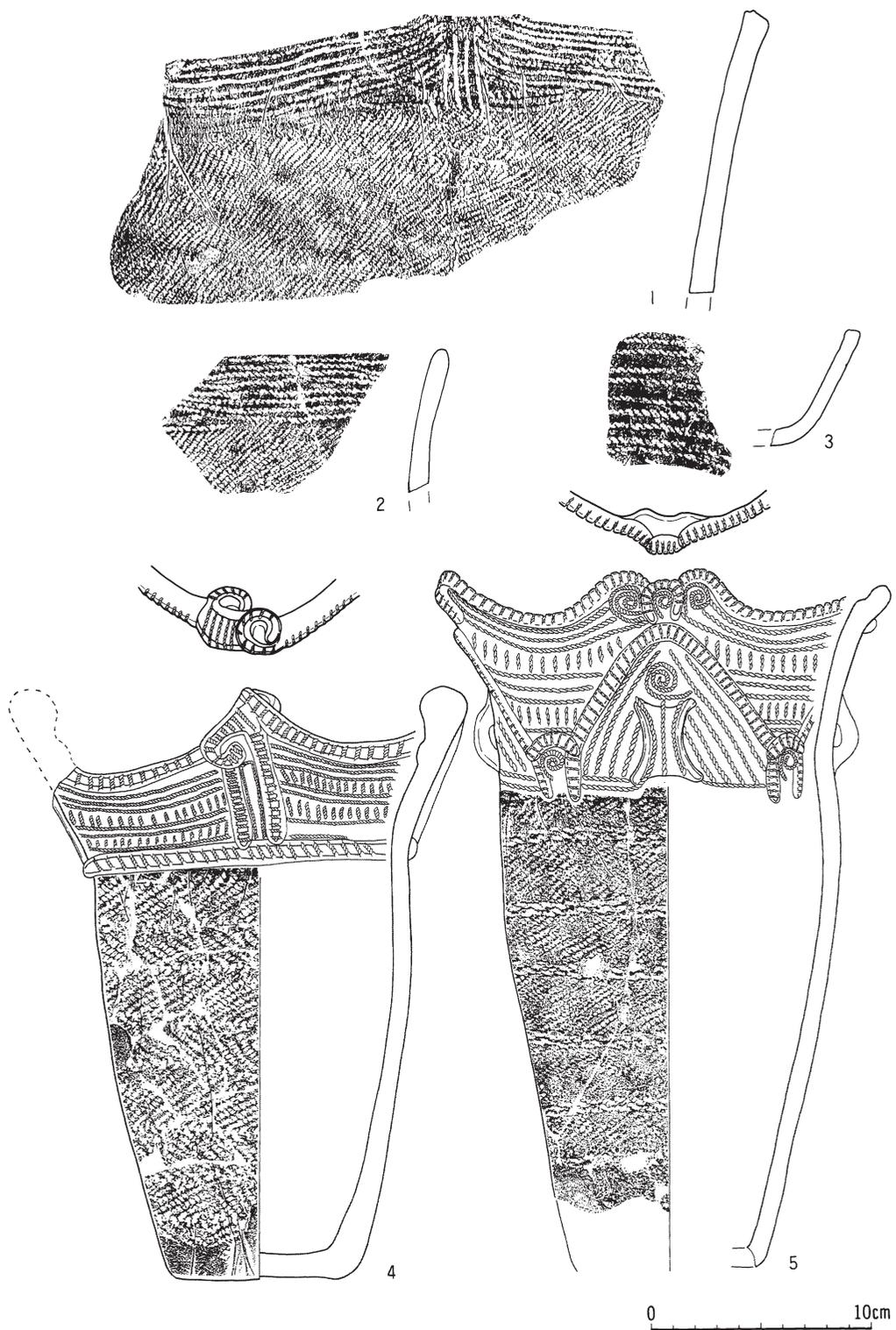
炉跡



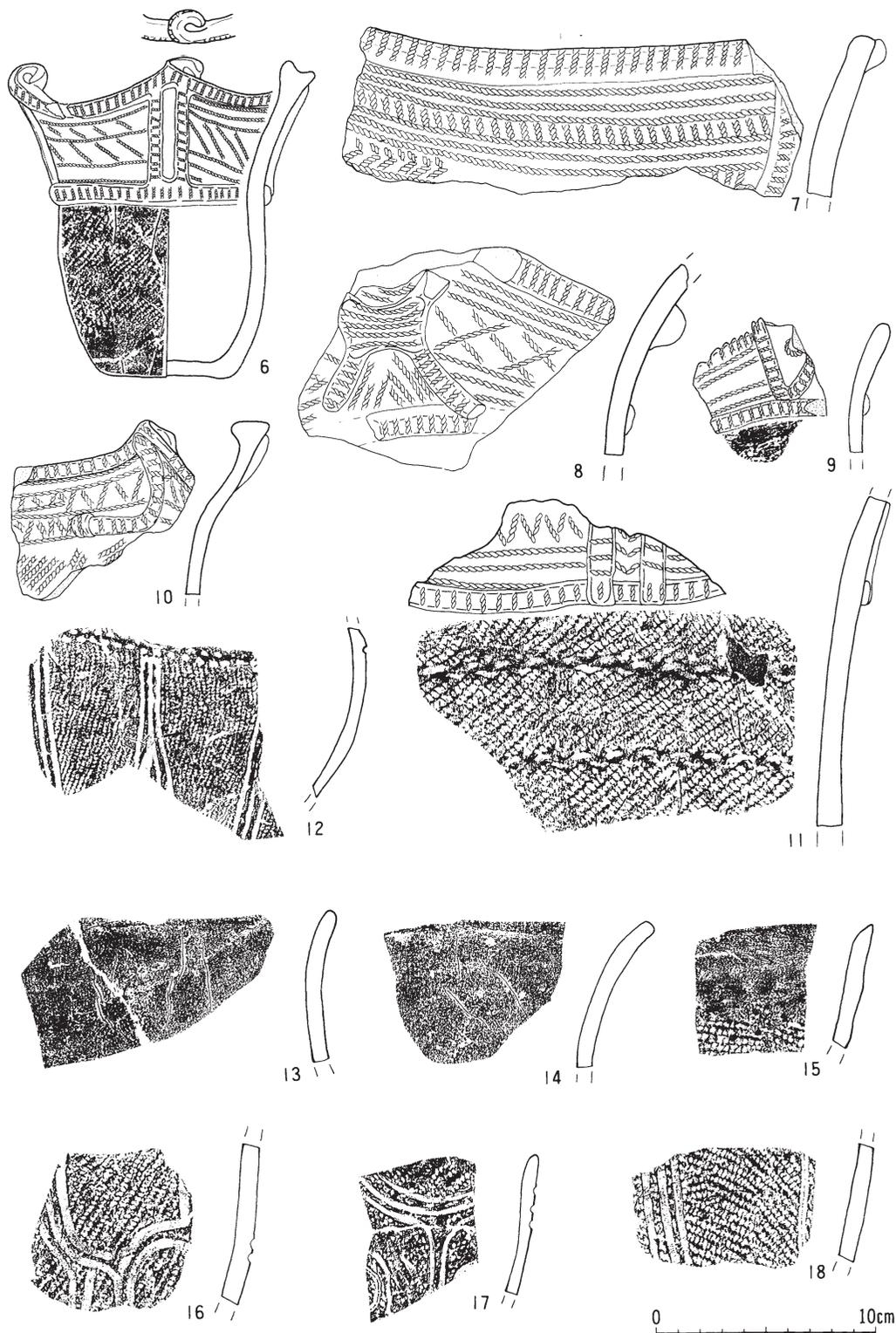
4号住居跡 炉

- 第1層 黒褐色土 10YR 2/2  
ローム・炭化物粒・パミス少量混入。
- 第2層 暗褐色土 10YR 3/3  
ローム・炭化物粒・パミス微量混入。
- 第3層 暗褐色土 10YR 3/4  
ロームブロック多量混入。炭化物粒少量混入。
- 第4層 褐色土 10YR 4/6  
ローム・炭化物粒少量混入。パミス多量混入。
- 第5層 黒褐色土 10YR 2/3  
ローム多量混入。炭化物粒・焼土粒微量混入。パミス少量混入。

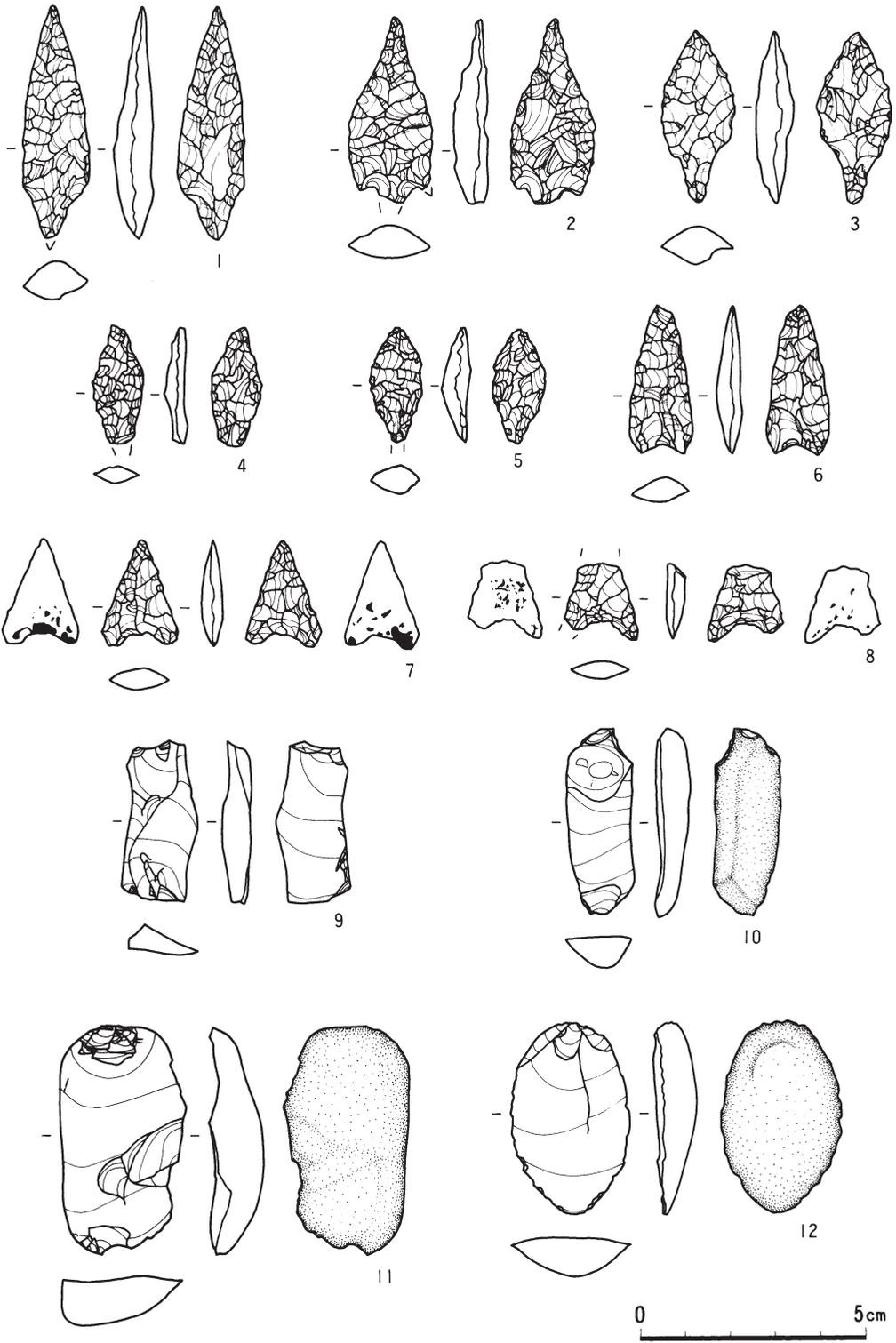
第16図 第4号竪穴住居跡平面図



第17图 第4号竖穴住居迹出土土器—1



第18图 第4号竖穴住居跡出土土器—2



第19图 第4号竖穴住居迹出土石器

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第17図-1	4 H	フ	口~胴	波状口縁 燃糸圧痕	斜縄文LR	II群	330
-2	4 H	フ	口縁	平口縁 燃糸圧痕		II群	219
-3	4 H	フ	口~底	平口縁	燃糸圧痕	III群1類	217
-4	4 H	フ	完形	波状口縁(4) 燃糸圧痕	羽状縄文	III群1類	91
-5	4 H	フ	完形	波状口縁 燃糸圧痕 橋状把手	横位斜縄文RL ループ	III群1類	93
第18図-6	4 H	フ	完形	波状口縁(4) 燃糸圧痕	斜縄文LR	III群1類	29
-7	4 H	フ	口縁	波状口縁 燃糸圧痕		III群1類	224
-8	4 H	フ	口縁	波状口縁 燃糸圧痕 橋状把手		III群1類	213
-9	4 H	フ	口縁	波状口縁 燃糸圧痕		III群1類	223
-10	4 H	フ	口縁	波状口縁 燃糸圧痕		III群1類	220
-11	4 H	炉	胴部	隆帯+隆帯上に圧痕 横位山形圧痕	横位斜縄文RL ループ	III群6類	130
-12	4 H	フ	口~胴	刺突文2列	垂下文	IV群2類	221
-13	4 H	フ	口縁	平口縁 無文		IV群2類	214
-14	4 H	フ	口縁	平口縁 無文		IV群2類	218
-15	4 H	フ	口縁	平口縁 無文		IV群2類	216
-16	4 H	フ	口~胴		沈線文	IV群2類	222
-17	4 H	フ	口縁	波状口縁 沈線文		IV群2類	212
-18	4 H	フ	胴部		斜縄文LR 垂下文	IV群2類	215

図版番号	遺構名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	器種	整理番号
第19図-1	4 H	フク土	(52.5)	15	9	(5.5)	珪質頁岩	石鏃	111
-2	4 H	フク土	(42.0)	18.5	7.5	(4.9)	珪質頁岩	石鏃	252
-3	4 H	フク土	48.5	16	8.5	3.7	玉髄質珪質頁岩	石鏃	107
-4	4 H	フク土	(26.0)	11	5	(1.3)	珪質頁岩	石鏃	262
-5	4 H	床直	(26.0)	12	6	(1.6)	玉髄質珪質頁岩	石鏃	266
-6	4 H	フク土	(33.0)	14	6.5	(2.3)	珪質頁岩	石鏃	101
-7	4 H	フク土	23.5	17	5	1.3	珪質頁岩	石鏃	106
-8	4 H	フク土	(17.0)	(16.5)	(4.5)	(1.1)	珪質頁岩	石鏃	164
-9	4 H	フク土	36	18	7	3.7	珪質頁岩	不定形	1289
-10	4 H	フク土	41.5	15.5	8	5.8	珪質頁岩	両極	402
-11	4 H	フク土	51	28.5	11.5	16.9	珪質頁岩	両極	401
-12	4 H	フク土	43	27	10	10.5	珪質頁岩	両極	404

### 第5号竪穴住居跡（第20・21図）

[位置] H-47～48グリッドに位置する。

[重複] 第10号土坑と重複し、本住居跡が古い。また、南西側に第6号住居跡が隣接している。

[平面形・規模] 南側の半分以上が調査区外にあるために、全体形を確認できなかった。また、明確に確認できたのは南西壁だけである。このため規模も不明である。

[壁] 第IV層を壁としており、垂直に立ち上がっている。上部はややもろく、下部はしまりがある。床面近くは若干粘性が認められる。東側の壁は若干の段差を確認できただけであり、不明である。

[床面] 第IV層を掘り込み、地山を床面としている。貼り床面の痕跡は確認できなかった。床面は若干粘性が認められ、全体に緩やかな起伏がみられる。東側は、緩やかな段差が確認できたが、床面の範囲は確定できない。

[壁溝] 確認できなかった。

[柱穴・ピット] 柱穴1個を確認した。深さから主柱穴と考えられるが、他の柱穴を確認できなかったことから、柱穴配置は不明である。

[炉] 確認できなかった。おそらく、調査区外に存在するものと推定される。

[付属施設] 確認できなかった。

[堆積土] 5層に分層できた。暗褐色土を主体としており、全体に炭化物粒を含んでいる。また、覆土より上部の標準土層の第II層中には火山灰の堆積がみられる。

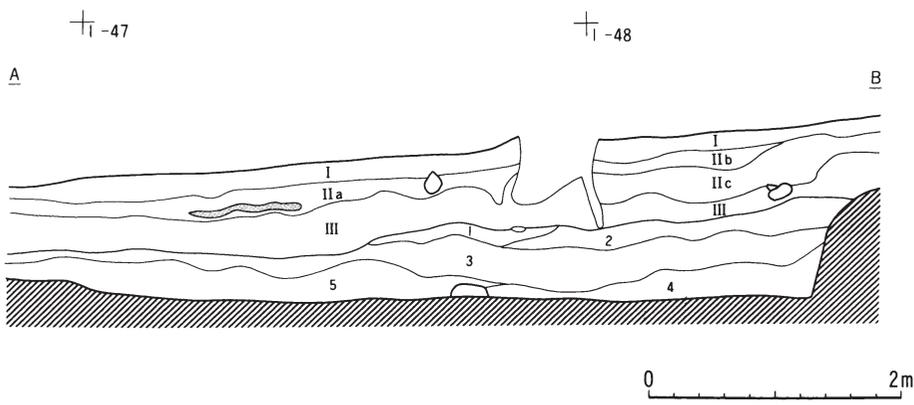
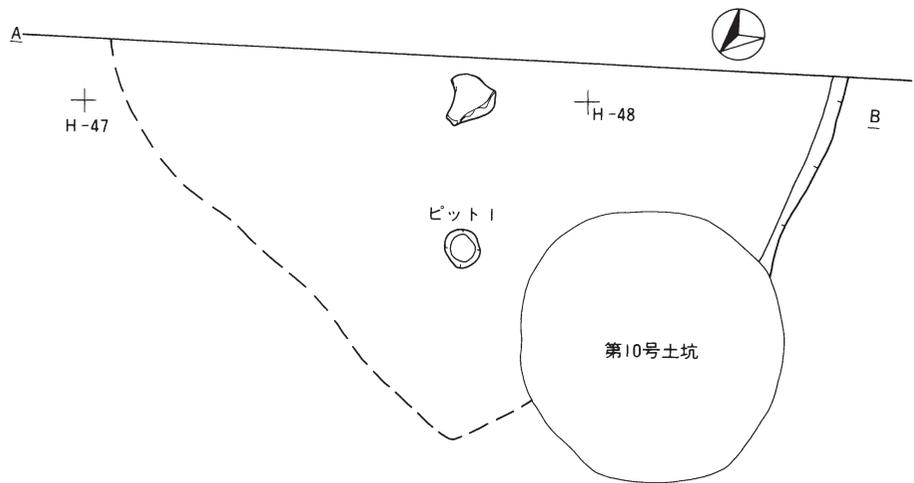
[出土遺物] 確認面及び覆土上部からは土器片が出土しているが、帰属時期を決定できる床面からの土器は出土しなかった。石器では、床面近くから磨製石斧が1点出土している。

[小結] 本住居跡の廃絶時期は、床面からの出土土器が皆無のため不明であるが、重複関係にあり、本住居跡より新しいと考えられる第10号土坑の覆土中から、円筒上層a式期の土器が出土していることから、本住居跡は、円筒上層a式期またはそれ以前の所産と考えられる。

ピット計測表

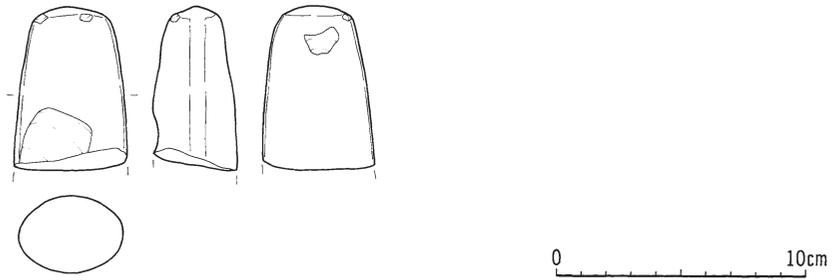
(単位：cm)

番号	長軸×短軸	深さ	備考	番号	長軸×短軸	深さ	備考
1	32×27	72	主柱穴				



- 5号住居跡
- |     |      |      |     |                              |
|-----|------|------|-----|------------------------------|
| 第1層 | 暗褐色土 | 10YR | 3/3 | ローム少量混入。炭化物粒少量混入。            |
| 第2層 | 暗褐色土 | 10YR | 3/4 | ローム少量混入。炭化物粒少量混入。            |
| 第3層 | 暗褐色土 | 10YR | 3/4 | ローム少量混入。炭化物粒中量混入。            |
| 第4層 | 黄褐色土 | 10YR | 5/6 | 炭化物粒微量混入。暗褐色土少量混入。           |
| 第5層 | 褐色土  | 10YR | 4/6 | ローム少量混入。炭化物粒少量混入。暗褐色土まばらに混入。 |

第20図 第5号竪穴住居跡平面図



第21図 第5号竪穴住居跡出土石器

図版番号	遺構名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	器種	整理番号
第21図	5H	フク土	(66.5)	(45.5)	(34.0)	(156.9)	閃緑岩	石斧	2022

## 第6号竪穴住居跡 (第22～30図)

〔位置〕 G・H-48～50グリッドに位置する。

〔平面形・規模〕 南側の半分以上が調査区外にあるために、全体形を確認できなかったが、主軸がほぼ南北方向の隅丸長方形を呈するものと考えられる。確認部分は、長軸方向で580cm、短軸で640cmである。

〔壁〕 第IV層を壁としており、垂直に立ち上がっている。上部はややもろく、下部はしまりがある。床面近くは若干粘性が認められる。

〔床面〕 第IV層を掘り込み、地山を床面としている。貼り床面の痕跡は確認できなかった。床面は若干粘性が認められ、全体に緩やかな起伏がみられる。西壁寄りに、支柱穴と平行して5～10cm程の段差が認められ、壁寄りが高く構築されている。

〔壁溝〕 西壁直下だけに存在する。幅は10～25cm、深さは4～13cmで、一部で途切れる。

〔柱穴・ピット〕 11個の柱穴及びピットを検出した。この内のピット2・5・6の3個が支柱穴と考えられ、壁溝中の7～11の5個は、支柱穴と考えられる。また、北壁寄りに長径150cm程の不整形のピットが2基(ピット1・3)存在する。支柱穴としたピット5・6には大型の礫が伴って確認されている。

〔炉〕 住居の全体形が確認できないことから、住居における位置関係は不明であるが、ほぼ中軸線上に設けられている。地山を掘りくぼめて構築されており、内部は暗褐色土中に多量の焼土及び炭化物が混入している。最下部に焼土層が検出された。第9層とした層は地山の焼化された部分である。

〔付属施設〕 ピット1・3が付属施設と考えられるが、ともに用途は不明である。ピット3には土器が倒立状態で埋設されている。土器は完形品で、器外面、特に下部には、ほとんど火熱を受けた痕跡は認められないが、内面には油脂状の炭化物の付着とそれを掻き取ったような痕跡がみられる。ただ、胴部上半部から上には、煤状の炭化物と火熱を受けた痕跡も認められることから、土器の下部までを埋置して、使用した可能性が高い。この土器は本来的な煮沸具としてではなく、何か特殊な使用法が行われたものと考えられるが、埋設された胴部中央部から口頸部までの火熱を受けた痕跡が、どのような状態での使用によるものかは不明であり、倒立での埋設が、住居を使用していた時点のものか、廃絶時になされたものかも不明である。

〔堆積土〕 11層に分層できた。最上部の第1層は表土で、第2・4層は標準土層第II層に相当すると考えられる。第3層は焼土粒の混入している黒褐色土で、上部に苦小牧降下火山灰と考えられる火山灰がレンズ状に堆積している。第5～7層は暗褐色土または黒褐色土と褐色土との混合土で炭化物粒が多量に混入している。下部はローム主体の層で炭化物が混入している。一部焼土の層が確認できたが、この部分で焼化された可能性は少ない。

[出土遺物] 確認面から床面まで遺物が出土している。

土器は、覆土上部からは、第IV群1・2類（榎林・最花式）の土器が、特に後者が多く出土しており、床面及び床面直上からは、第III群1類（円筒上層a式）の土器が数個体出土している。埋設土器もこの類である。また、第III群2類（円筒上層b式）の破片も多く出土している。

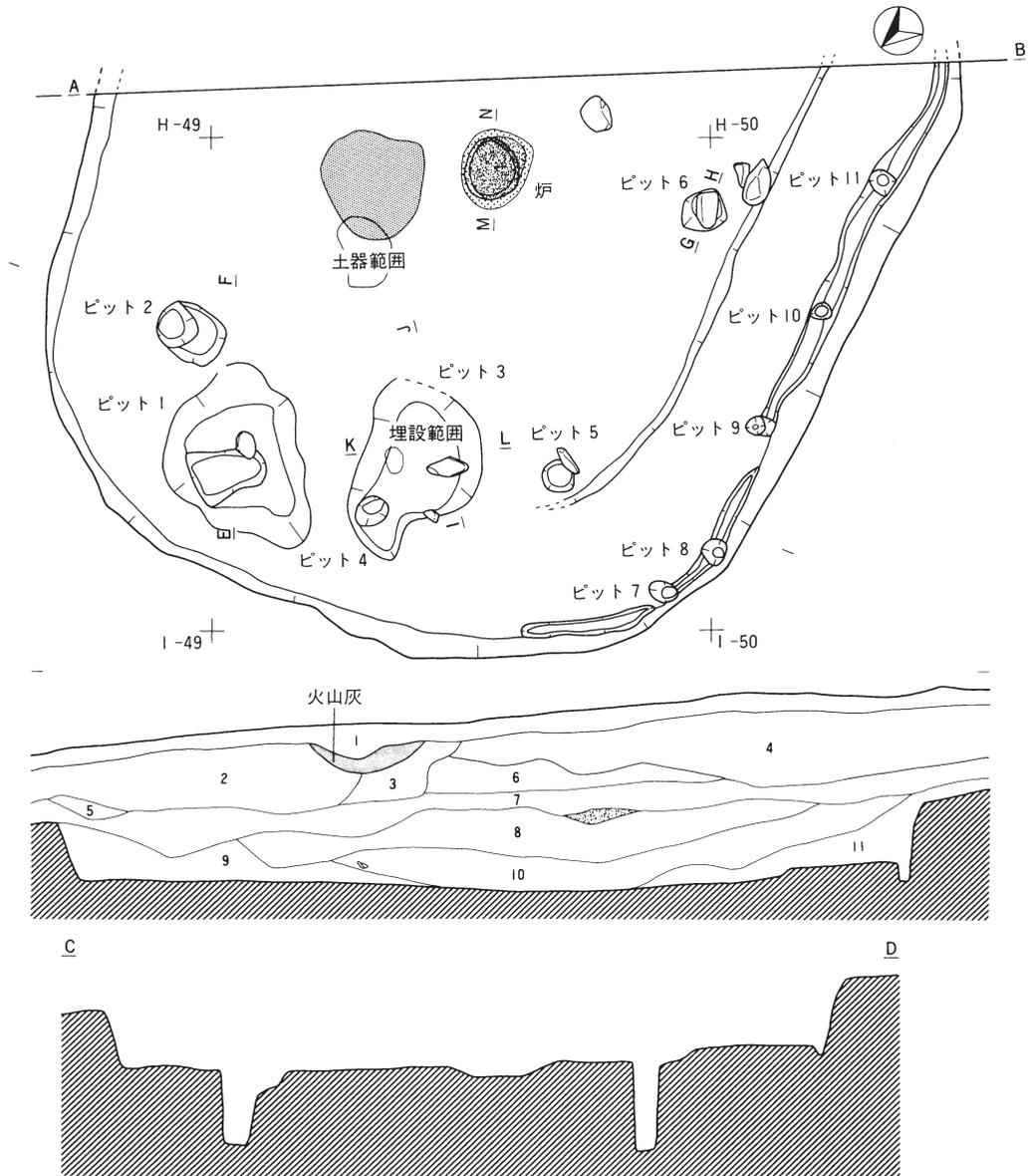
石器は、凹石が1点出土している。この他に不定型石器が数点出土している。

[小結] 本住居跡の廃絶時期は、床面からの出土土器及び埋設土器の型式から、縄文時代中期初頭、円筒上層a式期と考えられる。また、柱穴の配置からは、確認部分内では、拡張（増築）はなかったと考えられる。

ピット計測表

(単位：cm)

番号	長軸×短軸	深さ	備考	番号	長軸×短軸	深さ	備考
1	115×105	35		7	25×15	10	壁柱穴
2	57×45	60	主柱穴	8	20	42	壁柱穴
3	145×95	26		9	25×15	29	壁柱穴
4	28×25	34		10	18×12	46	壁柱穴
5	25	74	主柱穴	11	18×12	58	壁柱穴
6	38×33	90	主柱穴				

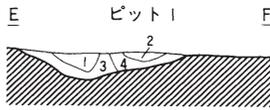


6号住居跡

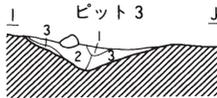
- |      |               |      |          |                                      |
|------|---------------|------|----------|--------------------------------------|
| 第1層  | 黒褐色土          | 10YR | 2/2      | ローム微量混入。炭化物粒多量混入。焼土粒微量混入。            |
| 第2層  | 暗褐色土          | 10YR | 3/3      | ローム多量混入。炭化物粒多量混入。パミス少量混入。            |
| 第3層  | 黒褐色土          | 10YR | 2/3      | ローム少量混入。炭化物粒・パミス少量混入。焼土粒微量混入。        |
| 第4層  | 暗褐色土          | 10YR | 3/4      | ローム多量混入。炭化物粒多量混入。パミス少量混入。            |
| 第5層  | 暗褐色土と褐色土の混合土  | 10YR | 3/3+10YR | 4/6<br>ローム多量混入。炭化物粒多量混入。パミス微量混入。     |
| 第6層  | 暗褐色土と褐色土の混合土  | 10YR | 3/4+10YR | 4/6<br>ローム多量混入。炭化物・炭化物粒多量混入。パミス多量混入。 |
| 第7層  | 黒褐色土と暗褐色土の混合土 | 10YR | 2/3+10YR | 3/3<br>ローム多量混入。炭化物粒多量混入。パミス多量混入。     |
| 第8層  | 褐色土           | 10YR | 4/4      | ローム多量混入。炭化物粒多量混入。パミス多量混入。            |
| 第9層  | 褐色土           | 10YR | 4/4      | ローム多量混入。炭化物粒少量混入。パミス多量混入。            |
| 第10層 | 暗褐色土          | 10YR | 3/3      | ローム多量混入。炭化物粒多量混入。パミス多量混入。            |
| 第11層 | 褐色土           | 10YR | 4/6      | ローム多量混入。炭化物粒少量混入。パミス多量混入。            |

0 2m

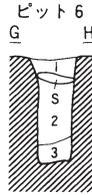
第22図 第6号竪穴住居跡平面図



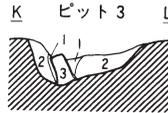
- 6号住居跡 ピット1
- 第1層 褐色土 10YR 4/6  
ローム微量混入。
  - 第2層 暗褐色土 10YR 3/4  
ローム少量混入。
  - 第3層 褐色土 10YR 4/4  
ローム微量混入。
  - 第4層 におい黄暗褐色土 10YR 4/3  
ローム微量混入。炭化物粒微量混入。



- 6号住居跡 ピット3
- 第1層 黒褐色土 10YR 2/3  
ローム微量混入。炭化物粒少量混入。
  - 第2層 褐色土 10YR 4/4  
ローム多量混入。炭化物粒微量混入。
  - 第3層 におい黄暗褐色土 10YR 4/3  
ローム多量混入。炭化物粒微量混入。



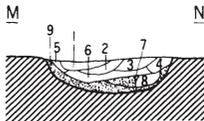
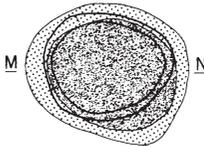
- 6号住居跡 ピット6
- 第1層 暗褐色土 10YR 3/4  
ローム中量混入。炭化物粒多量混入。
  - 第2層 褐色土 10YR 4/4  
ローム多量混入。炭化物粒多量混入。
  - 第3層 褐色土 10YR 4/6  
粘性・湿性非常にあり。



- 6号住居跡 埋設土器
- 第1層 暗褐色土 10YR 3/4  
ローム少量混入。炭化物粒少量混入。
  - 第2層 黄褐色土 10YR 5/8  
地山。埋め土？
  - 第3層 褐色土 10YR 4/4  
炭化物粒混入。



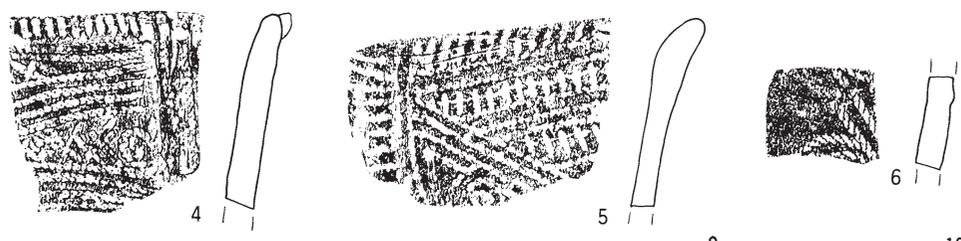
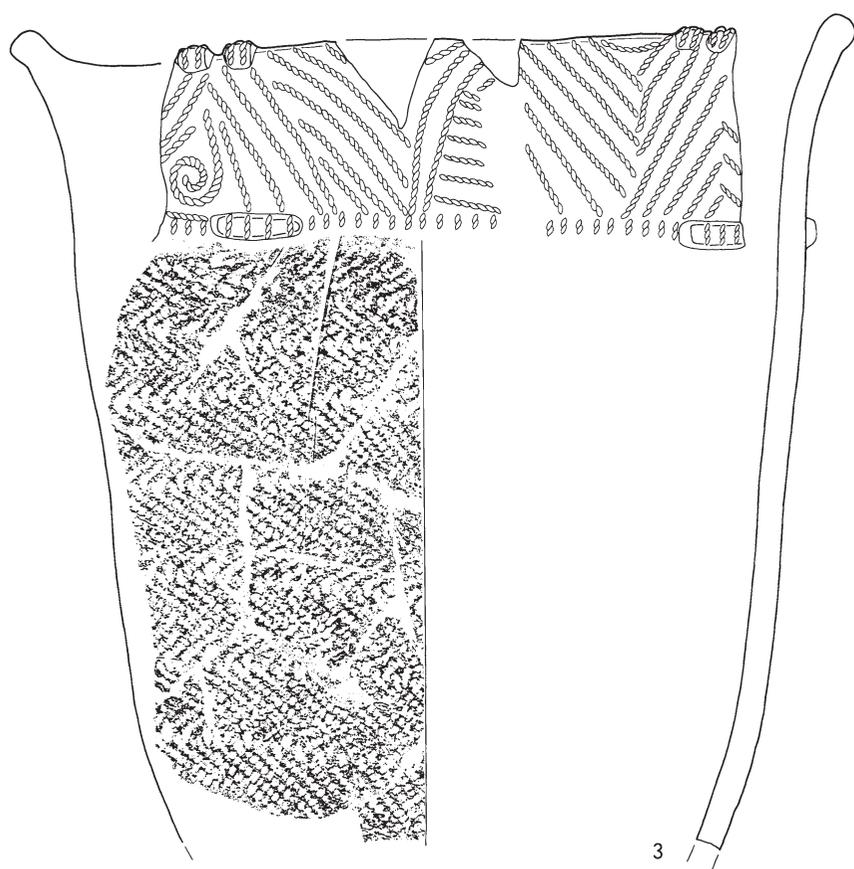
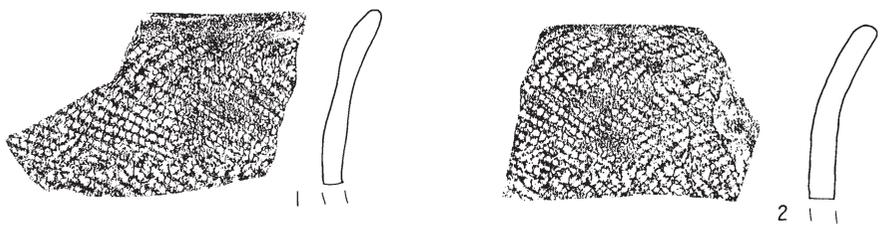
炉跡



- 6号住居跡 炉
- 第1層 暗褐色土 10YR 3/4  
ローム少量混入。炭化物粒多量混入。焼土粒少量混入。
  - 第2層 褐色土 10YR 4/4  
ローム多量混入。炭化物粒多量混入。焼土粒多量混入。
  - 第3層 暗褐色土 10YR 3/4  
ローム多量混入。炭化物粒多量混入。焼土粒多量混入。
  - 第4層 暗褐色土 10YR 3/3  
ローム多量混入。炭化物粒多量混入。焼土粒多量混入。
  - 第5層 暗褐色土 10YR 3/4  
ローム少量混入。焼土粒少量混入。
  - 第6層 褐色土 10YR 4/4  
ローム多量混入。炭化物粒多量混入。焼土粒多量混入。
  - 第7層 赤褐色土 2.5YR  
4/6 焼土層
  - 第8層 黄褐色土 10YR 5/8  
ロームブロック
  - 第9層 赤褐色土 2.5YR  
4/6 黄褐色土が斑状に混入。

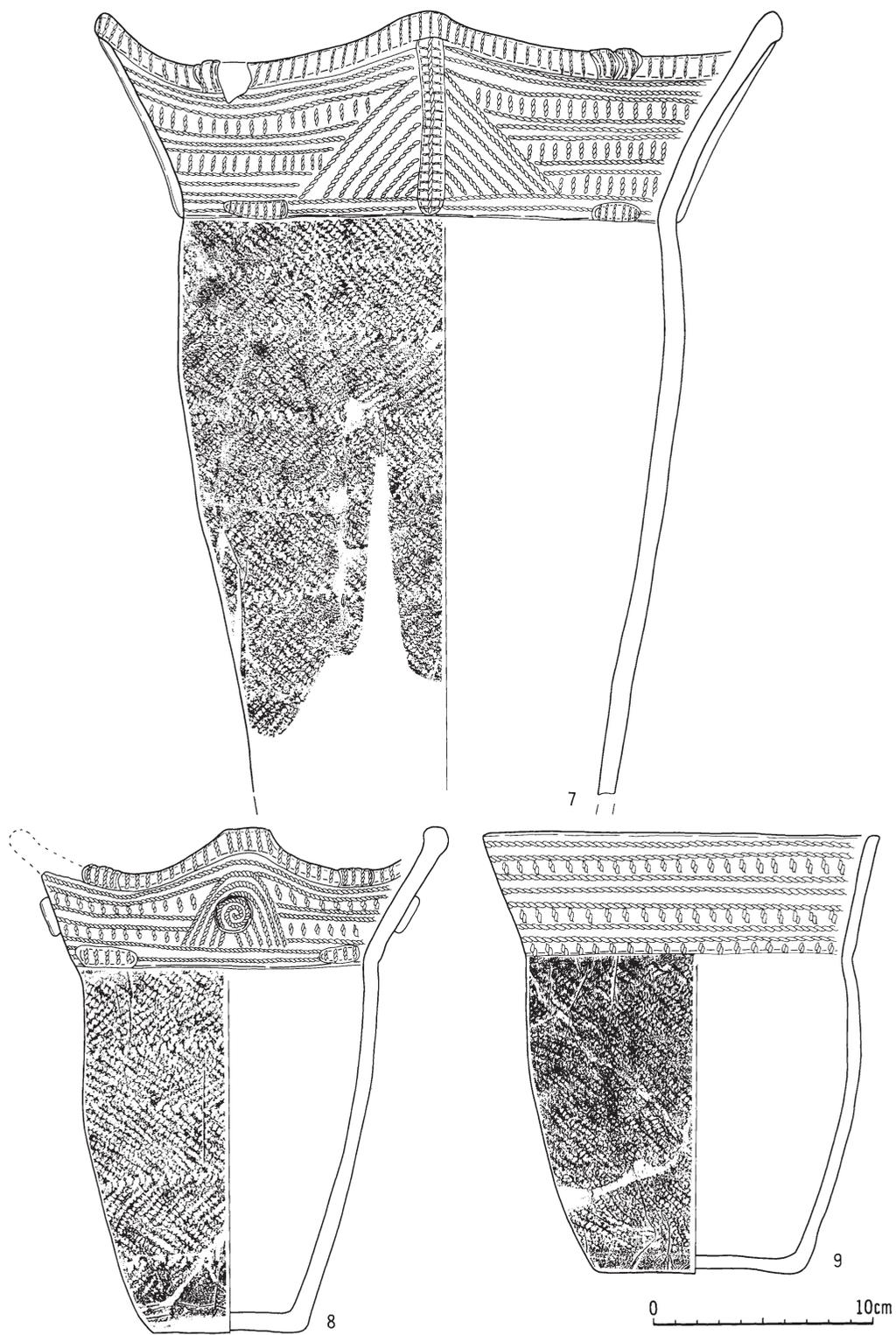


第23図 第6号竪穴住居跡平面図

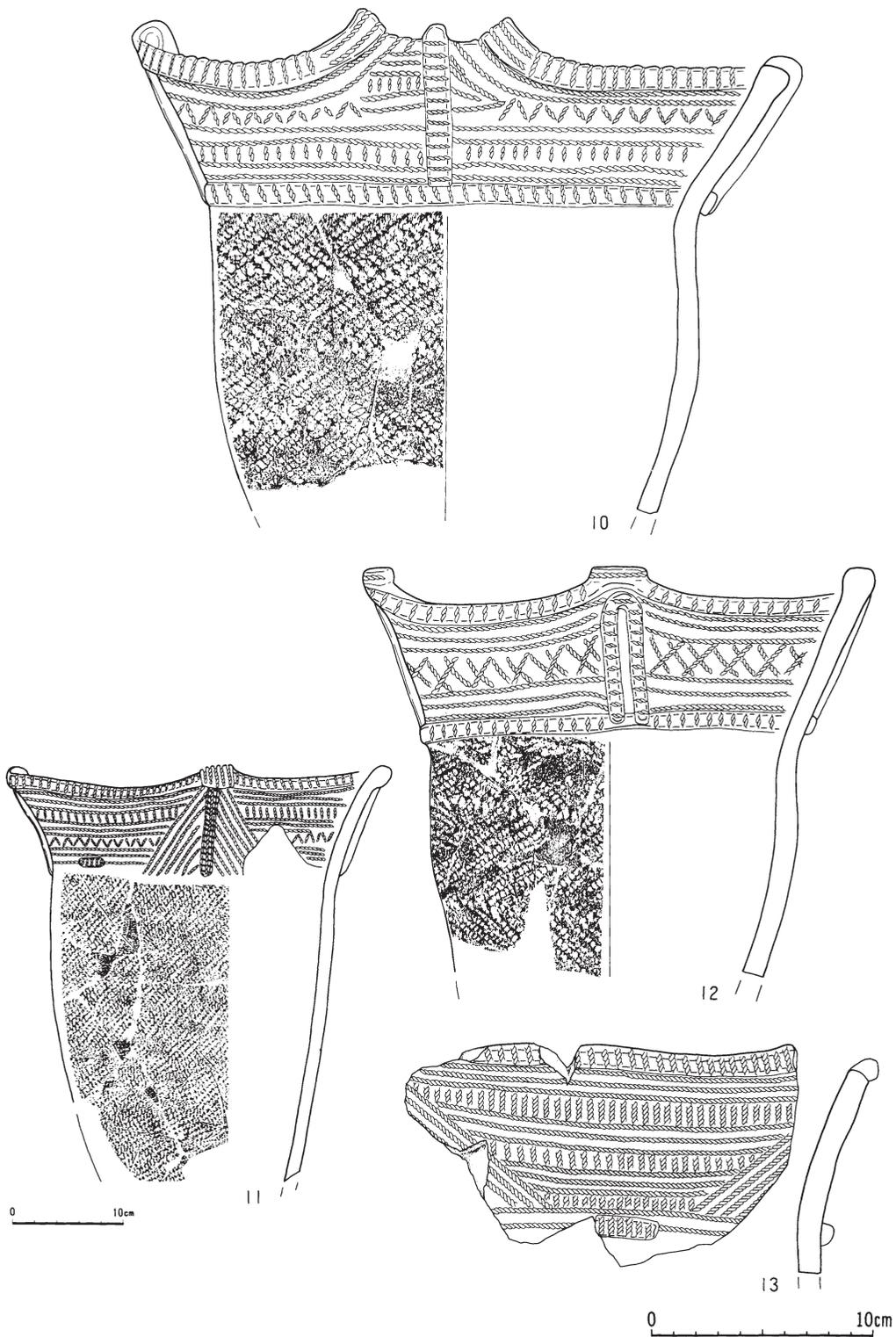


0 10cm

第24图 第6号竖穴住居迹出土土器—1



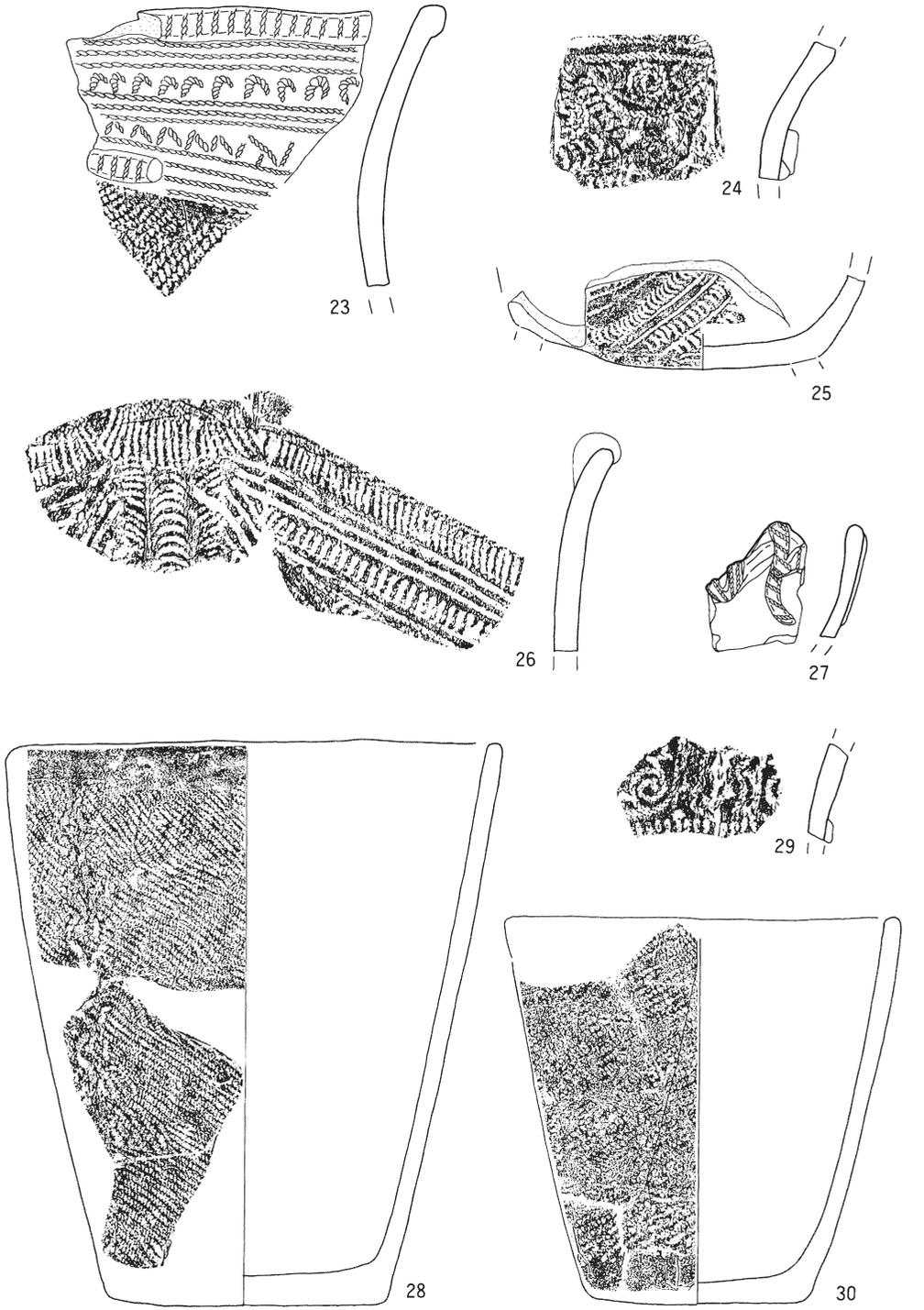
第25图 第6号竖穴住居迹出土土器—2



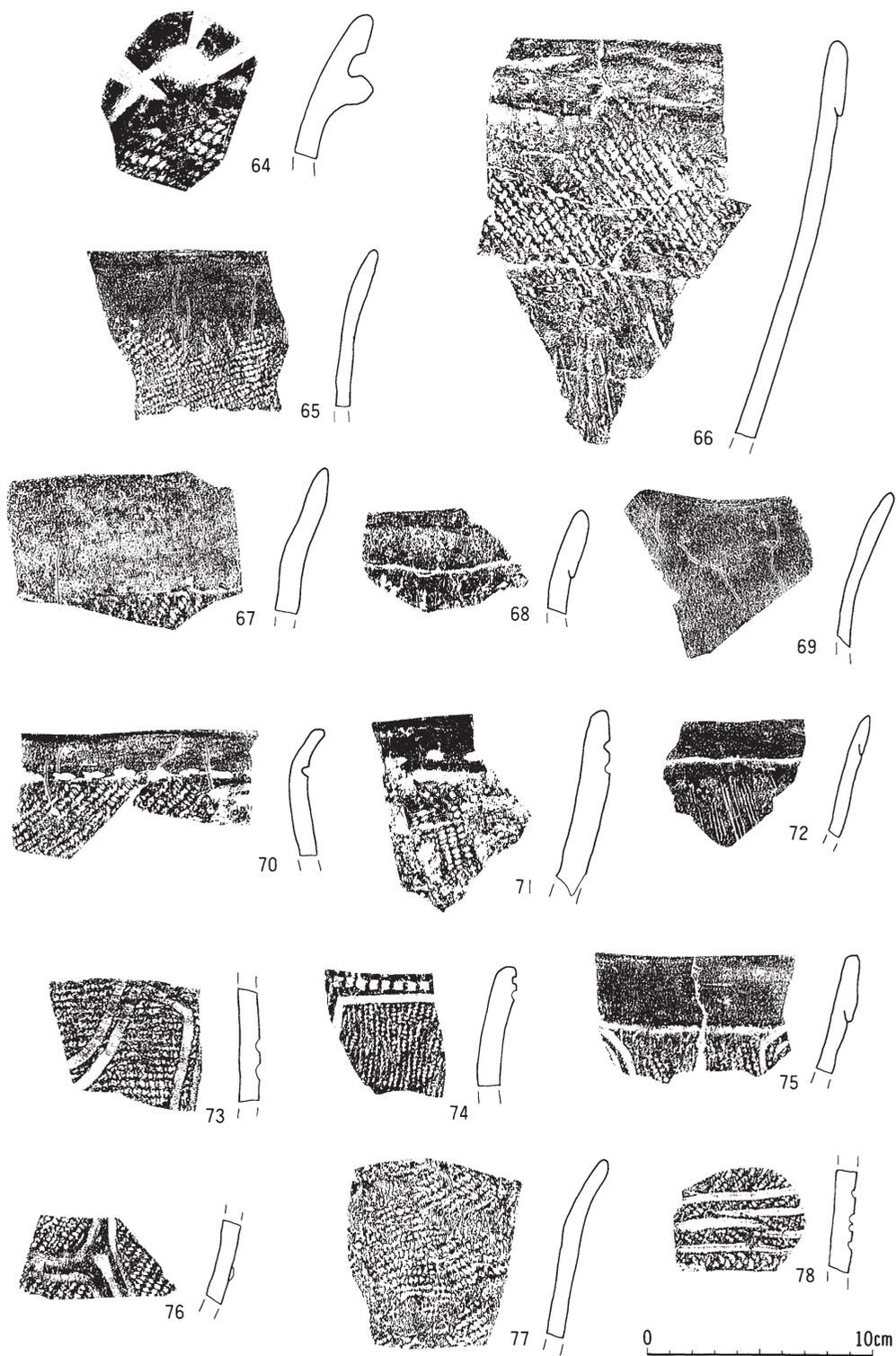
第26图 第6号竖穴住居跡出土土器—3



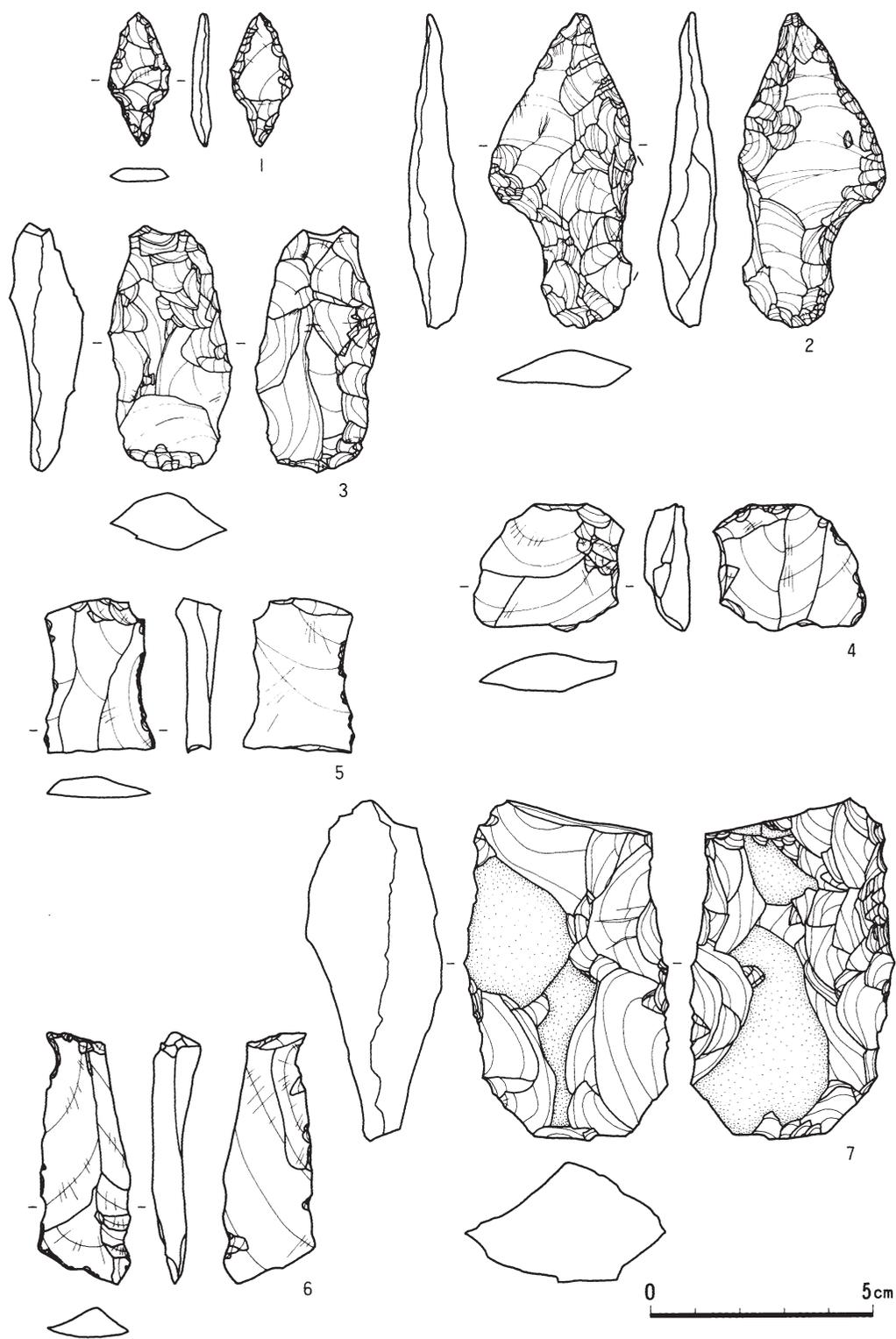
第27图 第6号竖穴住居跡出土土器—4



第28图 第6号竖穴住居迹出土土器—5



第29图 第6号竖穴住居迹出土土器—6



第30图 第6号竖穴住居迹出土石器

図版番号	遺構名	施	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第24図-1	6 H	フ	口縁	平口縁		I 群	237
-2	6 H	フ	口縁	平口縁		I 群	245
-3	6 H	床	口～胴	平口縁 捺糸圧痕	羽状縄文	II 群	122
-4	6 H	フ	口縁	平口縁 捺糸圧痕		III 群 1 類	235
-5	6 H	フ	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III 群 1 類	236
-6	6 H	フ	口縁	捺糸圧痕		III 群 1 類	256
第25図-7	6 H	フ	完形	波状口縁(4) 捺糸圧痕	羽状縄文	III 群 1 類	119
-8	6 H	フ	完形	波状口縁(4) 捺糸圧痕 ボタン状突起	羽状縄文	III 群 1 類	72
-9	6 H	フ	完形	平口縁 捺糸圧痕	斜縄文LR	III 群 1 類	92
第26図-10	6 H	フ	口～胴	波状口縁(4) 捺糸圧痕	羽状縄文	III 群 1 類	328
-11	6 H	床	口～胴	波状口縁(4) 捺糸圧痕	斜縄文LR	III 群 1 類	329
-12	6 H	フ	略完形	波状口縁(4) 捺糸圧痕	羽状縄文	III 群 1 類	70
-13	6 H	床	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III 群 1 類	225
第27図-14	6 H	床	口～胴	波状口縁 捺糸圧痕	斜縄文LR 横位綾絡文	III 群 1 類	227
-15	6 H	フ	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III 群 1 類	226
-16	6 H	フ	口縁	平口縁 捺糸圧痕		III 群 1 類	332
-17	6 H	フ	口縁	捺糸圧痕 ボタン状突起		III 群 1 類	234
-18	6 H	フ	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III 群 1 類	228
-19	6 H	フ	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III 群 1 類	250
-20	6 H	フ	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III 群 1 類	232
-21	6 H	フ	口縁	平口縁 捺糸圧痕		III 群 1 類	229
-22	6 H	フ	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III 群 1 類	233
第28図-23	6 H	フ	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III 群 2 類	585
-24	6 H	フ	口縁	捺糸圧痕 ボタン状突起		III 群 2 類	248
-25	6 H	フ	胴～底		捺糸圧痕 刺突文(馬蹄形)	III 群 2 類	243
-26	6 H	フ	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III 群 2 類	231
-27	6 H	フ	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III 群 6 類	252
-28	6 H	フ	胴～底		斜縄文RL 縦位綾絡文	III 群 6 類	127
-29	6 H	フ	口縁	捺糸圧痕		III 群 6 類	251
-30	6 H	床	胴～底		斜縄文RL	III 群 6 類	61
第29図-31	6 H	フ	口縁	波状口縁		IV 群 1 類	254
-32	6 H	フ	口縁	平口縁 無文		IV 群 2 類	240
-33	6 H	フ	口～胴	平口縁 折り返し状口縁	斜縄文RL 擦痕	IV 群 2 類	230
-34	6 H	フ	口縁	平口縁 折り返し状口縁		IV 群 2 類	247
-35	6 H	フ	口縁	平口縁 折り返し状口縁		IV 群 2 類	239
-36	6 H	フ	口縁	波状口縁 無文		IV 群 2 類	238
-37	6 H	フ	口縁	平口縁 無文 刺突文 1 列		IV 群 2 類	257
-38	6 H	フ	口縁	波状口縁 刺突文 1 列		IV 群 2 類	241
-39	6 H	フ	口縁	平口縁 折り返し状口縁		IV 群 2 類	244
-40	6 H	フ	胴部		斜縄文LR 沈線文	IV 群 2 類	258
-41	6 H	フ	口縁	刺突文 1 列 平口縁		IV 群 3 類	255
-42	6 H	フ	口縁	平口縁 折り返し状口縁		IV 群 3 類	242
-43	6 H	フ	胴部		斜縄文RL	IV 群 3 類	253
-44	6 H	フ	口縁	波状口縁		IV 群 4 類	246
-45	6 H	フ	胴部		沈線文	VI 群	249

図版番号	遺構名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	器種	整理番号
第30図-1	6H	フク土	30.5	13	3	1.5	珪質頁岩	石鏃	362
-2	6H	フク土	71.5	(33.5)	13	(20.8)	珪質頁岩	石槍	523
-3	6H	フク土	55.5	28	16.5	17.8	珪質頁岩	石鏃	624
-4	6H	フク土	29.5	34.5	10.5	6.2	珪質頁岩	不定形	1283
-5	6H	フク土	35	25	10	9.5	玉髓質珪質頁岩	不定形	1282
-6	6H	フク土	57	21	11	8	珪質頁岩	不定形	1281
-7	6H	フク土	77.5	46.5	31	95	珪質頁岩	不定形	1293

## 2 土 坑

今回の調査では、10基の土坑を検出した。この他に、上部に配石をともなう土坑が2基確認されているが、これは遺構の性格上、配石遺構として取り扱った。

### 第1号土坑 (第31～32図)

[位置] H・I-71・72グリッドに位置する。

[重複] 重複は認められないが、南側に第2号土坑が存在し、開口部間で約120cm程で近接している。

[平面形・規模] 開口部は、一部不明瞭な部分もみられるが、概ね楕円形を呈している。底面は不正な楕円形で、断面形では、底面が広がるフラスコ状を呈する。開口部では、長軸110cm、短軸90cm、底面では長軸185cm、短軸165cmで、深さは約130cmである。

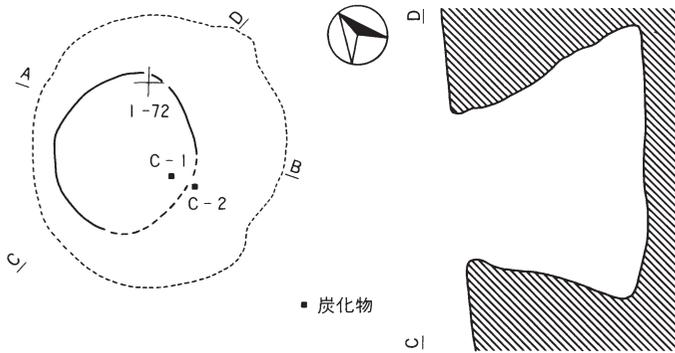
[堆積土] 16層に分層できた。上部は、暗褐色土を主体とし、中位以下は黄褐色ロームを主体としている。一部中位層と最下層の堆積土を除き、全体に炭化物粒の混入が認められる。また、上部には焼土粒の混入も認められた。全体のしまりはないが、中位以下の層は粘性が強い傾向が認められる。堆積土中に炭化物等の混入物がみられるものの、ほぼ、地山そのもののロームが堆積していることから、構築後、短期間のうちに人為的に埋め戻されたものと考えられる。

[出土遺物] 土坑の中位の第7層中からコハクが1点出土している。コハクは風化が著しく、加工の有無は不明である。また、堆積土上部から土器片が少量出土しているが、本遺構に伴わないものと考えられる。

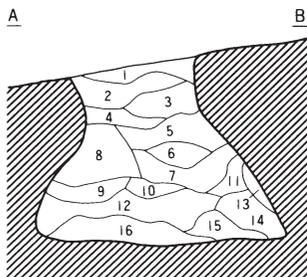
[その他] 底面直上から出土した炭化木片は、樹種同定の結果、「ヤチダモ」で、年代測定では、 $3090 \pm 160$  (B.P.) 年との結果が報告されている。(第IV章参照。)

本土坑の周囲には、薄いものではあったが縄文時代中期後半の遺物包含層(一部後世の耕作によるものも含まれる)が形成されていたことから、本遺構の構築時期は、土器と同時期、または若干古いものと考えたいが、年代測定の結果からは、縄文時代後期終末期の年代が示されており、断定し得ない。

また、中位よりコハクが出土していることから、土壇墓の可能性が高い。

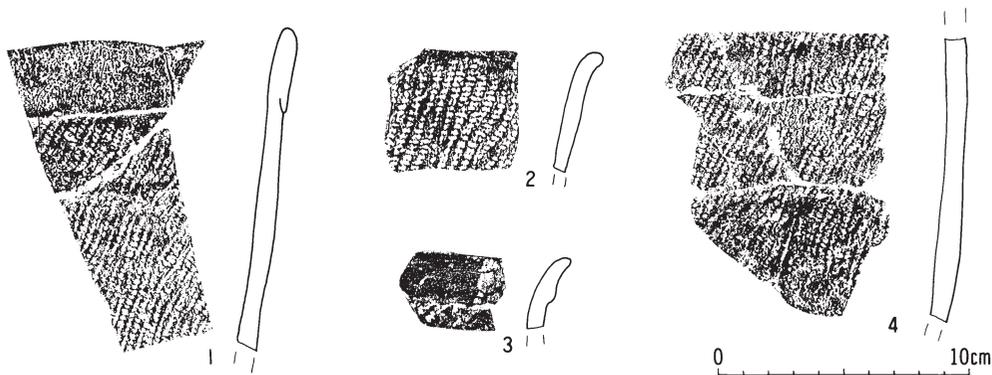


■ 炭化物



- 第1号土坑
- |      |         |          |                           |
|------|---------|----------|---------------------------|
| 第1層  | 暗褐色土    | 10YR 3/3 | ローム粒少量混入。炭化物粒・焼土微量混入。     |
| 第2層  | 黒褐色土    | 10YR 2/2 | ローム粒・炭化物粒少量混入。焼土微量混入。     |
| 第3層  | にぶい黄褐色土 | 10YR 4/3 | ローム粒・炭化物粒少量混入。焼土微量混入。     |
| 第4層  | にぶい黄褐色土 | 10YR 4/3 | ローム粒中量混入。炭化物粒少量混入。焼土微量混入。 |
| 第5層  | 褐色土     | 10YR 4/4 | ローム中量混入。炭化物粒少量混入。         |
| 第6層  | 暗褐色土    | 10YR 3/4 | ローム粒少量混入。炭化物粒微量混入。        |
| 第7層  | 褐色土     | 10YR 4/4 | ローム中量混入。炭化物粒微量混入。         |
| 第8層  | 褐色土     | 10YR 4/4 | ロームを中心とした層。炭化物微量混入。       |
| 第9層  | 褐色土     | 10YR 4/4 | ロームを中心とした層。               |
| 第10層 | 褐色土     | 10YR 4/4 | ロームを中心とした層。               |
| 第11層 | 褐色土     | 10YR 4/6 | ローム少量混入。炭化物微量混入。          |
| 第12層 | 褐色土     | 10YR 4/4 | ローム層。炭化物微量混入。焼土微量混入。      |
| 第13層 | 褐色土     | 10YR 4/6 | ローム中量混入。                  |
| 第14層 | 褐色土     | 10YR 4/6 | ローム多量混入。炭化物粒微量混入。         |
| 第15層 | 褐色土     | 10YR 4/4 | ローム層。崩落？。                 |
| 第16層 | 褐色土     | 10YR 4/4 | 15層と類似しているが非常にろい。崩落？。     |

第31図 第1号土坑



第32図 第1号土坑出土土器

### 第2号土坑 (第33～34図)

[位置] H-72グリッドに位置する。

[重複] 重複は認められないが、北側に第1号土坑、南西側に第5号土坑が位置している。

[平面形・規模] 開口部は、不整な円形を呈し、底面もやや角張った不正な円形を呈する。断面形は、底面が広がるフラスコ状を呈するが、中位のくびれ部分がほぼ垂直に構築されている。開口部では直径約150cm、底面では直径約210cm、である。深さは約190cmである。

[堆積土] 遺構上部の不明瞭な部分も含めて、23層に分層できた。土壌中の上部3分の2程までは、暗褐色土及び褐色土を主体とした堆積土で、ロームを粒状またはブロックで含んでいる。下部の30cm～40cm程はロームの再堆積層で、一部黒褐色土の層が確認できた。下部のローム層を除いて、全体に炭化物粒の混入が認められる。堆積土の全体にしまりが認められた。

上部は不明瞭であるが、下部は堆積土の状態から人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 土坑の中位の第9層または第12層中より小礫が出土している。また、堆積土上部より土器片が少量出土しているが、本土坑に伴う可能性は少ない。

[その他] 第1号土坑と同様に、確認面上部の遺物包含層の存在から、縄文時代中期頃の構築と考えられるが、断定し得ない。

### 第3号土坑 (第35～37図)

[位置] H-74グリッドに位置する。

[重複] 第7号土坑と重複しており、本土坑が新しい。

[平面形・規模] 開口部及び底面とも緩い楕円形を呈する。断面形では、底面が広がるフラスコ状を呈するが、中位以下まではほぼ垂直で、底面近くでやや膨らむ特異な形状である。

開口部では、長軸180cm、短軸140cm、底面では長軸210cm、短軸195cmで、深さは約220cmである。

[堆積土] 確認時の平面形と実際の遺構の位置が若干ずれたことから、良好な堆積状況は把握し得なかった。壁側に寄ったが、23層に分層できた。上部は、黒褐色土及び暗褐色土を主体とし、炭化物が多く混入している。中位以下は明褐色土を主体とし、ロームの混入が多く認められる。下部のフラスコ状を呈する部分は、ローム主体の堆積土で全体にしまりに欠ける。最下層はロームを含む黒褐色土が堆積している。

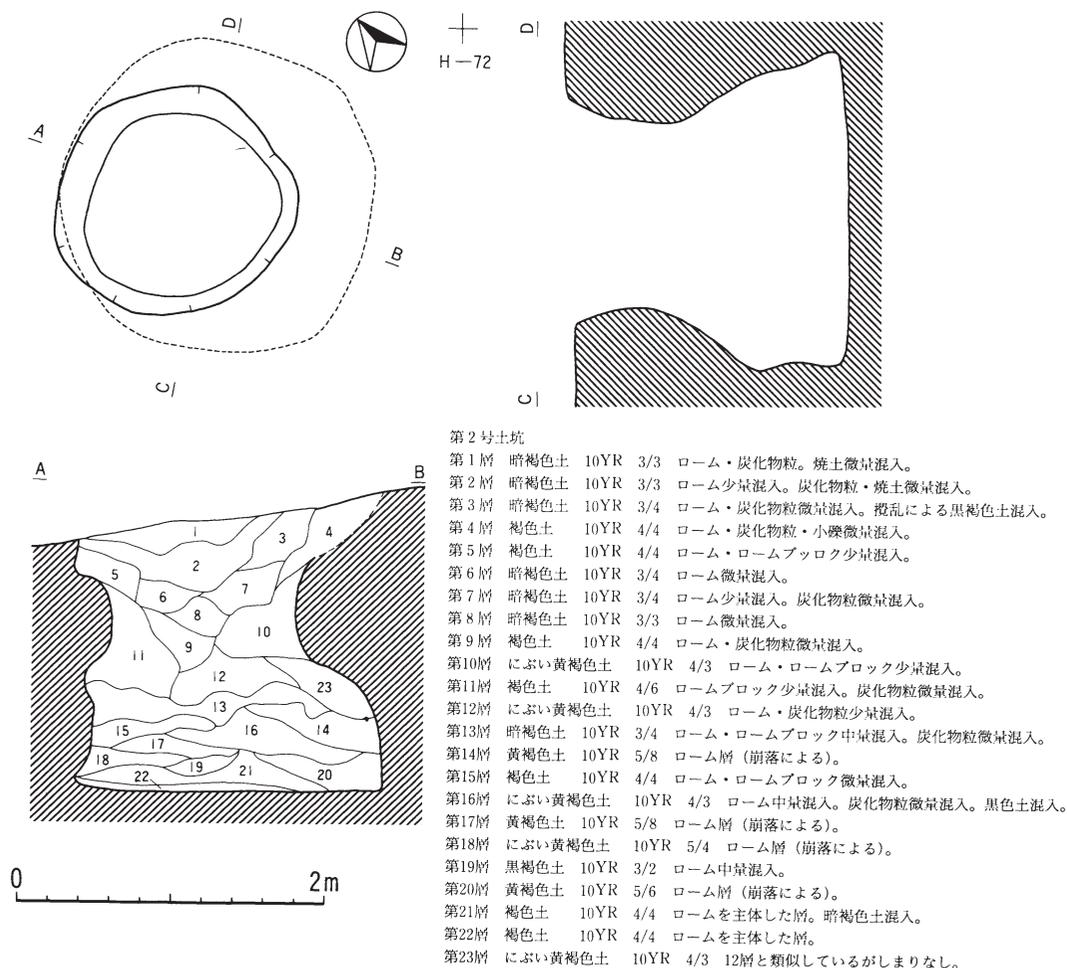
底面直上に黒褐色土が若干堆積していることから、構築後、ある程度の期間放置された可能性も考えられる。ただ、下部の堆積土が、混入物の少ないほぼ地山そのもののロームを主体としていることから埋め戻されたものと考えられる。また中位に多量の炭化物が堆積しており、遺物もほぼ、この位置から出土している。最上部は不明であるが、人為的な堆積と考えたい。

[出土遺物] 土坑中位に炭化物を多く含む層が存在し、この上下から土器片及び礫が出土している。また、ほぼ同レベルから小型の土偶が出土している。

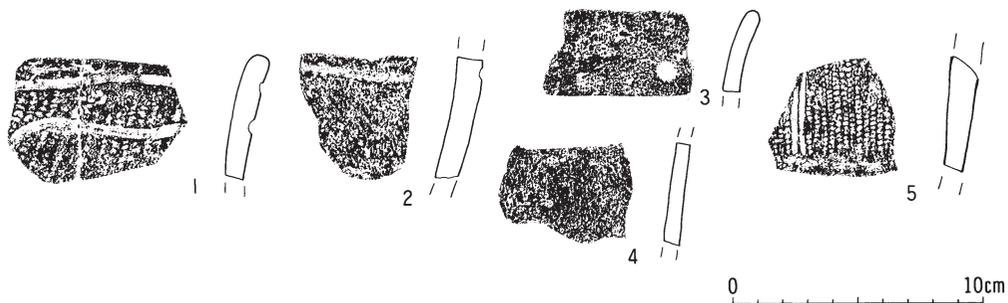
[その他] 確認面上に遺物包含層が認められたことや出土遺物から、本土坑の構築時期は縄文時代中期と考えられる。

覆土中から出土した炭化木片は、樹種同定の結果「クリ」及び「エノキ」と報告されている。

(第IV章参照。)



第33図 第2号土坑



第34図 第2号土坑出土土器

#### 第7号土坑 (第35図)

[位置] H-74グリッドに位置する。

[重複] 第3号土坑と重複しており、本土坑が古い。

[平面形・規模] 北西側の半分を第3号土坑により切られており、全体形は不明である。残存部は、開口部で南北110cm、底面で100cm、深さは、70cmである。壁は、ほぼ垂直で、底面は若干の起伏が認められるが、全体に平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。暗褐色土を主体としており、ローム粒および炭化物粒が混入している。中位以下はローム粒の混入が多く、底面よりは暗褐色土とロームとの混合土である。

[出土遺物] 覆土上部から土器片が数片出土したが、流れ込みと考えられる。

[その他] 本土坑の構築時期は、重複している土坑の時期から、縄文時代中期またはそれ以前と考えられる。

#### 第4号土坑 (第38・39図)

[位置] H-73グリッドほかに位置する。

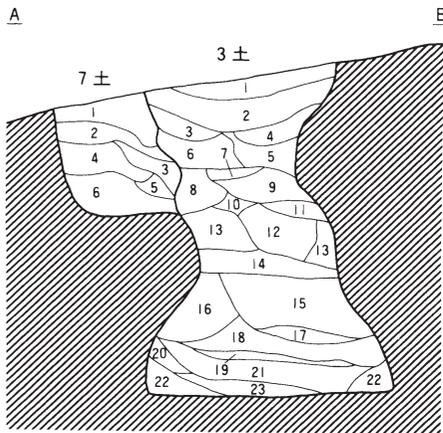
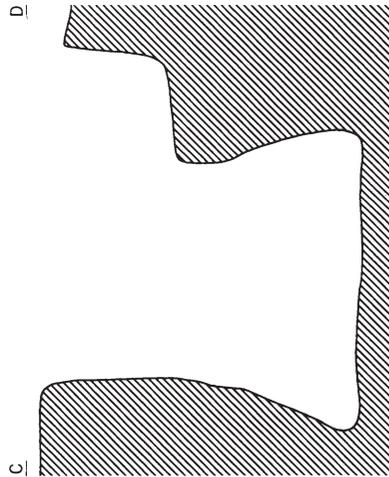
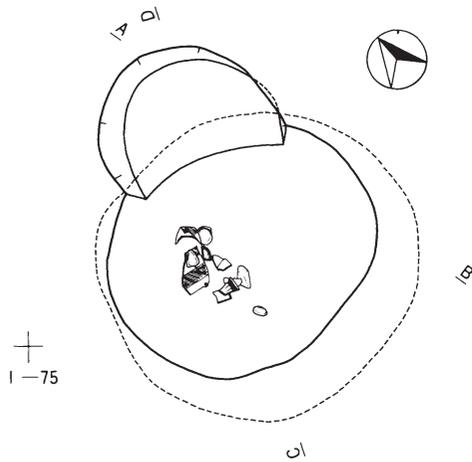
[重複] 重複は認められない。

[平面形・規模] 木根等による攪乱で、特に北東側の形状は不明瞭である。全体に不整な楕円形を呈する。推定長軸約160cm、短軸140cmで、深さは約10~40cmである。全体にスリ鉢状を呈し、底面は傾斜している。

[堆積土] 9層に分層できた。上部は暗褐色土を主体として、下部はローム主体の堆積である。全体に炭化物粒を混入しており、しまりが認められる。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

[その他] 構築時期は不明であるが、他の土坑同様、縄文時代の可能性が高い。

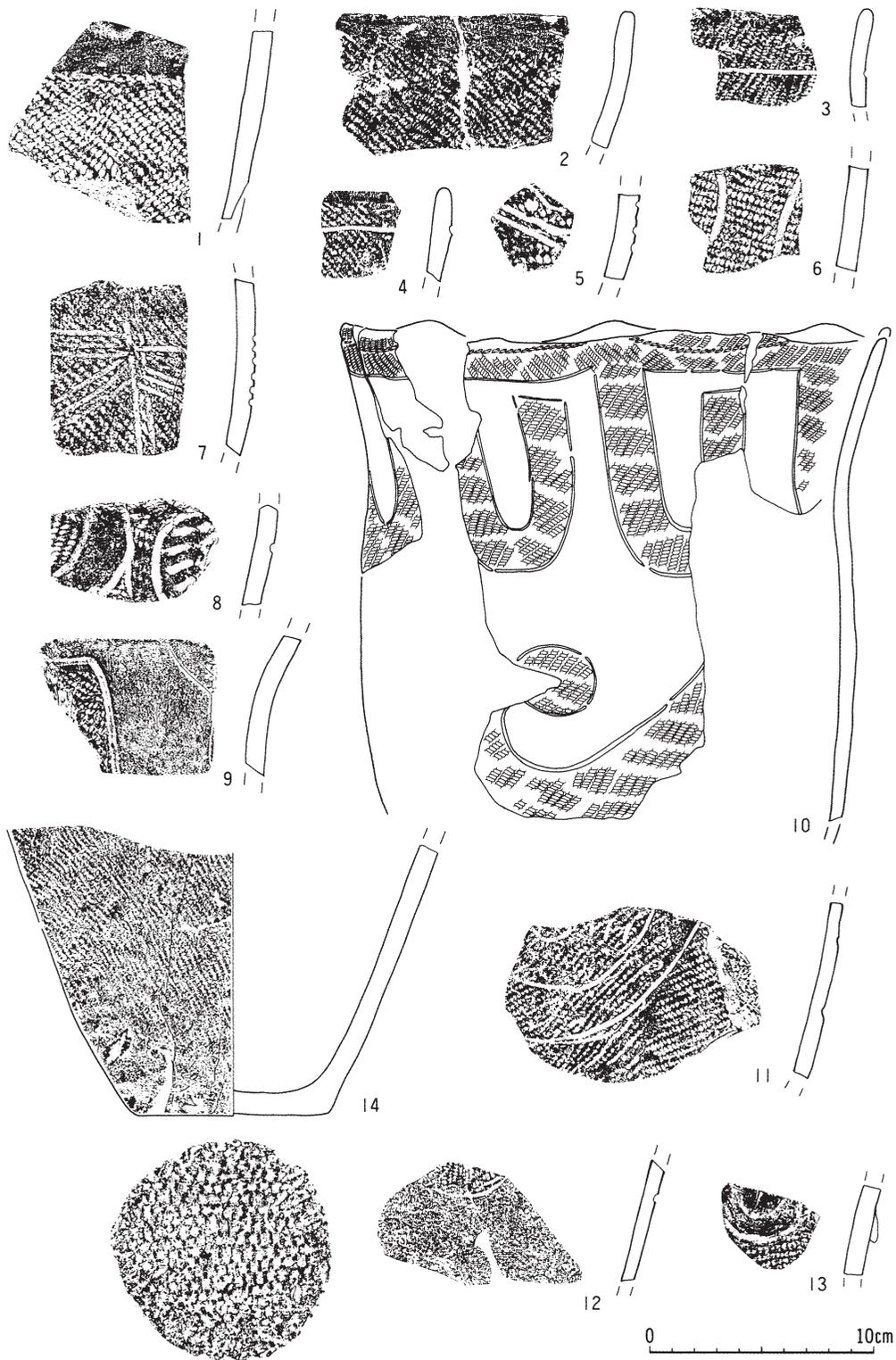


- 第7号土坑
- 第1層 暗褐色土 10YR 3/3  
ローム少量混入。炭化物少量混入。
  - 第2層 暗褐色土 10YR 3/4  
ローム少量混入。炭化物粒少量混入。
  - 第3層 褐色土 10YR 4/6  
ローム多量混入。炭化物微量混入。
  - 第4層 暗褐色土 10YR 3/3  
ローム多量混入。炭化物粒少量混入。
  - 第5層 褐色土 10YR 4/4  
粘土質のロームが全体的に多量混入。黒褐色土がまだらに混入。
  - 第6層 暗褐色土 10YR 3/3  
ローム粒多量混入。粘土質のローム多量混入。炭化物少量混入。

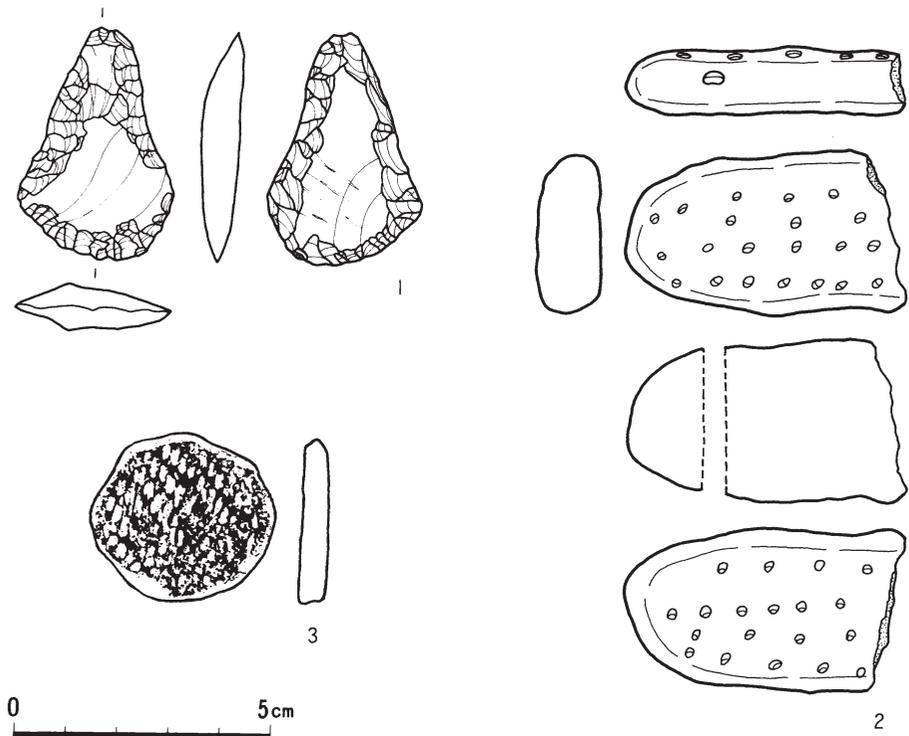


- 第3号土坑
- 第1層 黒褐色土 10YR 2/3 ローム・炭化物少量混入。焼土混入。
  - 第2層 黒褐色土 10YR 2/3 ローム・炭化物多量混入。焼土混入。
  - 第3層 黒褐色土 10YR 3/2 ローム多量混入。炭化物粒微量混入。
  - 第4層 暗褐色土 10YR 3/3 ローム・粘土質のローム多量混入。炭化物少量混入。
  - 第5層 暗褐色土 10YR 3/3 ローム多量混入。炭化物多量混入。
  - 第6層 暗褐色土 10YR 3/3 ローム多量混入。炭化物多量混入。
  - 第7層 暗褐色土 10YR 3/3 ローム多量混入。
  - 第8層 暗褐色土 10YR 3/3 ローム多量混入。粘土質ローム・炭化物少量混入。
  - 第9層 暗褐色土 10YR 3/3 ローム多量混入。炭化物粒多量混入。
  - 第10層 褐色土 10YR 4/4 ローム・炭化物粒少量混入。暗褐色土がまだらに混入。
  - 第11層 褐色土 10YR 4/4 ローム多量混入。暗褐色土がまだらに混入。
  - 第12層 明褐色土 7.5YR 5/8 暗褐色土がまだらに混入。
  - 第13層 明褐色土 7.5YR 5/8 炭化物粒微量混入。暗褐色土少量混入。
  - 第14層 明褐色土 7.5YR 5/8 炭化物微量混入。
  - 第15層 明褐色土 7.5YR 5/6 ローム少量混入。
  - 第16層 褐色土 7.5YR 4/6 粘土質のローム多量混入。
  - 第17層 明褐色土 7.5YR 5/6 粘土質のロームがまだらに多量混入。
  - 第18層 明褐色土 7.5YR 5/6 橙色土6/8(7.5YR)が少量混入。暗褐色土微量混入。
  - 第19層 褐色土 7.5YR 4/6 粘土質のローム多量混入。橙色土粒少量混入。
  - 第20層 明褐色土 7.5YR 5/6 しまり弱く粘性あり。
  - 第21層 明褐色土 7.5YR 5/6 橙色土多量混入。暗褐色土少量混入。
  - 第22層 明褐色土 7.5YR 5/8 橙色土少量混入。暗褐色土微量混入。
  - 第23層 黒褐色土 10YR 2/2 粘土質のローム多量混入。明褐色土少量混入。

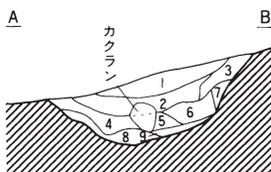
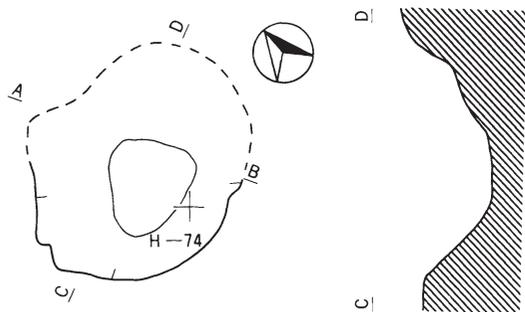
第35図 第3・7号土坑



第36图 第3号土坑出土土器



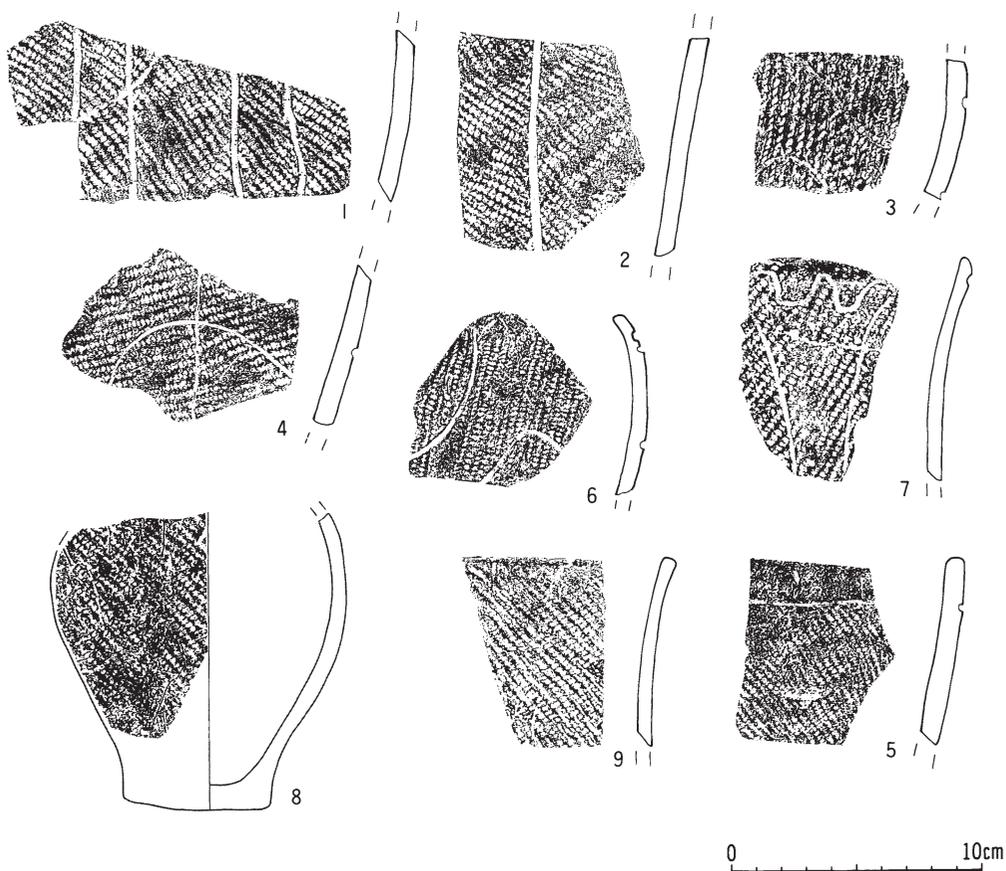
第37図 第3号土坑出土遺物



第4号土坑

第1層	暗褐色土	10YR	3/4	ローム微量混入。炭化物微量混入。細礫混入。
第2層	暗褐色土	10YR	3/3	ローム微量混入。炭化物微量混入。
第3層	褐色土	10YR	4/4	ローム少量混入。炭化物微量混入。
第4層	にぶい黄褐色土	10YR	4/3	ローム少量混入。
第5層	褐色土	10YR	4/6	ローム少量混入。炭化物微量混入。
第6層	褐色土	10YR	4/4	ローム少量混入。
第7層	黄褐色土	10YR	5/6	ロームを主体とした層。炭化物微量混入。
第8層	黄褐色土	10YR	5/6	7層と類似しているがしまりあり。
第9層	褐色土	10YR	4/6	ロームを主体とした層。炭化物微量混入。

第38図 第4号土坑



第39図 第4号土坑出土遺物

第5号土坑 (第40図)

[位置] G・II-72・73グリッドに位置する。

[重複] 重複は認められない。ただ、本土坑上部には、後世の風倒木による黄褐色ロームが堆積していた。

[平面形・規模] 風倒木痕により開口部の形状は不明瞭であるが、開口部は楕円形を、底面はほぼ円形を呈する。壁は全体に北西側(斜面)に向かい傾斜している。底面は平坦である。開口部では長軸235cm、短軸135cmで、底面は長軸155cm、短軸145cmである。深さは、約160cmである。

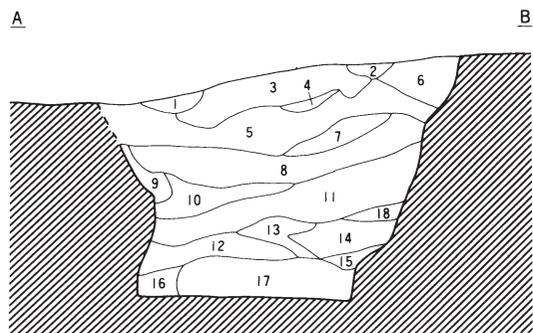
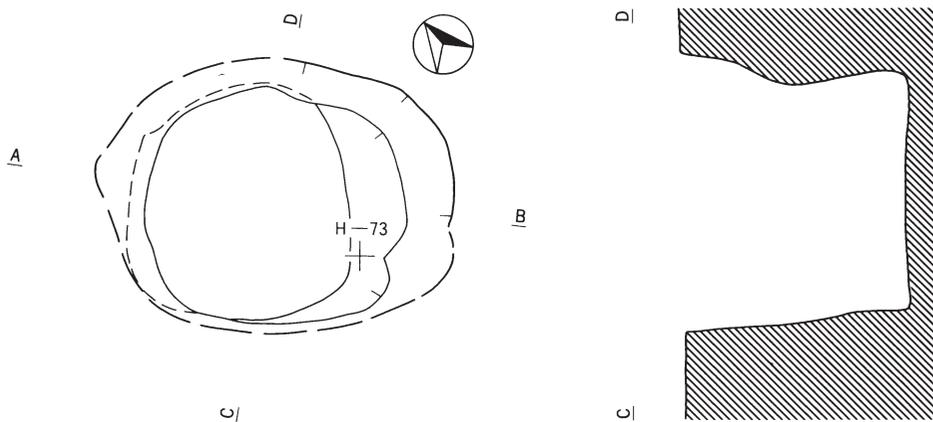
[堆積土] 18層に分層できた。上部は褐色土を主体としており、下部はロームを主体としている。全体にしまりが認められる。上部には炭化物粒の混入が認められ、中位以下には小礫・細礫の混入する層が多い。これらの礫が多量に混入している層も数層認めらる。また、最下層

には小礫及び細砂が多量に混入していた。

堆積状態から人為的堆積と考えられる。

[出土遺物] 堆積土の上部から土器片が少量出土しているが、本遺構に伴う可能性は低い。

[その他] 確認面上部の風倒木及び本遺構とも、縄文時代の所産と考えられる。



- 第5号土坑
- 第1層 黒褐色土 10YR 2/3  
ローム粒・焼土少量混入。炭化物粒微量混入。
  - 第2層 暗褐色土 10YR 3/4  
ローム粒少量混入。炭化物粒微量混入。
  - 第3層 褐色土 10YR 4/6  
ローム粒・炭化物粒多量混入。焼土粒ごく微量混入。
  - 第4層 褐色土 10YR 4/6  
ローム粒中量混入。焼土粒ごく微量混入。炭化物粒微量混入。
  - 第5層 暗褐色土 10YR 3/4  
ロームブロック・炭化物粒中量混入。
  - 第6層 褐色土 10YR 4/6  
ローム粒・炭化物粒多量混入。
  - 第7層 褐色土 10YR 4/6  
ローム粒・炭化物粒少量混入
  - 第8層 褐色土 10YR 4/4  
ロームブロック・炭化物多量混入。
  - 第9層 黄褐色土 10YR 5/8  
褐色土少量混入。
  - 第10層 黄褐色土 10YR 5/6  
ローム粒多量混入。炭化物少量混入。
  - 第11層 黄褐色土 10YR 5/8  
ロームブロック多量混入。小礫中量混入。
  - 第12層 黄褐色土 10YR 5/8  
ロームブロック中量混入。小礫多量混入。
  - 第13層 褐色土 10YR 4/6  
ローム粒多量混入。炭化物粒微量混入。
  - 第14層 黄褐色土 10YR 5/6  
小礫少量混入。
  - 第15層 黄褐色土 10YR 5/8  
褐色土少量混入
  - 第16層 黄褐色土 10YR 5/8  
ロームブロック少量混入。小礫中量混入。

- 第17層 黄褐色土 10YR 5/8  
ロームと小礫を多量に含む層が混じってる 暗褐色土中量混入。
- 第18層 明黄褐色土10YR 6/8  
小礫・細砂が多量混入。

第40図 第5号土坑

第6号土坑 (第41~43図)

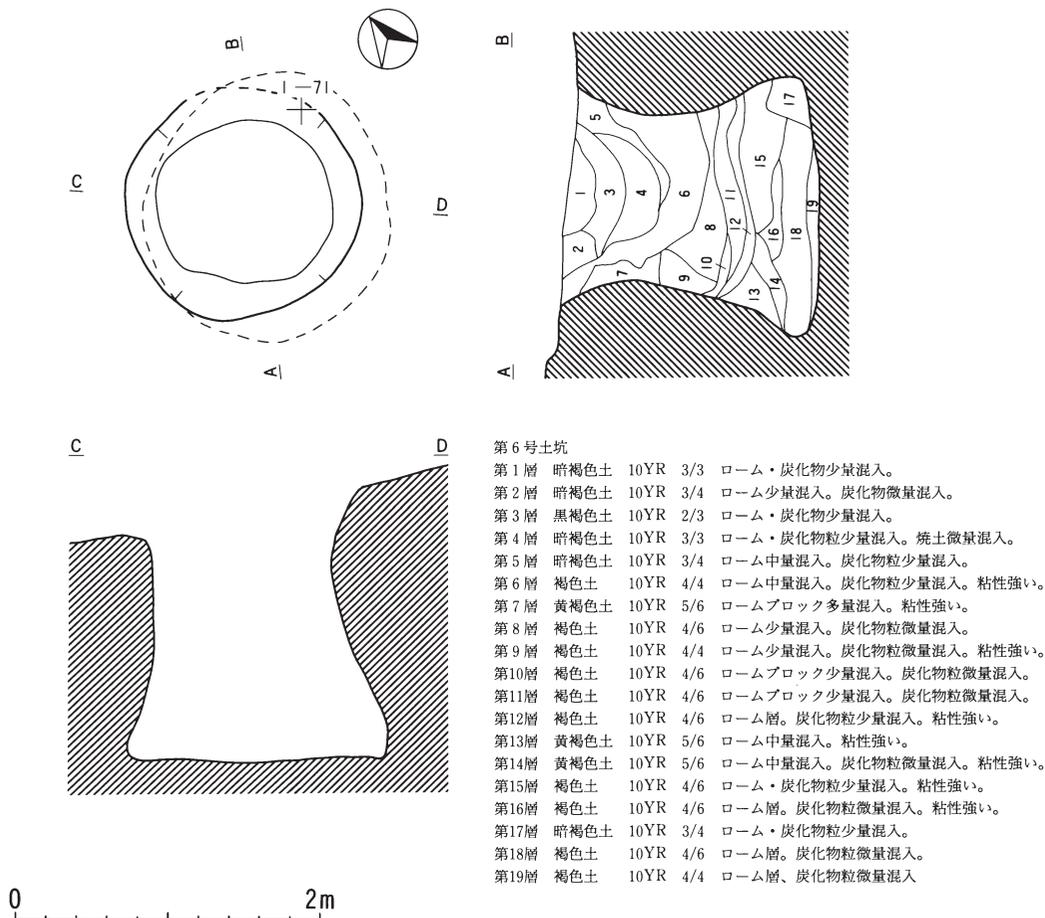
[位置] I-71グリッドほかに位置する。

[重複] 重複は認められない。

[平面形・規模] 開口部の一部が抜根により攪乱を受けており、一部不明瞭である。平面形は、開口部及び底面とも円形である。断面形状は、内部が広がるフラスコ状を呈するが、開口部及び底面では規模に大きな差は認められず、くびれ部分も非常に緩く長い。

開口部では直径約150cm、底面で170cm~180cmで、深さは約170cmである。

[堆積土] 19層に分層できた。上部は暗褐色土を主体としており、中位は褐色土を、下部はロームを主体としている。ほぼ、全層にわたり炭化物微粒を含んでいるが、特に多量に混入して

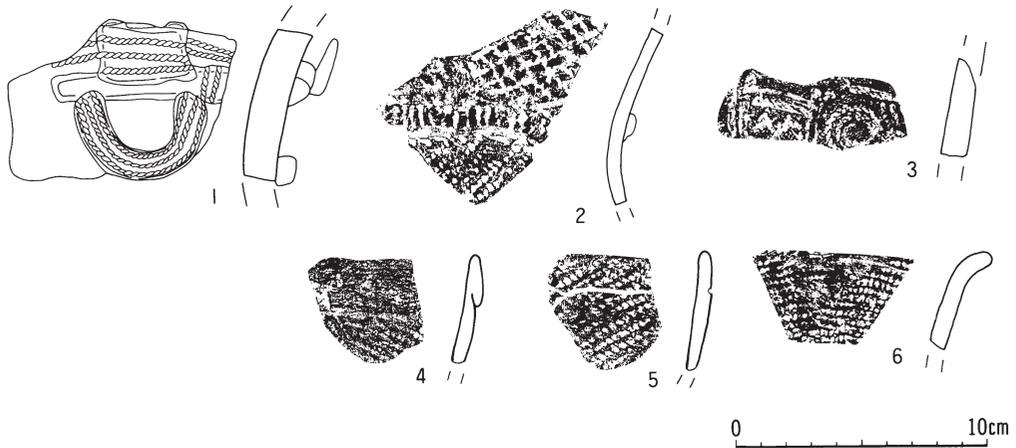


第41図 第6号土坑

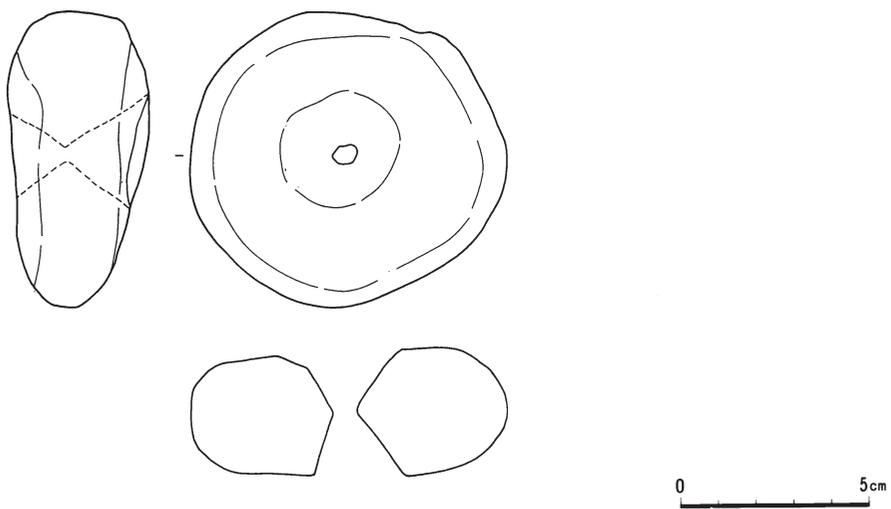
いる層は認められない。上部の堆積土を除いて全体にしまりに欠ける。

[出土遺物] 上部から少量の土器片が出土しているが、本遺構に伴う可能性は低い。

[その他] 確認面上部の遺物包含層の存在から、縄文時代中期、またはそれ以前の所産と考えられる。



第42図 第6号土坑出土土器



第43図 第6号土坑出土石製品

### 第8号土坑 (第44・45図)

[位置] H-55・56グリッドに位置している。

[重複] 重複は認められない。

[平面形・規模] 南北にやや長い楕円形を呈する。断面形状は、開口部直下で若干くびれる部分が認められるが、ほぼ円筒形で南側でやや内湾している。

開口部では、長軸 205cm、短軸 185cmで、底面では、長軸 190cm、短軸 180cmである。深さは、約 170cmである。

壁は、ほぼ、垂直であるが、壁面に凹凸が認められる。底面は平坦である。

[堆積土] 29層に分層できた。このほかに5層のロームブロックの層が確認できた。黒褐色土及び暗褐色土を主体としており、ローム粒及び炭化物粒を全体に混入している。底面近くは第22層中には焼土の混入が認められた。底面及び土坑中位の壁寄りには、ロームブロックが堆積している。人為的堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 土坑覆土中からの縄文時代中期末の土器（最花式期）が多く出土している。

[その他] 底面近くから出土した炭化木片の年代測定では、4550± 110 (B.P.) 年との結果が報告されている。(第IV章参照。)

出土遺物及び確認面上部に遺物の包含層が形成されていたことから、本土坑の構築時期は、縄文時代中期またはそれ以前と考えられる。

### 第9号土坑 (第46～48図)

[位置] H・I-56グリッドに位置する。

[重複] 重複は認められない。

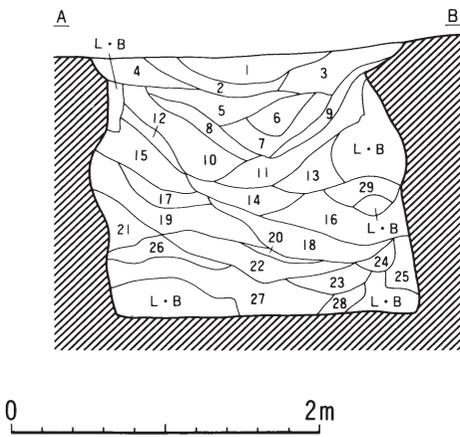
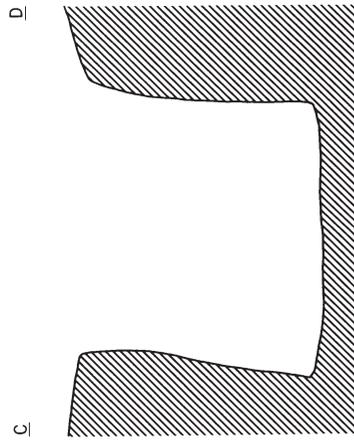
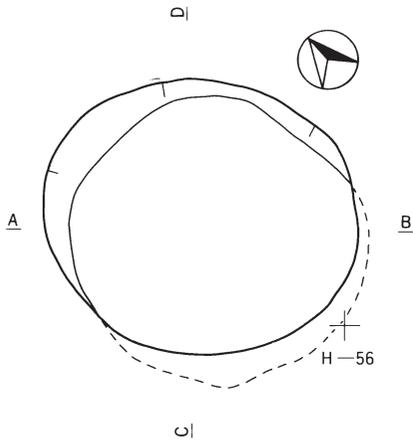
[平面形・規模] 南北に長い長楕円形を呈する。確認面上から大型の礫が数点出土していることから、後述する配石遺構に含まれるものかもしれない。

本土坑は、全体に緩やかに傾斜する落込み状のくぼみで、壁も明瞭に確認できなかった。開口部では、長軸 205cm、短軸 160cmで、底面の最下部では、長軸95cm、短軸80cmである。深さは10cmで、中央の深い部分で約30cmである。

[堆積土] 7層に分層できた。ロームを主体とした堆積土で、上部は暗褐色土を主体としている。全体に炭化物粒が混入している。底面近くは、粘性が非常に強い。

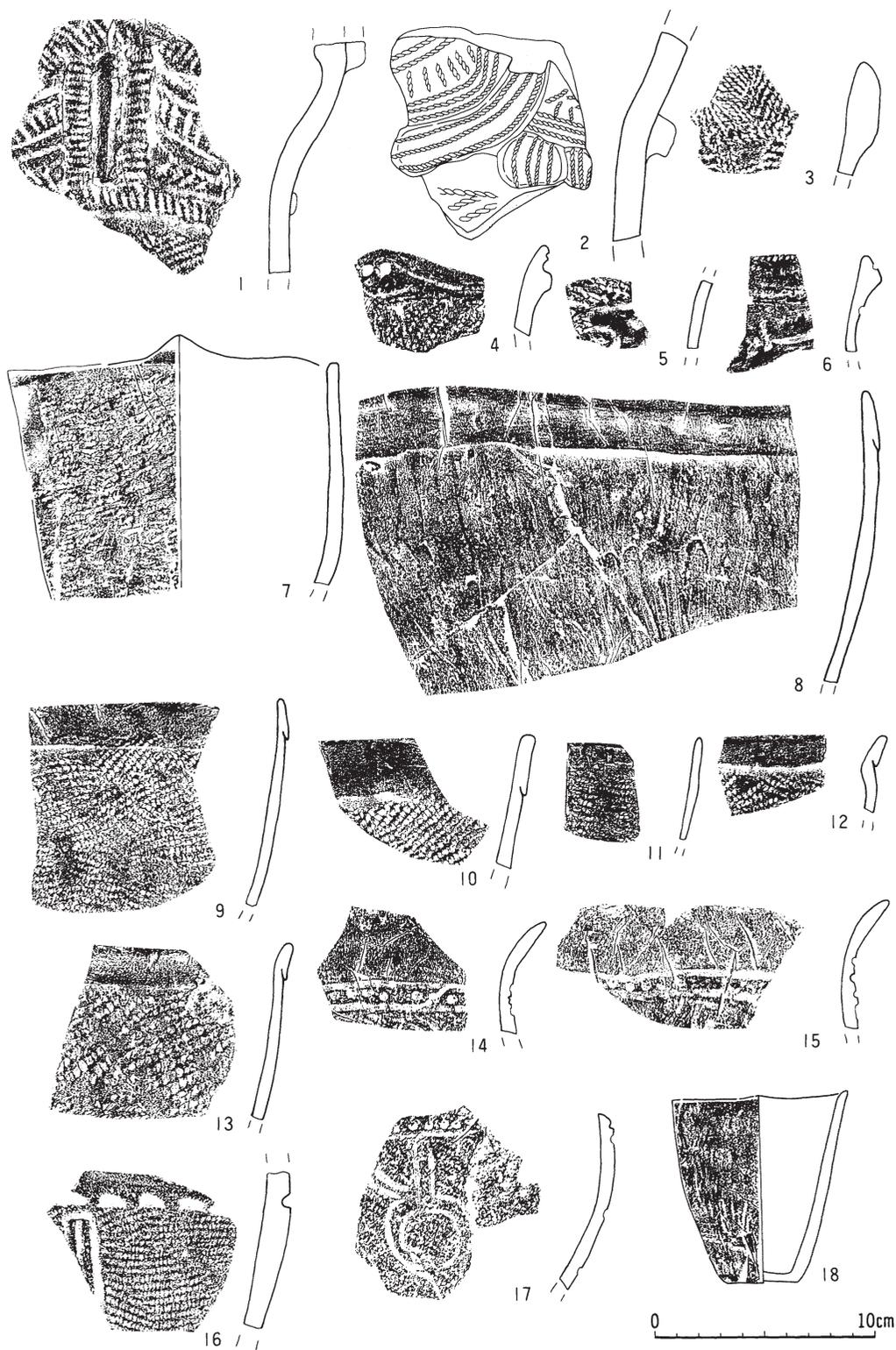
[出土遺物] 第1層上面（確認面上）から、大型の礫と、縄文時代中期後半の土器が数個体出土している。また、覆土中からも土器片が出土している。

[その他] 確認面の礫の出土状態から、配石を伴った遺構の可能性も考えられる。構築時期は、出土遺物から縄文時代中期後半期（最花式期）と考えられる。

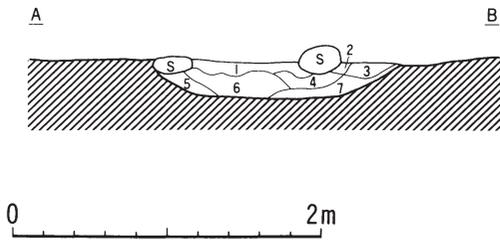
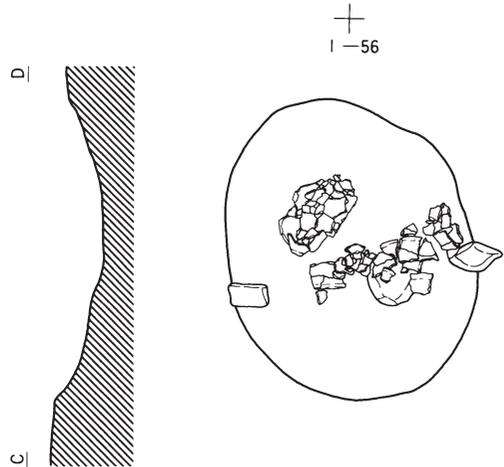
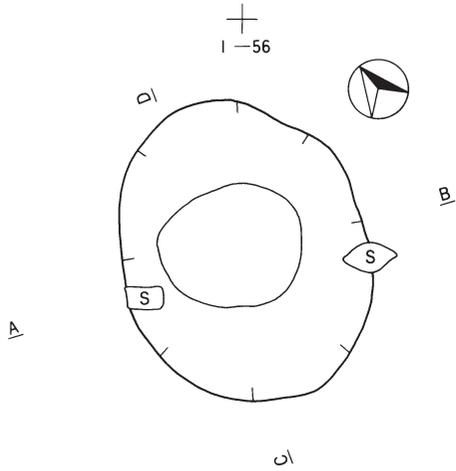


層	土質	色	湿度	炭化物	焼土	パミス	備考
第1層	暗褐色土	10YR	3/4	ローム少量混入。	炭化物粒・焼土・パミス微量混入混入。		
第2層	黒褐色土	10YR	2/3	ローム・炭化物粒・パミス微量混入。			
第3層	黒褐色土	10YR	3/2	ローム・炭化物粒微量混入。			
第4層	黒褐色土	10YR	2/2	ローム・炭化物粒微量混入。			
第5層	黒褐色土	10YR	3/1	ローム・炭化物粒少量混入。	パミス微量混入。		
第6層	黒褐色土	10YR	3/2	ローム少量混入。	炭化物粒微量混入。		
第7層	黒褐色土	10YR	2/3	ローム少量混入。	炭化物粒中量混入。		
第8層	暗褐色土	10YR	3/4	ローム・炭化物粒微量混入。			
第9層	暗褐色土	10YR	3/4	ローム中量混入。	炭化物粒微量混入。		
第10層	暗褐色土	10YR	3/3	ローム・炭化物粒微量混入。			
第11層	にぶい黄褐色土	10YR	3/4	ローム中量混入。			
第12層	褐色土	10YR	4/4	ローム中量混入。	パミス微量混入。		
第13層	褐色土	10YR	4/4	ローム中量混入。			
第14層	にぶい黄褐色土	10YR	4/3	ローム中量混入。	炭化物粒微量混入。		
第15層	褐色土	10YR	4/6	ローム多量混入。	炭化物粒微量混入。		
第16層	暗褐色土	10YR	3/4	ローム中量混入。	炭化物粒微量混入。		
第17層	にぶい黄褐色土	10YR	4/3	ローム少量混入。	ロームブロック微量混入。		
第18層	にぶい黄褐色土	10YR	4/3	ローム少量混入。	炭化物中量混入。		
第19層	暗褐色土	10YR	4/3	ローム・炭化物粒微量混入。			
第20層	褐色土	10YR	4/4	ローム中量混入。	炭化物粒少量混入。		
第21層	暗褐色土	10YR	3/3	ローム少量混入。	炭化物粒微量混入。		
第22層	褐色土	10YR	4/4	ローム微量混入。	炭化物粒・焼土少量混入。		
第23層	褐色土	10YR	4/4	ローム・炭化物粒微量混入。			
第24層	にぶい黄褐色土	10YR	4/3	ローム少量混入。	炭化物粒微量混入。		
第25層	暗褐色土	10YR	3/4	ローム少量混入。	炭化物粒中量混入。		
第26層	褐色土	10YR	4/4	ロームブロック中量混入。			
第27層	暗褐色土	10YR	3/4	ロームブロック多量混入。	炭化物粒微量混入。		
第28層	暗褐色土	10YR	3/3	ローム微量混入。			
第29層	褐色土	10YR	4/4	ロームブロック微量混入。			

第44図 第8号土坑



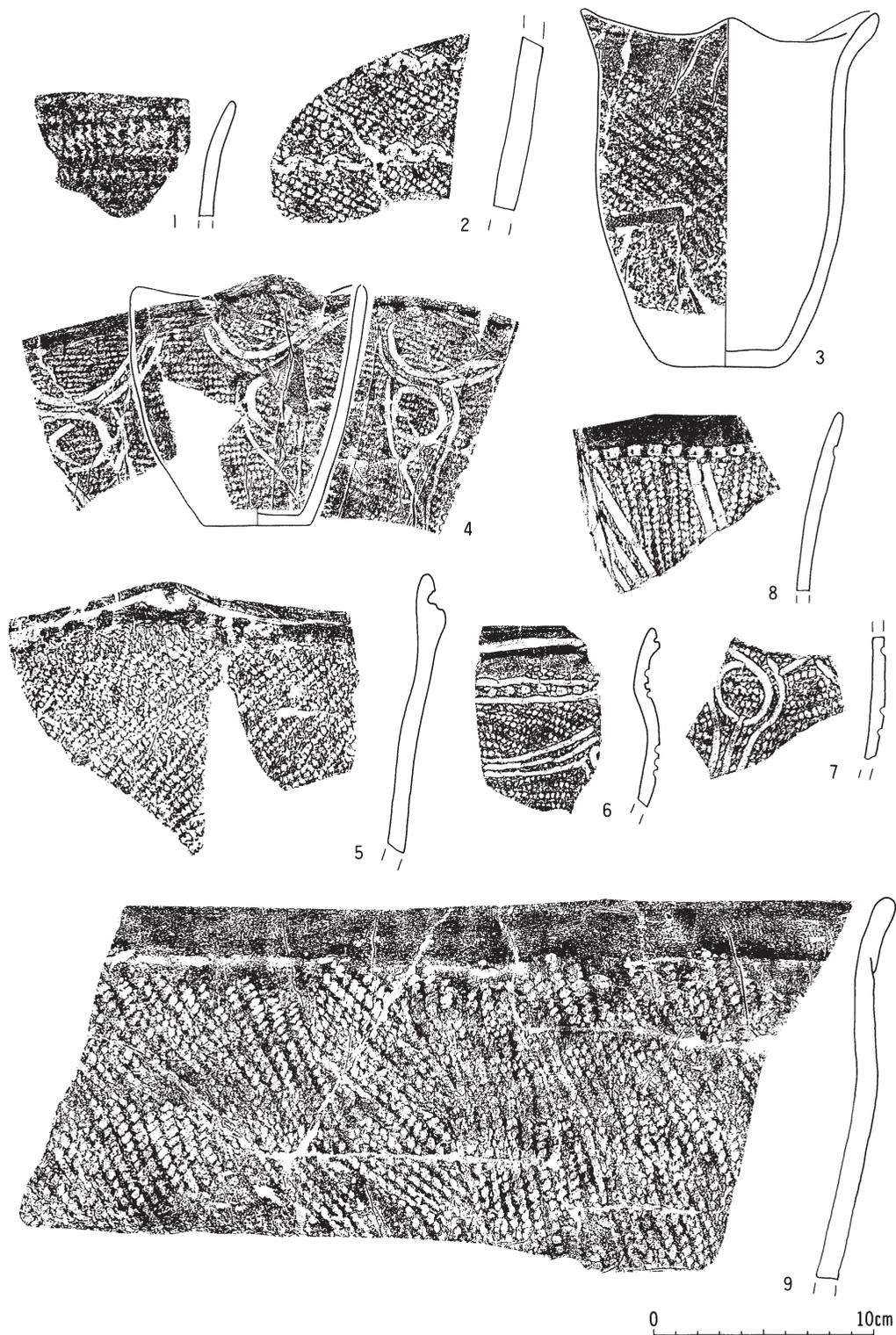
第45图 第8号土坑出土土器



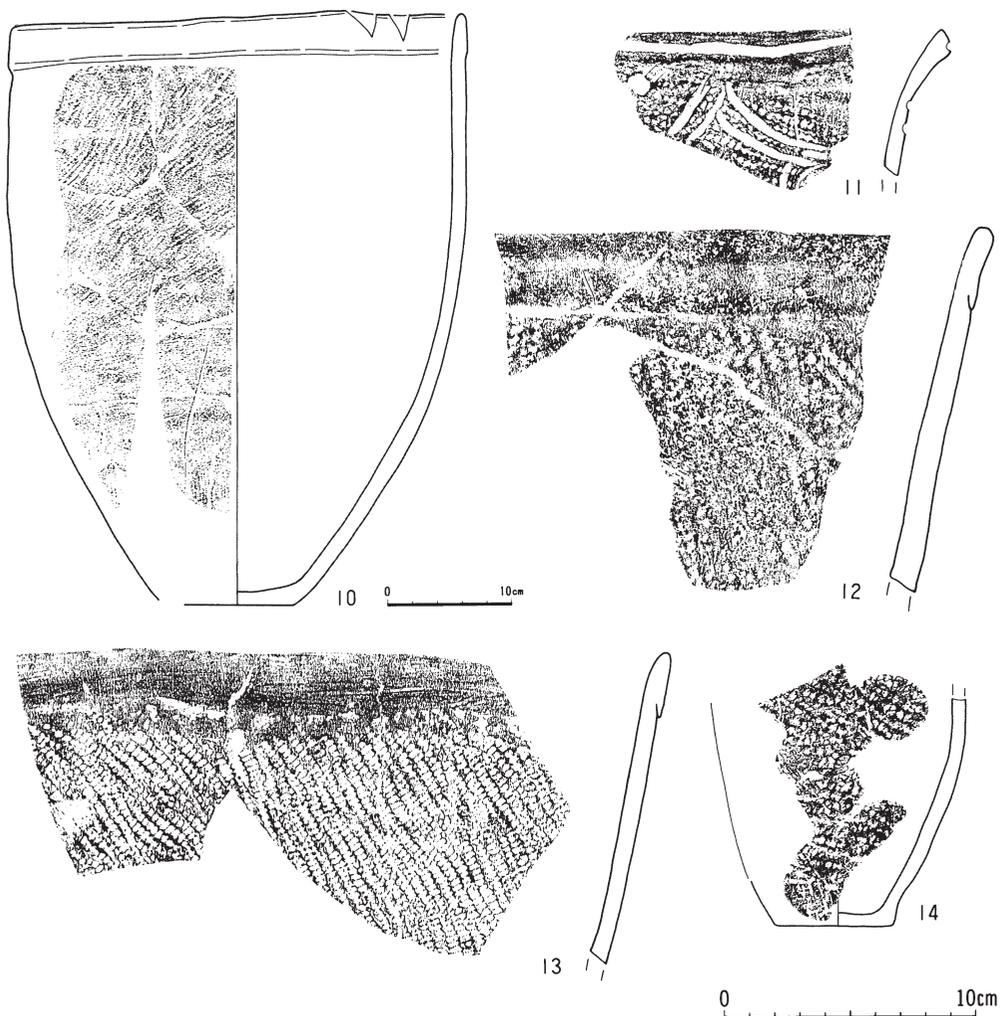
第9号土坑

- 第1層 黒褐色土 10YR 2/3  
ローム・炭化物粒混入。パミス少量混入。
- 第2層 暗褐色土 10YR 3/3  
ローム微量混入。粘性強い。
- 第3層 暗褐色土 10YR 3/3  
ローム少量混入。炭化物粒・パミス微量混入。
- 第4層 暗褐色土 10YR 3/4  
ローム中量混入。炭化物粒微量混入。パミス少量混入。粘性強い。
- 第5層 褐色土 10YR 4/6  
ローム層。炭化物粒微量混入。パミス少量混入。
- 第6層 褐色土 10YR 4/6  
ローム層。炭化物粒微量混入。パミス少量・暗褐色土多量混入。
- 第7層 褐色土 10YR 4/6  
ローム層。パミス・暗褐色土中量混入。粘性強い。

第46図 第9号土坑



第47图 第9号土坑出土土器—1



第48図 第9号土坑出土土器-2

第10号土坑 (第49~51図)

[位置] H-47・48グリッドに位置する。

[重複] 第5号住居跡と重複し、本土坑が新しいと考えるが、断定できない。

[平面形・規模] 開口部及び底面とも円形を呈する。当初、住居跡の一部と考えたため、上部の調査は詳細に行わなかった。このため、住居跡との関係は不明瞭な部分が多い。

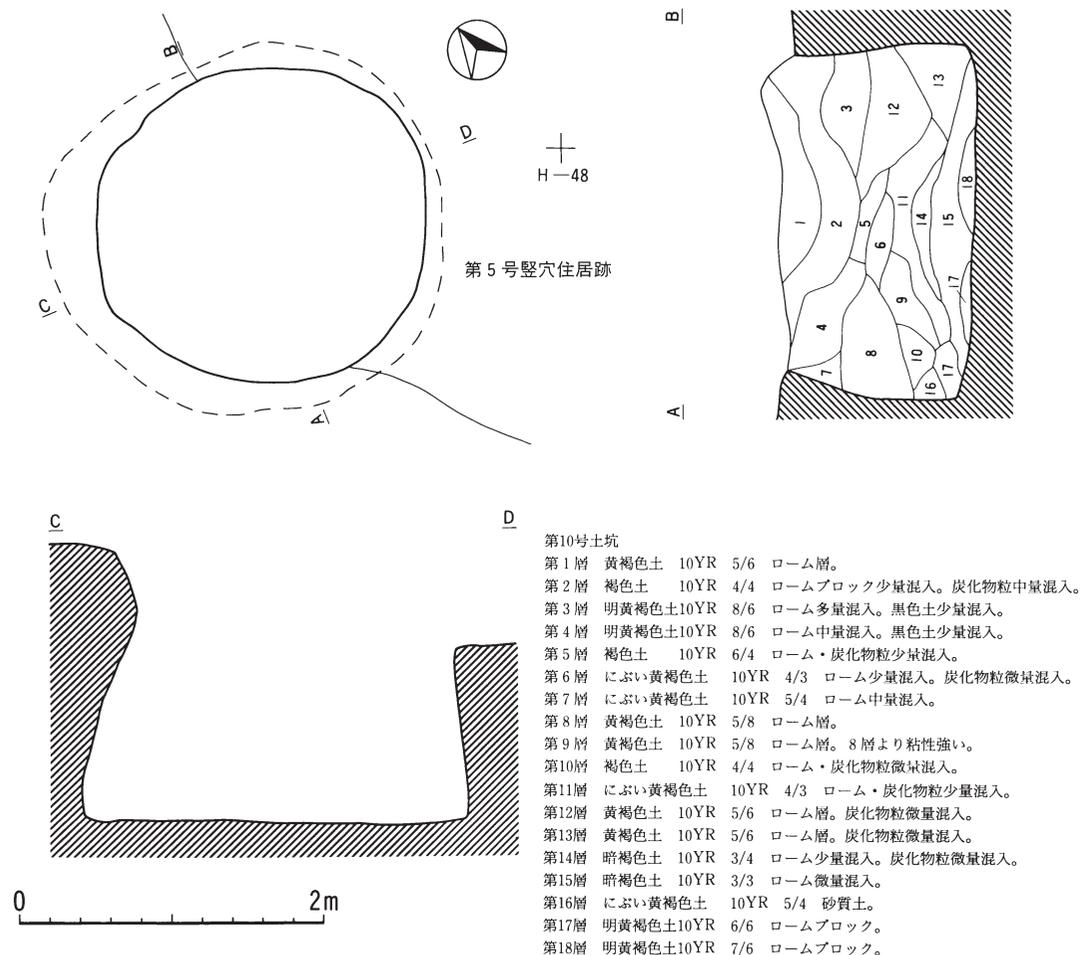
開口部では、直径約210cm、底面では、約250cmで西方向にやや長い。深さは、約180cmである。断面形状は、底面が開口部より広がるフラスコ状を呈する。壁面はやや粘性が認められる。底面は、壁際でやや湾曲するが、ほぼ平坦である。

[堆積土] 第5号住居跡の床面とほぼ同レベルからの確認であるが、18層に分層できた。ほとんどの層がローム主体の層で、褐色土及び炭化物粒が混入している。人為的堆積と考えられる。最上部の層は、住居跡の堆積土の一部とも考えられる。

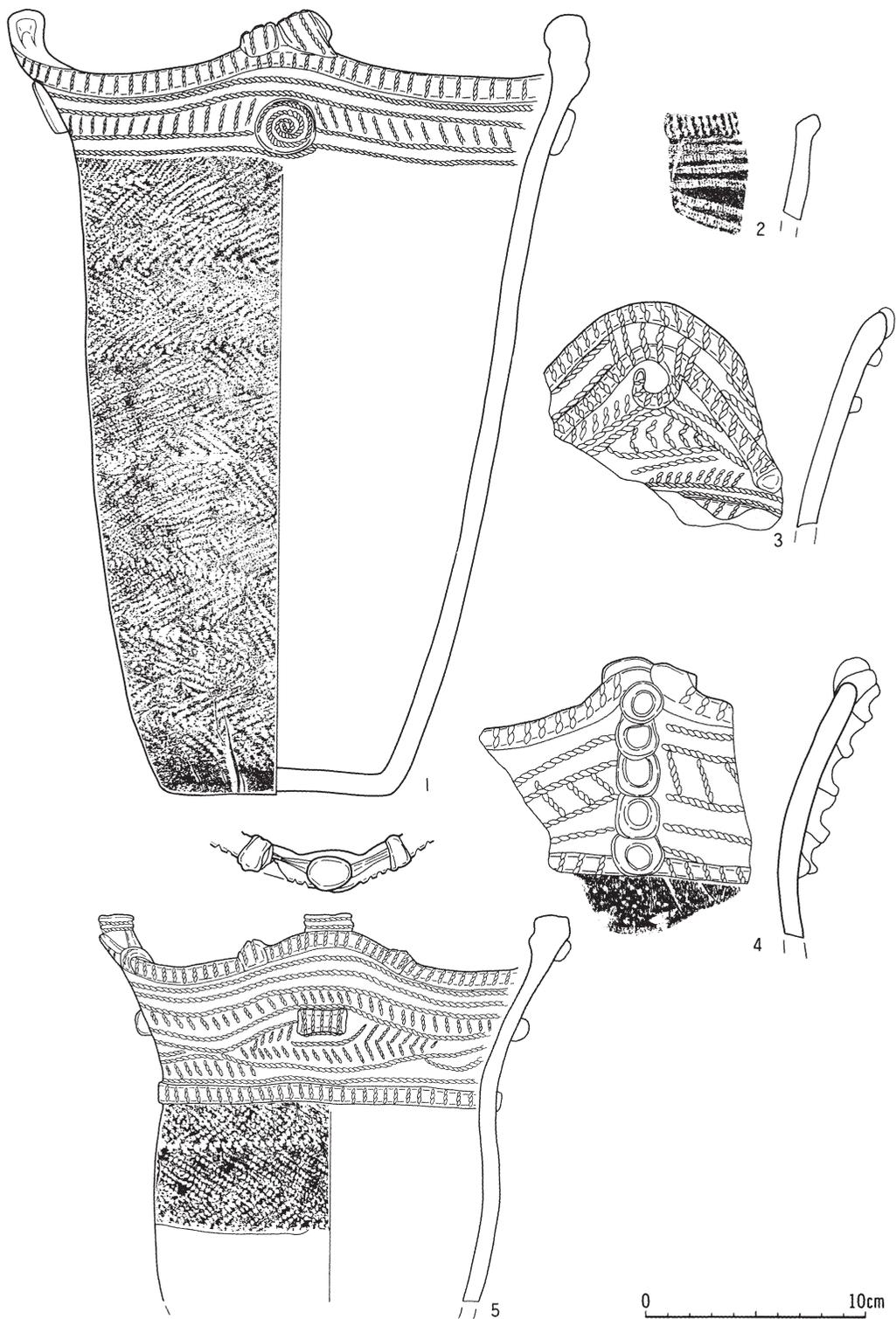
[出土遺物] 覆土上部から、縄文時代中期前半期（円筒上層a式）の土器が数個体出土している。

[その他] 出土した遺物は、本土坑が住居より新しい場合、上部に埋設したと考えられるが、本土坑の廃絶後に、住居跡の堆積土中の土器の流れ込みや、埋め戻し時に混入した可能性も考えられる。

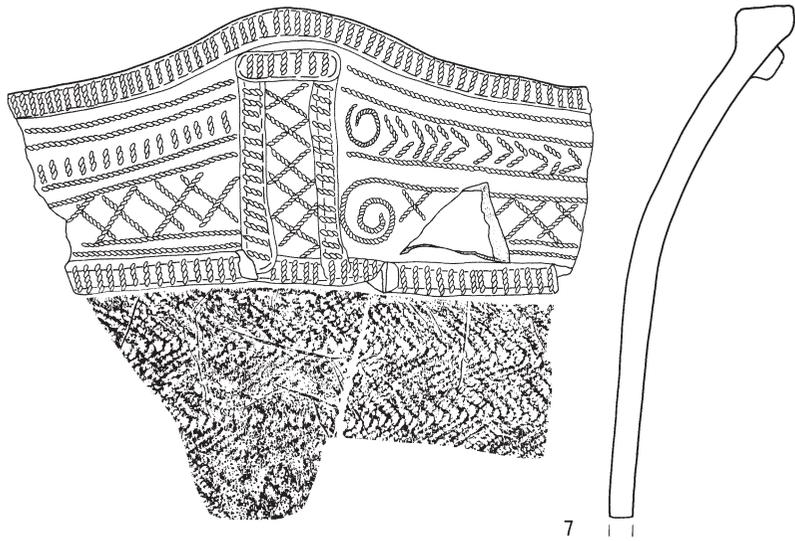
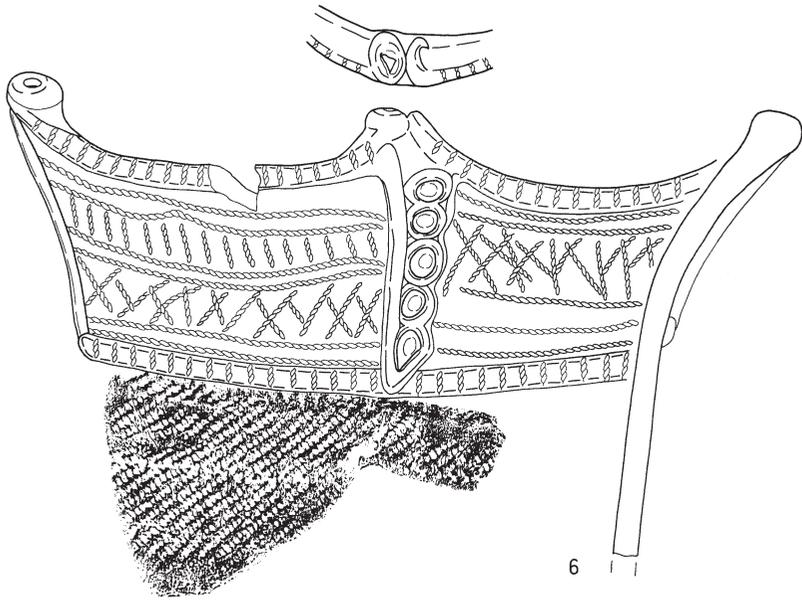
本土坑が古い場合には、住居跡に伴う遺物の堆積土中への沈下も考えられ、出土遺物が本遺構へ伴うかどうかは、断定し得ない。しかし、遺構上部の包含層等の存在から、ほぼ土器の時期と同時期の所産と考えたい。



第49図 第10号土坑



第50图 第10号土坑出土土器—1



0 10cm

第51图 第10号土坑出土土器—2

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第32図-1	1土	フ	口～胴	折り返し状口縁	斜縄文RL	IV群2類	259
-2	1土	フ	口縁	平口縁		IV群2類	261
-3	1土	フ	口縁	平口縁 折り返し状口縁		IV群2類	262
-4	1土	フ	胴部		縦位斜縄文RL	IV群2類	260
第34図-1	2土	フ	口縁	平口縁 沈線文		IV群2類	263
-2	2土	フ	胴部		斜縄文 沈線文	IV群2類	265
-3	2土	フ	口縁	平口縁 無文 補修孔		VI群	266
-4	2土	フ	胴部		斜縄文	VI群	264
-5	2土	フ	胴部		縦位縄文	VI群	267
第36図-1	3土	フ	口～胴	無文	斜縄文LR	IV群2類	268
-2	3土	フ	口縁	平口縁		IV群2類	269
-3	3土	フ	口縁	平口縁		IV群2類	277
-4	3土	フ	口縁	平口縁		IV群2類	278
-5	3土	フ	口縁	沈線文		IV群2類	276
-6	3土	フ	胴部		斜縄文RL	IV群2類	274
-7	3土	フ	胴部		斜縄文LR 沈線文	IV群2類	271
-8	3土	フ	胴部		沈線文 刺突文	IV群3類	275
-9	3土	フ	口縁	沈線文		IV群3類	270
-10	3土	フ	口～胴	波状口縁	J字文(磨消縄文)	IV群3類	331
-11	3土	フ	胴部		斜縄文RL	IV群3類	272
-12	3土	フ	胴部		沈線文 磨消縄文	IV群3類	279
-13	3土	フ	口縁	ボタン状突起		IV群3類	273
-14	3土	フ	胴～底		斜縄文LR	IV群4類	51
第39図-1	4土	フ	胴部		斜縄文LR 縦位沈線文	IV群2類	281
-2	4土	フ	胴部		斜縄文LR 縦位沈線文	IV群2類	280
-3	4土	フ	胴部		沈線文 圧痕文	IV群2類	286
-4	4土	フ	胴部		沈線文	IV群2類	284
-5	4土	フ	口縁	平口縁 無文		IV群2類	283
-6	4土	III	口縁	波状口縁 沈線文		IV群3類	285
-7	4土	フ	口縁	折り返し状口縁 波状沈線文		IV群3類	327
-8	4土	フ	胴～底		斜縄文LR	IV群4類	136
-9	4土	III	口縁	平口縁		VI群	282
第42図-1	6土	フ	口縁	捺糸圧痕 U字状隆帯		III群1類	287
-2	6土	フ	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III群1類	288
-3	6土	フ	口縁	捺糸圧痕		III群1類	290
-4	6土	フ	口縁	平口縁 折り返し状口縁		IV群2類	292
-5	6土	フ	口縁	平口縁		IV群2類	291
-6	6土	フ	口縁	平口縁 折り返し状口縁		VI群	334
第45図-1	8土	フ	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III群1類	295
-2	8土	フ	口縁	捺糸圧痕		III群1類	294
-3	8土	フ	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III群6類	300
-4	8土	フ	口縁	波状口縁		IV群1類	301
-5	8土	フ	胴部		沈線文	IV群1類	303
-6	8土	フ	口縁	波状口縁		IV群1類	304
-7	8土	フ	略完形	波状口縁(4)	横位斜縄文LR	IV群1類	46

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第45図-8	8土	フ	口~胴	波状口縁 折り返し状口縁	擦痕	IV群2類	293
-9	8土	フ	口~胴	平口縁 折り返し状口縁	横位斜縄文LR	IV群2類	296
-10	8土	フ	口縁	平口縁 折り返し状口縁		IV群2類	299
-11	8土	フ	口~胴	平口縁	横位斜縄文LR	IV群2類	305
-12	8土	フ	口縁	平口縁 折り返し状口縁		IV群2類	302
-13	8土	フ	口~胴	平口縁 折り返し状口縁	斜縄文LR	IV群2類	297
-14	8土	フ	口縁	平口縁 無文 刺突文1列		IV群2類	333
-15	8土	フ	口縁	平口縁 無文 刺突文1列		IV群2類	333
-16	8土	フ	口~胴	無文 刺突文1列	横位斜縄文LR 垂下文	IV群2類	298
-17	8土	フ	胴部		沈線文	IV群2類	333
-18	8土	フ	略完形	波状口縁(3)	条痕	VI群	11
第47図-1	9土	III	口~底	平口縁	擦糸圧痕	III群1類	312
-2	9土	III	胴部		羽状縄文 ループ	III群6類	309
-3	9土	フ	完形	波状口縁(4) 無文	斜縄文LR	IV群1類	31
-4	9土	フ	完形	波状口縁(2)	横位縄文LR わらびて文	IV群1類	20
-5	9土	III	口~胴	波状口縁	斜縄文LR	IV群1類	307
-6	9土	III	口~胴	波状口縁 刺突文1列	横位斜縄文LR 沈線文	IV群1類	314
-7	9土	III	胴部		横位斜縄文 沈線文	IV群1類	311
-8	9土	III	口~胴	波状口縁 無文 刺突文1列	縦位斜縄文RL 縦位沈線文	IV群2類	313
-9	9土	III	口~胴	平口縁 折り返し状口縁	斜縄文RL	IV群2類	326
第48図-10	9土	III	略完形	平口縁 折り返し状口縁	斜縄文RL 条痕	IV群2類	141
-11	9土	III	口~胴	波状口縁 補修孔	横位斜縄文 沈線文	IV群1類	310
-12	9土	III	口~胴	平口縁 折り返し状口縁	縦位斜縄文LR	IV群2類	306
-13	9土	III	口~胴	波状口縁 折り返し状口縁	斜縄文RL	IV群2類	308
-14	9土	フ	胴~底		斜縄文LR(無節)	IV群4類	17
第50図-1	10土	フ	完形	波状口縁(4) 擦糸圧痕 ボタン状突起	羽状縄文	III群1類	116
-2	10土	フ	口縁	波状口縁 擦糸圧痕		III群1類	319
-3	10土	フ	口縁	波状口縁 擦糸圧痕		III群1類	317
-4	10土	フ	口縁	波状口縁 擦糸圧痕 ボタン状突起		III群1類	316
-5	10土	フ	口~胴	波状口縁(4) 擦糸圧痕	羽状縄文	III群1類	57
第51図-6	10土	フ	口~胴	波状口縁(4) 擦糸圧痕 ボタン状突起	斜縄文LR	III群1類	101
-7	10土	フ	口~胴	波状口縁 擦糸圧痕	羽状縄文	III群1類	315

図版番号	遺構名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	器種	整理番号
第37図-1	3土	フク土	46.5	30.5	9	11.1	玉髄質珪質頁岩	石筥	605

### 3 屋外炉

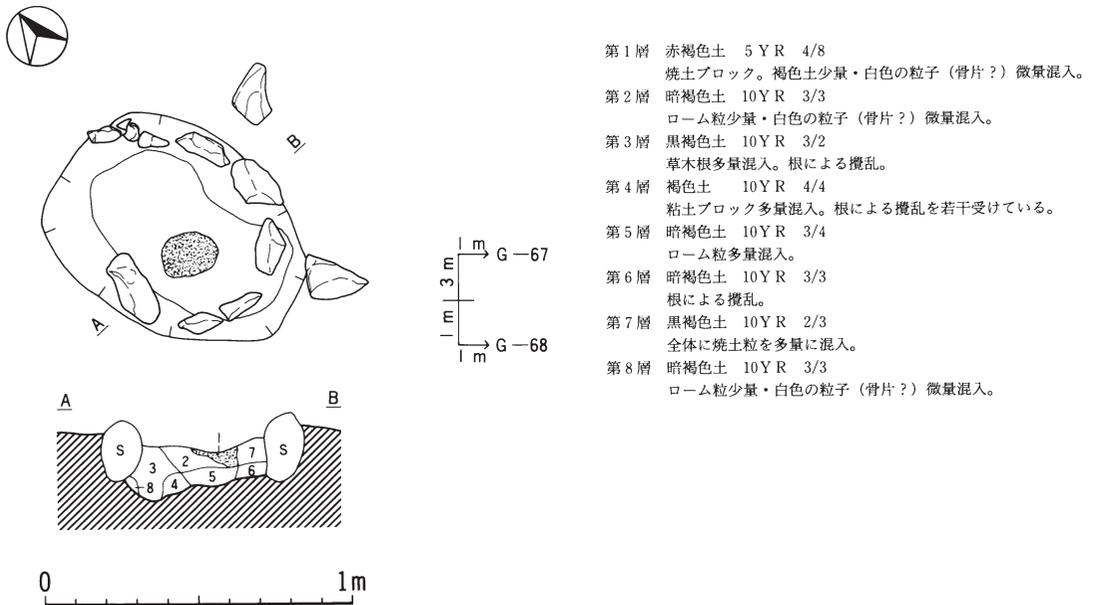
#### 第1号屋外炉 (第52図)

G-67グリッドに位置している。調査区域内では単独での検出である。石囲炉であり、配石の確認時に周囲を同レベルで精査したが、住居跡の床面ほかの痕跡は検出できず、屋外炉として取扱った。石組みは北側の一部が開放されているため、この部分の石材の抜き取り痕の確認を行ったが、草木根による攪乱が著しく未検出に終わった。

石組みは、ほぼ南北方向に長い楕円形で、長軸は約150cm、短軸80cmである。確認できた焼土は、38×30cmの範囲で、厚さは最大15cmである。焼土は、炉底が焼化された状態ではなく、焼土ブロックと褐色土の混合土的な様相を呈し、全体にしまりがなく、ボソボソしている。

炉本体は、石組みよりやや大きめに地山を掘り込んでおり、暗褐色土とロームの混合土を埋めて構築している。第1層（焼土層）及び第2層中から、骨片の可能性のある白色の微小な粒子が検出されている。

構築時期は、伴出遺物がないことから不明であるが、縄文時代の所産と考えられる。



第52図 第1号屋外炉

#### 4 埋設土器遺構 (第53図)

I-73グリッドに位置し、第Ⅲ層下部で確認した。第Ⅳ層を掘り込んでいるものと考えられるが、明瞭な掘り方は確認できなかった。埋め土及び土器内の堆積土もローム主体の褐色土ないしは黄褐色土で、炭化物粒を少量混入している。また、土器内部からの伴出遺物はなく、堆積土自体もしまりが感じられない。土器は、第Ⅲ群第1類の円筒上層a式である。

図版番号	遺構名	融	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第53図-1	1埋	フ	完形	平口縁 燃糸圧痕	羽状縄文	Ⅲ群1類	113

#### 5 配石遺構

今回の調査区内からは、7基の配石遺構が検出されている。この内の2基は下部に土坑を伴うものである。また、第9号土坑として取扱ったものも、この2基と同様の性格を有していた可能性が高い。

また、第3～7号配石遺構は、それぞれがひとつの構成単位として、より大きな配石遺構を構成している可能性も考えられる。また、これらは、急崖に隣接した斜面の上部に位置し、地滑り等により、一部、石材の移動があったものと考えられる。

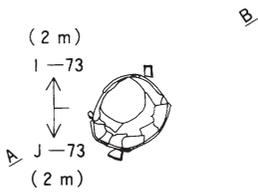
##### 第1号配石遺構 (第54図)

H-54グリッドに位置する。第Ⅲ層下部で、円形に一巡する石組みとして確認した。20cmから30cm程の18個の礫によって構成されており、石組みの直径は約160cmである。

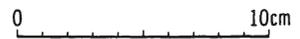
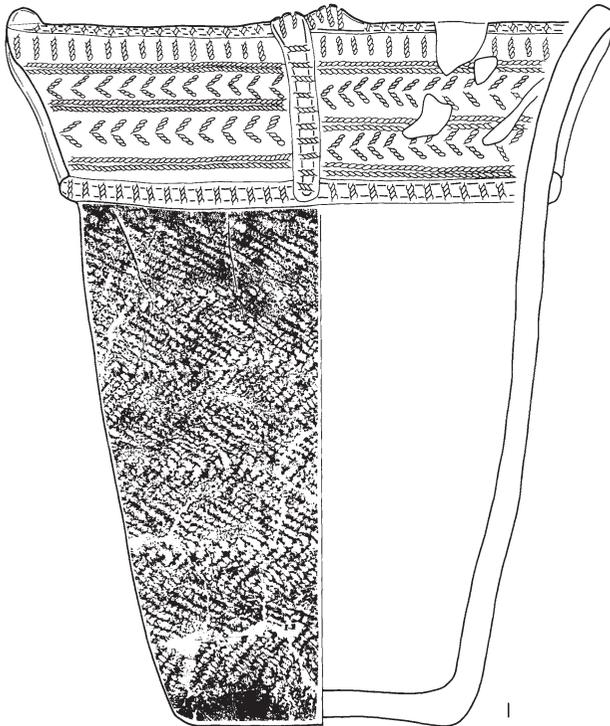
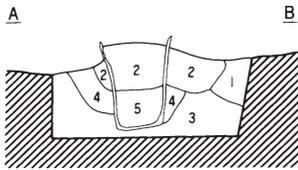
当初、大型の石囲炉の可能性が考えられたが、規模があまりに大きいことや焼土がまったく検出されないことから、平地上に組まれた配石として、土層観察用のベルトのうち1本を撤去し、精査を行った。この後、下部に掘り込みが確認され、土坑の存在が明確になった。

配石下部の土坑は、東西にやや長い楕円形を呈し、開口部では、長軸210cm、短軸180cmで、底面では、長軸120cm、短軸100cmである。深さは、配石面から約70cmである。壁は若干粘性があり、しまりがある。断面形状はスリ鉢状を呈する。

土坑内の堆積土は、混入物の量により、より細分は可能であったが、大きく9層に分層した。ローム主体の褐色土を主体とし、全体に炭化物粒を混入している。上部の第4層中には、ごく微量の焼土粒が混入している。また、下部の堆積土中には小礫の混入が目立つ。人為的堆積と考えられる。



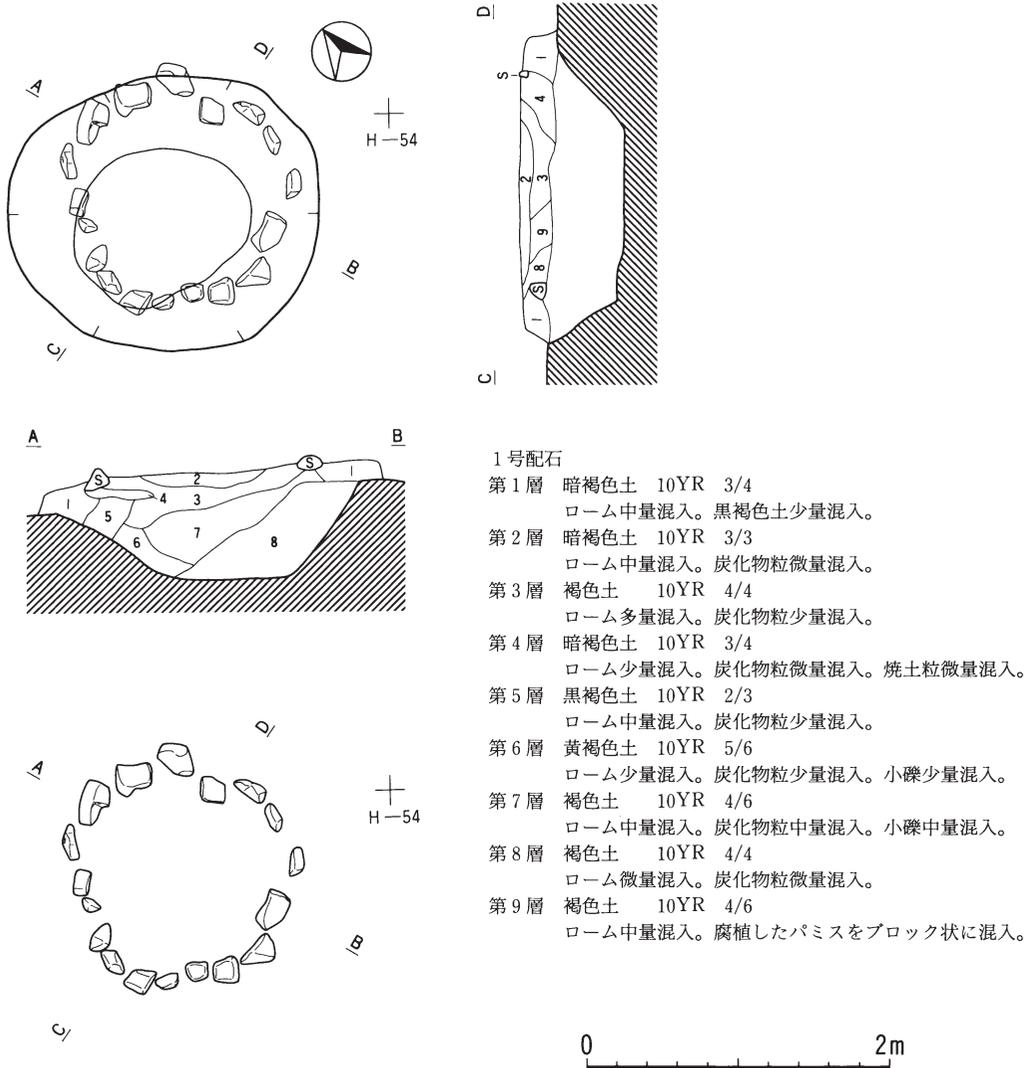
- 1号埋設土器
- |     |      |          |                          |
|-----|------|----------|--------------------------|
| 第1層 | 褐色土  | 10YR 4/4 | ローム主体の層。炭化物粒微量混入。暗褐色土混入。 |
| 第2層 | 褐色土  | 10YR 4/4 | ローム主体の層。砂粒混入。全体に暗褐色土混入。  |
| 第3層 | 黄褐色土 | 10YR 5/8 | ローム主体の層。炭化物粒微量混入。        |
| 第4層 | 黄褐色土 | 10YR 5/6 | ローム主体の層。炭化物粒微量混入。暗褐色土混入。 |
| 第5層 | 黄褐色土 | 10YR 5/6 | ローム主体の層。粘性強い。            |



第53図 埋設土器遺構

出土遺物は、遺構上面で土器片が数片出土したが、本遺構に伴う可能性は少ない。

本遺構の構築時期は、伴出遺物がないことから不明であるが、上部の包含層との関係から、縄文時代中期後半以前と考えられる。また、用途の面からは、土坑上部に配石を有することから、土壙墓の可能性が高いと考えられる。



第54図 第1号配石遺構

## 第2号配石遺構 (第55～56図)

H・I-51・52グリッドに位置する。第Ⅲ層下部において弧状の配石を確認した。配石は5個の礫が弧状に巡り、3個の小礫が直線状に並んでいたが、後者は、掘り方が検出されなかったことから、移動した可能性が高い。推定できる直径は約150cm程である。

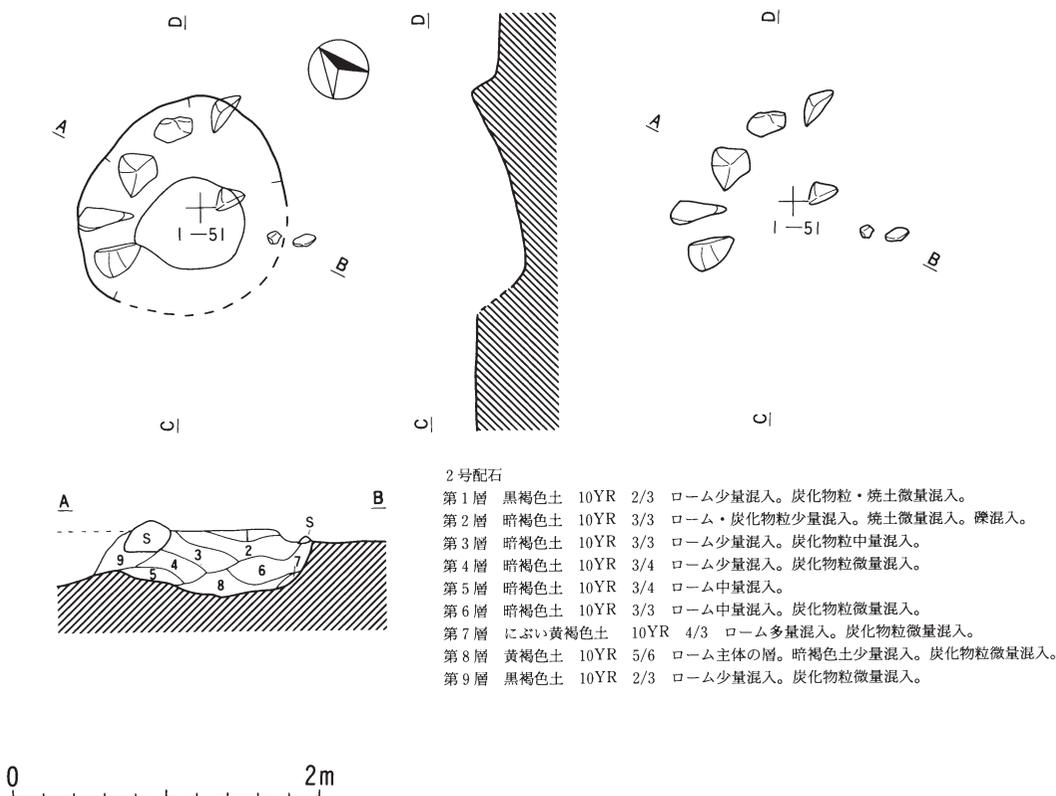
配石下には、緩やかな傾斜を持つ土坑が確認された。壁は、北側が概ね確認できたものの南側は不明瞭である。土坑の深さは、配石面から約50cmである。

土坑内の堆積土は、9層に分層できた。暗褐色土を主体としておりローム及び炭化物が混入している。底面直上はローム主体の層である。

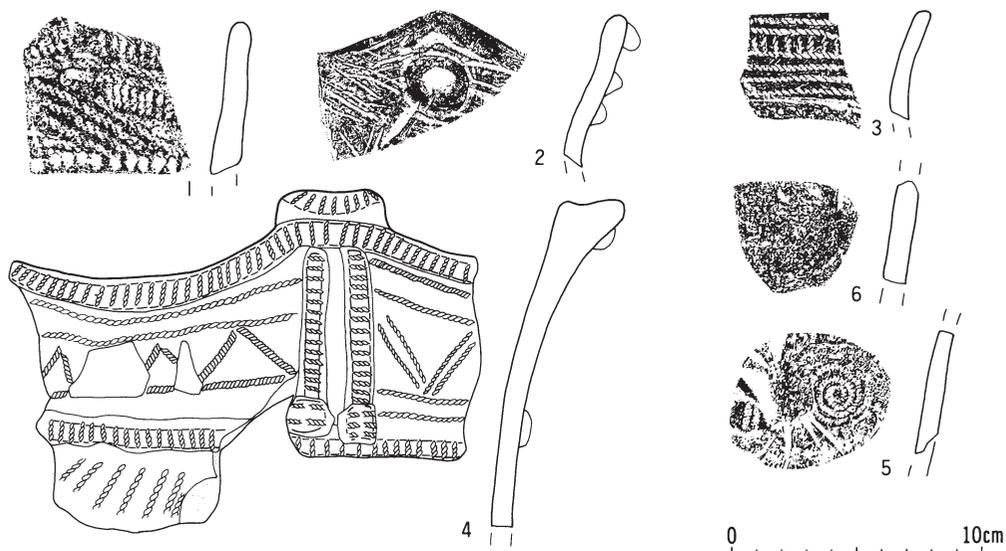
堆積土中から土器片及び円盤状土製品が1点出土している。

本遺構の構築時期は、底面からの伴出遺物がないことから不明であるが、第1号配石遺構と同時期の可能性が考えられ、縄文時代中期の可能性が高い。

用途では、土壙墓の可能性は否定できないが、配石下部の土坑形状が不明瞭のため、断定し得ない。



第55図 第2号配石遺構



第56図 第2号配石遺構出土土器



第57図 第2号配石遺構出土土製品

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第56図-1	1配	フ	口縁	波状口縁 燃糸圧痕		Ⅲ群1類	320
-2	2配	フ	口縁	波状口縁 燃糸圧痕		Ⅲ群1類	321
-3	2配	フ	口縁	平口縁 燃糸圧痕		Ⅲ群1類	324
-4	2配	フ	胴部		文様は摩耗	Ⅲ群1類	325
-5	2配	フ	口縁	隆帯 燃糸圧痕		Ⅲ群1類	323
-6	2配	フ	口縁	波状口縁 条痕 ボタン状突起		Ⅲ群5類	322

### 第3号配石遺構 (第58図)

H-47・48グリッドに位置する。25個の礫の集合として確認できた。明瞭な配置構成は不明であり、礫の多くが移動したものと考えられる。ただ、やや大型の礫の配置及び周囲の配石遺構の状況から、他と類似性のある配石遺構であった可能性がある。

下部には土坑などの下部施設は存在しなかった。また、遺物も出土しなかった。このため、構築時期及び用途は不明である。

### 第4号配石遺構 (第58図)

I-47・48グリッドに位置する。14個の礫が楕円形に配置されているが、北西側が一部開放されている。長軸約150cm、短軸約100cmである。

配石下部には土坑などの下部施設は存在しなかった。また、遺物も出土しなかった。構築時期及び用途は不明である。

### 第5号配石遺構 (第58図)

I-47グリッドに位置する。9個の礫が、略楕円形に配置されているが、北東側部分の礫が移動した可能性が高い。長軸約160cm、短軸90cmである。

配石下部には土坑などの下部施設は存在しなかった。また、遺物も出土しなかった。構築時期及び用途は不明である。

### 第6号配石遺構 (第58図)

G・H-46・47グリッドに位置する。39個の礫が、長方形に配置されている。長軸300cm、短軸250cmの範囲として確認した。しかし、北東側は大型の礫が明瞭に鍵形を呈するが、他は小礫の散布にすぎないため、本来の形状は、不明である。

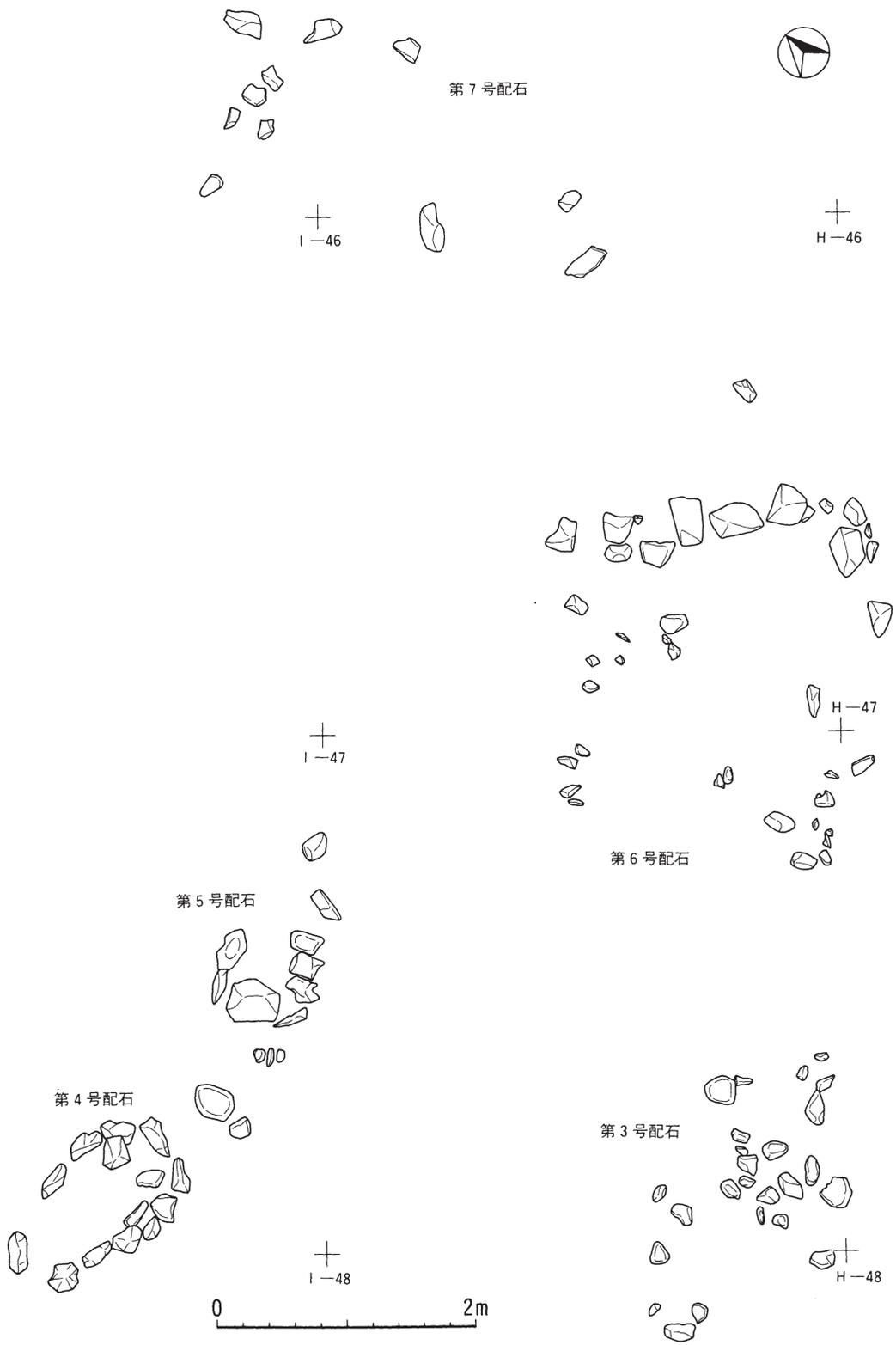
北東部の鍵形部分は、長さ250cmである。

配石下部には土坑などの下部施設は存在しなかった。また、遺物も出土しなかった。構築時期及び用途は不明である。

### 第7号配石遺構 (第58図)

H・I-45・46グリッドに位置する。11個の礫が、弧状または半円形に配置されており、最大長は310cmである。北側の8個の礫で1単位が構成されていた可能性も考えられる。いずれにしても、多くの礫が移動し、本来の形状は推定できない。

配石下部には土坑などの下部施設は存在しなかった。また、遺物も出土しなかった。



第58图 第3・4・5・6・7号配石遺構

構築時期及び用途は不明である。

第3～7号配石遺構は、伴出遺物がないことなどから、時期は不明としたが、確認面上部に遺物包含層（一部攪乱を受けている）が形成されていたことから、包含層の土器（縄文時代中期）とほぼ同時期で、さらにこの範囲では、最花式を主体とした土器が多く出土していることから、中期後半期に構築されたものと考えたい。

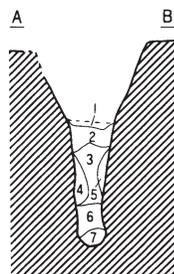
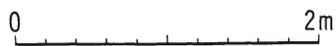
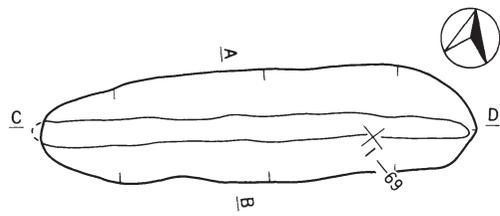
## 6 溝状ピット

### 第1号溝状ピット（第59図）

H・I-68・69グリッドに位置し、調査区内では単独での検出である。主軸は、ほぼ東西方向で、斜面の傾斜に平行している。開口部は、長さ285cm、幅75cmで、底面では長さ290cm、幅18cmである。深さは130～140cmである。堆積土は7層に分層できたが、上部は、確認時に掘りすぎたため不明である。暗褐色土を主体としており、全体にローム粒を混入している。中位の第2層は非常にかたくしまっており、第4層は地山の再堆積または崩落と考えられる層である。また、一部、炭化物粒が混入している層も確認されている。

堆積土の上面からは、土器の小破片が出土したが、本遺構に伴う可能性は考えられない。また、この部分は、農道として削平及び若干の盛り土がなされていたため、本来存在したと考えられる包含層が欠如しているため、隣接する土坑群と異なり、構築時期を推定できない。

また、溝状ピットは、複数での検出例が多いことから、本遺跡においては、調査区南側の現在の山林部分に展開して構築されている可能性が高い。



- 1号溝状ピット
- 第1層 暗褐色土 10YR 3/3  
ローム粒・砂粒混入。
  - 第2層 暗褐色土 10YR 3/4  
ロームを全体に混入。炭化物粒少量混入。しまり大。
  - 第3層 暗褐色土 10YR 3/4  
ロームを全体に混入。
  - 第4層 ぶい黄褐色土 10YR  
5/4 ロームブロック、暗褐色土少量混入。地山の崩落。しまり大。
  - 第5層 褐色土 10YR 4/6  
4層と類似するが、やや軟質。地山の崩落。
  - 第6層 暗褐色土 10YR 3/3  
ローム粒・砂粒混入。炭化物粒微量混入。
  - 第7層 暗褐色土 10YR 3/4  
ローム粒・砂粒混入。

第59図 第1号溝状ピット

## 第2節 遺構外出土遺物

遺構外から、土器・石器・土製品・石製品などの遺物が出土している。出土遺物のほとんどは縄文時代中期の土器片で、調査区全体で段ボール箱で約400箱分出土しており、全遺物量の85%を占めている。

遺物は、調査区中央部の微高地からその斜面において、もっとも密集して出土しており、遺構の検出範囲と重複している。このほかには南端部でごく少量の土器・石器が出土している。

調査区が、植林以前は畑地であったことから、削平及び盛土によって遺物が移動している部分が多い。削平の及んでいない自然状態を保っている部分も存在するが、近沢川に向かい傾斜していることから、上部の崩落土を被っている部分など、地点ごとに堆積土の様相が異なり、調査区全体の遺物出土状態を層位的に把握することは困難であった。

### 1 土器

出土遺物の大半を占めており、縄文時代中期の土器が主体となっている。

土器の分類にあたっては、従来の土器編年に基づいて大別し、個々の特徴によって細分した。また、土器の出土量が多く、胴部破片が多いことから、型式を特定しやすい口縁部破片を中心に分類・整理を行った。

分類基準は以下のとおりである。

第I群 縄文時代前期の土器

第II群 縄文時代前期末、または中期初頭の土器で、型式を特定し得ないもの

第III群 円筒上層式の土器

1類 円筒上層a式

4類 円筒上層d式

2類 円筒上層b式

5類 円筒上層e式

3類 円筒上層c式

6類 円筒上層式で型式を特定できないもの

第IV群 大木系の土器

1類 榎林式に相当するもの

3類 大木8・9・10式に相当するもの

2類 最花式に相当するもの

4類 大木系で型式を特定できないもの

第V群 縄文時代後期の土器

第VI群 時期・型式を特定できないもの

第VII群 土器底部

## 第 I 群土器

第 6 号竪穴住居跡の覆土中から破片が出土しているが、遺構外からは明瞭に本群と特定できるものは認められなかった。ただし、胴部破片中にはごく少量存在している可能性がある。

図示したものは 2 点であるが（第 24 図 - 1・2）、他にも胴部破片が数片見られる。繊維混入の土器である。

## 第 II 群土器 （第 60～62 図・第 17 図 - 1・2・第 24 図 - 3）

円筒下層式または円筒上層式の土器で、型式を特定できないものを一括した。

円筒下層 d 式または円筒上層 a 式に相当すると思われるが、過渡期的な要素が多く特定しきれなかった。

口縁部は、1 を除き平口縁を基本としている。口縁部の文様帯は、横位の捺糸圧痕を基本とし、これに縦位または斜位の短線圧痕を施文している。

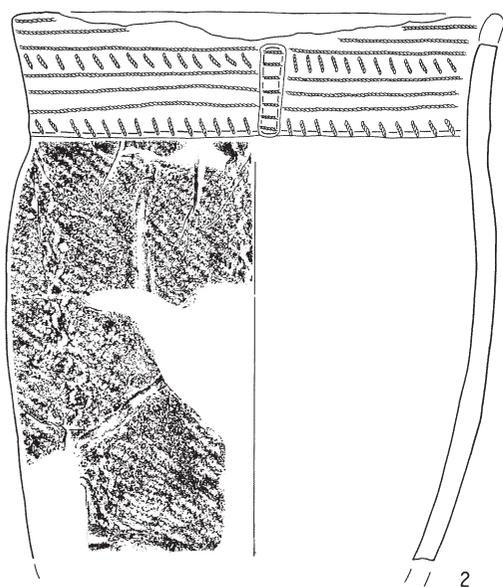
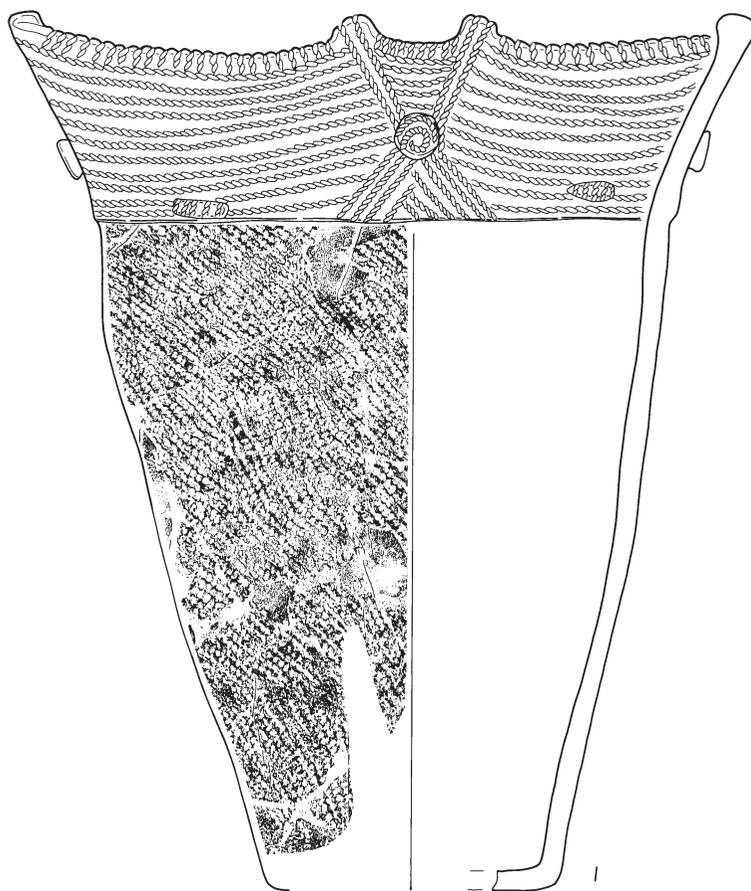
1 は口唇部の絡条体による圧痕が、第 III 群土器のように器内面側まで及んでおらず、外面に向けて施文されている。また、少量の繊維が混入していることから本群としたが、上層 a 式に包括される可能性が高い。

2 は口唇部に刻み目状の捺糸圧痕がみられないもので、3・4 は縦位の文様区画帯を有しないものである。3 は胴部との区画に短い隆帯を貼り付けているが、その下位にも短線圧痕を施文している。これら 3 点も上層 a 式に包括されるものと考えられる。

5 は口縁部文様帯が大きく突出しているもので、縦位 2 本の隆帯で区画帯を構成している。口頸部文様は斜位の捺糸圧痕によるが、複節の原体を使用している。胴部は木目状の捺糸文を施文している。他に類例はないが、上層 a 式の範疇で考えたい。

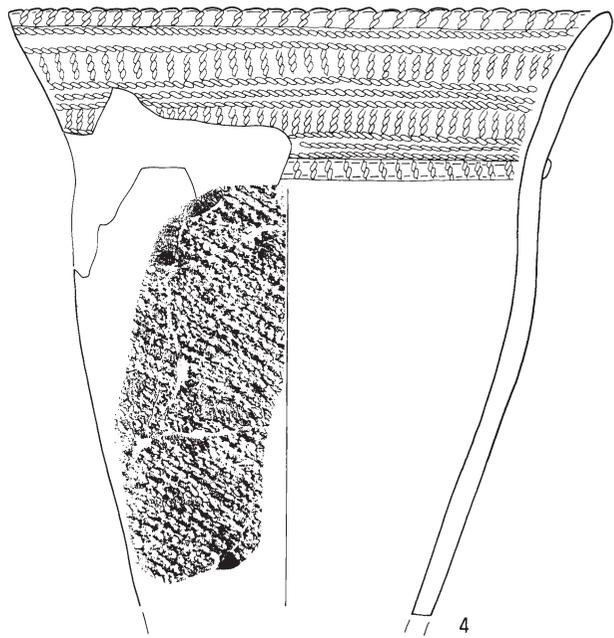
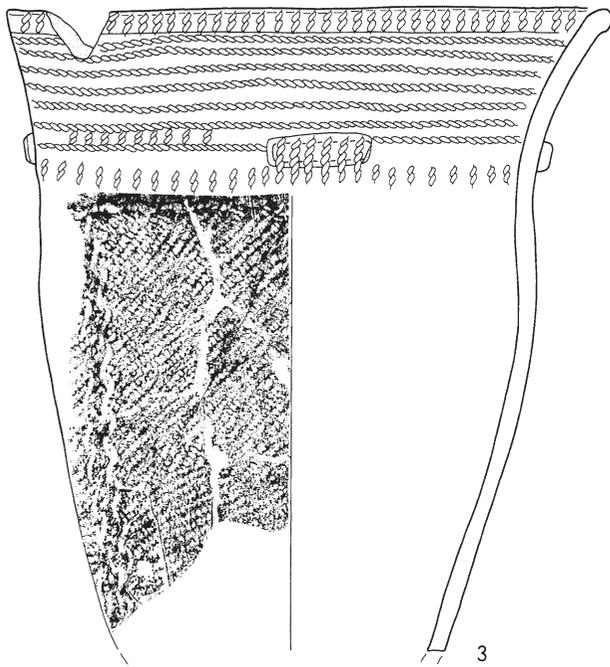
6 は口縁部片で、胴部との区画の隆帯の貼付けはみられない。また、上層 a 式にみられる区画代わりの小さな段差もみられない。これらの特徴と、胎土中に繊維が少量混入していることから本群とした。

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第 60 図 - 1	H-52	III	完形	波状口縁(4) 捺糸圧痕	斜縄文 RL	II 群	111
- 2	H-48	III	口～胴	平口縁 捺糸圧痕	斜縄文 RL	II 群	59
第 61 図 - 3	I-52	II	略完形	平口縁 捺糸圧痕	斜縄文 LR 縦位ループ	II 群	78
- 4	J-75	III	略完形	平口縁 捺糸圧痕	斜縄文 RL	II 群	103
第 62 図 - 5	D-20	III	口～胴	平口縁 捺糸圧痕	絡条体（木目状）	II 群	400
- 6	K-76	III	口～胴	平口縁 網目状に圧痕 捺糸圧痕	羽状縄文	II 群	404



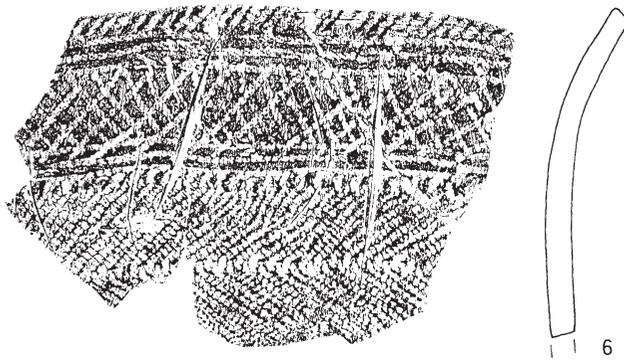
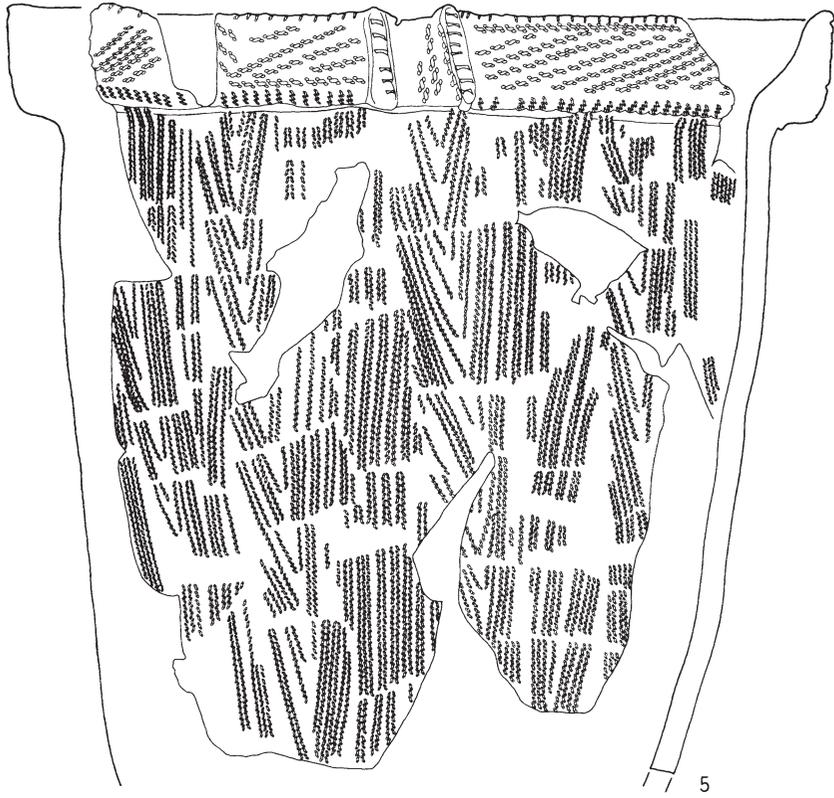
0 10cm

第60図 遺構外出土器-1 (II群-1)



0 10cm

第61図 遺構外出土土器-2 (II群-2)



0 10cm

第62图 遺構外出土土器-3 (II群-3)

### 第Ⅲ群土器

円筒上層式の土器を本群土器として一括した。

#### 1 類 (第63～76図)

円筒上層 a 式を一括した。主に口頸部文様帯の特徴により数種にとりまとめた。このため、図の掲載順は各土器の時期的な新旧とは一致していない。

口頸部文様帯の施文は、主に撚糸の圧痕によるもので、撚糸または絡条体による短線圧痕及び隆帯の貼付けによるものをこの類とした。撚糸には 0 段多条の原体が多用されている。

#### 口頸部文様帯

口縁部は、平口縁・波状口縁の 2 種がある。波状口縁は 4 個の波頭部を持つものを基本とし、小突起またはこれの大型化した把手を有する。

口縁部のほとんどは隆帯状に肥厚させており、波頭部からは、文様帯を 4 分割する縦位の隆帯またはこれに変わる区画帯が意匠されている。平口縁のものも同様に 4 分割を基本としている。

胴部文様帯との区画には、多くは隆帯を一巡させているが、俵状の短い隆帯（以下、短隆帯と仮称する）を貼り付けているものもある。また、隆帯を持たないものは胴部文様帯との境に低い段差を設けている。この段差はほとんどの個体で胴部側が一段低く作出されている。

文様の施文は、粘土紐の貼付けによる隆帯と撚糸の圧痕を基本としており、隆帯上には絡条体の圧痕が施文される。これに前述の短隆帯及びボタン状の粘土の貼付けがみられる。

7～10は、口縁部が緩やかな波状を呈し、波頭部の突起はあまり突出していない。胴部との文様区画帯には隆帯を一巡させている。また、4 個の波頭部から、それぞれ一条の隆帯を垂下させ、文様帯を 4 分割している類である。口唇部及び隆帯上には、撚糸または絡条体により連続した圧痕が施されている。文様帯は無文地に横位の撚糸の圧痕が施され、8 はこれらの圧痕間に縦位の短線圧痕が施文されている。10 は撚糸の圧痕に替わり、細い棒状工具による刺突列が施文されている。

11～13は文様帯を分割する縦位の隆帯を持たない類である。ただ、11は平口縁であるが口縁部に 4 個の短隆帯を貼付け、12・13は口縁部に推定 4 個の突起を作出しており、ともに文様の区画を意図している。

14～19は小波状口縁で、波頭部を広めに作出し、区画帯の垂下する隆帯を 2 条貼り付けている類である。施文は基本的には横位の撚糸圧痕と縦位の短線圧痕によるもので、14は横位の撚糸圧痕を挟んで上下に矢羽根状の短線圧痕を施文している。17も同様に矢羽根状及び横位方向の「ハ」の字状の圧痕が施文されている。15・18・19は縦位の隆帯を中心として左右対称に斜位方向の撚糸圧痕が施文されている。また、18には渦巻き状の撚糸圧痕もみられる。

21～25は縦位の隆帯の代わりに山形状に捺糸圧痕を施文し、底辺の中央部分に渦巻き状の捺糸圧痕を施文している。23は渦巻き状の圧痕を施文したボタン状の貼付けがみられる。区画帯以外は横位及び短線の捺糸圧痕である。

28は逆山形の捺糸圧痕により文様区画を行っており、口縁の突起のそれぞれ中央に縦位の隆帯を貼り付けている。

29・30・32は横位の捺糸圧痕間の短線圧痕が、「ハ」の字状または矢羽根状になる類で、30は縦位の隆帯上の圧痕も矢羽根状に施文されている。また、渦巻き状の圧痕も縦位の区画帯に複数個施文される。また、34は交差させた短線圧痕を施文している。

26・31は横位圧痕に加え、斜位または弧状の捺糸圧痕が施文され、28同様に、大きく4分割された区画帯を、さらにそれぞれ2分割を意図した施文がなされている。

33～67はこれらの種々の捺糸圧痕に加え、縦位の隆帯にも種々の変化がみられるもので、隆帯自体も丸みを帯びた粘土紐を多用している。39のように横位の捺糸圧痕に替わって隆帯を貼り付けているものもみられる。また、48・49のような巻き込んだ鼓状の意匠や、50などのような橋状把手の貼付けもみられる。

#### 口縁部突起

口縁部は、前述のとおり平口縁と波状口縁とがあり、後者が大部分を占める。基本的には小波状口縁の波頭部を他より肥厚させるもので、波頭部の形状が山形及び双頭、または14等のような幅広のものである。波頭部がより高く作出されているものには、突起または把手状の意匠が施される。これらには鱗状のもの、筒状のもの、円錐状のもの、俵状のものなどがみられる。

#### 胴部文様

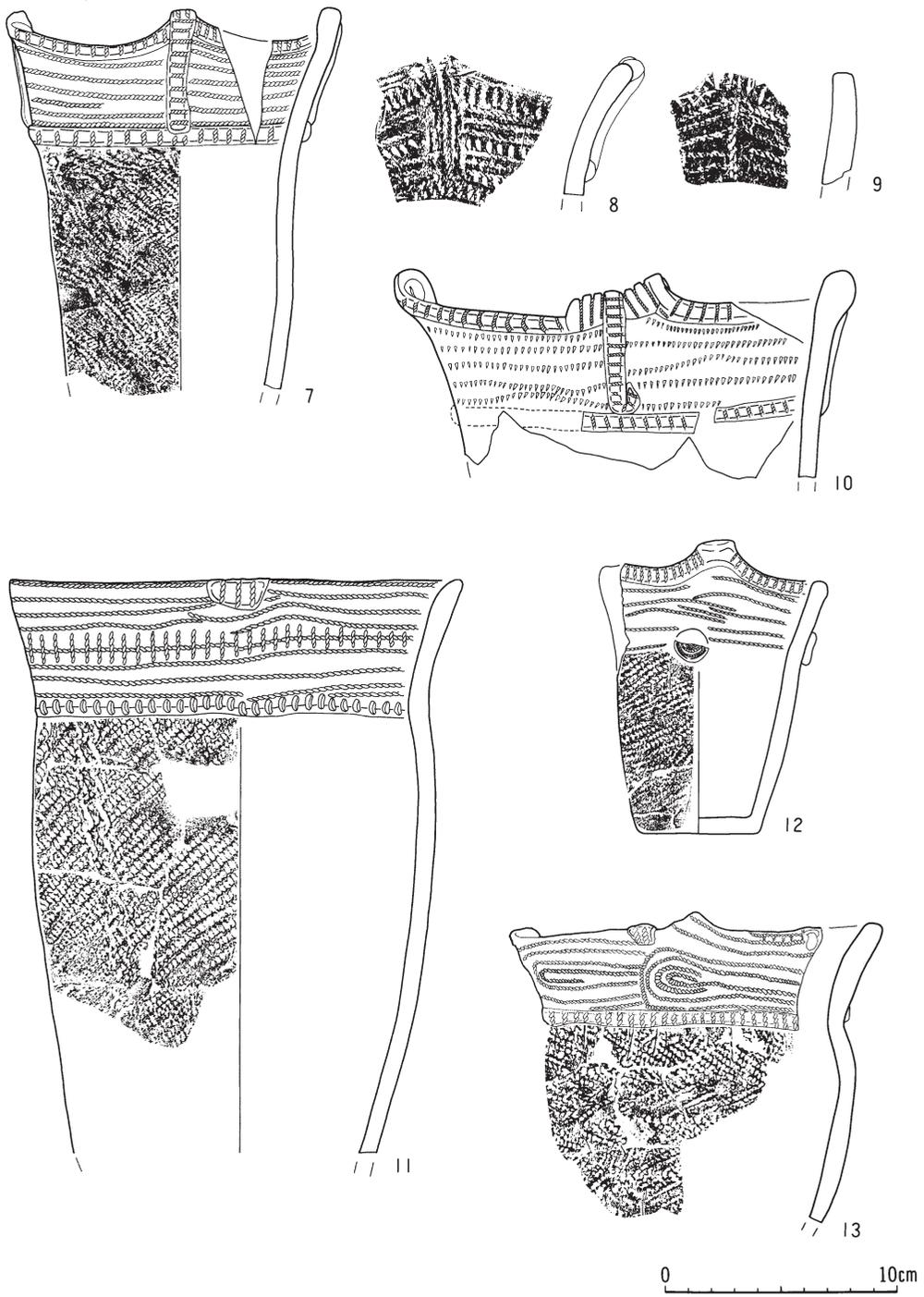
基本的には原体の横回転による斜行縄文であるが、羽状縄文の施文されたもの及び結節によるループ文がみられ、羽状縄文の施文されたものが多い傾向がみられる。また、11他にみられる縦位方向のループ文が施文されたものも数点みられる。このほかには14のような絡条体によるもの。全体の施文は不明であるが、17のような一部捺糸圧痕によるものなどがみられる。

#### その他

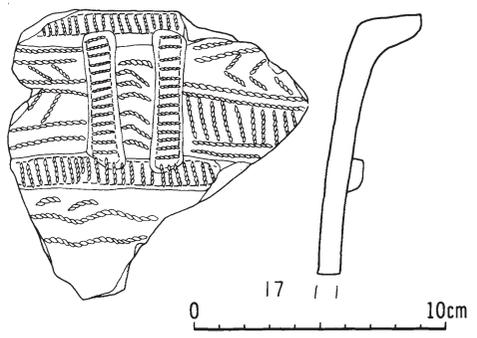
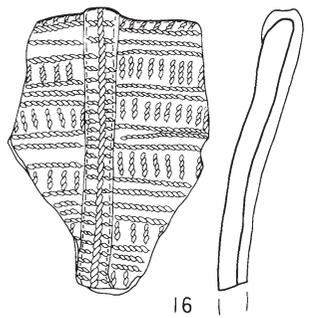
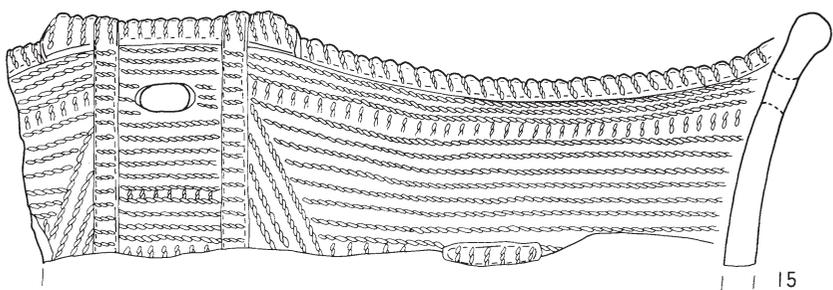
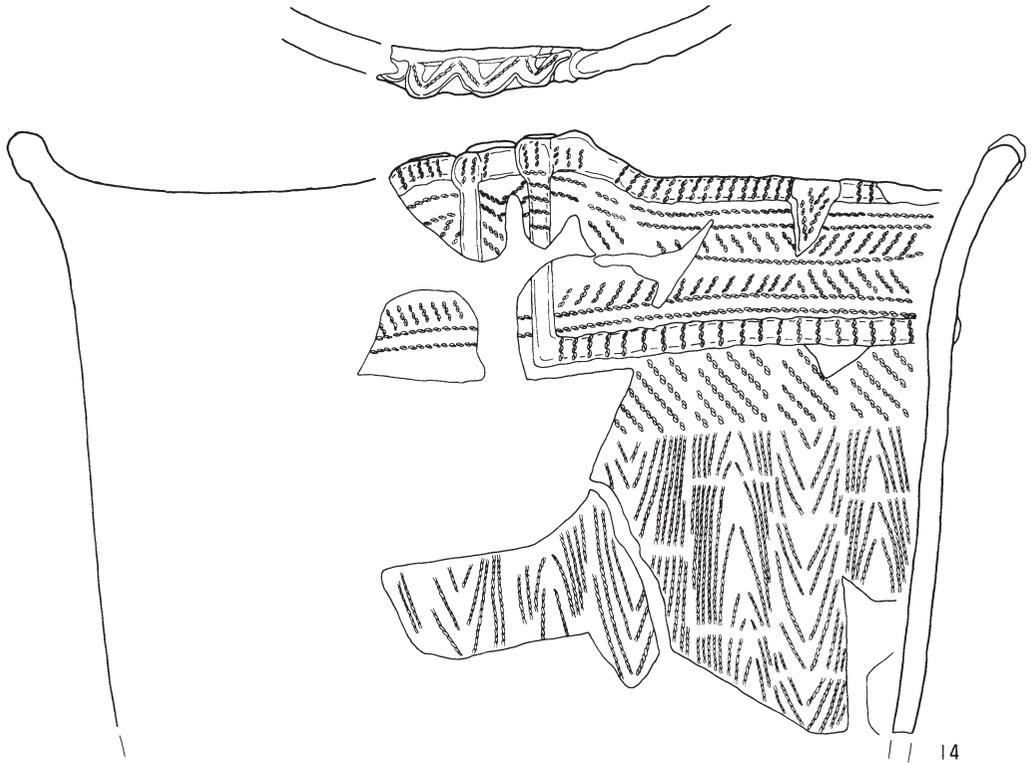
内面は、ほとんどの土器が、平滑でいいねいな磨きが施されており、胎土の性質によるものか光沢が認められる。

69・70は本類とは形状及び文様帯の構成に差違が認められるが、粘土紐による隆帯がしっかりしていることや捺糸圧痕だけの施文であることなどから本類とした。

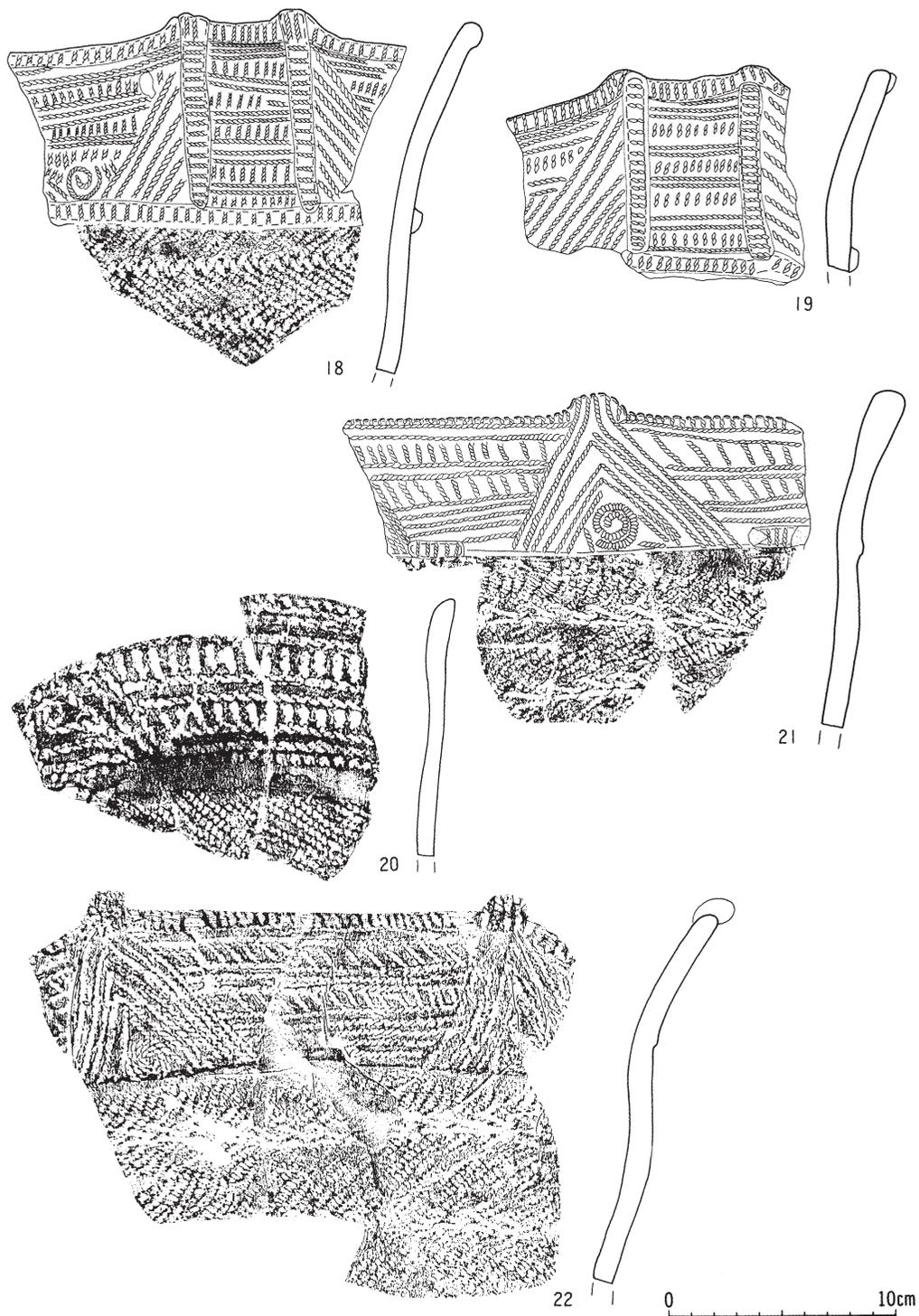
また、橋状把手を持つ69も、橋状把手を貼り付けた他の土器の存在から本類とした。



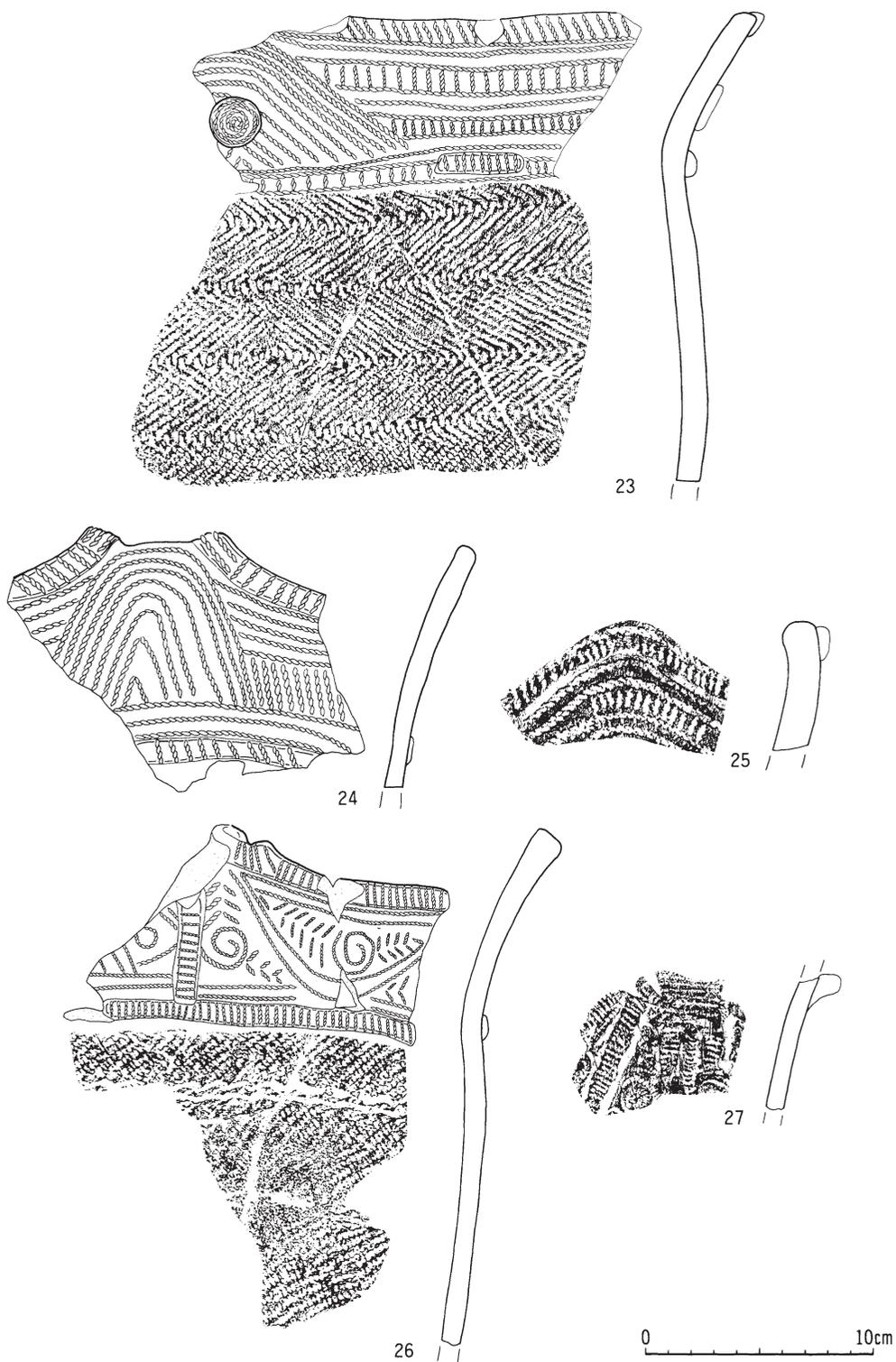
第63圖 遺構外出土土器—4 (Ⅲ群1類—1)



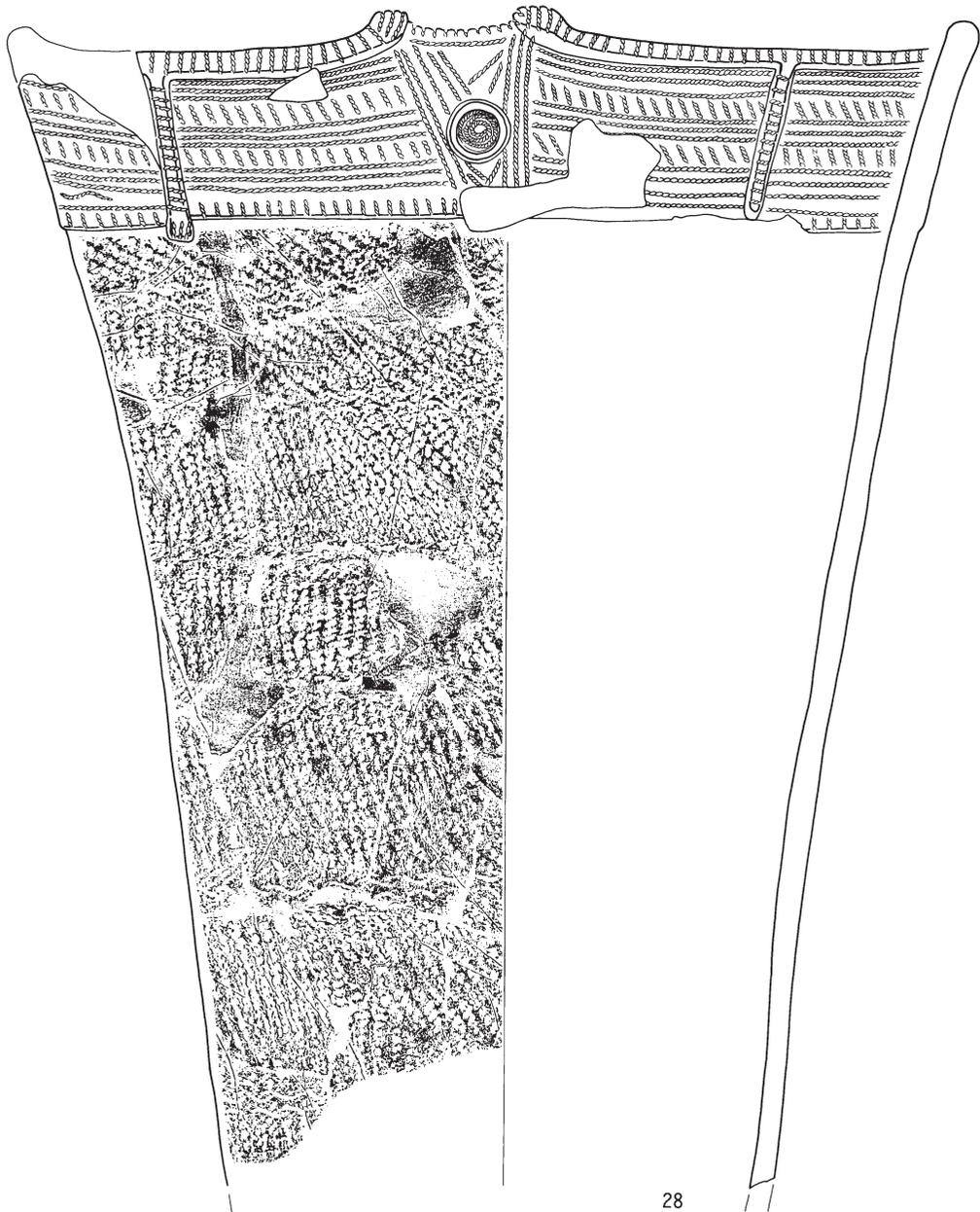
第64図 遺構外出土土器-5 (III群1類-2)



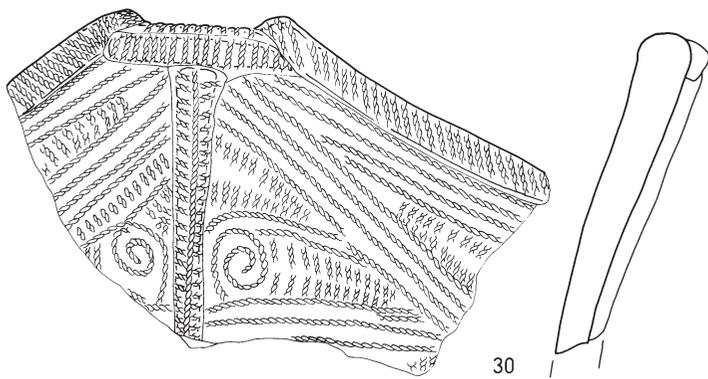
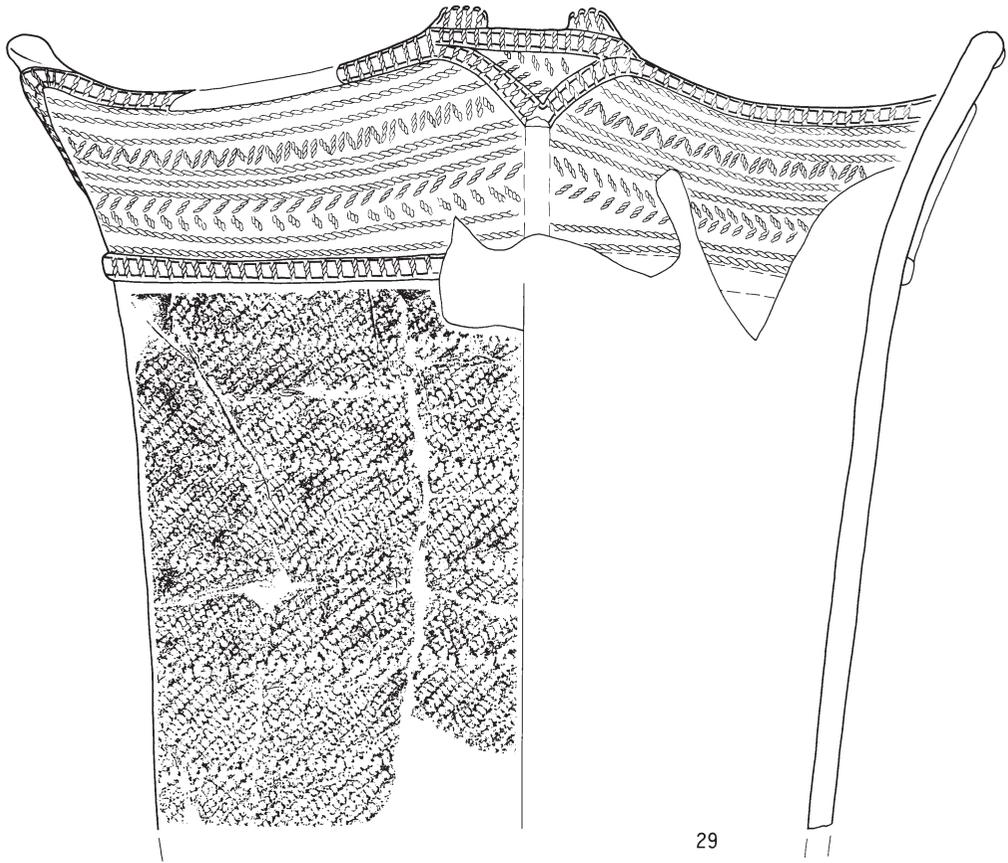
第65圖 遺構外出土土器—6 (III群1類—3)



第66圖 遺構外出土器—7 (III群1類—4)

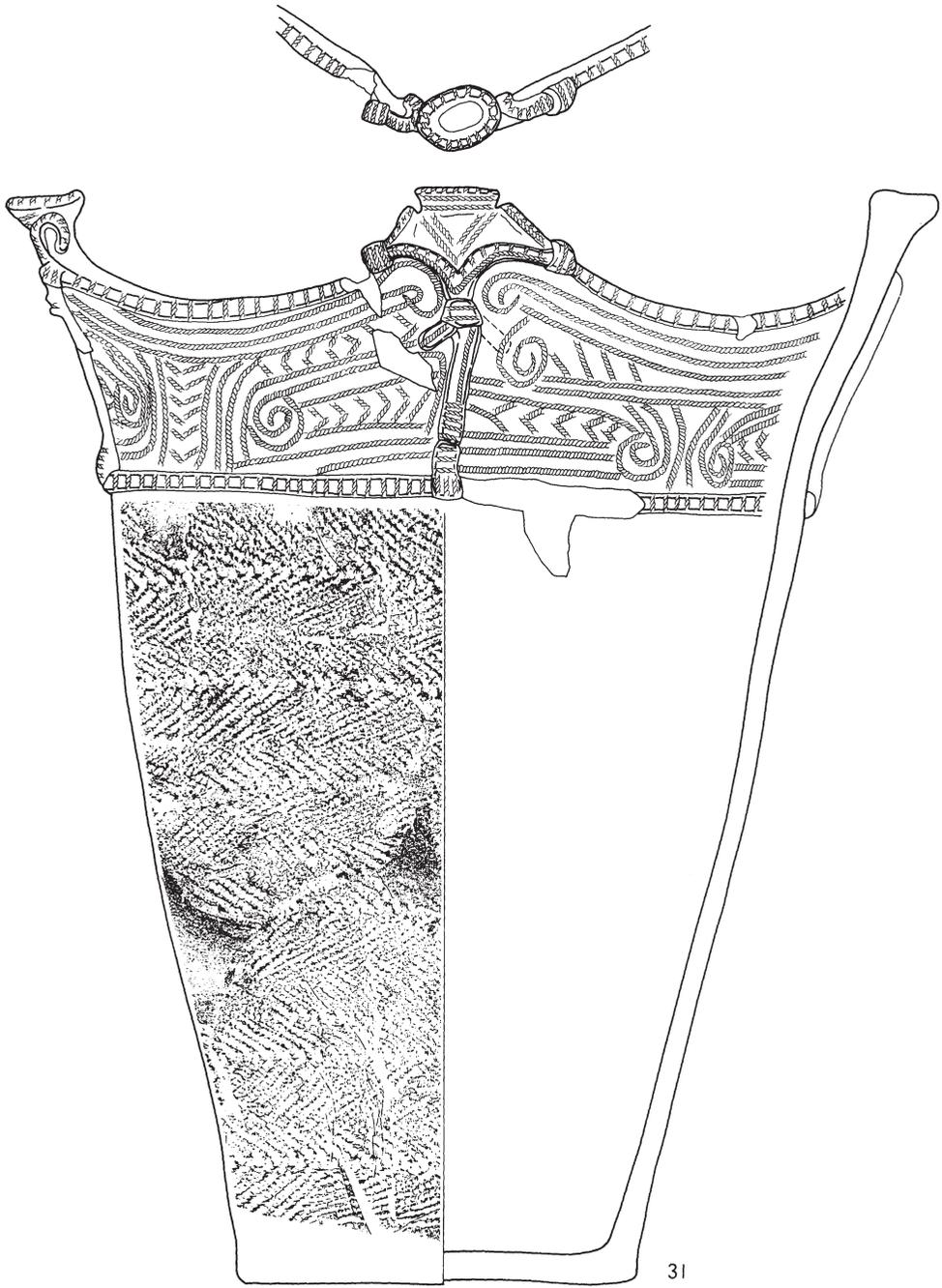


第67図 遺構外出土土器-8 (III群1類-5)

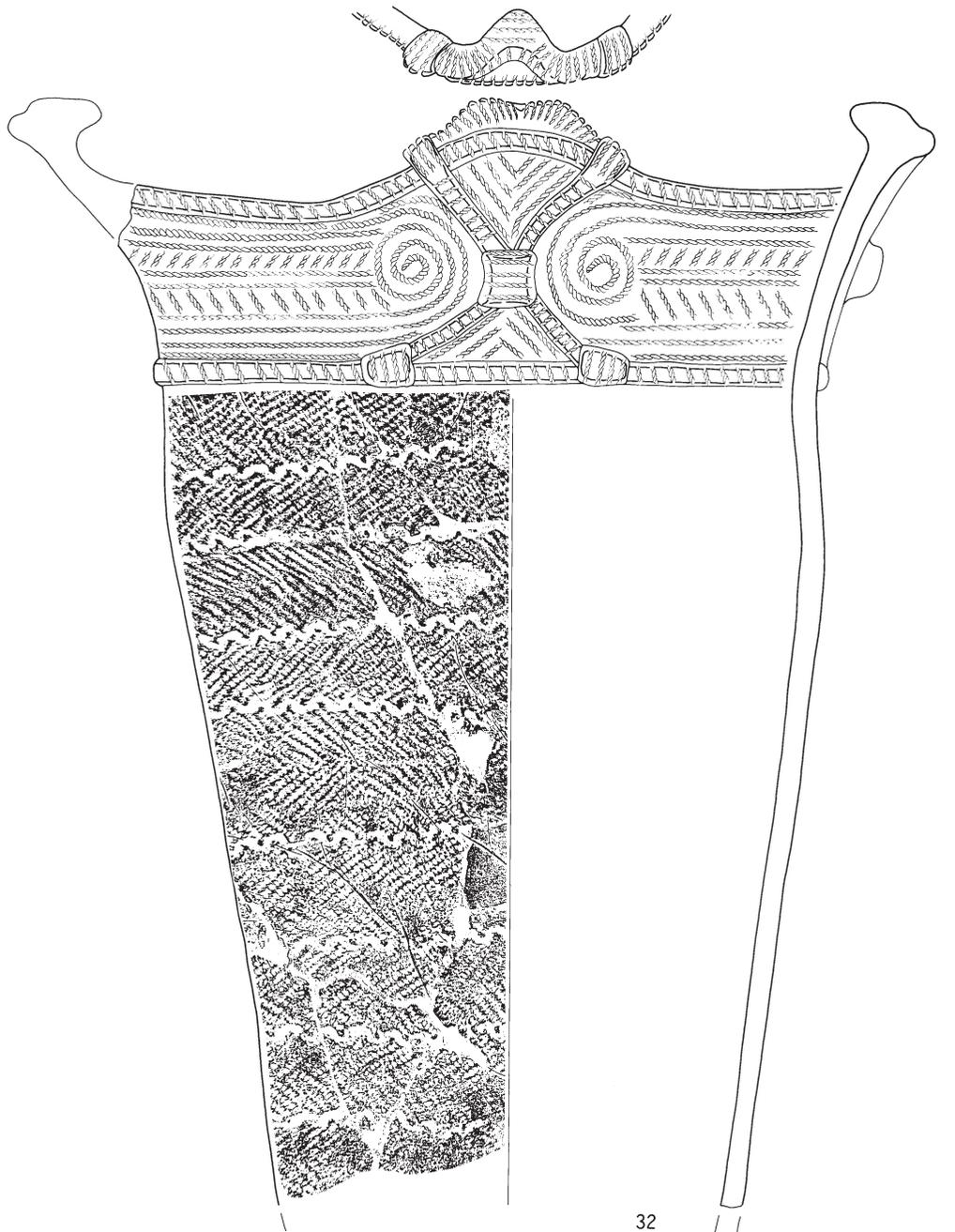


0 10cm

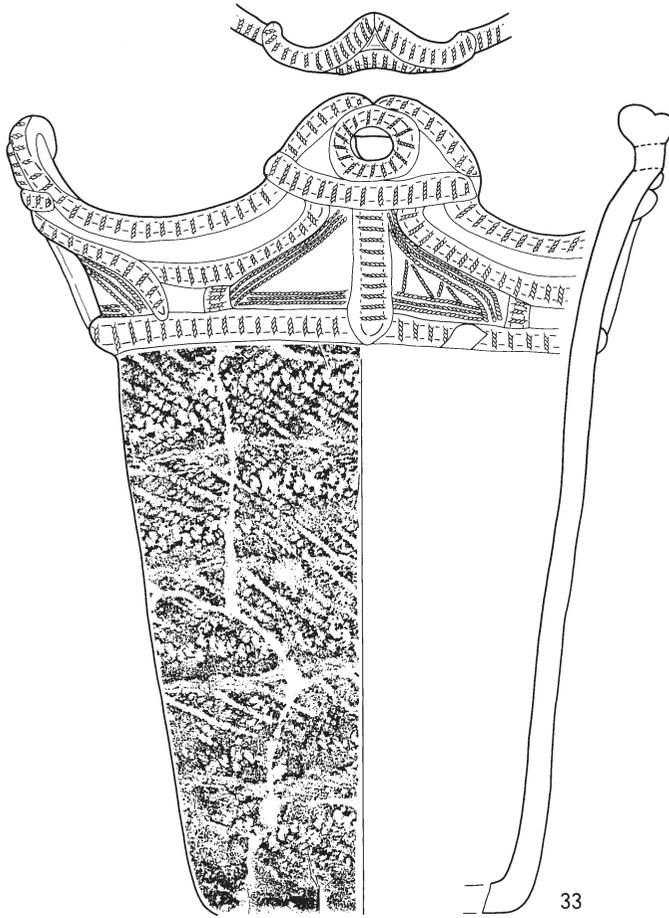
第68图 遺構外出土土器-9 (III群1類-6)



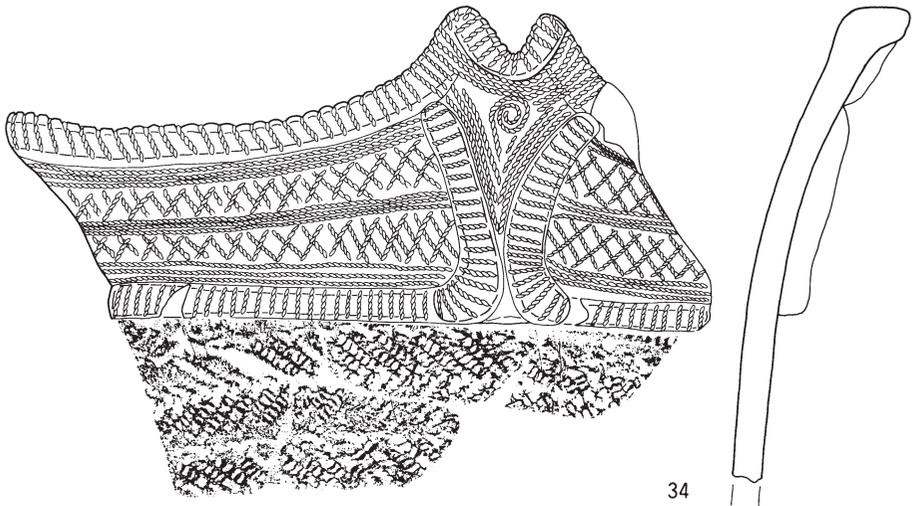
第69圖 遺構外出土土器-10 (Ⅲ群1類-7)



第70図 遺構外出土土器-11 (III群1類-8)



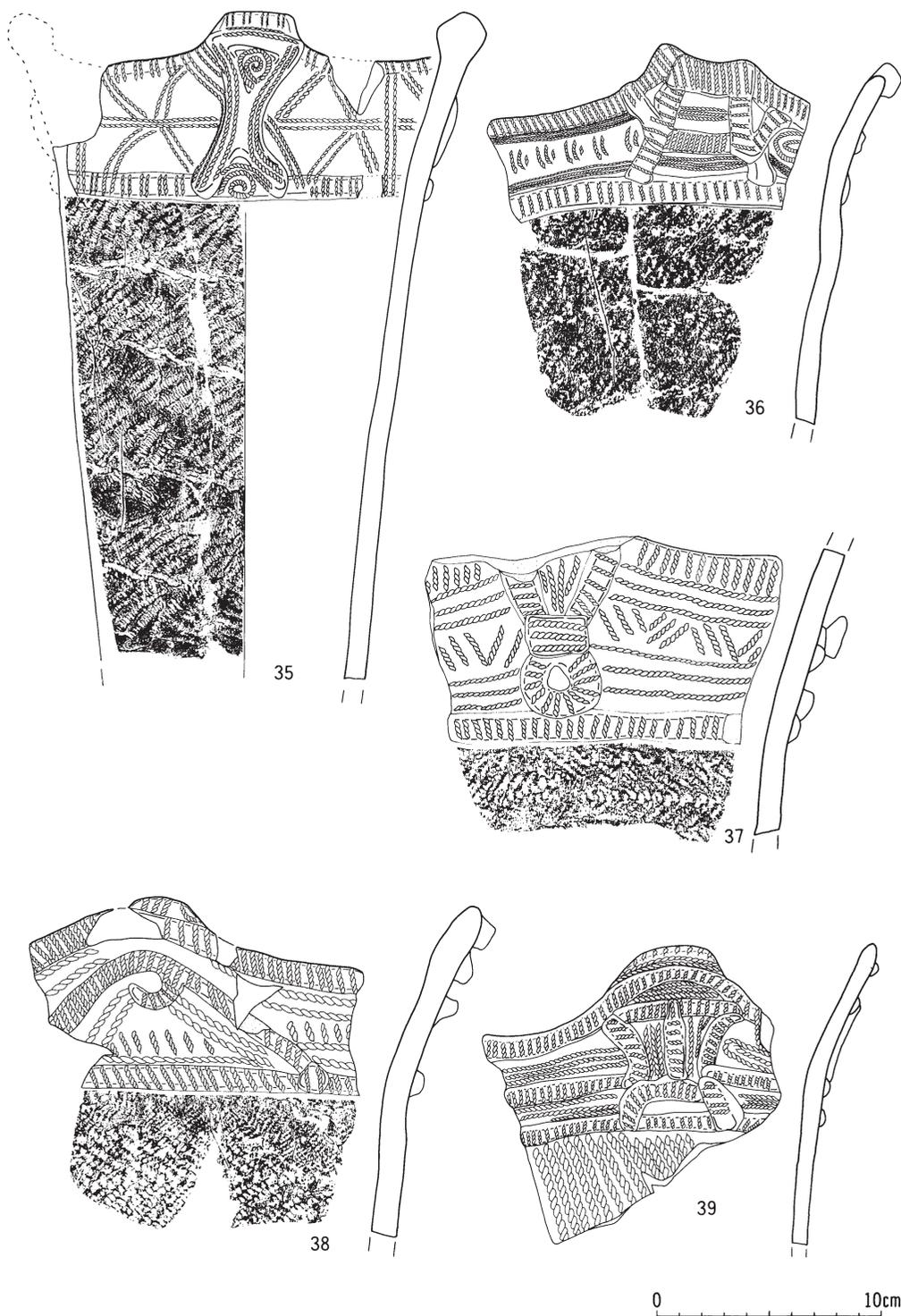
33



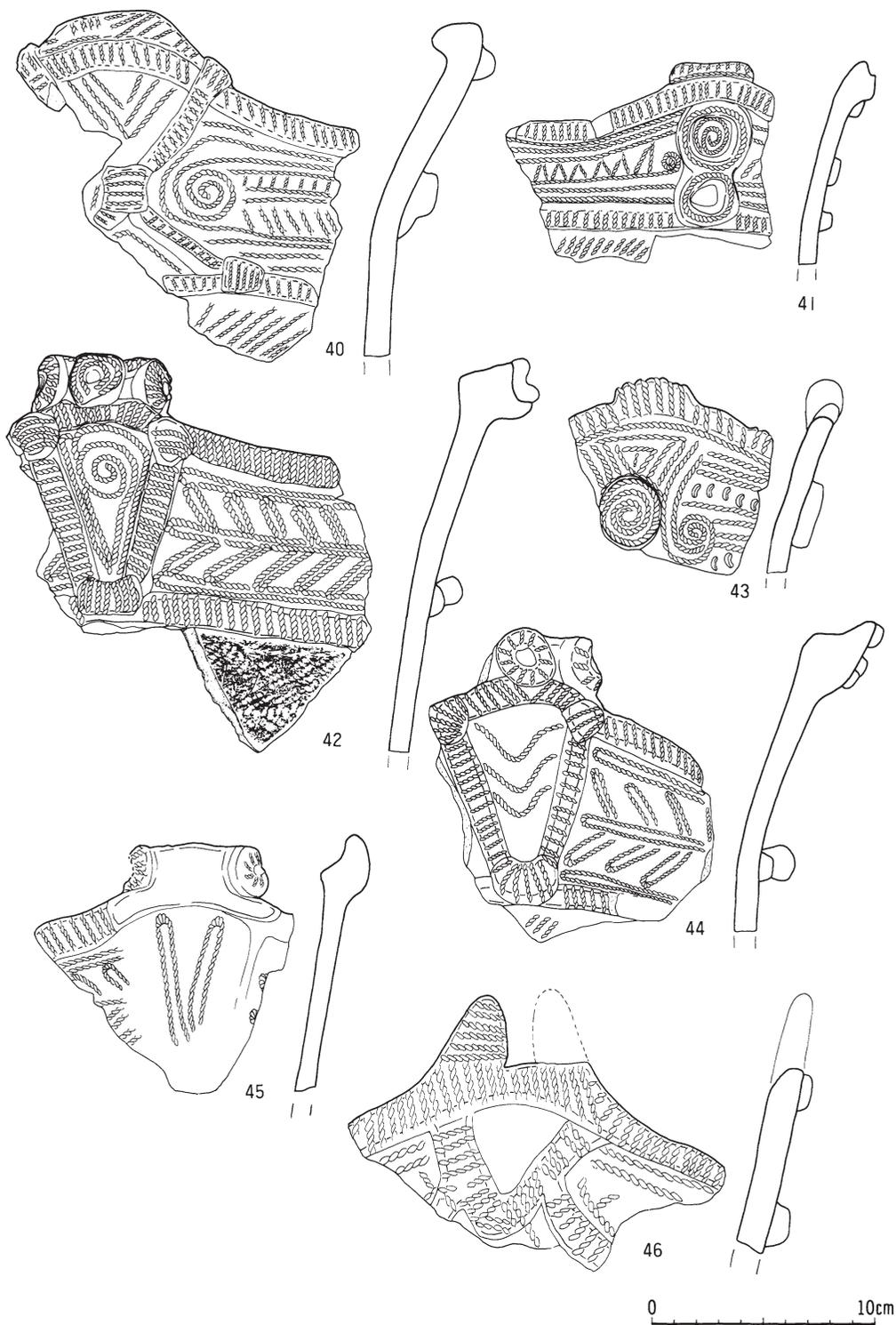
34

0 10cm

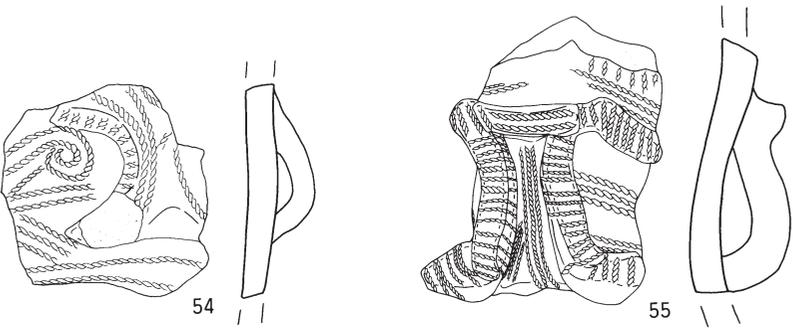
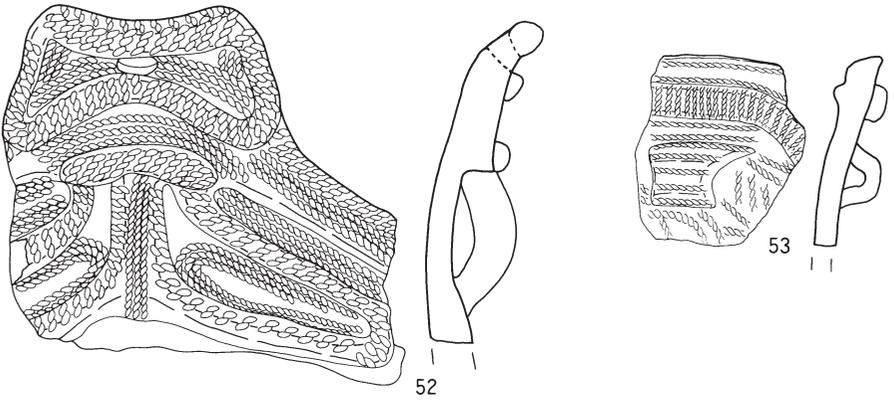
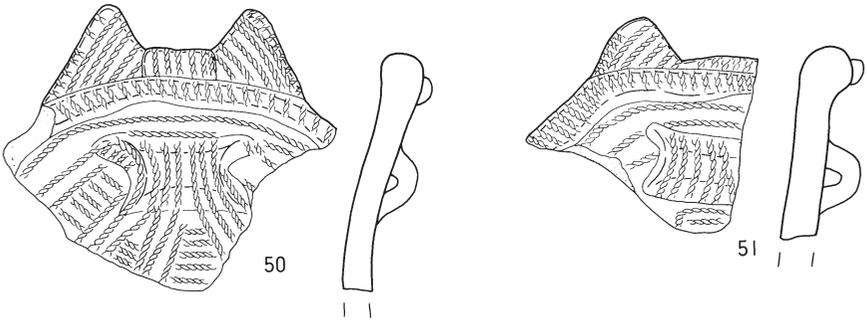
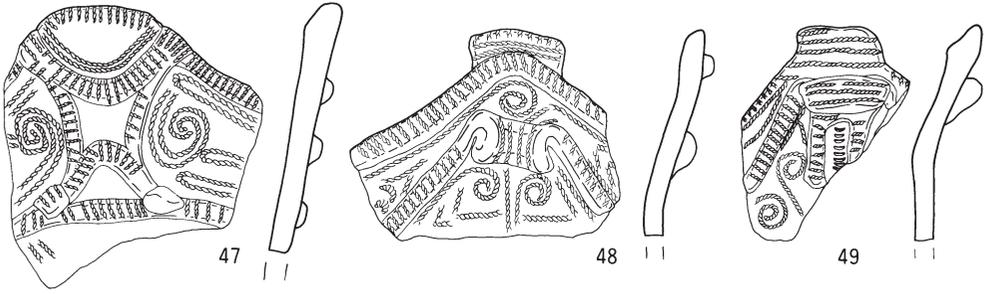
第71图 遺構外出土土器-12 (III群1類-9)



第72図 遺構外出土土器-13 (III群1類-10)

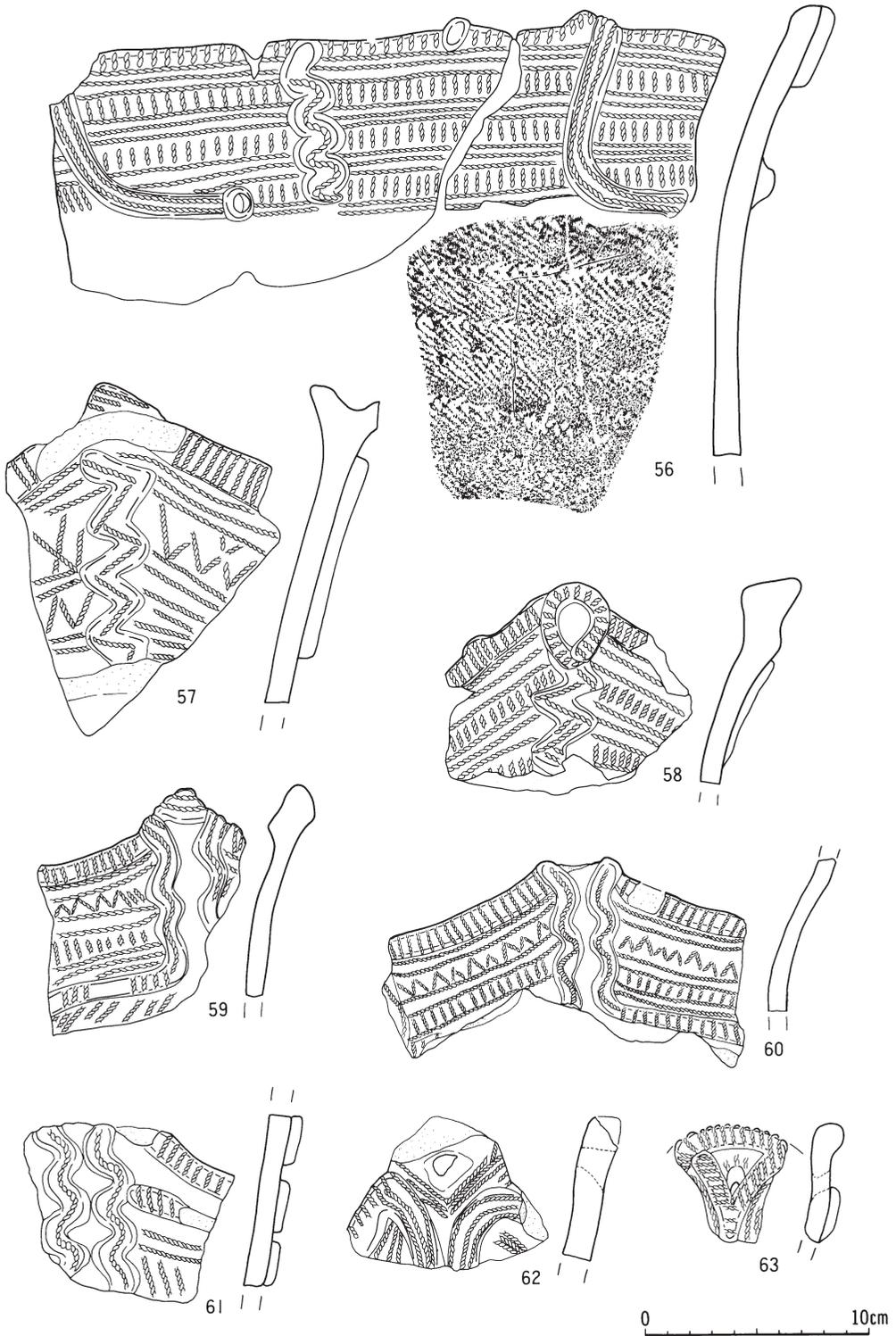


第73図 遺構外出土土器-14 (III群1類-11)

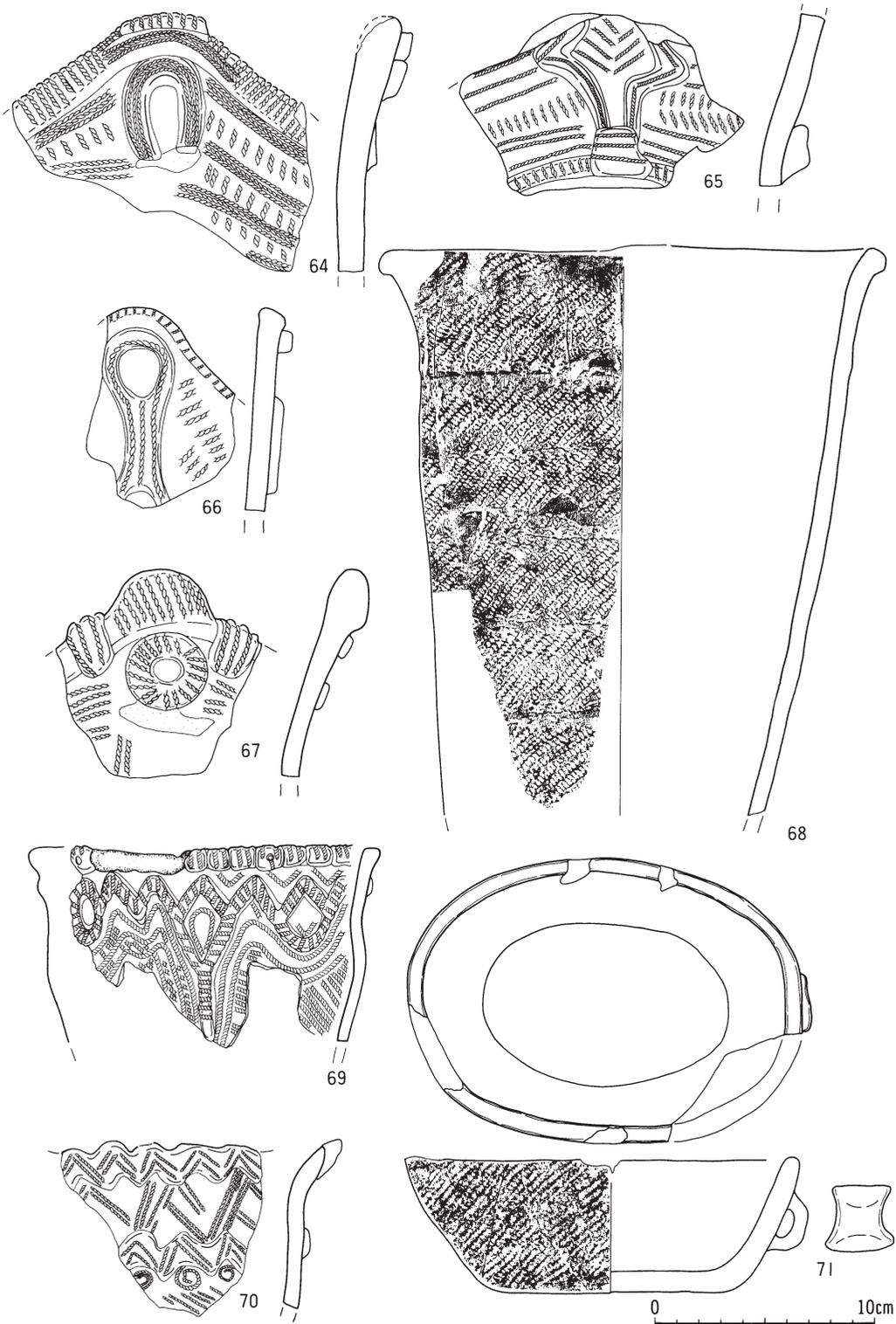


0 10cm

第74图 遺構外出土土器-15 (III群1類-12)



第75図 遺構外出土器-16 (III群1類-13)



第76图 遺構外出土土器-17 (III群1類-14)

図版番号	遺構名	階	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第63図-7	I-55	II	略完形	波状口縁(4) 擦糸圧痕	羽状縄文	III群1類	52
-8	E-28	II	口縁	波状口縁 擦糸圧痕		III群1類	496
-9	E-28	II	口縁	波状口縁 擦糸圧痕		III群1類	497
-10	I-57	II	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	81
-11	H-59	III	略完形	平口縁 擦糸圧痕	斜縄文LR 縦位ループ	III群1類	97
-12	F-32	III	略完形	波状口縁 擦糸圧痕 ボタン状突起	横位斜縄文LR	III群1類	8
-13	M-82	II	口~胴	平口縁 擦糸圧痕	羽状縄文	III群1類	407
第64図-14	L-41	II	口~胴	波状口縁 擦糸圧痕	木目状圧痕	III群1類	597
-15	K-76	III	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕 貫通孔		III群1類	598
-16	H-47	III	口縁	平口縁 擦糸圧痕		III群1類	446
-17	H-34	III	口縁	平口縁 擦糸圧痕		III群1類	453
第65図-18	I-49	II	口~胴	波状口縁(4) 擦糸圧痕	羽状縄文	III群1類	444
-19	I-50	II	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	445
-20	H-52	II	口~胴	平口縁 擦糸圧痕	斜縄文RL	III群1類	408
-21	L-80	III	口~胴	平口縁 擦糸圧痕	斜縄文 ループ	III群1類	403
-22	L-80	II	口~胴	平口縁 擦糸圧痕	斜縄文LR	III群1類	402
第66図-23	J-75	III	口~胴	波状口縁 擦糸圧痕 ボタン状突起	羽状縄文	III群1類	401
-24	H-52	II	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	409
-25	H-51	II	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	413
-26	L-80	II	口~胴	波状口縁(4) 擦糸圧痕	斜縄文LR ループ	III群1類	442
-27	G-35	III	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	486
第67図-28	J-75	III	略完形	波状口縁 擦糸圧痕 ボタン状突起	斜縄文RL	III群1類	142
第68図-29	H-52	II	略完形	波状口縁 擦糸圧痕	斜縄文LR	III群1類	147
-30	I-51	II	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	443
第69図-31	H-55	II	完形	波状口縁(4) 擦糸圧痕	羽状縄文 横位ループ	III群1類	144
第70図-32	I-55	II	略完形	波状口縁(4) 擦糸圧痕	羽状縄文 ループ	III群1類	149
第71図-33	F-33	III	略完形	波状口縁(4) 貫通孔	斜縄文RL ループ	III群1類	112
-34	D-14	II	口~胴	波状口縁(4) 擦糸圧痕 網目状圧痕	羽状縄文	III群1類	414
第72図-35	I-54	II	略完形	波状口縁(4) 擦糸圧痕	斜縄文LR 横位ループ	III群1類	88
-36	F-32	II	口~胴	波状口縁(4) 擦糸圧痕	斜縄文LR	III群1類	429
-37	G-42	II	口~胴	波状口縁 擦糸圧痕 ボタン状突起	羽状縄文	III群1類	432
-38	H-50	II	口~胴	波状口縁(4) 擦糸圧痕	羽状縄文	III群1類	412
-39	H-35	III	口~胴	波状口縁(4) 擦糸圧痕	斜縄文RL	III群1類	439
第73図-40	I-55	III	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	428
-41	H-51	II	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕 ボタン状突起	斜縄文LR	III群1類	433
-42	G-33	III	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	415
-43	K-75	I	口縁	波状口縁 ボタン状突起		III群1類	495
-44	G-33	III	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	417
-45	G-33	III	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	420
-46	F-34	II	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	430
第74図-47	G-34	II	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	438
-48	G-35	III	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	424
-49	G-35	III	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕		III群1類	467
-50	G-44	II	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕 橋状把手		III群1類	419
-51	G-43	II	口縁	波状口縁(4) 擦糸圧痕 橋状把手		III群1類	423

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第74図-52	G-43	II	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕 貫通孔	斜縄文LR	III群1類	416
-53	G-44	II	口縁	波状口縁 捺糸圧痕 橋状把手		III群1類	426
-54	H-34	III	口縁	波状口縁 捺糸圧痕 橋状把手		III群1類	425
-55	G-33	III	口縁	波状口縁 捺糸圧痕 橋状把手		III群1類	418
第75図-56	J-74	III	口~胴	平口縁 捺糸圧痕	羽状縄文	III群1類	599
-57	G-43	II	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群1類	448
-58	N-45	III	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕 ボタン状突起	斜縄文LR	III群1類	449
-59	G-33	III	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III群1類	451
-60	G-33	III	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群1類	447
-61	G-33	III	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群1類	450
-62	E-26	II	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕 貫通孔	斜縄文LR	III群1類	422
-63	G-34	III	口縁	波状口縁 捺糸圧痕 貫通孔		III群1類	427
第76図-64	D-20	III	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群1類	434
-65	H-55	II	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群1類	440
-66	G-33	III	口縁	波状口縁 捺糸圧痕 斜縄文LR		III群1類	436
-67	D-20	III	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕 ボタン状突起	斜縄文LR	III群1類	441
-68	H-45	III	口~胴	平口縁 口唇部に短い隆帯(4)	斜縄文LR	III群1類	94
-69	H-57	III	口~胴	平口縁 ボタン状突起	捺糸圧痕	III群1類	437
-70	H-50	III	口縁	波状口縁 捺糸圧痕 波状に隆帯		III群1類	435
-71	M-81	II	完形	平口縁	斜縄文RL 橋状把手	III群1類	69

## 2類 (第77~79図)

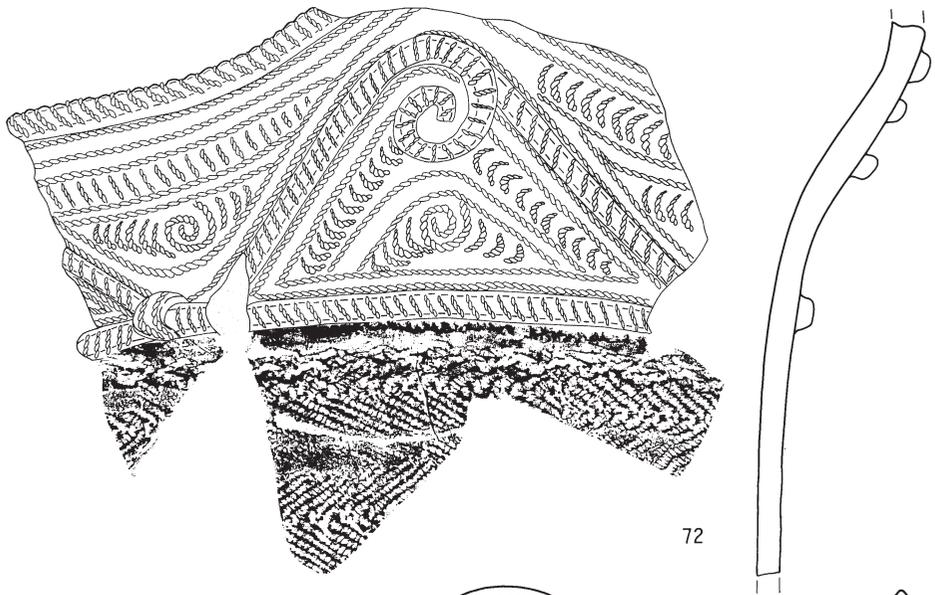
円筒上層b式を一括した。

主たる文様構成は1類と大きな差はないが、馬蹄形の捺糸圧痕が施文されたものをこの類とした。

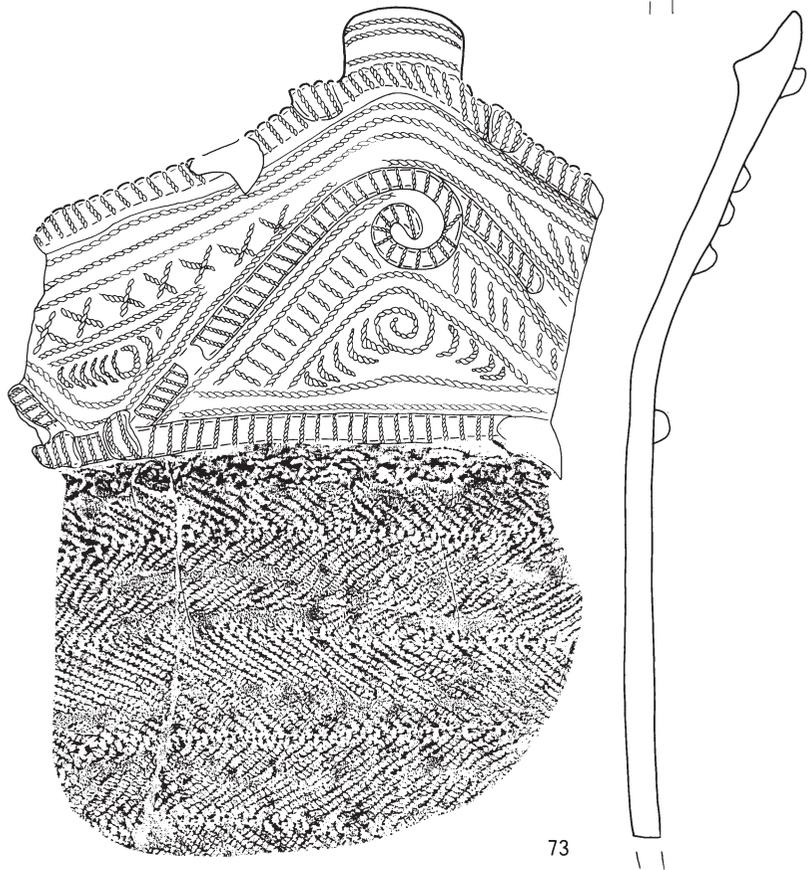
口頸部文様帯は、1類と同様に粘土紐の貼付けによる隆帯、及び捺糸圧痕による文様施文である。72はやや長めの馬蹄形の捺糸圧痕と、短線圧痕の両者がみられ、73は短線圧痕の比率が高い。74は「八」の字状の短線圧痕と併用されている。75・76・78は横位の捺糸圧痕の間に馬蹄形の捺糸圧痕が細かく充填されており、他は概ね間隔が広めに施文されている。

87は口縁部直下に鋸歯状に蛇行する隆帯を貼り付けており、1類の69・70などと同様に、他の個体とは文様構成を異にしているが、施文技法により本類とした。隆帯の特徴などは3類に近いものである。

本類は出土点数が少なく、全体形を知り得る資料も少ないため、胴部文様及び内面調整などに多く言及できないが、概ね1類とに差はないようである。胎土・焼成もほぼ同様である。ただ、77などにみられるように、突起が大きく延びるものや、82のような口頸部文様帯が広がるものが認められる。



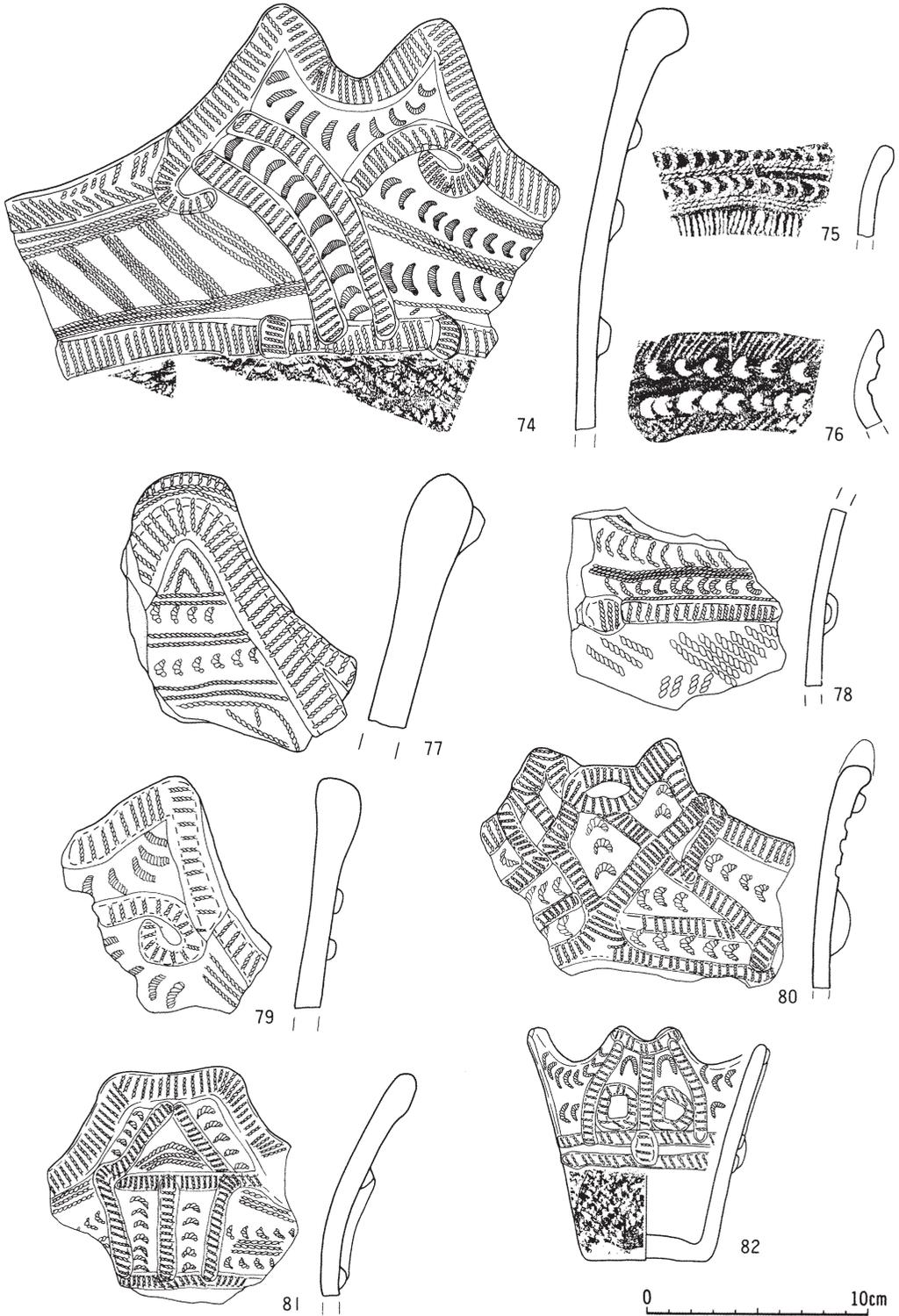
72



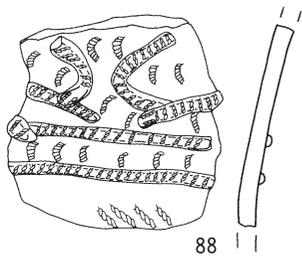
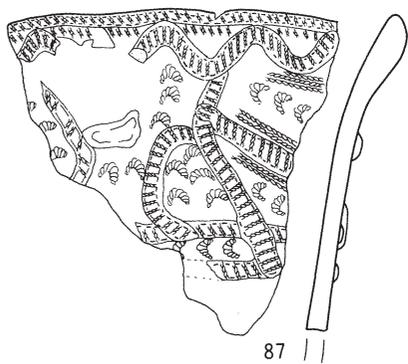
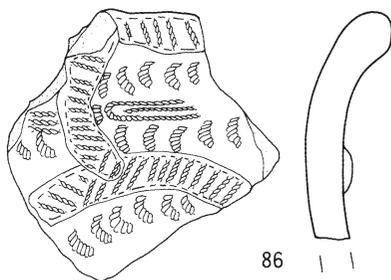
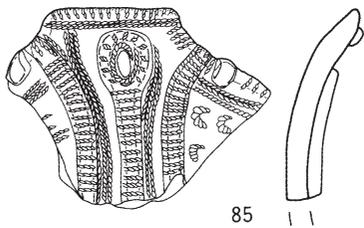
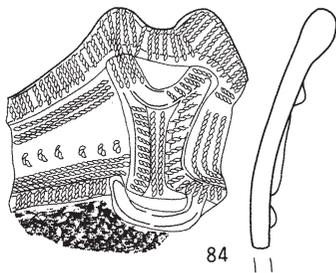
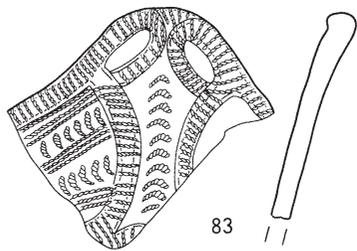
73

0 10cm

第77圖 遺構外出土土器-18 (III群2類-1)



第78图 遺構外出土土器-19 (III群2類-2)



0 10cm

第79図 遺構外出土土器-20 (III群2類-3)

### 3類 (第80～83図)

円筒上層c式を一括した。

文様構成は、例外があるものの、1・2類における横位の撚糸圧痕が、細身の隆帯に替わり、短線圧痕または馬蹄形の撚糸圧痕が刺突に替わっている。隆帯上の圧痕は、1・2類と同様である。ただ、隆帯上にこの圧痕を省略するものもある。隆帯は細身の雑な貼付けが多く、幅・断面など一定していないものが多い。また、口縁部直下に蛇行する鋸歯状の隆帯の貼付けがみられるものも多い。

突起は、幅広の弁状突起が大半を占め、突起上方に楕円形の隆帯や同様の貫通孔をもつものがみられる。また、胴部上半まで口頸部文様帯が下がって来る傾向がみられる。

胴部の文様は、縄文施文のものがほとんどで、1・2類と大差はない。ただ、ループ文は認められないようである。

### 4類 (第84図)

円筒上層d式を一括した。

細い隆帯を主文様構成とするもので、縄文を地文とするものと、無文地に隆帯を貼りつけるものとがみられる。口縁部には蛇行する隆帯が貼り付けられる。115・117～119は胸骨文である。114は円竹管による連続刺突がみられる。また、文様帯は胴部中位まで及んでいる。

### 5類 (第85図－120・121・第87図－122)

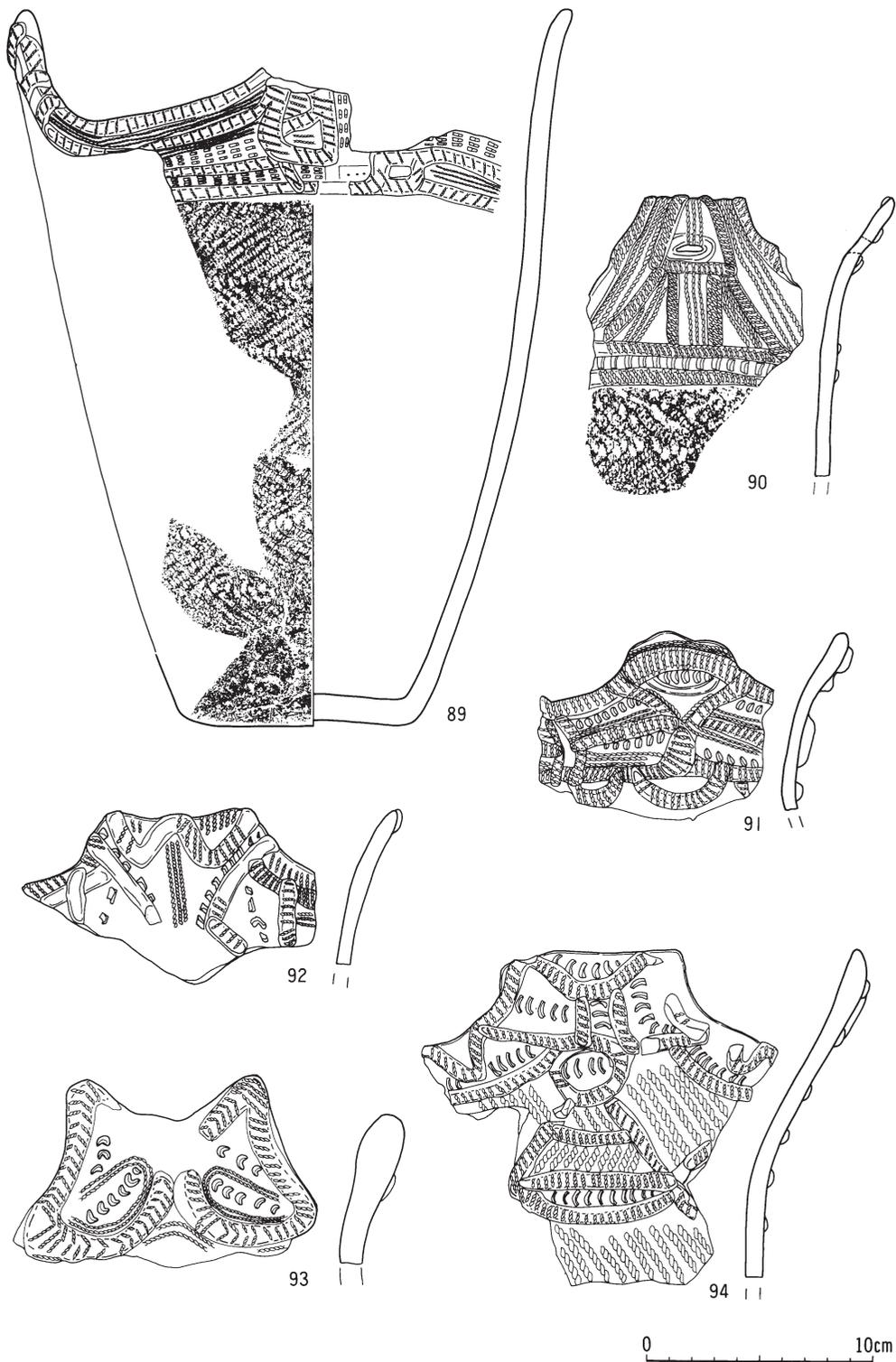
円筒上層e式を一括したが、本類としたものは3点と非常に少量である。

口縁部直下まで、地文の縄文が施文されており、隆帯上には絡条体によるものと考えられる圧痕が施文されている。122は隆帯によって菱形に区画された突起部分の破片で、内面にも三角形の隆帯がみられる。

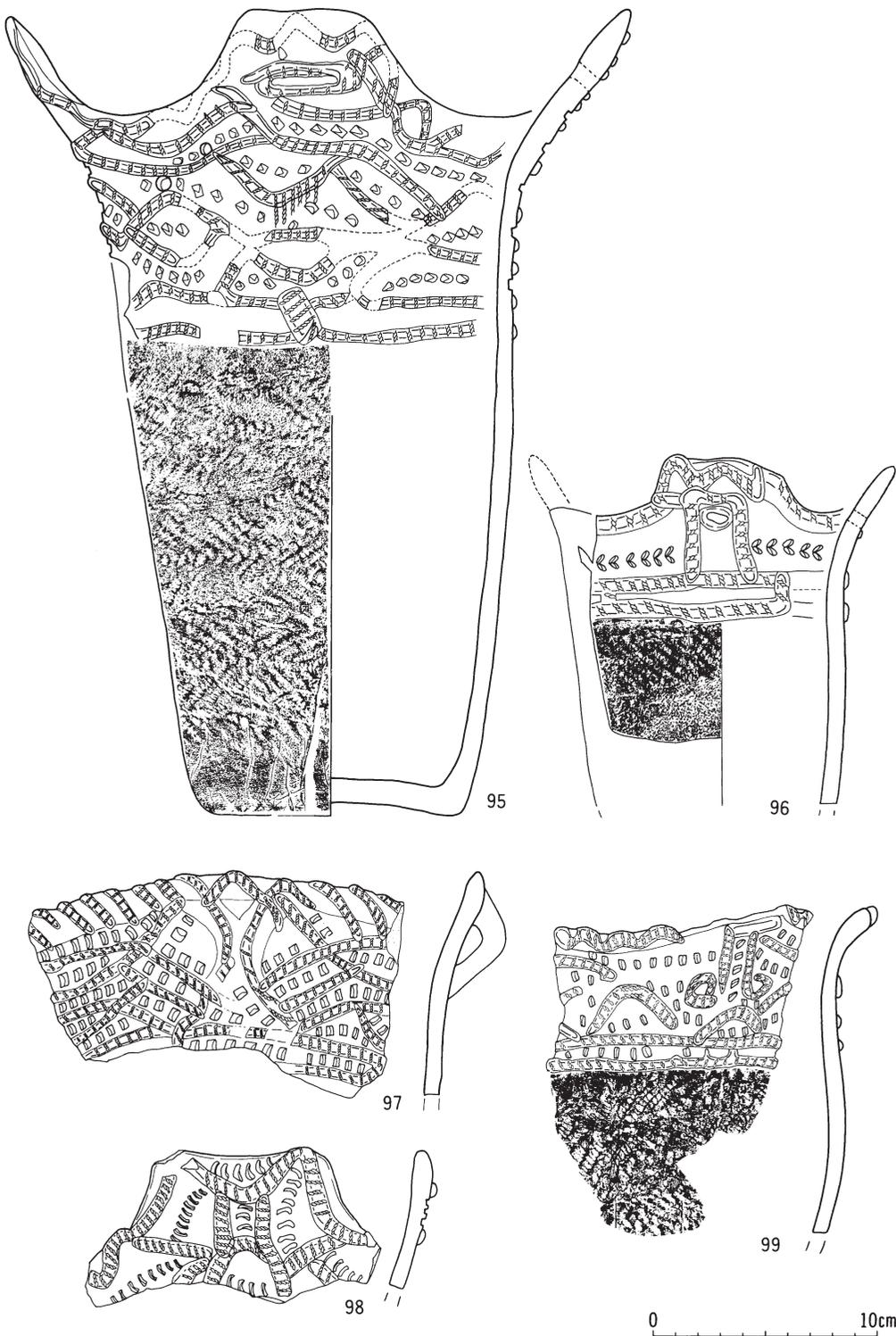
### 6類 (第85図－123～第87図)

円筒上層式と考えられるが、型式を特定できないものを一括した。

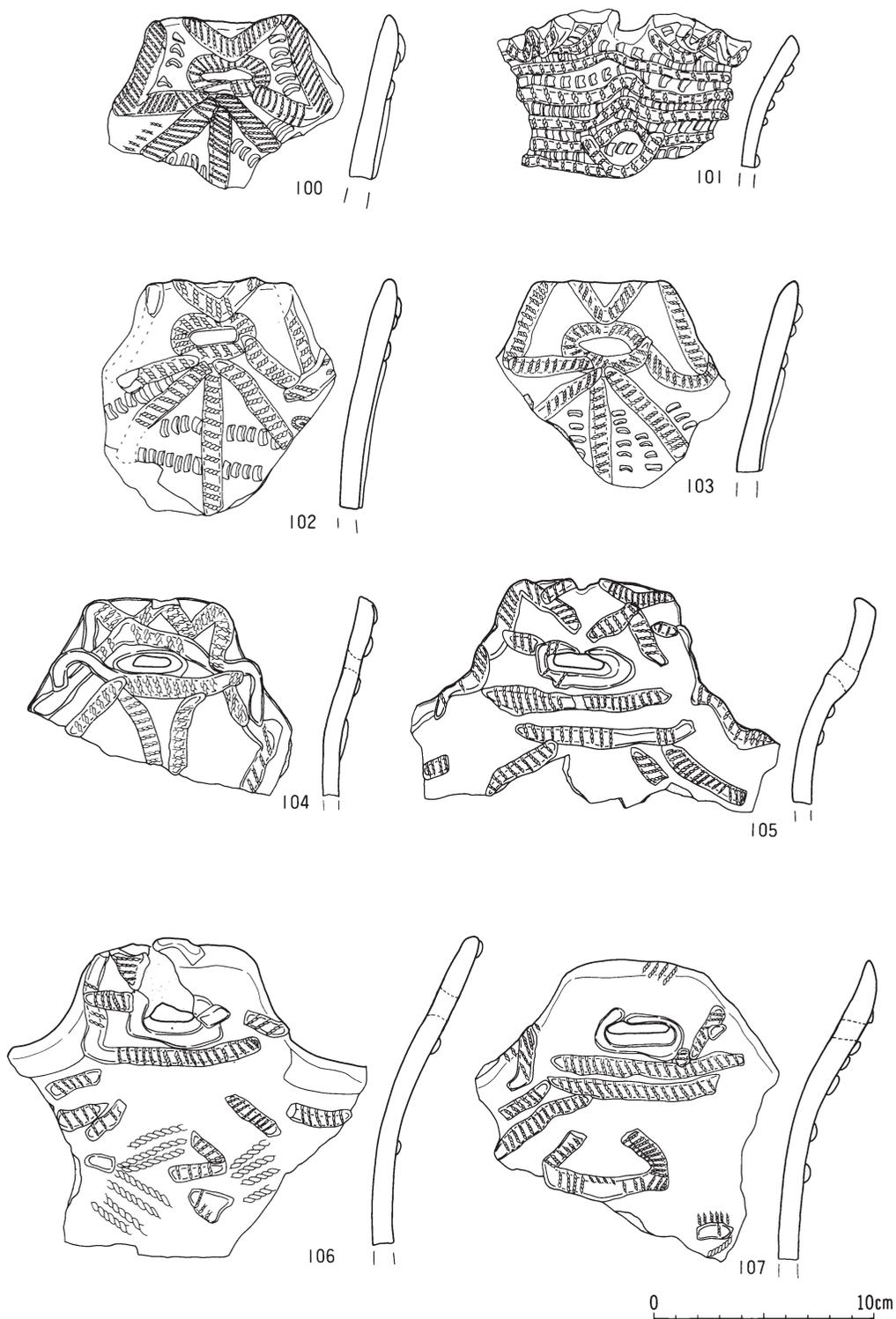
123はb式、124はc・d式と考えられるが特定できない。129は絡条体による胴部から底部の破片であるが、胎土中には繊維の混入は認められない。a式の範疇にはいる可能性が高い。130～135・137～141は縄文だけが施文されたものである。多くは羽状縄文を施文しているが、135は縦走する縄文が施文された特殊な例である。136は透かし入りの台部の破片である。



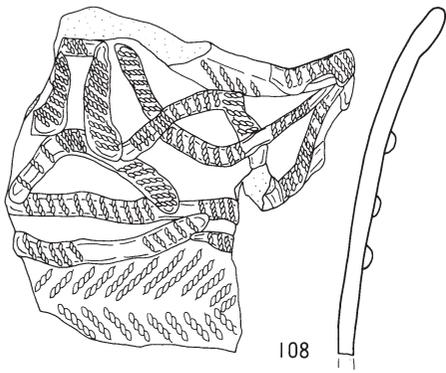
第80图 遺構外出土土器-21 (III群3類-1)



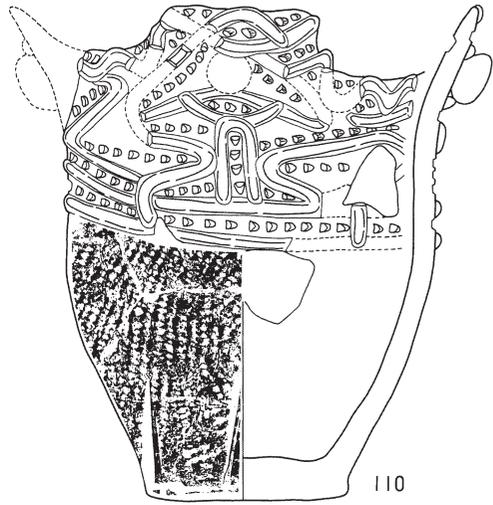
第81図 遺構外出土土器-22 (Ⅲ群3類-2)



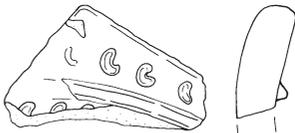
第82図 遺構外出土土器-23 (III群3類-3)



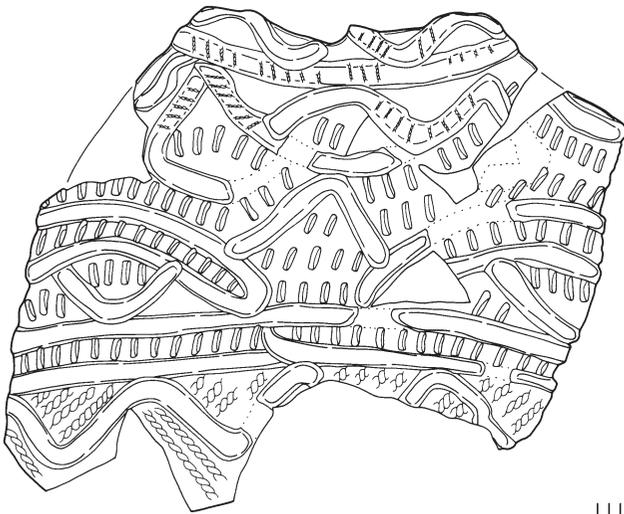
108



110



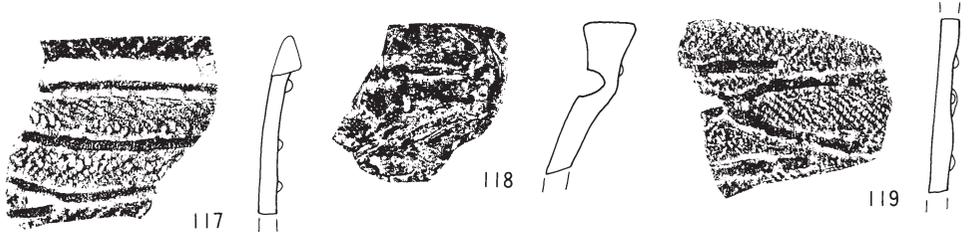
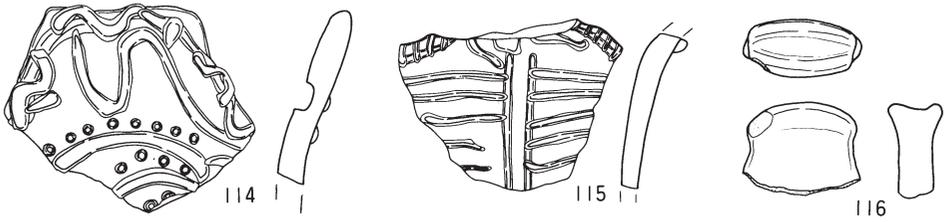
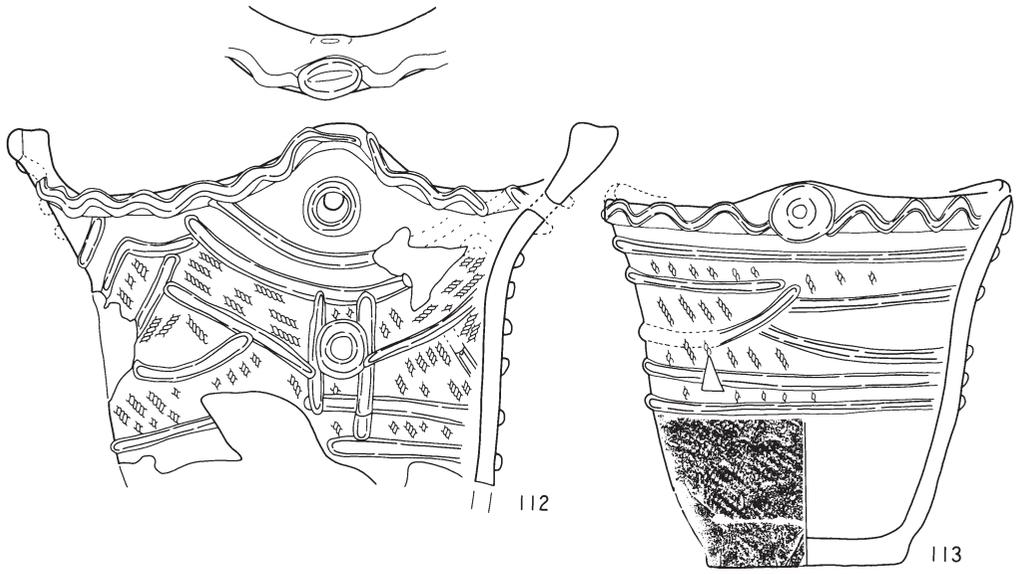
109



111

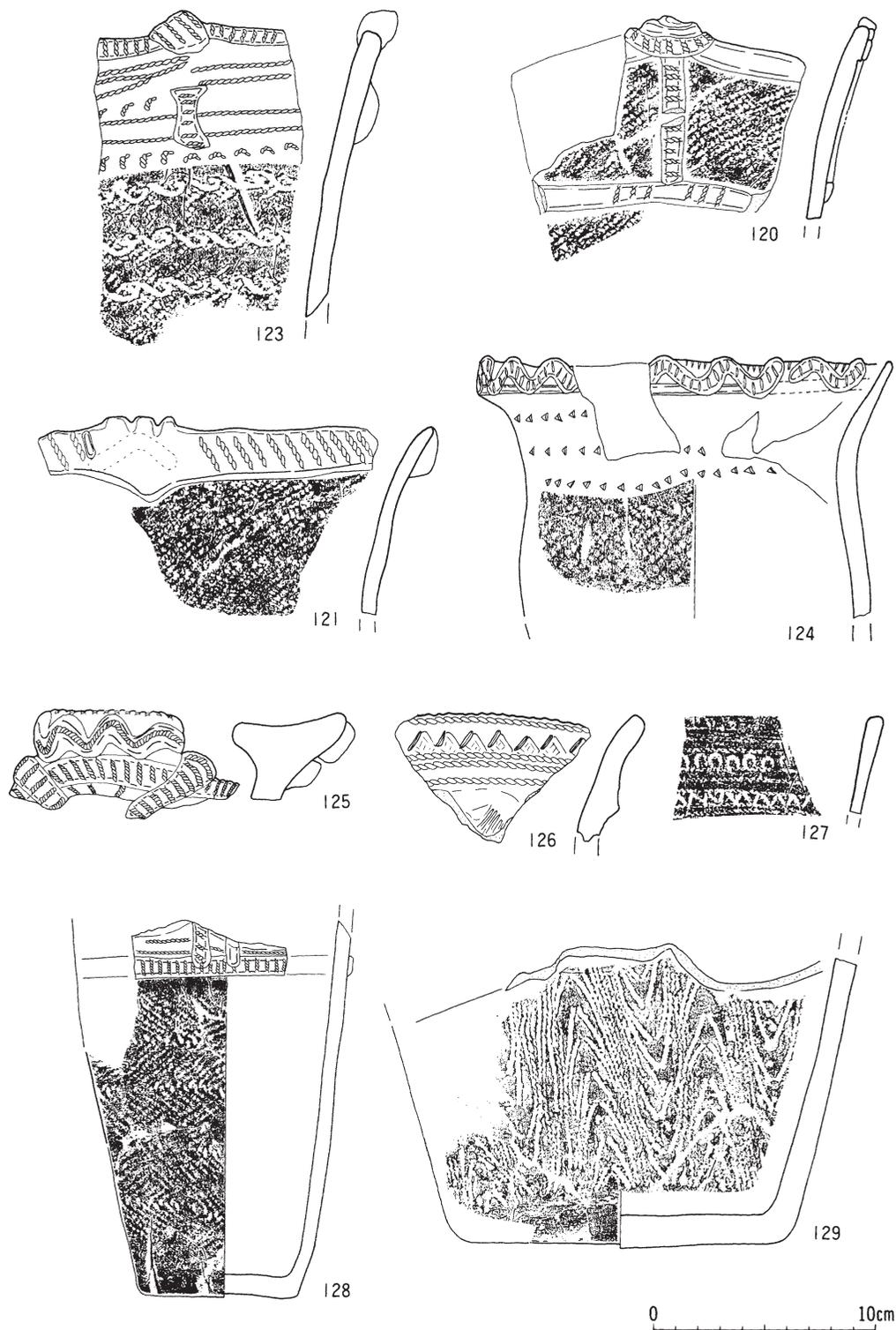
0 10cm

第83図 遺構外出土土器-24 (Ⅲ群3類-4)

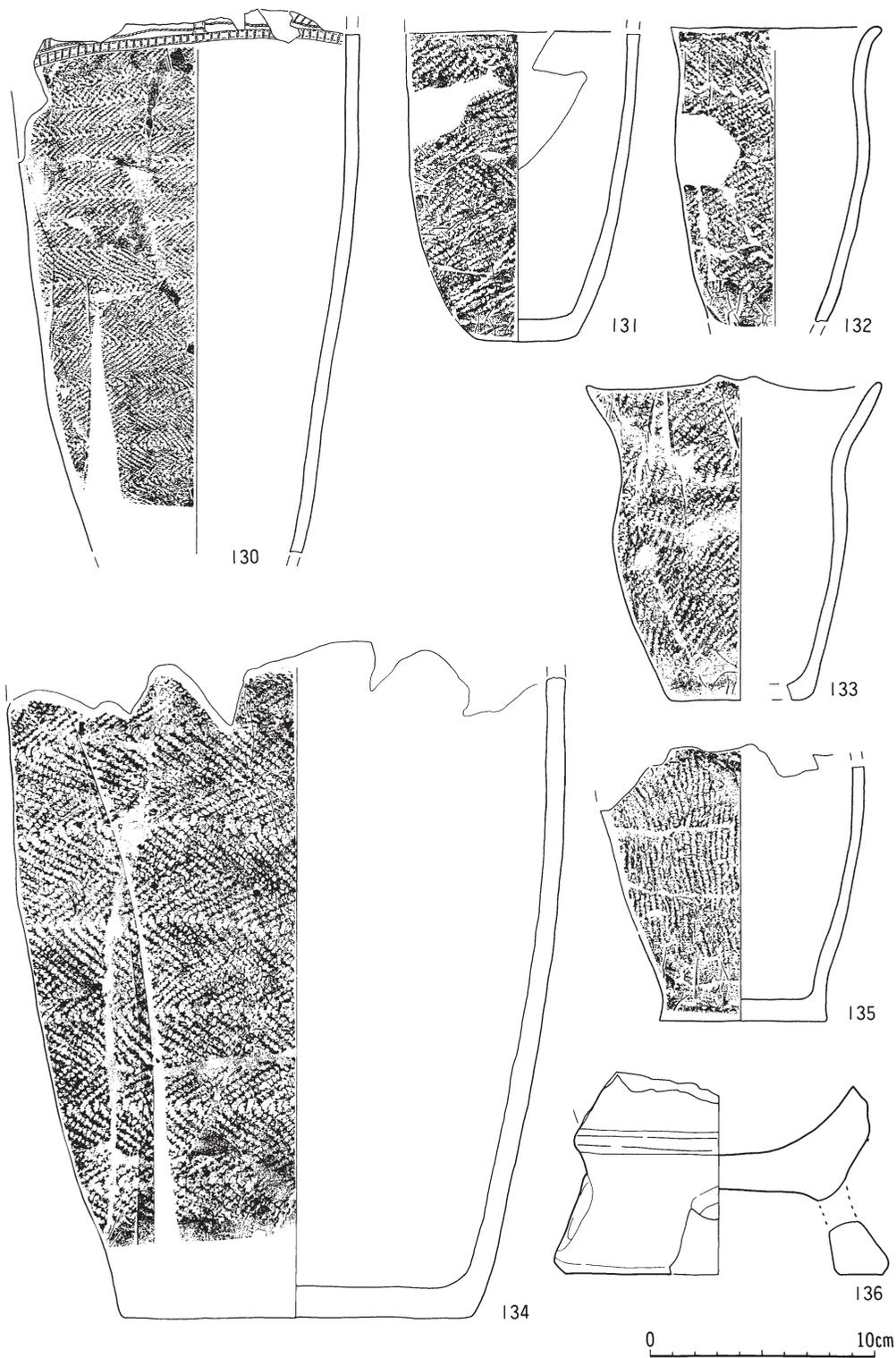


0 10cm

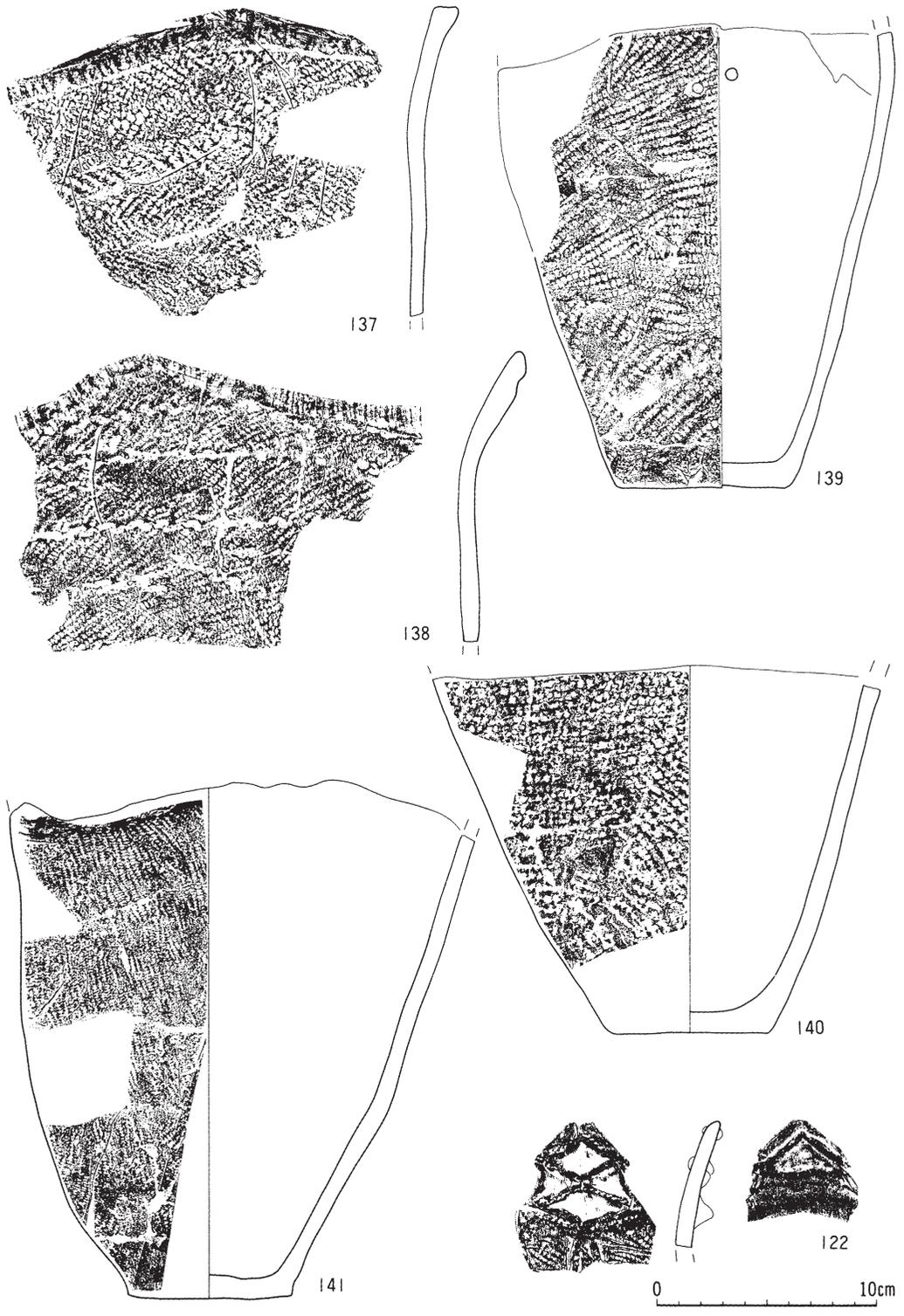
第84图 遺構外出土土器-25 (III群4類)



第85圖 遺構外出土器—26 (Ⅲ群5類・6類—1)



第86図 遺構外出土土器-27 (III群6類-2)



第87図 遺構外出土土器-28 (III群6類-3)

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第77図-72	H-50	III	口~胴	波状口縁(4) 捺糸圧痕	羽状縄文	III群2類	411
-73	H-50	II	口~胴	波状口縁(4) 捺糸圧痕	羽状縄文	III群2類	410
第78図-74	H-51	II	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群2類	452
-75	G-33	III	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III群2類	468
-76	F-33	III	口縁	平口縁 捺糸圧痕		III群2類	469
-77	G-51	II	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III群2類	454
-78	G-33	III	口~胴	捺糸圧痕	羽状縄文	III群2類	466
-79	I-51	II	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群2類	458
-80	G-33	III	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群2類	456
-81	E-30	III	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群2類	462
-82	H-35	III	口~底	波状口縁 捺糸圧痕	斜縄文LR	III群2類	617
第79図-83	G-33	III	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群2類	464
-84	H-55	II	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群2類	481
-85	F-33	III	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群2類	460
-86	I-38	III	口縁	波状口縁 捺糸圧痕		III群2類	459
-87	H-33	III	口縁	平口縁 捺糸圧痕		III群2類	455
-88	H-48	III	口縁	捺糸圧痕		III群2類	465
第80図-89	H-54	II	略完形	波状口縁 刺突文	羽状縄文	III群3類	100
-90	D-19	III	口~胴	波状口縁(4) 刺突文 貫通孔	羽状縄文	III群3類	480
-91	G-50	II	口縁	波状口縁(4) 刺突文		III群3類	475
-92	G-34	III	口縁	波状口縁(4) 刺突文		III群3類	471
-93	F-30	II	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群3類	457
-94	F-31	III	口~胴	波状口縁(4) 刺突文	羽状縄文	III群3類	477
第81図-95	E-26	II	完形	波状口縁 刺突文 貫通孔	羽状縄文	III群3類	115
-96	F-32	II	口~胴	波状口縁(4) 捺糸圧痕 貫通孔	斜縄文RL	III群3類	41
-97	E-19	III	口縁	平口縁 刺突文 橋状把手		III群3類	474
-98	F-32	II	口縁	波状口縁(4) 刺突文		III群3類	484
-99	H-35	III	口~胴	波状口縁 刺突文	羽状縄文LR	III群3類	138
第82図-100	H-36	III	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕 ボタン状突起	斜縄文LR	III群3類	461
-101	H-34	II	口縁	波状口縁(4) 刺突文 貫通孔		III群3類	482
-102	H-34	III	口縁	波状口縁(4) 刺突文		III群3類	473
-103	H-34	III	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕 ボタン状突起	斜縄文LR	III群3類	463
-104	H-49	II	口縁	波状口縁(4) 貫通孔		III群3類	479
-105	G-33	III	口縁	波状口縁(4) 貫通孔		III群3類	470
-106	G-33	III	口~胴	波状口縁(4) 貫通孔	羽状縄文	III群3類	478
-107	G-33	III	口縁	波状口縁(4) 貫通孔		III群3類	476
第83図-108	H-49	II	口~胴	波状口縁(4)	羽状縄文	III群3類	483
-109	G-40	III	略完形	波状口縁(4) 刺突文 ボタン状突起	斜縄文LR	III群3類	63
-110	H-42	I	口縁	波状口縁 刺突文		III群3類	485
-111	F-34	III	口縁	波状口縁 刺突文		III群3類	596
第84図-112	H-35	III	口縁	波状口縁 ボタン状突起 貫通孔	斜縄文LR	III群4類	83
-113	I-45	III	略完形	波状口縁(3) ボタン状突起	斜縄文RL 隆帯による胸骨文	III群4類	44
-114	H-47	III	口縁	波状口縁(4) 刺突文		III群4類	472
-115	E-29	II	口~胴	波状口縁	胸骨文	III群4類	488
-116	G-34	III	口縁	波状口縁(4)		III群4類	491

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第84図-117	H-40	II	口～胴	平口縁	羽状縄文 胸骨文	III群 4類	487
-118	G-40	III	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群 4類	490
-119	H-55	II	胴部		羽状縄文 胸骨文	III群 4類	489
第85図-120	I-52	II	口縁	波状口縁 折返状口縁 斜縄文LR		III群 5類	584
-121	I-58	II	口～胴	平口縁 ひし形状貼付	斜縄文LR	III群 5類	494
第87図-122	H-48	III	口縁	波状口縁(4) 沈線文 ひし形状貼付	斜縄文LR	III群 5類	493
第85図-123	H-39	III	口～胴	平口縁 捺糸圧痕 橋状把手	斜縄文RL ループ	III群 6類	421
-124	I-48	II	口～胴	平口縁 刺突文 2列	斜縄文LR	III群 6類	163
-125	H-50	II	口縁	波状口縁(4) 捺糸圧痕		III群 6類	431
-126	F-22	III	口縁	平口縁 捺糸圧痕 刺突文		III群 6類	498
-127	I-52	II	口縁	平口縁 捺糸圧痕		III群 6類	586
-128	H-54	II	胴～底		羽状縄文	III群 6類	28
-129	L-41	II	胴～底		木目状圧痕	III群 6類	594
第86図-130	J-75	II	胴部		羽状縄文	III群 6類	146
-131	I-55	II	胴～底		斜縄文RL	III群 6類	26
-132	H-55	II	略完形	平口縁	斜縄文LR ループ	III群 6類	24
-133	H-50	II	略完形	波状口縁	斜縄文LR	III群 6類	25
-134	H-45	III	胴～底		羽状縄文	III群 6類	126
-135	I-49	II	胴～底		縦位縄文LR	III群 6類	16
-136	E-29	III	底部		貫通孔	III群 6類	610
第87図-137	K-76	III	口～胴	波状口縁(4)	羽状縄文	III群 6類	406
-138	F-34	II	口～胴	波状口縁(4)	斜縄文LR ループ	III群 6類	405
-139	H-55	III	胴～底		横位斜縄文LR 補修孔	III群 6類	107
-140	I-58	III	胴～底		横位斜縄文LR	III群 6類	60
-141	I-52	II	胴～底		斜縄文LR	III群 6類	75

#### 第IV群土器

円筒上層式以降の大木系の土器を本群として一括した。出土量は円筒上層式土器に次ぐが、特徴の少ない破片が多く、型式を特定し得るものは円筒土器よりも少ない。

##### 1類 (第88～99図)

榎林式に相当するものを本類とした。明瞭に文様構成を確認できたもの以外、特に胴部破片は、2類以降のものとも類似点多いため区別できなかった。

器形は、深鉢形を基本としている。キャリパー形を主体としているが、口縁部直下でくびれずに直線的なものや、内湾するものなどが存在する。口縁部は緩やかな波状を呈し、2～4個の山形の突起を持つ。中型以上のは口縁部が肥厚し、山形突起には円形、または渦巻き文を施文している。また、これらは肉厚の沈線を口縁部に一巡させている。

小型のものは薄手の作りで、口縁部もあまり肥厚していない。また、折り返し口縁のものも多くみられる。この類の多くは口縁部が無文帯となっており、折り返し部分から下位に縄文が施文されているが、口唇部まで縄文施文のものもみられる。折り返し口縁以外の平常に立ち上がる口縁部のは、概ね口縁部直下まで縄文が施文されている。

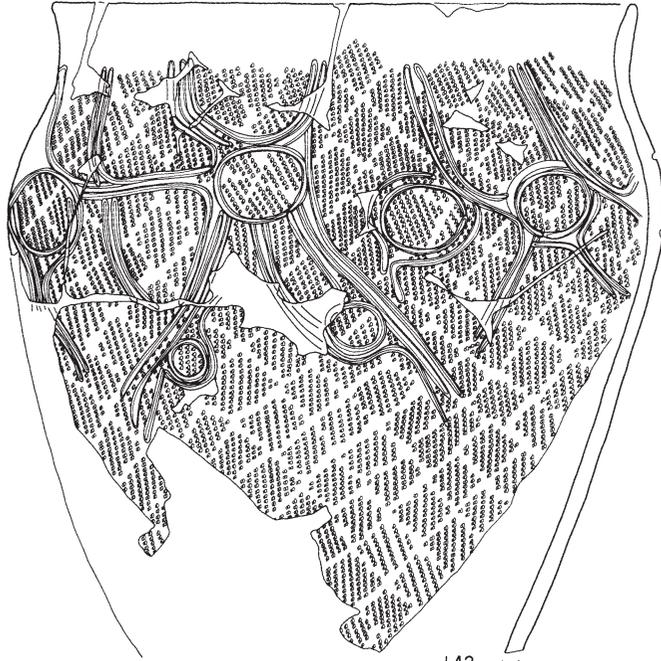
文様構成は、口縁部の無文帯と縄文施文の後に、沈線及び刺突が施文される。沈線は弧状または渦巻き文とこれらを連結する曲線を主体としている。

口縁部の文様帯は、概して狭いものであるが、小型の146～148は広めに構成されており、胴部との区画文様以外は無文である。口縁部との区画には1条ないし数条の横位沈線を巡らしているものがみられる。また、刺突列及び刺突と沈線との併用がなされているものもある。

刺突は、円竹管や棒状の工具によるもので、押し引き気味に施文された短沈線状のものも多い。

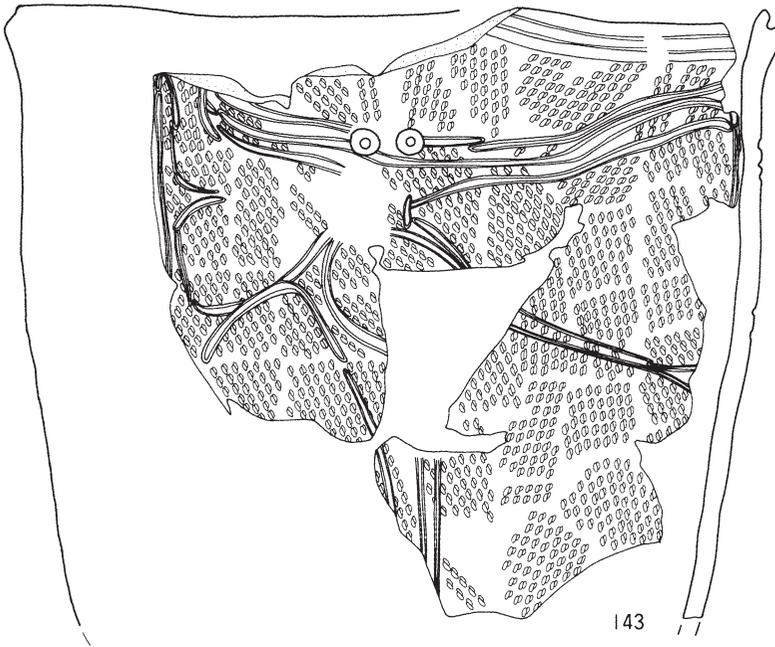
地文となる縄文は、やや太めの原体による横位回転の斜行縄文が主体を占めるが、144等のような横走縄文や、168・169等に見られるような縦走縄文も施文される。また、170・172のような擦痕によるものもみられる。

胎土は概ね吟味されているが、砂粒の混入が多く、色調は全体に黒っぽいものが多い傾向がみられる。焼成は良好で、内面の調整も良好である。



142

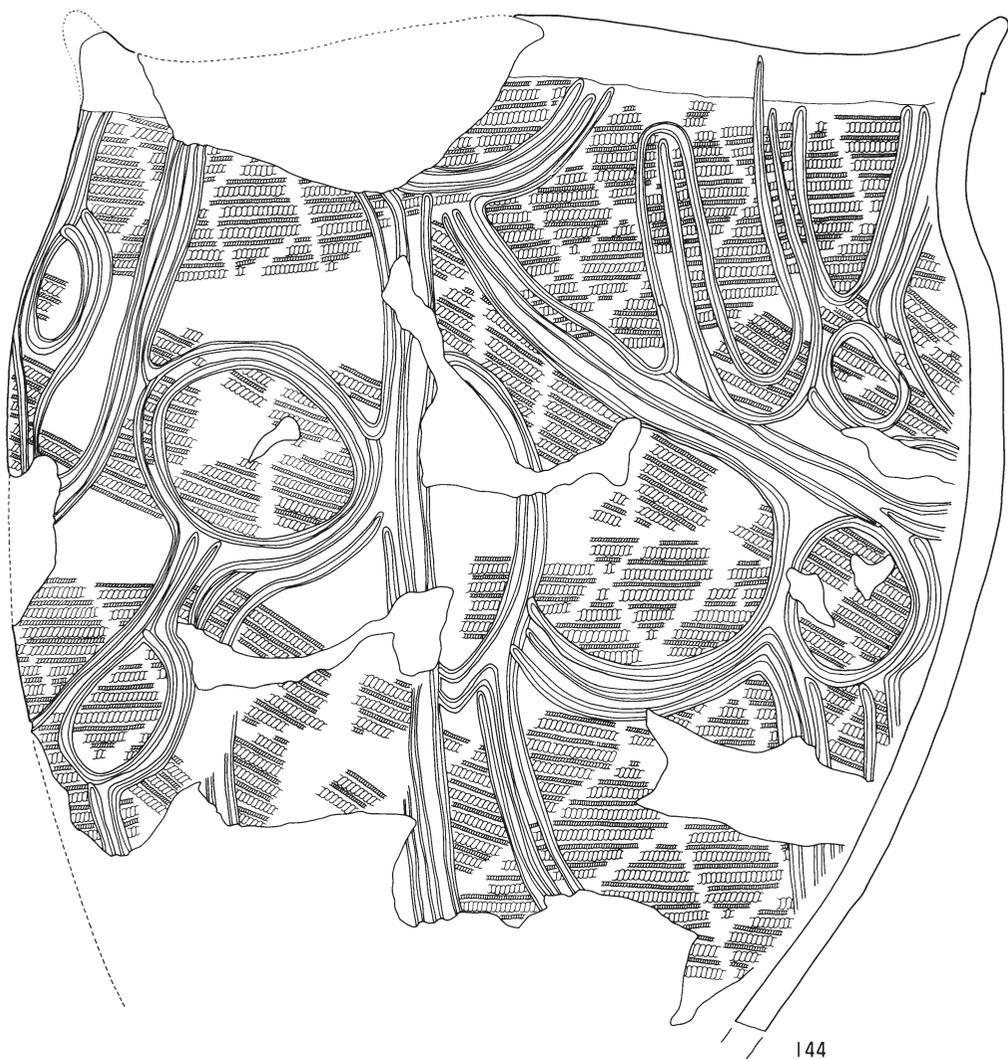
0 20cm



143

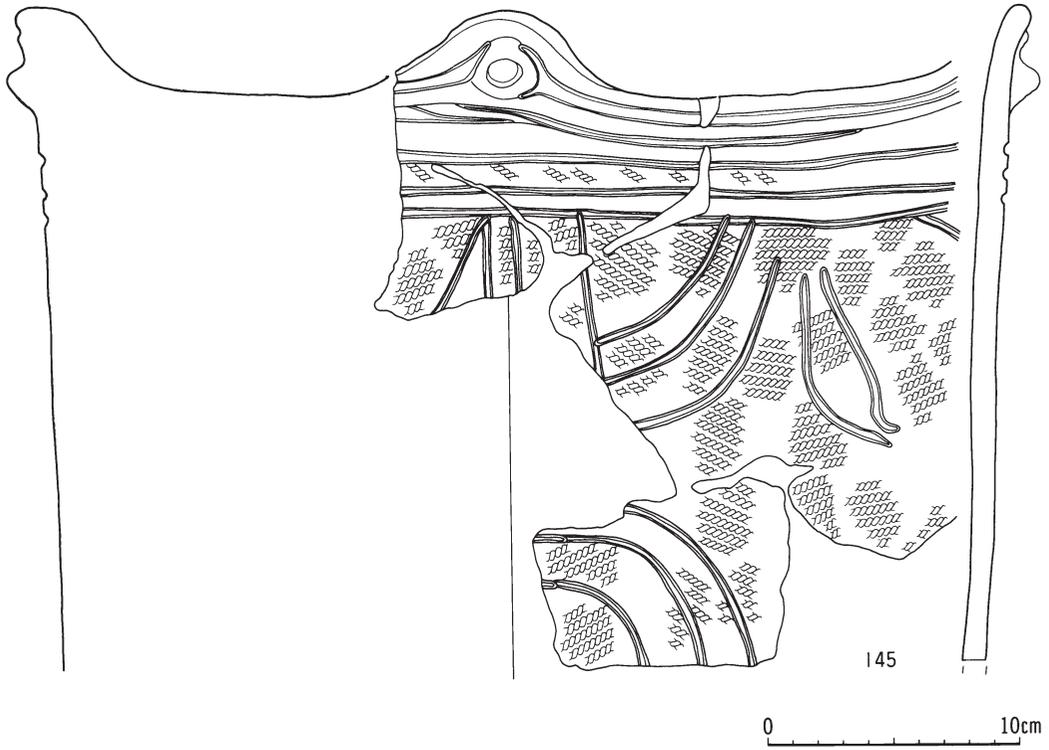
0 10cm

第88図 遺構外出土土器-29 (IV群1類-1)

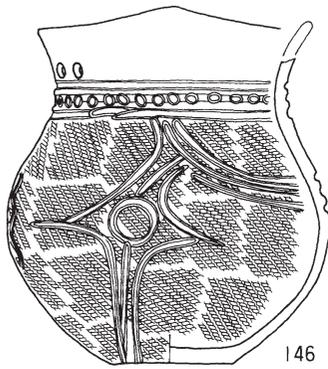


0 10cm

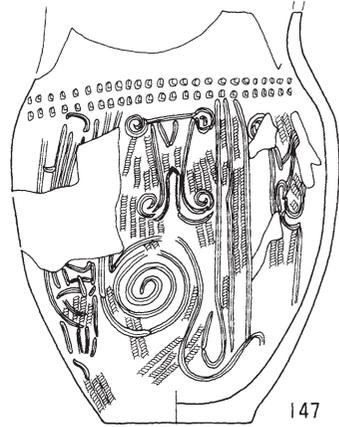
第89図 遺構外出土土器-30 (IV群1類-2)



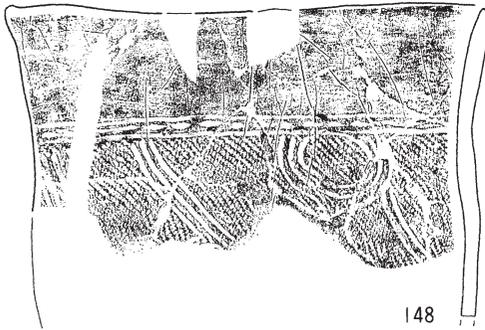
第90図 遺構外出土土器-31 (IV群1類-3)



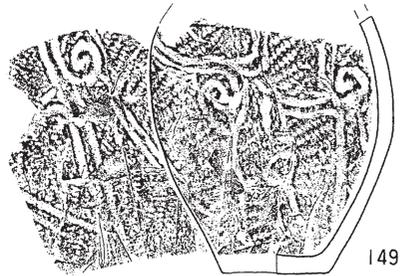
146



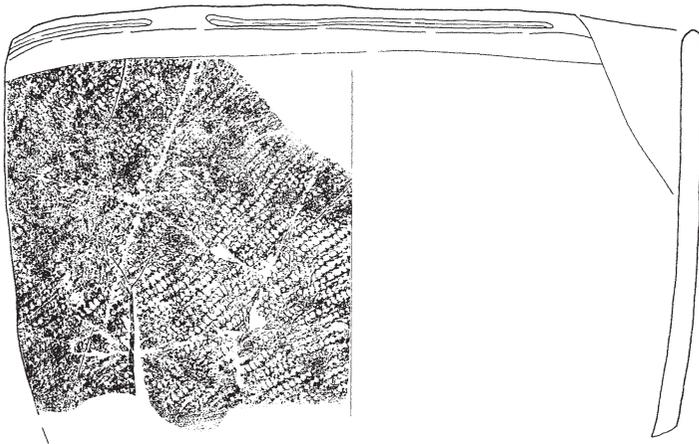
147



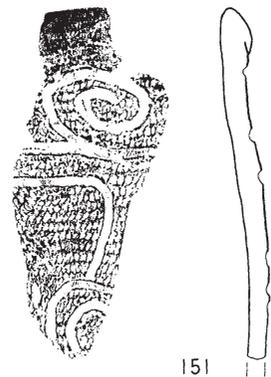
148



149



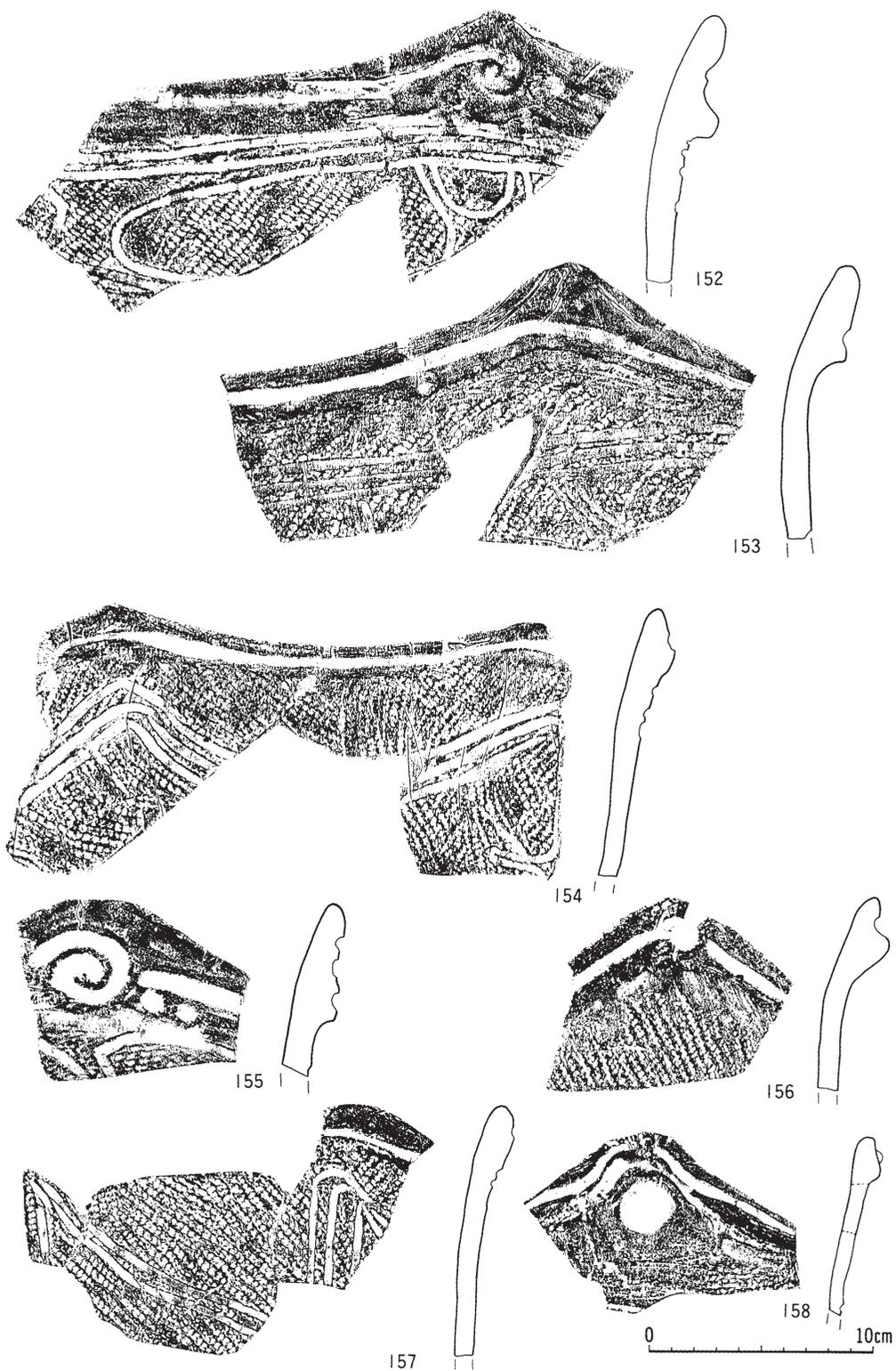
150



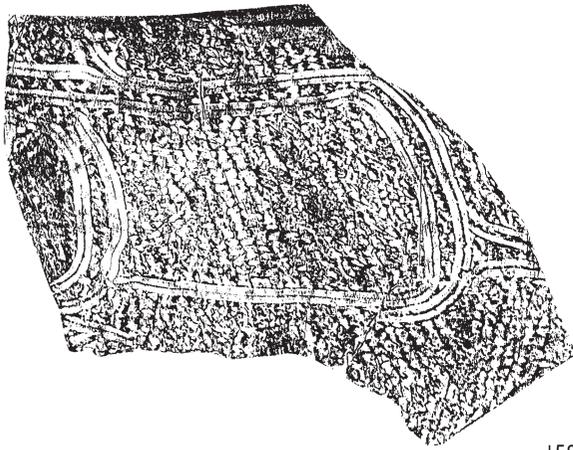
151

0 10cm

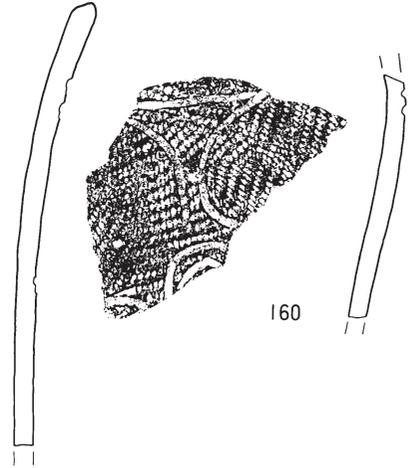
第91図 遺構外出土土器-32 (IV群1類-4)



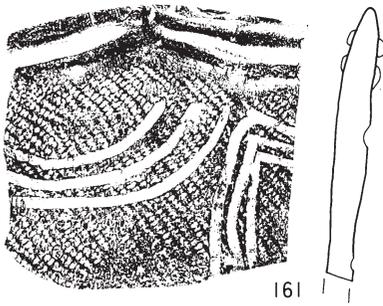
第92圖 遺構外出土土器-33 (IV群1類-5)



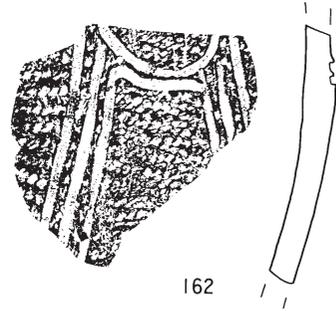
159



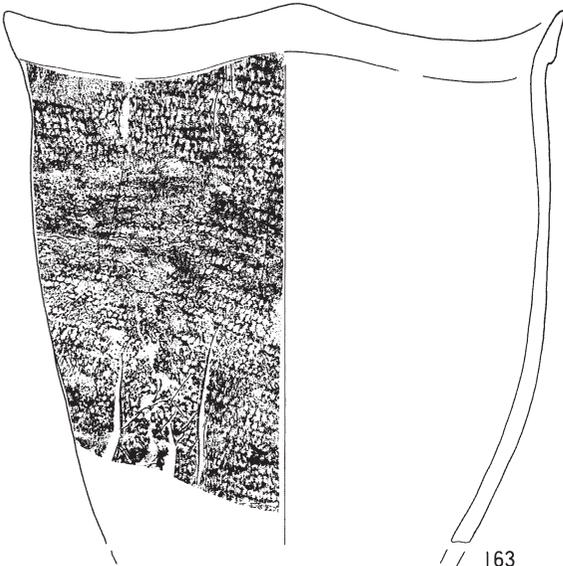
160



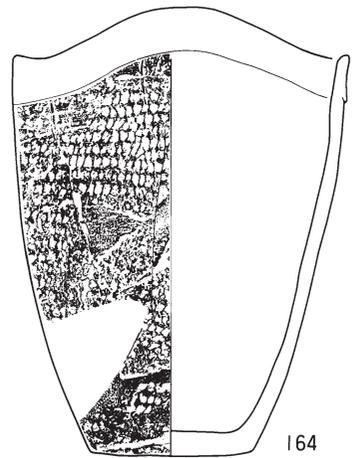
161



162



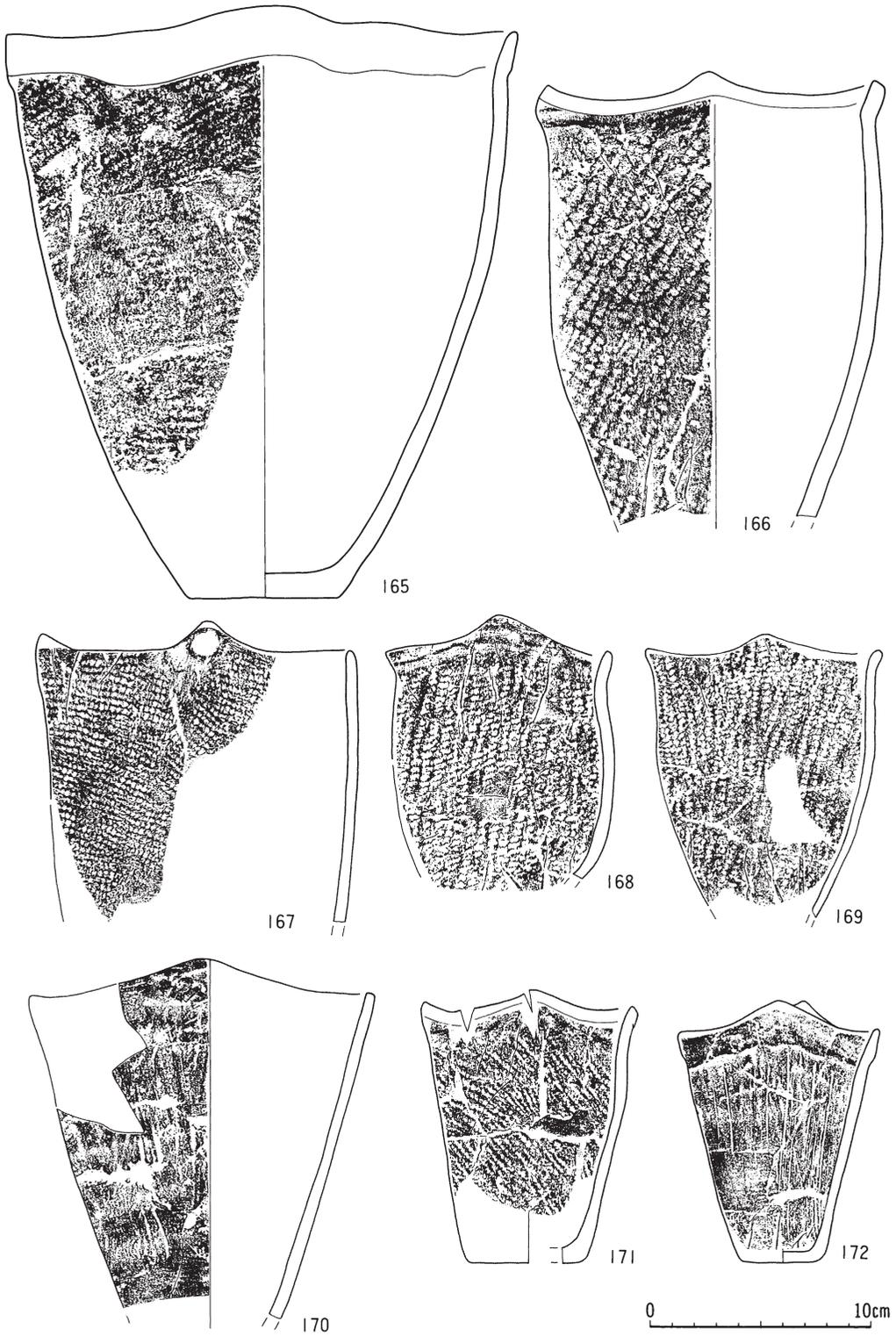
163



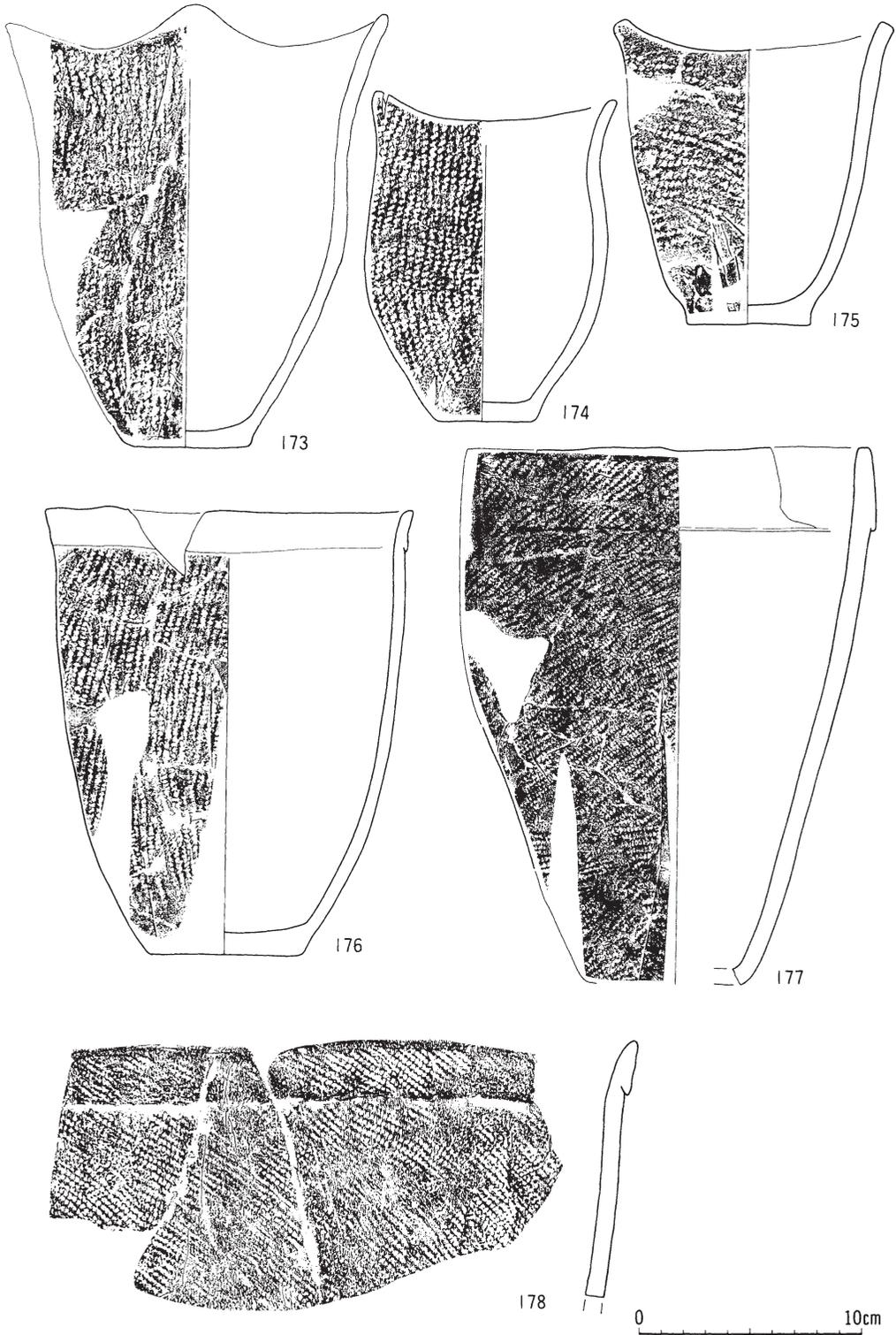
164

0 10cm

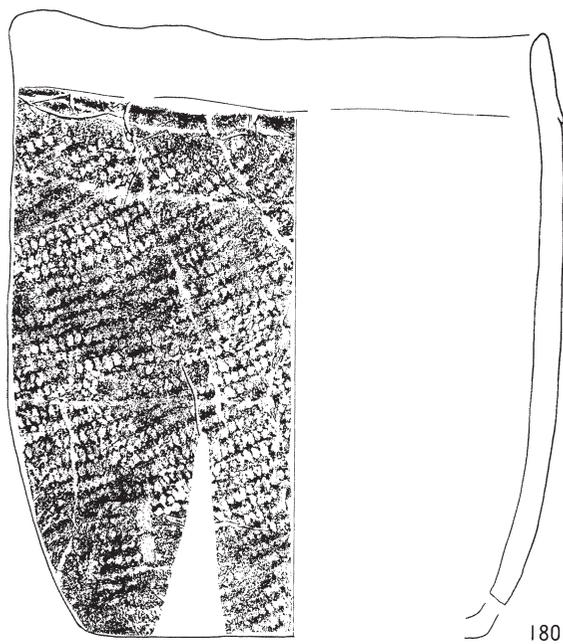
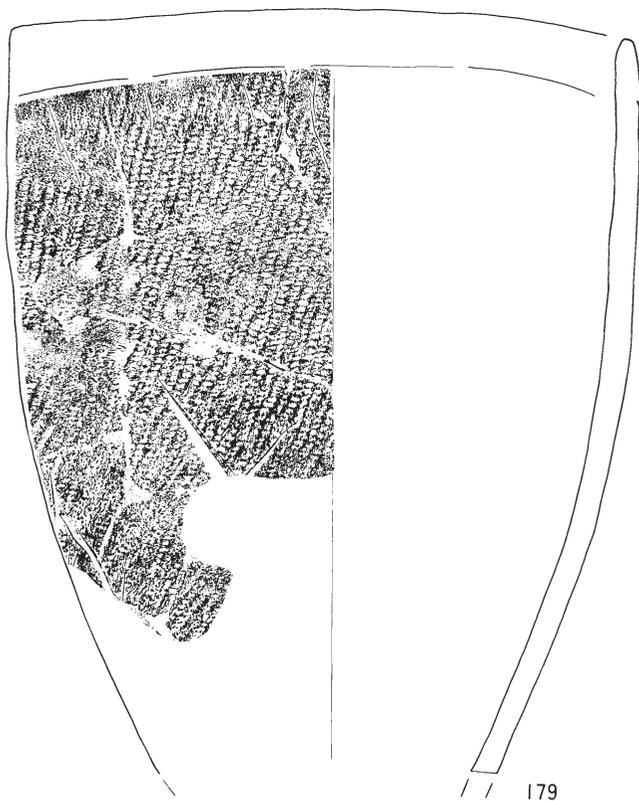
第93図 遺構外出土土器-34 (IV群1類-6)



第94図 遺構外出土土器-35 (IV群1類-7)

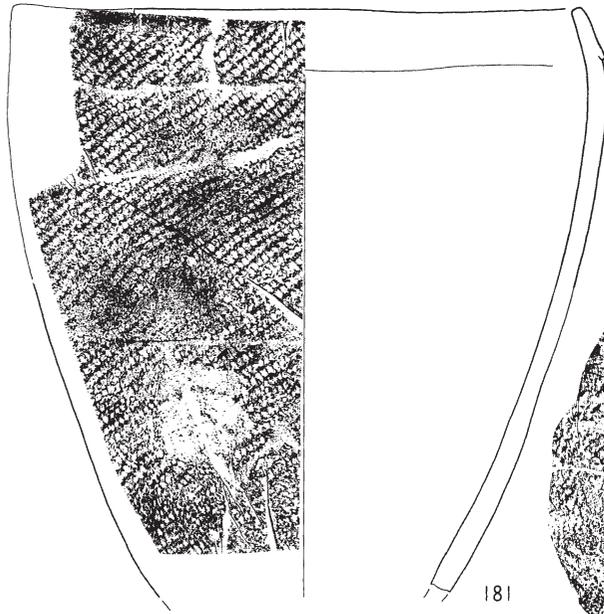


第95図 遺構外出土土器-36 (IV群1類-8)

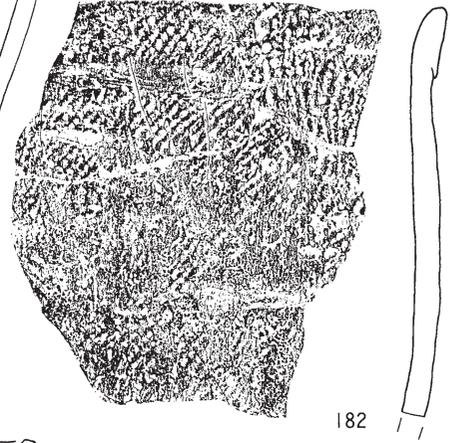


0 10cm

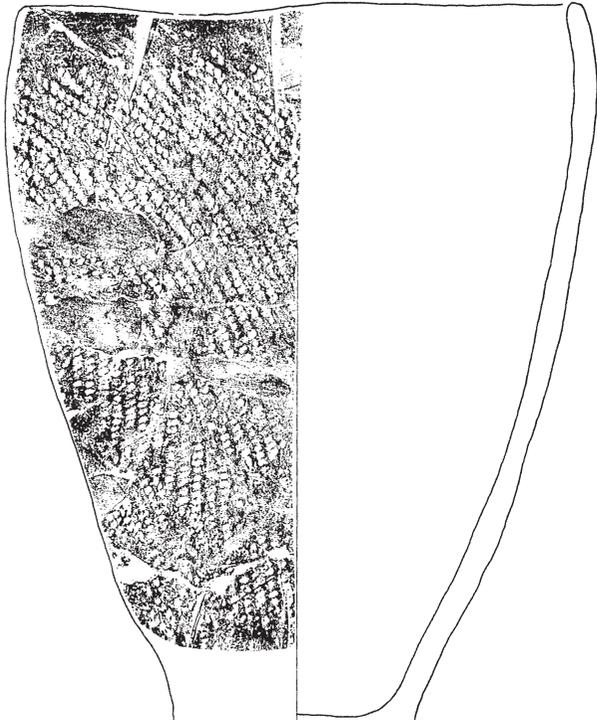
第96図 遺構外出土土器-37 (IV群1類-9)



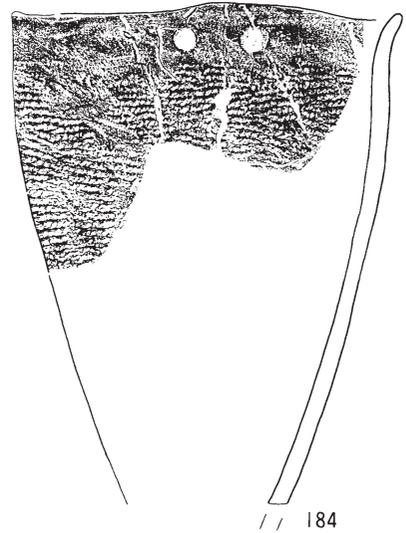
181



182



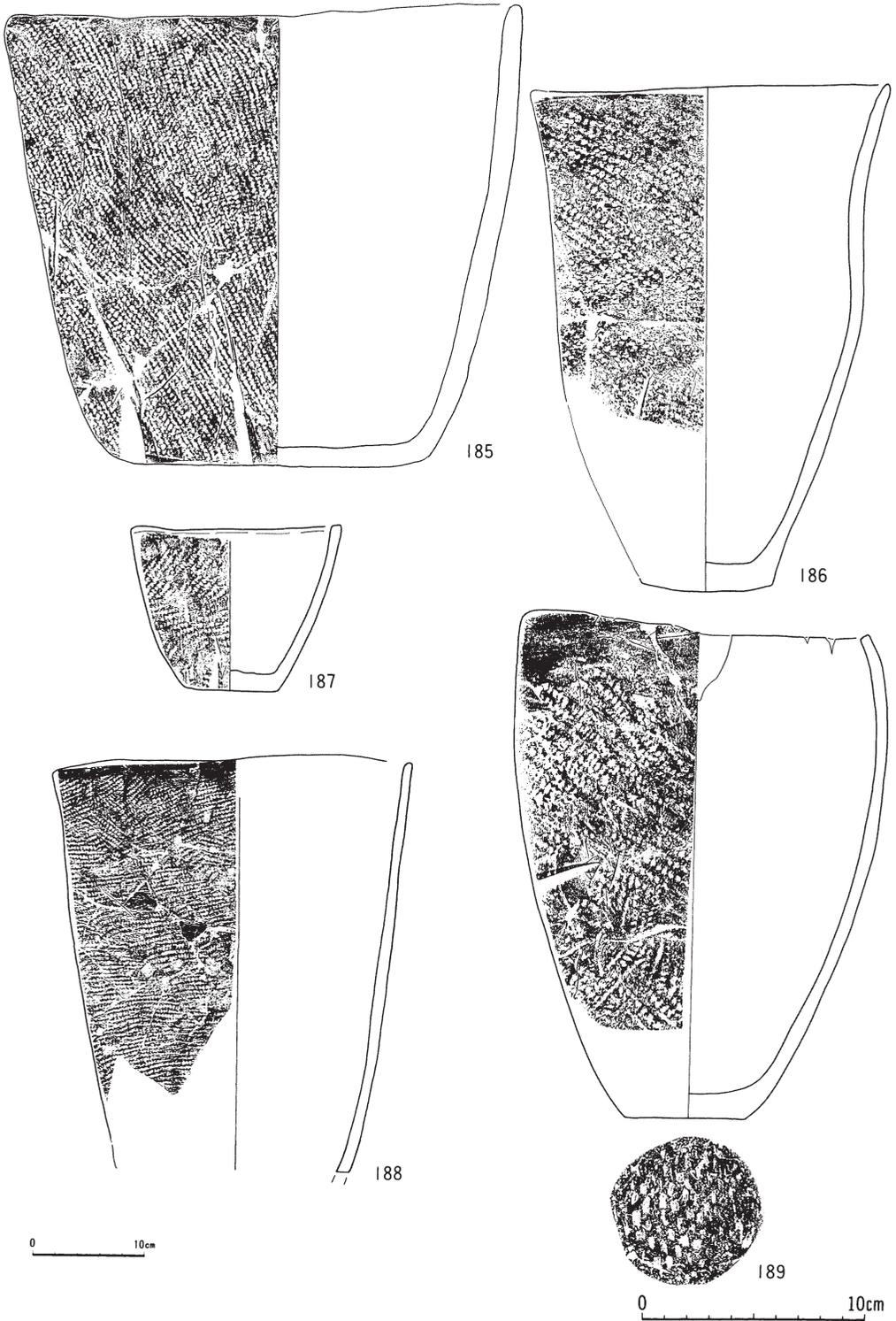
183



184

0 10cm

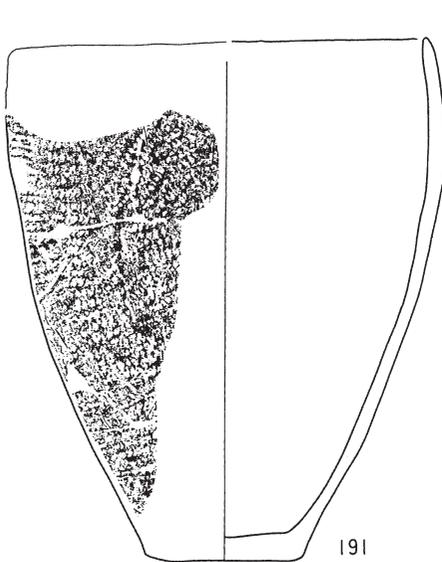
第97图 遺構外出土土器-38 (IV群1類-10)



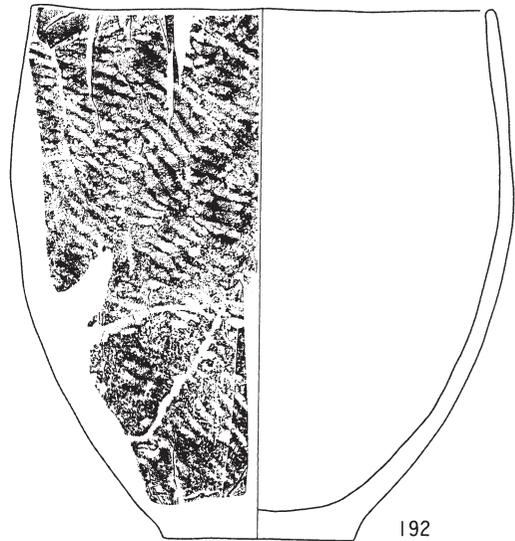
第98図 遺構外出土土器-39 (IV群1類-11)



190



191



192

0 10cm

第99図 遺構外出土土器-40 (IV群1類-12)

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第88図-142	H-51	II	口~胴	平口縁 無文	縦位斜縄文LR 沈線文	IV群1類	143
-143	I-52	II	口~胴	波状口縁 補修孔	斜縄文RL 沈線文	IV群1類	501
第89図-144	H-51	II	口~胴	平口縁 折返状口縁 無文	横位斜縄文LR 沈線文	IV群1類	140
第90図-145	F-10	II	口~胴	波状口縁	斜縄文LR 沈線文	IV群1類	600
第91図-146	G-45	III	完形	波状口縁(2) 刺突文 沈線文 補修孔	斜縄文LR 沈線文 ループ	IV群1類	30
-147	H-45	II	略完形	無文 刺突文2列	斜縄文RL わらび手文	IV群1類	32
-148	H-58	II	口~胴	平口縁 無文	斜縄文RL 沈線文	IV群1類	603

図版番号	遺構名	階位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第91図-149	I-45	III	胴～底		斜縄文LR わらび手文	IV群1類	10
-150	H-43	II	口～胴	平口縁 口唇部に沈線1本	斜縄文RL	IV群1類	135
-151	E-28	フ	口～胴	波状口縁 折返状口縁	横位斜縄文LR 沈線文	IV群1類	532
第92図-152	H-69	III	口～胴	波状口縁	斜縄文RL 沈線文	IV群1類	499
-153	H-48	III	口～胴	波状口縁	斜縄文LR 沈線文	IV群1類	500
-154	I-52	II	口～胴	波状口縁	斜縄文RL 沈線文	IV群1類	502
-155	H-48	II	口～胴	波状口縁 刺突文	沈線文	IV群1類	506
-156	G-35	III	口～胴	波状口縁 沈線文	斜縄文RL	IV群1類	507
-157	I-52	II	口～胴	波状口縁	斜縄文RL 沈線文	IV群1類	503
-158	G-41	III	口縁	波状口縁(4) 沈線文 貫通孔		IV群1類	492
第93図-159	H-43	II	口～胴	平口縁	斜縄文LR 沈線文	IV群1類	513
-160	H-43	フ	胴部		斜縄文LR 沈線文	IV群1類	531
-161	H-66	II	口～胴	波状口縁	斜縄文LR 沈線文	IV群1類	504
-162	E-28	フ	胴部		横位斜縄文LR 沈線文	IV群1類	521
-163	H-50	III	口～胴	波状口縁(4) 折返状口縁 無文	斜縄文LR	IV群1類	104
-164	H-49	III	完形	波状口縁(2) 折返状口縁 無文	横位斜縄文LR	IV群1類	42
第94図-165	H-49	II	略完形	波状口縁(2) 折返状口縁 無文	横位斜縄文LR	IV群1類	77
-166	H-56	II	略完形	波状口縁(4)	斜縄文RL	IV群1類	58
-167	H-55	II	口～胴	平口縁 無文	横位斜縄文LR	IV群1類	40
-168	I-54	III	口～胴	波状口縁(4) 折返状口縁 無文	縦位縄文RL	IV群1類	15
-169	H-35	III	略完形	波状口縁(4)	縦位縄文RL(複節)	IV群1類	19
-170	H-55	II	略完形	波状口縁(2) 折返状口縁	擦痕	IV群1類	45
-171	H-35	III	略完形	波状口縁(2)	斜縄文RL	IV群1類	14
-172	D-21	III	完形	波状口縁(2) 折返状口縁 無文	擦痕	IV群1類	7
第95図-173	G-41	III	略完形	波状口縁(3)	縦位縄文RL(複節)	IV群1類	65
-174	H-56	II	完形	波状口縁(2)	縦位縄文RL(複節)	IV群1類	21
-175	D-20	III	略完形	波状口縁	横位斜縄文LR	IV群1類	27
-176	D-14	II	略完形	平口縁 折返状口縁	斜縄文LR	IV群1類	74
-177	I-55	II	完形	平口縁 折返状口縁 無文	縦位斜縄文RL	IV群1類	47
-178	D-15	II	口～胴	平口縁 折返状口縁	斜縄文RL	IV群1類	514
第96図-179	H-51	II	略完形	平口縁 折返状口縁 無文	縦位斜縄文RL	IV群1類	124
-180	G-41	III	口～胴	平口縁 折返状口縁	斜縄文LR	IV群1類	108
第97図-181	D-14	II	略完形	平口縁 折返状口縁	斜縄文LR	IV群1類	76
-182	D-15	フ	口～胴	平口縁 折返状口縁	斜縄文(無節)	IV群1類	516
-183	H-49	II	略完形	平口縁 無文	斜縄文RL	IV群1類	114
-184	I-51	II	略完形	平口縁 無文 補修孔	横位斜縄文LR	IV群1類	50
第98図-185	H-48	III	略完形	平口縁	斜縄文RL	IV群1類	123
-186	P-84	II	完形	平口縁	斜縄文RL	IV群1類	73
-187	H-48	II	完形	平口縁	斜縄文LR	IV群1類	5
-188	I-38	III	口～胴	平口縁	横位斜縄文LR	IV群1類	150
-189	H-47	III	完形	平口縁	斜縄文RL	IV群1類	87
第99図-190	I-45	III	口～胴	平口縁 無文	横位斜縄文LR	IV群1類	589
-191	H-58	II	略完形	波状口縁 折返状口縁	横位斜縄文LR	IV群1類	55
-192	H-50	II	完形	平口縁 折返状口縁	斜縄文(無節)	IV群1類	67

## 2類 (第100～115図)

最花式に相当するものを本類とした。

器形は、深鉢形、広口の壺形のを基本とする。深鉢形は、口縁部近くで内湾するものが多いが、口縁部直下まで縄文が施文されているものは、屈曲度が少ない傾向がみられる。広口の壺形としたものは、屈曲部から口縁部までの間隔が広いもので、胴部の中央部付近に最大幅を持つものである。口縁部は折り返し状の口縁が少量みられる。また、1類にみられたような肥厚するものは少なく、折り返し状の口縁のものにみられるだけで、ほとんどのものは口唇部へ向け先細りとなっている。口縁部の形状は、平口縁と緩い波状口縁とがあり、211などのように山形突起に環状の貼付けがみられるものもある。

文様は、地文の縄文に、沈線を主体として施文し、これに刺突を付加している。

沈線による文様は、主に垂下する数種の文様パターンのものである。刺突は、主に口縁部との区画に多用される。

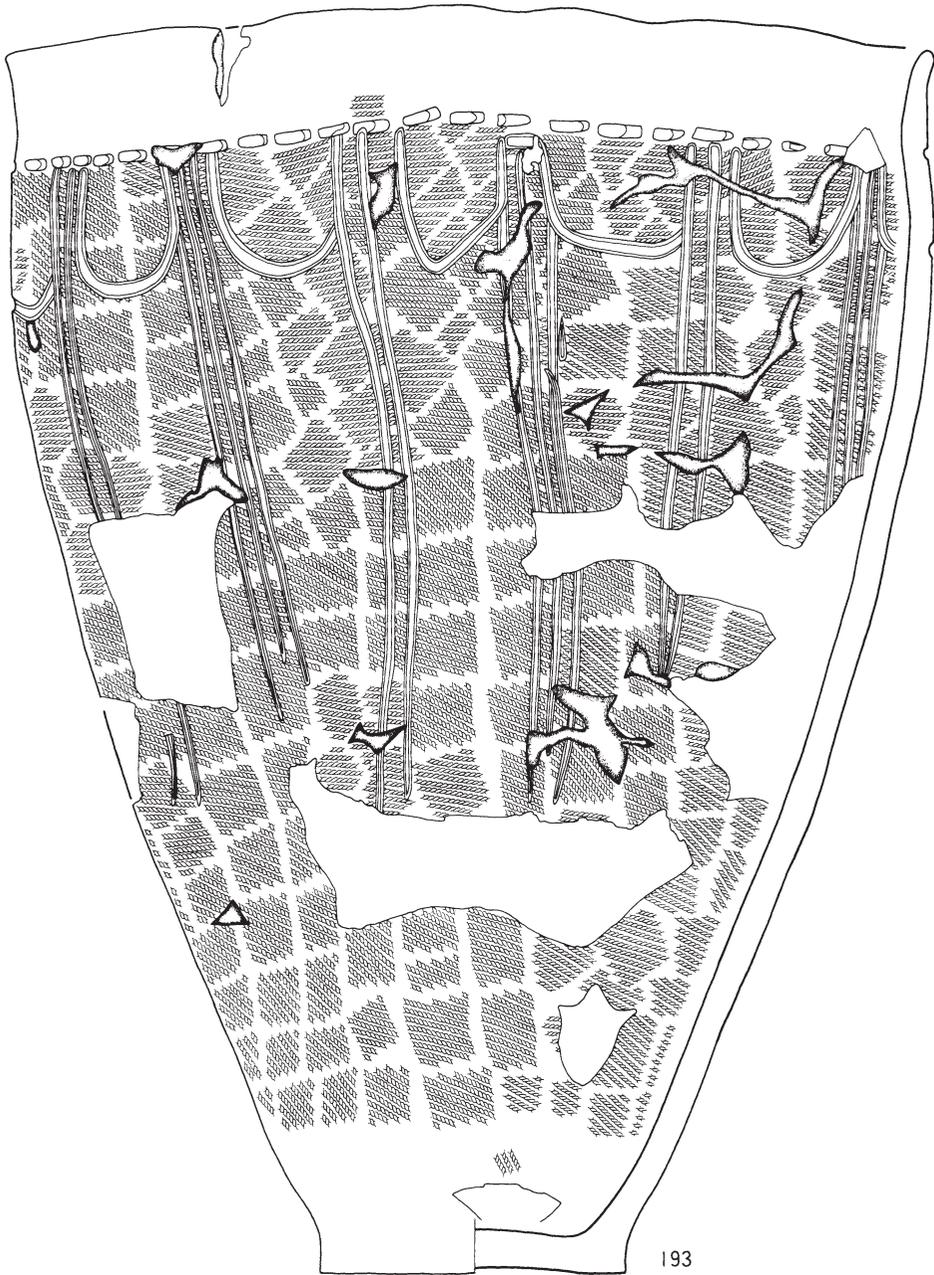
文様構成では、口縁部に無文帯を持つものが多く、広口の壺形としたものは、屈曲部の上部がほとんど無文となっている。201は無文の口縁直下に刺突による垂下文が施文される特殊な例である。この無文帯との区画に太めの円竹管または棒状工具による刺突列が巡る。刺突列は主に1列であるが、194・195・230・231などのように2列の刺突列を施文するものもある。前二者は非常に細かい刺突具による施文である。この区画は202のように沈線のみで巡るものは非常に少ないようである。この部位の横位沈線の多くは、206のように胴部文様を6～8等分に区画する垂下文様の一部である。

沈線による胴部文様は、193のような弧状の曲線文と垂下文との組合せや、194のような2種の垂下文の組合せによるものは少なく、単一の文様の繰り返しが多いようである。

202や203などは沈線文に沿って刺突文を付加しているものである。

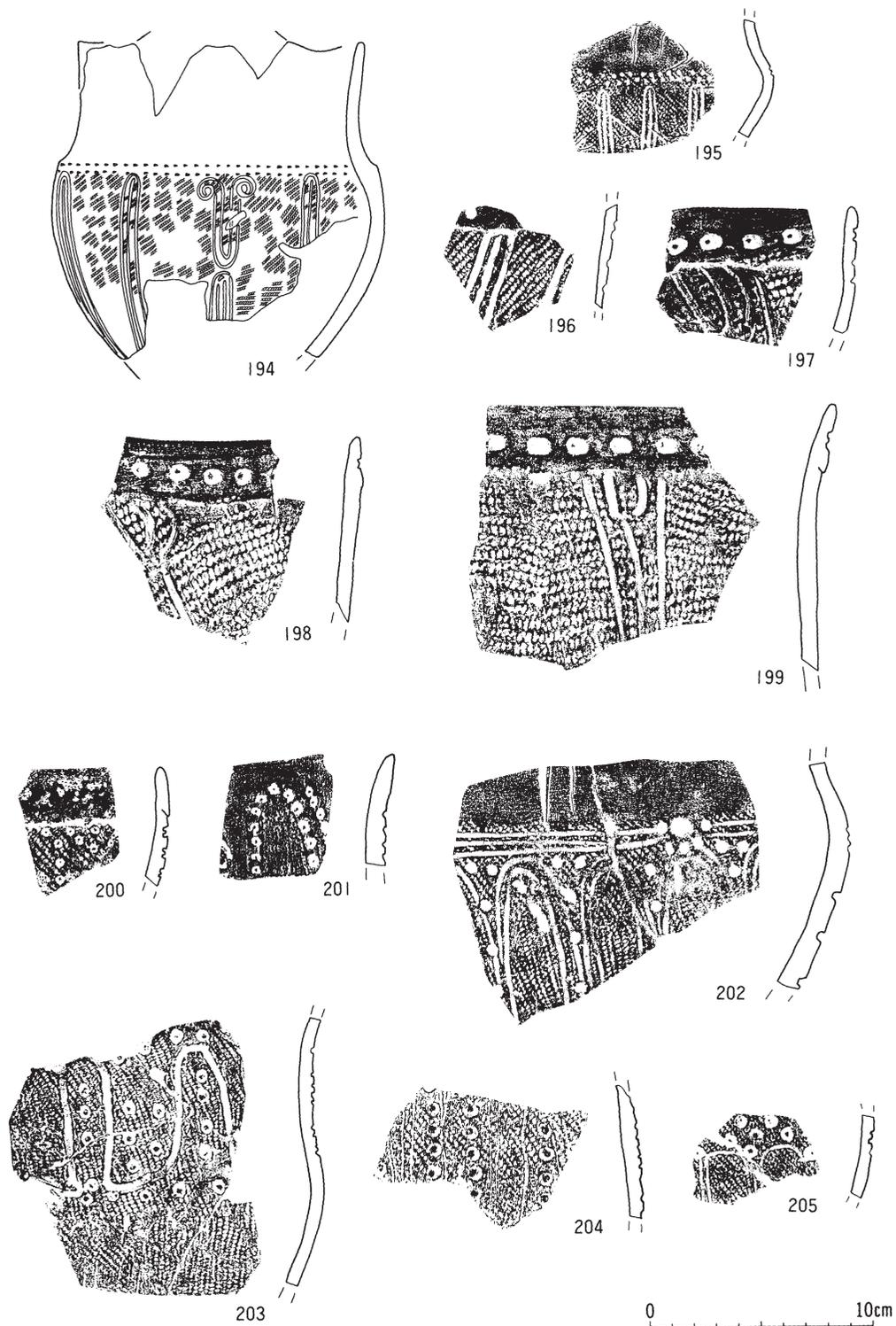
地文の縄文は、やや太めの原体を多用しているが、222などのように細目の原体を使用したものも少量ある。縄文の施文は、横位回転を基本としているが、横走及び縦走気味のものも多くみられる。また、239・248のように縦位の擦痕によるものもみられ、これらは折り返し口縁のものにみられるようである。沈線文などは施文されていないようである。

胎土には、砂粒を混入しており、全体に焼成は良好である。

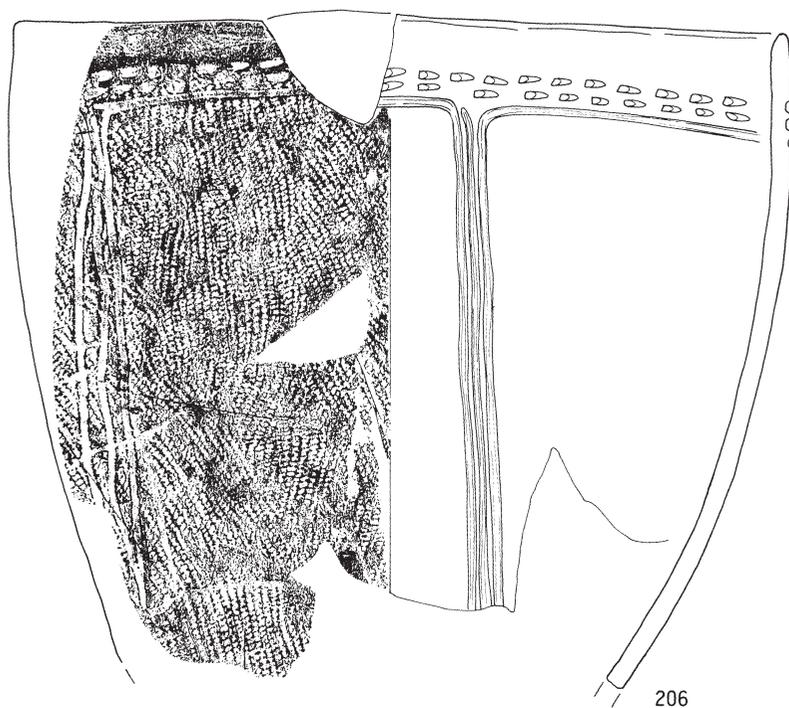


0 10cm

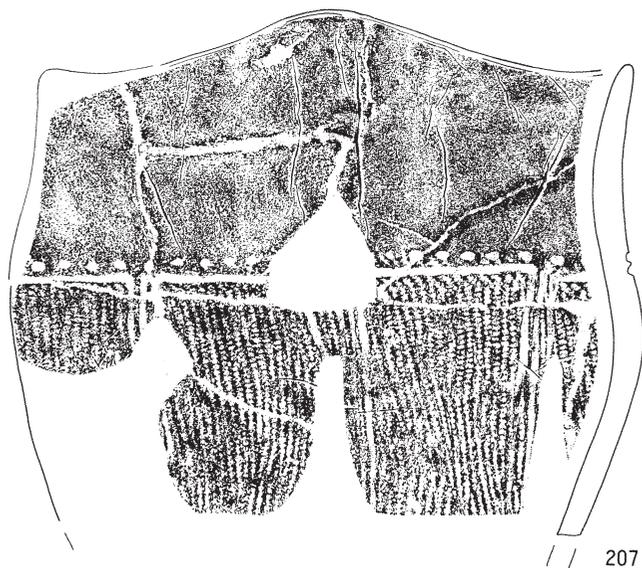
第100図 遺構外出土器-41 (IV群2類-1)



第101图 遺構外出土土器-42 (IV群2類-2)



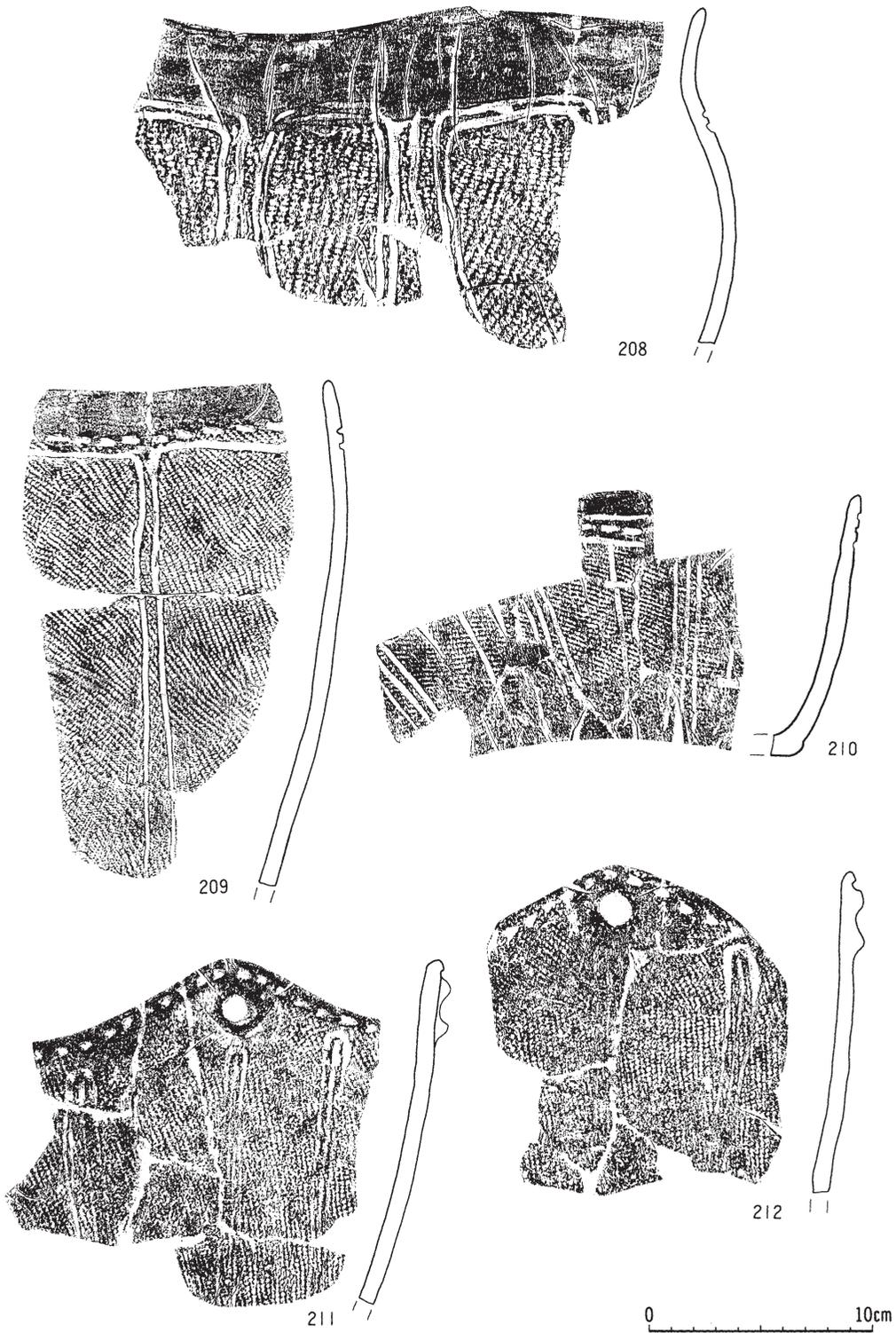
206



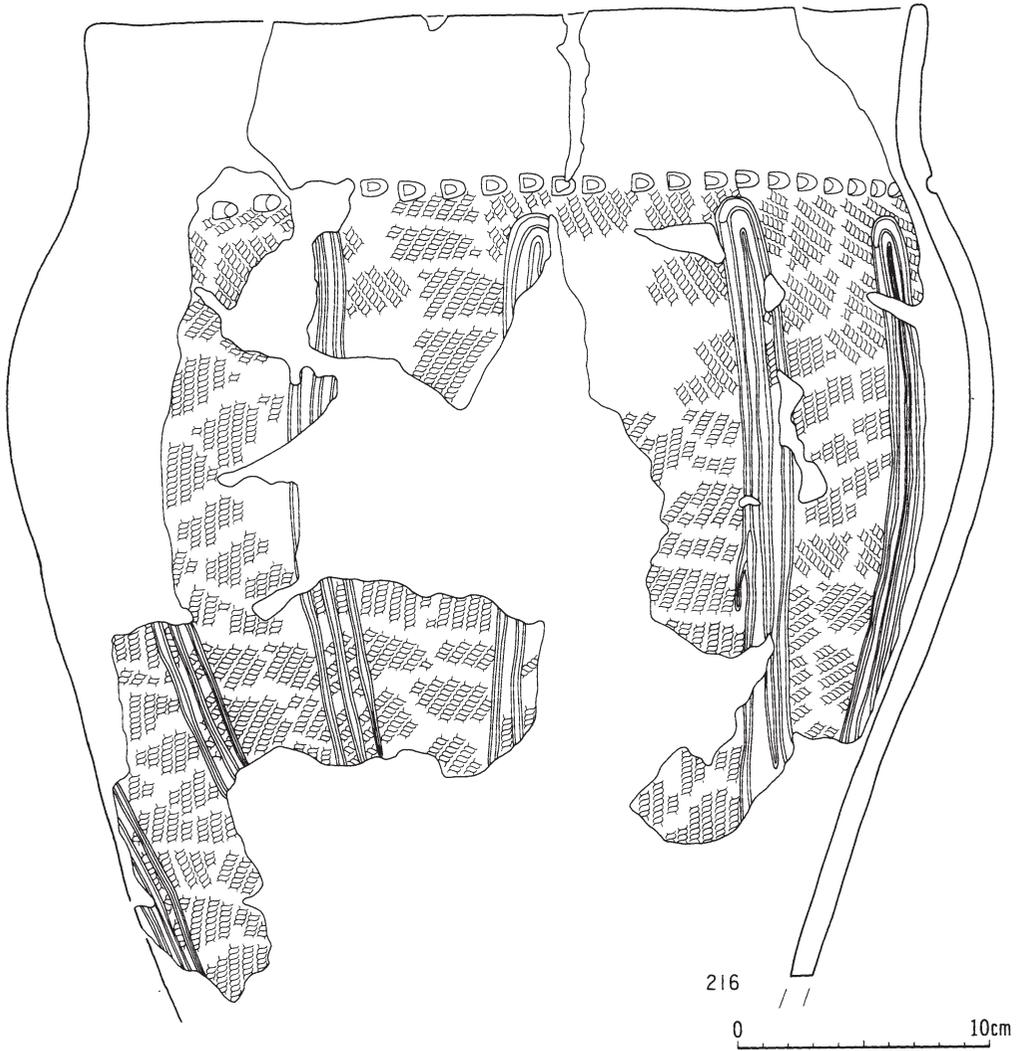
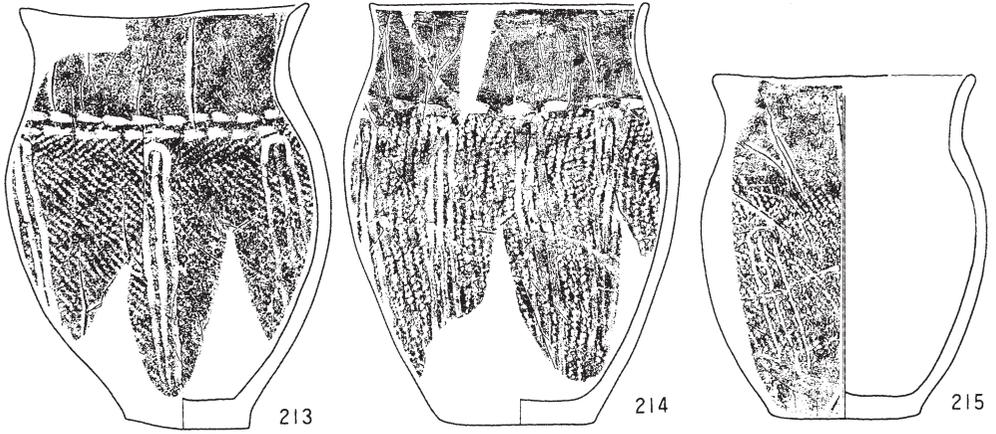
207

0 10cm

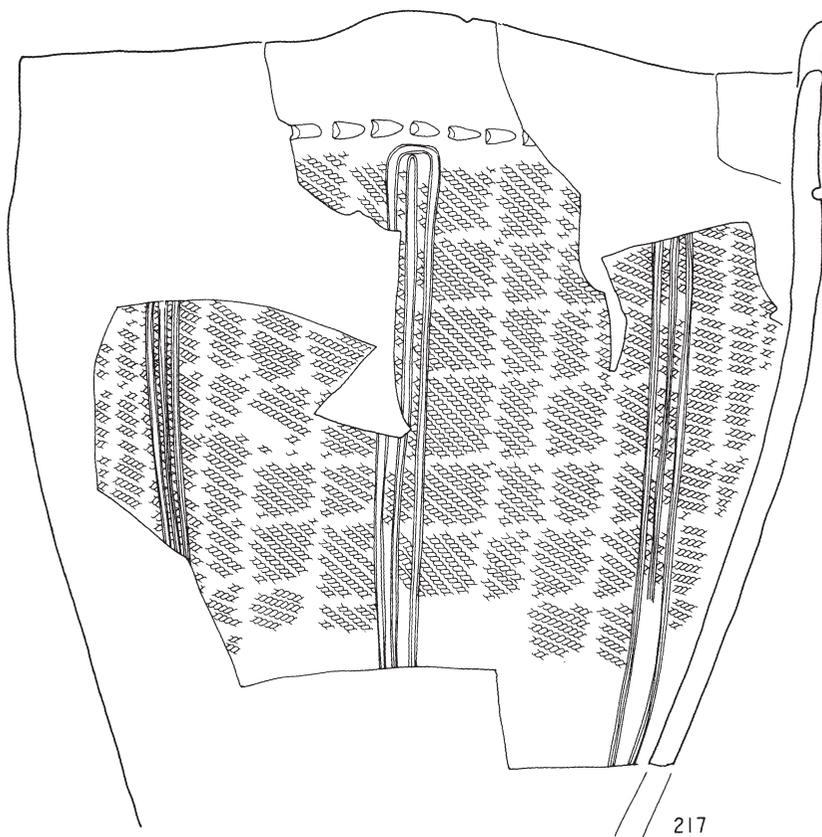
第102図 遺構外出土土器-43 (IV群2類-3)



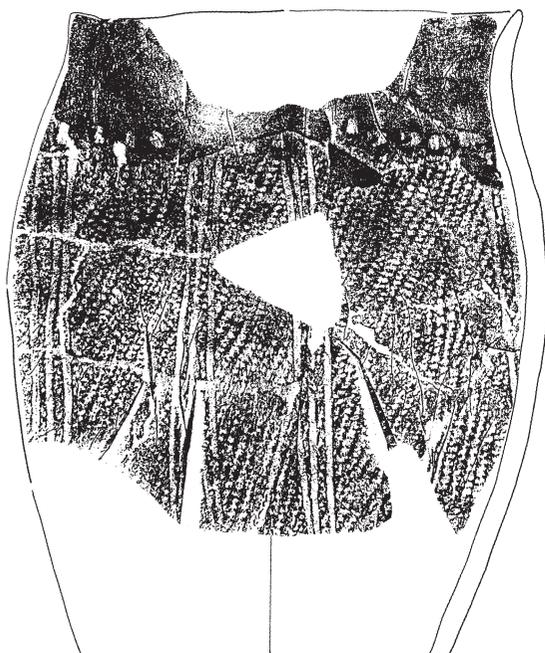
第103圖 遺構外出土土器—44 (IV群2類—4)



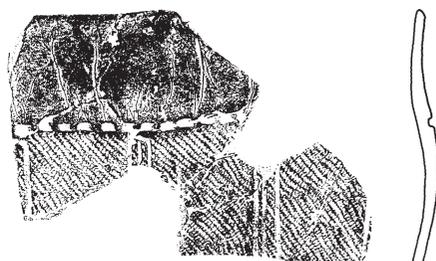
第104図 遺構外出土土器-45 (IV群2類-5)



217



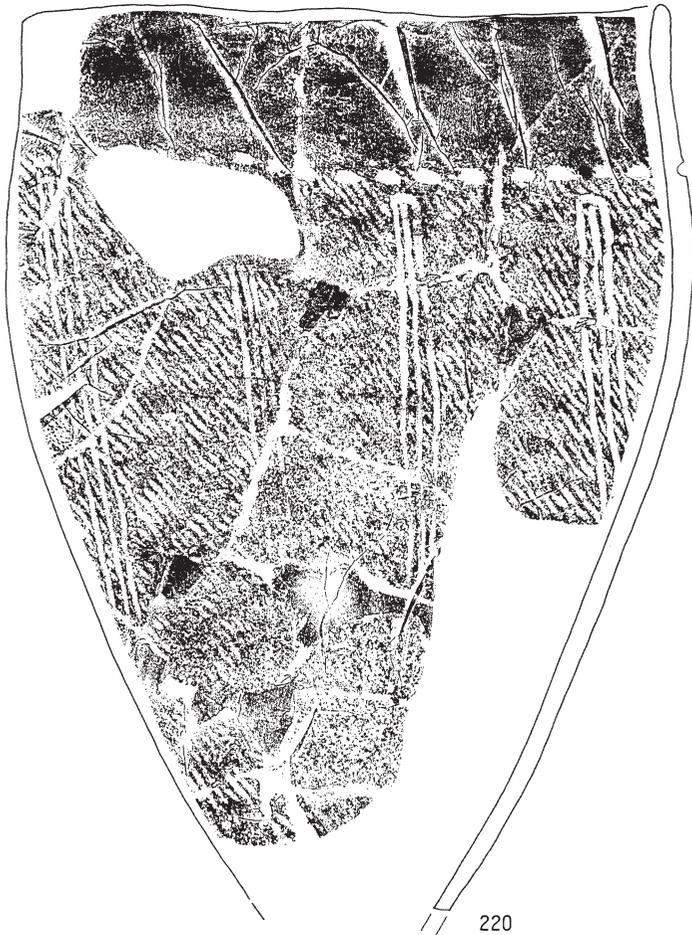
218



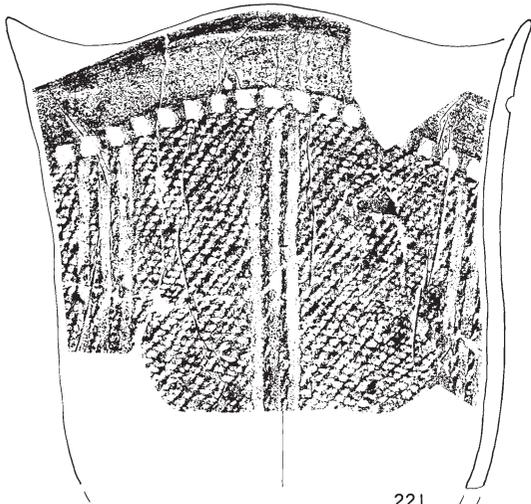
219

0 10cm

第105図 遺構外出土土器-46 (IV群2類-6)



220



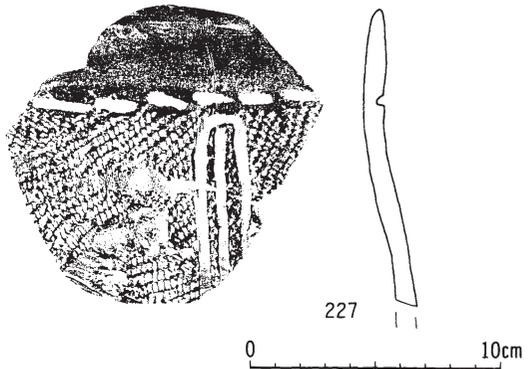
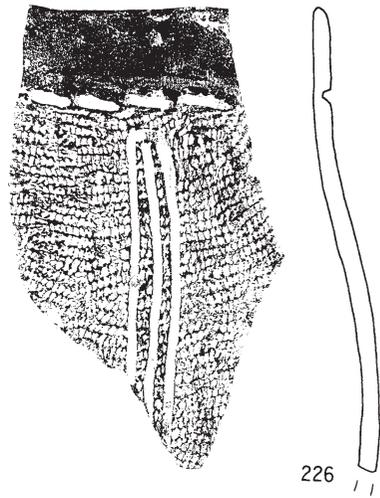
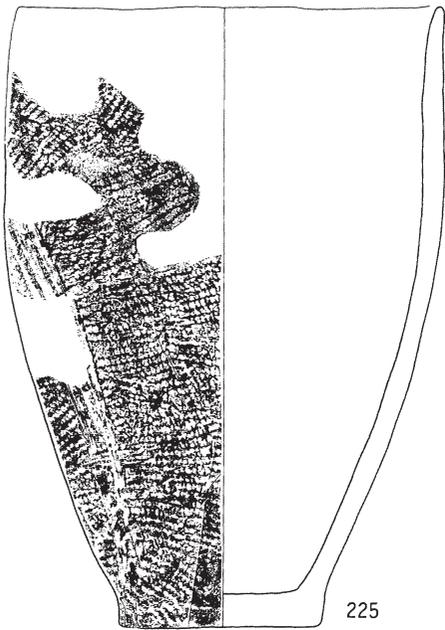
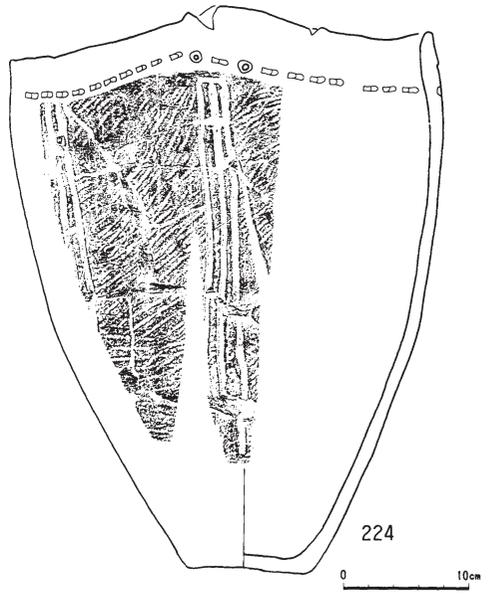
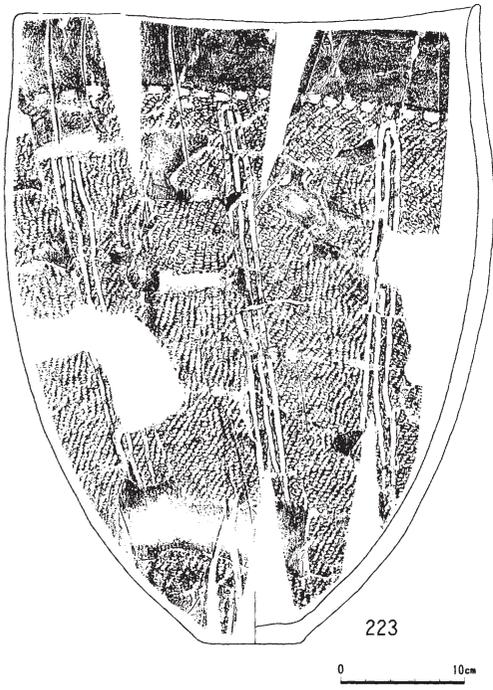
221



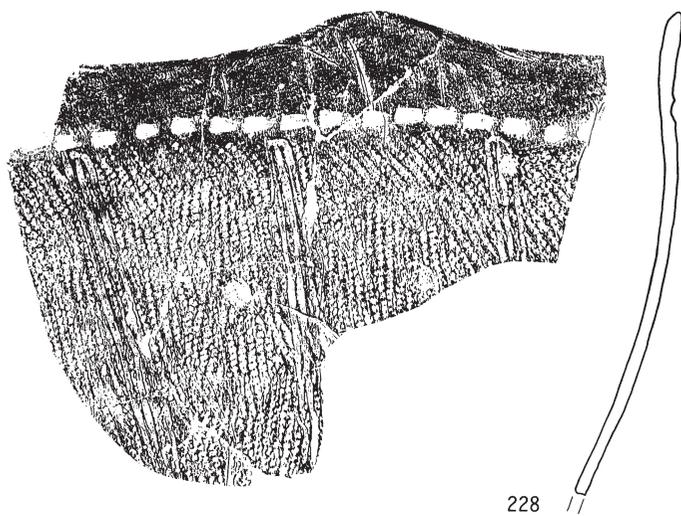
222

0 10cm

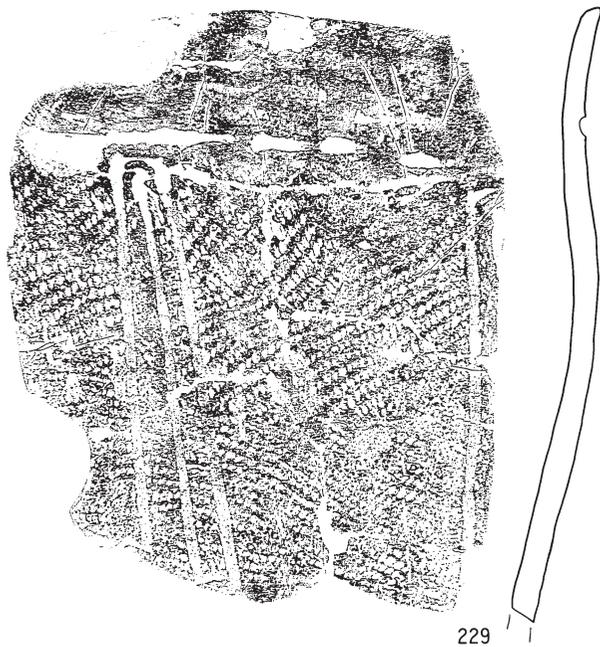
第106図 遺構外出土土器-47 (IV群2類-7)



第107図 遺構外出土土器-48 (IV群2類-8)



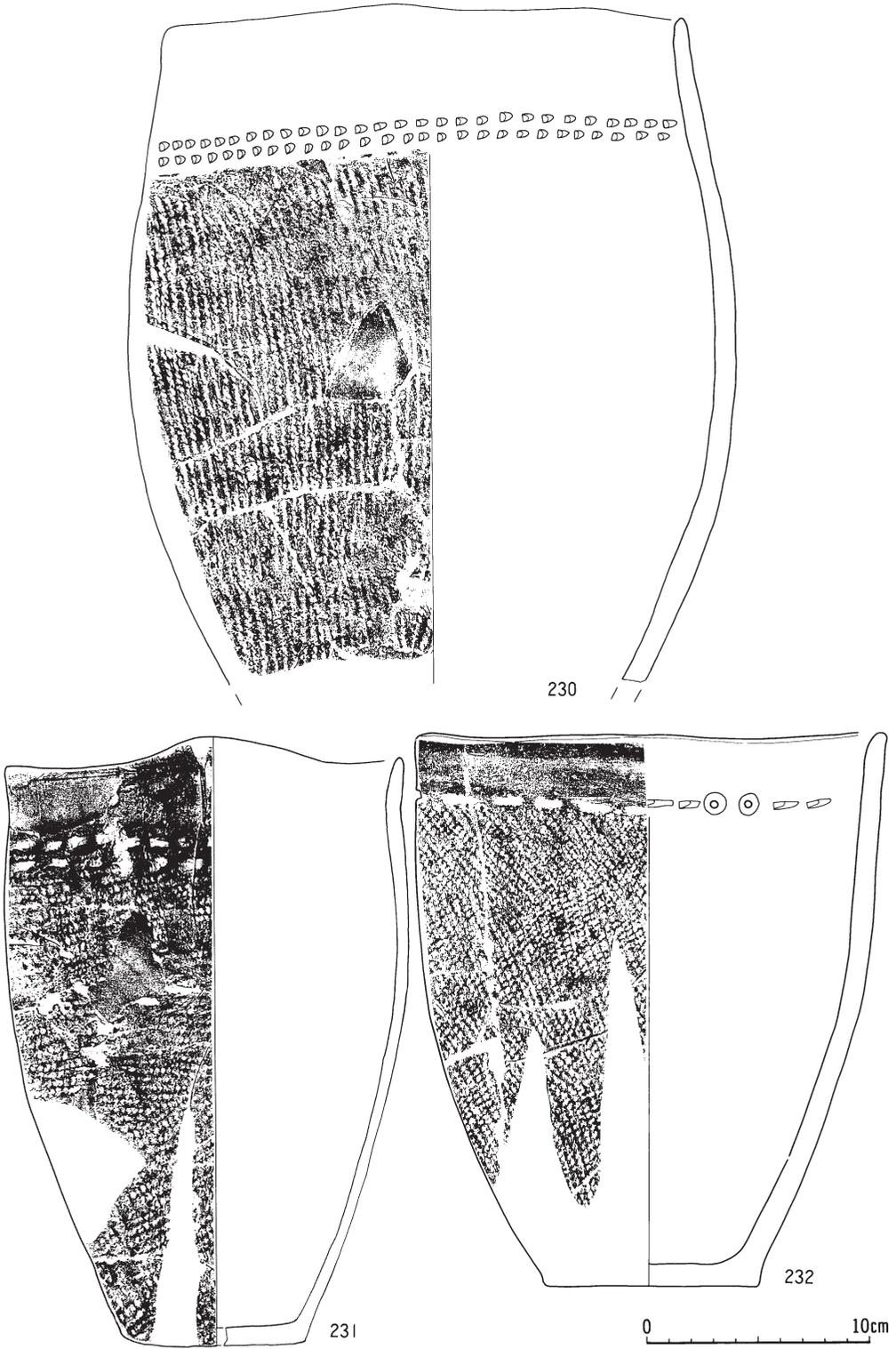
228



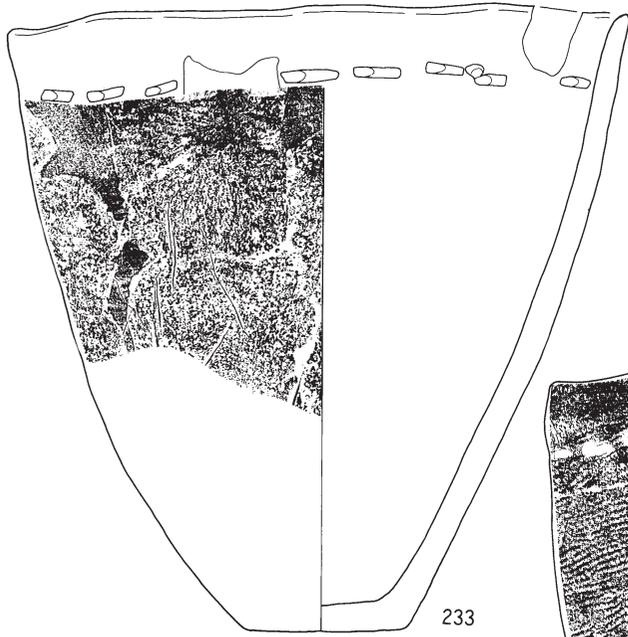
229

0 10cm

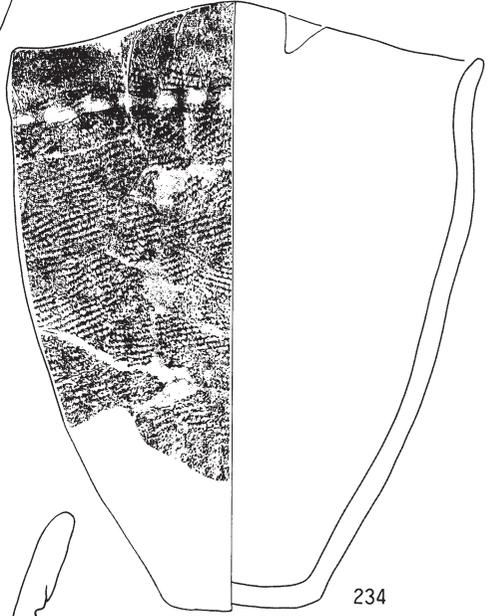
第108図 遺構外出土土器-49 (IV群2類-9)



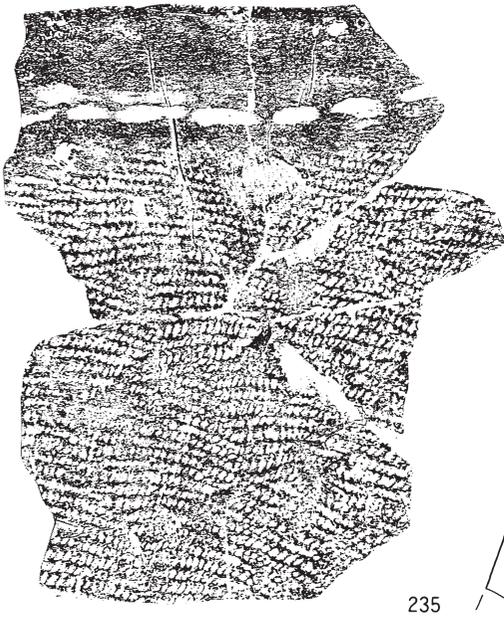
第109図 遺構外出土土器-50 (IV群2類-10)



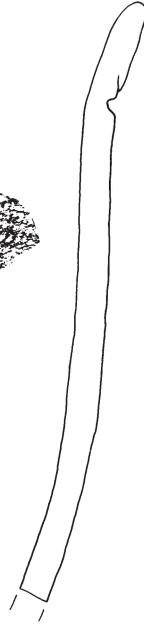
233



234



235

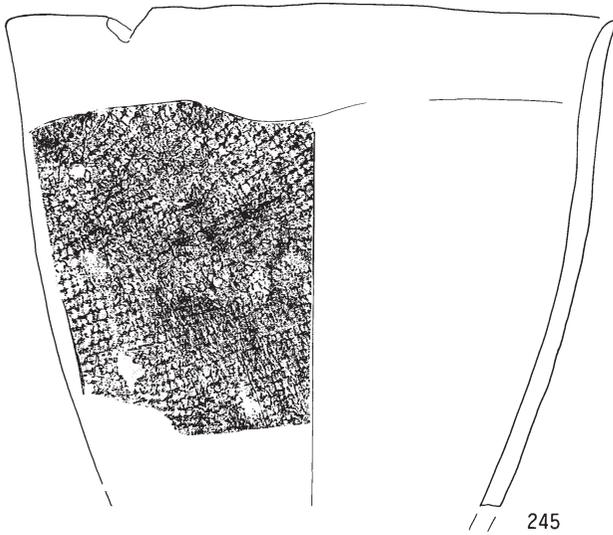
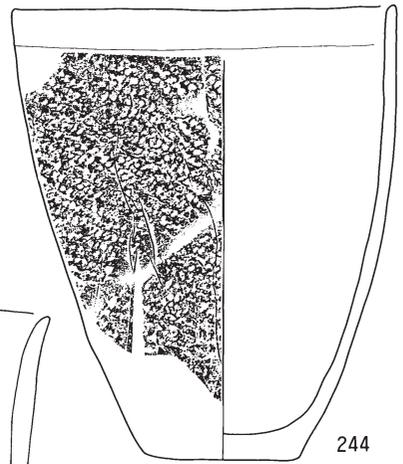
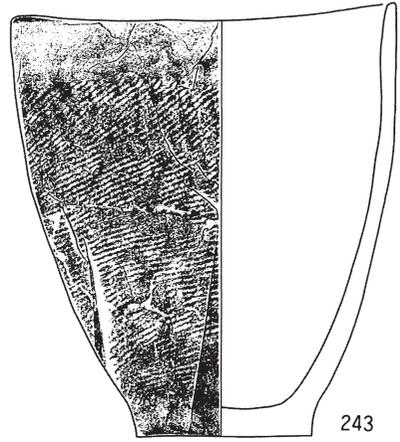


0 10cm

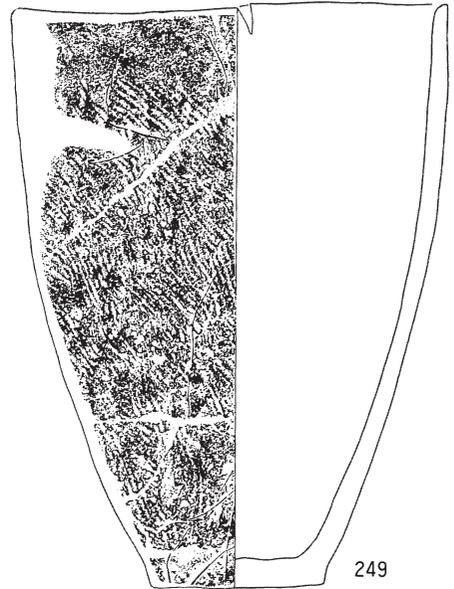
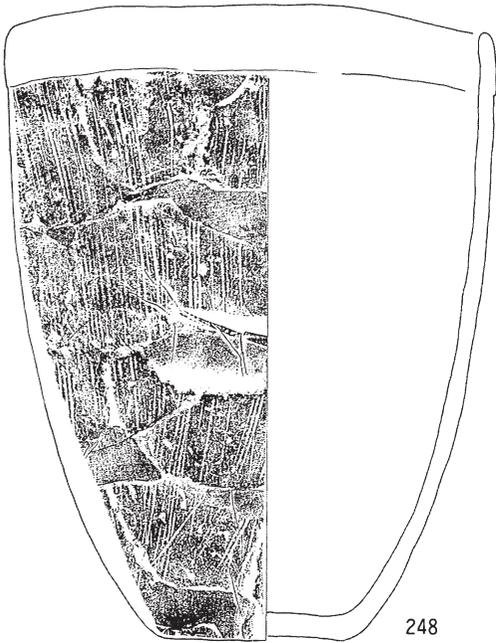
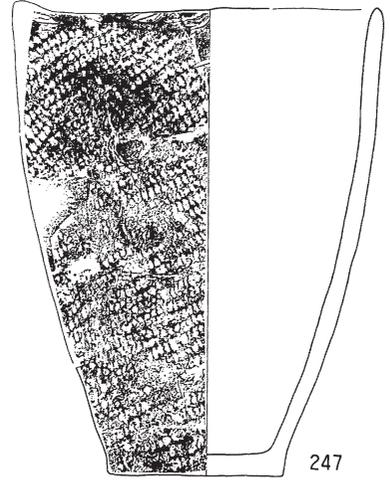
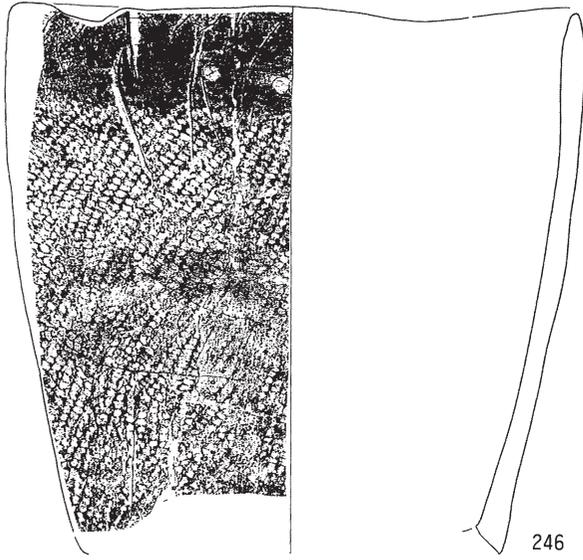
第110図 遺構外出土土器-51 (IV群2類-11)



第111圖 遺構外出土土器-52 (IV群2類-12)

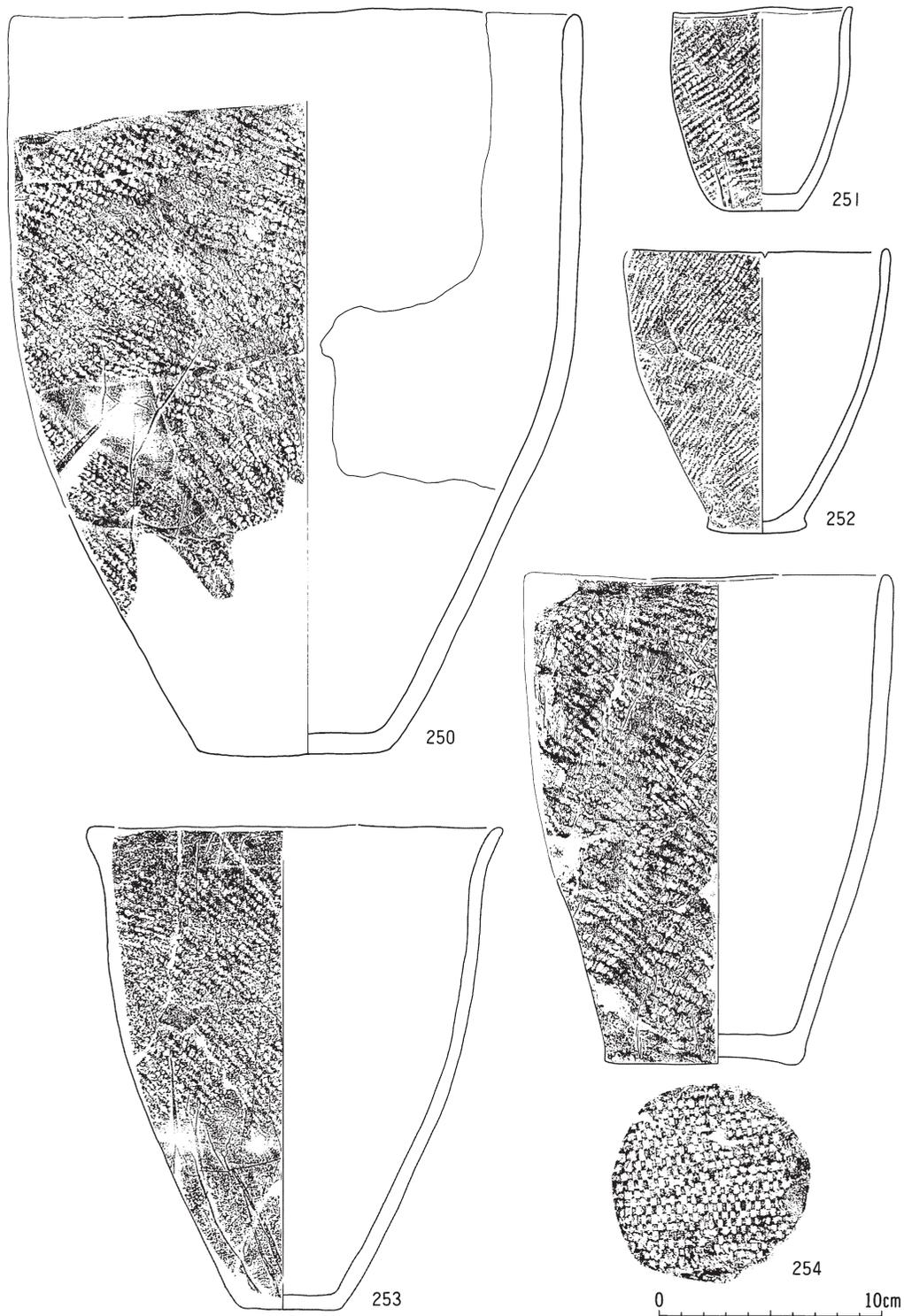


第112図 遺構外出土土器-53 (IV群2類-13)

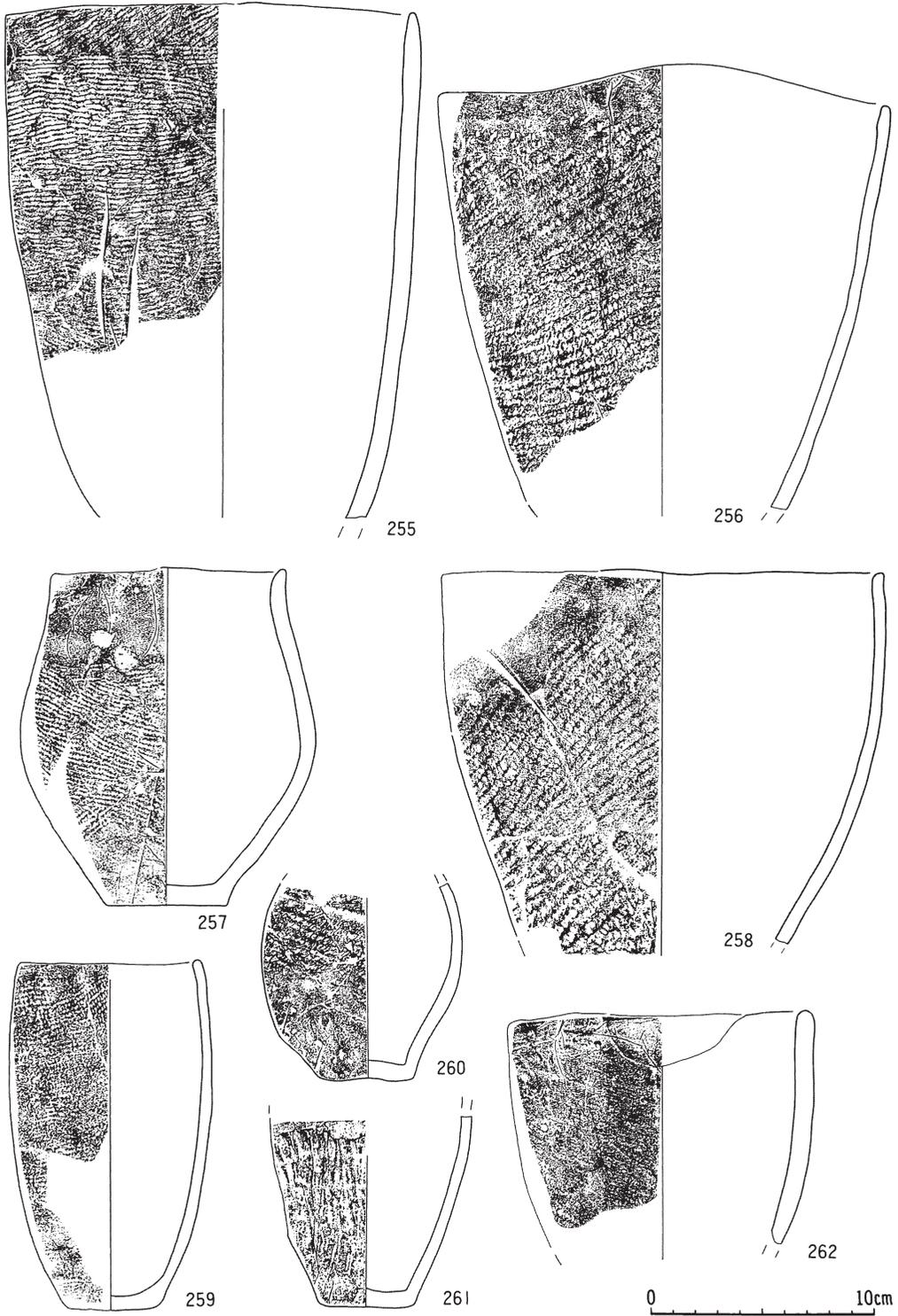


0 10cm

第113図 遺構外出土土器-54 (IV群2類-14)



第114図 遺構外出土土器-55 (IV群2類-15)



第115図 遺構外出土土器-56 (IV群2類-16)

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第100図-193	H-56	II	完形	平口縁 無文 刺突文1列	横位縄文LR 沈線文	IV群2類	148
第101図-194	G-69	III	口~胴	無文 刺突文2列	斜縄文RL 垂下文 わらび手文	IV群2類	82
-195	I-56	II	口~胴	無文 刺突文2列	斜縄文RL 縦位沈線文	IV群2類	615
-196	H-51	II	口~胴	折返状口縁 補修孔	斜縄文LR 垂下文上に刺突文列	IV群2類	538
-197	H-50	III	口~胴	波状口縁 折返状口縁 刺突文1列	斜縄文LR 沈線文	IV群2類	536
-198	H-50	III	口~胴	平口縁 折返状口縁 刺突文1列	斜縄文LR 沈線文	IV群2類	534
-199	H-50	II	口~胴	平口縁 折返状口縁 刺突文1列	横位斜縄文LR 垂下文	IV群2類	522
-200	N-84	II	口~胴	平口縁 折返状口縁 刺突文	斜縄文RL	IV群2類	539
-201	H-39	III	口縁	平口縁 沈線上に刺突文列		IV群2類	537
-202	G-42	III	口~胴	平口縁 刺突文(縦, 横)列	縦位斜縄文RL 沈線文	IV群2類	519
-203	G-42	II	口~胴	刺突文(縦, 横)列	斜縄文RL 沈線文	IV群2類	530
-204	H-47	II	胴部		斜縄文RL 縦位沈線文 刺突文	IV群2類	535
-205	H-63	II	口~胴	刺突文 垂下文	斜縄文RL	IV群2類	540
第102図-206	G-44	II	口~胴	平口縁 無文 刺突文2列	縦位斜縄文RL 垂下文	IV群2類	134
-207	H-50	II	口~胴	波状口縁(4) 無文 刺突文1列	斜縄文LR 垂下文	IV群2類	106
第103図-208	H-51	II	口~胴	波状口縁(3) 無文	縦位斜縄文RL 垂下文	IV群2類	515
-209	H-48	II	口~胴	波状口縁 刺突文1列	斜縄文RL 沈線文	IV群2類	526
-210	I-52	II	口~底	平口縁 刺突文1列	横位斜縄文LR 垂下文	IV群2類	601
-211	H-49	II	口~胴	波状口縁 刺突文1列 ボタン状突起	縦位斜縄文RL 垂下文	IV群2類	528
-212	H-49	II	口~胴	波状口縁 刺突文1列	縦位斜縄文RL 垂下文	IV群2類	527
第104図-213	H-49	II	完形	波状口縁 無文 刺突文2列	斜縄文LR 垂下文	IV群2類	43
-214	H-50	II	略完形	平口縁 無文 刺突文1列	縦位縄文RL 垂下文	IV群2類	53
-215	I-45	III	略完形	平口縁 無文 刺突文2列	斜縄文RL 垂下文	IV群2類	9
-216	H-48	III	口~胴	平口縁 無文 刺突文1列	縦位斜縄文RL 垂下文	IV群2類	604
第105図-217	H-50	II	口~胴	波状口縁 無文 刺突文1列	斜縄文LR 垂下文	IV群2類	612
-218	I-52	II	口~胴	平口縁 無文 刺突文	縦位斜縄文RL 垂下文	IV群2類	118
-219	I-37	III	口~胴	平口縁 無文 刺突文1列	斜縄文RL 垂下文	IV群2類	592
第106図-220	F-36	III	略完形	平口縁 無文 刺突文1列 補修孔	斜縄文LR 垂下文	IV群2類	117
-221	H-55	II	口~胴	波状口縁(2) 無文 刺突文1列	斜縄文RL 垂下文 補修孔	IV群2類	105
-222	G-44	II	口~胴	平口縁 無文 刺突文2列	縦位斜縄文RL 垂下文 補修孔	IV群2類	133
第107図-223	H-55	II	略完形	波状口縁 無文 刺突文1列	斜縄文RL 垂下文	IV群2類	613
-224	H-47	III	完形	波状口縁 無文 刺突文1列	横位斜縄文 垂下文	IV群2類	151
-225	H-45	III	略完形	平口縁	斜縄文RL 垂下文	IV群2類	71
-226	H-47	III	口~胴	波状口縁 刺突文1列	横位斜縄文LR 垂下文	IV群2類	517
-227	H-47	III	口~胴	平口縁 刺突文1列	斜縄文LR 垂下文	IV群2類	518
第108図-228	H-51	II	口~胴	波状口縁 刺突文1列	縦位斜縄文RL 垂下文	IV群2類	524
-229	G-44	II	口~胴	平口縁 刺突文1列	斜縄文LR 垂下文	IV群2類	511
第109図-230	I-51	II	口~胴	平口縁 無文 刺突文2列	縦位縄文LR	IV群2類	139
-231	I-51	II	完形	波状口縁 無文 刺突文2列	斜縄文LR	IV群2類	90
-232	H-55	II	完形	平口縁 刺突文1列 補修孔	斜縄文RL(複節)	IV群2類	95
第110図-233	H-50	II	完形	平口縁 刺突文1列	斜縄文(擦痕)	IV群2類	125
-234	H-48	III	完形	波状口縁(2) 刺突文1列 補修孔	斜縄文LR	IV群2類	96
-235	G-41	III	口~胴	平口縁 刺突文1列	横位斜縄文LR	IV群2類	523
第111図-236	H-47	III	口~胴	平口縁 無文 刺突文1列	横位斜縄文LR	IV群2類	525
-237	H-47	III	口~胴	平口縁 無文 刺突文1列	斜縄文LR	IV群2類	533

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第111図-238	H-50	III	口～胴	波状口縁 折返状口縁 刺突文1列	横位斜縄文LR	IV群2類	529
-239	I-51	II	口～胴	波状口縁 折返状口縁	擦痕	IV群2類	520
-240	G-51	II	口～胴	波状口縁 折返状口縁	擦痕	IV群2類	588
-241	H-56	II	完形	平口縁 折返状口縁	斜縄文RL	IV群2類	132
第112図-242	G-45	II	略完形	平口縁 無文	斜縄文RL	IV群2類	145
-243	I-37	III	完形	平口縁 無文	斜縄文LR(無節)	IV群2類	49
-244	H-50	III	完形	平口縁 折返状口縁 無文	斜縄文LR	IV群2類	54
-245	I-48	II	口～胴	平口縁 折返状口縁 無文	横位斜縄文LR	IV群2類	121
第113図-246	H-50	II	略完形	平口縁 無文 補修孔	斜縄文RL	IV群2類	102
-247	F-20	II	略完形	平口縁	斜縄文LR	IV群2類	85
-248	H-47	III	完形	平口縁 折返状口縁 補修孔	擦痕	IV群2類	611
-249	H-36	III	完形	平口縁	斜縄文RL	IV群2類	89
第114図-250	G-50	II	略完形	平口縁 折返状口縁 無文	斜縄文RL	IV群2類	109
-251	E-29	II	完形	平口縁	斜縄文LR	IV群2類	4
-252	H-48	II	略完形	平口縁	斜縄文RL	IV群2類	22
-253	H-48	II	略完形	平口縁 折返状口縁 無文	縦位斜縄文RL	IV群2類	66
-254	O-85	II	略完形	平口縁 無文	斜縄文LR	IV群2類	86
第115図-255	H-43	II	略完形	平口縁 斜縄文	横位縄文(無節)	IV群2類	84
-256	H-47	III	略完形	波状口縁(2) 無文	斜縄文LR	IV群2類	99
-257	G-45	II	略完形	平口縁 無文	横位斜縄文LR	IV群2類	39
-258	H-47	III	口～胴	平口縁 無文	斜縄文RL	IV群2類	56
-259	G-42	II	略完形	平口縁	横位斜縄文LR	IV群2類	23
-260	H-48	III	胴～底		横位斜縄文LR	IV群2類	12
-261	I-55	II	胴～底		擦痕	IV群2類	6
-262	I-41	III	口～胴	平口縁	斜縄文RL	IV群2類	80

### 3類 (第116～118図)

大木8 b式・9式・10式に相当するものを本類として一括した。

263～267は大木8 b式に比定されるものである。263は大型の注口土器で、底部を欠失している。口縁は平口縁で大きく内湾し、文様は隆沈線文と縄文によって構成されているが、屈曲部の上部は縄文は施文されていない。また、注口部と対象位置に橋状把手を設け、両側中央部に渦巻き状の把手を作出している。胎土・焼成とも良好である。264は把手状の貼付けを設けた胴部破片で、横位に貫通孔がみられ、釣り手土器の可能性も考えられる。265～267は隆沈線文の文様構成による破片である。この類は、1・2類に比べ、色調的に明るい傾向がみられる。

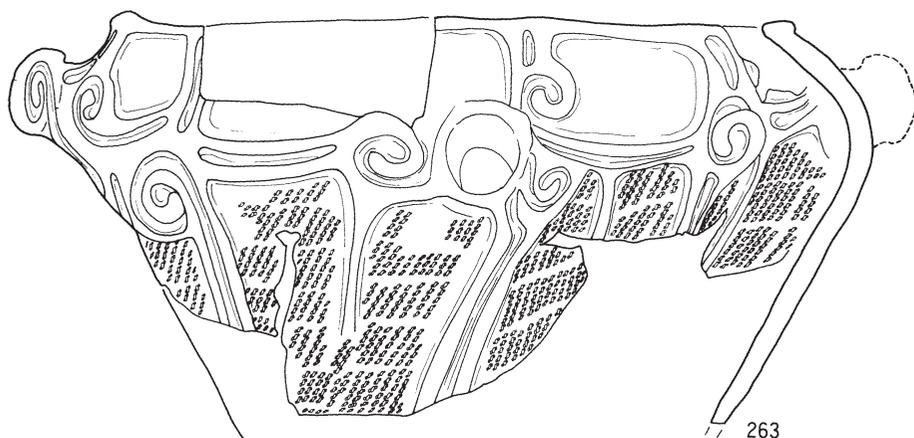
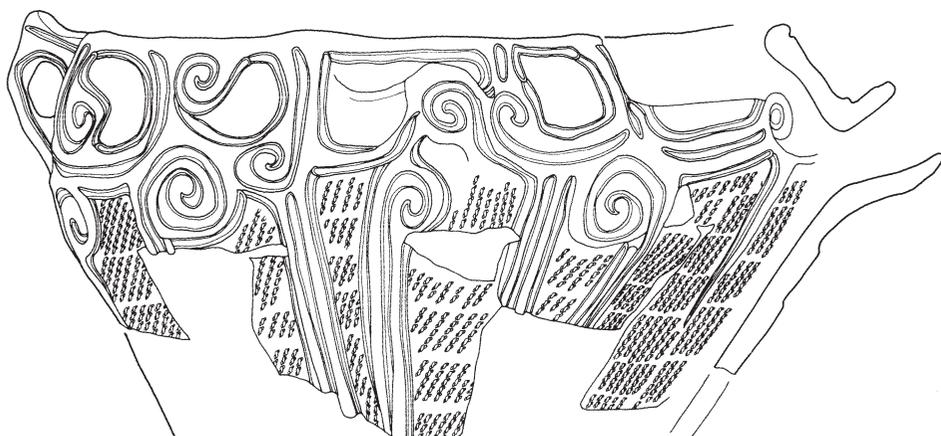
268・269・273は大木9式に比定されるもので、ともに口縁部が大きく内湾する器形である。268は、ほぼ縦走する縄文地に沈線による文様施文がなされている。269は口縁部が無文で、この直下に太めの沈線が一巡する。胴部も幅広の沈線文が施文されている。273も同様に縄文地に沈線による文様が施文されている。このほかに274・275の2点が同型式の可能性が考えられる。これらは胎土・焼成とも良好である。

270～272・276～283は大木10式と考えられるもので、270は3個の鱗状突起を持つ鉢型土器である。口唇部の山形突起の間に幅広の沈線が施文されている。272は長楕円の隆帯が貼り付けられ、上下方向に貫通孔が作出されている。276以下は無文を基本とした土器で、大きく突出した隆帯と橋状把手を有するものである。267・268は朱彩の痕跡が残っており、甕棺の可能性が考えられる。282は形状不明のものである。283は湾曲したボタン状の突起部分の破片である。

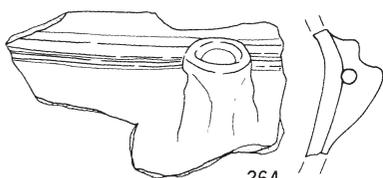
### 4類 (第119・120図)

大木系土器の胴部片で、型式を特定できないものを一括した。

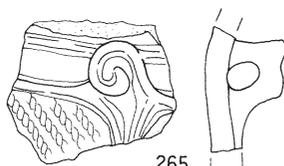
地文の縄文は、横走・縦走など種々あり、沈線文がみられるものは1・2類の破片と考えられるものである。



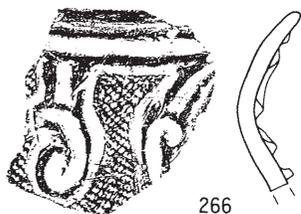
263



264



265



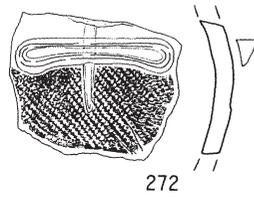
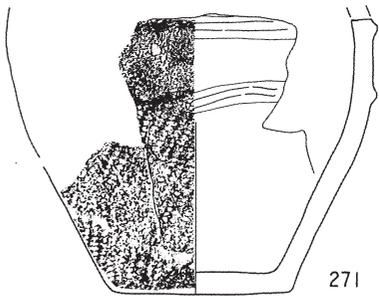
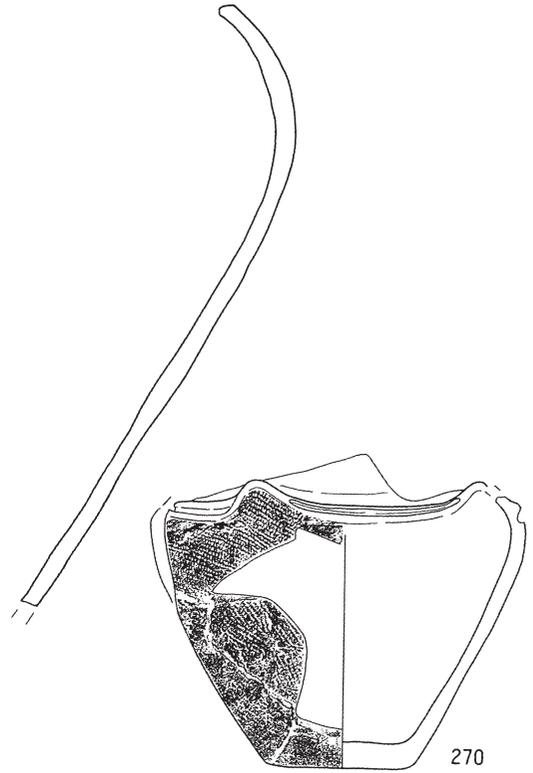
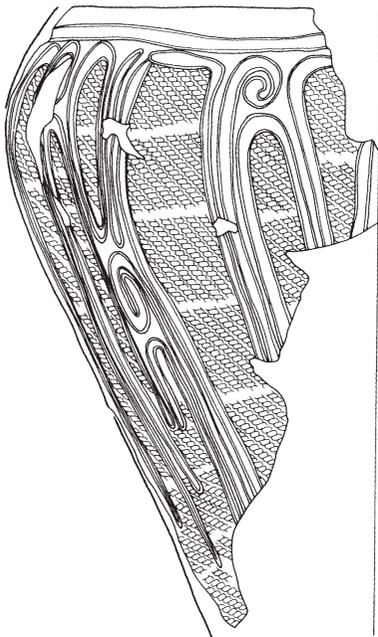
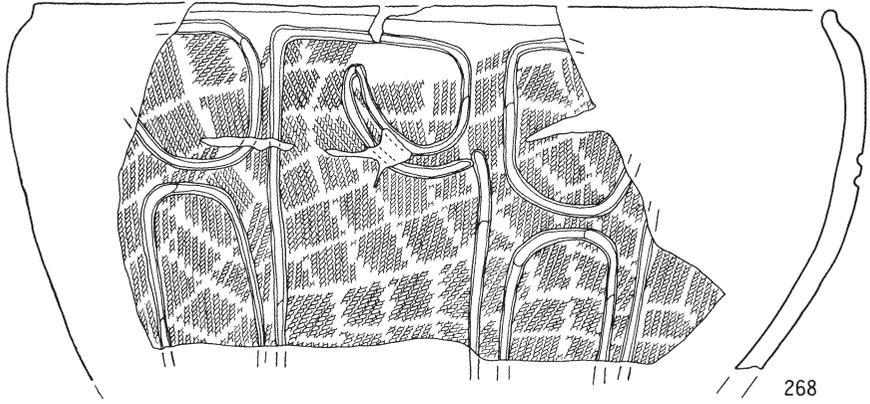
266



267

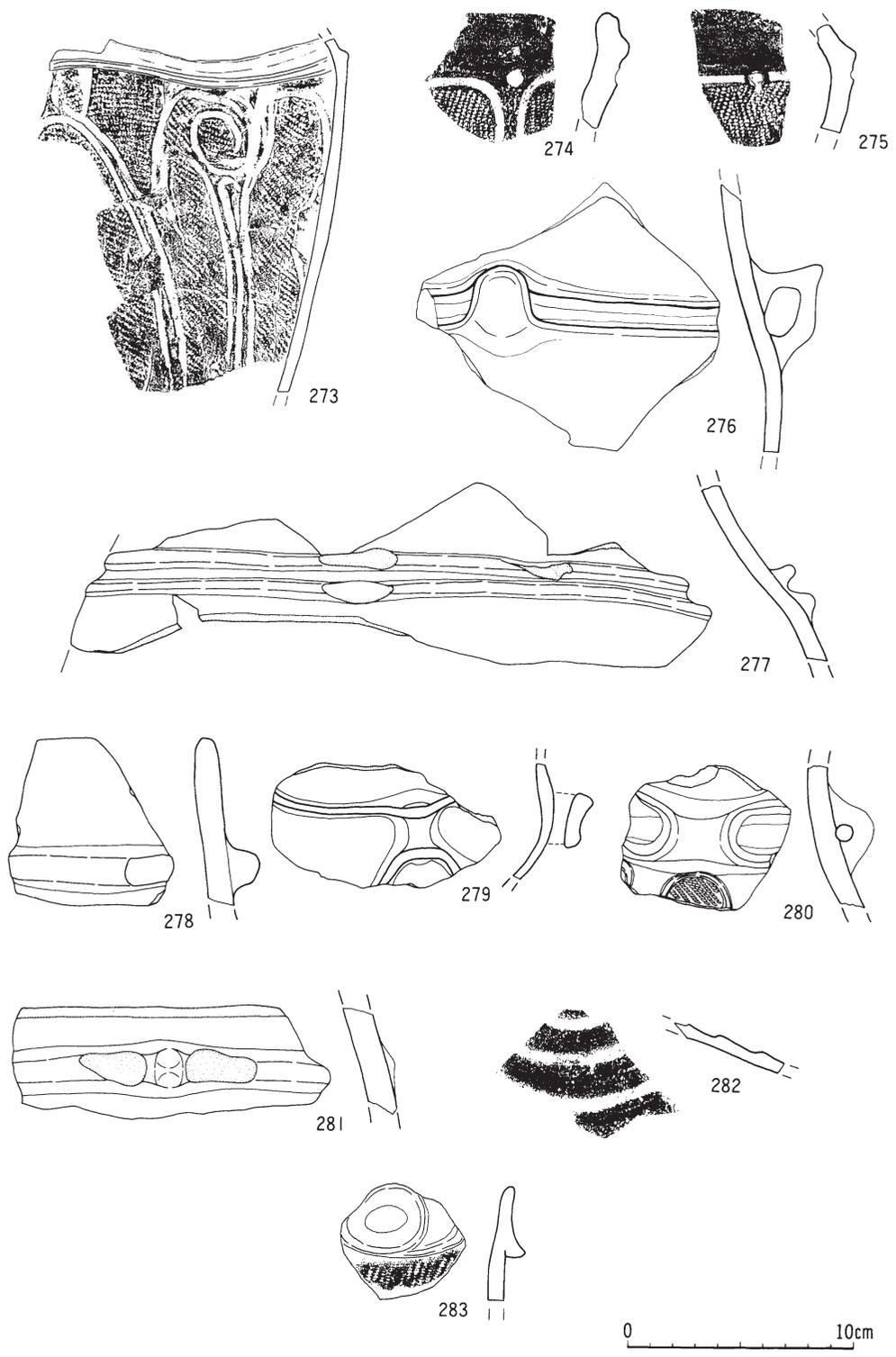
0 10cm

第116图 遺構外出土土器—57 (IV群3類—1)

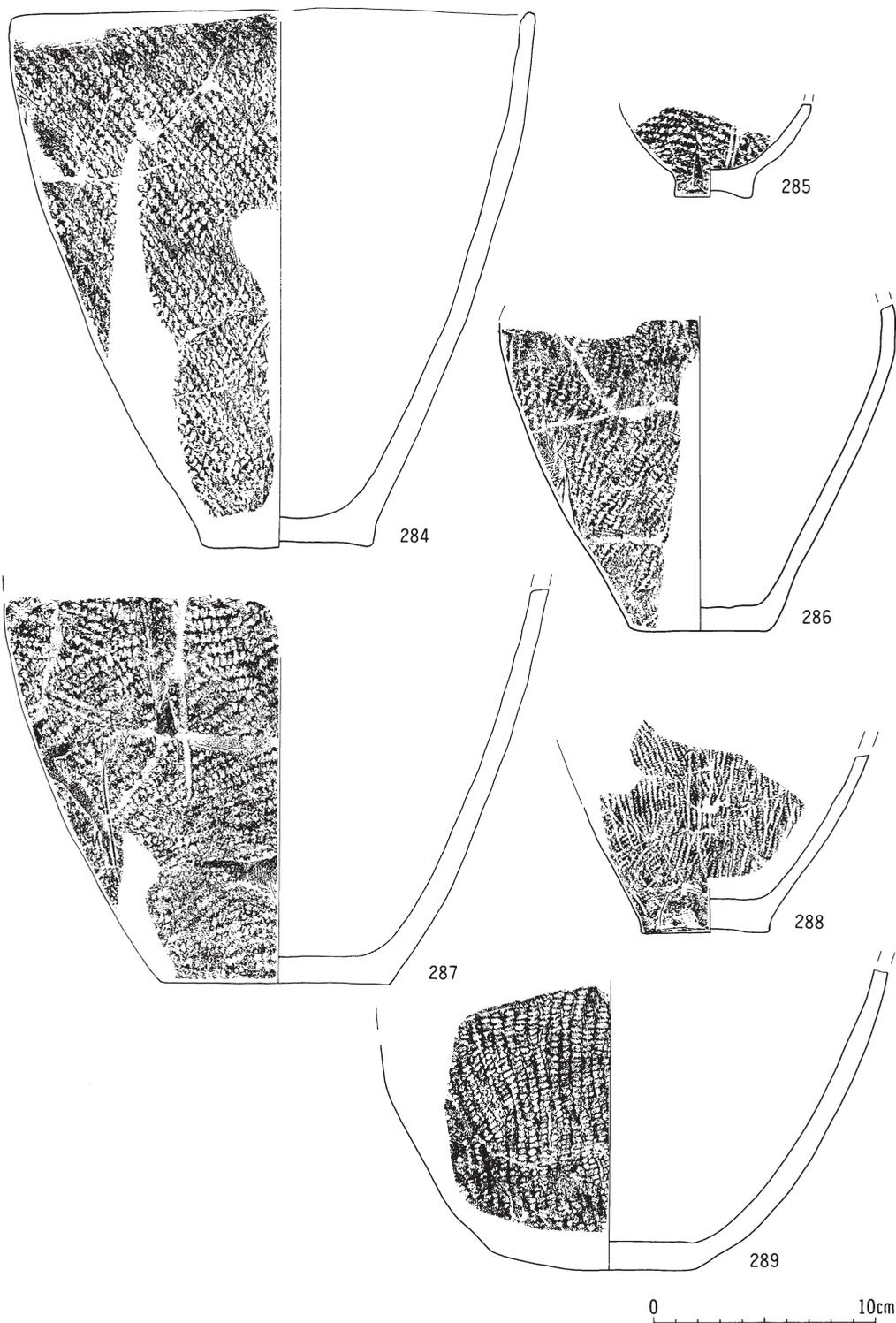


0 10cm

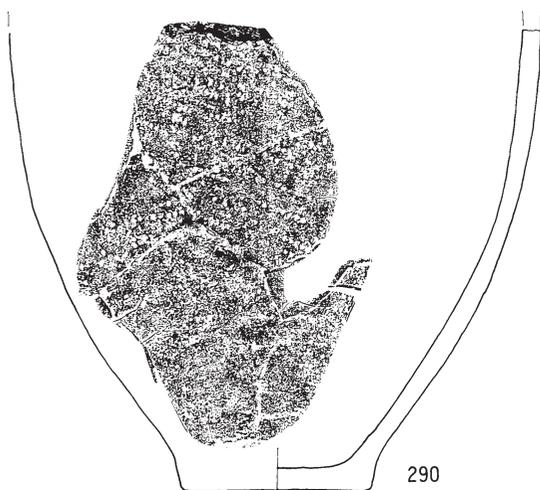
第117図 遺構外出土土器-58 (IV群3類-2)



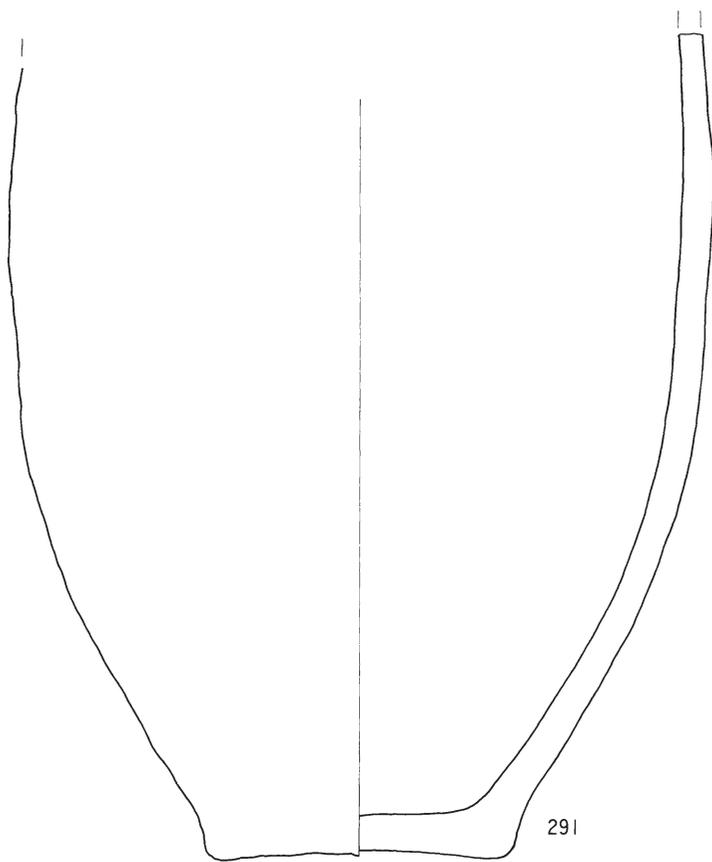
第118圖 遺構外出土土器-59 (IV群3類-3)



第119図 遺構外出土土器-60 (IV群4類-1)



290



291

0 10cm

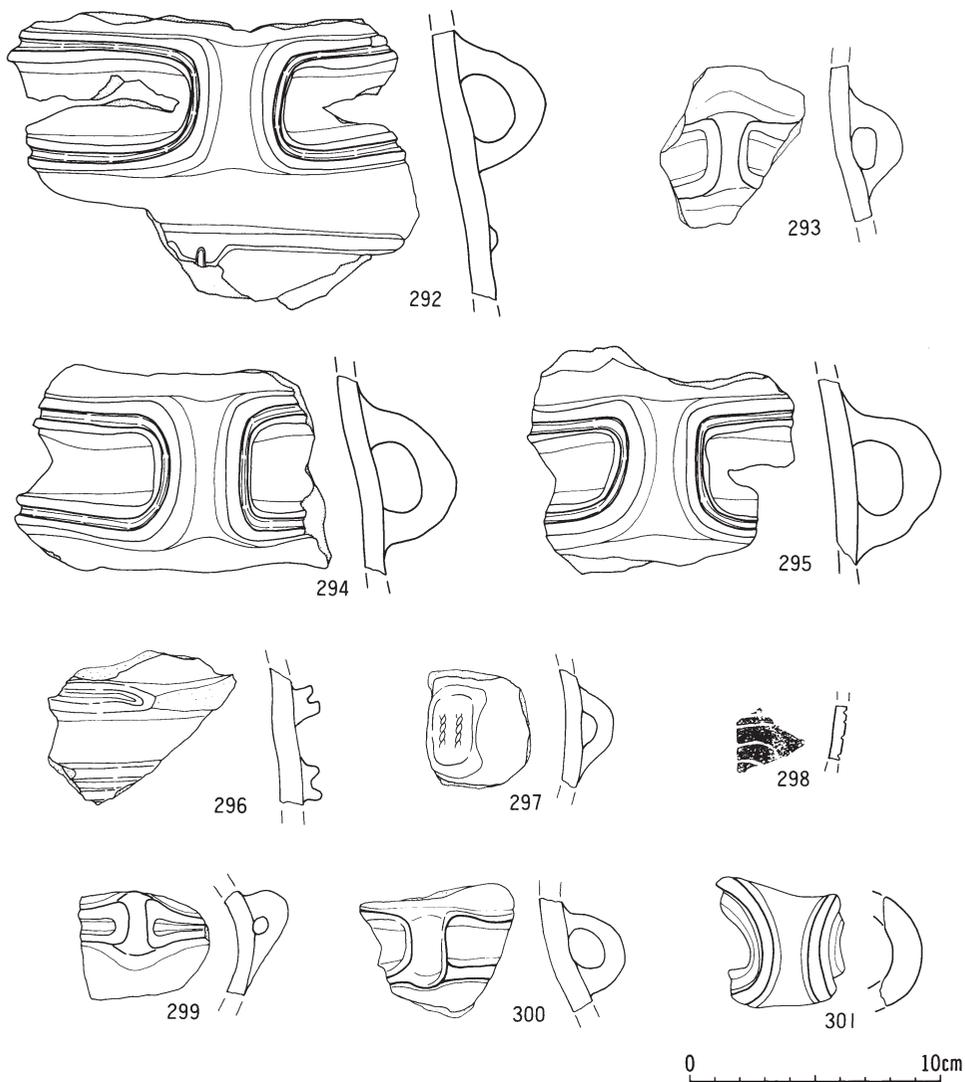
第120図 遺構外出土土器-61 (IV群4類-2)

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第116図-263	H-51	II	口～胴	平口縁 わらび手文 橋状把手 注口	斜縄文RL	IV群3類	174
-264	E-23	III	胴部		沈線文 貫通孔 朱塗り	IV群3類	556
-265	I-50	I	口～胴	沈線文 橋状把手	斜縄文LR	IV群3類	509
-266	G-36	III	口～胴	平口縁	斜縄文LR 沈線文	IV群3類	616
-267	H-64	II	口縁	平口縁 沈線文		IV群3類	510
第117図-268	I-60	III	口～胴	平口縁 無文	縦位斜縄文RL 沈線文	IV群3類	591
-269	H-48	III	口～胴	平口縁	斜縄文LR 沈線文	IV群3類	609
-270	H-48	II	略完形	無文 釣手 1本の沈線+4つの突起	斜縄文LR	IV群3類	34
-271	H-49	III	略完形	無文 朱塗り	斜縄文RL	IV群3類	79
-272	I-47	III	口～胴	貫通孔	斜縄文	IV群3類	505
第118図-273	I-50	III	口～胴	波状口縁 無文	斜縄文LR わらび手文	IV群3類	137
-274	I-60	III	口～胴	平口縁 貫通孔	斜縄文RL 沈線文	IV群3類	551
-275	I-60	III	口～胴	貫通孔	斜縄文RL	IV群3類	550
-276	I-56	II	胴部		橋状把手 朱塗り	IV群3類	553
-277	I-56	II	胴部		橋状把手 朱塗り	IV群3類	552
-278	H-65	II	口縁	平口縁 無文		IV群3類	548
-279	I-48	III	胴部		斜縄文LR 橋状把手	IV群3類	555
-280	S-91	III	口～胴	橋状把手	斜縄文LR 沈線文	IV群3類	508
-281	H-65	II	胴部		橋状把手	IV群3類	554
-282	H-48	II				IV群3類	542
-283	I-74	III	口～胴	波状口縁 折返状口縁 ボタン状突起	斜縄文RL	IV群3類	541
第119図-284	I-68	II	胴～底		斜縄文 補修孔	IV群4類	120
-285	F-22	III	胴～底		横位斜縄文LR	IV群4類	607
-286	H-52	II	胴～底		縦位斜縄文RL	IV群4類	48
-287	H-40	III	胴～底		斜縄文LR 沈線文	IV群4類	128
-288	I-37	III	胴～底		縦位斜縄文RL 垂下文	IV群4類	595
-289	H-51	II	胴～底		斜縄文RL	IV群4類	98
第120図-290	H-50	II	胴～底		横位斜縄文LR	IV群4類	593
-291	H-51	II	胴～底		斜縄文LR	IV群4類	129

## 第V群土器 (第121図)

縄文時代後期の土器を一括した。

1点を除き、甕棺土器の破片と考えられる。297が一部に縄文施文の痕跡が認められるだけで、他はすべて無文である。大きく突出した隆帯と、これをつなぐ橋状把手からなり、器面全体にいいいな磨きがなされている。十腰内I式に比定されるものと考えられる。298は無文地に沈線が施文されているもので、これも同型式と考えられる。



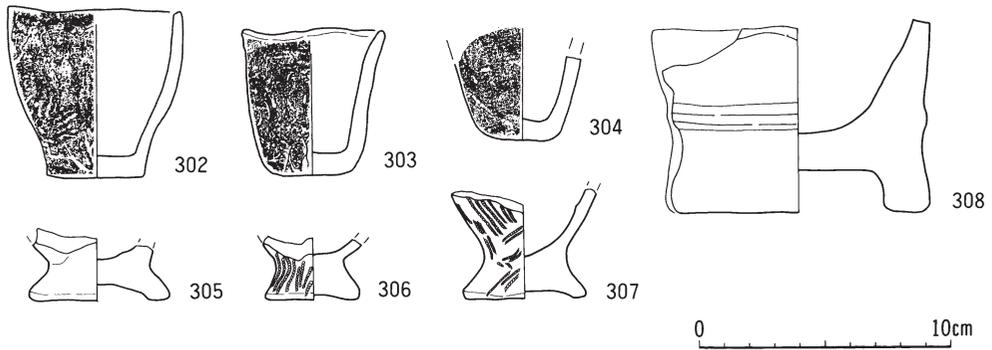
第121図 遺構外出土土器-62 (V群)

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第121図-292	H-49	II	胴部		沈線文 橋状把手	V群	559
-293	I-60	III	胴部		橋状把手 朱塗り	V群	545
-294	H-49	II	胴部		沈線文 橋状把手	V群	557
-295	H-49	II	胴部		沈線文 橋状把手	V群	558
-296	E-15	III	胴部		沈線文	V群	549
-297	G-71	III	胴部		無文 橋状把手	V群	546
-298	O-11	I	胴部		沈線文 朱塗り	V群	543
-299	G-39	III	胴部		橋状把手	V群	547
-300	I-60	III	胴部		橋状把手 朱塗り	V群	544
-301	H-49	III	胴部		沈線文 橋状把手	V群	560

第VI群土器 (第122図)

縄文時代の土器で、時期及び型式を特定できない小型土器を一括した。

302～304は小型のミニチュア土器で、全面に縄文が施文されている。305～307は台部の破片で、305は無文、他の2点は縄文が施文されている。308は厚手の無文の土器である。筒状の台が作出されており、外面に小規模のつまみ出しによると考えられる隆帯が巡っている。

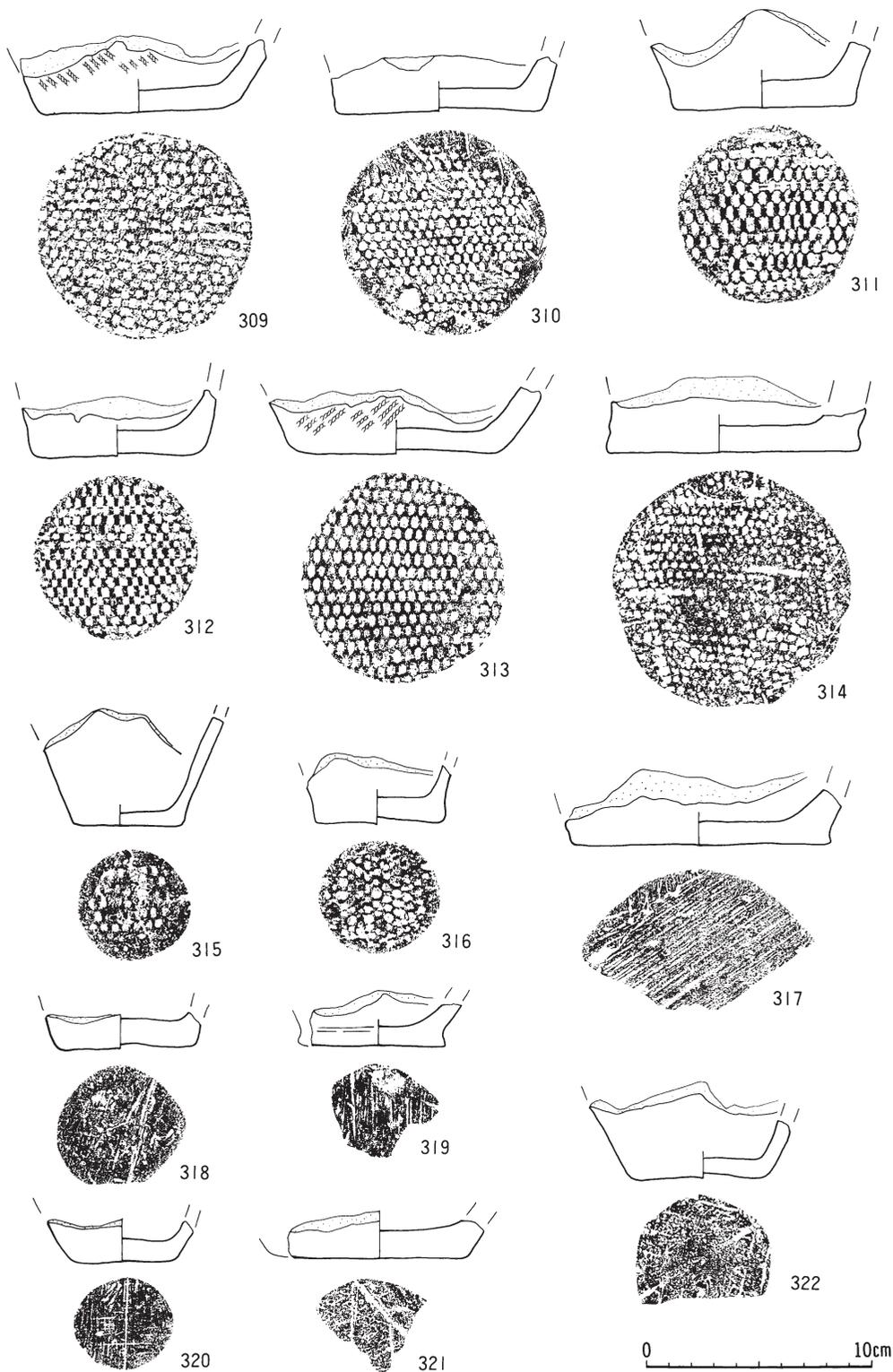


第122図 遺構外出土土器-63 (VI群)

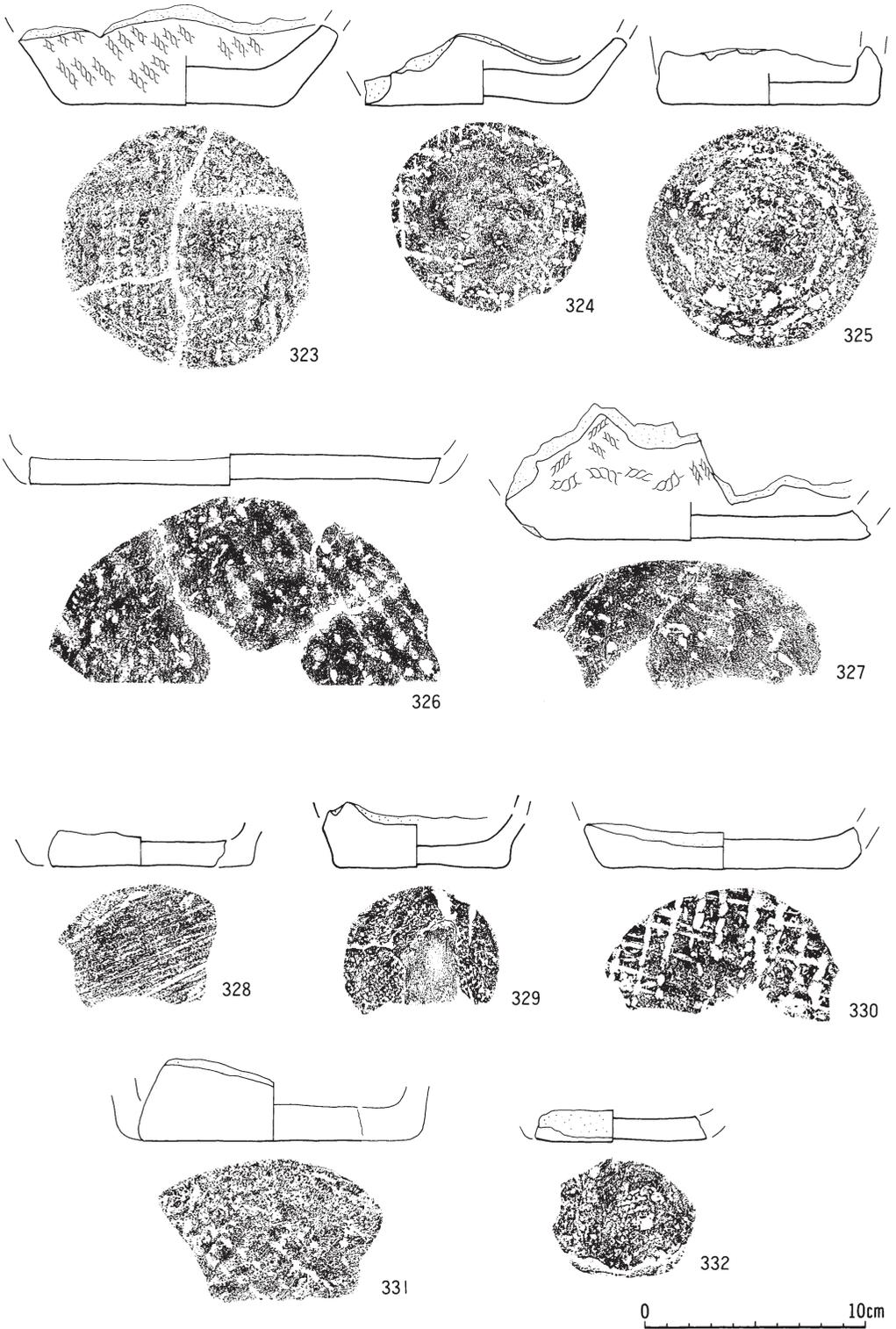
第VII群土器 (第123・124図)

土器の底部資料で、底外面に文様のあるものを一括した。大型で肉厚のものは、概ね円筒式土器のものと考えられる。

網代の痕跡のものが多い傾向があるが、317・319などのような板目？状の圧痕のあるものや、木葉痕、縄目の圧痕のものなどがみられる。325は縄を渦巻き状に巻いたと考えられる圧痕がみられる特殊なものである。



第123图 遺構外出土土器-64 (底部-1)



第124図 遺構外出土土器-65 (底部-2)

図版番号	遺構名	層位	部位	口頸部文様	胴部文様	分類	整理番号
第122図-302	H-49	II	略完形	平口縁	縄文	VI群	3
-303	H-34	III	略完形	平口縁	無文	VI群	1
-304	I-55	II	胴～底		無文	VI群	2
-305	H-63	II	底部		斜縄文	VI群	605
-306	I-50	II	底部		縦位斜縄文RL	VI群	608
-307	G-42	III	胴～底		斜縄文LR	VI群	606
第123図-308	H-55	II	底部		斜縄文	VI群	602
-309	H-73	III	底部		斜縄文LR 網代痕	VII群	561
-310	P-84	II	底部		網代痕	VII群	562
-311	H-74	III	底部		斜縄文 網代痕	VII群	563
-312	P-85	II	底部		斜縄文LR 網代痕	VII群	564
-313	F-19	III	底部		斜縄文LR 網代痕	VII群	565
-314	I-52	II	底部		網代痕	VII群	614
-315	G-71	III	底部		横位斜縄文LR 網代痕	VII群	567
-316	H-65	II	底部		斜縄文RL 網代痕	VII群	566
-317	G-44	II	底部			VII群	568
-318	J-75	II	底部			VII群	569
-319	G-69	II	底部		斜縄文LR	VII群	574
-320	I-65	III	底部			VII群	571
-321	O-84	II	底部		木葉痕	VII群	573
-322	H-35	III	底部			VII群	570
第124図-323	H-47	III	底部		斜縄文RL 縄目痕	VII群	575
-324	G-66	II	底部		斜縄文RL 縄目痕	VII群	577
-325	G-43	II	底部		横位斜縄文RL 縄目痕	VII群	576
-326	H-52	II	底部		縄目痕	VII群	578
-327	H-51	III	底部		斜縄文RL ループ 縄目痕	VII群	580
-328	H-70	II	底部			VII群	572
-329	E-30	III	底部		縄目痕	VII群	582
-330	I-35	II	底部		縄目痕	VII群	579
-331	I-57	III	底部		縄目痕	VII群	583
-332	I-58	II	底部		縄目痕	VII群	581

## 2 石器

石器は、剝片素材及び礫素材のものをあわせて、段ボール箱で約60箱分が出土している。

出土地点は、概ね土器の出土範囲と合致しており、この範囲内で出土した石器も同時期のものと考えられる。ただ、土器自体の出土状態が層位的に捉えられなかったことから、石器においても、どの土器型式に伴うものかは断定し得ない。

また、90ラインから西側については、主に縄文時代後期の土器が出土していることから、この範囲から出土した石器は、同時期のものと考えられる。

石器の分類は、主に器種によって大別し、各特徴によって細分した。

### 石鏃 (第125～141図)

約350点出土した。遺構外出土は約340点で、定形石器では最も出土量の多い器種である。分類は、主に茎部の有無により大別し、基部の形状によって細分したが、約30点ほどは基部形状が不明のため分類不能である。ただし基部形状でも明確に分類できないものも多く、これらは特徴の強い方をもって細分した。

1～4は無茎平基としたもので、出土点数の非常に少ない類である。3はやや円基風である。

5～7の3点は、無茎凹基の中でも基部の挟りがごく浅いものである。5は非常に薄手の大型のものである。8～11は挟りがやや湾曲するもので、12・13・16はほぼ正三角形の挟りの浅いものである。17～22は挟りが弧状に作出されており、23～37は浅めの直線的な挟りである。このうちの30～33は基端寄りの縁辺がやや膨らみを帯びている。

38～46は挟りが深く作出されたもので、鋭角な直線的なものが多い。

49～73は有茎平基としたものであるが、茎の両側が水平に作出されているものは非常に少なく、ほとんどが片方が浅い凹基または凸基のものである。これらはやや長身のものも多く、幅広のものは52の1点である。

74～78は有茎凹基としたもので、無茎平基と同様にごく少量の出土である。

80～268は有茎凸基の類で、石鏃の大部分をしめる。

80～88は、平基に近いもので、器端（側縁端）は鋭利に作出されている。90～93は器端がやや突出気味に作出されている。94～124は本類の基本的な形状のもので、側縁は概ね直線的で器端も角張っている。125～139は側縁がやや丸みを帯びており、基部も両側の形状が異なるものが多い。140～154は器端に丸みがみられるもので、側縁も器部寄りが曲線的である。

155～168は器体の最大幅が基部から器体中央寄りにあるもので、長めのものには基部寄りの両側縁が直線的に平行し、短めのものには丸みが強く菱形に近い形状である。

169～177は器体がほぼ菱形のもので、尖基の鏃に形状に近い。茎の根元を細身に作出していることから有茎鏃とした。

178～226は全体に細身の類で、器端が丸みを帯びているものが多い。一部左右非対称のものもみられる。227～248は、左右非対称のもので、両側縁の調整が大きく異なっているものが多い。特に、片側縁をスクレーパー状に弧状に作出したものが多い。

249～268も左右の調整が異なるもので、258・259などは不定形石器のスクレーパー類としての分類も可能なものである。269～287は有茎鏃中でも類似したものがないものと基部の不明瞭な類である。

288～306は尖基または円基のものである。概ね器体は、柳葉形または菱形状であるが、296・297のように尖頭部近くに最大径をもつものもみられる。

307～327は石鏃としたものの、断定できないものを一括した。307～310は部分的な剝離による調整だけで、形状は似ているものの、石鏃としての完成品であるかは不明である。他の器体も欠損品か他の器種か不明のものである。

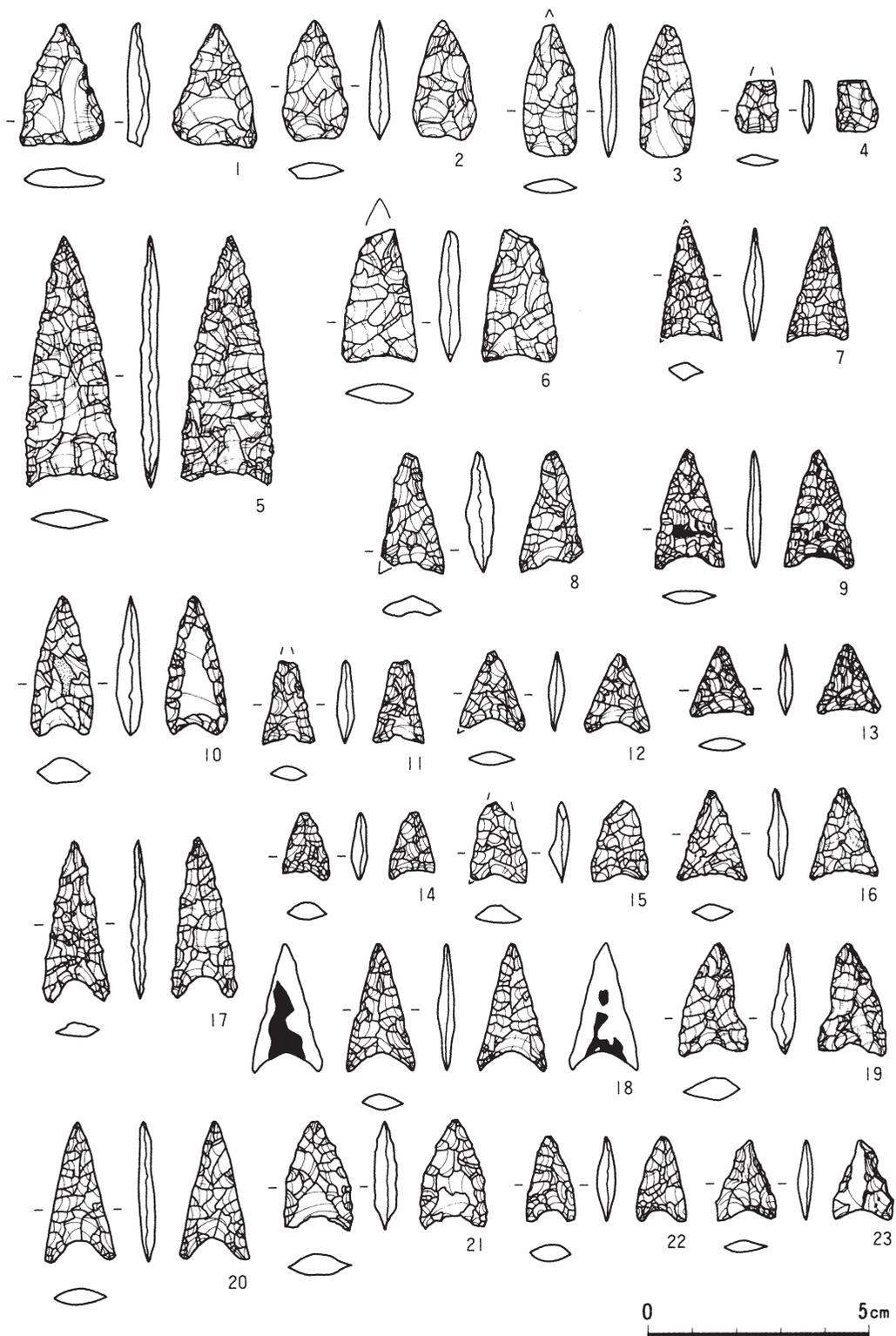
また、本類としたものの中でも、尖頭部の厚手のものなどには、錐的用法も考えられるものが数点ある。

形状以外の特徴では、器体にアスファルトの付着がみられるものが多く、遺構内外あわせて32点が出土している。着柄の痕跡と考えられ、無茎鏃では器体先端近くまでに、有茎鏃では主に茎部に付着が認められる。

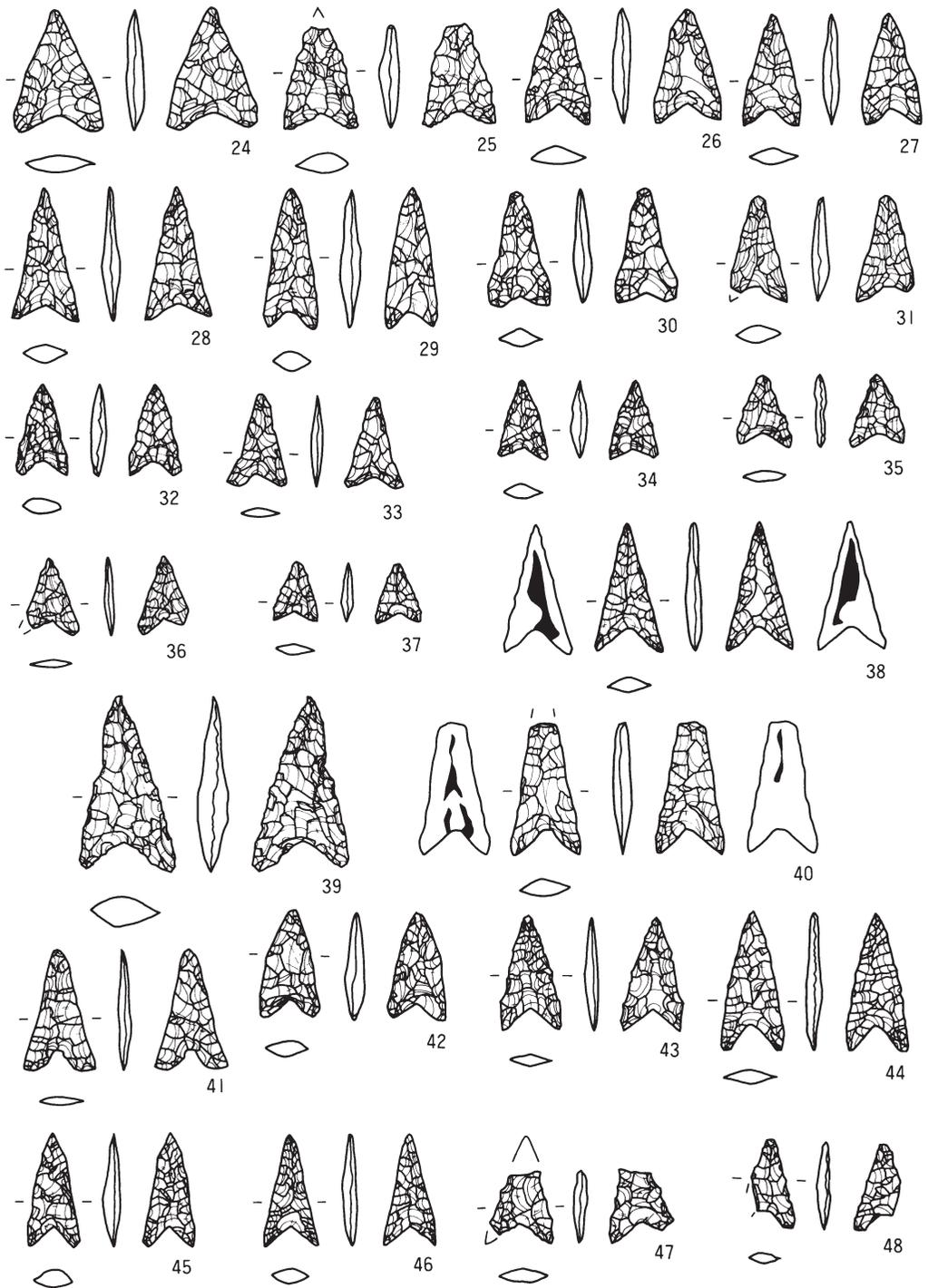
出土範囲では、土器の出土地点とほぼ重複するが、第5・6号住居跡の範囲内から、遺構確認前に多量の石鏃が出土している。特にH-48グリッドからは18点出土している。

素材となった石材は、ほとんどが珪質頁岩で、これに玉髓と玉髓質珪質頁岩が加わる。また、ごく少量ではあるが硬質の流紋岩及び緑色細粒凝灰岩が使われている。

遺構外出土のものでの比率では、珪質頁岩74%、玉髓質珪質頁岩18%、玉髓6%である。ただ前二者は、珪素の多寡による分類であり、素材としては同列と考えられる。

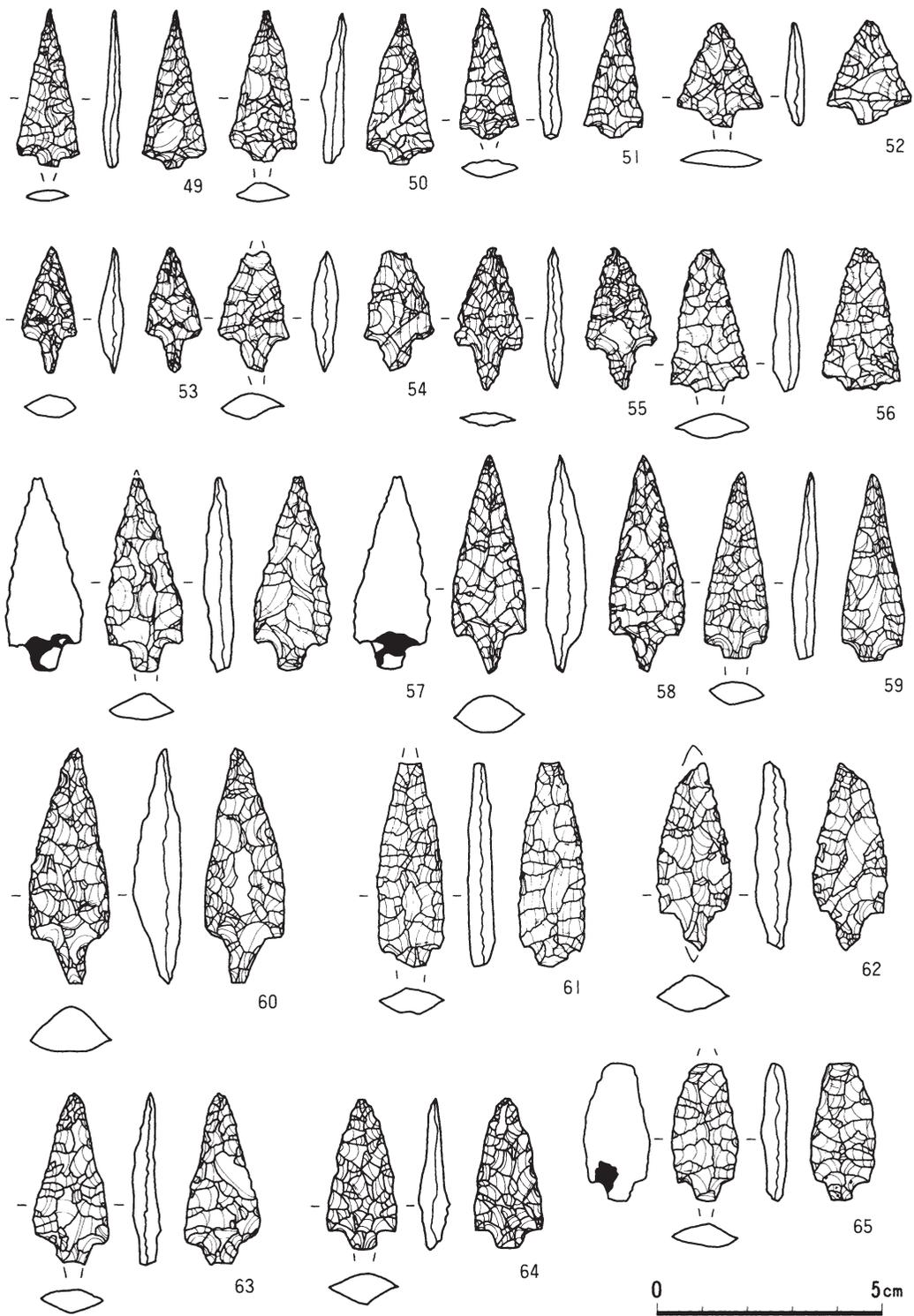


第125図 遺構外出土石器（石鏃一1）

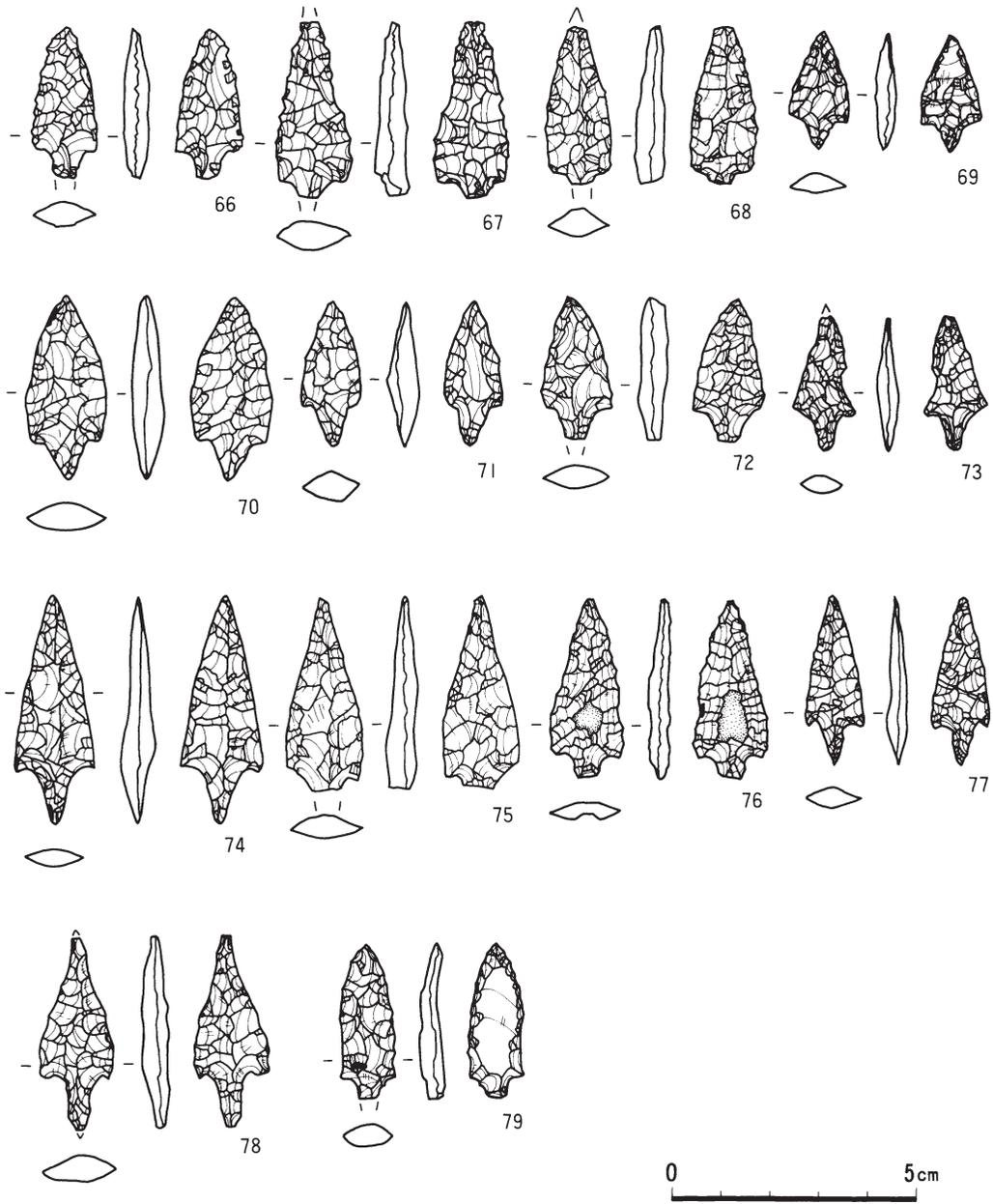


0 5cm

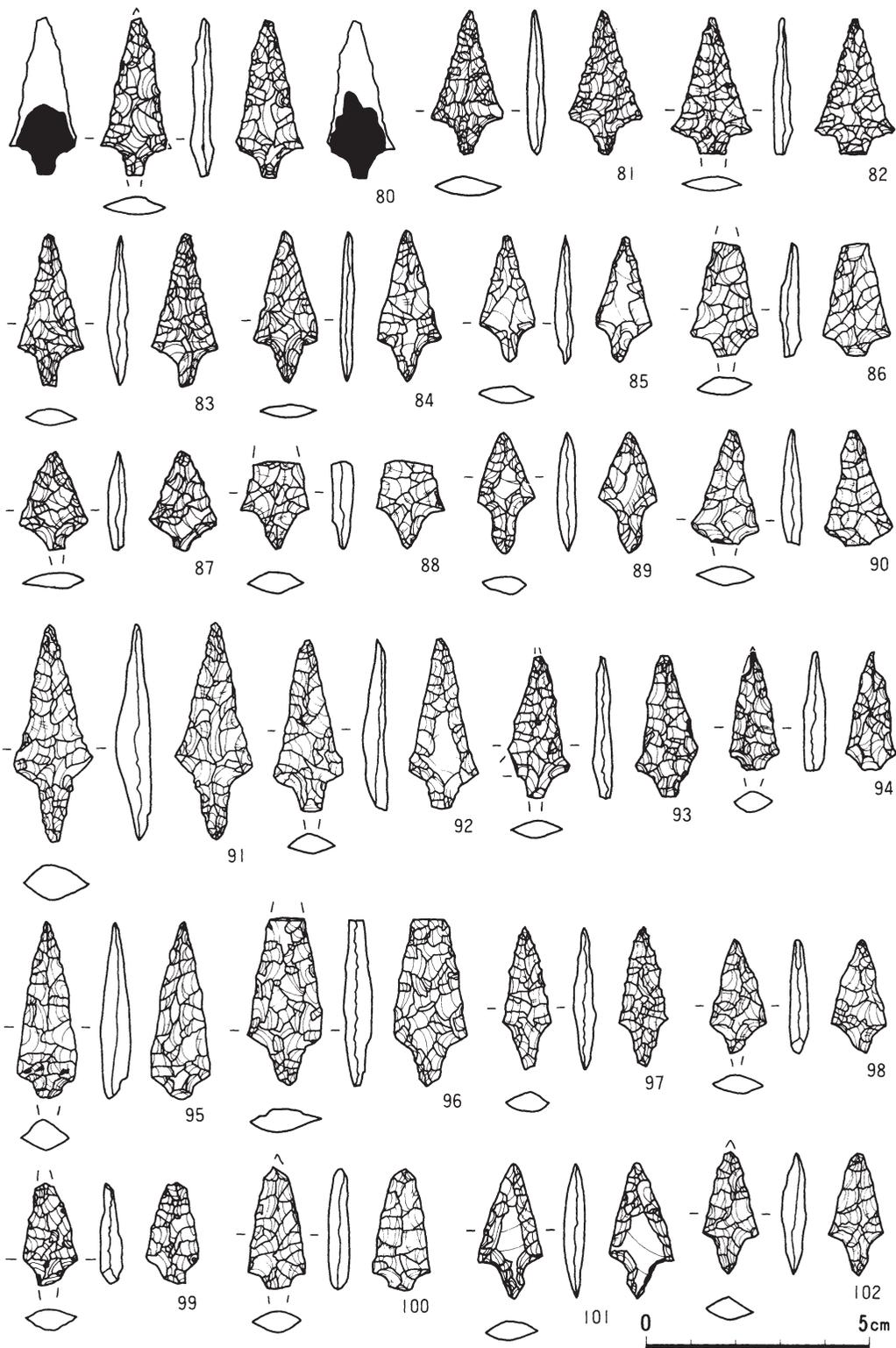
第126図 遺構外出土石器（石鏃—2）



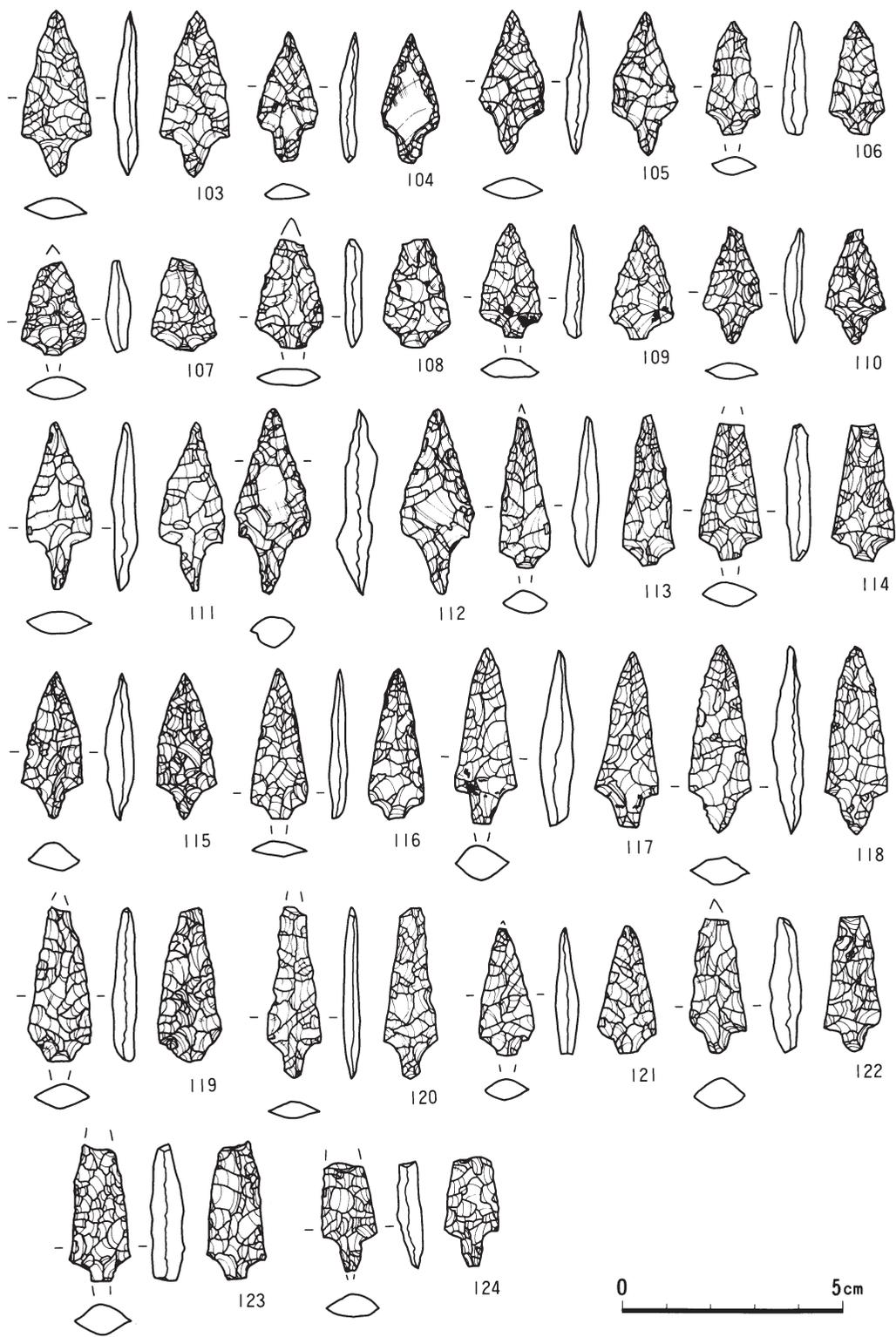
第127圖 遺構外出土石器（石鏃—3）



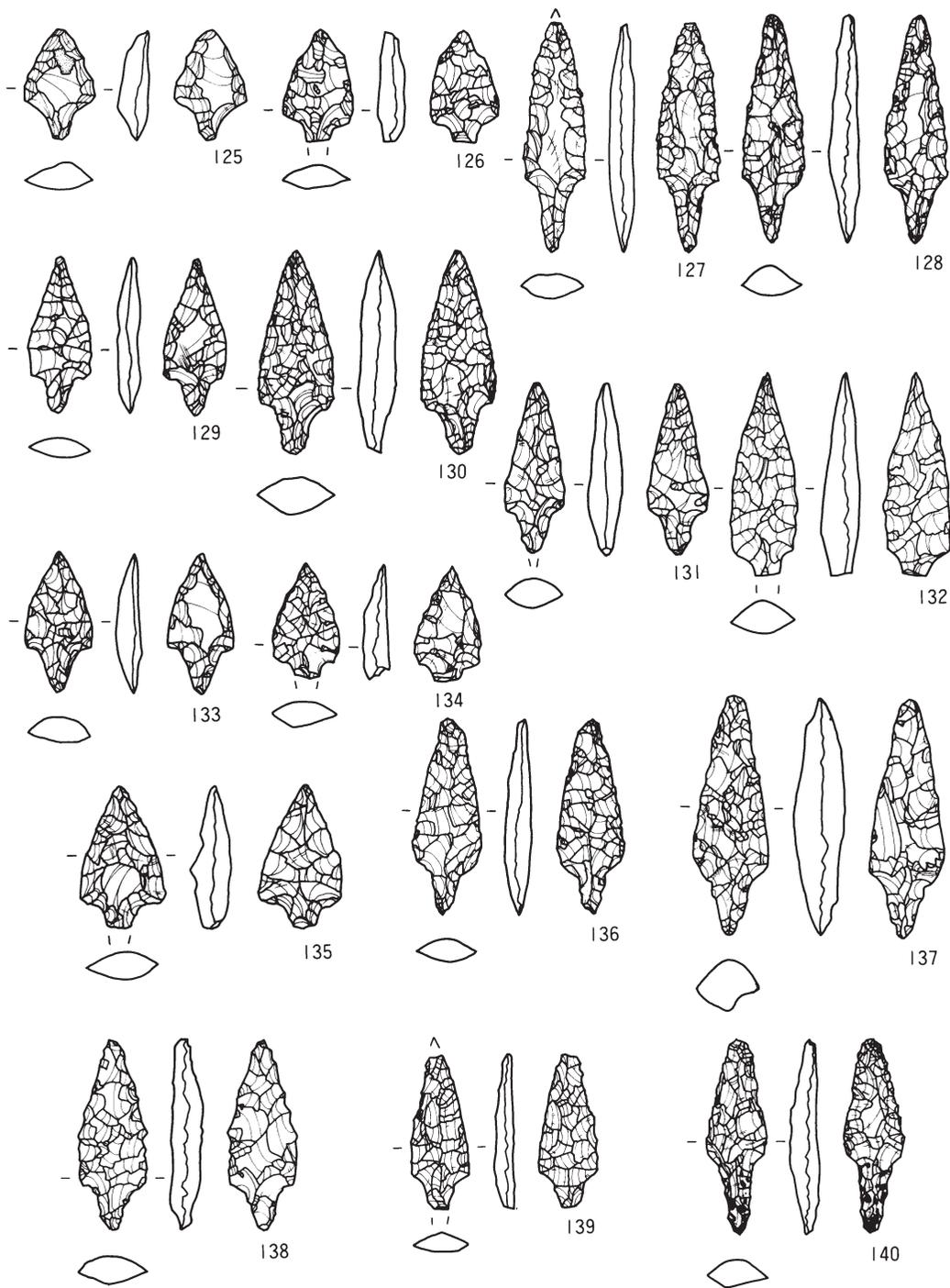
第128図 遺構外出土石器（石鏃—4）



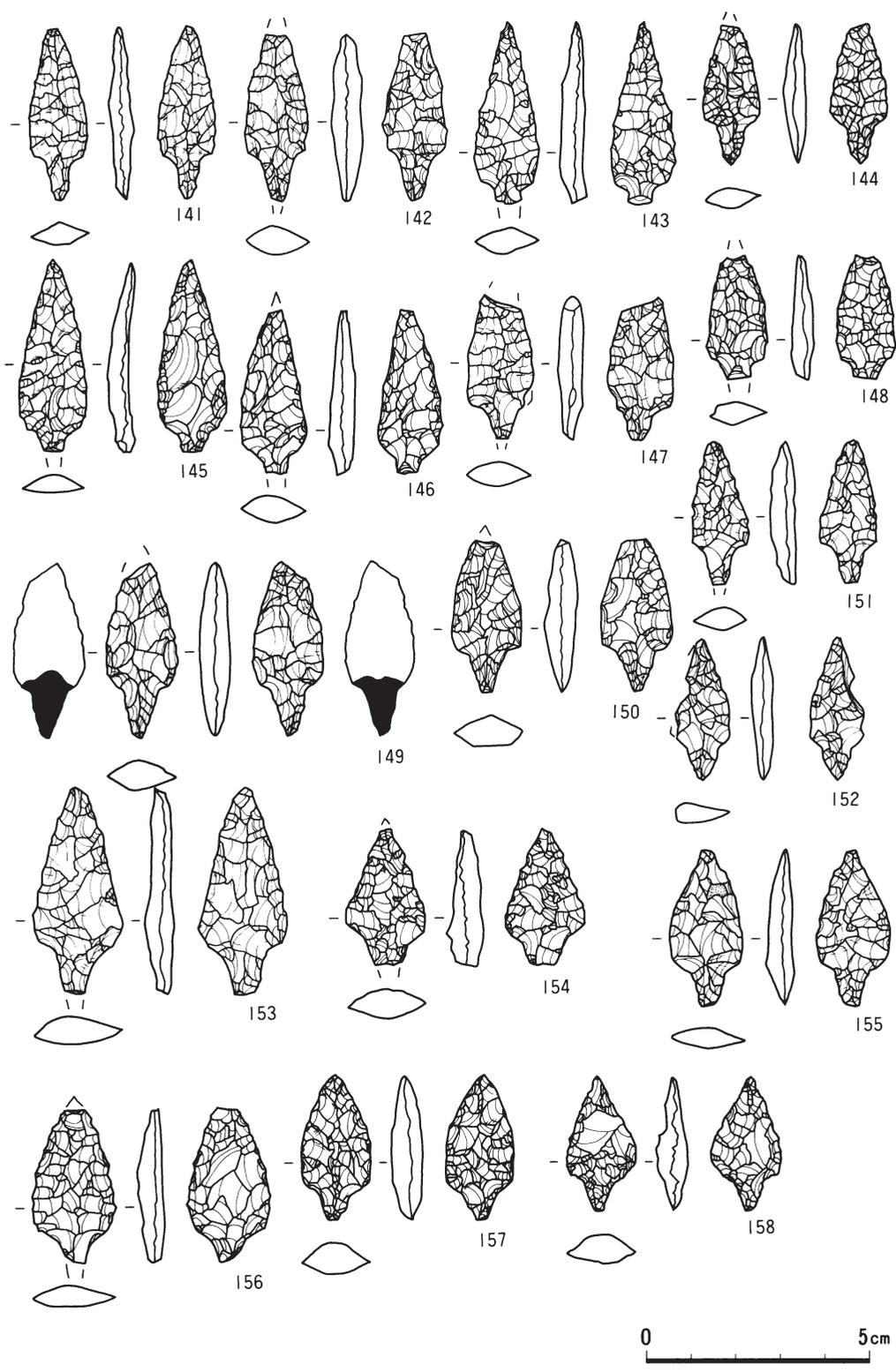
第129図 遺構外出土石器（石鏃—5）



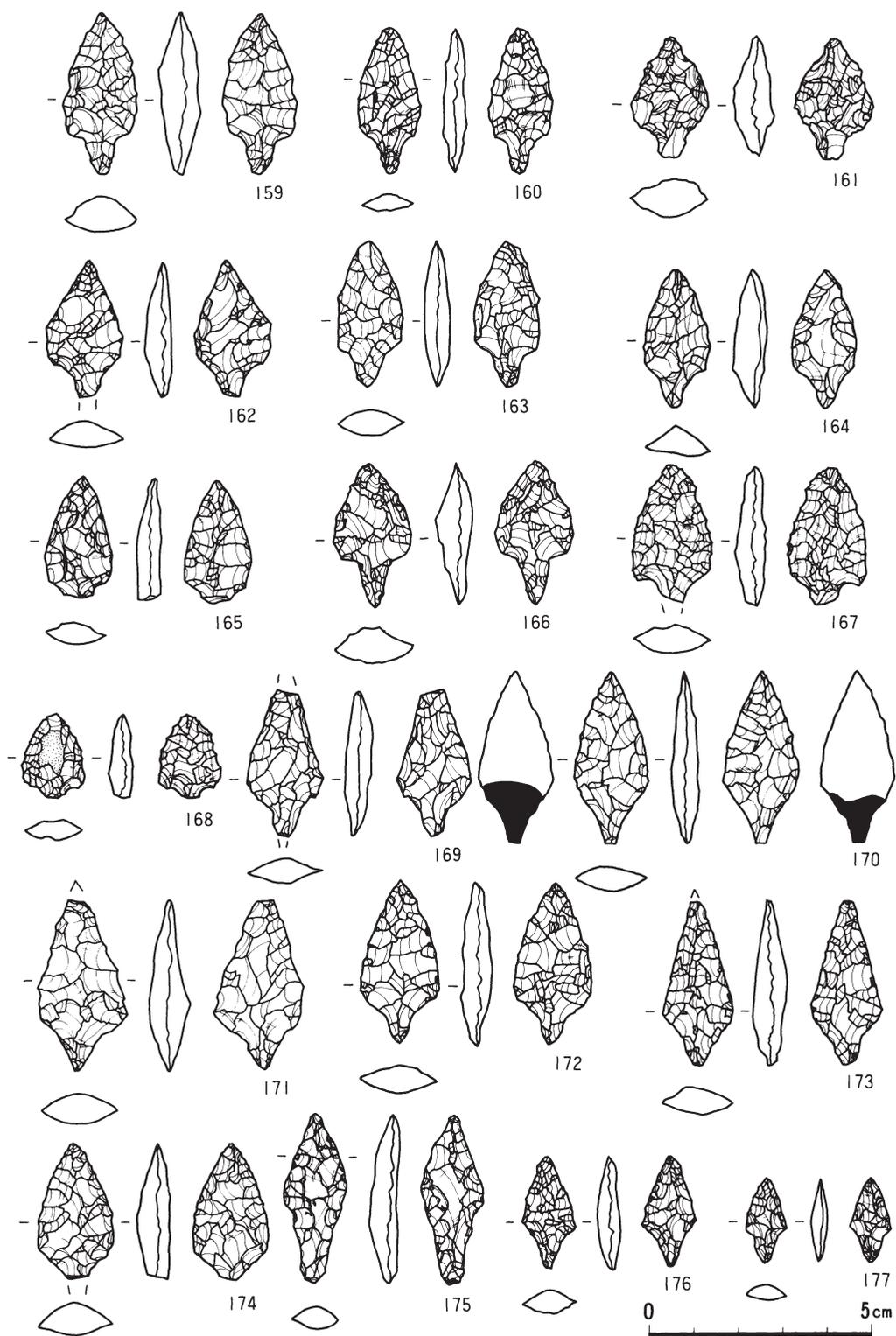
第130図 遺構外出土石器（石鏃—6）



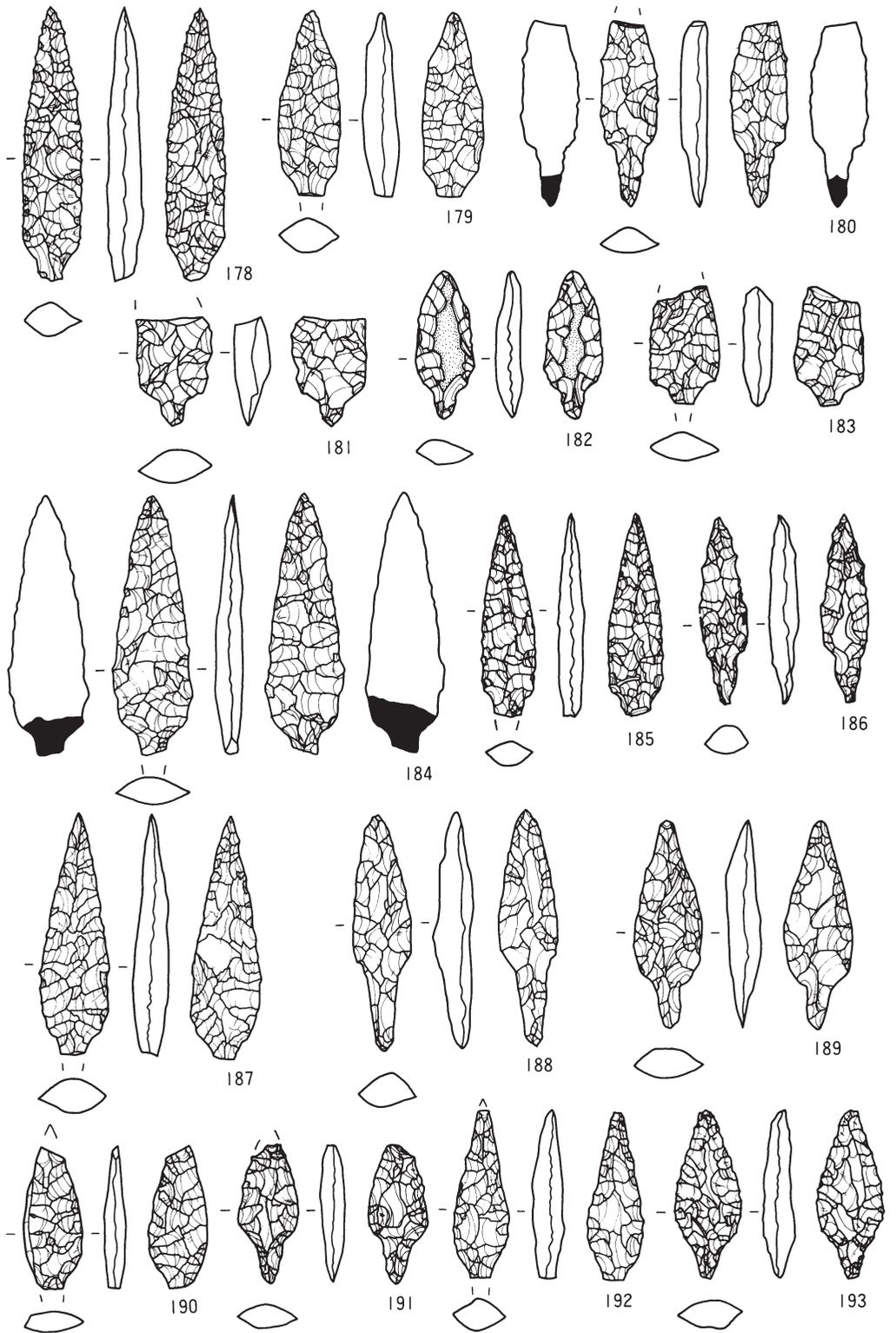
第131圖 遺構外出土石器（石鏃—7）



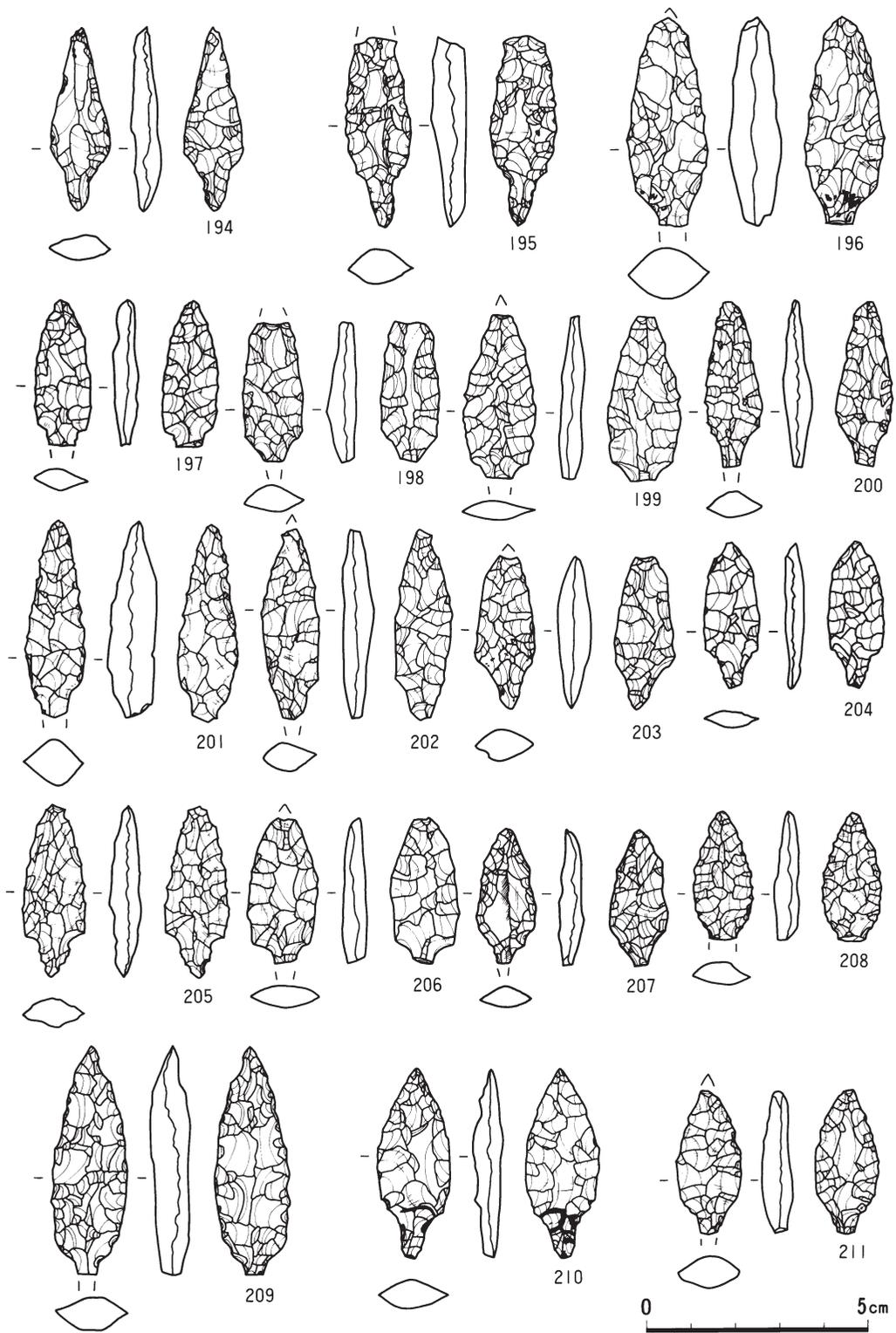
第132図 遺構外出土石器（石鏃—8）



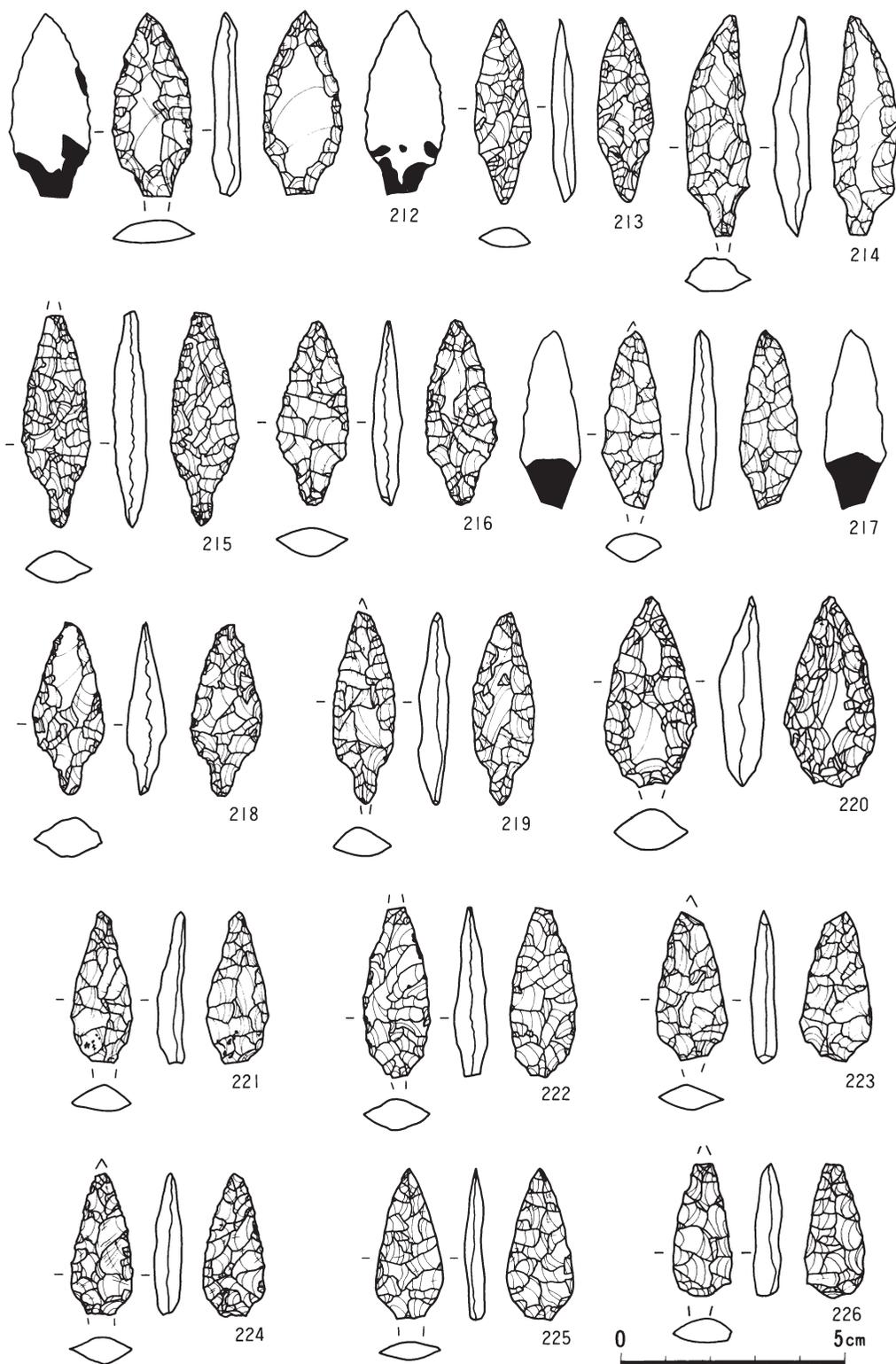
第133図 遺構外出土石器（石鏃—9）



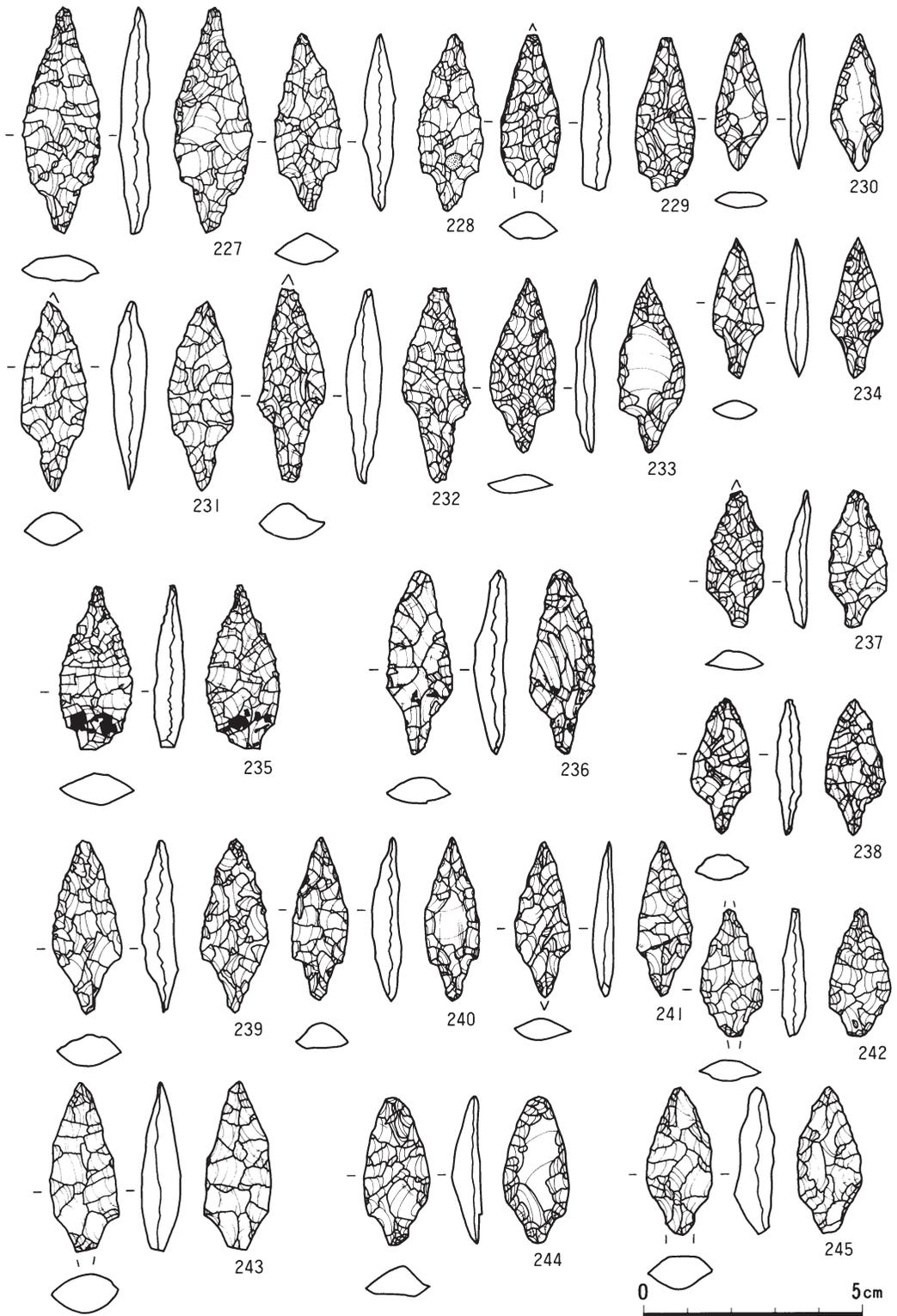
第134図 遺構外出土石器 (石鏃—10)



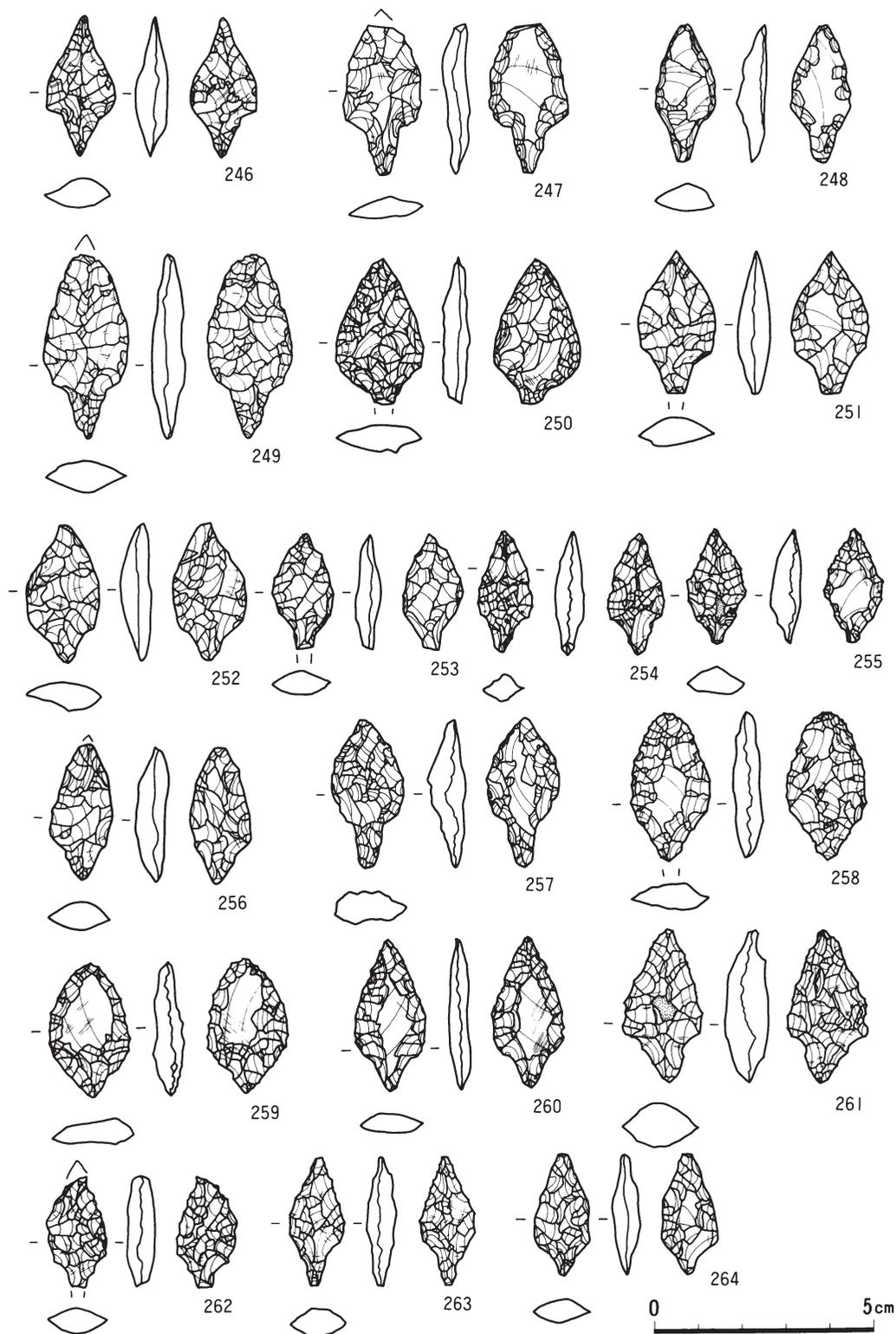
第135図 遺構外出土石器 (石鏃-11)



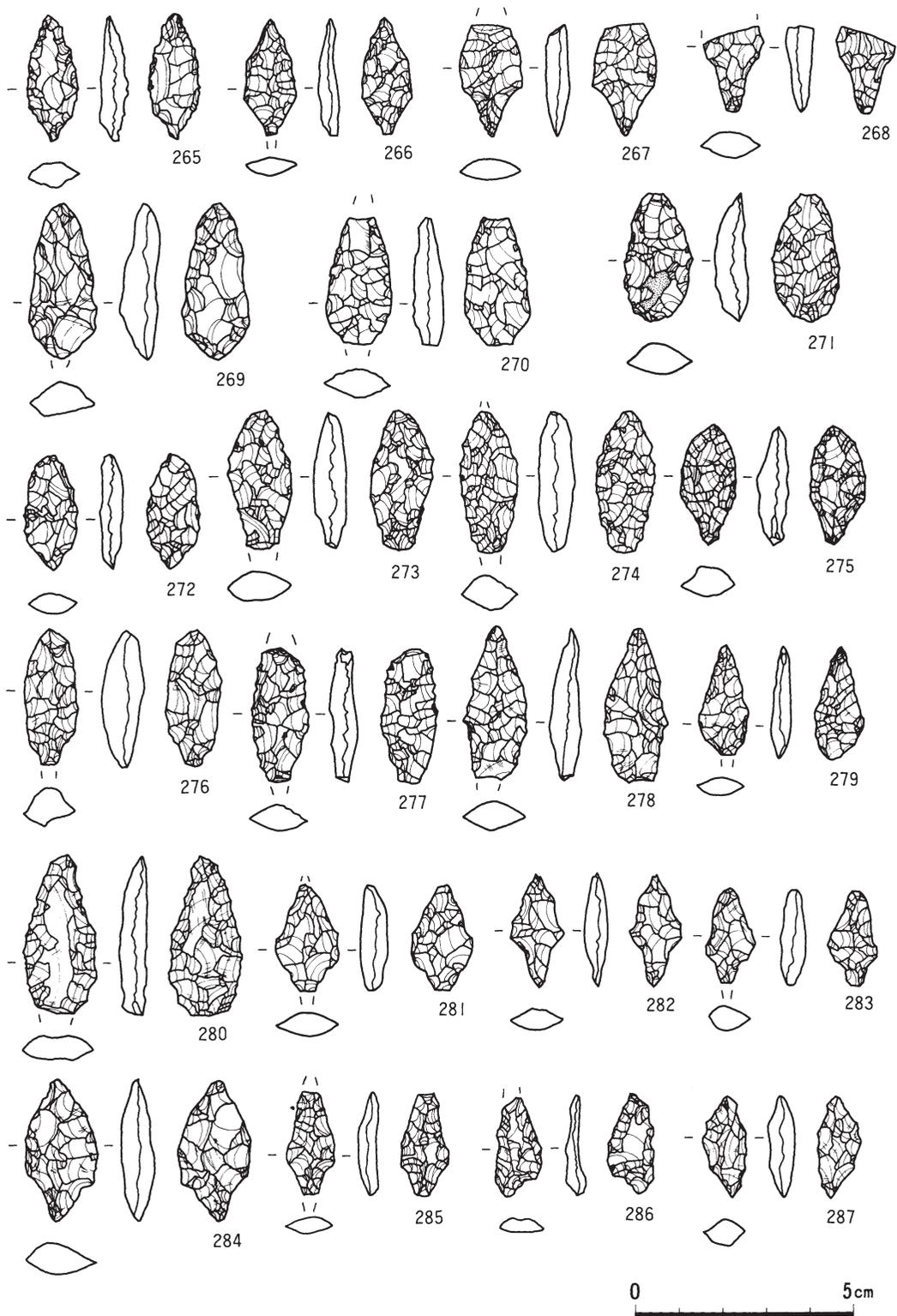
第136図 遺構外出土石器（石鏃—12）



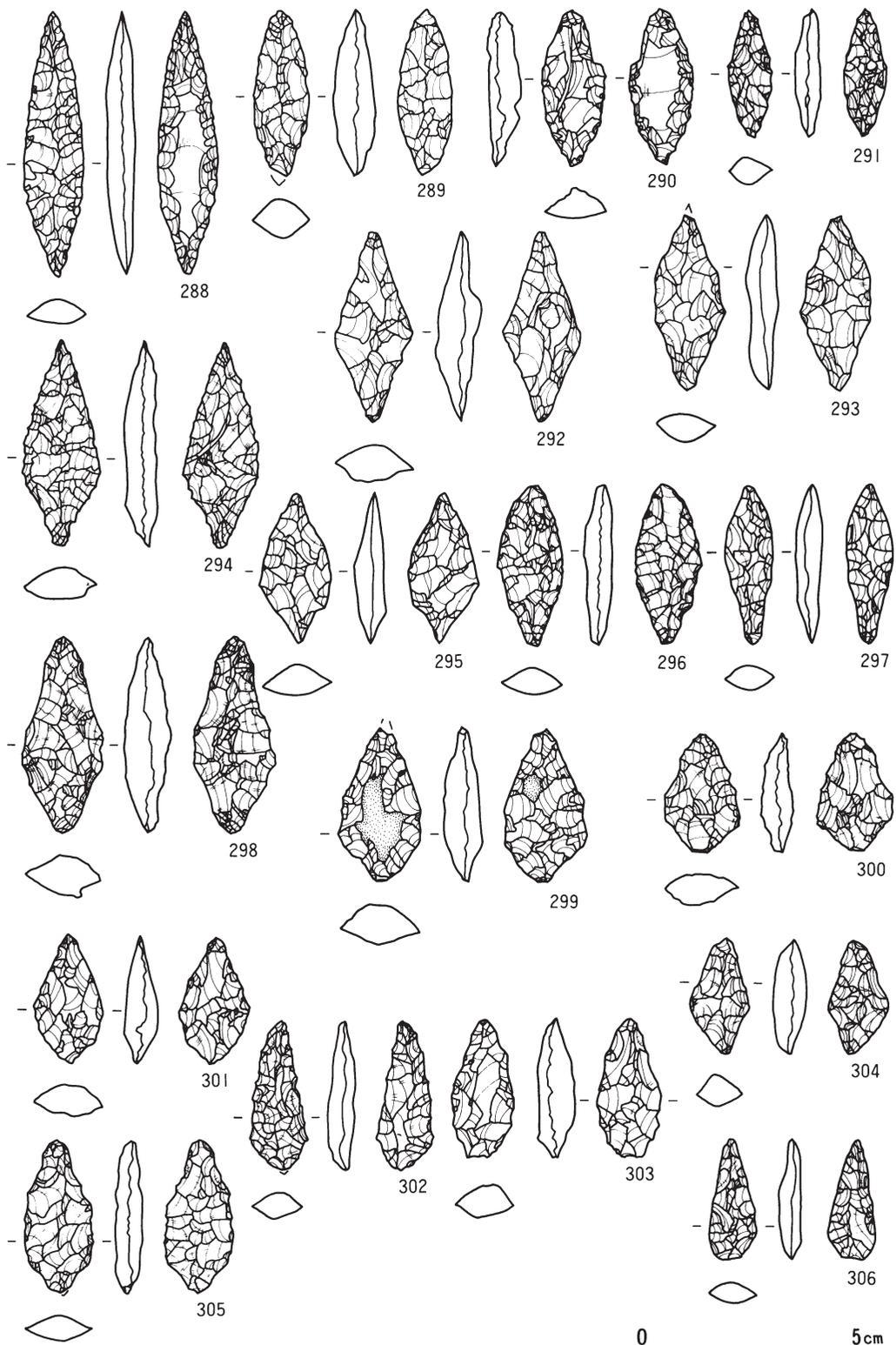
第137図 遺構外出土石器（石鏃-13）



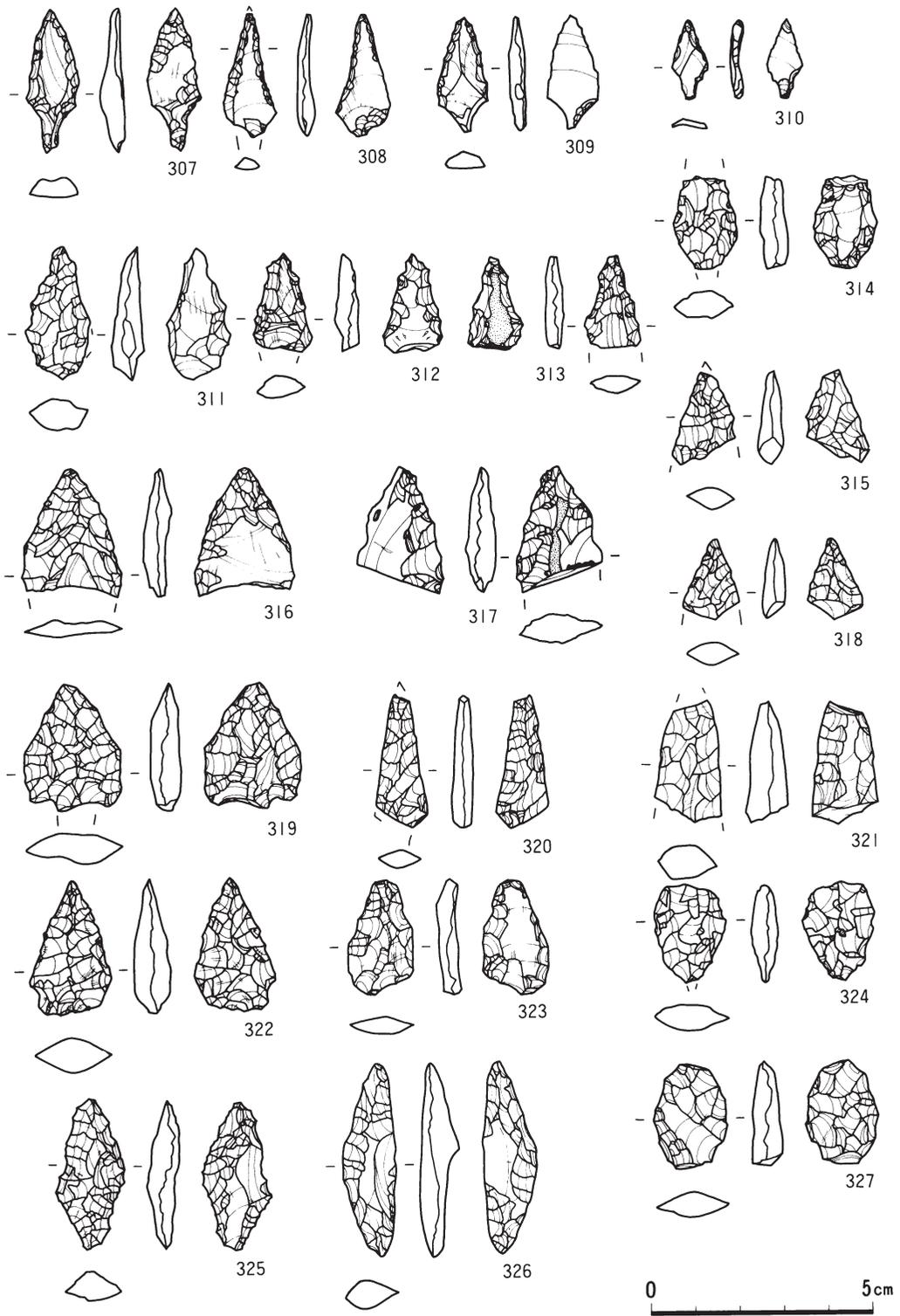
第138圖 遺構外出土石器（石鏃—14）



第139圖 遺構外出土石器（石鏃—15）



第140図 遺構外出土石器 (石鏃—16)



第141図 遺構外出土石器（石鏃一七）

石鏃

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第125図-1	H-62	II	28	18	4.5	1.8	珩質頁岩	349
-2	F-32	I	27.5	14.5	5	1.7	玉髓	102
-3	G-66	II	(30.5)	12	4	(1.6)	珩質頁岩	208
-4	G-42	I	(12.0)	9.5	3	(0.4)	玉髓	314
-5	N-80	II	57	21	4	3.7	珩質頁岩	324
-6	H-37	II	(30.0)	17	4.5	(2.3)	珩質頁岩	193
-7	H-49	III	(26.0)	(14.0)	4.5	(1.2)	珩質頁岩	257
-8	H-61	I	(38.0)	(14.0)	6	(1.7)	珩質頁岩	274
-9	H-75	III	27	16	3	0.9	珩質頁岩	53
-10	H-50	II	32	14	5.5	1.9	珩質頁岩	11
-11	H-50	II	(19.0)	13.5	4	(0.5)	珩質頁岩	155
-12	I-70	II	(18.0)	(15.0)	4	(0.6)	珩質頁岩	37
-13	H-68	I	16	14	3	0.4	珩質頁岩	26
-14	I-52	II	15.5	10.5	4	0.5	珩質頁岩	57
-15	H-35	I	(19.0)	(13.0)	4.5	(0.8)	珩質頁岩	336
-16	G-42	III	21	15.5	4	0.8	珩質頁岩	103
-17	H-48	II	36	15	4	1.3	珩質頁岩	72
-18	I-61	II	29	16	4	1	珩質頁岩	20
-19	G-41	II	26.5	15	5	1.4	珩質頁岩	28
-20	F-31	II	32	16	4	1.4	珩質頁岩	84
-21	I-52	II	25	15	5	1.9	珩質頁岩	21
-22	I-70	II	19.5	11.5	4	0.6	玉髓質珩質頁岩	62
-23	H-75	III	18.5	13.5	3	0.5	珩質頁岩	254
第126図-24	I-45	III	27	19	4	1.6	珩質頁岩	39
-25	D-15	I	(22.5)	16	4.5	(1.2)	玉髓質珩質頁岩	224
-26	G-68	III	2.5	14.5	4	1.2	珩質頁岩	73
-27	H-48	II	24.5	13	3.5	0.9	玉髓質珩質頁岩	74
-28	J-68	II	29.5	14.5	4	0.9	珩質頁岩	52
-29	I-50	II	31	12	4.5	1.1	珩質頁岩	36
-30	H-66	II	25.5	14	4	0.9	珩質頁岩	83
-31	H-75	II	(23.0)	12	4	(0.7)	玉髓質珩質頁岩	220
-32	F-29	III	20.5	11	3.5	0.5	玉髓質珩質頁岩	54
-33	H-53	II	20	13	2	0.4	珩質頁岩	85
-34	I-69	III	17.5	11	3.5	0.4	玉髓質珩質頁岩	325
-35	H-64	III	15.5	12	2.5	0.3	珩質頁岩	110
-36	I-70	II	(17.0)	(11.0)	2.5	(0.3)	珩質頁岩	204
-37	I-56	I	13	9.5	2.5	0.2	玉髓質珩質頁岩	8
-38	G-71	III	28.5	15	3.5	0.8	珩質頁岩	17
-39	G-36	II	38.5	20.5	7	3.2	珩質頁岩	9
-40	H-46	II	(39.0)	16	4	(1.2)	珩質頁岩	166
-41	G-35	II	26.5	16	3	0.8	珩質頁岩	46
-42	H-69	III	23.5	13.5	4.5	1	珩質頁岩	38
-43	H-48	II	25	13.5	3	0.7	玉髓質珩質頁岩	333
-44	I-70	II	30.5	14	3.5	0.9	珩質頁岩	69
-45	H-75	II	25	11	4	0.7	珩質頁岩	68

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第126図-46	H-71	I	24.5	11.5	4	0.6	玉髄質珪質頁岩	67
-47	F-31	II	(16.0)	13.5	3	(0.5)	玉髄質珪質頁岩	198
-48	H-38	II	20	(10.0)	3	(0.3)	珪質頁岩	338
第127図-49	G-41	II	(36.0)	14	4	(1.1)	玉髄質珪質頁岩	234
-50	J-50	I	(34.0)	15	5.5	(2.0)	珪質頁岩	227
-51	H-59	III	(29.0)	13	5	(1.4)	珪質頁岩	359
-52	G-68	II	(23.5)	19.5	4	(1.3)	珪質頁岩	356
-53	H-53	II	28.5	12	5.5	1	玉髄質珪質頁岩	27
-54	I-51	II	(27.0)	16	6	(1.8)	珪質頁岩	222
-55	H-61	I	32	14.5	4	1.5	珪質頁岩	125
-56	I-77	II	(32.0)	17	6	(2.5)	玉髄質珪質頁岩	197
-57	F-32	III	(43.0)	17	6	(3.6)	珪質頁岩	150
-58	G-33	III	49	16.5	9	5.6	玉髄	7
-59	F-31	II	(42.5)	14.5	6.5	(2.5)	珪質頁岩	245
-60	D-18	I	53	18	10	7.5	珪質頁岩	132
-61	I-53	II	(46.0)	15	6.5	(4.5)	珪質頁岩	223
-62	I-58	II	(43.0)	17	8	(4.7)	玉髄質珪質頁岩	271
-63	G-50	II	(39.0)	17	7	(2.9)	珪質頁岩	264
-64	F-35	I	(34.0)	15.5	7	(2.4)	珪質頁岩	98
-65	F-35	I	(31.0)	14.5	6	(2.7)	珪質頁岩	178
第128図-66	G-47	II	(31.0)	14	5	(2.0)	珪質頁岩	261
-67	I-61	II	(36.0)	16	7	(3.3)	珪質頁岩	354
-68	H-49	III	(33.0)	13.5	6	(2.6)	珪質頁岩	195
-69	F-33	III	24.5	12.5	4.5	0.9	玉髄質珪質頁岩	30
-70	H-46	II	37.5	16.5	7	3.4	珪質頁岩	19
-71	H-66	II	30	12.5	7	1.6	珪質頁岩	16
-72	H-34	III	(30.5)	14.5	6.5	(2.3)	玉髄質珪質頁岩	168
-73	G-66	II	(28.0)	12.5	4	(0.9)	珪質頁岩	29
-74	H-43	II	47	16	7.5	2.8	珪質頁岩	40
-75	F-32	I	(34.5)	15.5	6.5	(3.1)	珪質頁岩	180
-76	H-34	III	37	15	4.5	2	玉髄質珪質頁岩	127
-77	Q-107	II	34.5	12	4	1.1	玉髄質珪質頁岩	328
-78	H-50	II	(39.5)	15	5.5	(2.3)	珪質頁岩	210
-79	H-57	III	(32.0)	11	5	(1.5)	珪質頁岩	148
第129図-80	H-55	II	(36.0)	(14.0)	4	(1.3)	珪質頁岩	51
-81	H-48	II	33	16.5	4.5	1.4	珪質頁岩	322
-82	I-56	II	(31.0)	18	3.5	(1.2)	珪質頁岩	141
-83	G-72	III	34	15	4.5	1.3	珪質頁岩	255
-84	I-38	II	34	14	3	1	珪質頁岩	48
-85	H-38	III	29	12	4	1	玉髄質珪質頁岩	94
-86	H-61	I	(25.5)	14	4.5	(1.5)	珪質頁岩	153
-87	G-30	II	(22.0)	15	4	(1.0)	珪質頁岩	251
-88	G-71	III	(20.0)	15	5	(1.1)	珪質頁岩	358
-89	H-75	I	27.5	13	4	1	珪質頁岩	35
-90	M-82	II	(26.0)	15	4.5	(1.2)	珪質頁岩	211

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第129図-91	H-62	I	49	17.5	8	3.4	珪質頁岩	334
-92	H-48	II	(38.5)	15.5	5.5	(2.1)	珪質頁岩	157
-93	G-43	II	(32.0)	(14.0)	4	(1.3)	珪質頁岩	321
-94	G-35	I	(26.5)	11	5	(2.4)	玉髓	236
-95	H-47	II	(40.0)	13	6.5	(2.4)	珪質頁岩	233
-96	H-48	II	(38.0)	17	6	(3.3)	珪質頁岩	273
-97	F-34	III	32	11	5	1.1	珪質頁岩	116
-98	H-48	III	(25.5)	13	4.5	(1.2)	玉髓質珪質頁岩	169
-99	G-42	I	(23.0)	12	5	(1.2)	玉髓質珪質頁岩	275
-100	H-50	II	(27.0)	13.5	5	(1.7)	珪質頁岩	202
-101	I-53	II	30.5	14.5	5	1.6	珪質頁岩	44
-102	G-69	I	(27.5)	12.5	5.5	(1.1)	玉髓質珪質頁岩	217
第130図-103	D-18	I	38	16.5	5.5	2.4	珪質頁岩	71
-104	J-75	III	30	13.5	3.5	1	珪質頁岩	10
-105	I-58	III	33.5	15	5	1.5	玉髓質珪質頁岩	5
-106	I-59	III	(26.0)	12	6	(1.4)	珪質頁岩	230
-107	F-37	II	(21.0)	14	5	(1.3)	珪質頁岩	229
-108	I-56	II	(24.5)	15	4	(1.5)	珪質頁岩	348
-109	H-47	II	(26.0)	14.5	4	(1.4)	珪質頁岩	225
-110	H-45	II	26	13.5	4.5	1	玉髓質珪質頁岩	247
-111	G-46	II	38	15	6	2.5	珪質頁岩	100
-112	E-22	I	42.5	17	8	3.4	珪質頁岩	22
-113	F-24	I	(34.0)	12	6.5	(2.0)	珪質頁岩	203
-114	I-51	II	(31.5)	14	6	(2.3)	珪質頁岩	246
-115	D-20	III	33.5	13.5	6.5	2.3	珪質頁岩	50
-116	H-70	II	34	12.5	4	1.7	珪質頁岩	278
-117	I-51	II	(40.0)	14.5	8	(3.1)	珪質頁岩	89
-118	H-48	III	43	14	7	2.9	珪質頁岩	297
-119	I-51	II	(35.0)	14	5.5	(2.6)	流紋岩	238
-120	I-62	I	(38.5)	12	4.5	(1.5)	珪質頁岩	174
-121	H-61	I	(29.0)	12.5	5	(1.5)	珪質頁岩	138
-122	I-70	II	(30.5)	12.5	7.5	(2.4)	珪質頁岩	242
-123	H-49	III	(31.0)	13.5	6.5	(3.1)	珪質頁岩	285
-124	H-59	II	(25.0)	12	6	(1.8)	珪質頁岩	300
第131図-125	I-76	II	24	14.5	7	1.8	玉髓質珪質頁岩	219
-126	E-27	II	(24.0)	15	6	(2.0)	珪質頁岩	276
-127	H-55	II	(50.0)	13	5	(3.0)	流紋岩	216
-128	F-30	I	50	13.5	6.5	3.5	緑色細粒凝灰岩	77
-129	F-33	I	34	14	5	1.7	玉髓	12
-130	I-70	II	44.5	16.5	8	4.7	玉髓質珪質頁岩	4
-131	H-41	I	(37.0)	13.5	7.5	(2.7)	玉髓質珪質頁岩	31
-132	F-35	I	(44.0)	15	8.5	(4.5)	珪質頁岩	165
-133	F-34	III	30.5	14	5.5	1.7	珪質頁岩	45
-134	I-53	II	(25.0)	14	5.5	(1.7)	珪質頁岩	146
-135	H-53	II	(30.5)	18	9	(3.3)	珪質頁岩	253

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第131図-136	H-58	I	42.5	15	5.5	2.6	珪質頁岩	6
-137	F-33	II	52	16.5	11	7	珪質頁岩	70
-138	H-35	III	42	15	7	3.4	珪質頁岩	269
-139	G-69	I	(33.5)	13	4.5	(1.2)	珪質頁岩	226
-140	H-60	III	42.5	13	6	2.2	珪質頁岩	326
-141	G-41	III	39.5	13	6	2.2	珪質頁岩	114
-142	F-35	I	(38.5)	14.5	7	(3.3)	珪質頁岩	232
-143	H-49	III	(42.0)	14	6	(2.7)	珪質頁岩	268
-144	I-58	II	(31.5)	13	5.5	(1.5)	珪質頁岩	167
-145	F-32	III	(44.0)	15	4	(2.8)	珪質頁岩	209
-146	I-66	II	47	15	6	2.8	珪質頁岩	287
-147	F-29	I	(32.0)	15	6.5	(2.8)	珪質頁岩	158
-148	H-49	III	(28.0)	13.5	5.5	(2.2)	珪質頁岩	286
-149	F-34	III	(39.0)	15.5	7	(3.4)	珪質頁岩	249
-150	F-32	I	(34.5)	16	8	(3.5)	玉髓質珪質頁岩	243
-151	J-74	III	(32.0)	12.5	5.5	(1.9)	玉髓質珪質頁岩	149
-152	F-28	I	32	(12.0)	5	(1.5)	玉髓質珪質頁岩	184
-153	I-51	II	(46.5)	20	7	(3.6)	珪質頁岩	170
-154	H-41	III	(31.0)	18	8	(3.2)	珪質頁岩	279
-155	H-48	III	35	16.5	6.5	2.8	珪質頁岩	113
-156	I-51	II	(34.5)	18.5	6	(3.8)	珪質頁岩	282
-157	G-45	II	32.5	15.5	7	3.4	珪質頁岩	99
-158	G-34	III	30	15	7	2.3	珪質頁岩	288
第133図-159	F-34	III	37	16	9.5	4.3	珪質頁岩	115
-160	E-21	I	33.5	14.5	5.5	2.1	緑色細粒凝灰岩	49
-161	F-22	III	28	18	9	3	玉髓質珪質頁岩	291
-162	H-48	III	(31.0)	17	6	(2.5)	珪質頁岩	303
-163	H-47	III	33	14.5	6	2.7	玉髓質珪質頁岩	104
-164	H-51	II	31	15	8	2.8	玉髓質珪質頁岩	32
-165	D-91	II	28	15	5.5	2.1	玉髓質珪質頁岩	315
-166	I-56	II	32	17	9	3.1	珪質頁岩	294
-167	F-32	III	31.5	18	7	(3.5)	玉髓質珪質頁岩	129
-168	F-35	I	19	14	6	1.3	珪質頁岩	118
-169	F-29	I	(33.0)	17	6.5	(2.8)	玉髓	283
-170	H-55	II	39	17	6.5	3.1	珪質頁岩	13
-171	H-45	III	(38.5)	19.5	9.5	(4.5)	珪質頁岩	181
-172	F-32	III	37	18	7	3.5	珪質頁岩	295
-173	H-52	II	(37.0)	16	8	(3.3)	珪質頁岩	272
-174	H-58	I	(31.0)	16	8	(3.5)	玉髓質珪質頁岩	172
-175	F-35	I	38.5	14	6.5	2.7	珪質頁岩	23
-176	H-48	III	26	12	5	1.3	珪質頁岩	289
-177	H-66	II	19	9	4	0.5	玉髓質珪質頁岩	66
第134図-178	G-51	II	63.5	14	7.5	7	珪質頁岩	330
-179	E-28	I	(42.5)	14	9	(4.8)	珪質頁岩	139
-180	H-60	III	(42.5)	13	6	(3.4)	珪質頁岩	163

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第134図-181	I-45	III	25	17	8	3.3	玉髄質珪質頁岩	331
-182	H-52	I	33.5	14	6.5	2.4	玉髄質珪質頁岩	2
-183	F-33	II	(27.0)	15.5	7	(3.0)	玉髄質珪質頁岩	176
-184	H-47	II	(59.5)	18	6.5	(5.5)	珪質頁岩	228
-185	I-45	II	46.5	12	6	3	珪質頁岩	332
-186	H-37	III	42.5	11	6.5	2.6	珪質頁岩	91
-187	F-25	III	(55.5)	16	8.5	(5.7)	珪質頁岩	108
-188	G-69	II	54	13.5	10	5	珪質頁岩	15
-189	H-73	II	47	15.5	8.5	0.5	珪質頁岩	47
-190	H-58	II	(33.5)	13.5	5	(2.3)	珪質頁岩	207
-191	I-75	II	(31.5)	13.5	6	(2.0)	珪質頁岩	241
-192	F-29	I	(38.5)	12.5	8	(2.8)	珪質頁岩	151
-193	I-60	II	38.5	15	7	3.4	珪質頁岩	192
第135図-194	I-56	II	43	14	7	2.5	珪質頁岩	290
-195	H-43	I	(44.0)	15	7.5	(4.9)	珪質頁岩	345
-196	F-33	III	(47.5)	18.5	12	(8.8)	珪質頁岩	335
-197	F-32	I	(33.5)	12.5	7	(2.3)	珪質頁岩	14
-198	G-40	II	(32.0)	13.5	7	(2.9)	珪質頁岩	218
-199	F-29	I	(37.5)	16.5	6	(3.4)	珪質頁岩	177
-200	H-51	II	(38.0)	13	6	(2.3)	珪質頁岩	267
-201	F-33	III	(45.0)	13	10.5	(5.3)	流紋岩	200
-202	I-62	III	(43.5)	13.5	7	(3.8)	珪質頁岩	173
-203	H-50	II	34.5	13.5	8	3.2	玉髄	136
-204	H-35	I	33	13	5	1.7	珪質頁岩	340
-205	E-28	I	39	14.5	7	3.3	珪質頁岩	109
-206	F-34	III	(33.0)	16	6	(2.9)	珪質頁岩	159
-207	H-58	I	(31.0)	14	6	(2.1)	珪質頁岩	61
-208	I-48	III	(29.0)	13.5	5.5	(2.0)	珪質頁岩	191
-209	I-51	II	(52.0)	17	9	(7.5)	珪質頁岩	256
-210	I-55	III	43	16.5	6.5	3.8	玉髄質珪質頁岩	105
-211	E-15	I	(33.0)	14.5	7	(2.7)	珪質頁岩	215
第136図-212	H-52	II	(42.0)	18	5	(4.4)	珪質頁岩	360
-213	H-51	II	40.5	12.5	5	2.1	珪質頁岩	34
-214	H-54	II	(50.0)	14.5	8	(5.0)	珪質頁岩	179
-215	I-61	III	(48.0)	16	8	(4.5)	珪質頁岩	280
-216	H-55	II	41.5	16	7	3.5	珪質頁岩	3
-217	H-39	III	(40.0)	14	7	(3.0)	珪質頁岩	205
-218	G-34	III	39	16	9	3.8	珪質頁岩	292
-219	I-46	III	(43.0)	14	7	(3.3)	珪質頁岩	112
-220	H-47	II	(43.0)	20.5	9.5	(6.3)	珪質頁岩	25
-221	I-54	I	(34.0)	14	6.5	(2.5)	珪質頁岩	206
-222	E-25	II	(38.0)	16	8	(3.3)	流紋岩	298
-223	H-52	II	(34.5)	16	6	(2.9)	珪質頁岩	201
-224	G-30	III	(31.5)	13.5	5.5	(2.3)	珪岩	194
-225	H-47	II	(33.5)	14	4.5	(2.1)	珪質頁岩	156

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第136図-226	K-76	III	(30.0)	13	6.5	(2.2)	玉髓質珪質頁岩	237
第137図-227	G-38	II	53	18	7	5.1	珪質頁岩	296
-228	H-48	III	41	15	7.5	3.6	珪質頁岩	128
-229	G-35	I	(36.0)	13	7	(2.9)	珪質頁岩	258
-230	I-57	II	32	11.5	4.5	1.3	玉髓	41
-231	E-26	I	(43.5)	15	7	(3.9)	珪質頁岩	131
-232	I-34	III	(44.5)	15	8	(3.9)	玉髓	196
-233	F-31	II	40.5	10	4.5	2.2	珪質頁岩	96
-234	G-71	III	32.5	12	5	1.3	珪質頁岩	42
-235	H-47	II	38	18	6.5	3.4	玉髓質珪質頁岩	329
-236	H-65	II	43	15	6.5	3.7	玉髓質珪質頁岩	1
-237	H-54	II	(32.0)	13	4.5	(1.8)	玉髓質珪質頁岩	117
-238	I-55	II	31	14	6	1.9	珪質頁岩	18
-239	H-58	II	40	15	8	3.5	珪質頁岩	341
-240	H-51	II	38	13	6.5	2.4	珪質頁岩	24
-241	H-48	II	(36.0)	13	5	(1.7)	珪質頁岩	43
-242	I-22	II	(30.0)	14	5	(1.9)	珪質頁岩	260
-243	J-54	II	(39.0)	15.5	9	(4.3)	珪質頁岩	231
-244	D-25	I	34	15	7	2.8	玉髓	81
-245	H-44	III	(34.0)	16	9.5	(3.9)	玉髓	162
第138図-246	H-52	II	32.5	15.5	7	2.5	玉髓質珪質頁岩	64
-247	I-54	II	(34.5)	18	6	(2.7)	珪質頁岩	239
-248	G-47	II	32	13	7	2.4	珪質頁岩	186
-249	E-30	III	(42.0)	19	7.5	(4.6)	玉髓質珪質頁岩	144
-250	I-57	II	(33.0)	20	6	(3.6)	珪質頁岩	92
-251	H-53	II	(33.0)	17.5	7.5	(3.5)	珪質頁岩	161
-252	I-56	I	31.5	17	6.5	2.8	珪質頁岩	33
-253	H-48	II	27	13	7	1.9	珪質頁岩	76
-254	H-46	II	26.5	14	7	1.8	玉髓	327
-255	I-52	II	(31.0)	14	7.5	(2.8)	珪質頁岩	87
-256	H-48	III	34	17	9	3.4	玉髓	293
-257	F-29	I	(34.0)	18.5	7	(3.7)	珪質頁岩	124
-258	G-71	II	30.5	18.5	7	3.3	珪質頁岩	78
-259	H-65	II	34.5	16.5	5	2.4	珪質頁岩	60
-260	G-71	I	35	19	10	4.6	玉髓質珪質頁岩	126
-261	G-31	I	(25.0)	13	6	(2.0)	珪質頁岩	143
-262	H-62	II	29.5	13	7	1.9	玉髓	122
-263	H-50	II	28	13	6.5	1.6	玉髓	82
-264	I-52	II	29	12	6	1.7	珪質頁岩	342
第139図-265	E-25	II	(27.0)	11.5	4	(1.4)	玉髓	309
-266	E-29	III	(21.0)	14.5	5	(1.8)	珪質頁岩	187
-267	G-35	II	(20.0)	(15.0)	(6.5)	(1.2)	珪質頁岩	160
-268	E-28	I	(36.0)	15	9	(4.0)	珪質頁岩	240
-269	I-53	II	(30.0)	15	7	(2.9)	珪質頁岩	188
-270	H-40	III	30	17	8	3.6	珪質頁岩	346

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第139図-271	G-40	III	27	12	6	1.7	珪質頁岩	352
-272	F-33	I	(32.0)	15	7	(3.6)	珪質頁岩	270
-273	I-20	II	(33.0)	13	8	(3.7)	玉髓質珪質頁岩	299
-274	H-48	II	27.5	12.5	7	2.4	珪質頁岩	79
-275	H-53	II	(31.5)	12.5	9.5	(3.4)	珪質頁岩	250
-276	I-55	II	(31.0)	13	6	(2.5)	珪質頁岩	347
-277	H-53	II	(35.5)	14.5	7	(2.7)	珪質頁岩	147
-278	I-39	II	(25.5)	11.5	4.5	(1.2)	珪質頁岩	145
-279	F-32	I	(37.0)	17	6	(3.7)	珪質頁岩	221
-280	I-74	III	(26.0)	14	6	(2.1)	玉髓質珪質頁岩	281
-281	G-34	III	(24.5)	14.5	6.5	(2.2)	珪質頁岩	304
-282	F-32	II	26	12	5	1.2	珪質頁岩	93
-283	G-68	I	(22.0)	11.5	6	(0.9)	珪質頁岩	183
-284	H-48	III	32.5	16.5	8	3	珪質頁岩	189
-285	H-61	I	(24.0)	11.5	5	(1.1)	玉髓質珪質頁岩	244
-286	G-42	I	23.5	10	6	1.3	玉髓	213
-287	F-31	I	23	10.5	3.5	0.9	珪質頁岩	302
第140図-288	I-62	III	61	13.5	6	4.9	珪質頁岩	323
-289	J-68	II	(38.5)	12.5	14	(4.4)	珪質頁岩	171
-290	I-56	II	36	15	7	2.9	珪質頁岩	350
-291	G-31	III	29.5	10	6		珪質頁岩	75
-292	H-38	II	43.5	18	10.5	4.7	玉髓	133
-293	H-55	II	(40.0)	16	7.5	(3.5)	珪質頁岩	88
-294	H-45	III	47	18	8	5	珪質頁岩	120
-295	F-29	I	34.5	16.5	7	2.7	珪質頁岩	135
-296	E-22	III	36.5	15	6.5	3.1	珪質頁岩	90
-297	H-61	I	36	11	6.5	2.1	珪質頁岩	86
-298	H-46	II	45	18.5	10.5	6.1	玉髓質珪質頁岩	80
-299	H-47	III	(35.0)	19	9	(4.8)	玉髓質珪質頁岩	259
-300	I-51	II	27	17	7.5	2.9	珪質頁岩	123
-301	K-68	III	29	16	8	2.9	珪質頁岩	263
-302	E-21	I	(34.0)	13	6	(2.3)	玉髓質珪質頁岩	199
-303	G-33	III	32	14.5	8	3.6	珪質頁岩	343
-304	F-33	III	26	13.5	7.5	2.1	珪質頁岩	248
-305	H-55	II	(35.0)	15.5	6	(3.0)	珪質頁岩	214
-306	F-24	III	27.5	10.5	5	1.2	玉髓質珪質頁岩	65
第141図-307	H-48	III	33	11	5	1.4	珪質頁岩	142
-308	H-34	III	(28.0)	12	4	(0.9)	珪質頁岩	305
-309	I-39	II	26	11	3.5	0.9	珪質頁岩	63
-310	I-51	II	18	8	3.5	0.2	玉髓質珪質頁岩	55
-311	H-75	I	(30.0)	(14.0)	7	(2.6)	珪質頁岩	97
-312	H-56	III	(23.0)	13	6	(1.3)	珪質頁岩	265
-313	I-61	II	(21.0)	(13.0)	4	(1.1)	珪質頁岩	344
-314	D-17	I	(21.0)	14	6	(2.0)	珪質頁岩	351
-315	H-49	III	(21.0)	(14.5)	(6.0)	(1.3)	玉髓質珪質頁岩	152

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第141図-316	G-41	I	(29.0)	22	6.5	(3.0)	珪質頁岩	284
-317	F-31	II	(29.0)	(19.0)	7	(3.0)	珪質頁岩	353
-318	H-41	III	(18.5)	(12.5)	5	(0.9)	珪質頁岩	212
-319	F-32	III	(28.5)	22	7	(4.2)	玉髄質珪質頁岩	311
-320	E-28	I	(30.0)	12	5	(1.5)	珪質頁岩	185
-321	G-71	II	(28.0)	(15.5)	(10.0)	(3.7)	珪質頁岩	140
-322	H-54	II	30.5	18.5	8	3.5	珪質頁岩	355
-323	G-36	I	26	15	6	1.4	珪質頁岩	312
-324	H-58	I	(22.0)	17	6	(2.0)	珪質頁岩	337
-325	H-61	II	34	15.5	7	2.6	珪質頁岩	121
-326	H-50	II	44	12	9.5	3.5	珪質頁岩	134
-327	F-35	II	24	17	7	2.6	玉髄	313
	H-56	III	33.5	12	6.5	3.9	玉髄	306
	H-38	III	(18.0)	16	(3.0)	(1.4)	珪質頁岩	307
	G-35	II	22	(6.5)	1	(0.5)	珪質頁岩	308
	H-38	II	25	16.5	4	2.8	玉髄	310
	G-36	II	12	10	3	0.7	珪質頁岩	316
	E-25	I	13	9	4.5	1.5	玉髄	317
	D-22	I	26	17	4	2.5	珪質頁岩	318
	G-36	II	24	15	3.5	2.1	珪質頁岩	319
	H-59	II	(28.5)	9	3.5	1.7	珪質頁岩	320
	H-47	III	(19.0)	(13.0)	3	(0.5)	珪質頁岩	339
	J-71	II	35	18.5	6.5	3.4	珪質頁岩	357

## 石槍 (第142・143図)

18点出土しており、ほとんどが完形品である。

1・2は有茎のもので、1は基部がやや長めに、2は石匙のつまみ状に作出されている。ともに薄手で先端部に向けて鋭利な作りである。

3は銚先状の形状のもので、器体自体が湾曲している。主に側縁に多くの調整が加えられており、中央部に緩やかなかえしを有し、この部分から下位が基部として機能していたものと考えられる。

4は明確な茎部を作出していないが、基端は丸く調整されている。先端部にくびれがみられ、破損後の再調整の可能性が考えられる。また、錐への転用の可能性もある。

5・6は長楕円形の器体で、5は細部調整がなされているが、6は細部調整が粗雑で未製品の可能性も考えられる。

7～17は楕円形を基調とした器体で、この内の7・9・15には側縁及び先端部の調整がなされているが、他は未製品の可能性も考えられるものである。また、7は片面の先端部にアスファ

ルトと考えられる付着物が認められる。

18は平面形が長めの五角形で肉厚の器体である。

19は幅広の器体で、片面の中央部に自然面を残している。概ね丁寧な作りで、先端部は薄く調整されている。折損部寄りにごく小規模なかえしがみられることから、3にみられるような茎部を欠失したものと考えられる。

これらの中で、細部調整がなされていないものについては、他の器種の可能性も考えられる。また、9などはスクレーパーの類にも分類可能である。

石槍の出土地点は、E-29・H-46・H-48グリッドを中心とした3ブロックに集中する傾向が認められる。特に第5・6号住居跡に重複するH-46・48グリッド付近からは11点が出土している。

使用した石材は、19の頁岩1点を除けば、他はすべて珪質頁岩であり、素材の選定が行われていたものと考えられる。

时期的には、伴出土器から縄文時代中期と考えられる。

#### 石錐 (第144図)

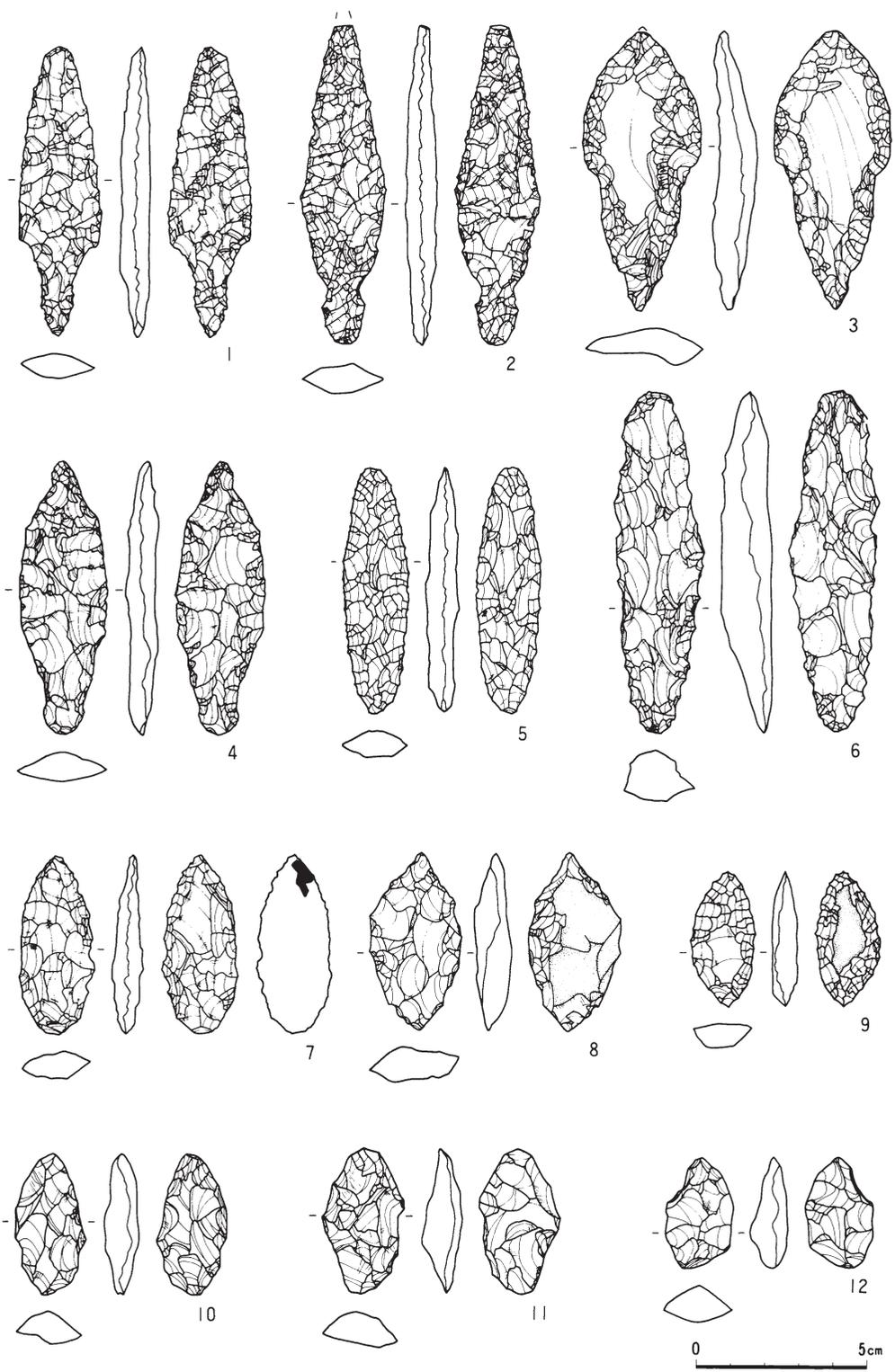
20点出土した。概ね剥片そのものを利用し、錐部を作出したものである。

1～3はつまみ部と錐部とが明瞭に区別できるものである。いずれも先端部を欠失している。これらはつまみ部分も整形が軽易である。

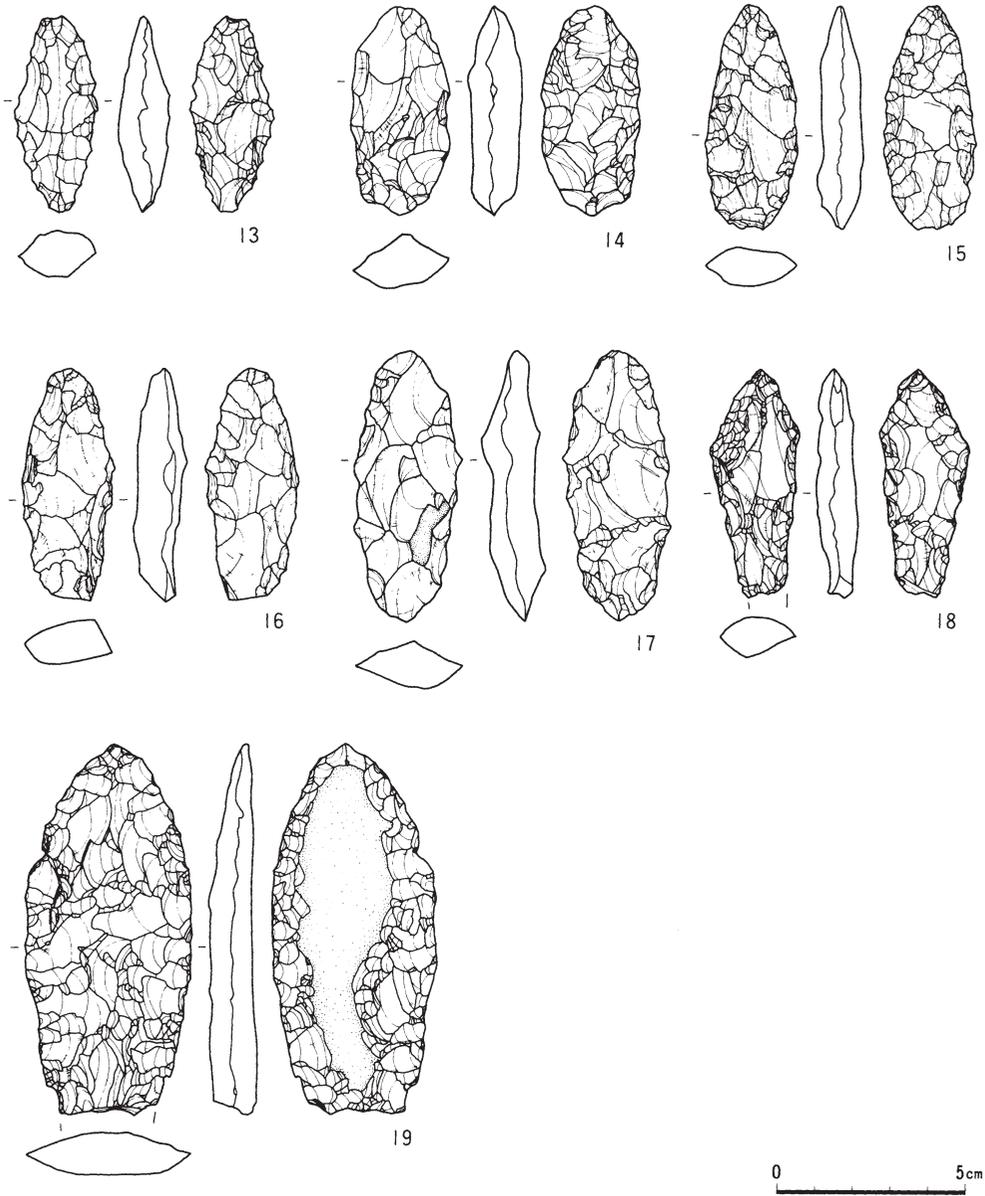
4～13は器形が逆三角形もので、9・11が両面ともに器体整形がなされていることを除いて、他は主に錐部だけを作出しているものである。

14～16・18・19は石鏃の可能性も考えられるもので、特に15はその最たるものであるが、錐部とした部分の調整から本類とした。これらは器体そのものの整形も行われている。18は錐部のみの残存品かもしれない。20は錐部のみを調整した極小の錐である。

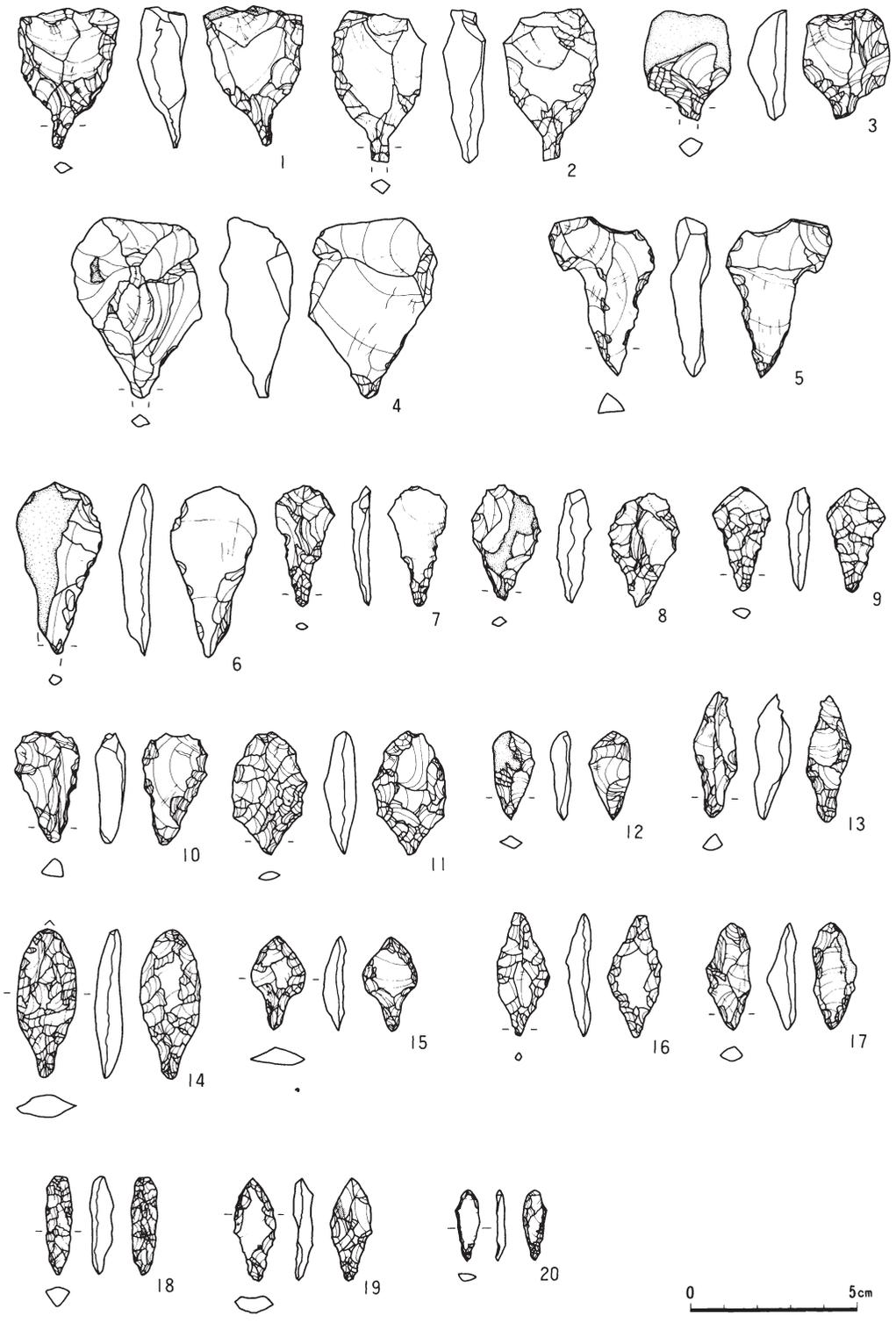
使用した石材は、概ね珪質頁岩である。



第142図 遺構外出土石器（石槍一）



第143図 遺構外出土石器（石槍一2）



第144図 遺構外出土石器（石錐）

## 石槍

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第142図-1	H-46	II	(87.0)	24	8	(15.9)	珪質頁岩	515
-2	H-46	II	(96.0)	26	10	(17.1)	珪質頁岩	517
-3	I-49	II	83.5	34	11	23.3	玉髓質珪質頁岩	508
-4	H-46	II	81	26	9	17.6	珪質頁岩	516
-5	I-49	II	73	19.5	9	13.3	珪質頁岩	504
-6	H-48	II	101	26.5	15.5	35.1	珪質頁岩	502
-7	H-58	II	53	22.5	9	8.5	珪質頁岩	501
-8	H-48	III	53	27	10	13	珪質頁岩	503
-9	E-29	II	30	19	7.5	5.9	珪質頁岩	505
-10	F-32	III	41.5	20.5	10.5	6.9	珪質頁岩	511
-11	E-29	III	43	24	12	9.3	珪質頁岩	512
-12	H-38	II	32.5	20	11	6	珪質頁岩	510
第143図-13	F-33	III	53	22.5	19	11.9	珪質頁岩	506
-14	H-45	II	56	26.5	14.5	21.2	珪質頁岩	513
-15	H-48	II	60	24.5	12	16.8	珪質頁岩	520
-16	E-30	I	62	24	14	19.9	珪質頁岩	521
-17	I-45	III	72	29	17	25.6	珪質頁岩	522
-18	H-46	II	(61.0)	23	10.5	(14.0)	珪質頁岩	507
-19	K-76	III	(99.0)	43	12	(54.8)	頁岩	509

## 石錐

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第144図-1	I-71	II	43	30	14	16.9	玉髓質珪質頁岩	708
-2	H-48	II	(46.5)	28.5	13	(12.4)	チャート	707
-3	H-73	II	(34.0)	26	11.5	(9.0)	珪質頁岩	714
-4	H-54	I	(54.5)	38.5	22	(28.3)	珪質頁岩	712
-5	I-56	I	48.5	32	11.5	8.3	珪質頁岩	709
-6	H-42	III	(52.0)	26	10	(9.4)	凝灰岩	706
-7	F-32	I	36.5	18	5	2.2	珪質頁岩	701
-8	F-32	III	35	20	8	5.1	珪質頁岩	704
-9	H-43	II	31.5	17	6.5	2.9	珪質頁岩	705
-10	I-43	I	33.5	19	9	5.4	珪質頁岩	710
-11	M-81	II	37	22.5	9.5	7	珪質頁岩	716
-12	H-37	I	26.5	13.5	7	1.7	珪質頁岩	711
-13	F-33	III	38	13.5	11	3.7	珪質頁岩	713
-14	H-65	II	(45.5)	18	8.5	(5.8)	珪質頁岩	719
-15	D-21	I	28.5	16.5	7	2.1	凝灰岩	702
-16	H-52	I	37	16	8	3.2	珪質頁岩	703
-17	H-57	III	32	13	9	2.6	珪質頁岩	715
-18	G-36	II	29.5	8	6.5	1.6	珪質頁岩	720
-19	H-46	II	31	13	6	1.6	珪質頁岩	718
-20	I-39	II	21.5	7.5	3	0.3	玉髓質珪質頁岩	721

### 石匙 (第145・146図)

15点出土している。概ね縦長の剝片を素材としており、器面を調整しているものと剝片の縁辺に刃部を作出しただけのものがある。

1・2・4は刃部先端を鋭利に作出しているもので、両面とも器体整形が行われている。つまみ部分は、1・2は簡単なくびれを作出した程度である。

3は両面を加工しているが、明瞭な刃部調整がなされておらず、つまみも棒状である。未製品の可能性が高い。

5は両面とも丁寧な調整がなされているが、刃部先端を欠失している。

7・8・10は主に片面を調整しているもので、刃部先端は丸く作出されている。つまみの作出法もごく軽便で、挟りも浅いものである。11はつまみを両面から加工しているものの、刃部の調整はまったく行われていない。剝片の側縁をそのまま使用したと考えられ、連続した刃こぼれが観察される。完成品かどうかは不明である。

12は縁辺部だけを片面から刃部調整したもので、縁辺全域にわたっている。13・14は欠損品と考えられるもので、ともに刃部調整は片面から行われている。

15は横型の石匙で、両面ともに器体加工が行われている。刃部も両面から調整されている。

使用した石材は、珪質頁岩を主体としているが、3は硬質の流紋岩を素材としている。

器面の調整は、刃部先端を鋭利に作出しているものが、両面に行われているのに対し、刃部先端を丸く作出しているものは、主に片面からの加工である。また、後者は縁辺部だけの調整が主である。この差は時期的なものか、刃部の機能に由来するものかは、出土状態からは把握できなかった。

### 石篋 (第147・148図)

24点出土している。ほとんどが完形品である。

1は大型のバチ型で、刃部はやや偏った円刃である。2・3は小型のバチ型で、刃部は2が平刃、3が円刃である。4・5は小型の器体で、4は片面からの調整である。

6～9・21は湾曲度の弱い円刃で、平刃に近い刃部形状である。10～13は刃部の一方がやや上がり気味の偏刃であるが、大きく偏っているのは小型の10の1点だけである。

15・16・22は円刃で湾曲度が高いものである。

17～20・23・24は刃部形状が明瞭でないもので、一部欠損、または未製品の可能性がある。また、21～24は側縁を刃部としたスクレーパーの可能性も考えられる。

ほとんどの器体は、両面からの整形及び刃部調整を行っているが、数点は主に片面からの整形である。

刃部角では、最小21度、最大76度で、33度・50～57度・64度に集中する傾向がみられる。器体の大小や刃部形状などによる片寄りの傾向は認められなかった。

素材としては、主に珪質頁岩を使用している。

#### 両極技法による剥片 (第149・150図)

本類としたものは、すべてを石器として断定できるものではないが、不定形の石器中においてもっとも出土量が多いものである。およそ1,500点が出土したが、総点数を把握するには至らなかった。

出土点数が多いことから、代表的な数タイプを図示することにする。

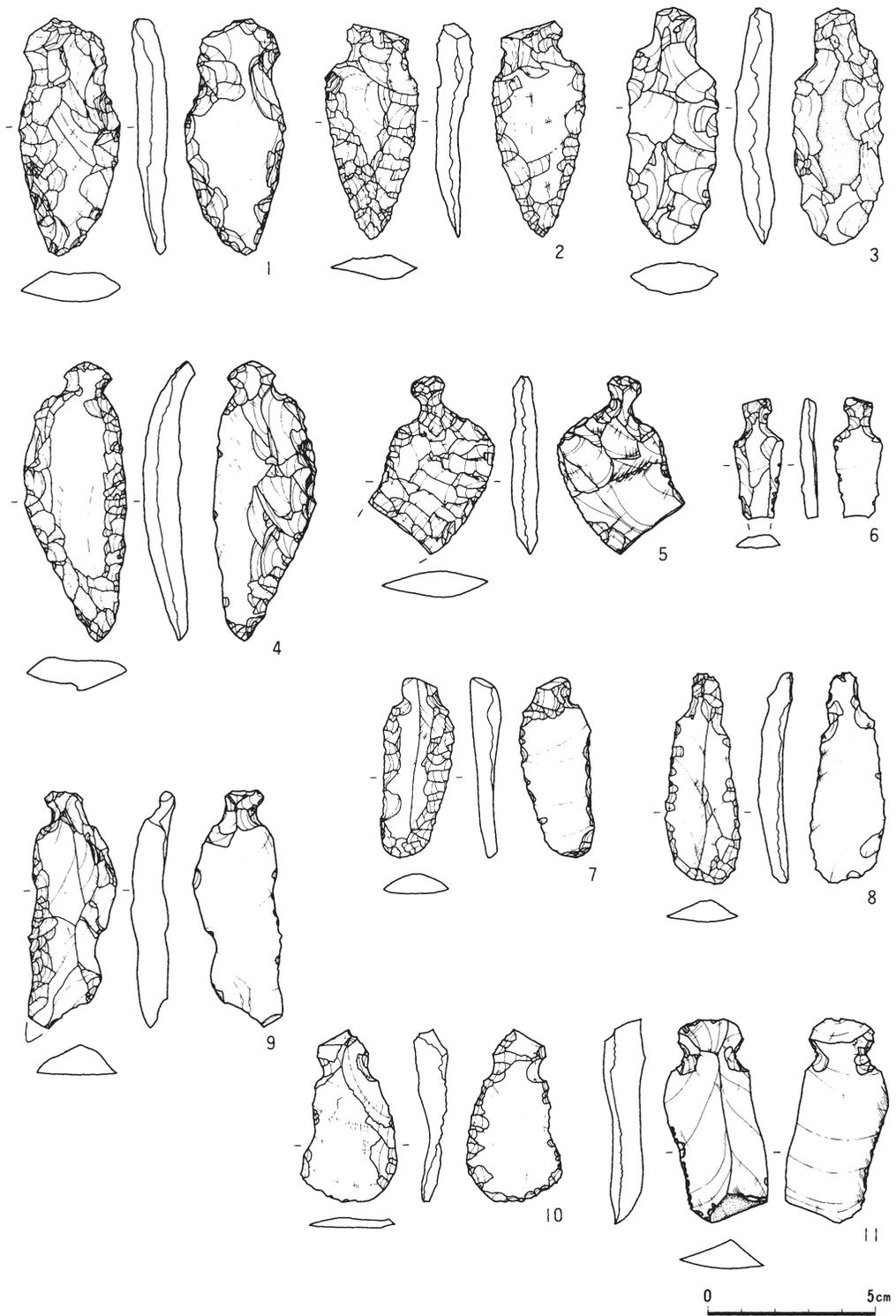
1・2は、いわゆる楔型石器であり、両端ないし4箇所から加撃を行い、大まかな器体の調整を行っている。

3～14は、両極打法によるもので、3・5などは表皮を剝離した素材の中心部分のものである。8・12・13などは片面に表皮を残すものであり、本種がもっとも出土量が多い。これらは8のように剝離が一方からの打撃によるようなものが多く認められるが、基本的には両極からの打撃によるものと考えられる。この種には一方からの打撃がより強く、先端が潰れているものが多く見られるが、一次的な加撃による潰れか、使用時によるものかは不明である。

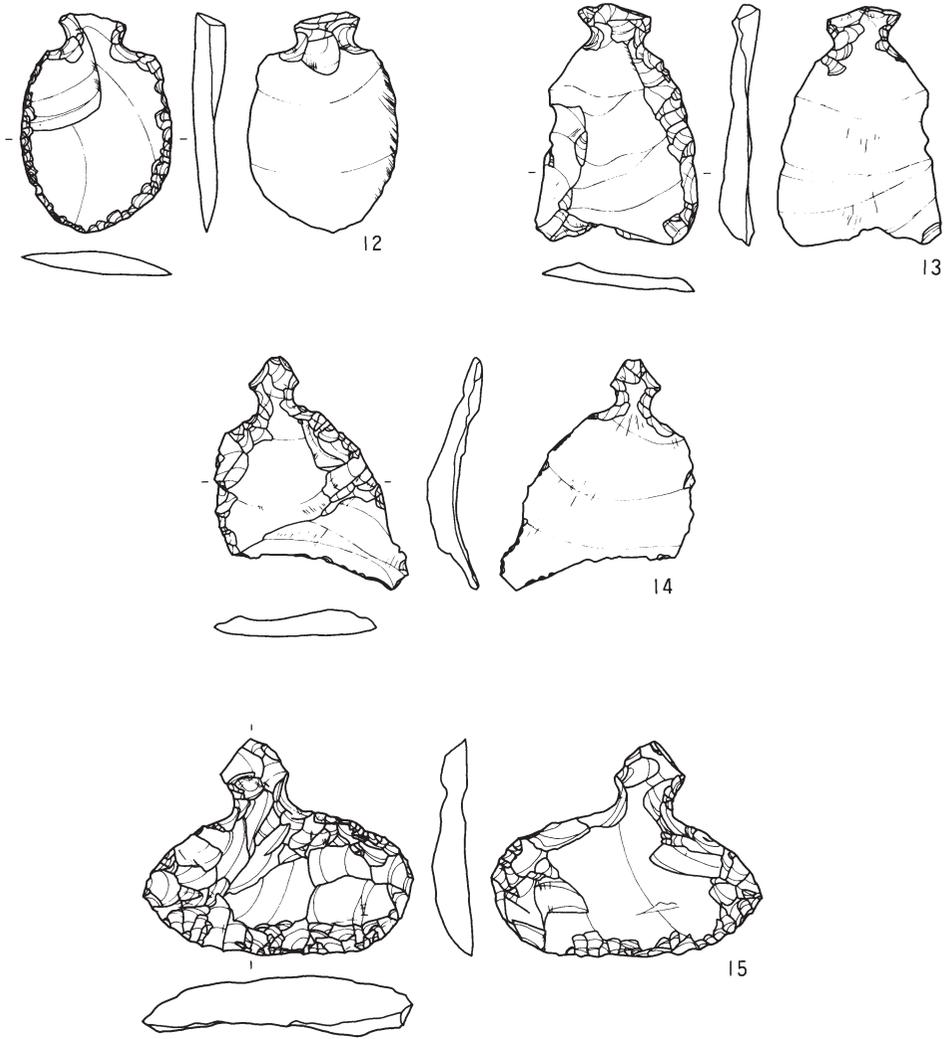
出土点数が多いことから、無作為に約600点を抽出し、調査区内の出土傾向を第150図に図示してみた。出土地点は、他の遺物の出土箇所とほぼ重なり、数ブロックに密になる傾向は認められるものの、特に密集する部分は確認されなかった。また、他の遺物の出土量が多い部分においても、本類も同様に出土量が多い傾向を示している。

時期的な面からは、土器と同様に、層位的に出土状態を把握できなかった。ただ、これら各時期の土器と混在して出土したことから、縄文時代中期を通じて普遍的に使用された可能性が高い。ただし、ある時期に圧倒的に多量に使用された可能性も払拭しきれない。

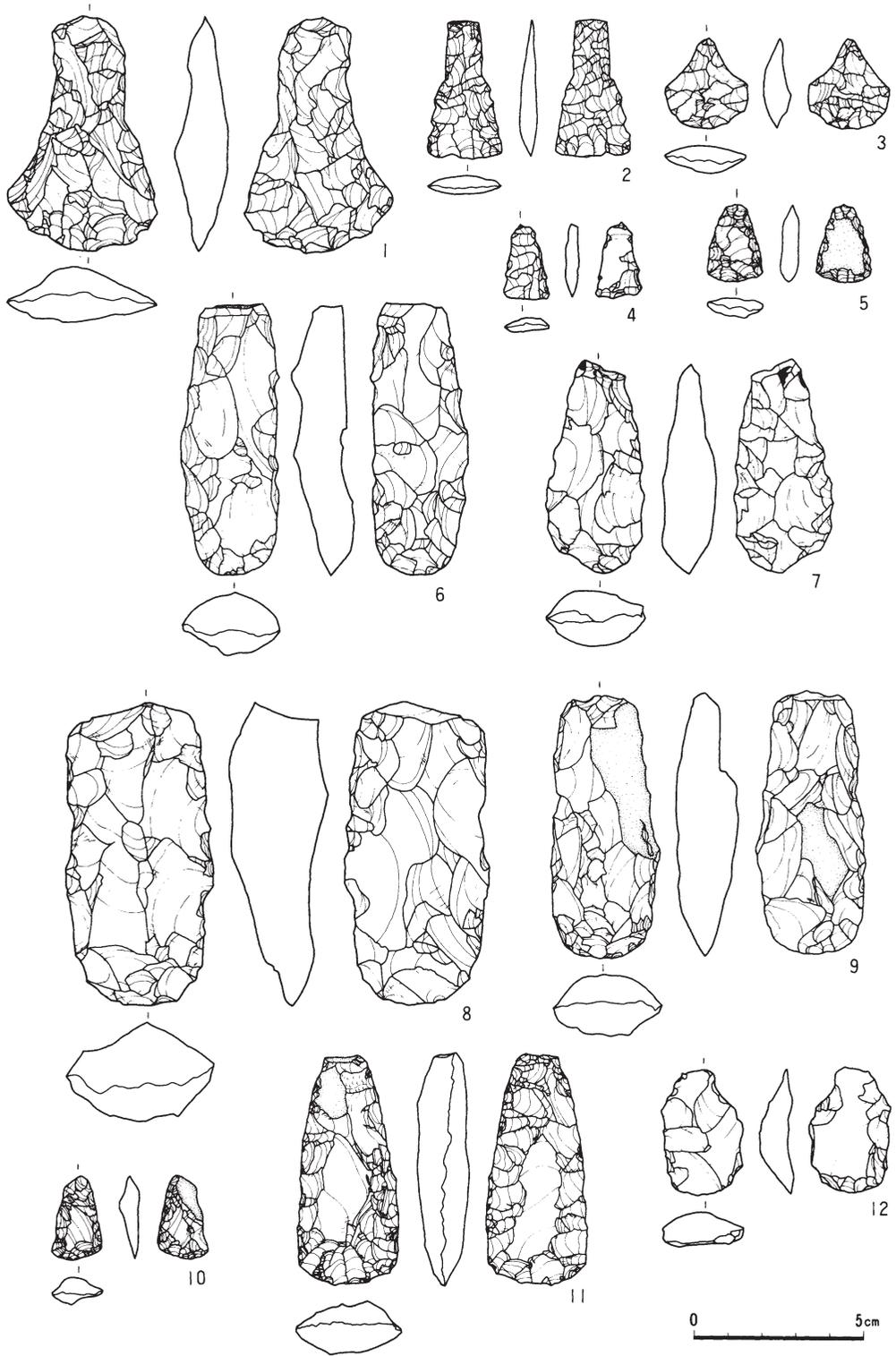
使用した石材は、珪質頁岩の小転石で、遺跡下を蛇行する近沢川の川底に多く存在する。容易に入手可能なことから多用した可能性が考えられる。



第145図 遺構外出土石器（石匙—1）



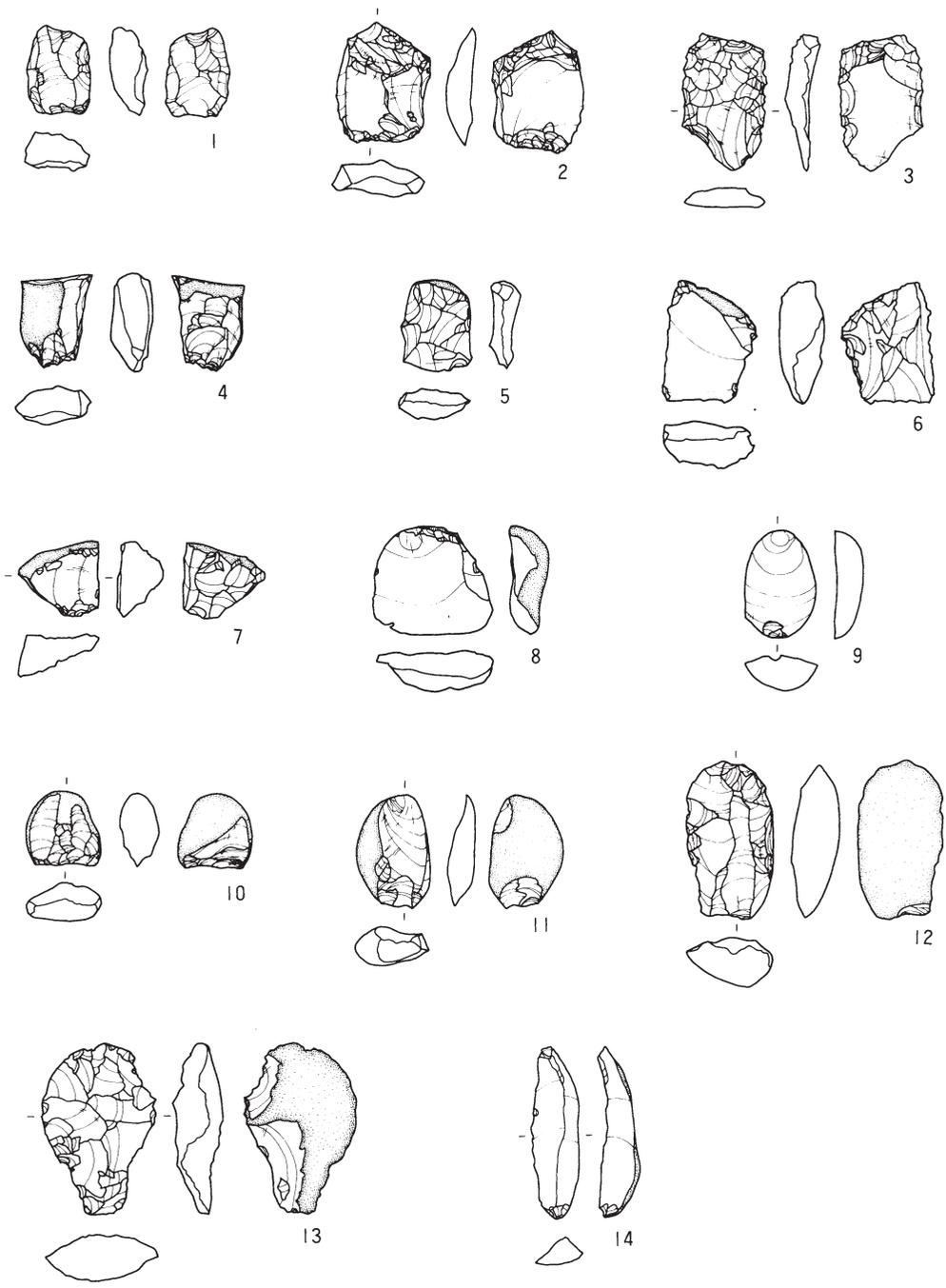
第146图 遺構外出土石器（石匙—2）



第147图 遺構外出土石器（筥状石器—1）

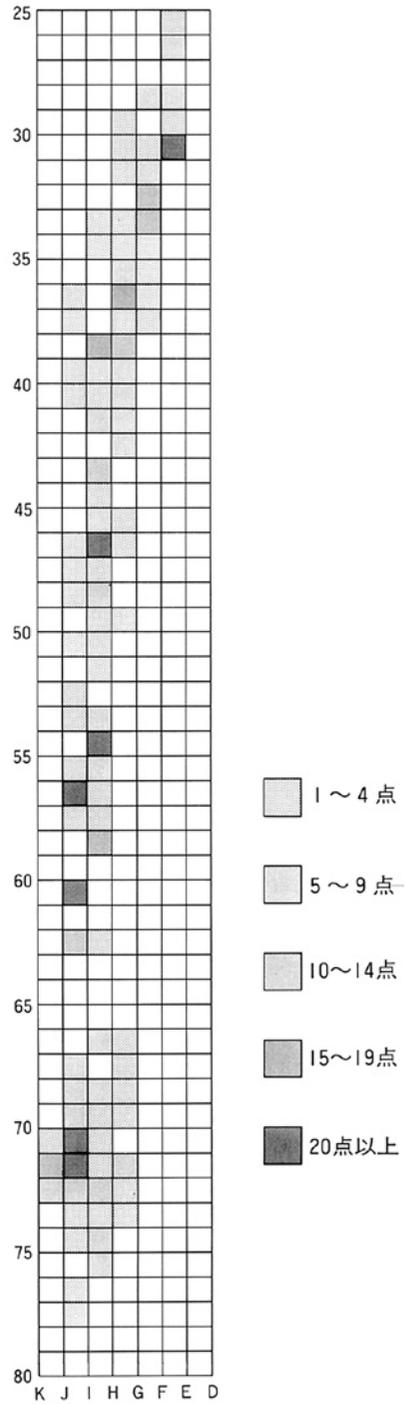
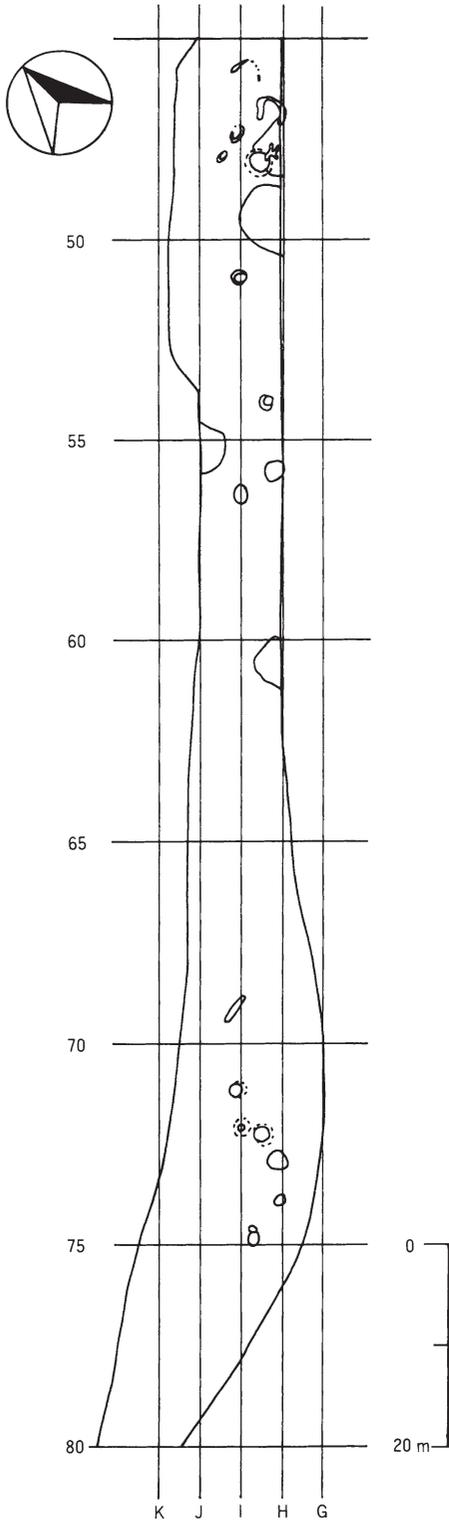


第148図 遺構外出土石器（筥状石器—2）



0 5cm

第149图 遺構外出土石器（楔形石器）



第150図 両極技法による剝片の出土分布

## 石匙

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第145図-1	H-48	III	72	30	9	20.1	珪質頁岩	804
-2	I-51	II	65.5	28	12	13.5	珪質頁岩	805
-3	H-59	II	72	27	12	20.3	流紋岩	808
-4	I-37	III	84.5	30	10	25.2	珪質頁岩	801
-5	I-76	II	54	38	8	12.5	珪質頁岩	816
-6	F-32	I	(36.0)	15	5	(2.2)	珪質頁岩	811
-7	F-37	I	54.5	21	8.5	8.1	珪質頁岩	809
-8	I-47	III	63.5	22.5	10.5	9.4	珪質頁岩	812
-9	I-40	III	(71.5)	(23.0)	9	(16.0)	玉髓質珪質頁岩	803
-10	F-33	I	52	29	10.5	7.6	珪質頁岩	802
-11	F-33	II	62	31	13	15.8	珪質頁岩	814
第146図-12	G-72	I	59.5	40	9	15.8	珪質頁岩	815
-13	H-52	III	64.5	43.5	10	15.8	玉髓質珪質頁岩	807
-14	G-34	III	62	45.5	65.5	15.6	玉髓	806
-15	M-81	II	58	72	11	40.2	珪質頁岩	813

## 石筩

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第147図-1	H-54	I	70.5	43.5	16.5	36.7	玉髓質珪質頁岩	601
-2	G-71	II	41.5	22	5.5	4.7	珪質頁岩	613
-3	G-41	II	27	24	8	3.9	玉髓質珪質頁岩	614
-4	J-69	III	23	14	4	1.4	珪質頁岩	616
-5	J-71	II	23	16.5	6	2.2	珪質頁岩	625
-6	I-61	III	81	28.5	14	41.5	珪質頁岩	609
-7	H-53	II	64	29	16.5	28.9	珪質頁岩	619
-8	H-50	II	90.5	43	29.5	97.1	珪質頁岩	612
-9	G-39	II	78	32	18	47.9	珪質頁岩	620
-10	I-56	II	25.5	15.5	8	2.3	珪質頁岩	626
-11	I-51	II	69	31	15.5	34.6	珪質頁岩	623
-12	F-31	II	37	24	10	8	珪質頁岩	617
第148図-13	K-26	III	41.5	22	9	9	玉髓	618
-14	G-44	II	59	28.5	19	28.4	珪質頁岩	622
-15	H-48	II	(63.0)	27.5	16	(28.7)	珪質頁岩	608
-16	I-48	III	(54.5)	32	16	(29.9)	玉髓質珪質頁岩	610
-17	H-47	III	60	31	11.5	17.9	珪質頁岩	603
-18	F-33	III	57	26	13	13.5	珪質頁岩	607
-19	G-36	II	47.5	21	14.5	12.1	珪質頁岩	611
-20	H-48	III	73	28	11.5	30.8	珪質頁岩	621
-21	D-21	I	42	22.5	6.5	5.5	珪質頁岩	602
-22	H-52	II	42	24	7	8	珪質頁岩	604
-23	H-53	III	59.5	20	11	13.1	流紋岩	606
-24	G-41	I	30	15.5	5.5	2.8	玉髓	615

## 両極

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第149図-1	H-74	III	25.5	17.5	10.5	4.4	珩質頁岩	406
-2	H-62	II	33.5	25	7.5	8	珩質頁岩	417
-3	F-28	II	38.5	23.5	9.5	6.4	珩質頁岩	415
-4	G-69	III	25	18.5	11	6.6	珩質頁岩	411
-5	H-39	I	26	20	9	4.2	珩質頁岩	412
-6	G-30	I	34	26	13	11.6	珩質頁岩	414
-7	H-39	I	21	22	13	4.4	珩質頁岩	418
-8	H-34	III	30	33	11	12.6	珩質頁岩	405
-9	H-76	III	3	2	1	5.6	珩質頁岩	408
-10	I-71	III	20.5	20.5	10.5	5.6	珩質頁岩	409
-11	H-68	III	32	20.5	11	7.7	珩質頁岩	410
-12	G-69	II	44	23.5	14	15.5	珩質頁岩	416
-13	H-38	II	48	31	14	16.7	珩質頁岩	419
-14	H-75	II	48	14	11	6.2	珩質頁岩	407
	H-55	I	39	25	7	4.1	珩質頁岩	413

## 異形石器 (第151図)

本類としたものは5点である。形状の異質なものを一括した。

1は独鈷石様の形状をする小型の石器で、両端部には石鏃に類似した調整を行っている。また、両側縁には左右対称に2箇所ずつの浅い抉りを作成している。石鏃の可能性も考えられたが、本類とした。鉄石英を素材としている。

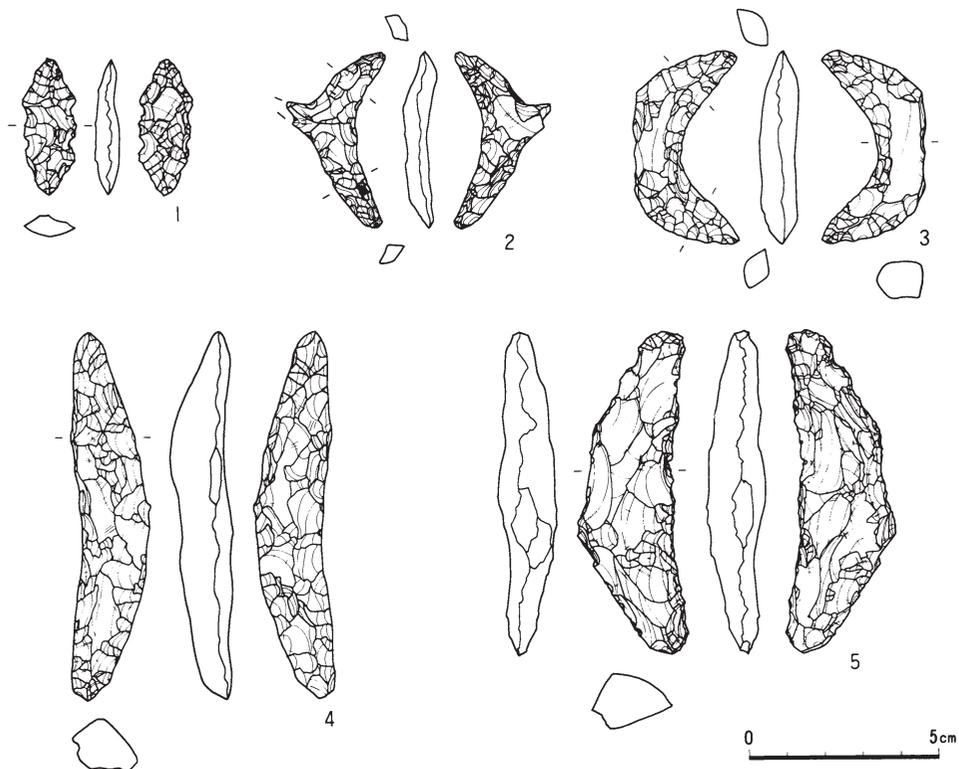
2は弧状を呈する器体で、背の部分に小突起を作成している。突起部分は根元で折損している。側縁は、概ね鋭角に調整されており、刃部形状からスクレーパーの類とも考えられる。

3は弧状の器体であり、内湾部には鋭利な刃部調整がなされている。両端部は石鏃等と同様な調整がなされている。背の部分は直線的で平坦に加工され、細かな調整は行われていない。

4・5は緩やかな弧状を呈する器体で、ともに肉厚である。4の先端は石槍ともとれる調整がなされており、全体に丁寧な作りである。背の部分の一部を平坦に剥離している。5は器面調整がやや粗雑である。側縁のほぼ左右対称な位置に、おのおの平坦な面を作成している。4・5にみられる側縁の剥離は、ナイフ的用法における把握のための器体調整の可能性も考えられる。

## 異形石器

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第151図-1	G-41	II	37	14	6.5	3.1	鉄石英	902
-2	F-31	III	47.5	(19.0)	7	(3.4)	緑色細粒凝灰岩	903
-3	I-50	II	52	16	10	10.5	珩質頁岩	901
-4	F-35	II	98	18.5	14	26.4	珩質頁岩	514
-5	F-35	I	86	26	15	30.5	珩質頁岩	904



第151図 遺構外出土石器（異形石器）

### 不定形石器（第152～162図）

石器の中で両極剥片について出土量の多いもので、約500点出土している。これらは、器面全体を加工しているものと、剥片の縁辺部に刃部を作出しているだけのものとに大別される。また、剥片をそのまま使用したものが認められ、この種が圧倒的に多い。

出土量が多いことから、特徴のあるものを選別して図化した。

I類 器面全体を調整しているものを本類とした。多くはスクレーパーの類である。これらは、刃部の位置及び調整から9種に細分した。

a種：定形石器の欠損品と考えられるもの。b種：主に横型剥片を素材としたもの。c種：片側縁に主要な刃部をもつもの。d種：両側縁に刃部をもつもの。e種：端部に刃部をもつもの。f種：周縁全体を刃部とするもの。g種：器体の整形途中と考えられるもの。h種：g種の欠損と考えられるもの。i種：刃部調整に至っていないもの。

a種とした1・2・5は石匙、3は石錐、4は石筥の欠損品の可能性がある。b種の6～8は、小型の横型剥片を素材としており、6・8は表皮を残している。c種の9～17は、主に片

側縁に刃部調整を施してるもので、9・12・14等は尖頭器の可能性も考えられるものである。d種の18・19は、小型長方形のほぼ類似した形状を持つもので、不定形石器中においては、定形化がみられる器種である。e種は、今回の出土資料中では、典型的なものは認められなかった。f種の24は、器面調整はほとんど認められないが、器面の高まりを剝離によって減らしていることから本類とした。g・h種は器面の一部または全体を加工しているもので、器体整形時に破損したと思われるものである。25～28・35～38は何らかの定形石器の加工途中の可能性が高いものである。ただ、刃部調整が雑なことを除けばスクレーパーとしても充分機能するものである。i種は、大まかな器体の剝離を行っているもので、細かな調整が行われていない。45は石核の可能性も考えられる。

II類 剝片をほぼそのまま素材としたもので、おもに刃部の調整だけのものを、この類とした。機能としてはI類と同様にスクレーパーである。

刃部調整の部位によって9種に細分した。

a種：両側縁の全部。b種：片側縁全部と他方の一部。c種：片側縁全部。d種：両側縁と端部。e種：片側縁と端部。f種：端部。g種：両側縁の一部。h種：片側縁の一部。i種：その他。

本類は主に刃部調整を行ったものとしたが、刃部調整は、ごく軽便な小剝離が連続するものと、器面の中央部まで及ぶていねいなものがみられ、特に後者には、器体が小型のものなどは、一部器体を調整しているようなものも含まれる。

III類 横長剝片を素材としたもので、出土点数は非常に少ない。肉厚の大型のものが多い。

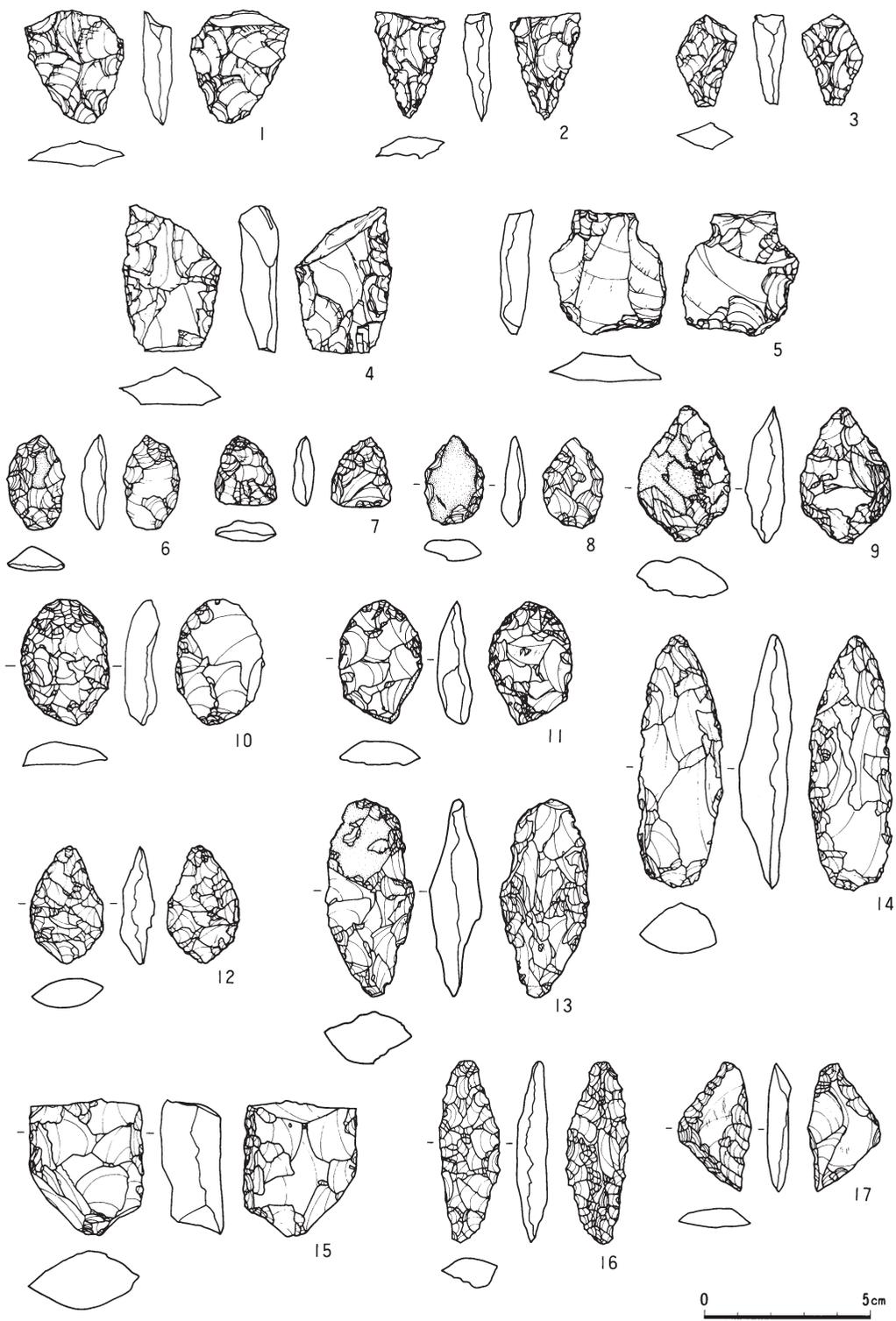
IV類 特に意図的な刃部調整は行っていないもので、連続した刃こぼれが認められるものである。素材は剝片そのものを使用しているものが多い傾向がみられる。

V類 連続した微小な剝離が認められるものであるが、意図的な刃部調整の剝離か使用による刃こぼれかを特定できなかったものである。

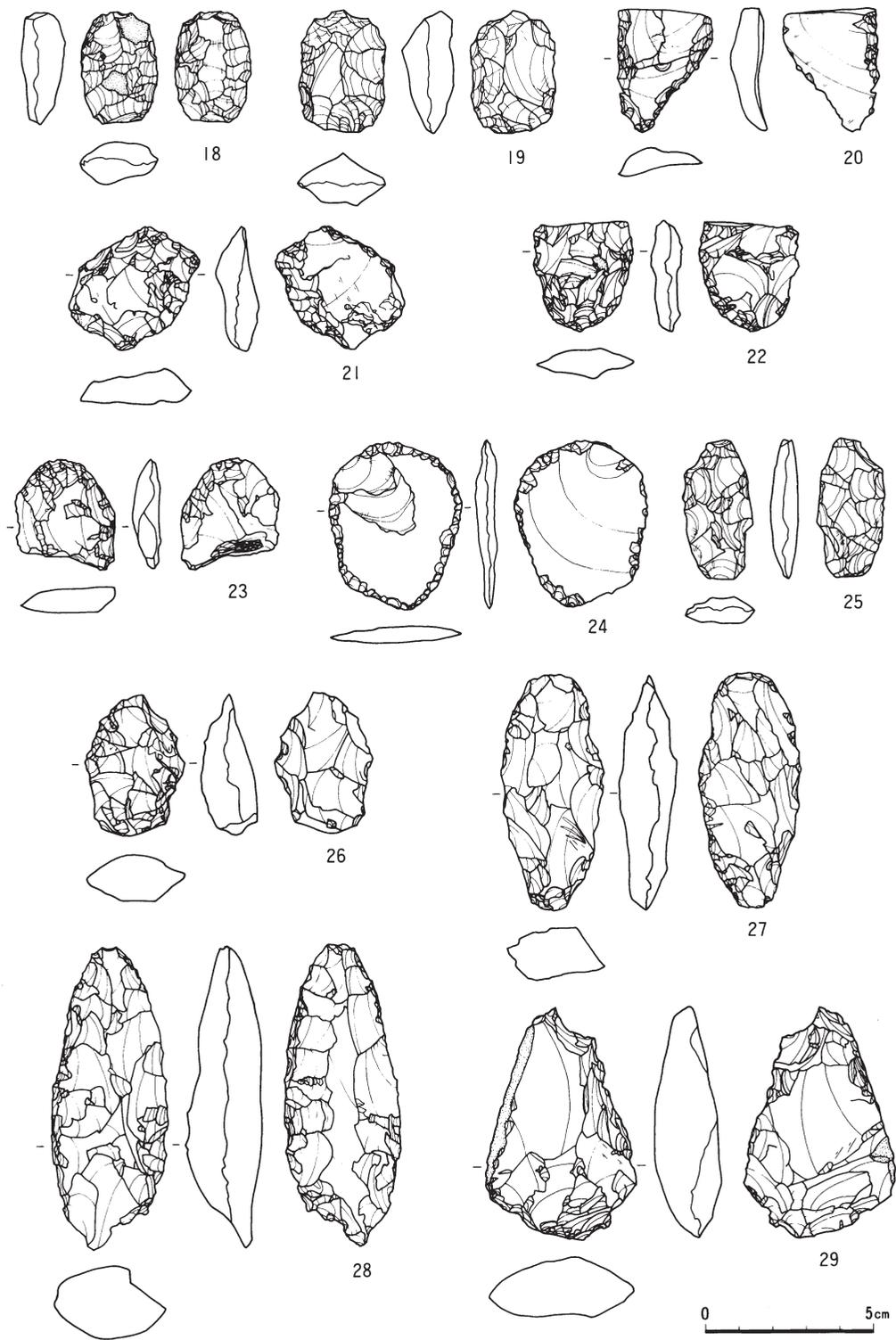
VI類 部分的な刃こぼれが認められるもので、不定形石器中、もっとも多い種類である。

不定形石器の出土地点は、他の遺物同様に調査区全体に及んでおり、特に密集する傾向は認められなかった。

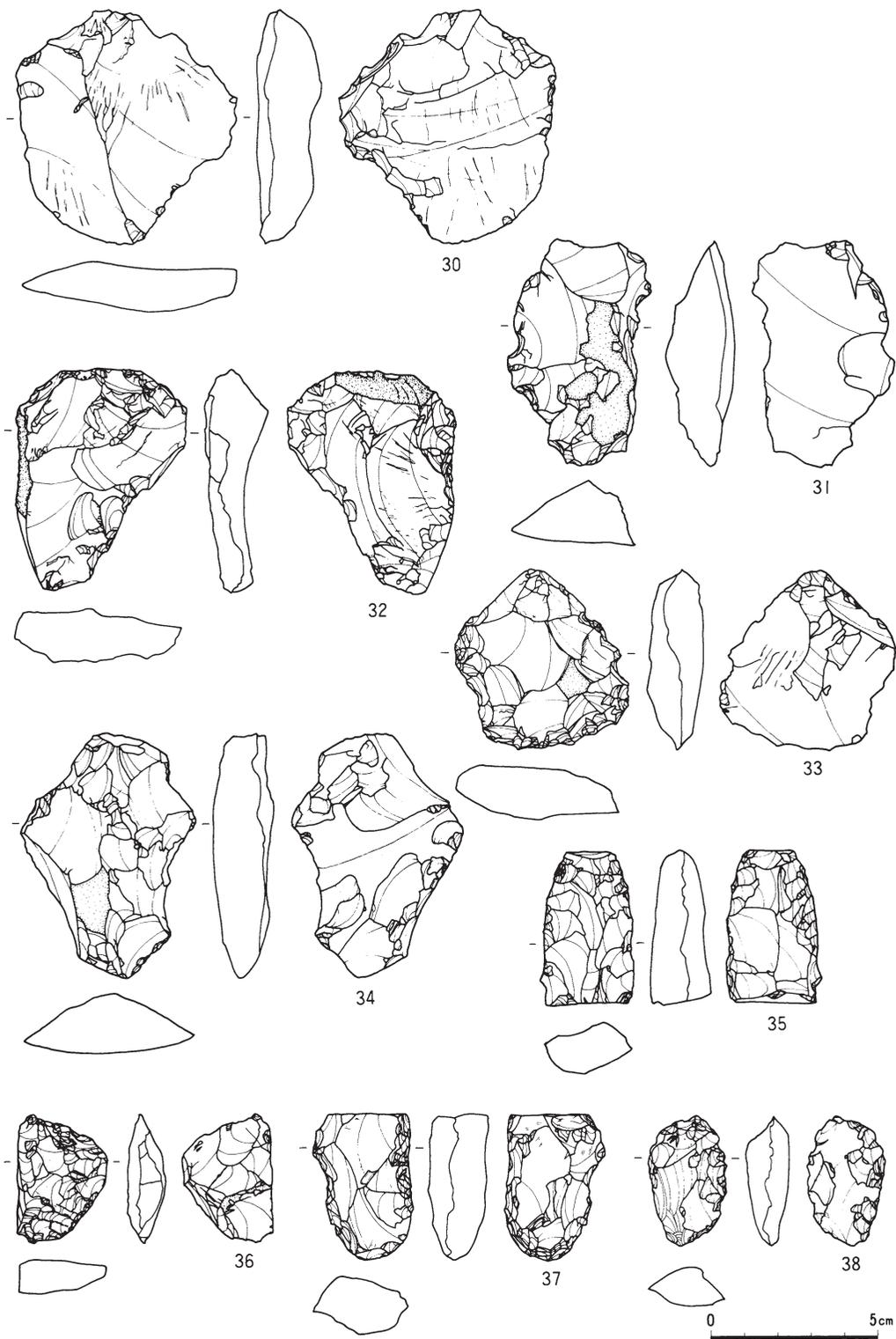
使用した石材は、珪質頁岩がもっとも多く、玉髄質珪質頁岩がこれに続く。また素材としては、小型のもので表皮の残存するものが多くみられ、両極剝片と共通点が多い。これらはこの技法によって採取された剝片を素材にしているものと考えられる。



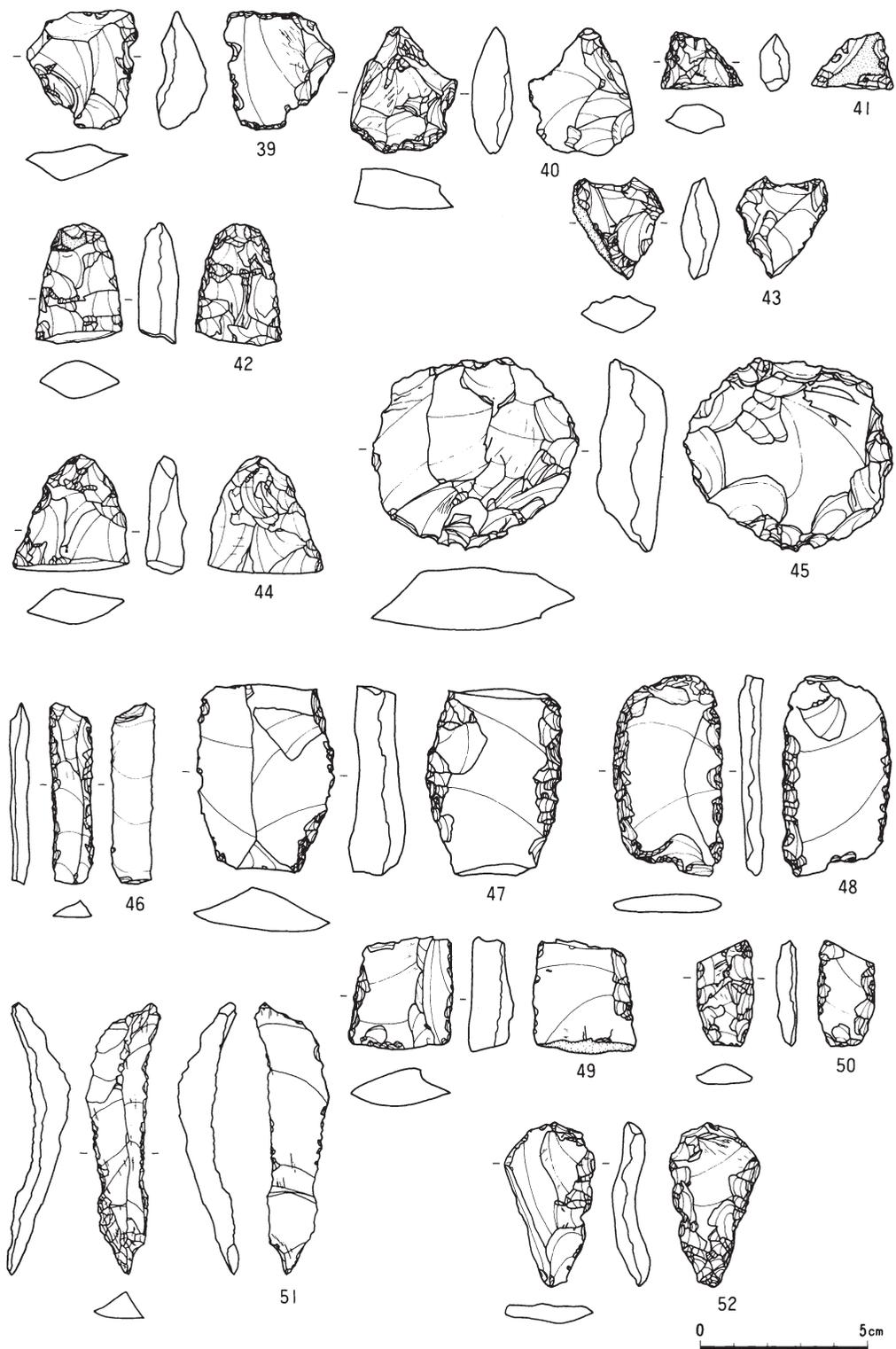
第152図 遺構外出土石器（不定形石器—1）



第153図 遺構外出土石器 (不定形石器-2)



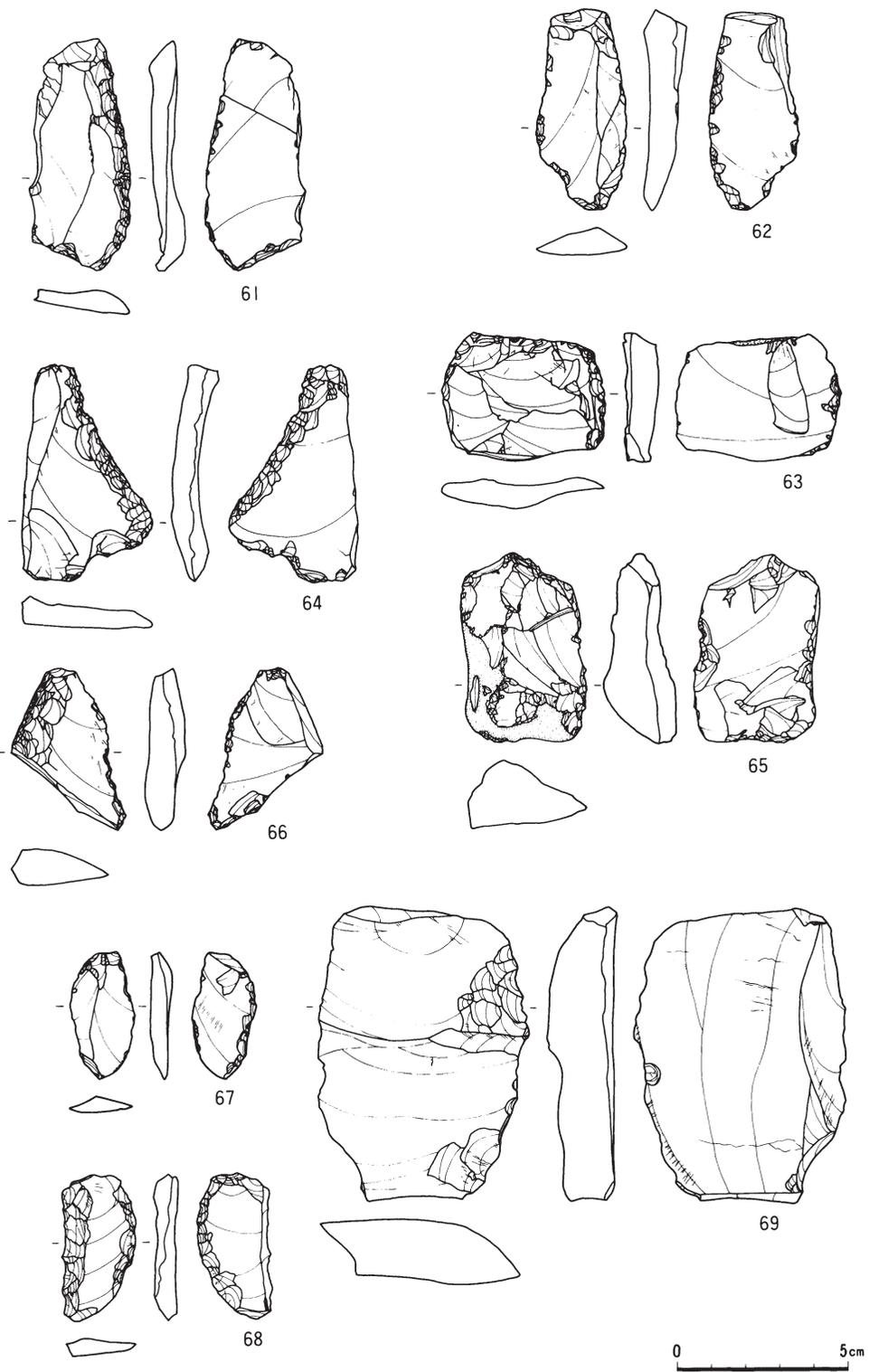
第154図 遺構外出土石器（不定形石器—3）



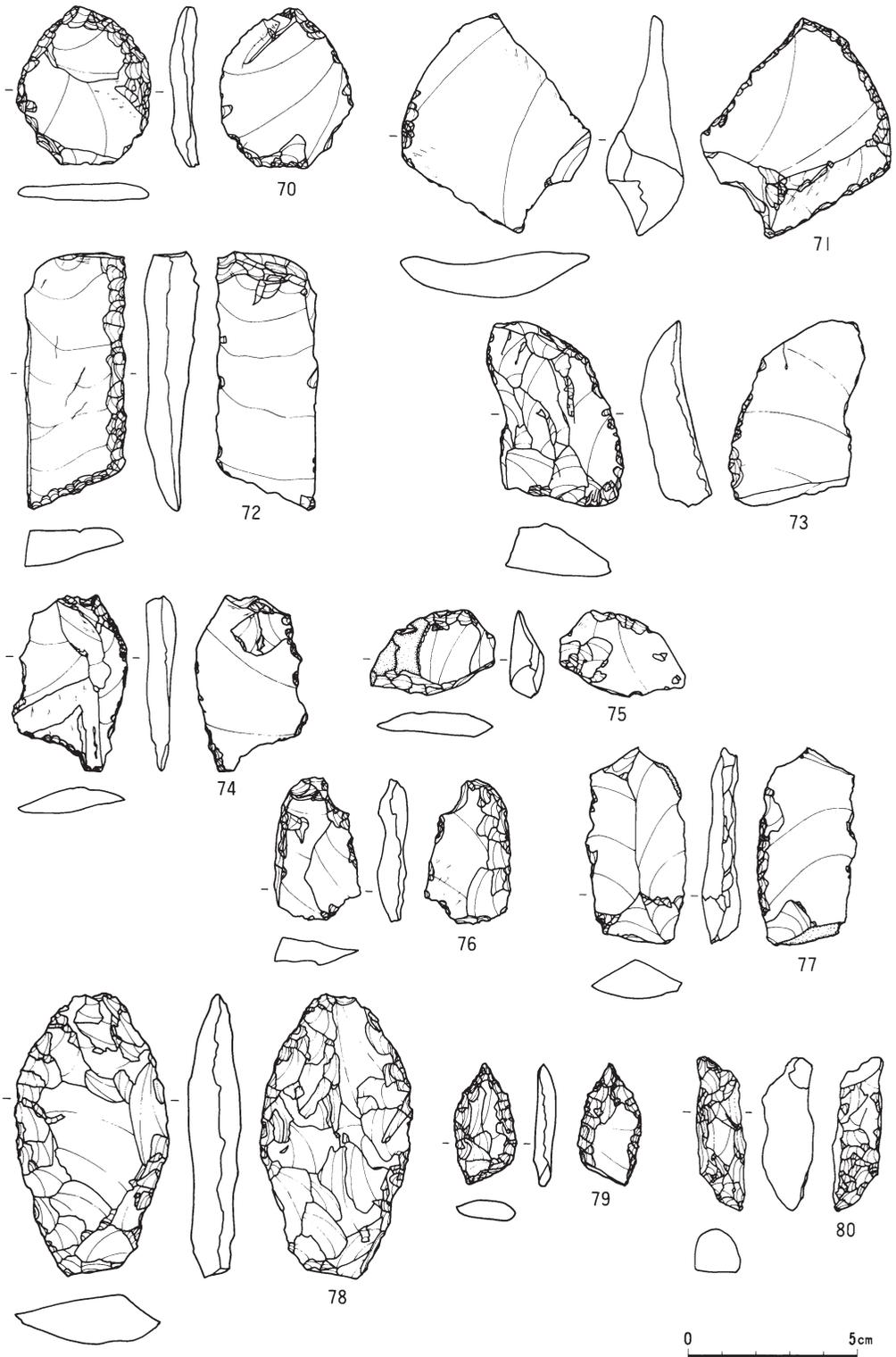
第155图 遺構外出土石器（不定形石器—4）



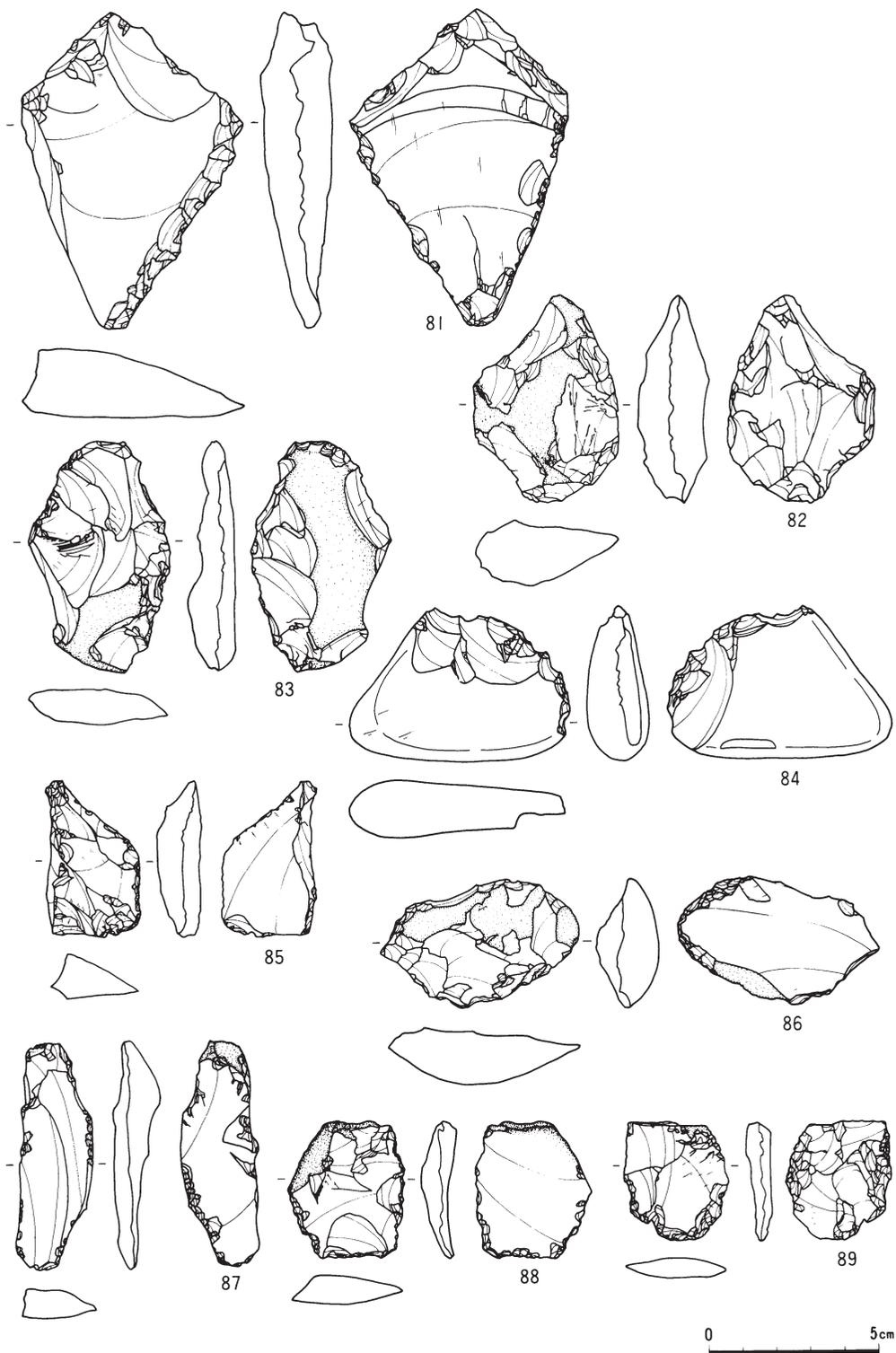
第156图 遺構外出土石器（不定形石器—5）



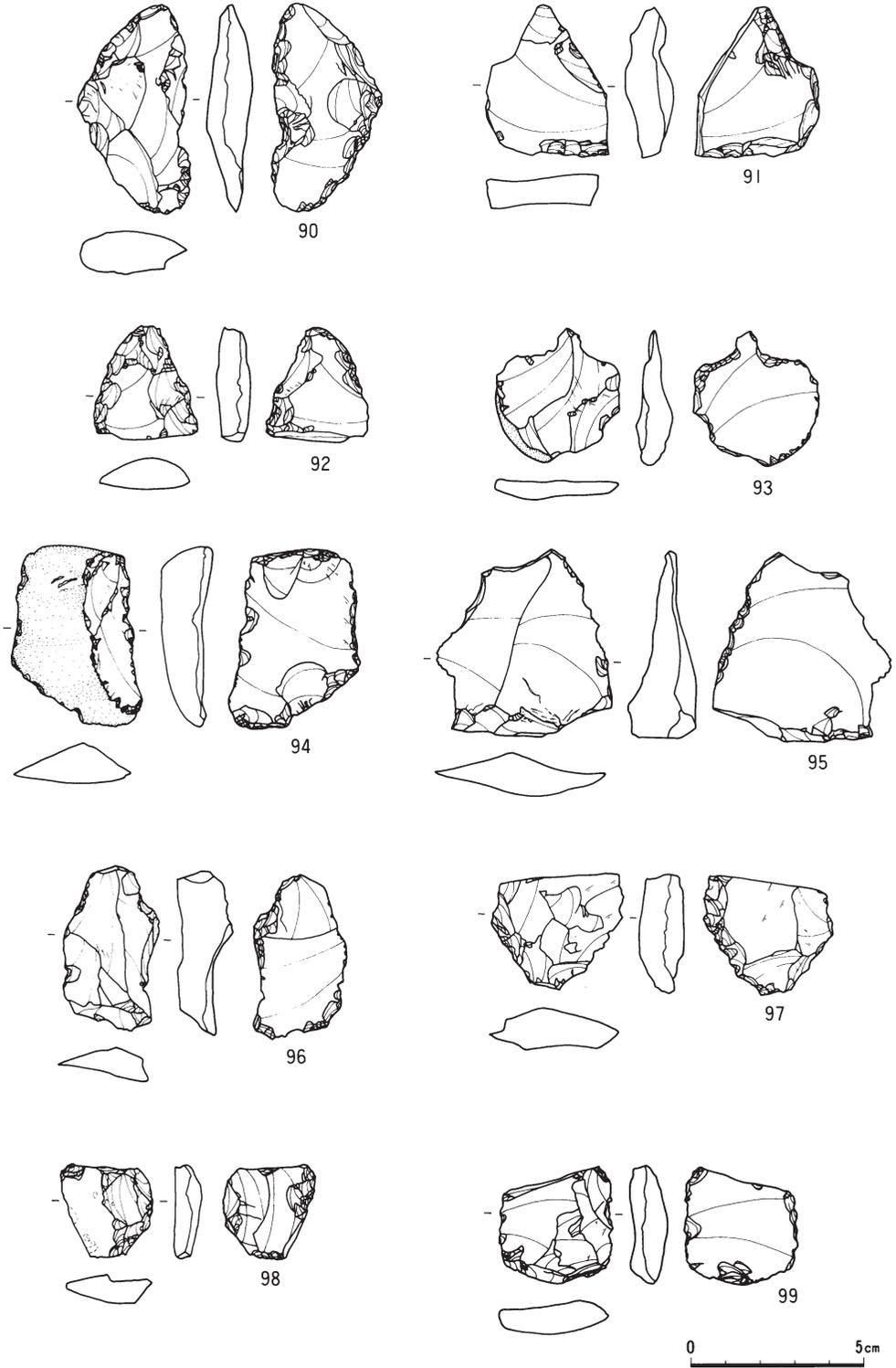
第157図 遺構外出土石器（不定形石器—6）



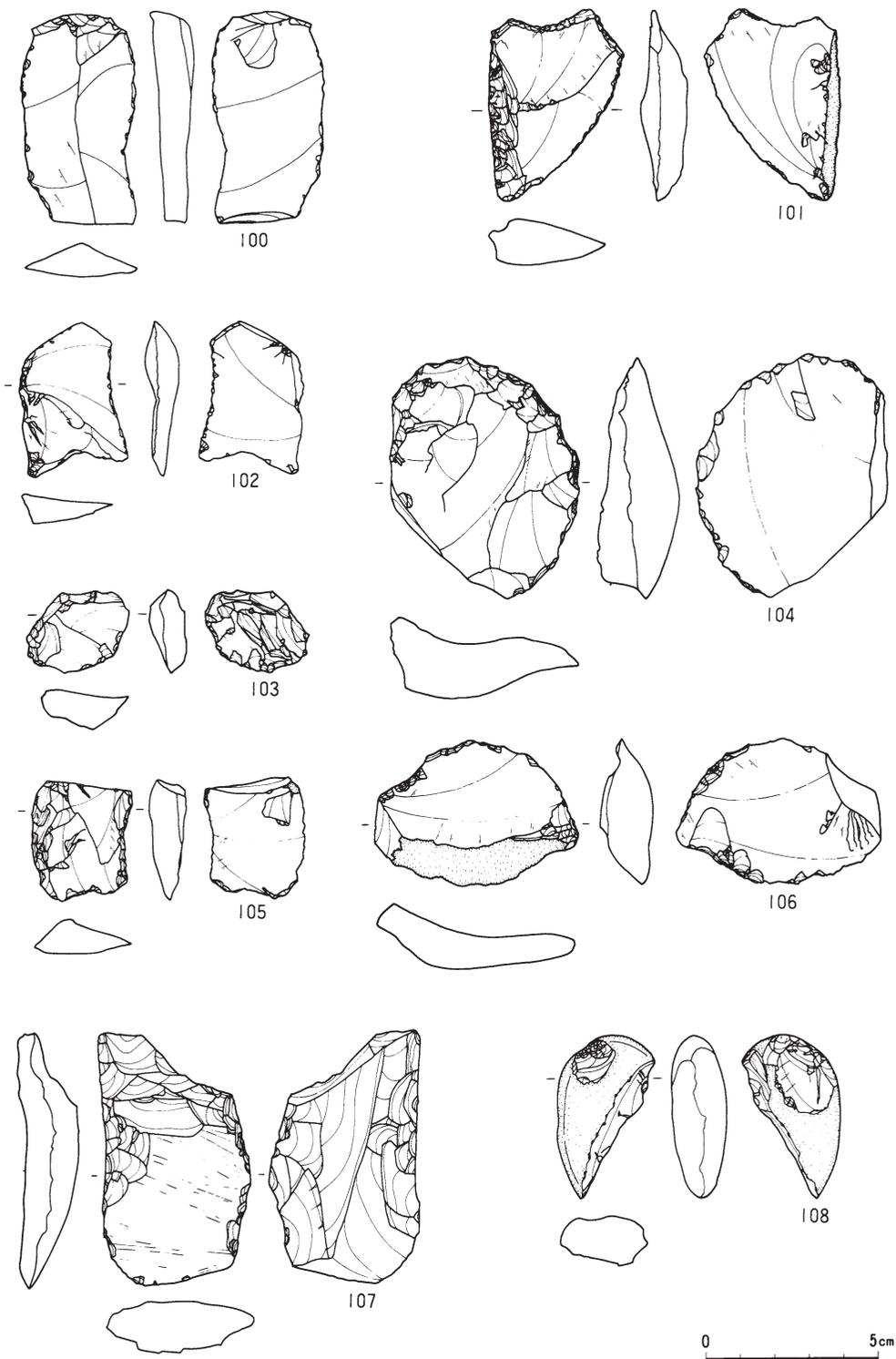
第158図 遺構外出土石器（不定形石器—7）



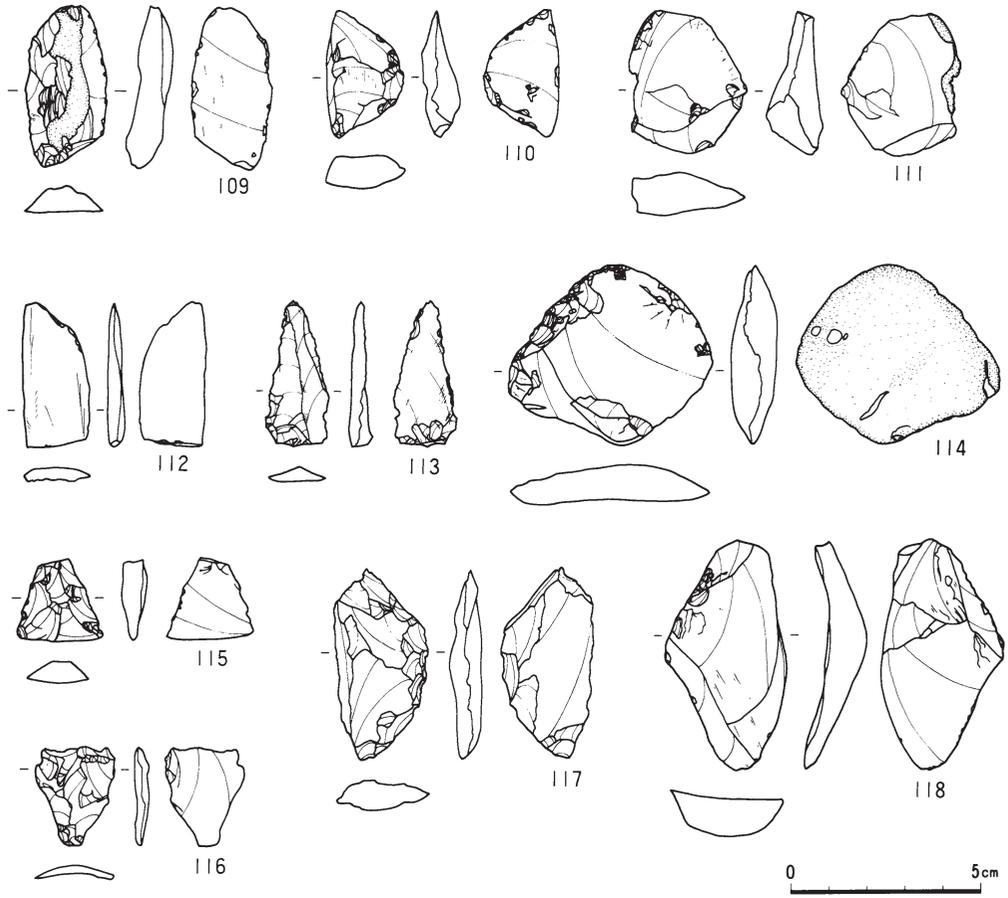
第159图 遺構外出土石器（不定形石器—8）



第160图 遺構外出土石器（不定形石器—9）



第161図 遺構外出土石器（不定形石器—10）



第162図 遺構外出土石器（不定形石器-11）

不定形石器

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号	分類
第152図-1	H-48	III	(34.5)	28.5	8	8.8	珩質頁岩	1164	I a
-2	E-24	II	(32.0)	(21.5)	(8.5)	(4.4)	珩質頁岩	1031	I a
-3	F-35	I	23	15	10	(2.4)	珩質頁岩	1075	I a
-4	H-50	II	(45.0)	(29.0)	(13.0)	(14.6)	珩質頁岩	1023	I a
-5	H-66	II	(38.5)	(35.0)	(9.0)	(6.6)	珩質頁岩	1155	I a
-6	H-35	III	29	17	7.5	3.3	玉髓質珩質頁岩	1276	I b
-7	H-41	III	21	18	6	3.6	珩質頁岩	1275	I b
-8	H-54	II	26.5	18	7	11	玉髓質珩質頁岩	1277	I b
-9	H-68	III	42	27	12	71.1	珩質頁岩	1246	I c
-10	G-73	II	38	26.5	9	25.3	珩質頁岩	1215	I c
-11	F-36	I	37.5	25.5	10	22.8	珩質頁岩	1194	I c
-12	G-68	II	21.5	35.5	10	3.2	珩質頁岩	1303	I c
-13	D-20	II	60	26.5	16	6.7	珩質頁岩	1302	I c
-14	H-64	II	77.5	25	15	37.3	珩質頁岩	1295	I c
-15	I-36	III	41	33.5	1.8	14.3	珩質頁岩	1207	I c
-16	H-63	II	55.5	19	9	2.3	玉髓質珩質頁岩	1285	I d
-17	I-51	II	39	22	7	2.4	珩質頁岩	1274	I d
第153図-18	I-53	III	33.5	23	13	7	珩質頁岩	1278	I d
-19	I-66	II	37	26	15.5	17.9	珩質頁岩	1280	I d
-20	H-58	II	37	28	9.5	16	珩質頁岩	1210	I d
-21	H-66	II	37	38.5	10.5	6.3	珩質頁岩	1225	I d
-22	F-32	III	33	30	9	12.2	珩質頁岩	1197	I d
-23	D-19	III	33	29.5	8	16.7	玉髓質珩質頁岩	1235	I e
-24	H-74	III	50	40	5	7.7	珩質頁岩	1209	I f
-25	I-40	III	41.5	20.5	8.5	12.5	玉髓質珩質頁岩	1279	I g
-26	F-35	I	42	29	16	8.6	珩質頁岩	1229	I g
-27	G-34	III	69.5	31	17	4.2	珩質頁岩	1300	I g
-28	H-49	III	90	34.5	23	31.6	珩質頁岩	1298	I g
-29	-		69	45	19	16.7	珩質頁岩	1321	I g
第154図-30	G-38	III	66.5	65.5	19	21.7	珩質頁岩	1264	I g
-31	H-46	III	68	37	21	(58.3)	珩質頁岩	1251	I g
-32	I-50	II	73	51	19	31	珩質頁岩	1261	I g
-33	I-67	II	55	48	16	44.5	珩質頁岩	1257	I g
-34	I-51	II	(74.0)	51	17	62.1	珩質頁岩	1252	I g
-35	F-35	I	47	28	18	3.1	珩質頁岩	1216	I h
-36	H-58	II	38.5	27	11.5	11.5	珩質頁岩	1190	I h
-37	F-33	II	44.5	30.5	18.5	37.6	玉髓質珩質頁岩	1240	I h
-38	I-56	II	25	15	8	27.7	珩質頁岩	1237	I h
第155図-39	G-29	I	36	33	1.5	11.9	珩質頁岩	1222	I i
-40	I-54	III	38	32	12	7.7	珩質頁岩	1213	I i
-41	H-43	I	17	24.5	9	13.9	珩質頁岩	1224	I i
-42	F-33	II	36.5	26	12	11.8	珩質頁岩	1314	I i
-43	H-38	I	40	27.5	11	7.6	珩質頁岩	1196	I i
-44	G-41	III	35	35	11	8.5	珩質頁岩	1315	I i
-45	D-21	II	63.5	56	19.5	(47.1)	珩質頁岩	1253	I i

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号	分類
第155図-46	H-66	II	54.5	13.5	6	19.9	珪質頁岩	1267	II a
-47	K-76	III	57	41	17	57.7	珪質頁岩	1296	II a
-48	G-39	I	60.5	32.5	6.5	9.1	珪質頁岩	1234	II a
-49	I-70	III	34	31	13.5	9.9	珪質頁岩	1208	II a
-50	H-46	I	31.5	17	6	16.9	珪質頁岩	1228	II a
-51	I-71	II	81	18	12	10	珪質頁岩	1108	II a
-52	E-28	I	50	27.5	8	3.3	珪質頁岩	1227	II a
第156図-53	G-42	I	180	56.5	20	37.1	珪質頁岩	1268	II a
-54	I-55	II	62.5	41	17	7.3	珪質頁岩	1265	II b
-55	G-38	I	54.5	28.5	18	6.2	珪質頁岩	1195	II b
-56	H-74	II	50	35.5	14.5	6.9	珪質頁岩	1243	II b
-57	G-68	II	66	33.5	9.5	5.8	珪質頁岩	1270	II b
-58	I-70	III	44.5	26	11	9.7	珪質頁岩	1219	II b
-59	H-47	III	(50.0)	(47.0)	(18.0)	(110.2)	珪質頁岩	1254	II b
-60	H-43	III	47	48	15.5	108.7	珪質頁岩	1272	II b
第157図-61	I-74	II	69	29.5	8	12.4	珪質頁岩	1232	II b
-62	F-35	I	59.5	27	12.5	20.7	珪質頁岩	1211	II b
-63	I-76	III	38	48.5	8.5	18.9	珪質頁岩	1192	II c
-64	H-43	I	64	38	9	7.5	珪質頁岩	1201	II c
-65	H-74	II	56.5	37	21	6.5	珪質頁岩	1241	II c
-66	I-60	III	48	28.5	10.5	14	珪質頁岩	1198	II c
-67	H-38	II	37.5	19	6	14.1	珪質頁岩	1217	II c
-68	G-49	II	43	21.5	7.5	37	珪質頁岩	1271	II c
-69	E-14	I	87.5	62	20.5	5	珪質頁岩	1273	II c
第158図-70	H-46	II	48	40	7	13.3	珪質頁岩	1199	II d
-71	H-62	II	66	56.5	21.5	94.1	珪質頁岩	1248	II d
-72	I-71	II	76.5	30	16	13.7	珪質頁岩	1269	II e
-73	-		55.5	39.5	14	15.5	珪質頁岩	1319	II e
-74	I-47	III	53	33.5	8.5	14.4	珪質頁岩	1233	II e
-75	I-52	II	25	37	10	3	珪質頁岩	1244	II f
-76	H-62	II	43	25	9	10.5	珪質頁岩	1221	II g
-77	I-39	III	58	29	12	27.2	珪質頁岩	1294	II h
-78	H-55	II	85	45	15.5	58.7	珪質頁岩	1297	II i
-79	H-60	II	36	18	6.5	17.3	珪質頁岩	1301	II i
-80	E-28	II	45.5	13.5	14	23.4	珪質頁岩	1203	II j
第159図-81	I-51	II	94.5	65.5	21	54.3	珪質頁岩	1249	III
-82	F-11	I	60	43	20	27	珪質頁岩	1259	III
-83	G-36	III	68.5	42	14	123.7	珪質頁岩	1262	IV
-84	H-43	III	45.5	66	18.5	47.4	珪質頁岩	1250	IV
-85	E-30	I	46	28	12.5	18	珪質頁岩	1200	IV
-86	E-24	II	38	59.5	18.5	30.5	玉髄質珪質頁岩	1299	IV
-87	I-60	III	67.5	23	15	16.4	珪質頁岩	1231	IV
-88	H-74	II	40.5	35	8.5	3	珪質頁岩	1223	IV
-89	I-68	II	35	31	7.5	16.7	珪質頁岩	1266	IV
第160図-90	I-70	II	61	31	12.5	8.6	珪質頁岩	1193	IV

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号	分類
第160図-91	G-69	II	44.5	36	14	10.4	珪質頁岩	1236	IV
-92	E-28	I	33	30	10	1.3	珪質頁岩	1316	IV
-93	I-69	III	39.5	36	20.5	15.2	珪質頁岩	1230	IV
-94	F-33	II	52.5	37.5	14	19.2	珪質頁岩	1204	V a
-95	H-66	II	61	53	16	46.3	珪質頁岩	1260	V a
-96	I-54	I	48	27	14.5	10.3	珪質頁岩	1218	V a
-97	-		34.5	38	13	53.5	珪質頁岩	1320	V a
-98	F-30	III	27	26	8	24.7	珪質頁岩	1206	V a
-99	E-26	I	34	33	10	16	珪質頁岩	1191	V a
第161図-100	I-56	II	62	33	12	6.1	珪質頁岩	1205	V b
-101	G-68	II	56	40	13.5	14.3	珪質頁岩	1212	V b
-102	J-75	II	45	30.5	10	11.6	珪質頁岩	1202	V b
-103	H-74	II	24	29.5	11	23.8	珪質頁岩	1242	V b
-104	H-46	III	71	56	24	38	珪質頁岩	1247	V b
-105	I-60	III	35	29	10.5	7.8	珪質頁岩	1220	V b
-106	I-56	II	42.5	60	14.5	27.1	珪質頁岩	1239	V b
-107	F-33	II	74.5	45	18	2.2	細粒凝	1291	V b
-108	-		47.5	29	16	15.3	珪質頁岩	1323	V b
第162図-109	H-74	III	44	17	9.5	9.8	珪質頁岩	1214	VI
-110	E-28	I	29	20	9.5	8.7	珪質頁岩	1226	VI
-111	-		(39.0)	(31.5)	(13.0)	66.1	珪質頁岩	1287	VI
-112	H-46	II	38.5	19.5	45	11.5	細粒凝	1245	VI
-113	H-61	I	38.5	17	6.5	1.6	珪質頁岩	1286	VI
-114	F-33	II	48	54	12	26.5	珪質頁岩	1238	VI
-115	G-72	III	22	22.5	6	29.6	珪質頁岩	1318	VI
-116	G-41	II	26.5	21	3.5	2.2	玉髓質珪質頁岩	1317	VI
-117	I-39	III	51	25	9	10	チャート	1313	VI
-118	-		61	32	11.5	19.9	珪質頁岩	1322	VI

## 石斧（第163～167図）

51点出土した。完形品が12点、欠損品が39点と破損率が高い。欠損品では基部片が刃部片の約2倍出土している。

すべて磨製石斧である。

刃部形状からみると、すべて両刃で、2・12がやや片刃気味である。1～9は円刃で、8はやや偏刃気味である。10～15は平刃の類である。16～27は偏刃の類で、特に17～19・25～27は大きく片寄っている。

28～48は基部の破片である。定角式のものが多く、概ね肉厚であり、小型のものは少ない。

整形は、粗割りまたは擦切り後に、潰し整形及び研磨を行うが、全面研磨まで至っていないものもある。粗割り段階の剝離痕や敲打痕の残存しているものも多い。緑色細粒凝灰岩製のものや小型のものは擦切技法によるものが多い。

側縁は、概ね平滑に整形されており、頭部も整形されているものが多い。ただ、19などのように、素材自体の形状が石斧状のものは、ごく軽便な整形だけで自然面を多く残している。

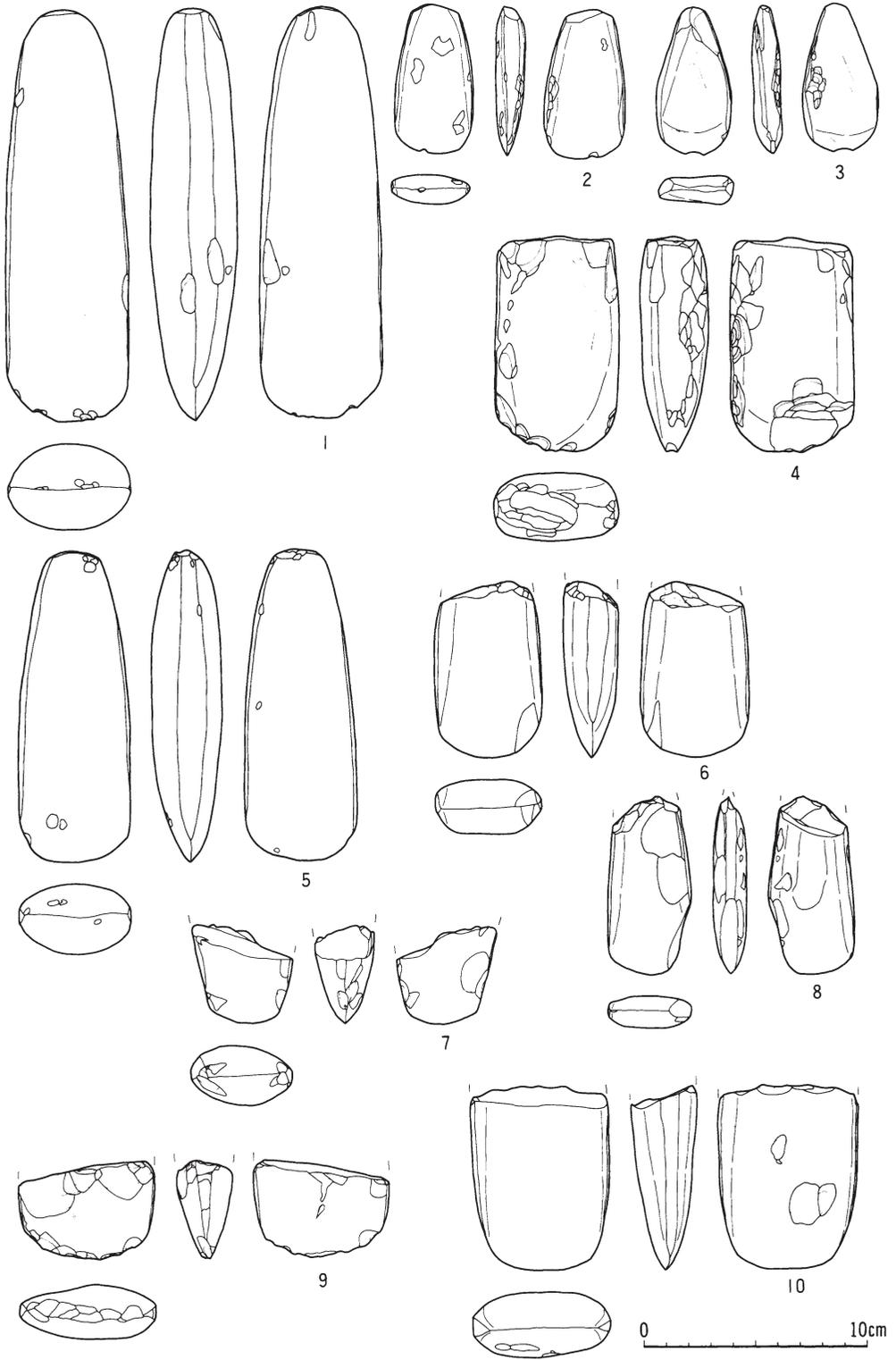
折損部位は、多くは着柄部分と考えられる。大型の器体は、平面上で横方向及びやや斜めに折損しており、斜めの場合も緩い角度である。小型のものは大きく斜めに折損しているものが多いようである。側面上では、26・37のように大きく斜めに折れているものは少ない。

折損後に他の器種に転用されたものは、基部側の破片が多い。刃部側の破片は、折損部分を再加工して再利用したものと考えられる。ただ、折損前とは異なる着柄や使用方法があったものと思われる。刃部先端が損傷したものは概ね再加工されている。

4・6・17・27は刃部片で、折損部を再調整している。基部側の破片と異なり、調整部分を他の用途に転用した痕跡は認められない。基部側の破片では、44～48がスタンプ状石器様に折損部を調整されており、敲打具、またはスリをとまなう敲打具として転用されている。

特殊例としては、49の刃部がスリによって平坦になっているが、これが他用途による結果か、または刃部の研ぎ直しの前段階かは不明である。また、50は刃部だけを打ち欠いているもので、他の整形は行われていない。これも刃部調整の前段階か、局部だけの打製石斧かは不明である。

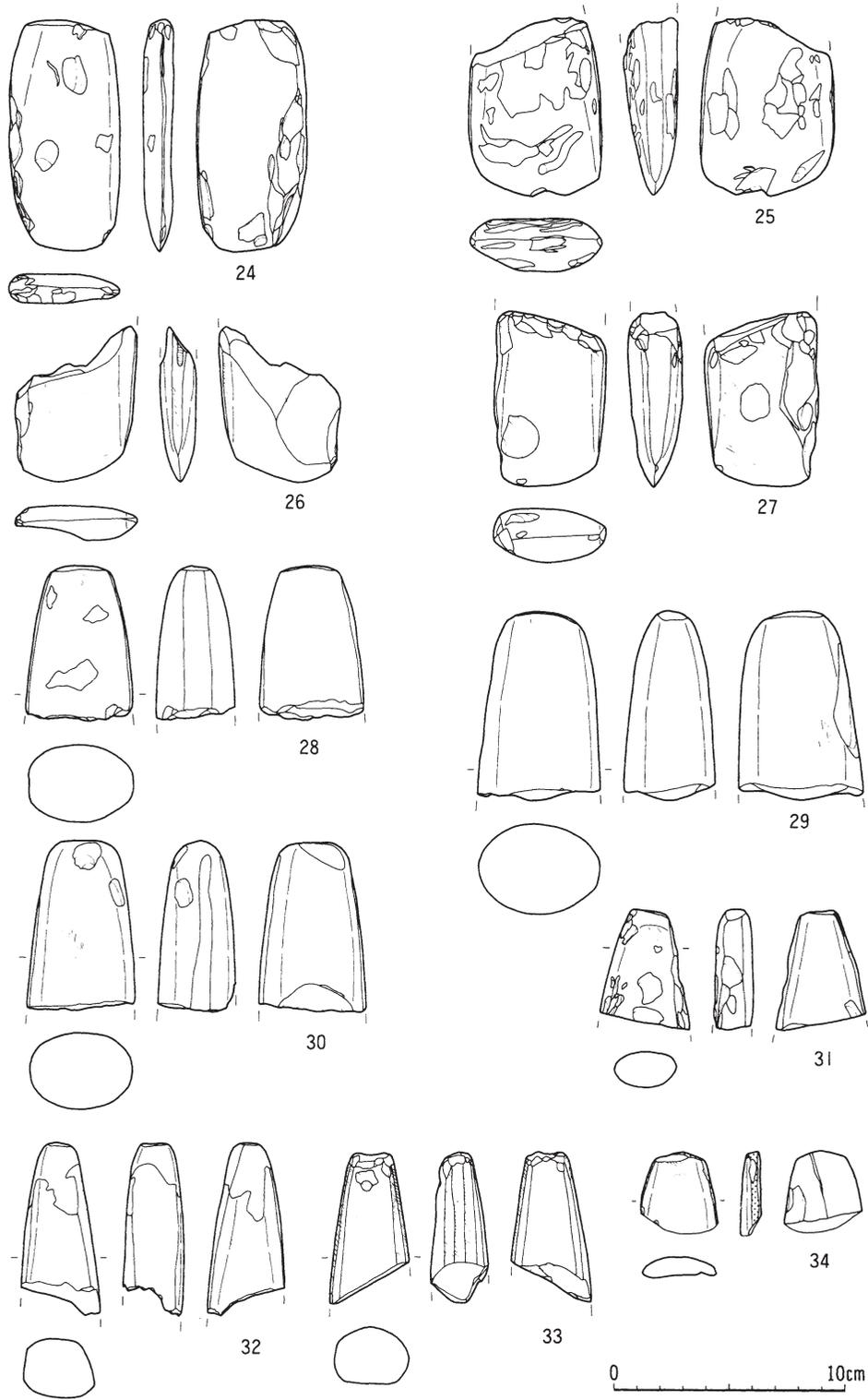
使用石材は、概ね硬質の石材を選定している。石質別では、閃緑岩が16点で31%、緑色細粒凝灰岩が15点で29%と2種類で3分の2を占める。このほかには、凝灰岩5点、安山岩・輝緑岩各4点、輝緑凝灰岩・粘板岩・頁岩各2点、砂岩1点が素材として使用されている。



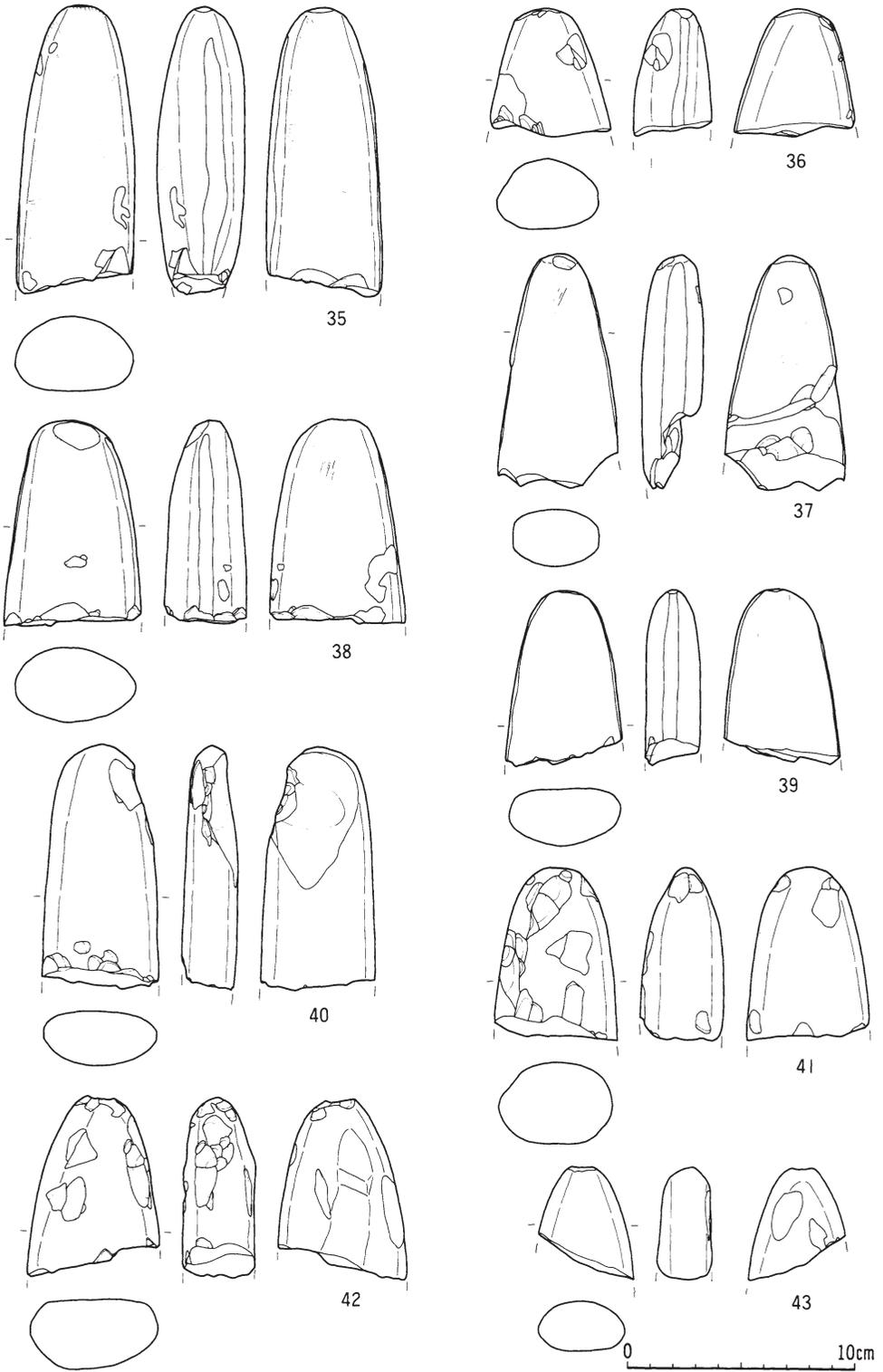
第163图 遺構外出土石器（石斧—1）



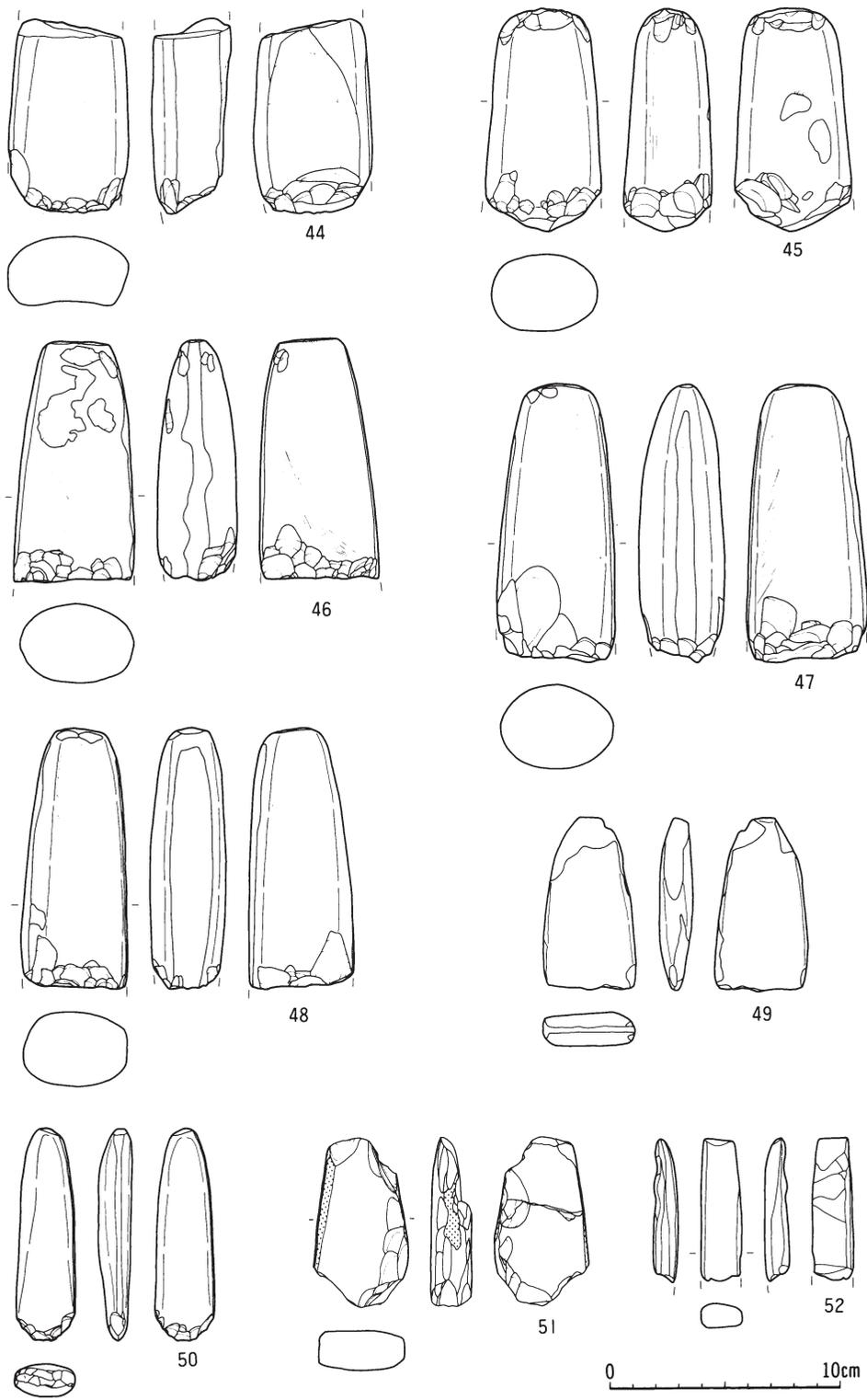
第164図 遺構外出土石器（石斧—2）



第165图 遺構外出土石器（石斧-3）



第166图 遺構外出土石器（石斧—4）



第167図 遺構外出土石器（石斧-5）

石斧

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第163図-1	H-67	III	186	55	39	633	閃緑岩	2001
-2	H-66	II	64.5	33.5	11	53.4	緑色細粒凝灰岩	2064
-3	D-15	II	67.5	33.5	12.5	24.7	凝灰岩	2005
-4	H-35	III	(97.0)	(56.0)	(30.0)	(305.1)	輝緑岩緑凝灰岩	2016
-5	H-67	III	140	50	31.5	360.2	閃緑岩	2002
-6	H-50	II	(79.5)	48.5	25.5	(156.5)	安山岩	2027
-7	F-33	II	44.0	45.5	27.0	52.9	輝緑岩	2052
-8	H-57	III	(80.0)	(37.5)	14.5	(76.7)	粘板岩	2058
-9	H-69	I	(44.0)	(61.0)	(24.5)	(90.4)	閃緑岩	2044
-10	H-51	II	(83.0)	(62.5)	(29.5)	(231.3)	頁岩	2042
第164図-11	H-42	II	128	44.5	13.5	128.8	緑色細粒凝灰岩	2081
-12	H-42	II	107	41	13	96.2	緑色細粒凝灰岩	2084
-13	H-43	II	129	25	12.5	67.2	緑色細粒凝灰岩	2082
-14	N-84	II	56	29	8.5	15.7	凝灰岩	2004
-15	H-48	III	(73.0)	(44.0)	(12.0)	(44.8)	頁岩	2051
-16	H-47	III	(46.0)	(47.0)	(11.5)	(43.8)	緑色細粒凝灰岩	2050
-17	E-16	II	(62.0)	(38.0)	(12.5)	(56.5)	輝緑岩緑凝灰岩	2040
-18	G-67	II	181	55	30	438.7	凝灰岩	2038
-19	H-48	II	121.5	66	38.5	422.8	安山岩	2003
-20	F-35	III	(57.0)	(21.0)	(9.0)	(12.2)	凝灰岩	2006
-21	W-103	III	(62.0)	(38.0)	(18.0)	(69.1)	緑色細粒凝灰岩	2047
-22	F-33	III	(30.0)	(54.0)	(24.0)	(41.8)	閃緑岩	2049
-23	I-36	I	(49.5)	(25.0)	(10.5)	(14.2)	凝灰岩	2059
第165図-24	L-81	II	112.5	48.0	13.0	114.2	粘板岩	2037
-25	G-68	II	(78.0)	(58.0)	(28.5)	(163.7)	緑色細粒凝灰岩	2041
-26	G-37	II	(64.0)	(53.0)	(15.5)	(59.4)	緑色細粒凝灰岩	2043
-27	L-49	II	(76.0)	(49.0)	(23.0)	(143.4)	緑色細粒凝灰岩	2039
-28	H-55	II	(67.5)	(46.5)	(34.5)	(168.1)	閃緑岩	2024
-29	M-82	II	(82.5)	(54.0)	(40.0)	(269.1)	閃緑岩	2015
-30	H-70	III	(74.0)	(47.0)	(34.0)	(195.9)	閃緑岩	2020
-31	H-46	III	(52.5)	(49.0)	(47.5)	(58.4)	緑色細粒凝灰岩	2030
-32	H-36	III	(75.0)	(34.0)	(16.5)	(98.4)	緑色細粒凝灰岩	2056
-33	H-48	I	(65.0)	(35.0)	(25.5)	(77.0)	緑色細粒凝灰岩	2057
-34	G-71	II	(35.5)	(33.5)	(9.0)	(15.0)	輝緑岩	2073
第166図-35	H-49	II	(129.0)	(51.0)	(38.0)	(400.0)	輝緑岩	2008
-36	H-44	III	(57.0)	(53.0)	(34.5)	(134.9)	閃緑岩	2023
-37	F-28	III	(104.0)	(52.5)	(27.0)	(173.9)	輝緑岩	2012
-38	F-34	I	(91.0)	(60.0)	(36.0)	(284.1)	砂岩	2013
-39	H-50	III	(78.0)	(51.5)	(24.5)	(156.8)	閃緑岩	2021
-40	H-66	I	(108.0)	(51.0)	(24.0)	(137.8)	安山岩	2019
-41	E-15	III	(76.0)	(54.0)	(37.0)	(211.2)	閃緑岩	2017
-42	H-44	III	(80.0)	(57.5)	(31.5)	(205.2)	閃緑岩	2018
-43	F-28	III	(50.0)	(42.5)	(24.0)	(71.2)	緑色細粒凝灰岩	2029
第167図-44	G-71	I	(86.0)	(52.0)	(34.0)	(255.6)	閃緑岩	2026
-45	G-33	III	(98.5)	(51.0)	(48.0)	(306.1)	閃緑岩	2024

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第167図-46	K-70	III	(105.5)	(52.5)	(34.5)	(311.8)	閃緑岩	2009
-47	H-50	II	(112.0)	(52.0)	(37.0)	(363.6)	閃緑岩	2011
-48	H-49	II	(114.0)	(46.0)	(33.0)	(315.0)	閃緑岩	2010
-49	I-72	III	(75.5)	(40.0)	(14.5)	(73.6)	緑色細粒凝灰岩	2083
-50	H-34	III	(92.0)	(25.5)	(14.5)	(51.2)	安山岩	2007
-51	K-68	III	(74.0)	(41.5)	(18.0)	(82.5)	緑色細粒凝灰岩	2075

### 石錘 (第168図)

8点出土した。完形品が4点、欠損品が4点である。

長軸上に抉りを作出しているものがほとんどであるが、5は短軸上に抉りを作出している。7は他とは異なり、長軸上に石冠に類似した帯状の潰しが作出されている。側縁などに擦痕などが認められないことから本類としたが、他に類似した石器の出土はない。

4は明瞭に本類とする根拠に欠けるが、長軸上の剥離痕と敲打による数カ所の抉り状のくぼみから本類とした。

使用石材は、安山岩3点、凝灰岩3点、他2点である。出土点数が少ないこともあるが、特に石材の使用傾向は認められない。

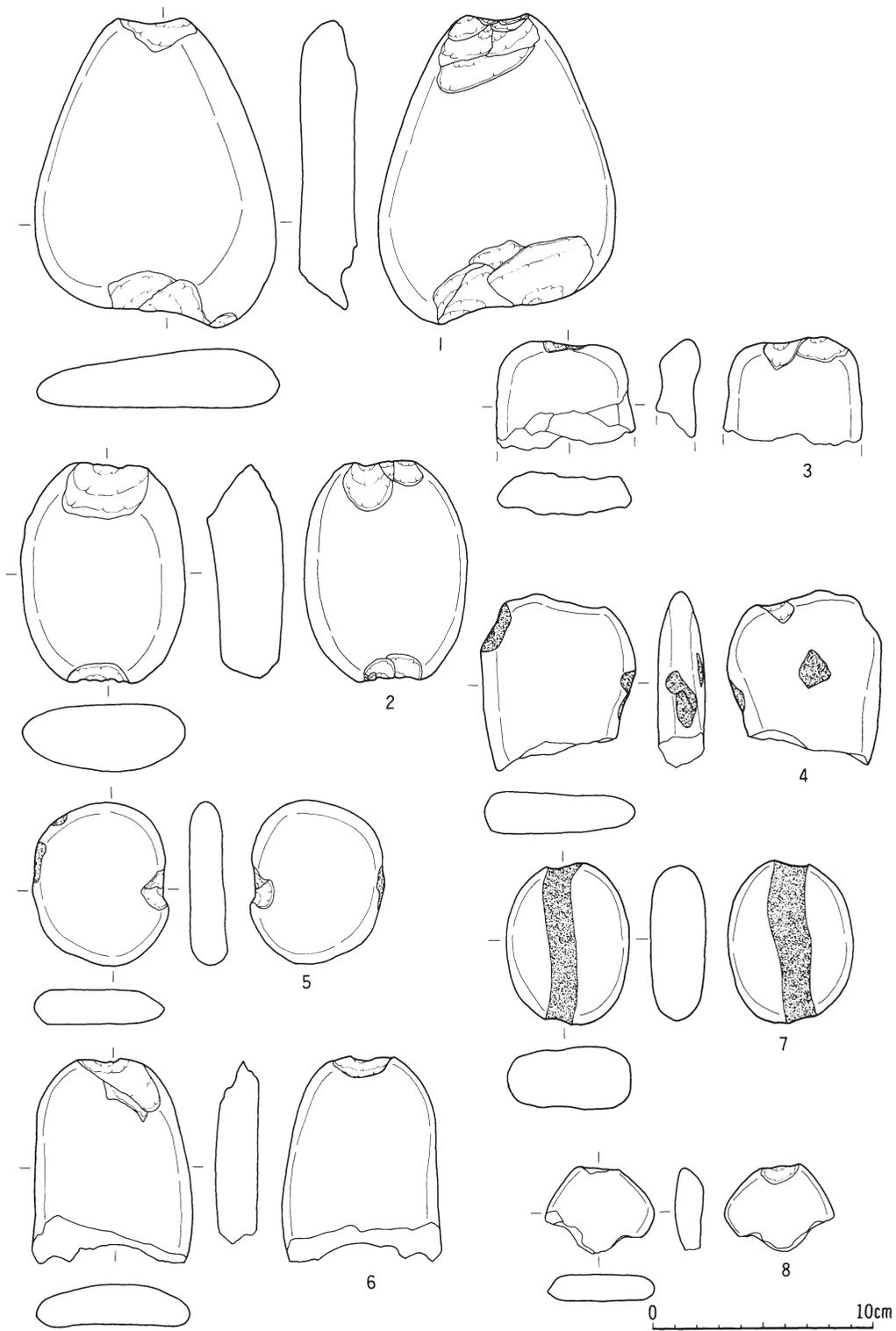
### 半円状扁平打製石器 (第169～171図)

11点出土した。スリ石として分類したものの中にも、本類と同様の器体加工を行っているものも存在するが、刃部に研磨面が構成されていないものを本類とした。

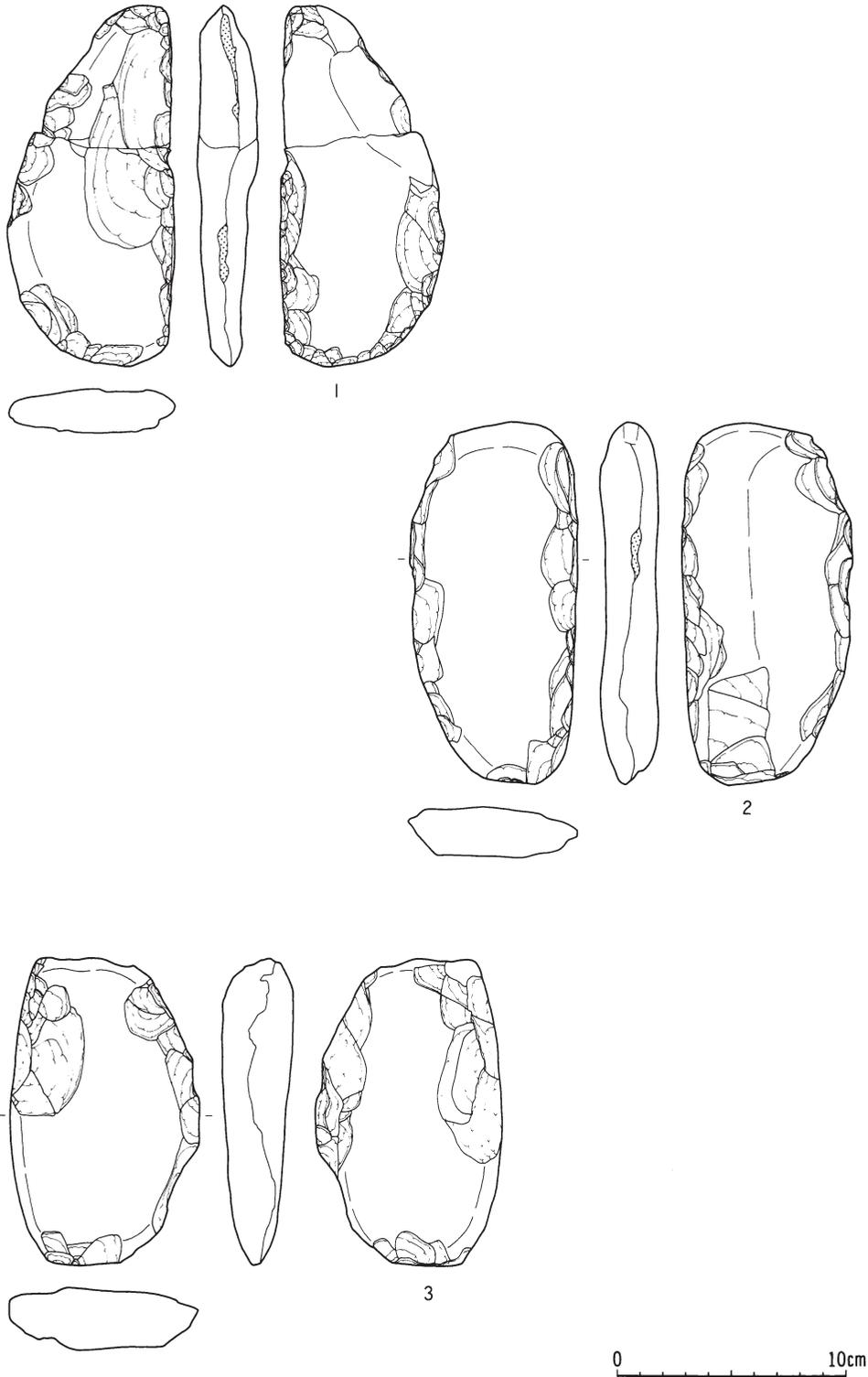
概ね、板状節理起源の石材を使用しており、鋭利で直線的な刃部を作出している。器体の加工は縁辺部に限られており、面の内部には至っていない。2・3・8は端部に抉り状の剥離が加えられている。

10は破片のため全体形は不明であるが、周縁を打ち欠いた後、器面全体に研磨を加えたものである。両側縁の形状などから本類としたが、類似した器種の抉入扁平磨製石器の可能性が有る。

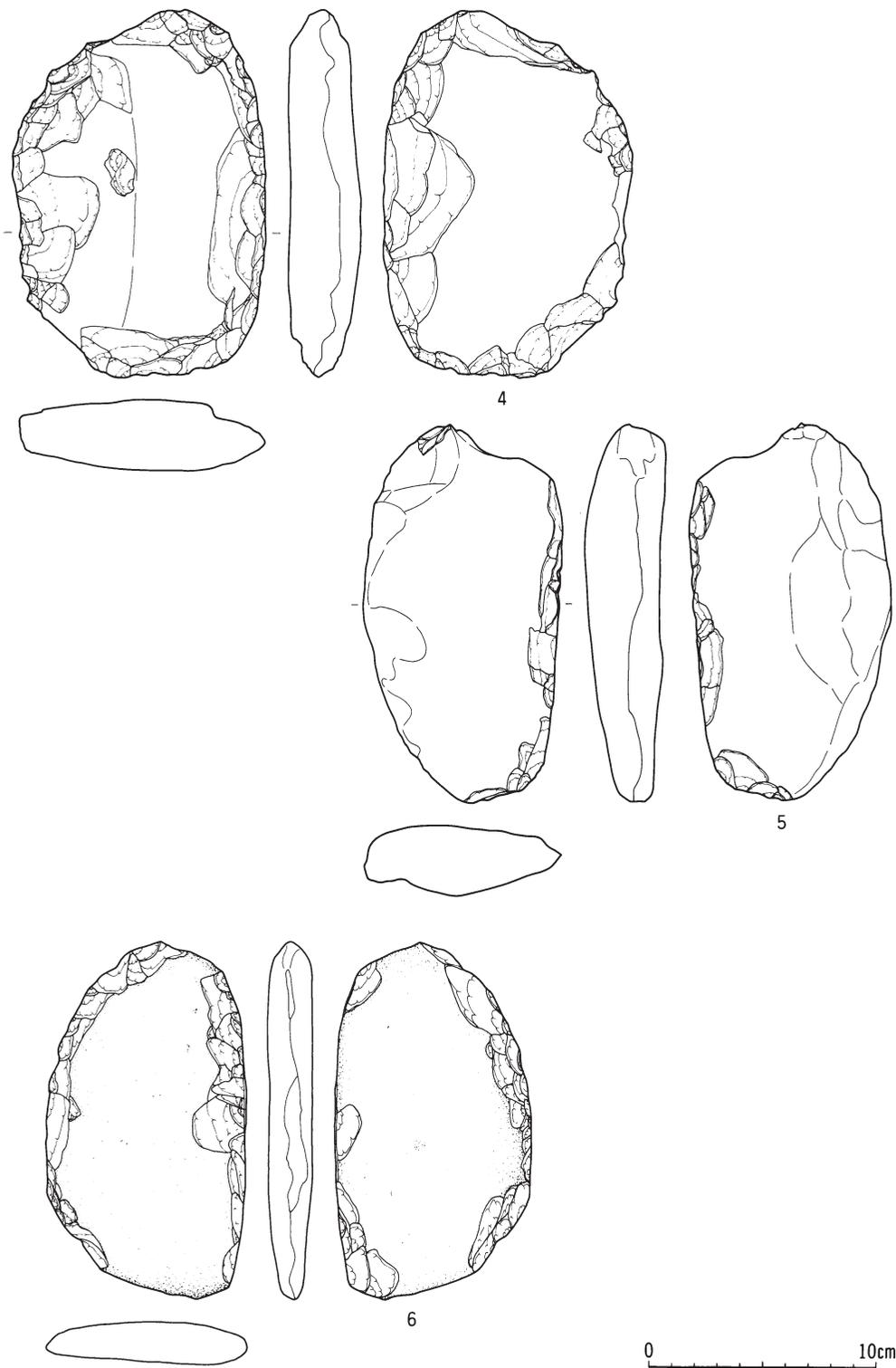
11は一方の側縁に片面から剥離を加えただけのもので、器体自体の加工は行っていない。擦切具の一種かも知れないが、刃部形状から本類とした。



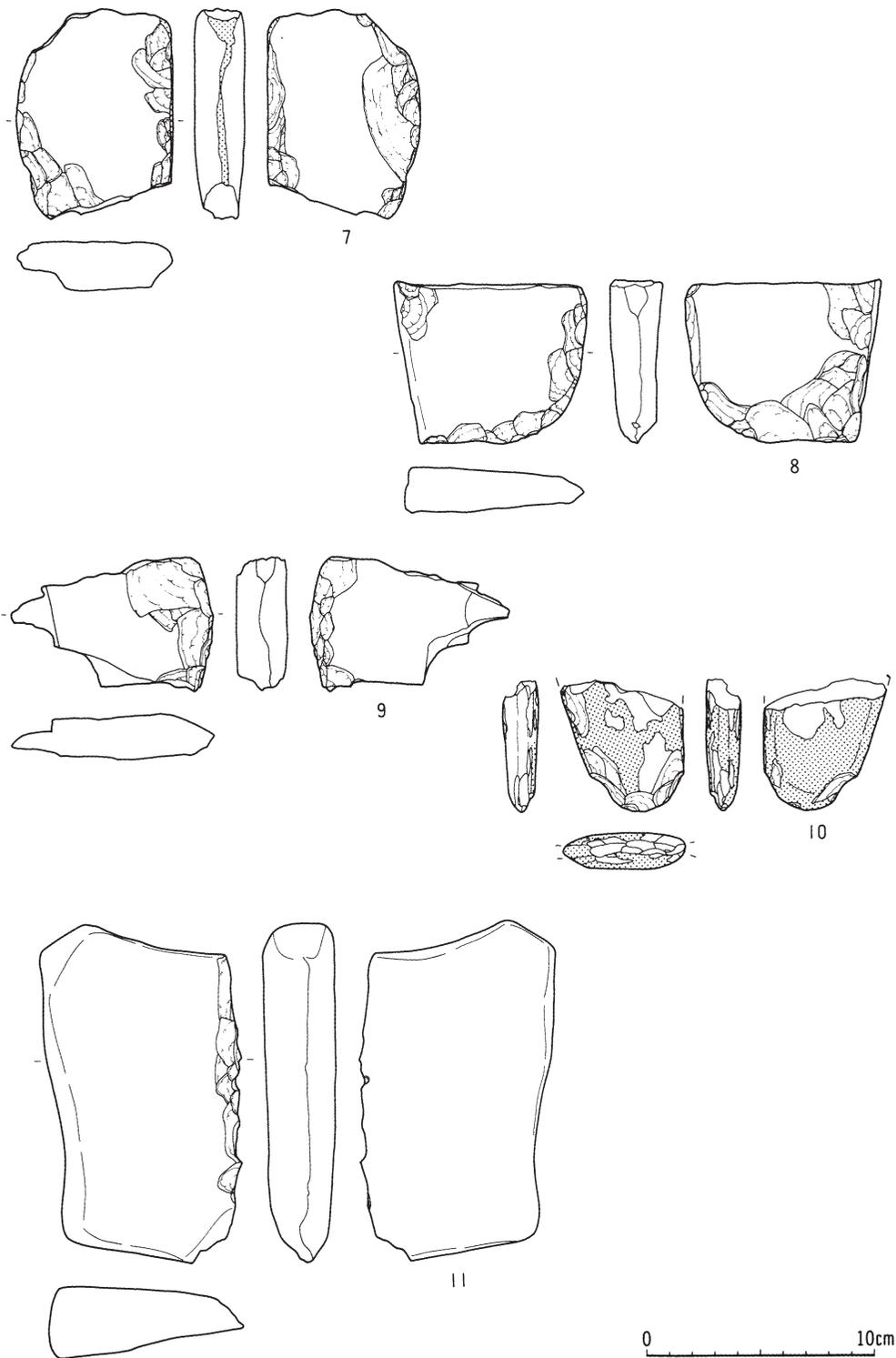
第168図 遺構外出土石器（石錘）



第169図 遺構外出土石器（半円状扁平打製石器－1）



第170図 遺構外出土石器（半円状扁平打製石器－2）



第171図 遺構外出土石器（半円状扁平打製石器－3）

## 石錘

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第168図-1	G-82	II	130	100	20.4	666.1	安山岩	4081
-2	I-37	III	98	72	26	308.4	泥岩	4082
-3	E-32	II	(71)	(56.5)	14	(105)	安山岩	4087
-4	G-40	II	(69.5)	(55)	(23.5)	(153.2)	砂岩	4086
-5	D-19	II	81	69.5	18.5	216	凝灰岩	4083
-6	G-43	II	(69.5)	(66)	19.5	(132.9)	安山岩	4085
-7	H-38	III	41	58.5	17.5	74.6	凝灰岩	4084
-8	G-40	III	(38)	(43.5)	(11)	(24.6)	凝灰岩	4088

## 半円状扁平打製石器

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第169図-1	F-35	II	144	89	24	377	砂岩	3008
-2	H-55	II	94	68	22	223.8	安山岩	3028
-3	H-63	III	58	54	15.5	65.5	花崗岩	3010
第170図-4	M-81	II	61	56	24	775.5	安山岩	3009
-5	O-82	II	59.5	89	22.5	146	安山岩	3018
-6	H-58	III	72.5	86.5	23	205.3	安山岩	3011
第171図-7	N-85	II	(97)	74	26.5	(323.1)	安山岩	3003
-8	H-58	III	(164.5)	(111.5)	(32)	(775.8)	安山岩	3007
-9	I-55	III	(134.5)	(83)	(31)	(439.4)	安山岩	3006
-10	H-63	III	(58)	(54)	(15.5)	(65.5)	頁岩	3004
-11	H-47	III	150	88	31.5	607.9	安山岩	5029

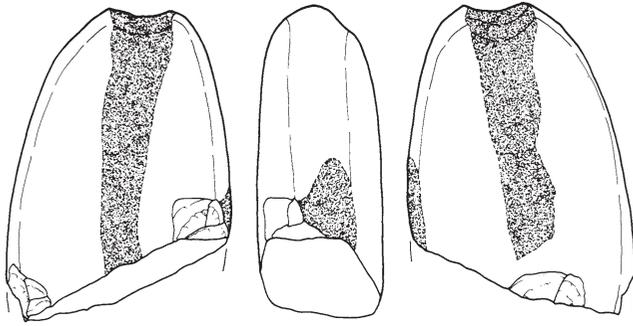
## 石冠 (第172・173図)

6点出土した。すべて欠損品で全体形を知り得る資料はない。

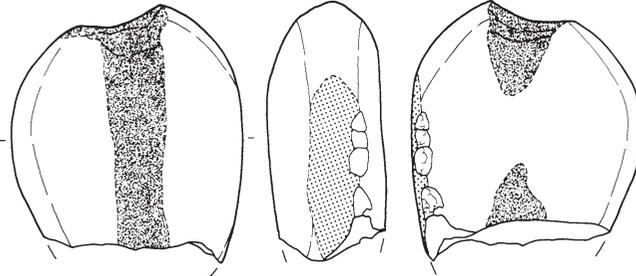
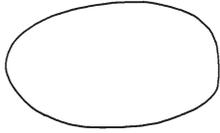
基本的には、敲打による潰しによって器体を一巡する把握部の作出と、幅広の研磨面の存在が本器種の特徴であるが、今回の出土品は、すべての個体で加工痕跡が異なる。

1は把握部が作出されているが、片側縁の研磨面はほとんど機能しておらず、敲打を伴ったざらついた面を構成している。2は研磨面が狭く、他のスリ石のスリ面と大差ないものである。また、面の側端に使用による小剥離がみられる。3は幅広の把握部と、広い研磨面を有し、頭部も全体的に潰しによって整形されている。頭部の整形痕は、把握部のものよりは軽便である。4は敲打による把握部は作出されておらず、ややざらつくスリ面によって構成されている。スリ面の側面及び研磨面の周囲に敲打痕が認められる。基本的な本器種の形態とは異なる点があるが本類とした。5・6は研磨面以外をほぼ全面にわたって加工しているものである。5は敲打とざらついたスリによって、6は敲打によって整形されている。研磨面の幅がやや狭いが、一般のスリ石とは異なり、器体の調整を行っていることから本類とした。

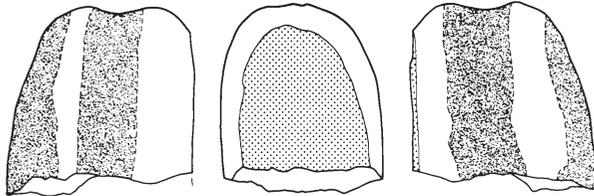
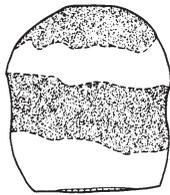
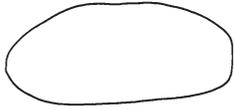
使用した石材は、すべて安山岩である。



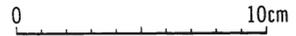
1



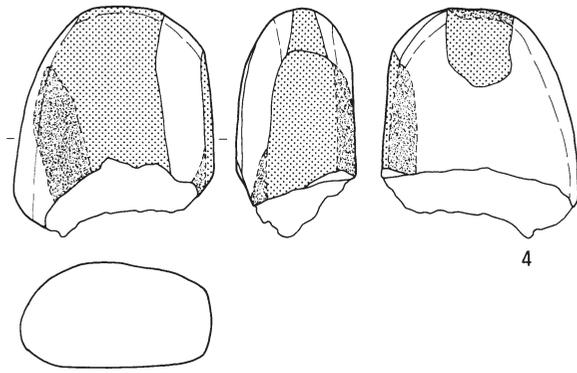
2



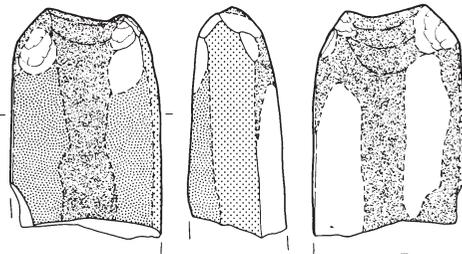
3



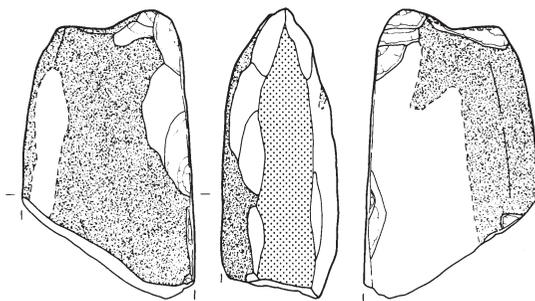
第172図 遺構外出土石器（石冠-1）



4



5



6

第173図 遺構外出土石器（石冠-2）

## 石冠

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第172図-1	H-54	II	(127)	91	(51)	(851.7)	安山岩	7091
- 2	H-66	III	(104)	92	47	(745.3)	安山岩	7092
- 3	K-68	II	(71)	(66)	(75.5)	(596.8)	安山岩	5048
第173図-4	I-70	III	(85)	(79)	(48)	(483.3)	安山岩	5047
- 5	I-65	II	(93)	61	39	(367.3)	安山岩	7093
- 6	G-65	III	(116)	69	48	(525.6)	安山岩	7094

### スリ石 (第174～184図)

約120点出土しており、このうち、明瞭なスリ面を観察できたものは85点である。他は、小規模な痕跡の残る破片資料である。

1～9は、三角柱状磨石の類である。使用面は主に1面で、もっとも鋭角な側縁を機能面としている。器体自体の整形はなされていないが、4は頭部に小規模な研磨と敲打の痕跡が認められる。また、5は頭部の片面に大きな剥離痕とその縁辺に敲打痕が認められる。ともに使用痕跡ではなく、把握のための調整によるものと考えられる。8はやや本類中では異質である。

10～15は1側縁を機能面とした長楕円形のスリ石で、器体の整形、特に機能面の調整を行っていない類である。

スリ面の側端には、使用による小剥離が認められるものが数点あり、スリ面が幅広の10などには、片減りが観察される。

16～17は機能面の側端に大きな剥離痕をもつもので、把握を容易にするためのものと考えられる。また、使用にともなう小剥離も数カ所で観察される。

18～25は1側縁を機能面として、この側端に剥離痕を有する類である。剥離は、24・25などにみられるように、使用による小剥離と意図的な剥離が混在している。使用する素材は厚みには無関係のようである。

27・28は剥離を伴う機能面のほかに、端部に抉り状の器体整形を行っているもので、29・30・33は端部から頭部にかけても整形されているものである。34～37はほぼ器体の周縁全体を整形の対象としているものである。これら中には、機能面の一部、または約半分ほど打ち欠いているものもみられる。

39は肉厚の礫を素材にし、半円状扁平打製石器様の器面の整形を行っている。刃部様の連続剥離を行っており、擦切具の可能性も考えられるが肉厚すぎる。また、打製石斧の可能性も考えられるが断定し得ない。刃部の擦痕と器面の敲打を伴うスリの痕跡から、一応本類とした。

40は小判形の礫の端部と側縁を機能面としており、41は自然礫の側端の3箇所に機能面をもつもので、湾曲面を意図して使用しているようである。石材は、磨製石斧に使用する緑色細粒

凝灰岩で、本類では珍しい例である。

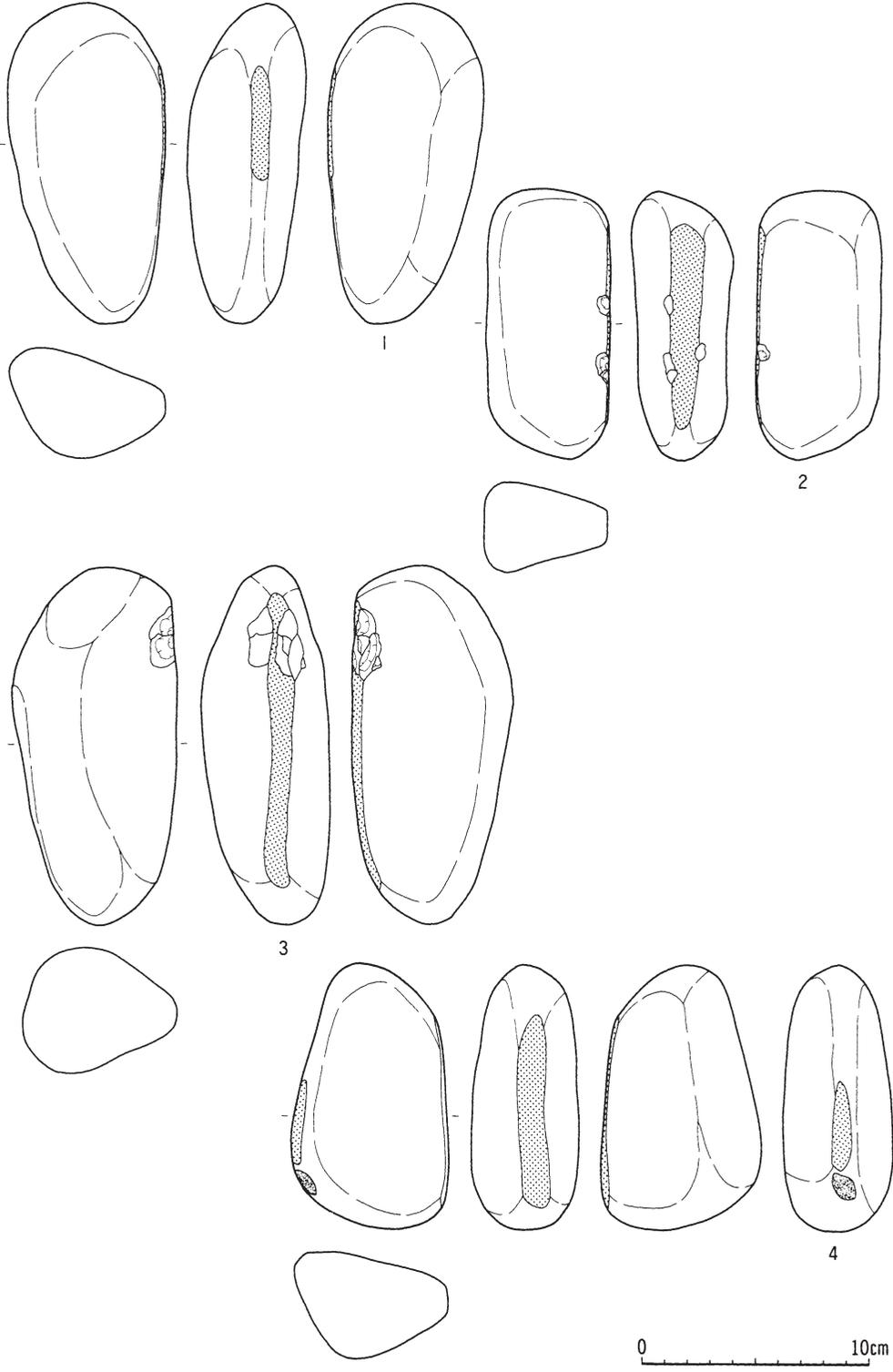
42は両側端に幅広の機能面を構成するもので、両面にも敲打による荒れた範囲が観察される。

43は両側縁に幅広のスリ面をもち、両面にくぼみを伴う敲打痕を有している。2種の機能を合わせ持った器体と考えられるが、スリの機能を優先し本類とした。

44は両端部を機能面とするもので、側縁の一部にも細長いスリ面が構成されている。

45・46は略円錐状の小礫の先端部を機能面としており、スリコギ的な用法を行ったものと考えられる。47も小礫を素材としているが、使用頻度は低く、側端などに小規模なスリ痕を持っているだけである。48は円礫の一部を機能面としている。

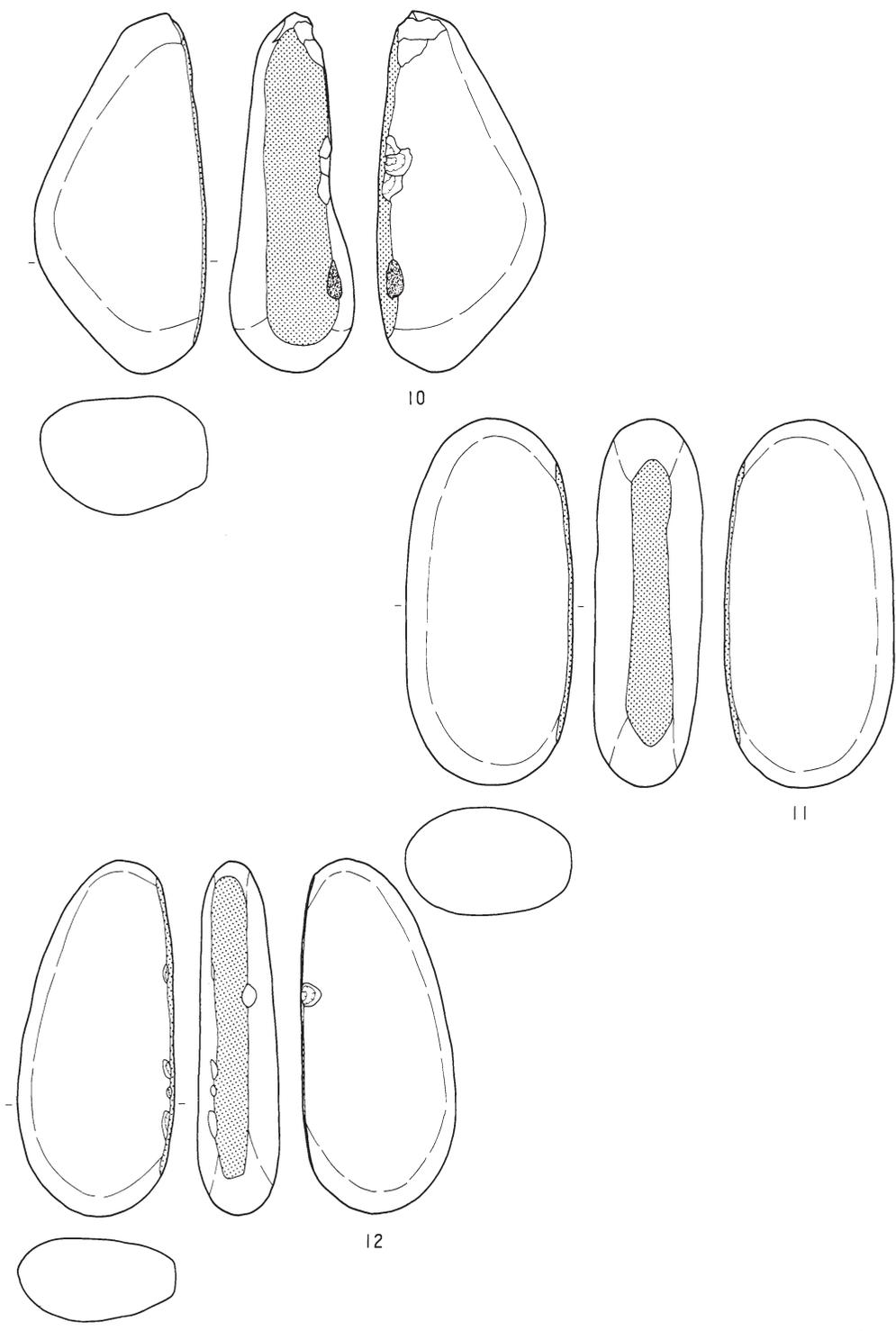
これらスリ石の石材は約8割が安山岩であり、概ね硬質の素材を選定しているが、多孔質の軟質なものも少量使用されている。



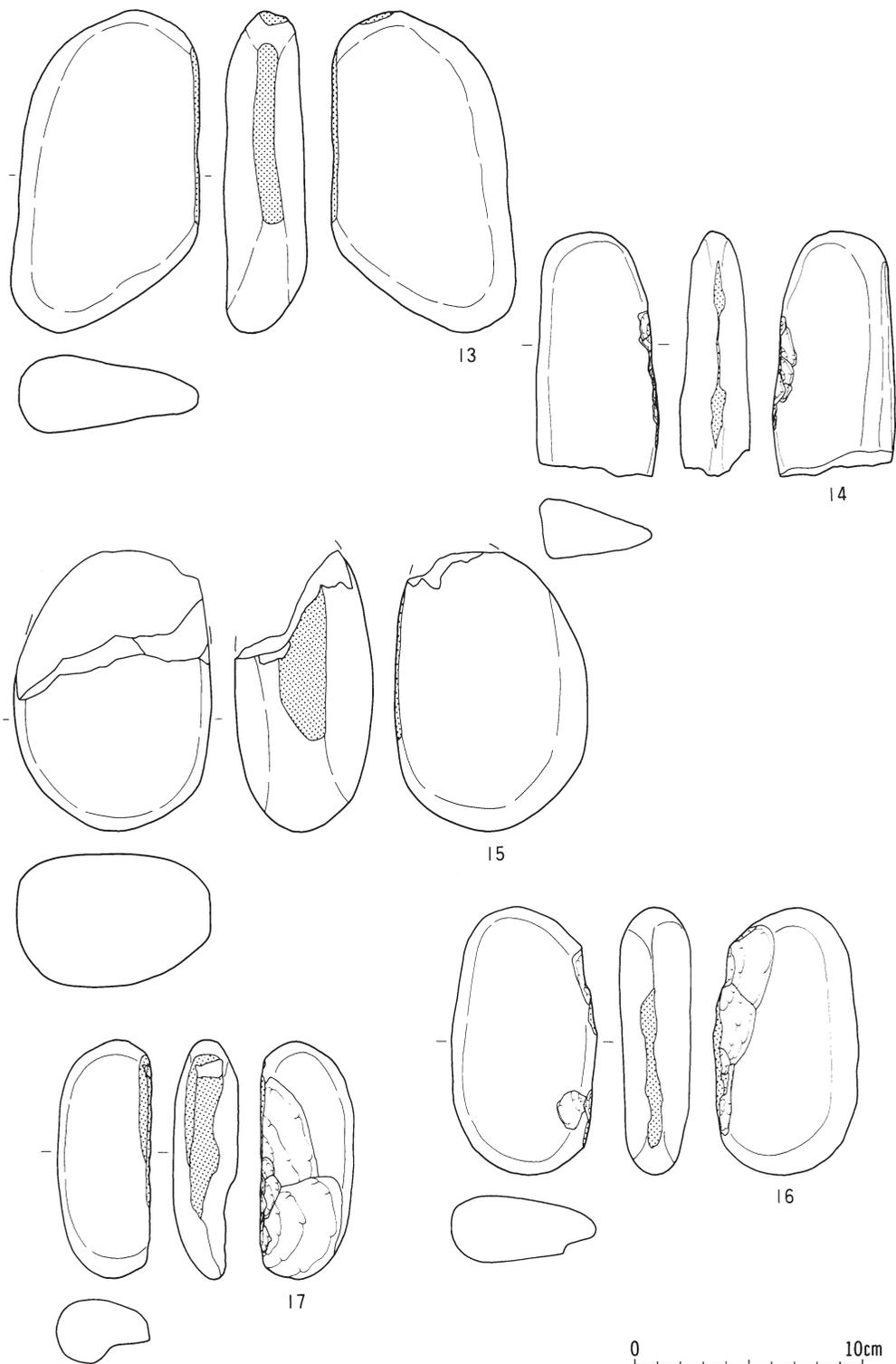
第174図 遺構外出土石器（スリ石-1）



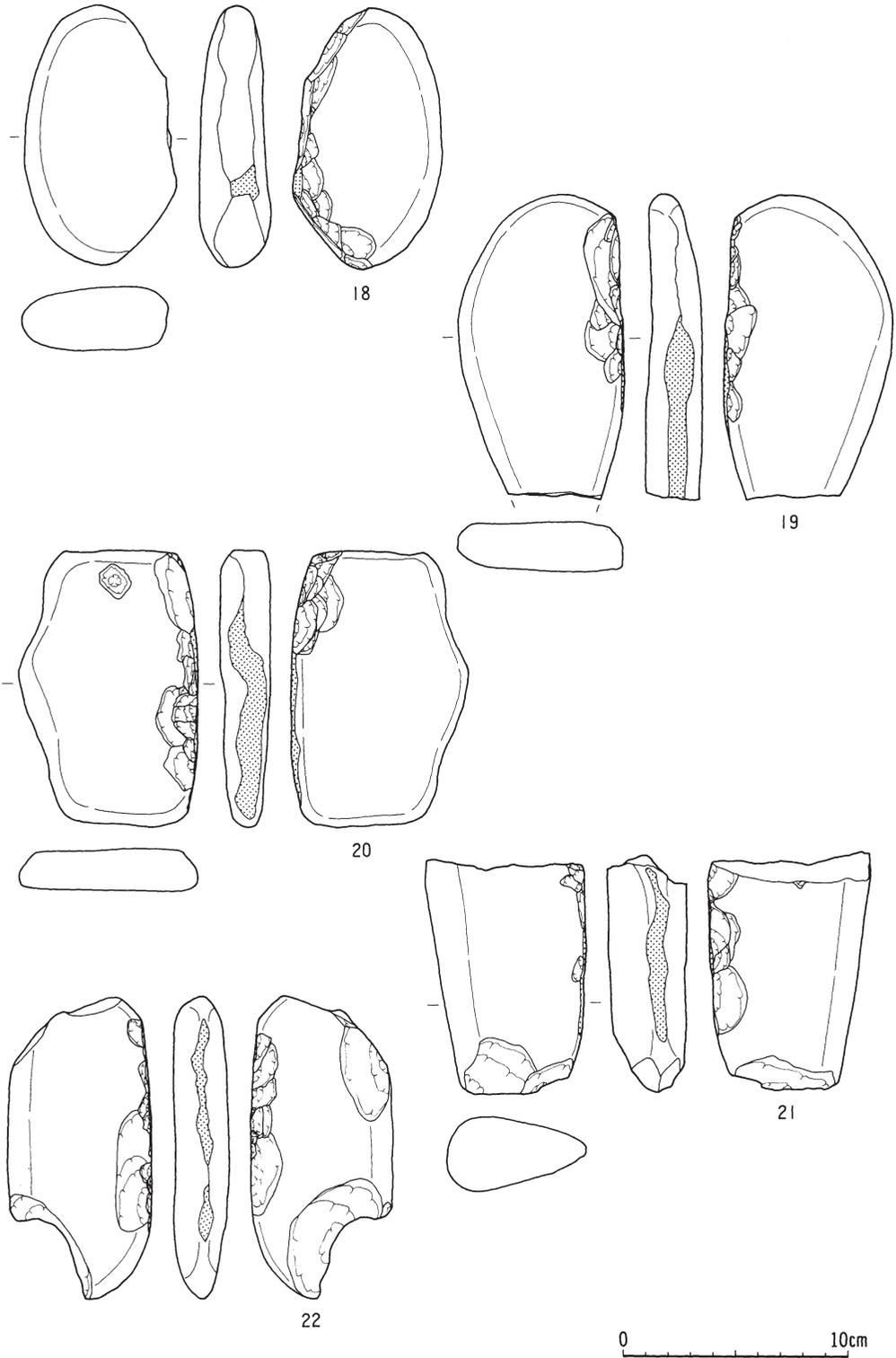
第175図 遺構外出土石器（スリ石-2）



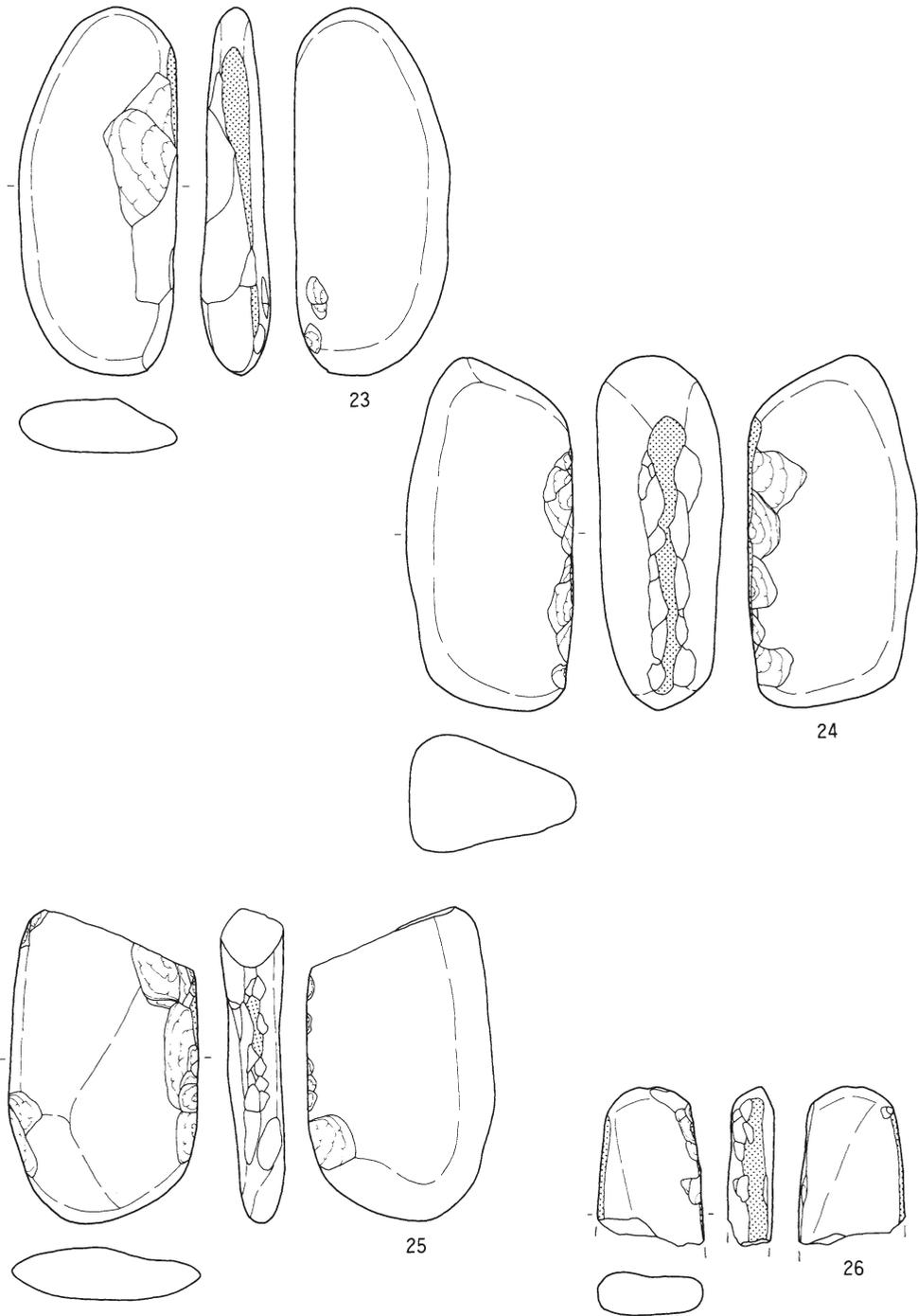
第176図 遺構外出土石器（スリ石-3）



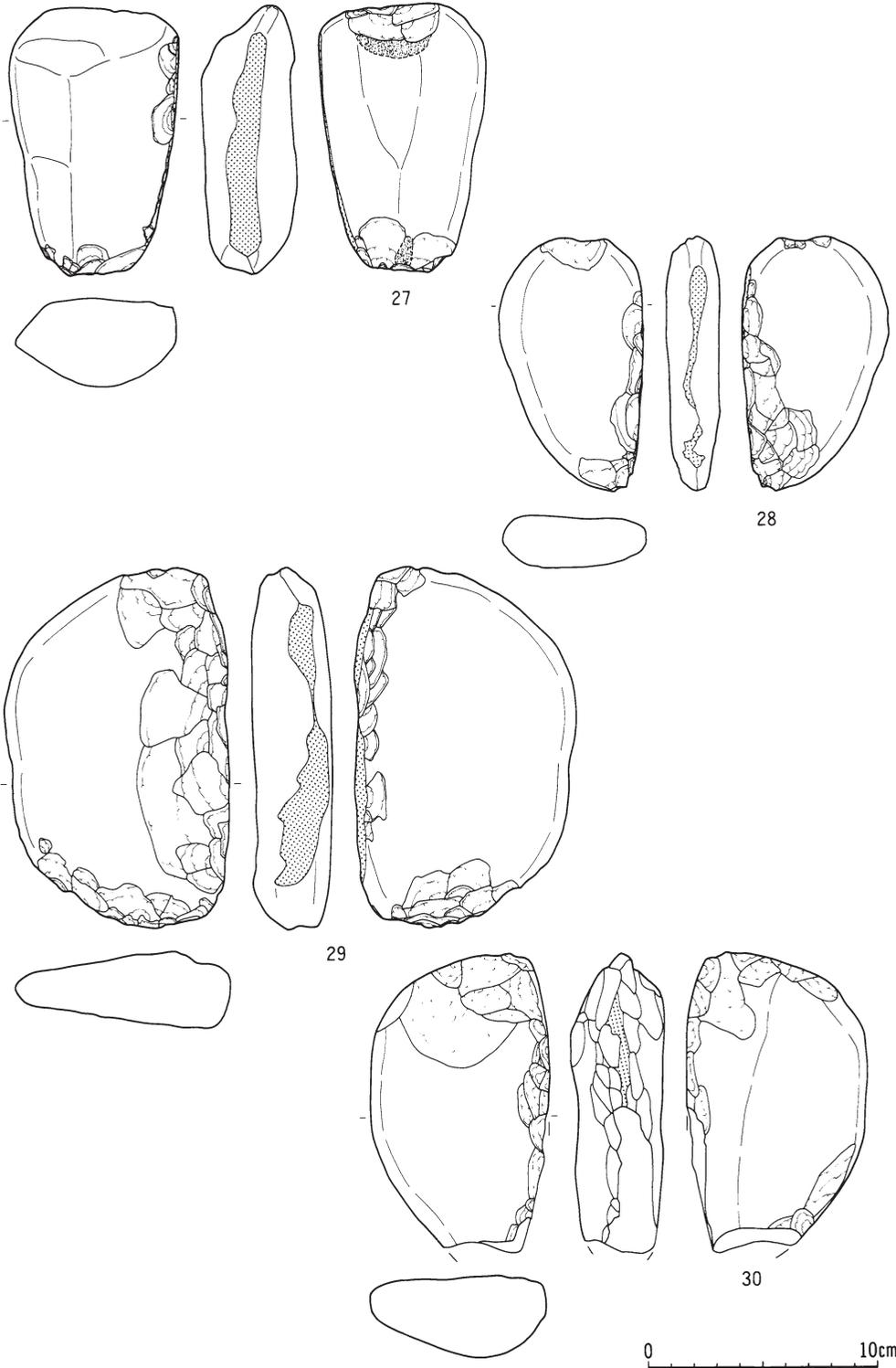
第177図 遺構外出土石器（スリ石-4）



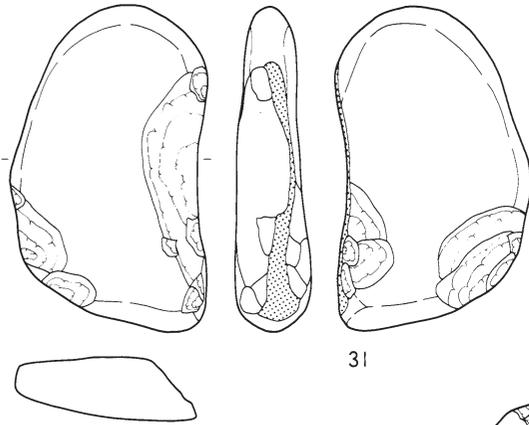
第178図 遺構外出土石器（スリ石-5）



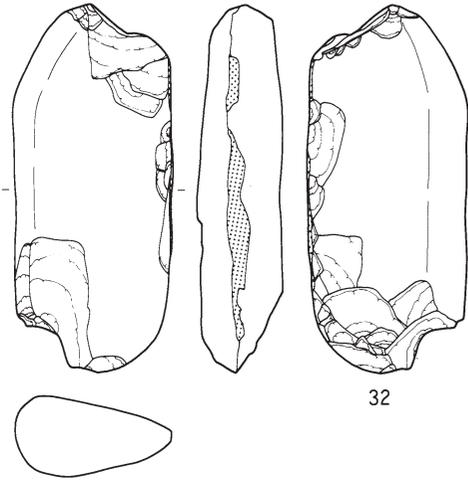
第179図 遺構外出土石器（スリ石-6）



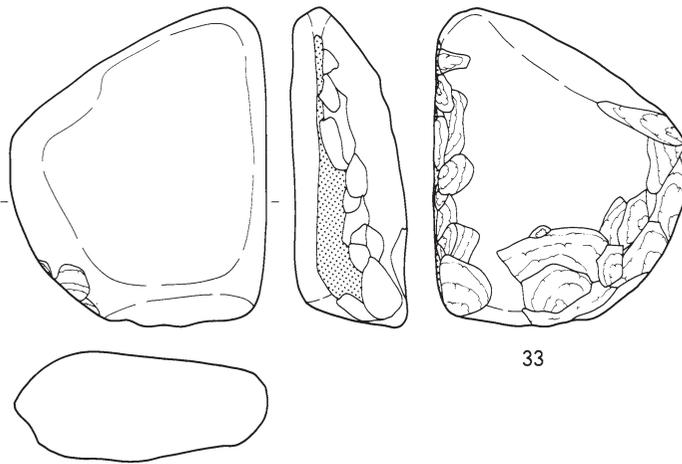
第180図 遺構外出土石器（スリ石-7）



31



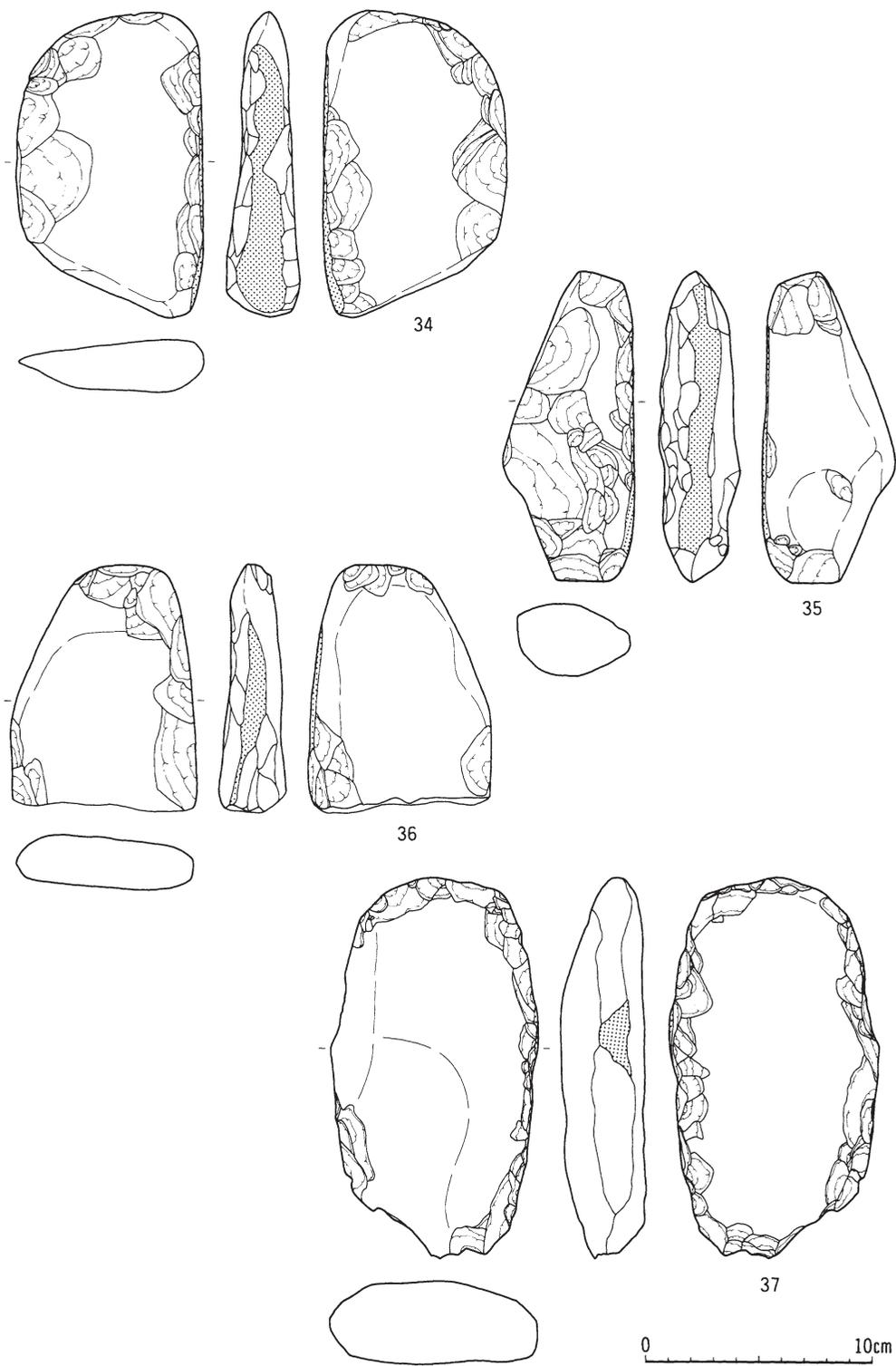
32



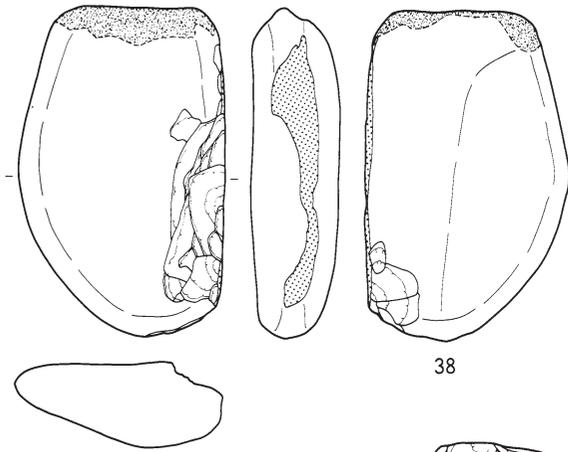
33

0 10cm

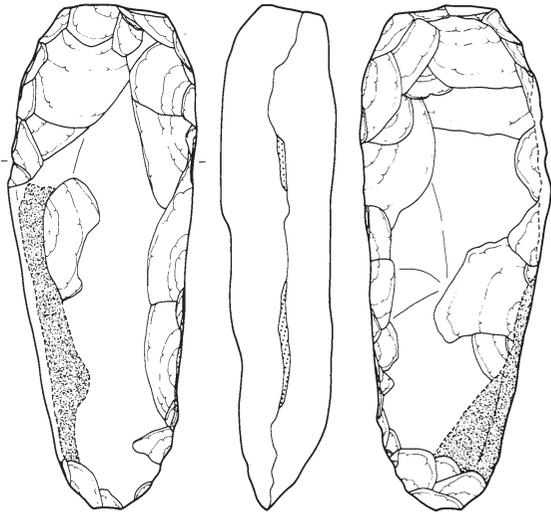
第181図 遺構外出土石器（スリ石-8）



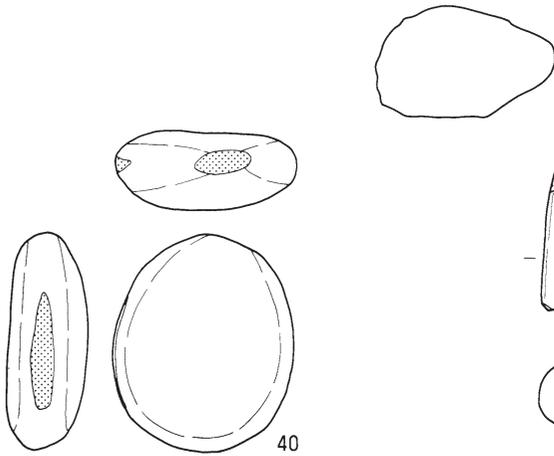
第182図 遺構外出土石器（スリ石-9）



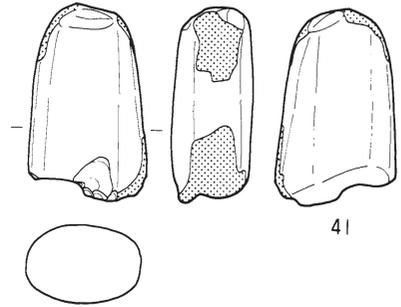
38



39



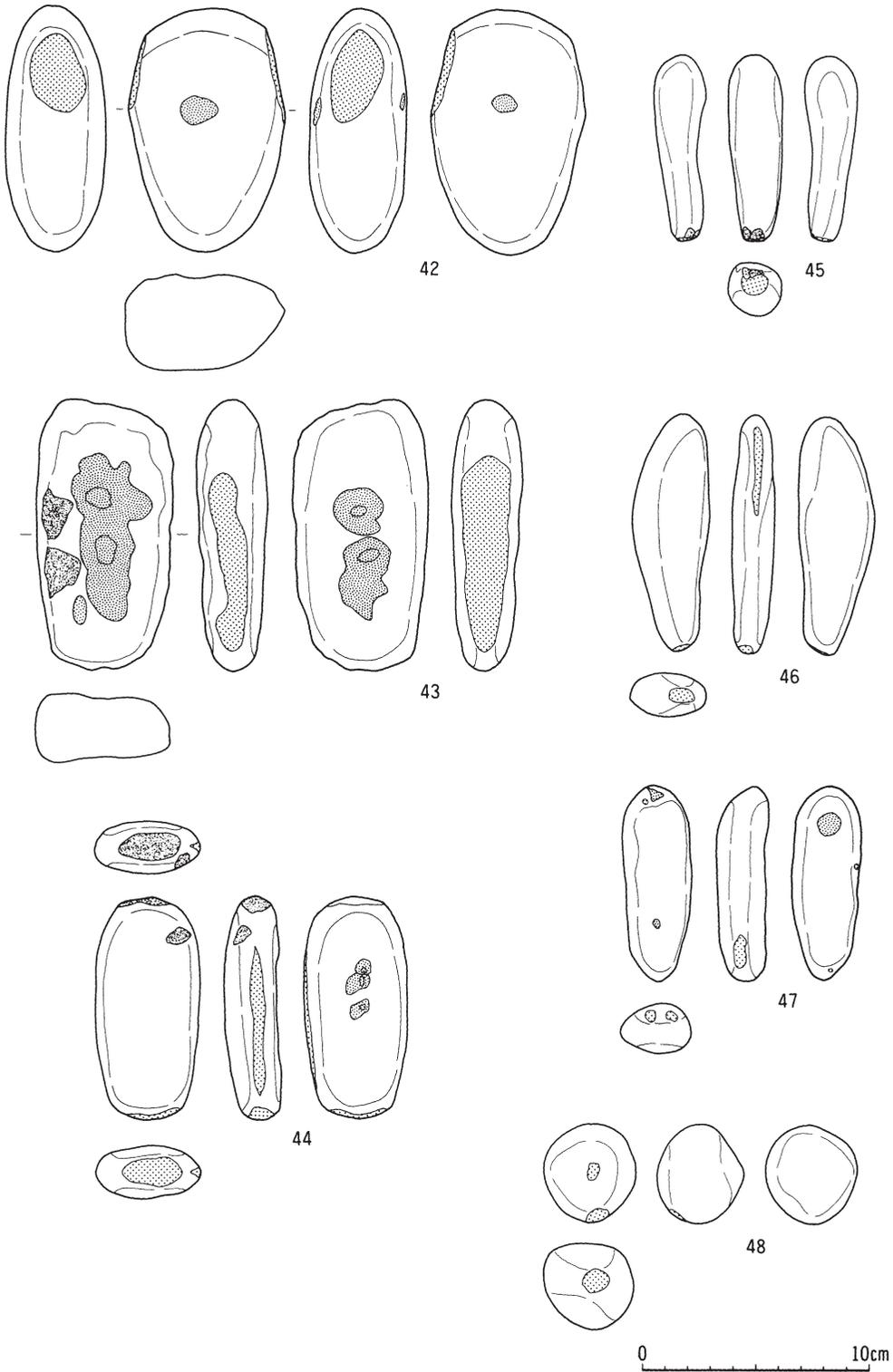
40



41

0 10cm

第183図 遺構外出土石器（スリ石-10）



第184図 遺構外出土石器（スリ石-11）

## スリ石

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第174図-1	N-85	II	143	79	52		安山岩	5010
-2	F-29	III	119	55	45		閃緑岩	5012
-3	N-84	II	158	72	57		安山岩	5011
-4	G-41	II	117	70	48		安山岩	5009
第175図-5	D-14	I	130	70	58		安山岩	5013
-6	F-8	II	94	54	50		安山岩	5001
-7	G-32	II	127	63	52		安山岩	5014
-8	G-40	III	119	51	68		安山岩	5005
-9	I-39	III	75	54	47		安山岩	5006
第176図-10	E-27	II	162	76	56		安山岩	5003
-11	H-56	III	164	75	48		安山岩	5007
-12	N-82	II	158	69	37		安山岩	5008
第177図-13	H-48	III	145	75	33.5	540.6	安山岩	5061
-14	F-35	II	102	51	27	228.5	安山岩	5039
-15	F-34	III	125	86	60	-	安山岩	5002
-16	G-33	III	114	59.5	30	268.4	安山岩	5035
-17	H-50	III	102	39	25	118.7	安山岩	5033
第178図-18	H-66	II	114	64	28.5	356.1	安山岩	5034
-19	I-49	II	134	72	21	371.5	安山岩	5038
-20	H-50	III	121	76	16.5	353.7	安山岩	5032
-21	I-48	III	99	66	32	383	閃緑岩	5045
-22	H-47	III	131	63	21	307.6	安山岩	5046
第179図-23	H-56	III	156	66	29	435.2	安山岩	5024
-24	F-22	III	151	71	54		安山岩	5004
-25	H-48	II	133	80	26	328.5	安山岩	5040
-26	H-41	III	67.5	45	19.5		安山岩	5085
第180図-27	H-43	III	119.5	74.5	41.5	498.2	安山岩	5017
-28	H-32	II	112	64	23.5	225	安山岩	5023
-29	E-13	III	159	98.5	35	791	安山岩	5022
-30	H-45	II	132	79	41	574.6	安山岩	5021
第181図-31	F-18	II	132	78	31	394.9	安山岩	5026
-32	N-85	II	148	64	34	446.9	安山岩	5015
-33	G-39	III	128	102	47	858.1	安山岩	5025
第182図-34	G-91	II	137	82	33	479.7	安山岩	5027
-35	H-50	III	138	59	37	343.4	安山岩	5019
-36	G-39	III	110	82	30	358	安山岩	5037
-37	H-57	III	168.5	93	37	820.7	安山岩	5020
第183図-38	E-17	III	133.5	81.5	35	570.6	安山岩	5016
-39	G-37	III	202.5	75.5	45.5	897.1	安山岩	5030
-40	F-36	III	84	70.5	29.5	257.5	安山岩	5057
-41	H-46	III	79	48	35	223	緑色細粒凝灰岩	2025
第184図-42	G-44	II	110	69	43.5	517.3	閃緑岩	5049
-43	H-35	III	97	45	21	159.7	安山岩	5074
-44	G-41	III	98	46	23	287	砂岩	5077
-45	G-45	II	80.5	23	20	46.3	凝灰岩	5073

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第184図-46	D-22	III	102	32.5	17	90	安山岩	5072
-47	I-70	III	83	27.5	19	86.7	安山岩	5075
-48	H-54	III	42	44	37	84.6	安山岩	5071

### 凹み石 (第185～194図)

敲磨器類のうち、器面に明瞭な凹みを持つものをこの類とした。凹みの深さが器面より約2mm未満のものは敲打具とした。

また、スリなどとの複合痕跡をもつものでは、使用頻度にかかる主たる機能の痕跡の度合いによって本類または他の類とした。

本類は、282点と礫素材の石器の中で最も出土点数の多い器種である。

ただし、本類の中でも、敲打する側と、台として敲打される側のものとが共存していると考えられる。両者の間にはたとえば堅果類などの対象物があり、直接、敲打具（叩き石）で台を敲打するとは考えられないが、この両者を明瞭に分別することは不可能である。このため、本類の細分は機能面の数によった。ただ、点数が多いことから、その種別の典型的なものを抽出して図化している。

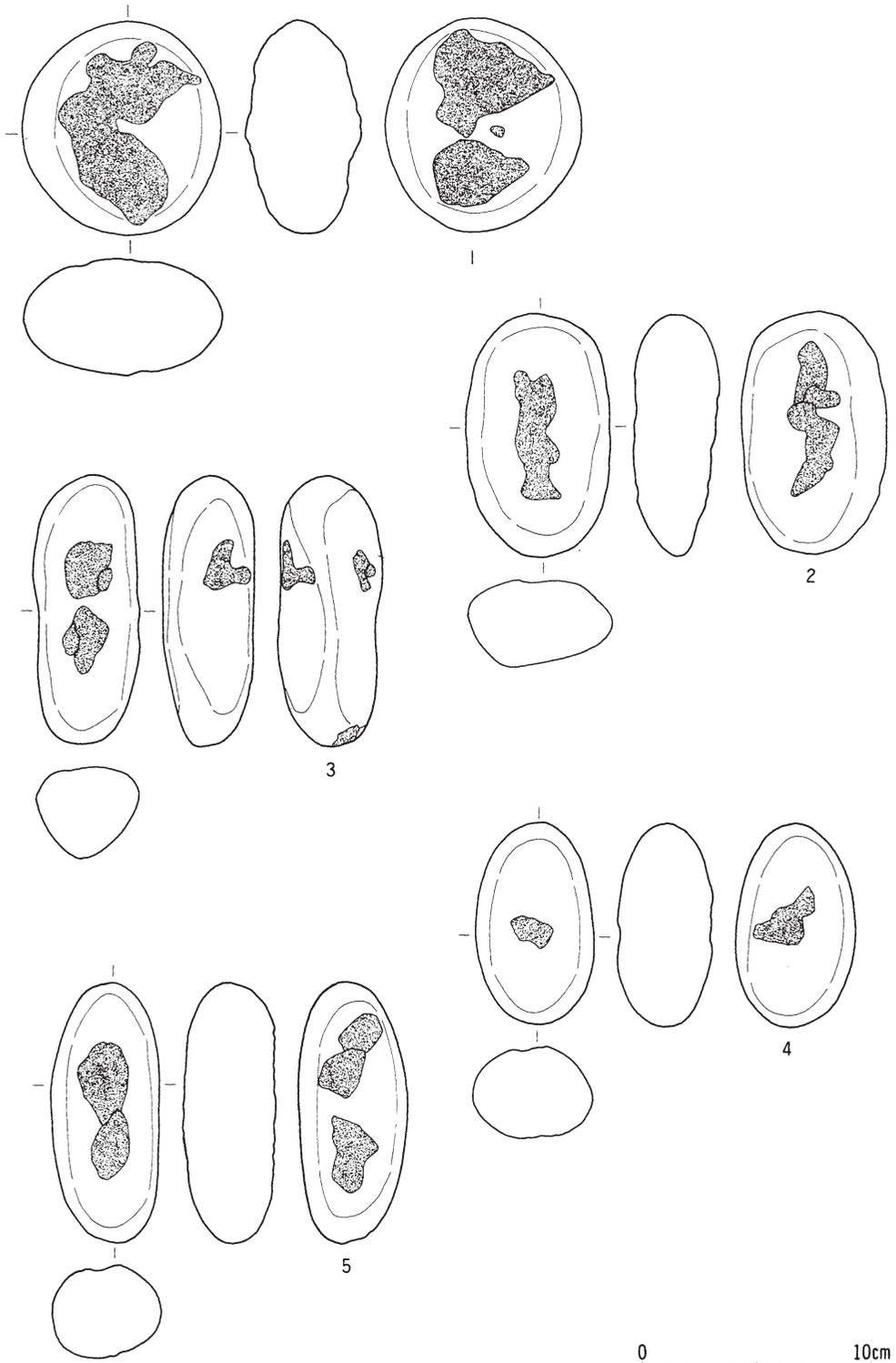
使用面（機能面）は2面使用のものが多く、1面使用のものがこれに続く。

各種の中でも、素材の形状は多岐にわたる。不整形としたものが多いが、概ね、小判形や、やや肉厚な卵形が基本形となり、長楕円形や棒状のものがこれに続く。卵形のものでは片面が平坦なものが多く、また、後続の両者はともに一方が幅広か肉厚な傾向がみられる。

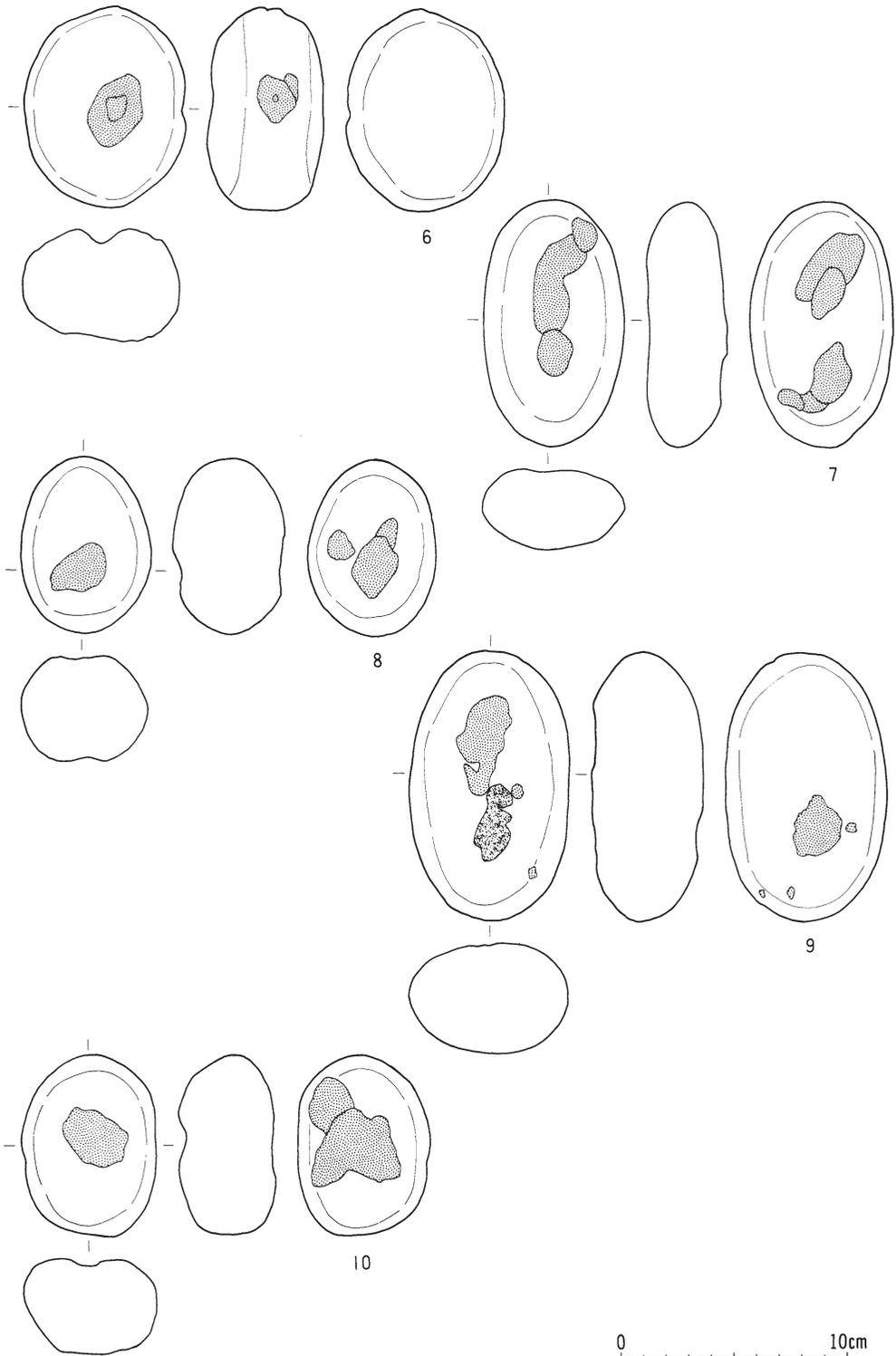
肉厚で、中型以上のものは、前述の台的使用によるものと考えられ、把握しての敲打具としては、重量及び大きさから手に余るものである。

不整形の石材では、1面使用のものには10～14cmほどのものが多く使われており、2面使用のものでは偏平なものが多い。3面使用のものには断面が三角形のものが多く使用されている。4面使用のものでは、不整形のものは少なく、卵形が多い傾向がみられる。

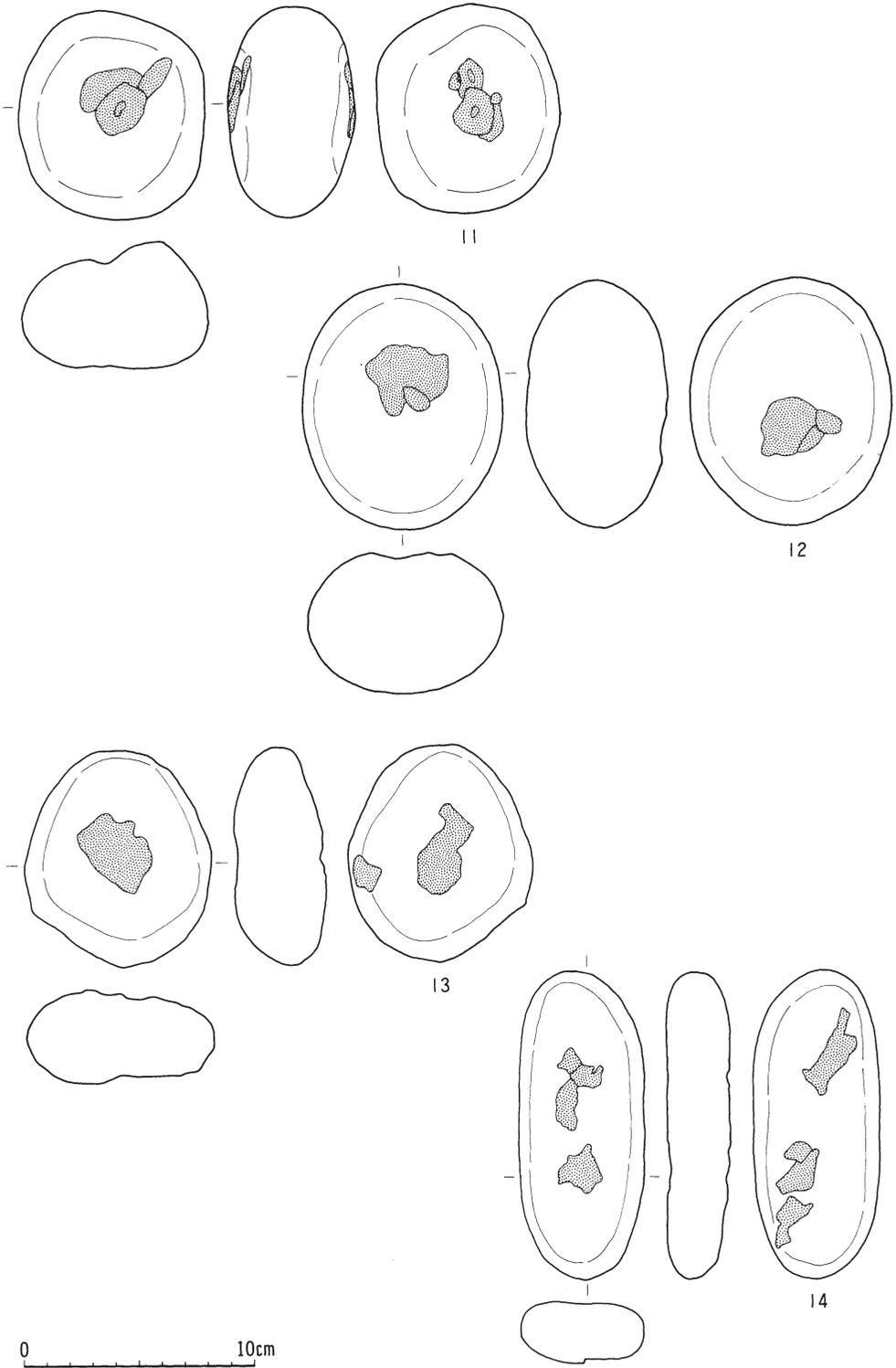
使用石材の石質では、安山岩・砂岩が主体となっており、本類全体の比率では安山岩47%・砂岩33%である。これに凝灰岩の17%が続く。



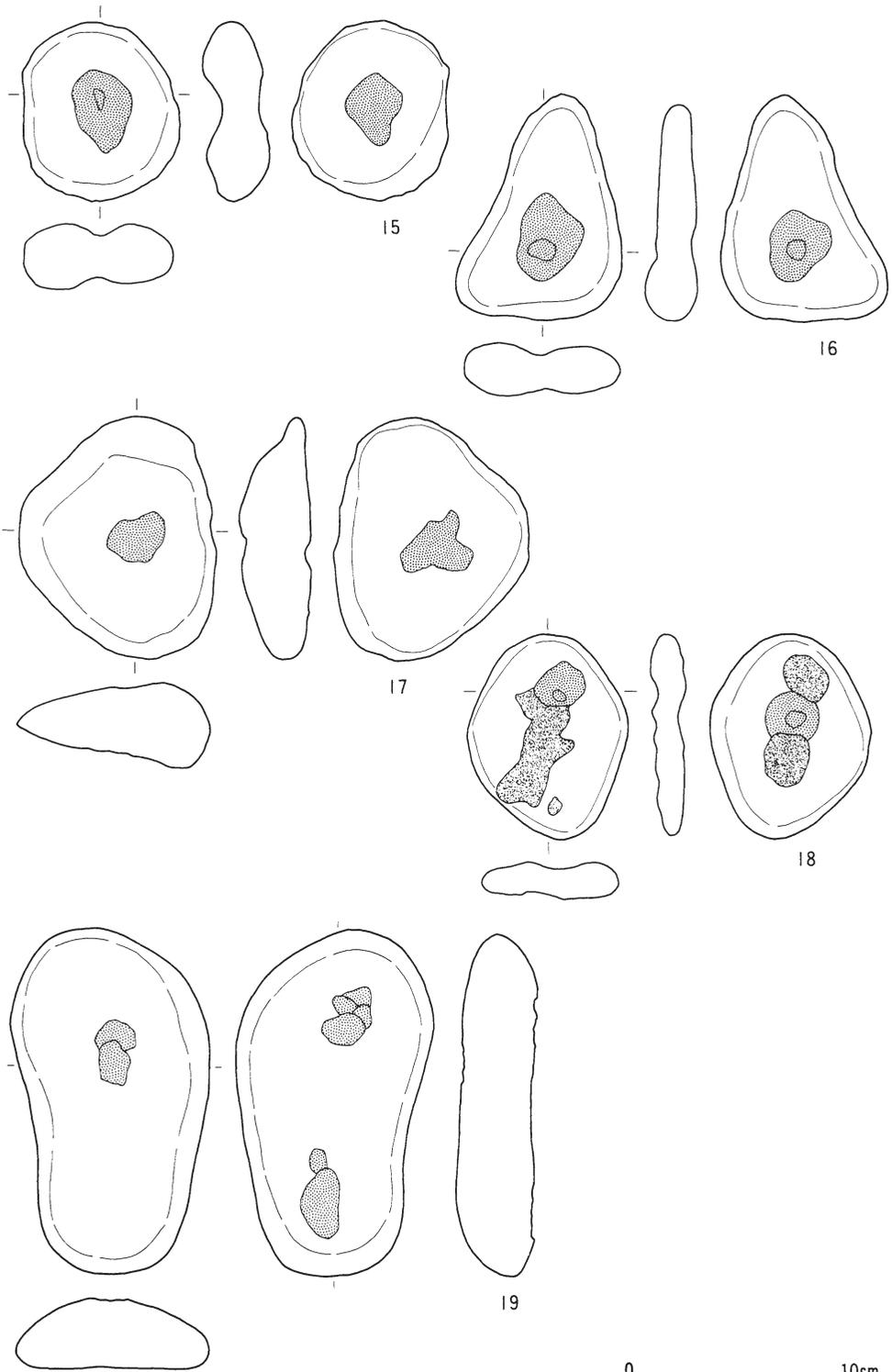
第185図 遺構外出土石器（凹石-1）



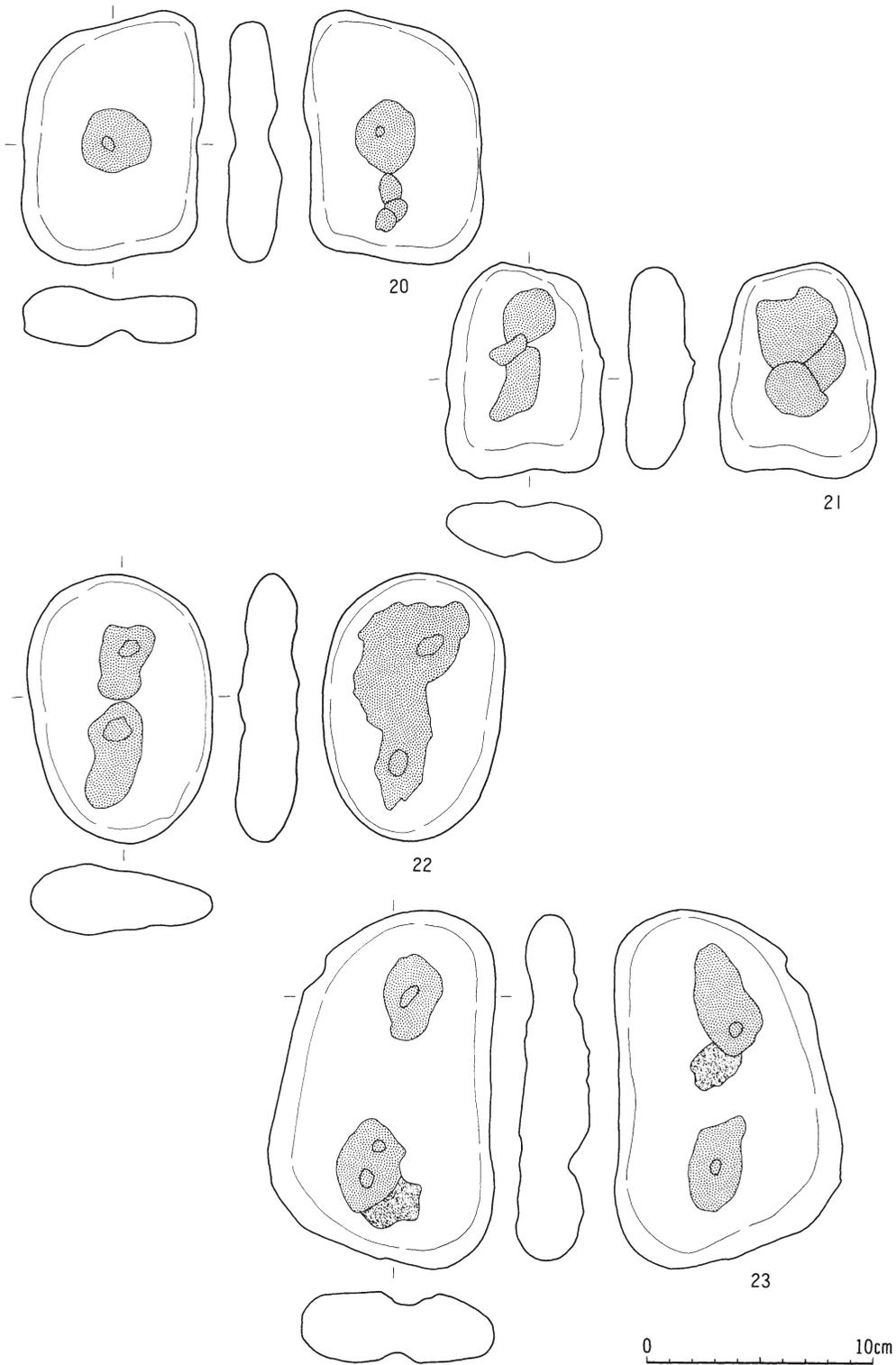
第186図 遺構外出土石器（凹石-2）



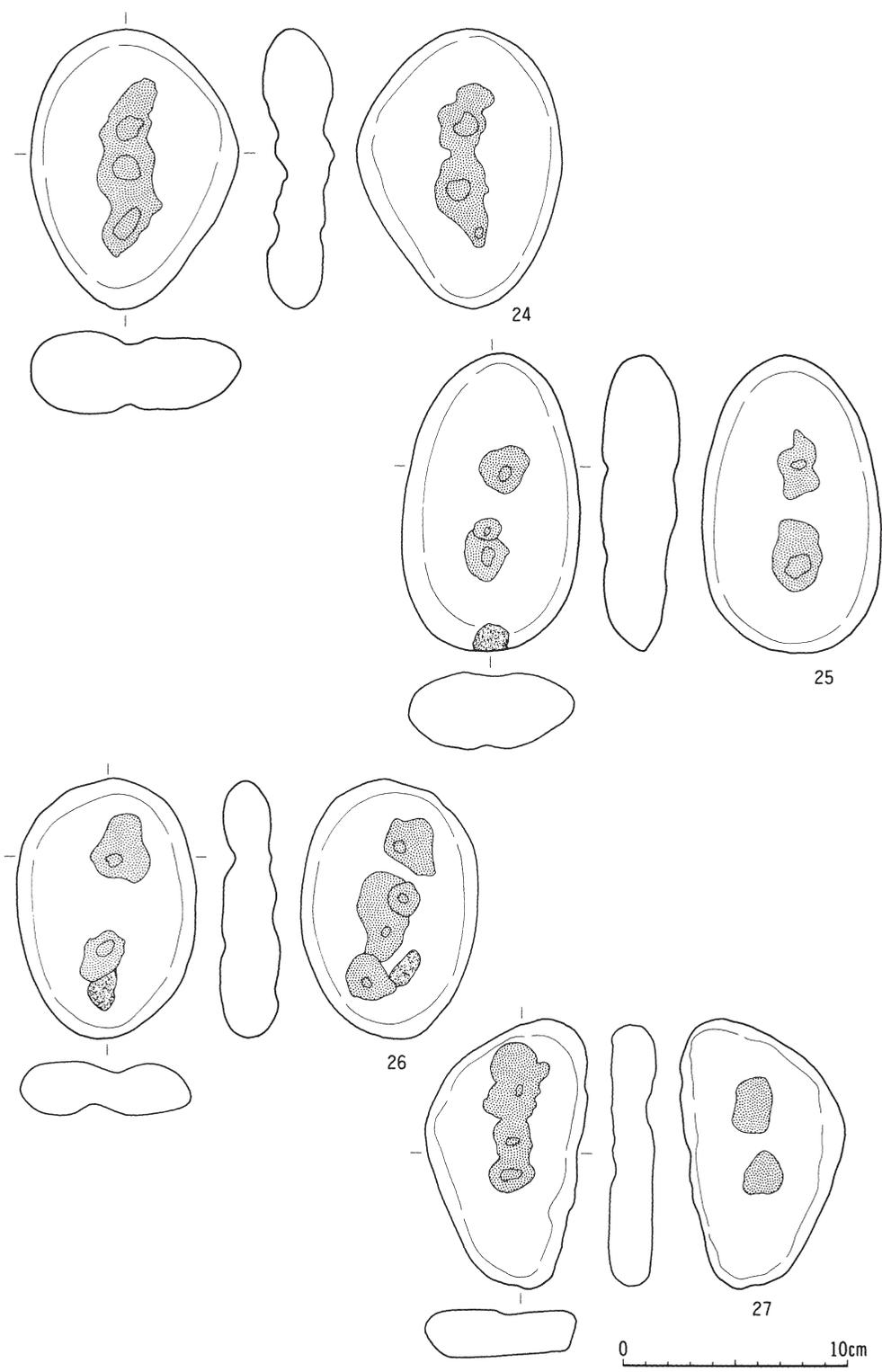
第187図 遺構外出土石器（凹石-3）



第188図 遺構外出土石器（凹石-4）



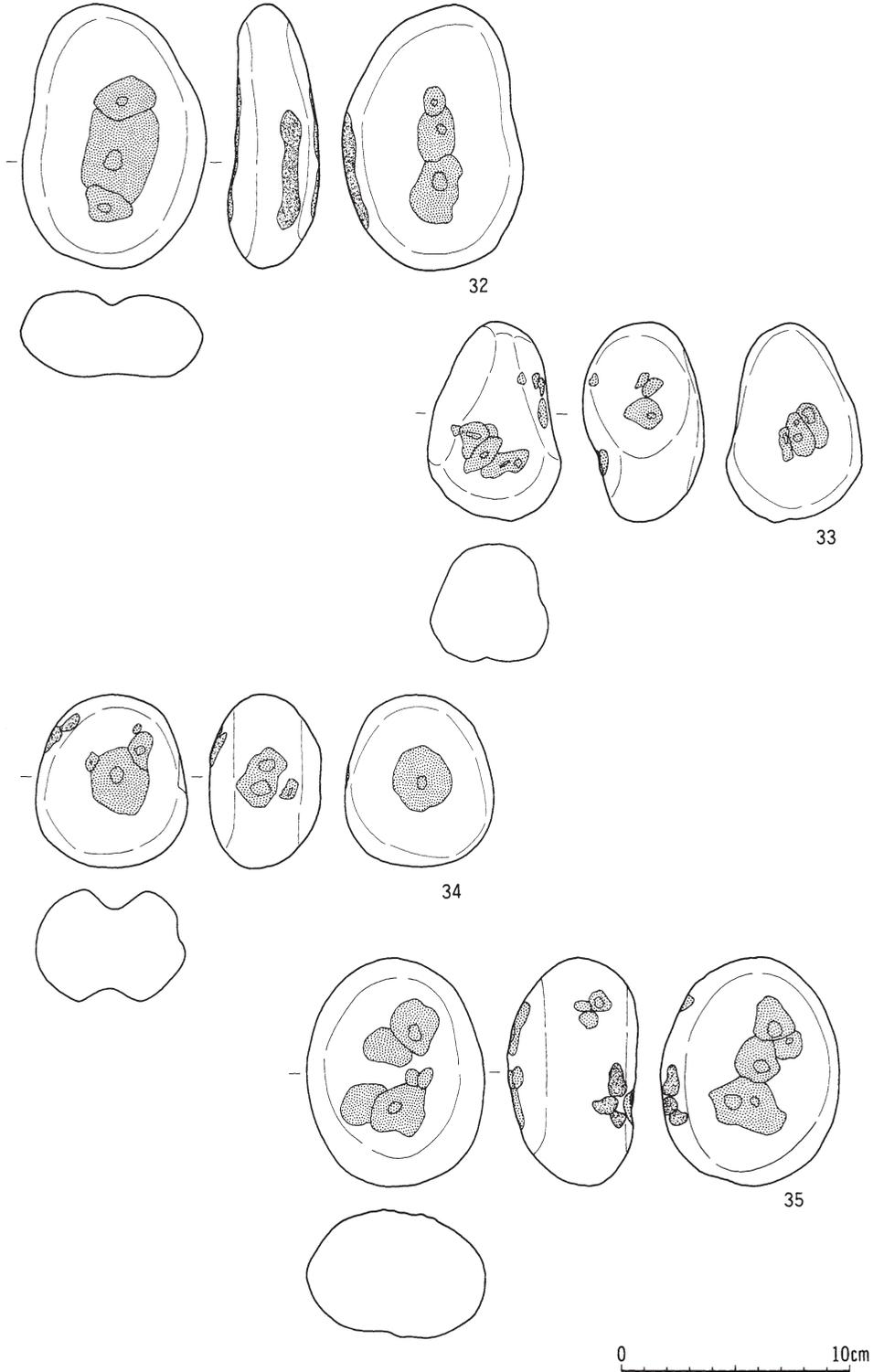
第189図 遺構外出土石器（凹石-5）



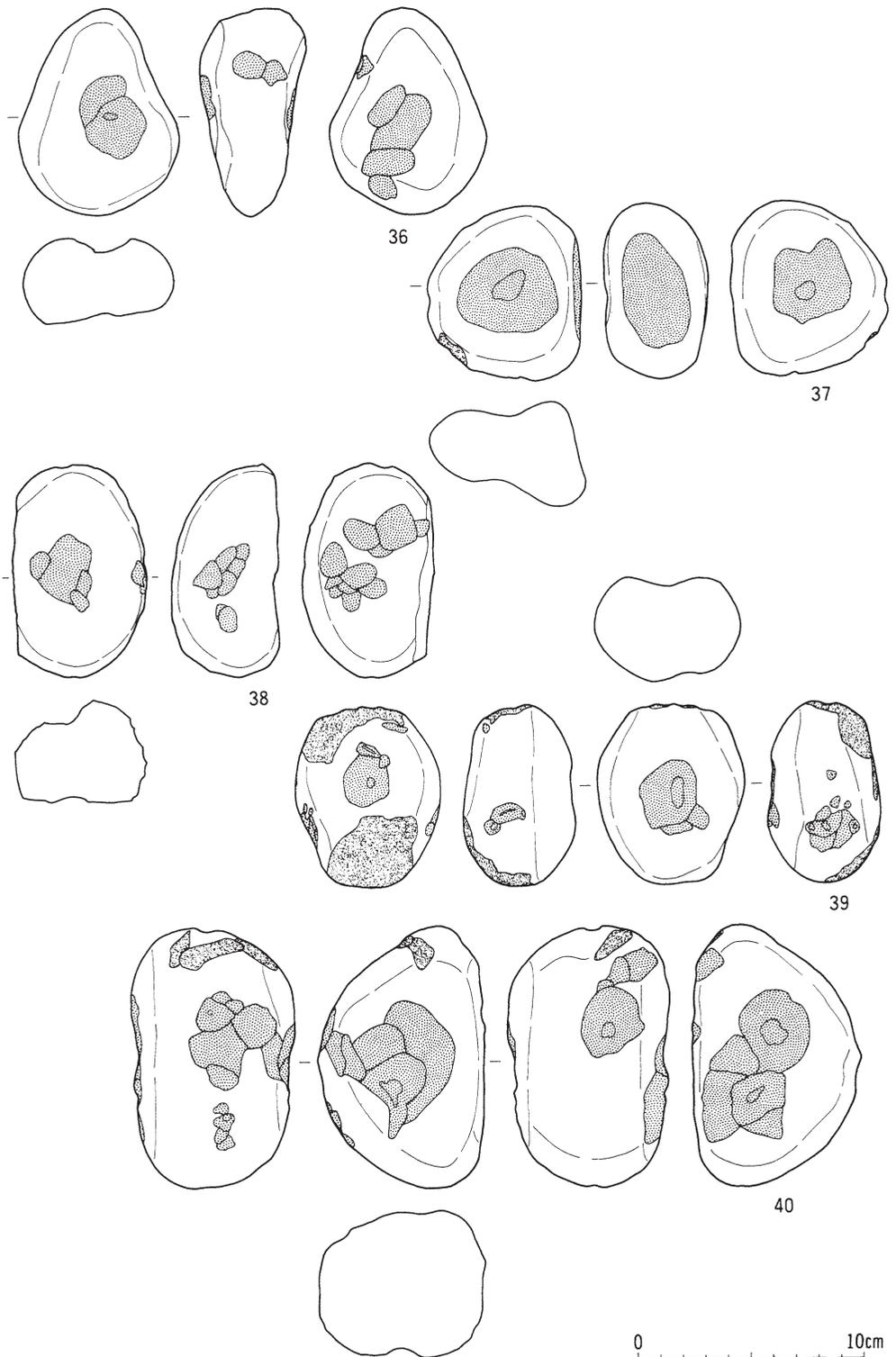
第190図 遺構外出土石器（凹石-6）



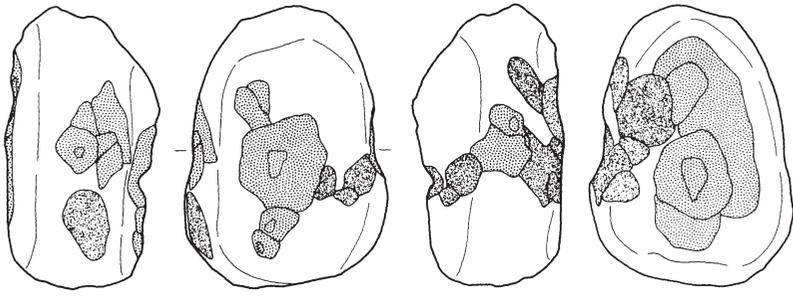
第191図 遺構外出土石器（凹石-7）



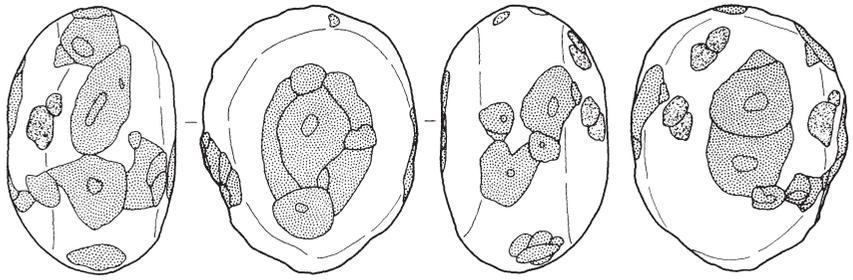
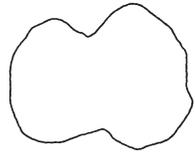
第192図 遺構外出土石器（凹石-8）



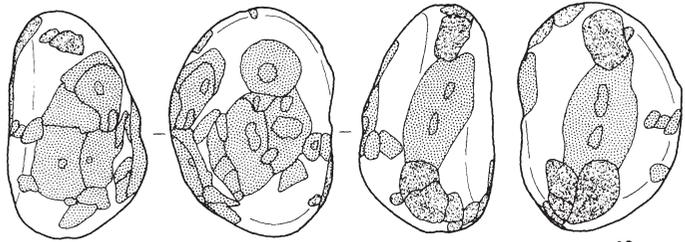
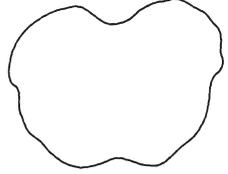
第193図 遺構外出土石器（凹石-9）



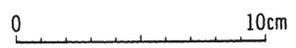
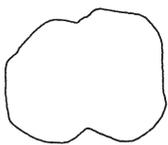
41



42



43



第194図 遺構外出土石器（凹石-10）

凹み石

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第185図-1	H-34	III	95	86.5	47	536.9	安山岩	5686
-2	H-58	II	108.5	62.5	38	322	砂岩	5684
-3	K-70	III	119	47.5	39	305.9	安山岩	5683
-4	H-48	III	88.5	52.5	43.5	279.2	安山岩	D-22
-5	I-51	III	113.5	48	43	289.7	安山岩	D-26
第186図-6	H-74	III	90.5	71	50	259.5	安山岩	5613
-7	H-38	III	109	2	37	358.2	安山岩	5676
-8	I-77	III	78	57	50.5	313.2	安山岩	D-21
-9	H-48	III	119.5	72.5	50.5	675.8	安山岩	5691
-10	W-100	II	80	60	44	246.2	砂岩	D-19
第187図-11	H-54	II	93	81	55	480.1	砂岩	5620
-12	D-19	II	108	85.5	60.5	862.9	安山岩	5682
-13	I-35	III	92	81	40	270.9	凝灰岩	D-2
-14	F-35	II	133.5	55	28	295.3	安山岩	D-20
第188図-15	I-47	III	78	68.5	27	191.2	凝灰岩	5638
-16	F-33	II	100	74	22.5	165.9	砂岩	5644
-17	P-84	II	106	85	47	306	砂岩	D-7
-18	G-29	III	90	71	14	111.6	砂岩	5645
-19	G-40	III	151	87	35	634.2	安山岩	5052
第189図-20	I-77	III	113	80	27	305.3	砂岩	5672
-21	D-20	II	95	70.5	25.5	259.3	凝灰岩	5674
-22	I-67	III	119	79.5	31	403.7	安山岩	5636
-23	I-41	III	159	101	33	662.6	安山岩	5699
第190図-24	I-71	II	127	92	32	438.1	砂岩	5642
-25	F-32	II	132	79	35	482.9	安山岩	5640
-26	H-35	II	115.5	80	24.5	292.9	砂岩	5639
-27	G-30	III	120	70	22.5	251.9	砂岩	5643
第191図-28	H-35	II	115	84	27	303.5	凝灰岩	5634
-29	P-85	II	110	85	30	347.1	礫	5641
-30	I-77	III	108.5	82	39	371.4	安山岩	5637
-31	E-15	III	111.5	78.5	38	432	安山岩	5635
第192図-32	G-34	III	117	78.5	36	410.8	安山岩	5633
-33	F-35	III	87	59.5	53	236.6	凝灰岩	5615
-34	Q-86	III	75	66.5	49.5	299.9	凝灰岩	5612
-35	F-14	III	99	80	54.5	613.2	安山岩	5687
第193図-36	M-78	III	92.5	71	45	284.3	安山岩	5680
-37	N-84	II	67.5	77.5	45.5	280.4	砂岩	5690
-38	O-85	II	98	60	48	298.8	安山岩	5076
-39	E-23	III	80	65.5	50	307.8	安山岩	5614
-40	D-16	II	116	75	72	685	砂岩	5618
第194図-41	G-38	III	114	82	62	603.7	砂岩	5619
-42	H-44	III	107	88	67	671.7	砂岩	5617
-43	I-39	III	91	66	55.5	344.4	砂岩	5616

### 石皿 (第195～197図-16)

30点出土している。ほとんどが破片での出土で、完形品は13の1点だけである。このほかに石製品の類としたミニチュア製品が1点出土している。

破片試料が多いことから、図化したものは半数ほどである。各器体の特徴を表に記載している。また、写真図版に多くを記載している。

石皿は、器体そのものを整形した類と、自然礫をそのまま使用した類とがある。前者は器体の形状に意味及び用途が限定され、後者は、使用による最終的な形状である。

1～10は、器体の整形を行っているもので、このうち1～6は表面の縁辺部に高まりを作出しているものである。これらは3を除いて底部外面を舟底形に整形しており、9は底部外面の縁辺と平行した土手状の脚部を作出しているものである。5にも不明瞭ではあるが、脚部の可能性のある加工痕が認められる。

11～13は、自然礫そのものの面を機能面としたもので、主に片面に、湾曲した研磨面を有している。使用の頻度により、湾曲度に差が認められる。

素材とした礫の種類は凝灰岩が大部分を占め、整形がなされた石皿のほとんどは、この凝灰岩製である。ただ、これらの中でも、粒子のきめの細かいものと砂粒などの多く混入したガラ付いたものが認められる。

全体に軟質の素材が多いが、砂岩製のものは一般的に堅緻である。

また、欠損後、火熱を受けているものが数点ある。

これらは、時期的には出土土器と同様に、縄文時代中期の所産と考えられるが、それぞれの個体がどの土器形式に伴うものかは不明である。

これら石皿のほかに、板状節理による肉厚の大型礫が数十点出土した。台石などに使用のために搬入されたものと考えられるが、使用による明瞭な痕跡が認められるものは皆無であった。

### 砥石 (第197図-17・198図)

本類としたものは23点で、全て遺構外からの出土である。ほとんどが破片での出土で、図示できないものが多い。

破片資料の場合、石皿の破片との区別が困難であるが、主に小型のものを砥石として分類した。これらの中では、研磨範囲が面として捉えられるもの、擦痕だけのもの、溝状の研磨痕を持つものなど対象物及び機能的に性格が異なる。

20・21は小型の自然礫に擦痕が認められるもので、特に20は数方向の擦痕が顕著である。擦痕の幅は1mm程度で最大でも2mm程である。

図化はしなかったが、砂岩製の2点は、4面を機能面としており、現在の「荒砥石」に相当

する粒子が均一なもので、各面はそれぞれ湾曲している。本類では数少ない硬質の素材を使用している。

19などはれぞれ数条の溝状の研磨痕を有するもので、玉砥石として分類されるものである。おもに凝灰岩を素材として、石皿の転用と考えられるものが多い。磨製石斧などの側面加工に使用された可能性も考えられたが、各溝の幅及び湾曲度は石斧とは合致しなかった。

このほかに、硬質の安山岩に凹みと1条の溝が切り込まれているものなどがあり、何らかの道具を研ぎ出すという性格よりも、石製品としての要素が強いものもある。

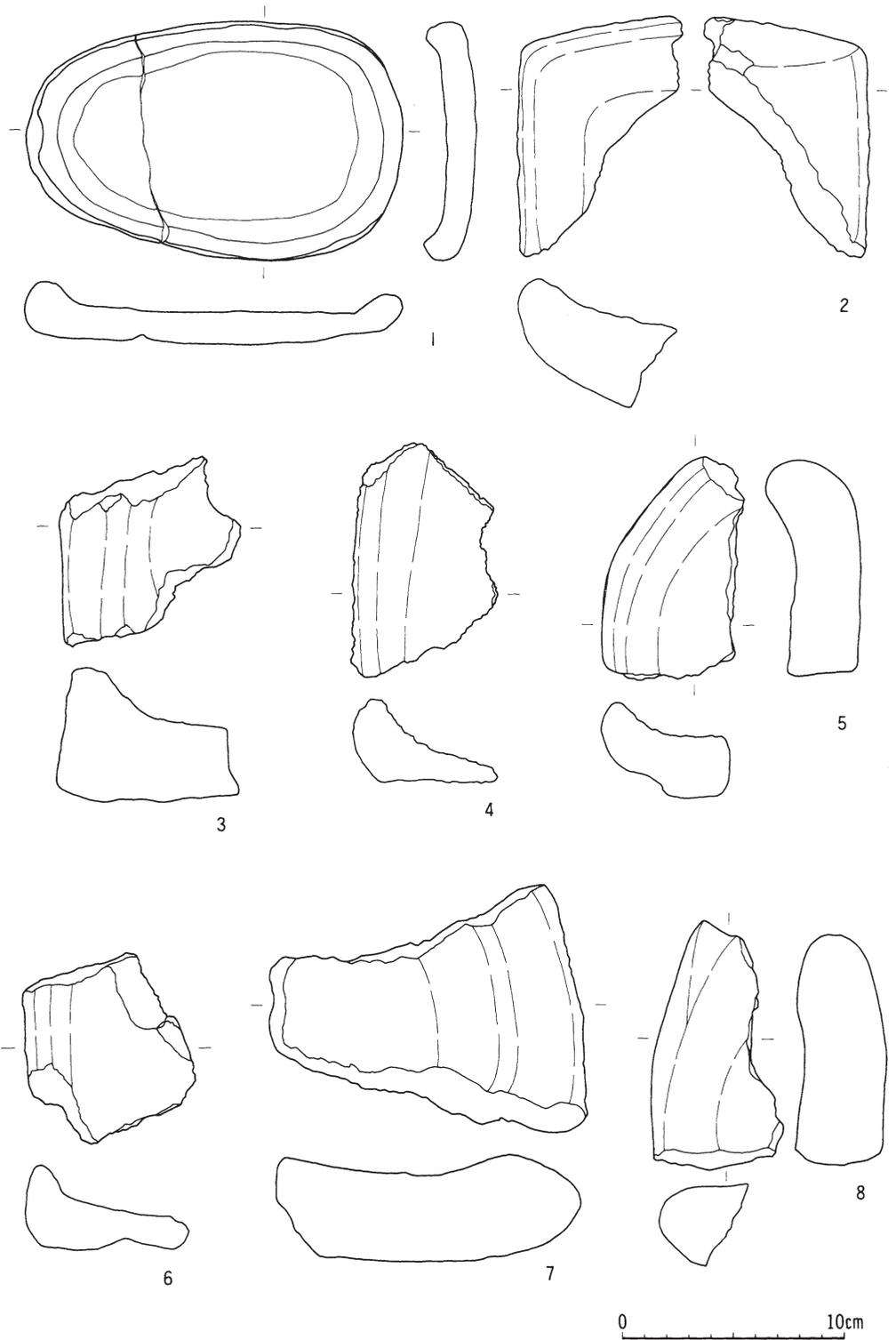
本類の使用石材は、凝灰岩と砂岩がおのおの約3割程度を占めており、全体に軟質のものが多い。

### 軽石

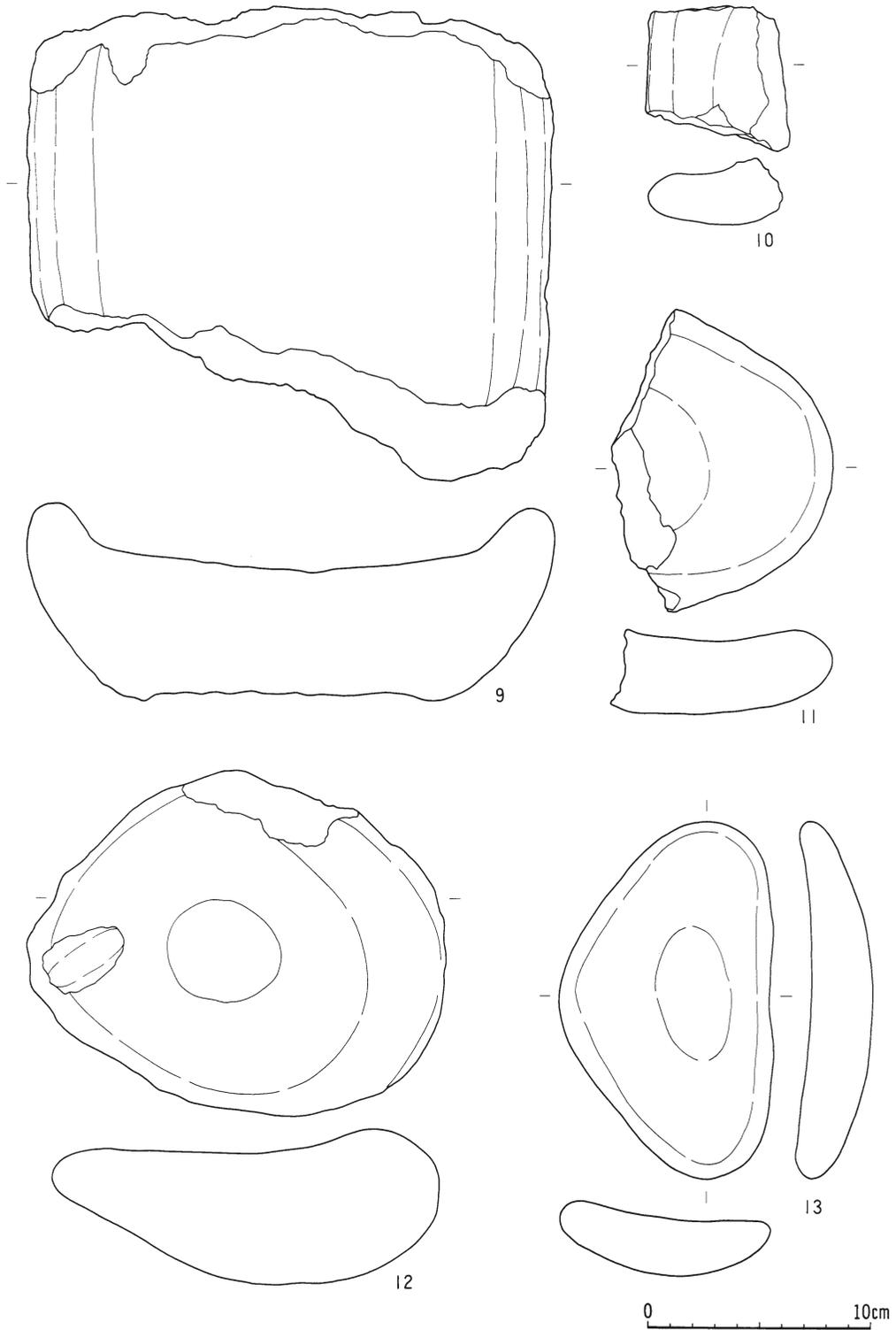
30点ほど出土したが、ほとんどが細破片で、形状を確認できたものは6点である。いずれも黒っぽい浮石で、ほとんどが蜂の巣条の多孔質のものである。各個体とも平坦な面や湾曲した面は観察できるが、明瞭な加工痕跡は認められない。道具として使用したものか、または製品であったものかは不明である。このため、単に軽石として一括した。

### 軽石

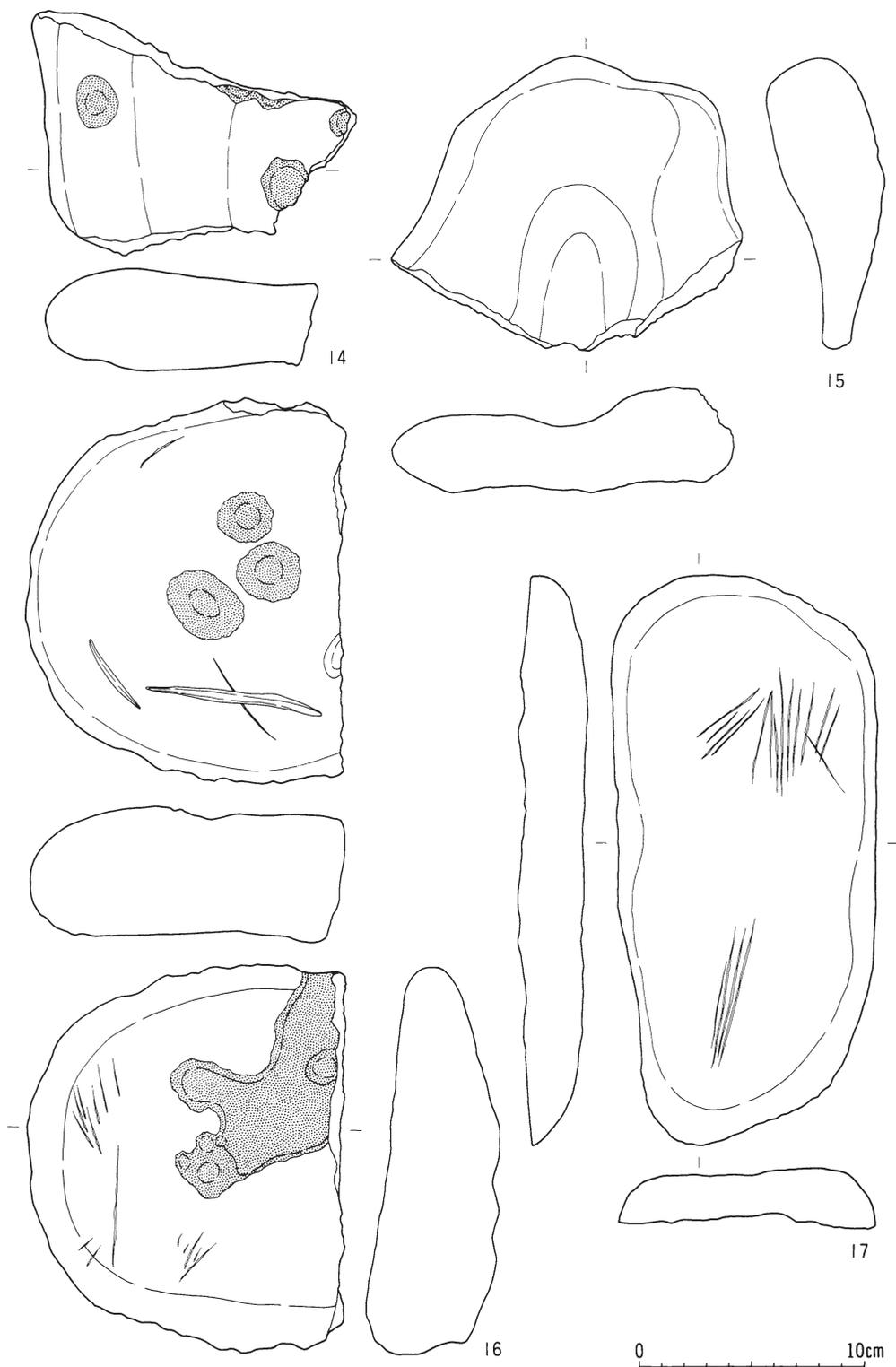
図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
写真参照	J-75	II	92	74	49	88.4	軽石	
〃	H-64	III	123	92	65	278.5	軽石	
〃	I-55		56	41	34	36.5	軽石	
〃	H-57	III	99	61	51	68.7	軽石	
〃	H-37	III	151	98	49	84.7	軽石	
〃	H-48	II	72	60	40	49.3	軽石	



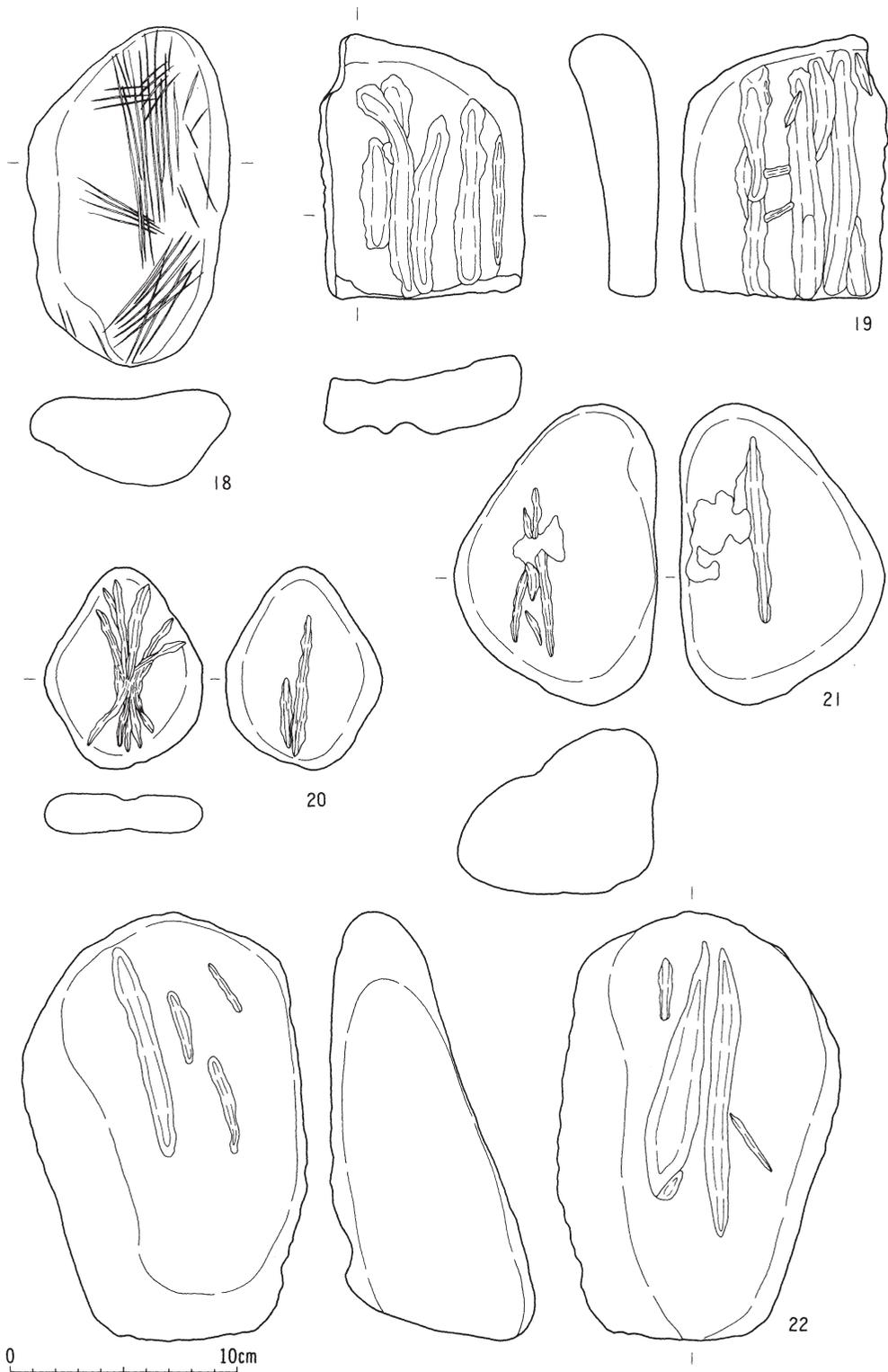
第195図 遺構外出土石器 (石皿-1)



第196図 遺構外出土石器（石皿-2）



第197図 遺構外出土石器（石皿-3・砥石-1）



第198図 遺構外出土石器（砥石-2）

## 石皿

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
第195図-1	H-56	II	109	170	28	359.8	凝灰岩	縁辺に高まり
-2	I-35	III	(96)	(91)	51	(234.1)	凝灰岩	被熱、縁辺に高まり
-3	N-108	II	(79)	(79)	(63)	(392.5)	安山岩	被熱、縁辺に高まり
-4	S-92	II	(106)	(73)	(39)	(184.7)	礫	縁辺に高まり
-5	H-50	II	(103)	(63)	42	(233.5)	凝灰岩	縁辺に高まり
-6	I-55	III	(75)	(74)	(42)	(122.7)	凝灰岩	縁辺に高まり
-7	J-36	II	(111)	(144)	52	(833.1)	安山岩	縁辺に高まり
-8	E-26	II	(110)	(56)	44	(299.1)	砂岩	
第196図-9	H-66	III	(210)	(238)	(83)	(3390.1)	凝灰岩	脚部あり、縁辺に高まり
-10	D-24	III	(60)	(59)	(29)	(120.2)	凝灰岩	縁辺に高まり
-11	G-33	III	(100)	(137)	54	(539.4)	安山岩	
-12	6土		(180)	(150)	64	(1620.1)	安山岩	中央部湾曲
-13	H-74	III	161	93	33	627.5	安山岩	全面湾曲
第197図-14	H-58	III	(102)	(147)	49	(691.1)	砂岩	破片、両面に凹み
-15	H-34	III	(129)	(155)	52	(881.4)	凝灰岩	中央部湾曲
-16	F-34	III	(141)	(174)	(51)	(1400.5)	砂岩	楕円?、裏面に凹み

## 砥石

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
第197図-17	I-64	III	250	118	(30)	1134.7	凝灰岩	擦痕
第198図-18	I-57	II	153	82	42	533.8	凝灰岩	小型皿状、両面に擦痕
-19	O-85	II	(119)	91	34	342.5	凝灰岩	石皿転用、両面に溝、玉砥石
-20	H-48	III	90	69	17	121.3	砂岩	両面擦切状の擦痕
-21	H-56	III	130	89	76	919.3	凝灰岩	両面に凹みと擦痕
-22	H-49	III	194	120	81	1745.3	砂岩	玉砥石
	E-15	III	(68)	(47)	(32)	(129.6)	凝灰岩	破片、両面やや湾曲
	I-74	II	(88)	(68)	19	(126.2)	頁岩	破片、両面に研磨面
	F-33	III	(115)	(95)	41	(480.5)	凝灰岩	溝2条
	O-84	II	93	63	44	308.5	砂岩	微小な擦痕
	H-45	II	112	98	26	283.3	凝灰岩	擦痕
	F-27	III	(133)	(62)	(28)	(326.8)	安山岩	破片、水平な研磨面
	F-22	III	71	(55)	15	(71.2)	砂岩	両面に擦痕
	N-85	II	110	91	23	245.4	礫	湾曲した研磨面
	G-71	II	(147)	72	60	(709.6)	砂岩	4面に筋状の擦痕
	I-62	III	(85)	34	21	(113.9)	砂岩	4面に研磨面
	I-70	III	72	32	37	84.2	砂岩	両面湾曲した研磨面
	H-55	II	(73)	(47)	23	(149.6)	凝灰岩	破片、筋状の擦痕
	H-49	II	67	62	38	81.3	砂岩	擦痕
	H-63	II	(43)	(29)	12	(23.8)	砂岩	ほぼ全面研磨
	F-32	II	(62)	(39)	16	(37.1)	砂岩	破片、ほぼ全面研磨と擦痕
	G-66	II	(74)	(54)	21	(105.3)	砂岩	研磨面と擦痕
	H-38	III	84	61	66	391.8	安山岩	球状、凹みと深い擦痕

### 3 土製品

#### 土偶 (第199～201図)

12点の出土である(内、遺構内(3号土坑)出土1点)。

大部分が破片での出土で、完形品は三角土偶の1点である。

(第200図-6は、第37図-2と同一実測図である。)

1は、非常に大型の板状土偶の下半部破片で、表裏面及び側面の全面に文様が施文されている。文様は、主に捺糸の圧痕を主体としており、表面は、ほぼ左右対称に捺糸の圧痕による施文が施される。裏面は、中心部に、指頭によると考えられる幅広の沈線が縦位に施文され、これを挟んでほぼ左右対象の文様が施文されている。また、側面には先端の細い工具による連続した刻み目がみられる。残存部の最大長は、125mm、最大幅137mm、最大厚30mmである。文様構成から、円筒上層a式に伴うものと考えられる。

2・3は、ともに胴部の破片であり、捺糸の圧痕によって文様を構成している。2は、裏面に指頭によると考えられる縦位の沈線の痕跡が認められる。1と同様に円筒上層a式に伴うものと考えられる。

4～7・9は、主に刺突によって文様を構成している。4・6は腕部に斜位又は縦位に貫通孔が穿たれている。5は頭部と一方の腕部を欠失している。7は裏面に刺突及び沈線による文様が施されている。

これらの5点は、刺突を基本とした文様構成から、縄文時代中期後半期の所産と考えられるが、榎林式・最花式の土器のいずれと共伴するかは不明である。8は、無文の胴部下半の破片である。

10・11は、それぞれ脚部及び腕部の破片と考えられるが、断定し得ない。

12は、三角土偶の完形品であるが、表面の一部が剥落している。表面側が凸状に湾曲しており、刺突及び沈線により文様が施文されている。裏面は無文である。4ほかと同様に縄文時代中期後半期のものと考えられる。

#### 円盤状土製品 (第202・203図)

26点出土した。内、2点は遺構内(3号土坑・2号配石)からの出土であるが、第202図にも記載している。

ほとんどが土器の胴部片を転用したものであるが、1・5は口縁部片と考えられる。

縄文のみ施文が多いが、無文が2点、沈線のみみられるものが2点ある。また、捺糸圧痕のみみられるものも2点ある。縄文原体の多くは単節で、LRのものが大半を占める。

21は未貫通ではあるが、孔が穿たれている。また、17・20の2点にはスス状炭化物の付着がみられる。

時期的には撚糸圧痕及び0段多条のの原体によるものは円筒上層式と考えられ、沈線を併用するものは中期中葉以降と考えられる。

出土地点では、遺構の検出できた45～84グリッドの範囲からは、遺構内出土を含めて10点程の出土があり、土坑群近くのP-85グリッド周辺からは4点が出土している。他の多くは遺構の存在しない範囲からの出土であった。

#### その他の土製品 (第204図)

1は大型の耳栓の破片で、約半分を欠失している。両面に渦巻き状の隆帯を作出し、細身の工具による刺突列を施文している。

2は手捏ねによるもので、スタンプ状で帯状の把手が作出されている。

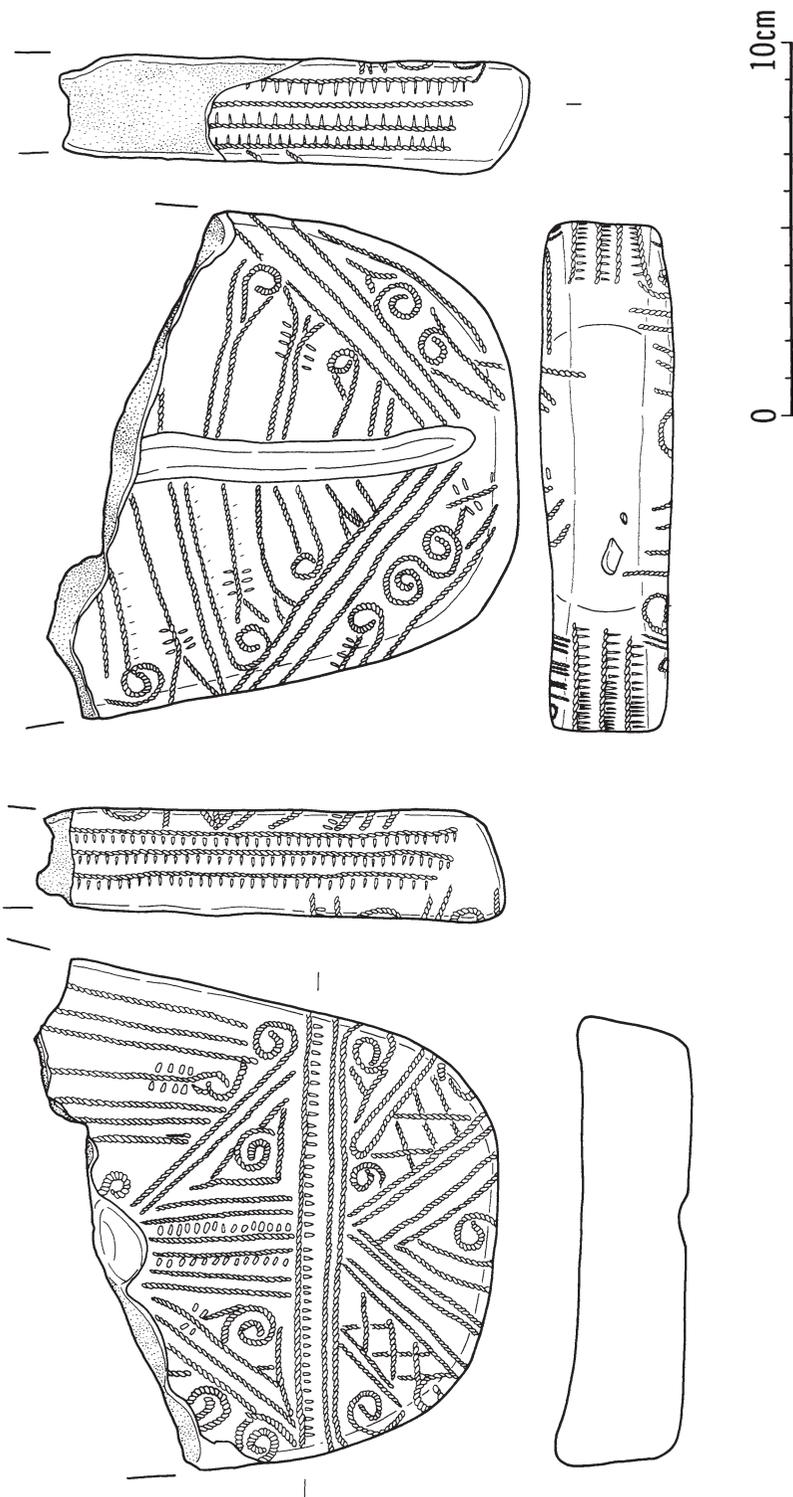
3は中央に穿孔がみられる円形の破片である。穿孔以外に文様の施文は認められない。当初、土偶の脚部とも考えられたが、肉厚の耳栓の可能性が高い。

4はいわゆる鯉節型土製品の類と考えられるものの欠損品で、器面全体にLRの原体による縄文が施文されている。片面からの穿孔による貫通孔があり、他の面の孔口が外部に突出している。

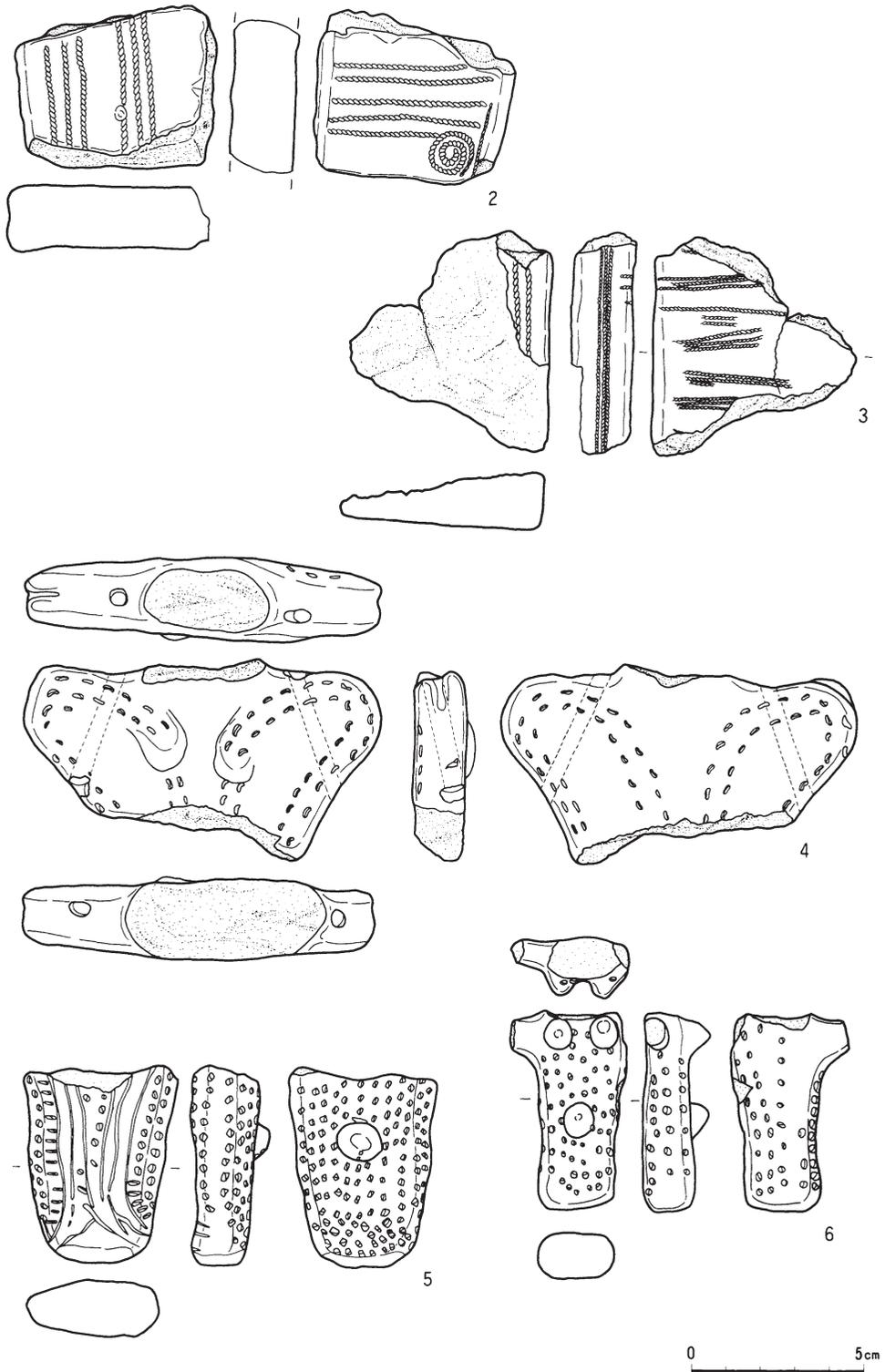
5は手捏ねによる三足土器の底部破片の可能性が高い。上部が不明のため土器片としてではなく本類に含めた。脚部の内、残存するのは1本だけで、他の2本は接合部分で折損している。

6は欠損品で、円盤状に整形されたものの破片と考えられる。片面中央部に指頭によると考えられる圧痕が認められる。

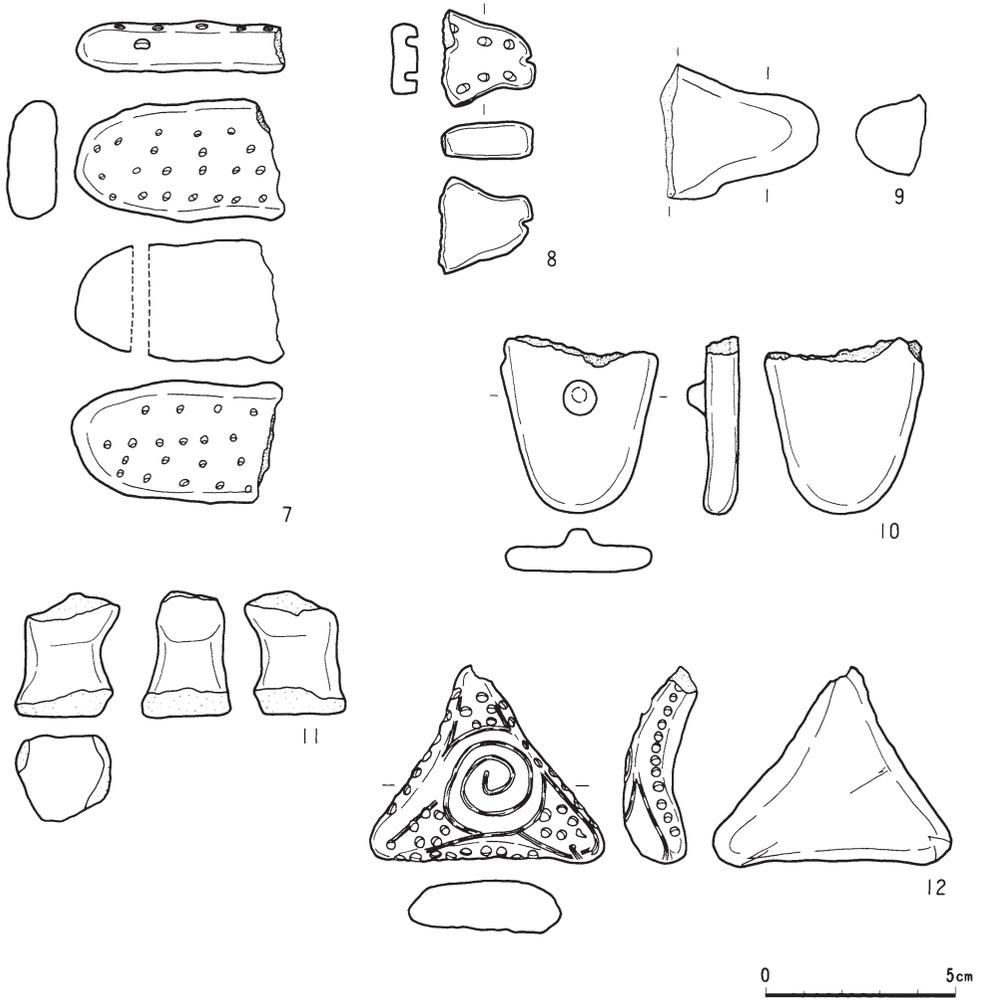
7は2ヶ所に透かしを作出した台の破片である。5と同様に上部が不明のため、本類に含めた。透かしは細身のへら状工具によって作出されたものと考えられるが、稚拙であり、丁寧な整形は行われていない。



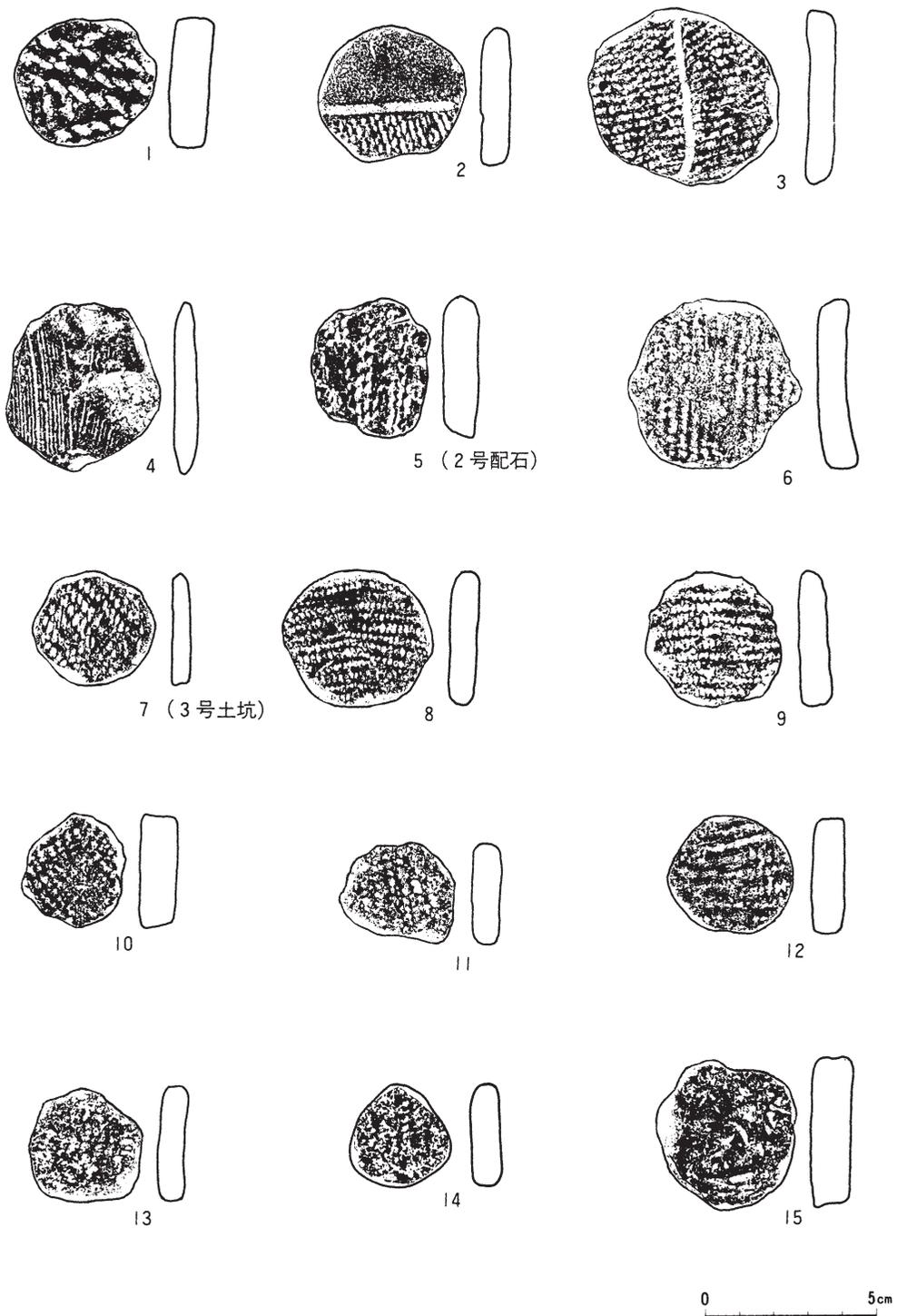
第199図 土製品 (土偶一1)



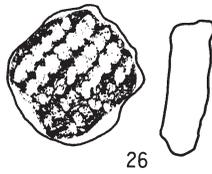
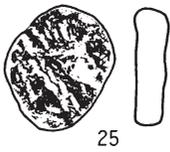
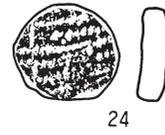
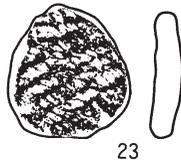
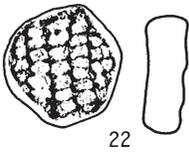
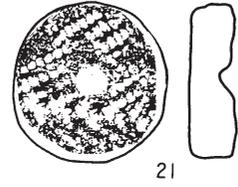
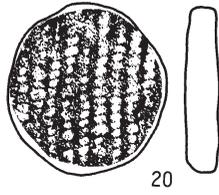
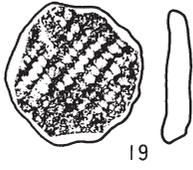
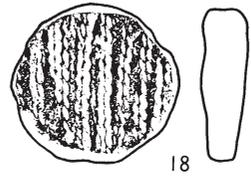
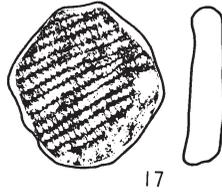
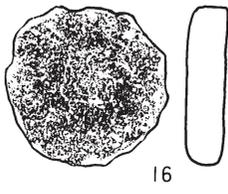
第200図 土製品（土偶-2）



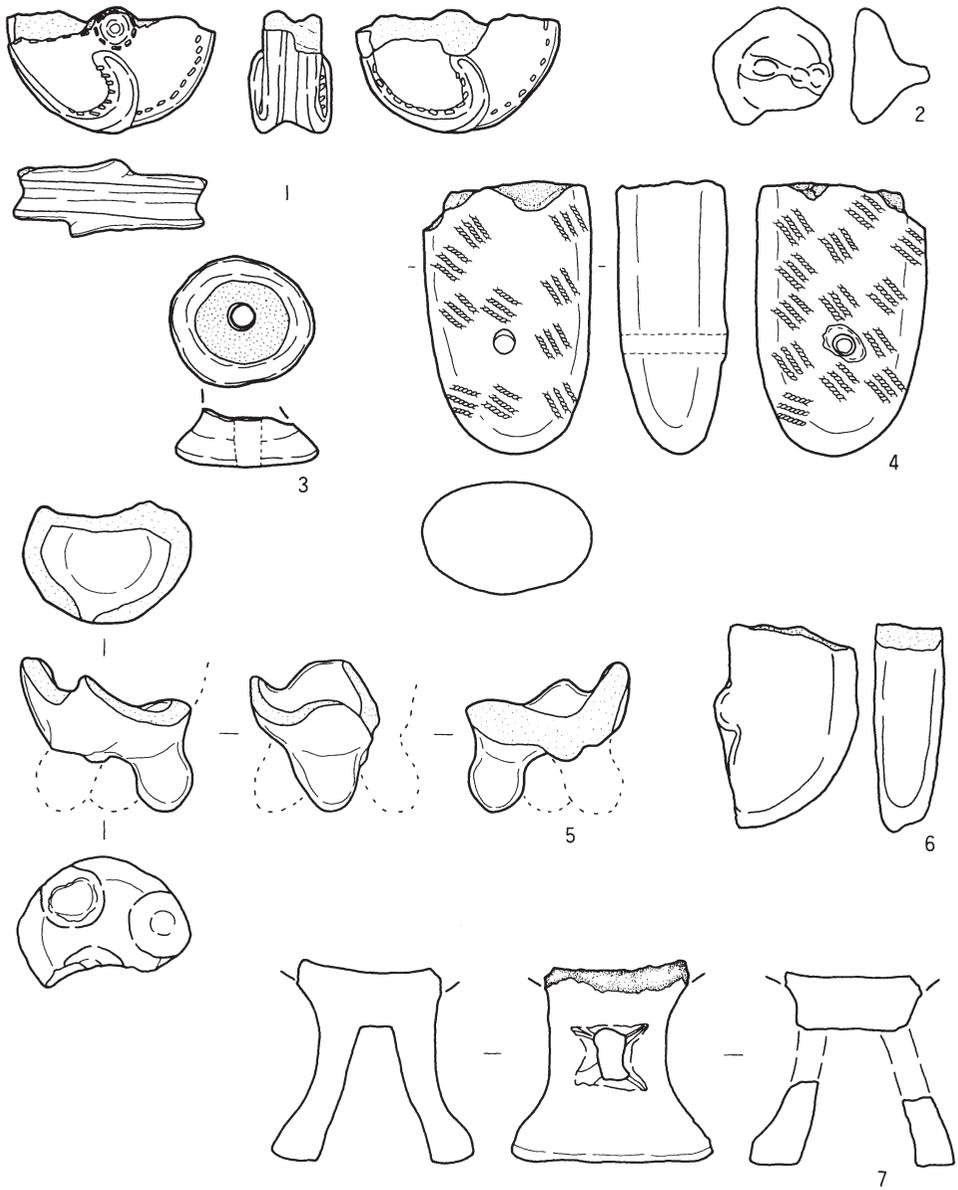
第201図 土製品（土偶一3）



第202図 土製品（円盤状土製品－1）



第203図 土製品（円盤状土製品-2）



0 5cm

第204図 その他の土製品

## 土偶

図版番号	出土地点	部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	文様構成	備考	整理番号
第199図-1	D-19	胴～脚部	124	136	34	捺糸圧痕、刻目様連続刺突、指頭による沈線	円筒上層 a 式	1
第200図-2	E-22	胴部	48	58	18	捺糸圧痕、指頭による沈線	〃	8
-3	F-27	胴部	60	59	18	捺糸圧痕	〃	9
-4	N-84	胸部	59	104	25	刺突、両腕部に上下に貫通孔	大木系	6
-5	N-82	胴～脚部	58	45	20	刺突、裏面～刺突+沈線	〃	4
-6	P-85	胸～脚部	59	34	14	刺突、頭部欠失	〃	3
第201図-7	3土	腕部	33	54	13	刺突、上下に貫通孔	〃	5
-8	P-86	腕部	27	25	10	刺突、刻み(沈線)	〃	14
-9		腕部	39	43	20	無文、裏面剥落		18
-10	H-50	胴～脚部	47	42	9	無文		10
-11	N-85	脚部	33	25	24	無文		11
-12	P-85	完形	52	63	13	刺突、沈線	三角土偶	2

## 円盤状土製品

図版番号	出土地点	使用部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	文様構成	備考	整理番号
第202図-1	F-27	口縁部片	42	39	9	LR(多条)、捺糸圧痕	円筒上層 a～b 式	2
-2	L-110	胴部片	49	40	8	RL+沈線+無文	大木系(榎林以降)	8
-3	U-93	胴部片	57	52	7	LR+沈線	大木系(榎林以降)	17
-4	H-46	胴部片	41	50	5	櫛目状の擦痕	大木系	7
-5	2配石	口縁部片	35	42	9	RL捺糸圧痕		16
-6	P-84	胴部片	51	50	9	LR		1
-7	3土	胴部片	37	39	5	RL		14
-8	P-85	胴部片	49	41	7	LR		3
-9	K-76	胴部片	40	40	9	LR		9
-10	H-43	胴部片	28	35	10	LR		11
-11	P-86	胴部片	(34.0)	30	8	LR		12
-12	H-38	胴部片	37	34	8	LR		6
-13	H-58	胴部片	33	34	6	縄文(原体摩滅で不明)		10
-14	H-31	胴部片	30	30	9	RL		18
-15	I-73	底部片	41	44	10	無文		4
第203図-16	I-52	胴部片	42	45	9	無文		5
-17	P-85	胴部片	40	40	8	LR		(17)
-18	D-21	胴部片	43	41	12	絡条体		(18)
-19	R-107	胴部片	36	33	6	LR	後期?	(19)
-20	H-71	胴部片	45	42	9	RL		(20)
-21	F-32	胴部片	42	40	12	羽状+未貫通孔		(21)
-22	H-43	胴部片	31	29	10	RL		(22)
-23	R-107	胴部片	34	(31)	7	RL		(23)
-24	D-21	胴部片	27	26	6	LR		(24)
-25	H-37	胴部片	32	(30)	9	絡条体		(25)
-26	H-55	胴部片	34	33	11	LR		(26)

## その他の土製品

図版番号	出土地点	層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	文様構成	備考	整理番号
第204図-1	H-71	III	(39)	55	22	刺突文	耳栓	13
-2	H-47	III	32	33	21			15
-3	H-55	II	38	35	(16)	貫通孔	土偶 足?	31
-4	H-37	III	(73)	45	30	縄文、貫通孔	鯉節型土製品	7
-5	H-56	II	(40)	45	36	底部片	三足土器?	13
-6	H-57	II	(54)	38	18		円盤?	12
-7	N-83	II	(54)	54	55	透かし2箇所	土器台部	30

### 4 石製品 (第205～207図)

石器以外の加工痕が認められるものを石製品として一括した。29点が出土している。

1・2は、ミニチュア製品で、1は舟型の石製品である。全面に加工時の擦痕を多く残しており、表面はややザラ付いた感触がある。小型の石皿の可能性も考えられたが、成形時の加工痕以外の使用によると思われる痕跡が認められないことから、舟のミニチュア製品と考えられる。

2は脚付の石皿のミニチュア製品で、平面形は台形である。軟質の凝灰岩を素材としており、器面は底外面を除いて、概ね平滑である。

3は一見、環状石斧の欠損品と思われる破片であるが、外縁はやや楕円気味で、正円とするとも径30cm以上の輪状となる。このことから、湾曲度の強い弧状の製品の可能性が考えられる。

4は硬質で棒状の転石を素材としており、加工もしくは使用により、一端部が乳棒状の半球状になったものである。敲磨器類としての分類も可能であるが、本類とした。

5・6は水晶の加工品である。5は、柱状の各辺が転石化して、やや円柱状になっており、両端部に半球状の加工（もしくは使用による）を行っている。また、若干の面取り加工も行っている。6も5と同様に転石と考えられるが、器面の磨滅は少なく、六角柱状を呈している。欠損部は風化もありサクレ状に亀裂がはいっている。端部は、4・5と同様に半球状を呈している。

7～21は有孔石製品である。

7は両端からの穿孔による貫通孔がある。一端からはほぼ長軸上に、もう一端からは斜行気味に穿孔している。斜行側の孔端は平坦に加工されており、「石笛」と考えられる。斜行部の平坦面は「尺八」等の「歌口」に類似する。また、笹の葉などをこの面に接着すればリード様に出せる可能性も考えられる。

8は、細身で中膨らみの棒状の石材を素材とし、両端から穿孔を行っている。孔はおのこの端部から7mm程で途切れ、貫通には至っていない。穿孔途中のものか完成品かは不明である。

9は台形状の素材の上下から貫通した孔を持つものである。器面全体に加工痕が認められる。10～13は板状の石材の片方に貫通孔を持つもので、垂飾品の類と考えられる。これらは薄手ではあるが、穿孔は両面から行っている。11は、器面に孔と同心円の擦痕がみられる。これは穿孔具の錐の装着部の痕跡の可能性が高い。4点とも器面に研磨による整形痕は認められるが、10は側縁の加工までは至っていない。

14も垂飾品と考えられるが、一端を欠失しており、全体形は不明である。孔は端部近くに両面から穿たれており、器面も研磨による整形がなされている。

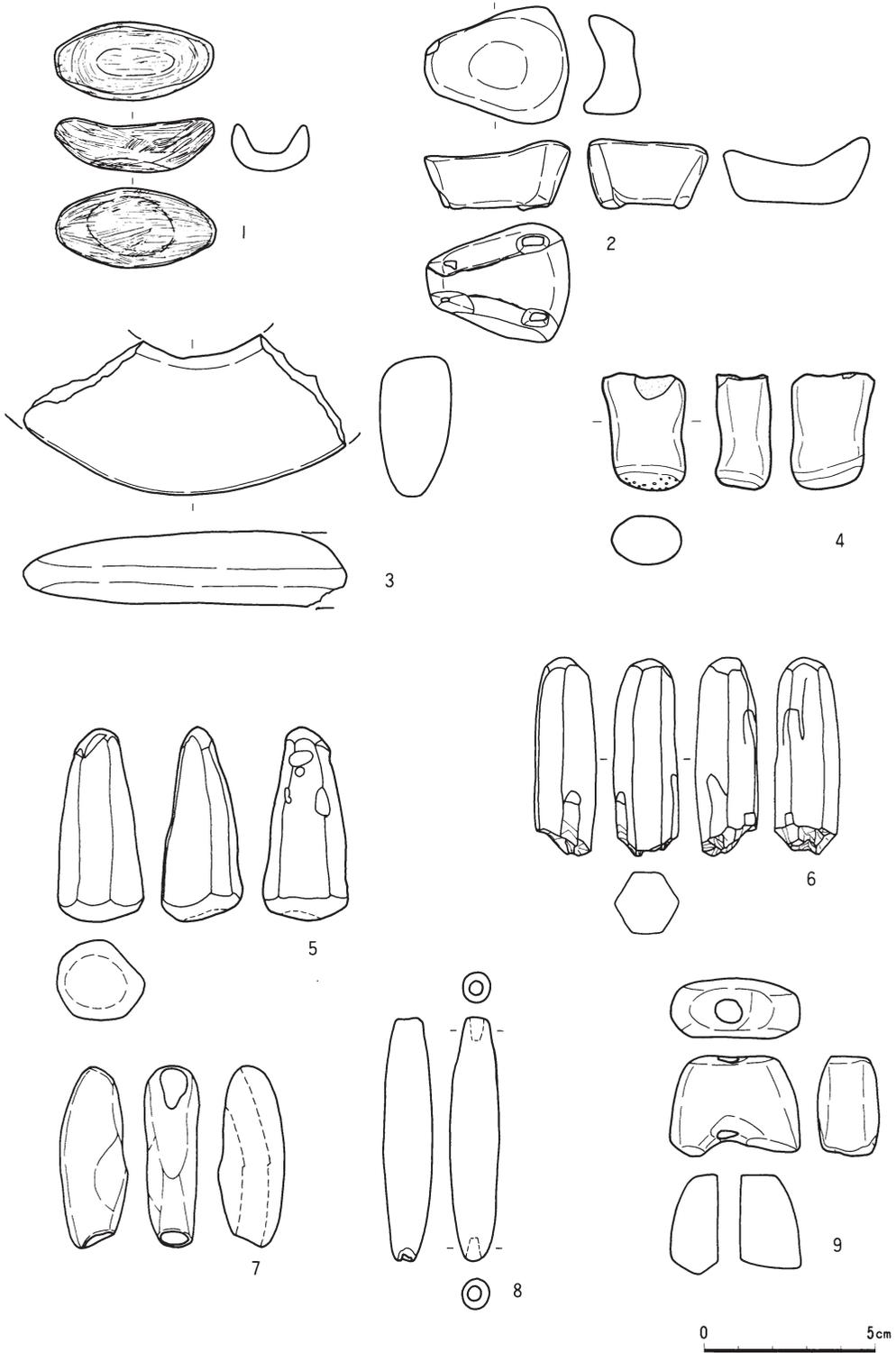
15は棒状の転石の両端寄りに2個の貫通孔を持つもので、孔はともに両面からの穿孔である。器面にはほとんど整形の痕跡がなく、片方の端部に若干の面取り様の研磨痕が認められるだけである。17も自然面をそのままに残している曲玉状のもので、湾曲部に両面から穿孔している。器面の整形痕はまったく認められない。16は片面が剝離しているが、器面には全体に研磨が施されている。

18・19は円盤状に加工した素材の中央に、両面からの穿孔を行っており、18は側縁までいい研磨による整形がなされている。

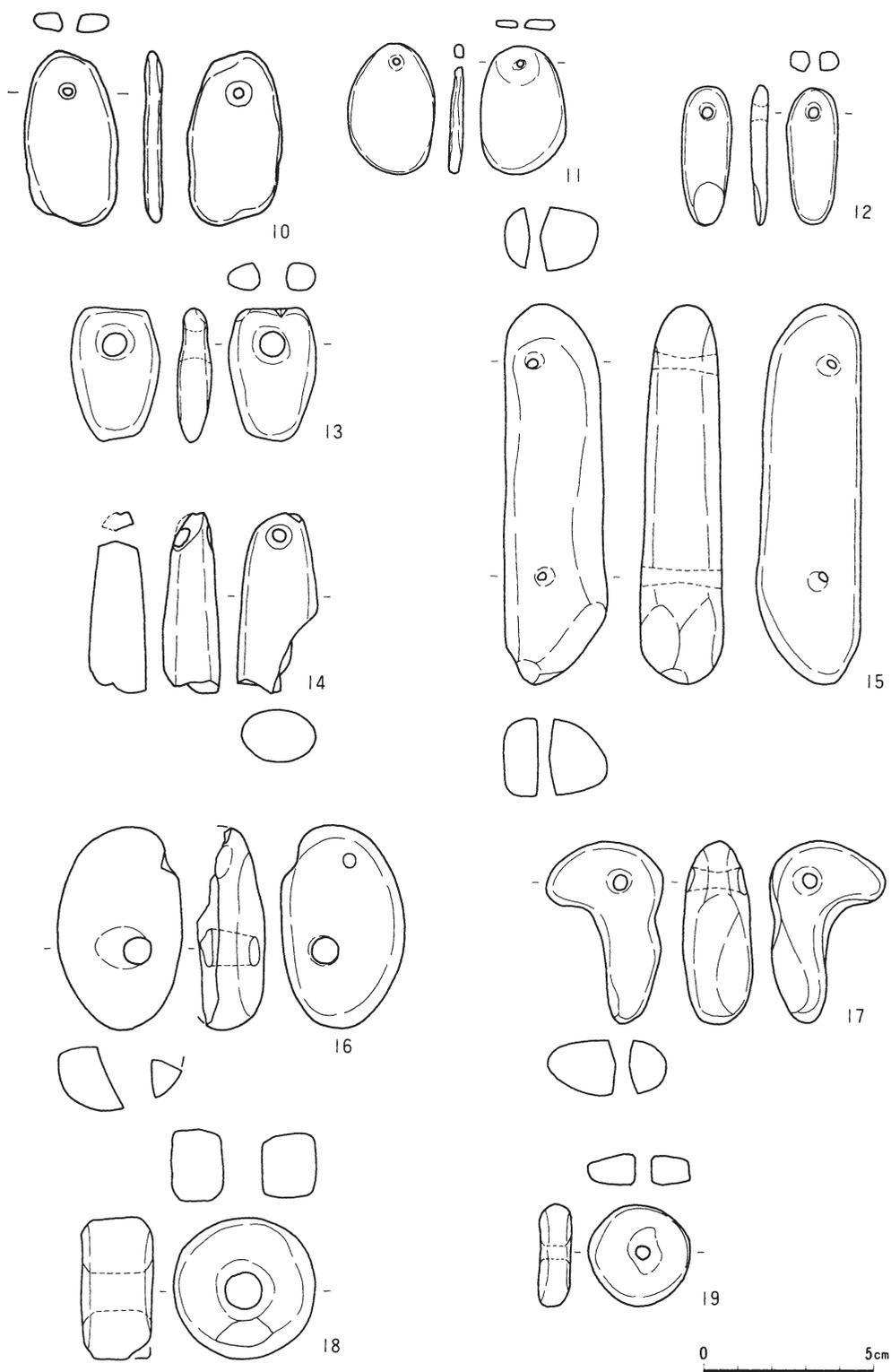
20・21はやや大型の素材の中央に、両面から穿孔したもので、ともに器面全体はほとんど自然面を残している。

22・23・25はほぼ全面に研磨による面取りがみられるもので、砥石の可能性も考えられる。24も研磨による面が作出されているもので、特に片面は平滑である。26は垂飾品の未製品と考えられ、器面を研磨しているが、穿孔は行われていない。

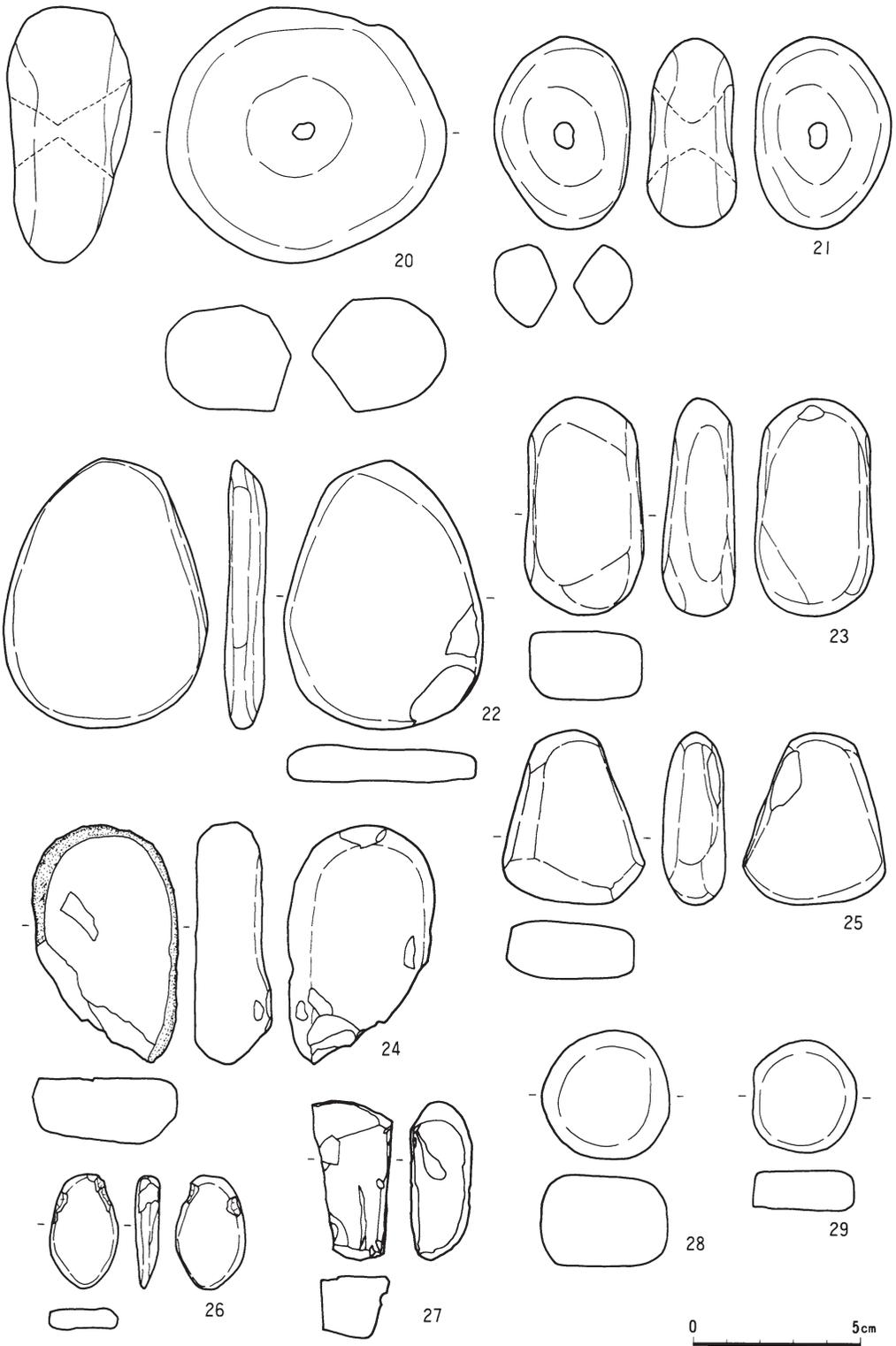
28・29はやや肉厚の円盤状に加工されたもので両面及び側面に研磨による整形が行われている。



第205図 石製品-1



第206図 石製品-2



第207図 石製品-3

## 石製品

図版番号	出土地点	部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	整理番号
第205図-1	G-72	III	47	24	16	12.1	頁岩	14
-2	H-69	I	43	35	21	25.1	頁岩	15
-3	H-57	表採	94	48	23	84.9	安山岩	5
-4	H-53	III	33	21	15	30	頁岩	20
-5	E-26	I	57.5	25.5	24	40.6	水晶	28
-6	F-28	III	(58.5)	19	18	31.3	水晶	18
-7	G-38	I	54	20	16	13.9	頁岩	13
-8	表採		72	15	15	17.1	頁岩	12
-9	表採		30	37	18	18	頁岩	21
第206図-10	H-49	III	29.5	38	18	20	粘板岩	17
-11	H-72	II	39	25	4	7.3	粘板岩	9
-12	I-69	II	42	14.5	6	4	頁岩	11
-13	H-50	II	4	26	10	10.5	頁岩	10
-14	H-50	III	54	23.5	16.5	20.2	頁岩	16
-15	E-29	III	113	30	24	61.2	細粒凝灰岩	6
-16	H-62	II	39	25	4	30.6	細粒凝灰岩	7
-17	F-32	III	54	35	20	26.3	頁岩	8
-18	G-69	II	42	42	22	11.8	軽石	3
-19	G-33	III	30.5	30	10	11	凝灰岩	4
第207図-20	6土	フク土	78	84.5	37	237.6	凝灰岩	1
-21	H-66	II	58	41	27	72.7	凝灰岩	2
-22	N-109	II	81	61	12	62	頁岩	24
-23	H-48	II	65	35	22	62	頁岩	22
-24	H-52	II	71.5	44.5	23	69.6	頁岩	23
-25	I-71	III	52	43	19	44	頁岩	26
-26	H-70	II	34	20	7	5.8	頁岩	29
-27	N-81	II	48	24.5	18.5	20.8	頁岩	25
-28	H-53	III	38	39	27.5	56.3	凝灰岩	19
-29	G-69	I	31	34	12	15.1	凝灰岩	30

## 第IV章 自然科学的分析

### 1 出土炭化材の樹種について

槻ノ木遺跡出土炭化材の樹種

嶋 倉 巳三郎

青森県上北郡野辺地町に所在する槻ノ木遺跡から出土した炭化材の樹種を調査した。

試料は、1 cmくらいの大きさの木炭で、これらの木口・柀目・板目方向の破断面を落射照明で検鏡した。

結果：

試料番号	出土遺構	層位	樹種	備考
1	第1号土坑	覆土	ヤチダモ	細碎質
2	第3号土坑	覆土	クリ	
3	第3号土坑	覆土	エノキ	

試料は、縄文時代中期前半の土坑墓と考えられる遺構の覆土から採取したものであるという。脆くて碎け易いが、遺跡の時代が古いためであろう。樹種のうち、クリは建築・器具・家具・薪炭・その他に広く使用されてきた材であり、エノキ・ヤチダモもそれに近い用途があり、ヤチダモはクリの模擬材にもなるという。

炭化材の組織

クリ *Custanea crenata* Sieb. et Zucc. ぶな科

孔圏道管の大きな環孔材、晩材部の小道管は多数集まって火炎状に配列する。放射組織は同性、単列と部分的2列のみである。周囲仮道管状の木繊維がある。

エノキ *Celtis sinensis* Pers. にれ科

孔圏道管の大きな環孔材、晩材部の小道管は不規則に集団して、斜めまたは接線方向に散在し、側壁にラセン肥厚がある。放射組織は異性で、1-10列くらい、さや細胞がある。

ヤチダモ *Fraxinus mandshurica* Rupr. Var. *japonica* Maxim. もくせい科

環孔材、孔圏道管は大きく、数列に並び、晩材部の小道管は単独、まれに2-3個ふくごうして疎らに散在する。放射組織は同性で、1-3列。



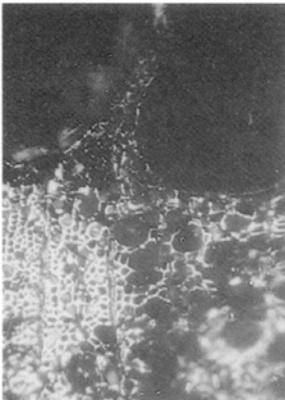
1. ヤチダモ (No.1) 木口



2. 同左、柁目



3. 同左、板目



4. クリ (No.2) 木口



5. 同左、柁目



6. 同左、板目



7. クリ (No.3) 木口



8. 同左、柁目



9. 同左、板目

(×50)

槻ノ木遺跡出土の炭化材

## 2 出土炭化材の放射性炭素年代について

### 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

木 越 邦 彦

1994年 3月26日

青森県埋蔵文化財調査センター殿

1993年12月24日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとずいて算出した年数で、標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代です。また、試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは、 $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値(B. P.)として表示してあります。また、試料の $\beta$ 線計数率と現在の標準炭素 (MODERN STANDARD CARBON) についての計数率との差が $2\sigma$ 以下のときには、MODERNと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

#### 記

---

Code No.	試料年代	(1950年よりの年数)
G a k - 17735	木炭 from 槻ノ木 (1) 遺跡 No. 1	3090 $\pm$ 160 1140 B. C.
G a k - 17736	木炭 from 槻ノ木 (1) 遺跡 No. 2	4550 $\pm$ 110 2600 B. C.

---

以上

## 第V章 分析と考察

### 円筒上層 a 式の口頸部文様について

今回の調査で出土量の多かった土器の中でも、円筒上層 a 式とした類は、口縁部文様帯に多岐にわたる文様構成が認められた。文様構成における明瞭な新旧は把握できなかったが、大まかな変遷過程についての可能性を推察した。

本類の文様の基本的な構成要素としては、口縁部の突起、捺糸圧痕、隆帯、ボタン状の貼付け等が挙げられる。主たる施文要素は、円筒下層式からの流れの中で捉えられる捺糸圧痕と粘土紐の貼付けによる。本報告書の分類では、上層 b 式との差違は、端的に言えば馬蹄形の捺糸圧痕の有無だけである。

#### (口縁部)

円筒下層式よりやや肥厚し、平口縁・小波状口縁で、平口縁のものは小突起または短い隆帯などの貼付けがみられる。小波状のものは、山形・二又・低い弁状や鱗状の突起を持つ。口縁部がさらに肥厚したものは、波状の度合いが強くなり、外板の度合いも大きくなる。突起部分は大きな鱗状や王冠状になる。また、二又状のものには、あまり頂部が突出するものが少ない傾向がみられるが、弁状突起状にのびるものもみられる。

#### (文様区画帯)

山形突起の頂部から垂下する隆帯を基本とし、文様帯を 4 分割する。垂下隆帯に替わるものは、ボタン状または短い俵状の隆帯を貼付ける。また、渦巻き状の捺糸圧痕だけのものも存在する。突起が二又状のものは、その両端から 2 条の隆帯を垂下させるものが多い。

口縁部の波状が強いものには、その突起の意匠によって垂下隆帯に種々のバリエーションがみられる。基本的にはノの字及び X 字状、2 条の垂下隆帯は平行する稲妻形や逆台形状へ変化するようである。

#### (捺糸圧痕)

文様構成の基本となる施文方法で、長めの捺糸を原体としている。横位の捺糸圧痕は、基本的には口縁部と平行した圧痕であるが、口縁の波状が大きくなるに従って、山形突起の下部に空間が生まれ、これを埋めるべく斜位または渦巻き状の圧痕が追加して施文される。

二又状の突起をもつものは、初期段階から斜位の捺糸圧痕を施文しているようである。また、垂下隆帯をもたないものでは、ボタン状などの貼付け文の位置によって異なるが、平行した山形の捺糸圧痕を施文する。

波状の度合いが強い類には、最も低い部分にさらに文様区画を意図した縦位の意匠が施文さ

れる。この類の施文は口縁直下の数条の平行する圧痕や、枝葉状の圧痕など多様な意匠が施文され、各区画ごとに文様構成の異なるものも多くみられる。

#### (短線圧痕)

撚糸圧痕とともに主要な文様要素である。原体は、間隔のやや緩い絡条体によるものが多いようである。施文部位は、口唇部及び隆帯上への施文と、撚糸圧痕間への施文である。初期では、横位の撚糸圧痕間に縦位に施文するが、波状がやや大きくなると、やや斜位方向や、縦位方向のハの字、横位のハの字（羽状）または、横位の撚糸圧痕を挟んだ矢羽根状の施文がみられる。X字状のものは早い段階から存在するようである。

横位の連続したハの字状の圧痕は、円筒上層b式の馬蹄状の圧痕の原型とも考えられる。

#### (隆帯)

文様区画以外での施文は、口縁部が大きく肥厚し、また大きな波状のものにみられ、数条の撚糸圧痕部分に替わって隆帯での施文が行なわれるものもある。また、文様区画帯の発展的意匠としての施文も認められる。

これらの特徴から類推して、模式図のような変遷が考えられる。

初期段階としては、口頸部文様帯の幅が狭く、主要施文は横位を基本としている。口縁部はやや肥厚する程度で、胴部との区画の隆帯もごく低いものである。縦位の文様区画帯は口縁部の小突起下に、垂下する隆帯または、ボタン状などの貼付け文や山形の撚糸圧痕でなされている。短線圧痕は基本的に縦位である。

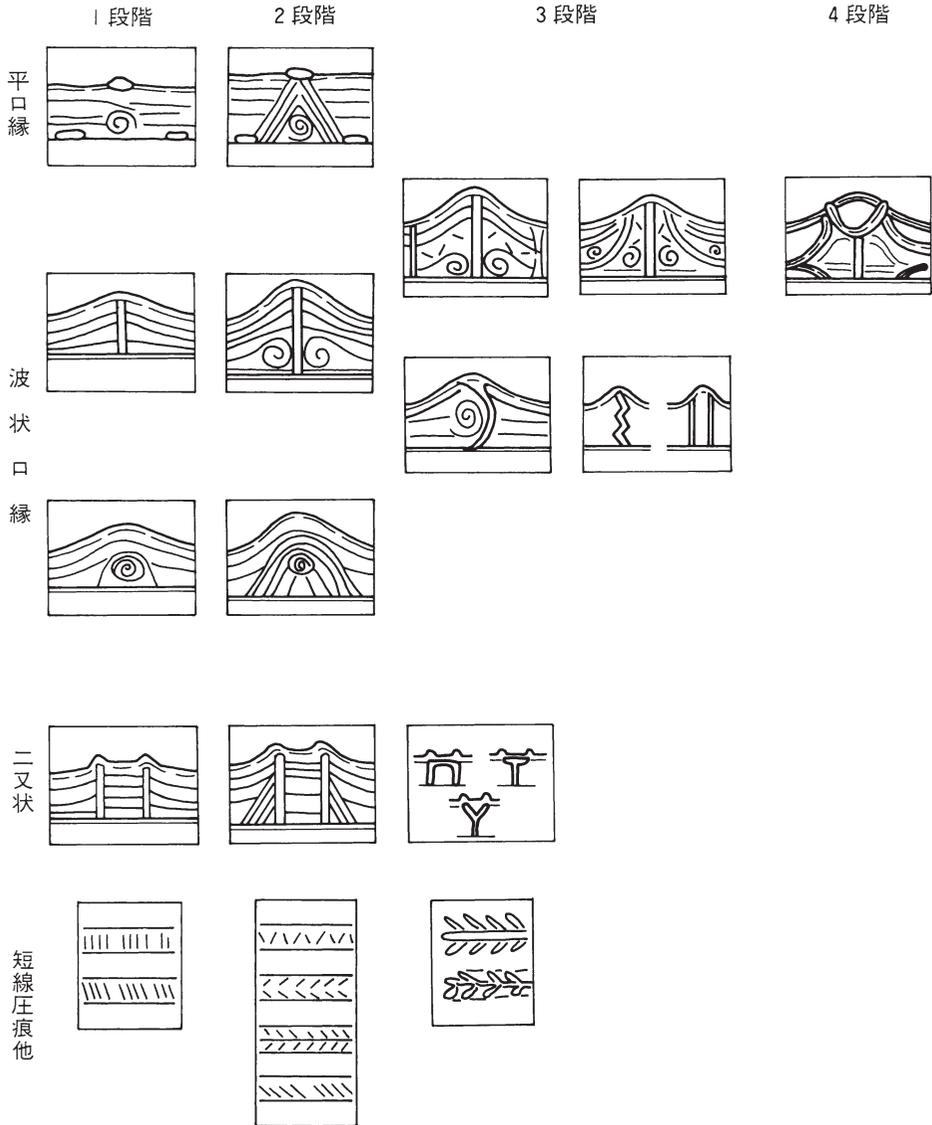
2段階としては、山形直下の文様区画帯において、斜位や渦巻き状の撚糸圧痕がみられるようになる。ただ、垂下隆帯が2条のものや、垂下隆帯をもたないものは、初期段階から斜位の施文がみられ、一概には発展形態とはいえないかもしれない。ただ、波状の度合いが強くなってきた段階においては、口縁部に平行な撚糸圧痕が、山形の直下に空白部を生み出すために、これらの意匠によって、空白部を満たす施文が行われるものと考えられる。この段階でも区画帯以外は、横位の撚糸圧痕に、短線圧痕を伴うものである。短線圧痕は縦位・斜位の施文に、縦位・横位のハの字状や矢羽根状がみられるようになる。

3段階としては、口縁部が大きく肥厚し、さらに外反の度合いが強くなり、突起は大きな鱗状や王冠状など大きく発達する。また、区画帯の垂下隆帯もノの字状や結束状の意匠などもみられる。二又状の突起を持つものには、2条の垂下隆帯からY字・T字・逆U字状への変化がみられるものもある。この段階では、前段階までの整然とした文様構成を受け継ぐものが少なくなり、自由な発想の意匠が多くなる。

もっとも新しい段階としては、隆帯を多用するものが充てられると考えるが、撚糸圧痕が整

然としたものも多くみられ、すべてがこの段階のものとは言い得ない。

また、巻き込んだような俵条の隆帯などの意匠は、突起が大きく発達する上層b式に受け継がれるものと考えられる。



椶ノ木遺跡における円筒上層 a 式の口頸部文様の変遷（模式図）

文様構成による変遷を考えてきたが、今回は主に、本遺跡の出土例に拠ったため、他の遺跡の出土例とは異なった様相を呈するかもしれない。

初期段階や2段階では、空白を埋め尽くそうとする意識が働いていたようであるが、撚糸圧痕の意匠に種々の文様が施文されはじめた段階から空白部が多くなり、短線圧痕に替わる圧痕もその間隔が広くとられるようである。また、これに反して、肉厚の隆帯を多用したものは、前段階のように密集した文様を展開している。このことは、文様構成上の何らかの規範が緩和された時点で、より自由な方向を指すものと、従来の構成に立脚した上で、さらに発達させようとする二者が存在した可能性が考えられる。

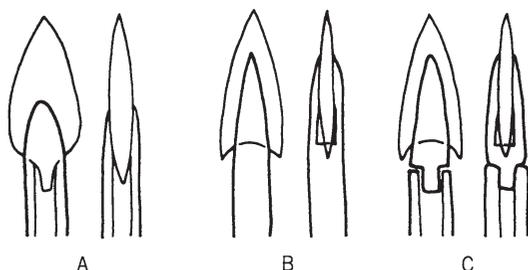
### アスファルトの付着のみられる石鏃の着柄について

定形石器中でもっとも多く出土した石鏃の中で、32点にアスファルトの付着が観察された。これは総点数350点中の約1割にあたり、この時期、アスファルトが、相当量流入していたものと考えられる。出土資料の中で付着痕の認められるものを集成図にした。

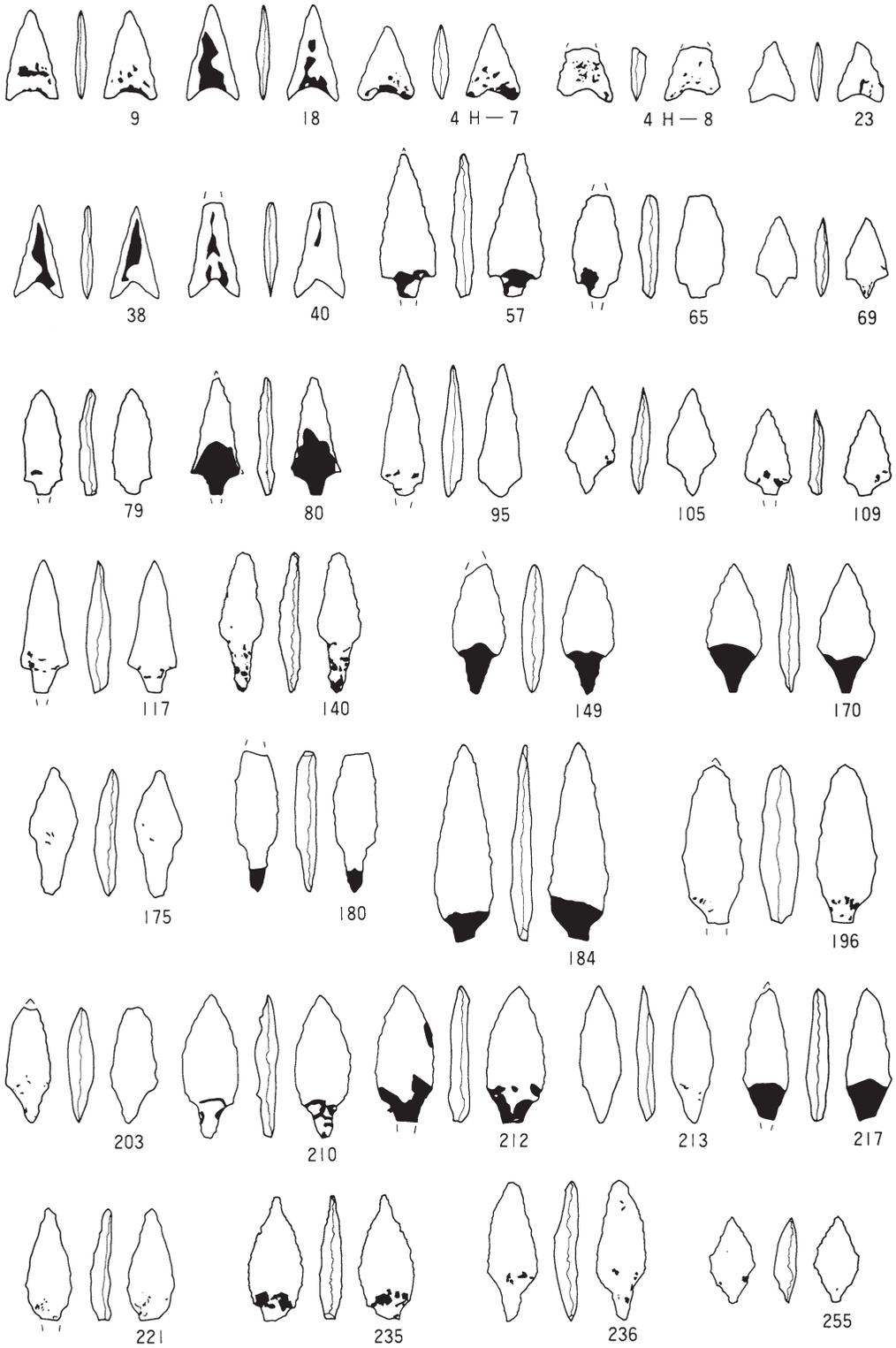
アスファルトは、石鏃と柄との装着時の接着剤と考えられる。付着範囲は、当然のことではあるが、茎部の有無で大きく異なっている。付着の残存率の高い数点での比較では、無茎鏃は18・38・40にみられるように、器体の先端まで及んでいる。これに対し有茎鏃では149・170のように、茎部及び基部のみに付着がみられ、完形品では茎部端まで及んでいるのが観察される。

これらの付着範囲から、装着法を推定してみた。ただ、すべての鏃の装着にアスファルトを使用したとも思えないことから、接着剤を伴わない装着法の存在もあったものと考えられる。本稿では、単に付着範囲からの推定である。

まず、柄の材質としては竹管が考えられ、矢柄研磨器と推定される石器の例からも妥当と考えられる。特に、本県では円筒土器以降に圧倒的に出土率の高くなる有茎鏃においては、中空であることから、装着に最も適している素材と考えられる。逆説的にいえば、竹管が柄として



着柄推定模式図



アスファルト付着石鏝集成図

最も有効であったために、これに合わせて有茎鏝が発達したとも考えられなくもない。

有茎鏝の装着の場合は、中空である竹管の先端部にスリット状のを切り込みを設けて安定させ、さらに先端部を先細に加工した物と考えられる。また、切り込みにより柄の本体に亀裂が入らないように、細身の紐などで補強していたものと考えられる。

無茎鏝の場合は、他県で数例確認されているように、根挟みの存在が挙げられる。この場合も、柄は根挟みの形状から中空の素材への装着が考えられる。また、根挟みを介在としない直接的な装着も考えられるが、対象物に当たった際に、有茎鏝よりも柄の切り込み部分に潜り込む可能性も考えられる。この場合、逆に根挟みの存在から、細身の木材など竹管でない素材を柄として、直接切り込みを設けて装着した可能性も否定できない。

装着法の推定例を模式図にした。Aは有茎鏝の装着、Bは根挟みを用いない無茎鏝、Cは根挟み使用の装着である。

最後に、前述の有茎鏝の発達については、柄との関係における推察であって、対象物の違いによつての使い分けや、ダメージの強弱などについての要素はまったく含まれていないことを付記したい。

## ま と め

### 遺 構

竪穴住居跡： 4軒検出したが、全体形を知り得るものはなかった。ただ、平面形状は隅丸の長方形である可能性が高いことと、掘り込みが深めであること、時期的には円筒上層 a 式期と考えられる。また、床面直上からの大木系土器の出土例から、廃絶後かなり長期間にわたって窪地であった可能性が考えられる。

土坑： 検出数が少なかったが、多くが小高い斜面上の70～75ライン間に構築されている。時期を特定する要素には欠けるが、これらの土坑が同時期であれば、居住空間と画した場の設定がなされていたものと考えられる。

配石遺構： 環状配石の2基は下部に土坑を伴い、遺物が伴出しないことから時期及び性格の不明な遺構である。墓壇とすれば規模的な問題から合葬墓の可能性が高く、環状の配石は墓標と考えられる。位置的に近接していることから、他の配石も同様に墓標の可能性が考えられる。

### 遺 物

土器は約400箱の出土量で、数箱を除いて縄文時代中期の土器である。

土器の大半を占める円筒式土器は、ほとんどが円筒上層 a 式期のもので、その文様構成に種々の要素が観察された。また、その出土量からも文様の変遷が推察される好資料と考えられる。

大木系の土器においても、特に特殊な文様構成のものは出土しなかったが、出土点数の多さから、円筒土器と同様に資料の蓄積がなされたものと考えられる。

大木 8・9 式の土器では、移入品と考えられる土器が出土しており、今後、胎土分析などから産地の同定が望まれる。

後期の土器では、おもに甕棺土器だけの出土状態から、調査区内に墓域が存在した可能性が示唆される。

石器は、約60箱の出土であったが、剥片素材のものでは、不定形石器が非常に多く出土し、特に小礫を素材とした両極技法による剥片が多量に出土している。

定形石器では、石鏃が最も多く出土した。この中でもアスファルト付着のものが約1割近く存在し、着柄の状況が推定できる好資料である。

石匙は、縄文前期から中期前半にかけて出土量が多い傾向があるが、本遺跡においては石鏃の出土量に対しても、きわめて少量の出土である。今後、この時期において同様の傾向が認め

られれば、本器種に替わる他器種の存在を考慮しなければならないと考えられる。スクレーパーとした不定形石器の大部分がそれに該当すると思われるが、今回の調査で多量に出土した不定形石器においては、破損品が多く、刃部を長く作出したものが少量であることから、断定し得ない。

礫素材の石器では、凹み石が最も多く出土している。また、石斧も多く出土しているが、打製石斧はその可能性があるものが数点だけで、アツツ的用法の器種が認められない。量的な比率からは、凹み石・スリ石の出土量に対し、石皿の点数が非常に少ない傾向がみられる。これは、遺跡本体における位置的な要因によるものか、この時期の石器組成全体に係わるものかは把握し得なかった。

土製品では、土偶の出土量が多くみられ、この中の上層a式とした脚部破片は、その捺糸圧痕による文様構成が、同年調査の青森市の三内丸山遺跡出土のものと同様と酷似している。また、円盤状土製品が多く出土した。

石製品では、舟形のものや、水晶製品など貴重な資料が出土している。

今回の調査は、農道の付け替えという非常に細長い範囲の調査であり、また、3分の2程が近沢川の崖上にあることなどから、ほぼ遺跡範囲の縁辺を調査したにすぎない。このため、遺跡本体の状況はほとんど把握できなかったが、居住区域の一部は台地縁辺までのびていたことが理解された。また、遺物量の多さから集落の規模も大きかったことが推察される。今回の調査区は、出土遺物から、縄文時代中期に最も頻繁に活用された場として位置付けられるが、土器の型式からは、円筒上層a式期と、その後やや時間差をおいた榎林式期・最花式期に、生活の主体がみられる。

野辺地町による分布・試掘調査からは、今回の調査区にごく近接した沢筋で、円筒上層式土器の包含層下部から、さらに円筒下層式の土器の堆積が認められたことや、やや離れた地点で縄文時代後期の遺物包含層が確認されていることから、本遺跡は、縄文時代前期、またはそれ以前からの長い期間にわたる集落跡が存在していたものと考えられる。また、小さな川または谷筋をはさんで連続する狭い台地上にも遺跡の存在が認められていることから、本遺跡を含む大規模な集落の存在が、長期間存在していたものと考えられる。

遺跡近景（崖上—調査区）



調査区（北東側から）

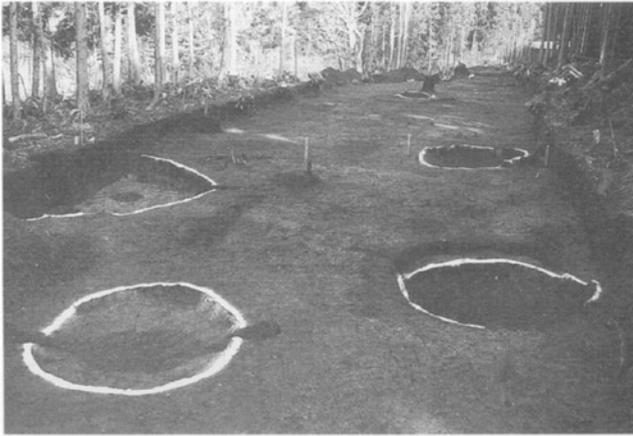


調査区（北東側から）

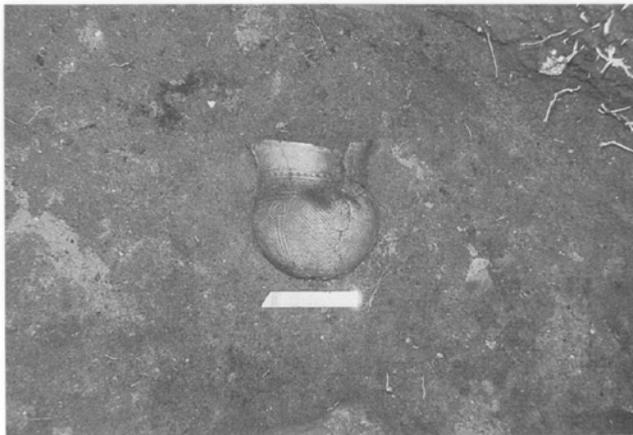




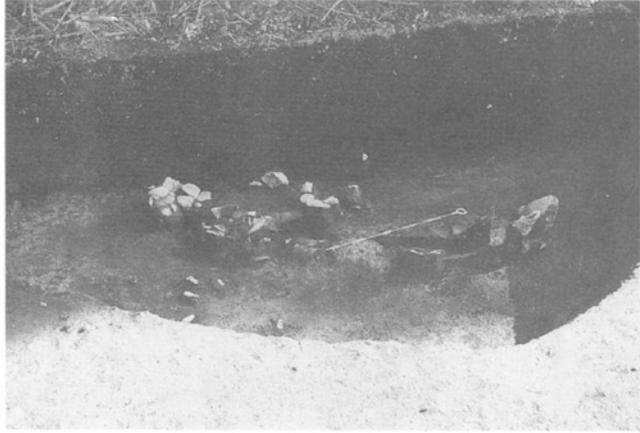
基本層序



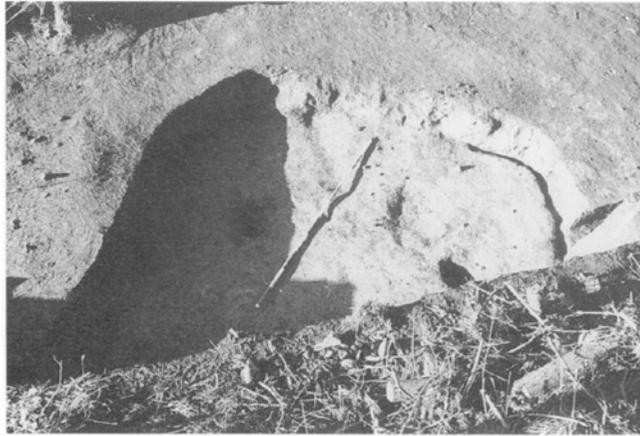
第4号竖穴住居跡ほか



遺物出土状態



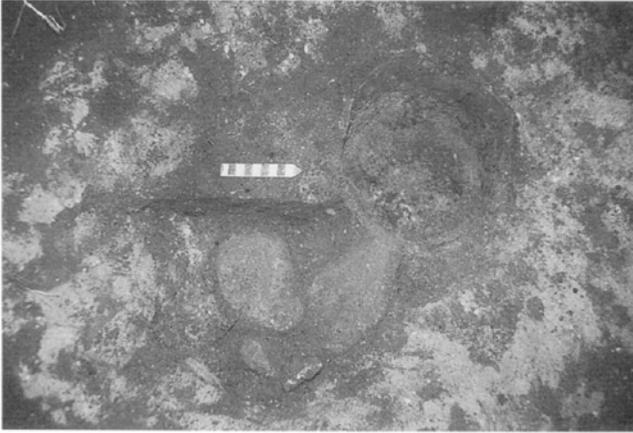
第 3 号竖穴住居跡



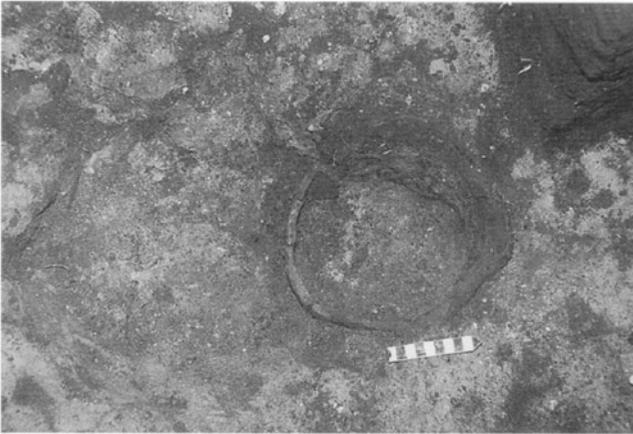
第 3 号竖穴住居跡



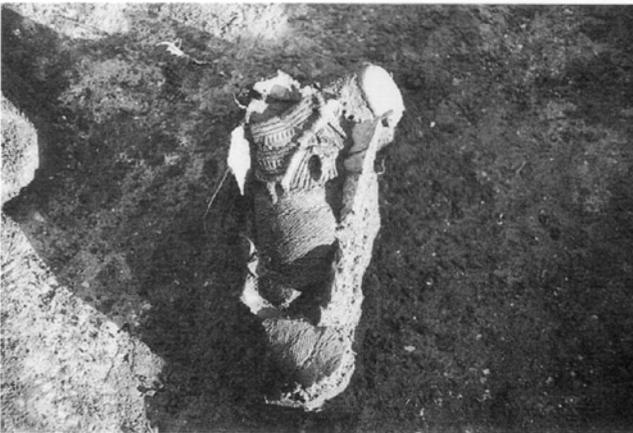
第 3 号竖穴住居跡



第4号竖穴住居跡 炉



第4号竖穴住居跡  
炉・埋設土器



第4号竖穴住居跡  
土器出土状態

第4号竖穴住居跡  
土器出土状態



第4号竖穴住居跡  
土器出土状態



第5・6号竖穴住居跡  
第10号土坑





第 6 号竖穴住居跡



第 6 号竖穴住居跡

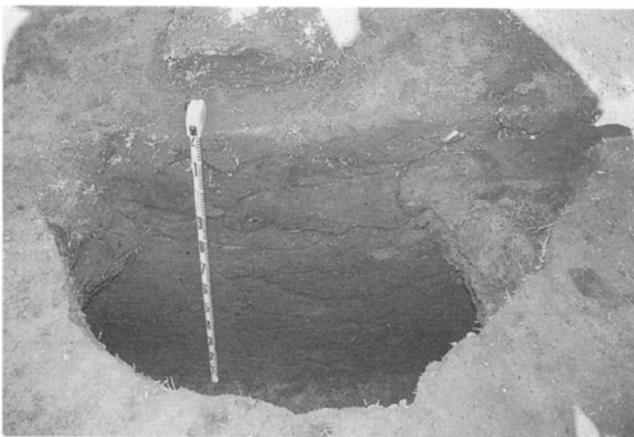


第 6 号竖穴住居跡 炉

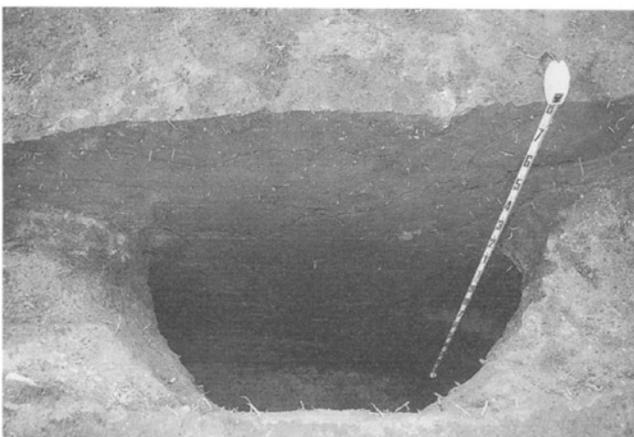
第1～7号土坑



第1号土坑



第2号土坑





第2号土坑



第3号土坑



第3・7号土坑



第 4 号土坑



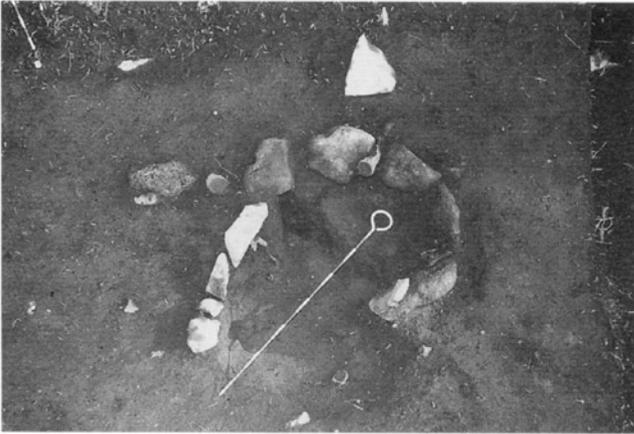
第 5 号土坑



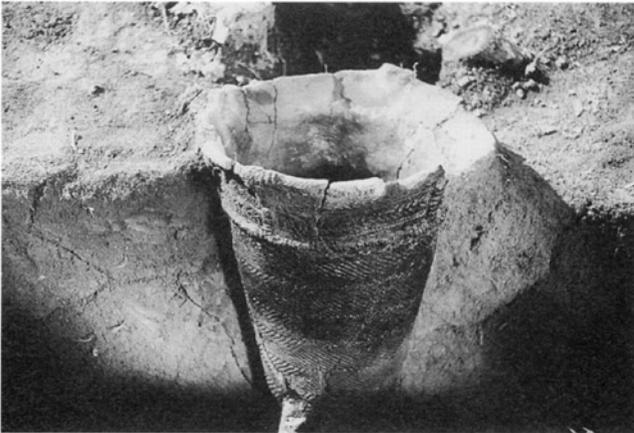
第 5 号土坑



第9号土坑

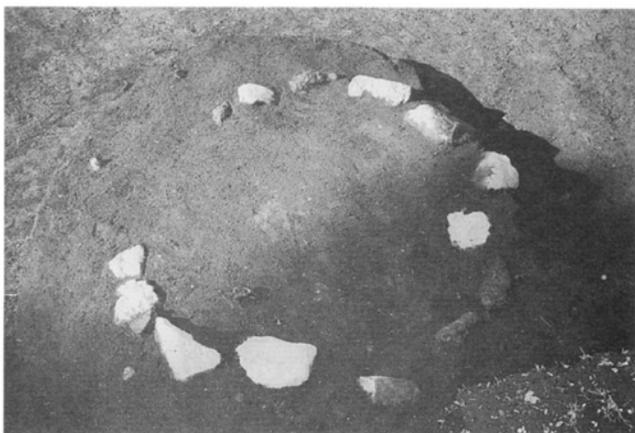


第1号屋外炉



埋設土器遺構

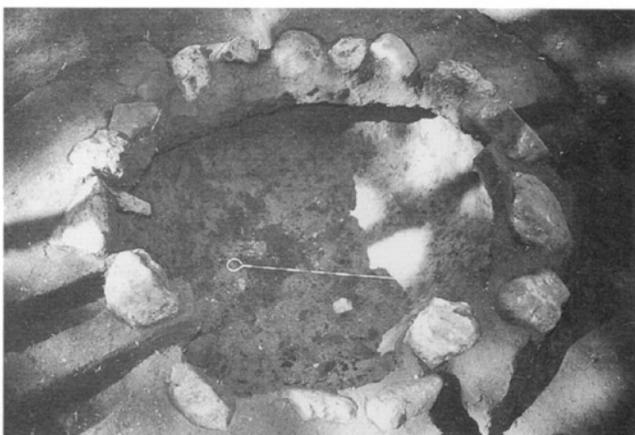
第1号配石



第1号配石

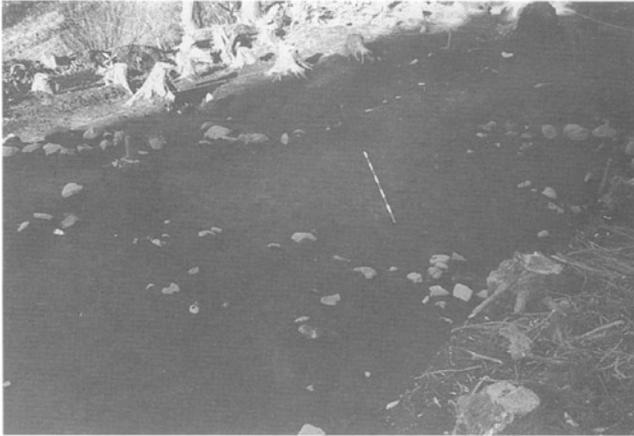


第1号配石





第1号配石

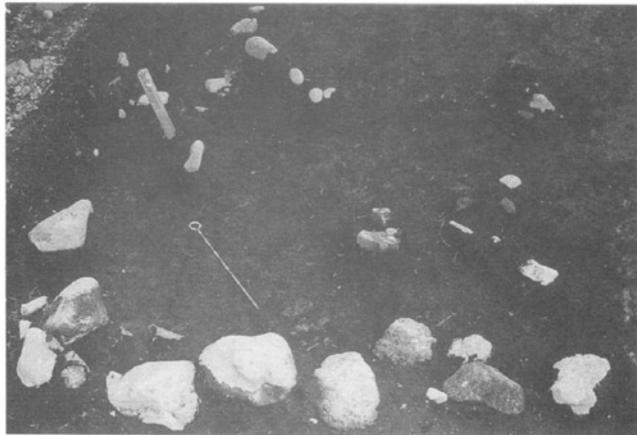


第3～7号配石



第3号配石

第3号配石



第4・5号配石



第1号溝状ピット





2



3



4

写真-14 第3号竖穴住居跡出土土器-1

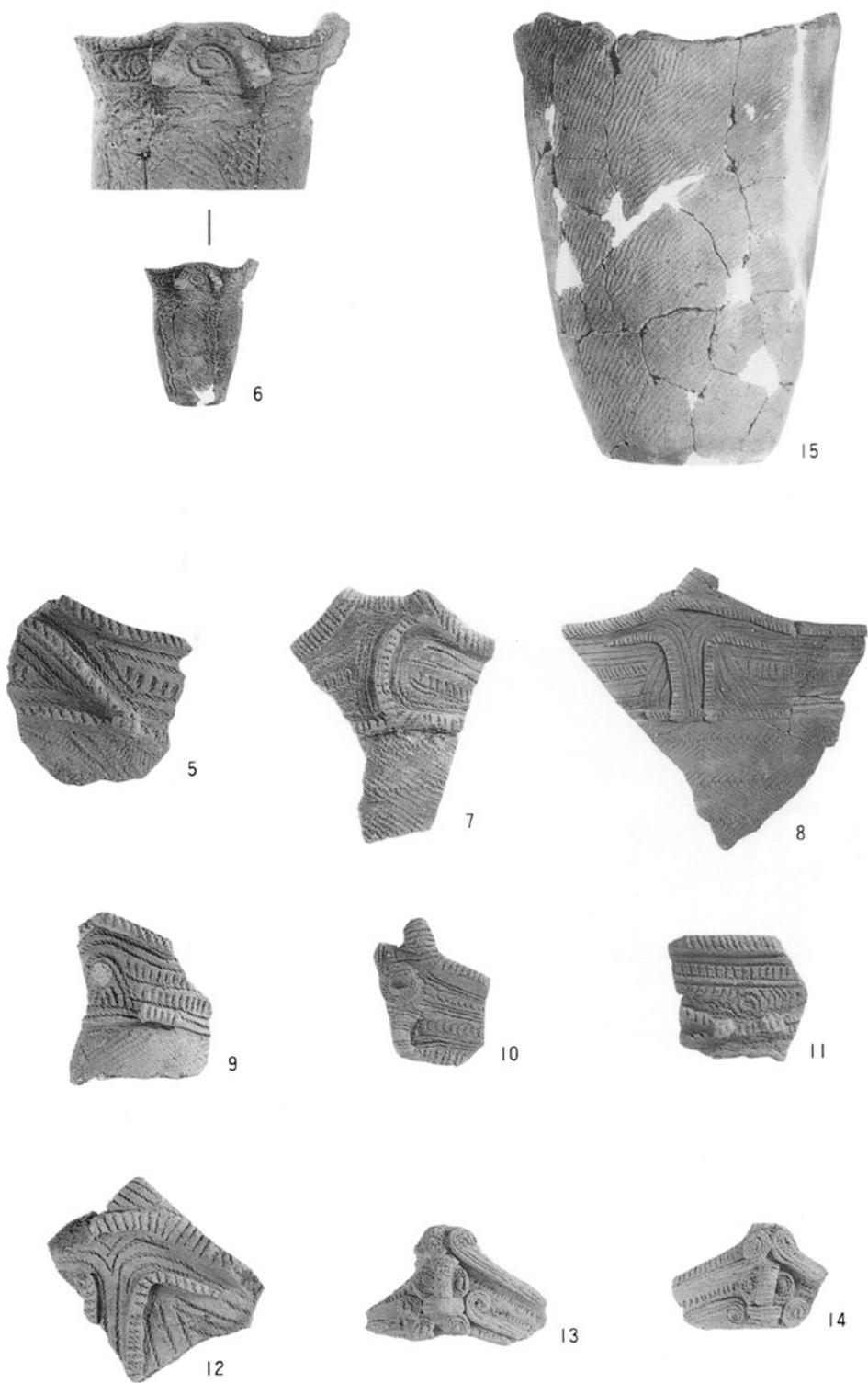


写真-15 第3号竖穴住居跡出土土器-2

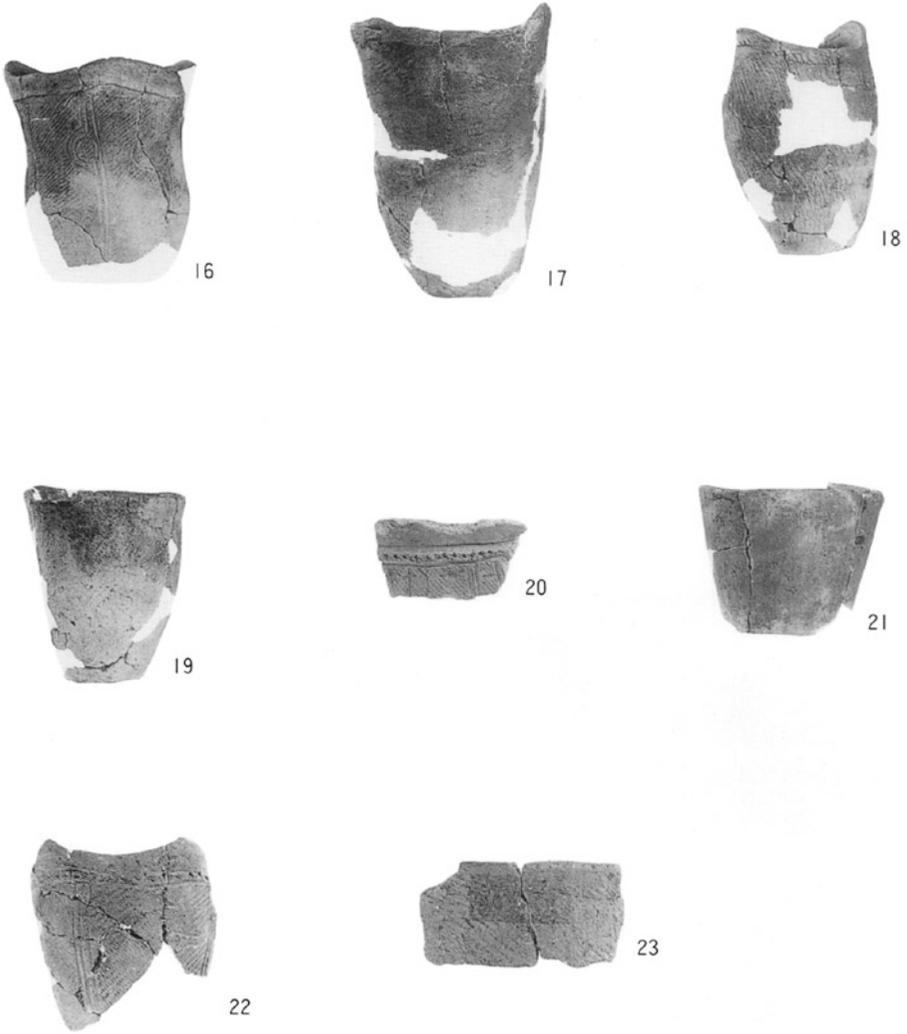


写真-16 第3号竖穴住居跡出土土器-3

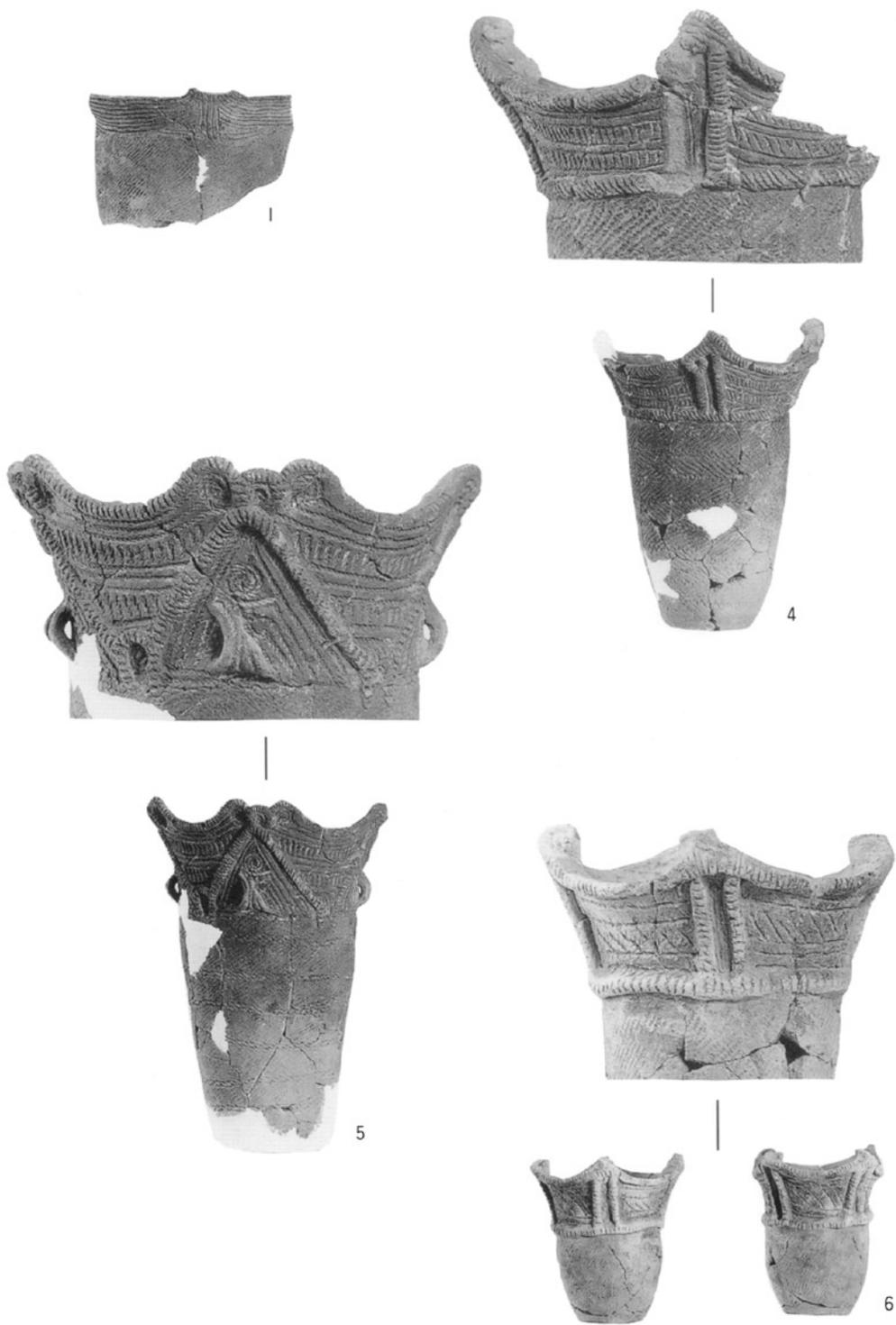


写真-17 第4号竖穴住居跡出土土器-1

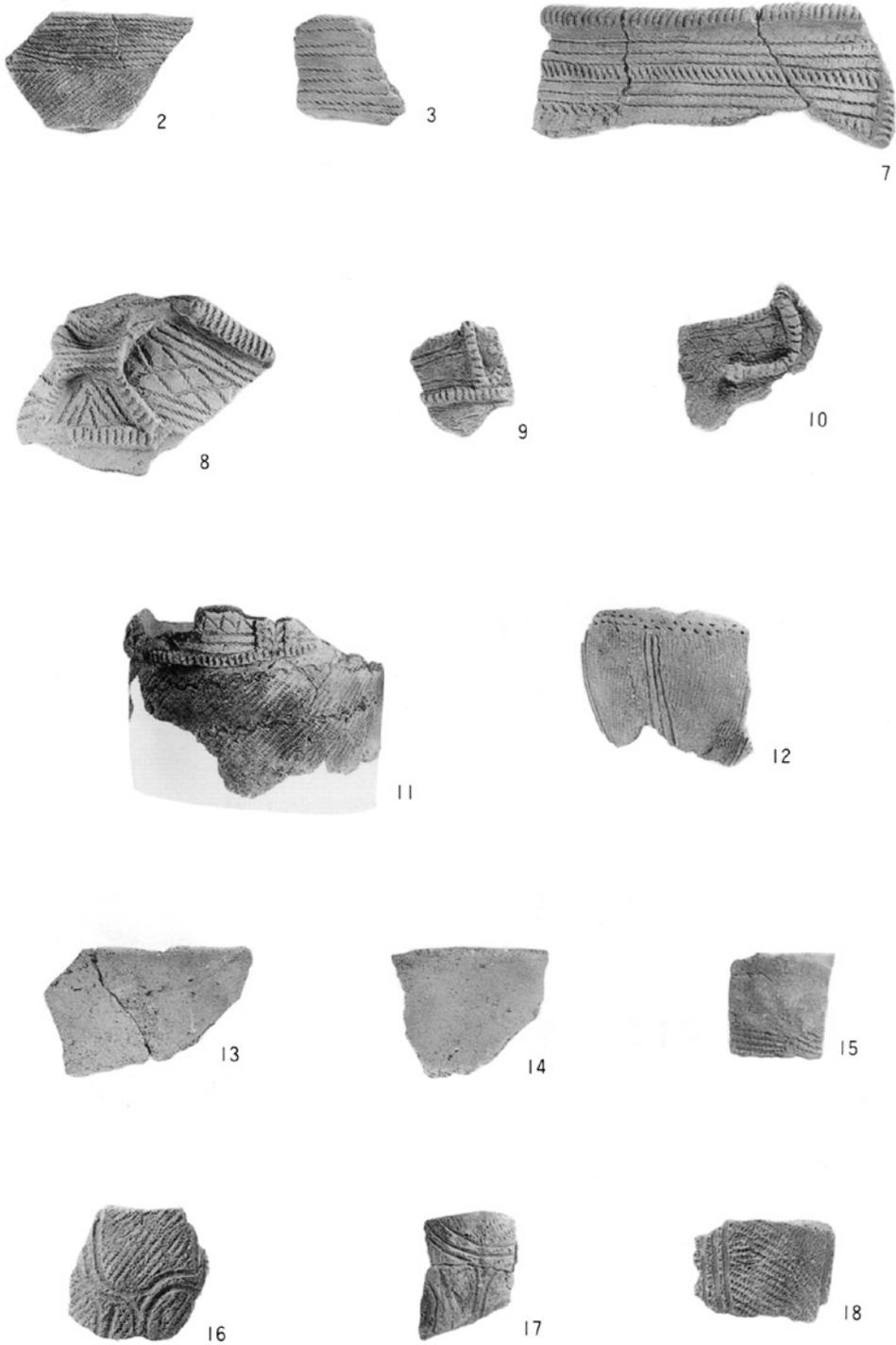


写真-18 第4号竖穴住居跡出土土器-2

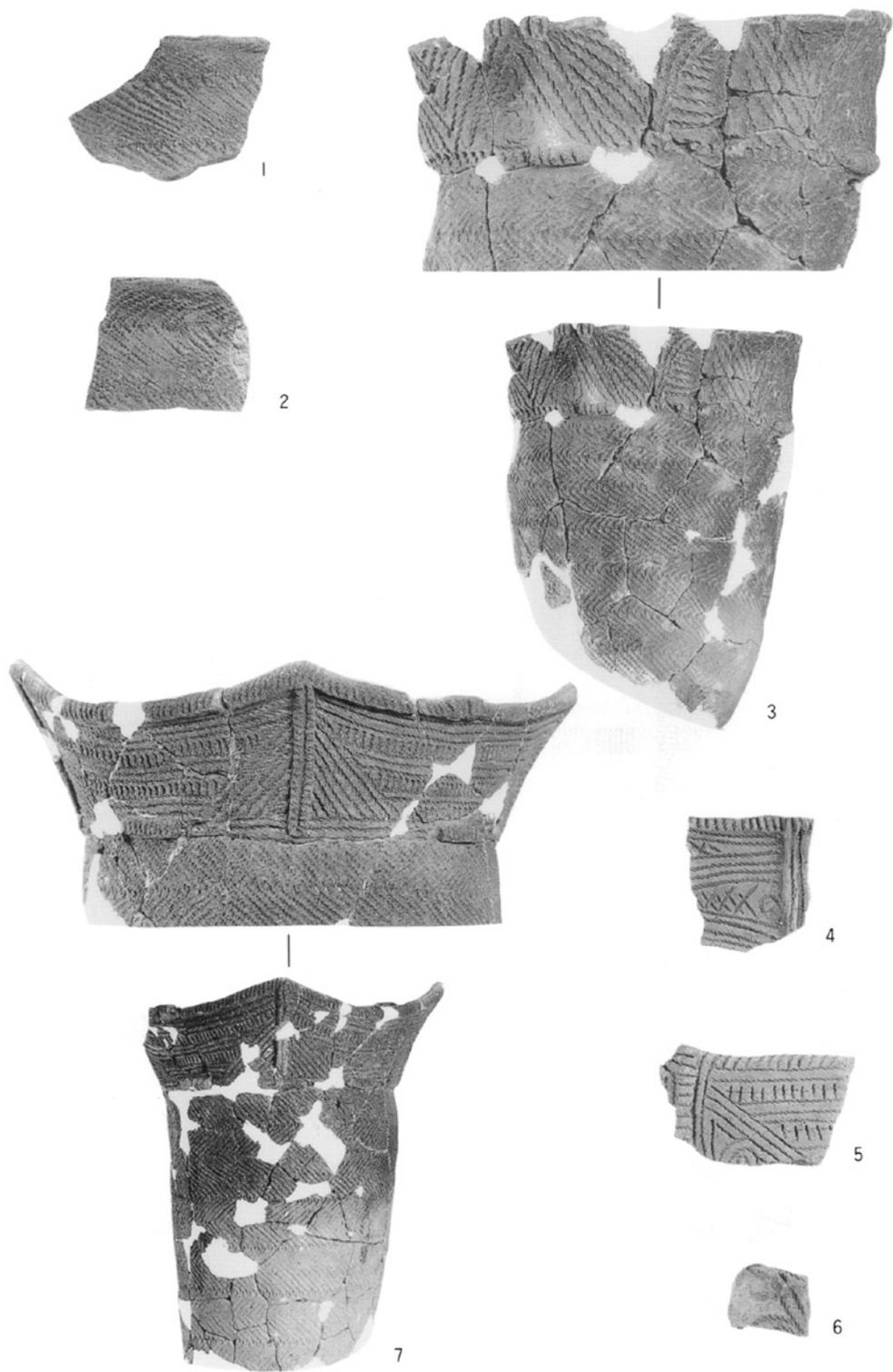


写真-19 第6号竖穴住居跡出土土器-1



8



9



11



10

写真-20 第6号竖穴住居跡出土土器-2

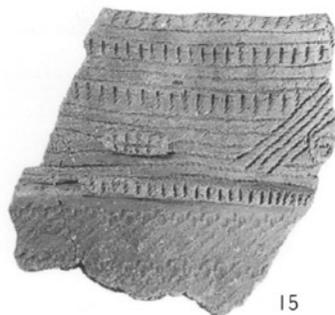
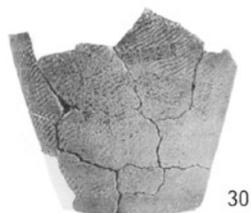


写真-21 第6号竖穴住居跡出土土器-3

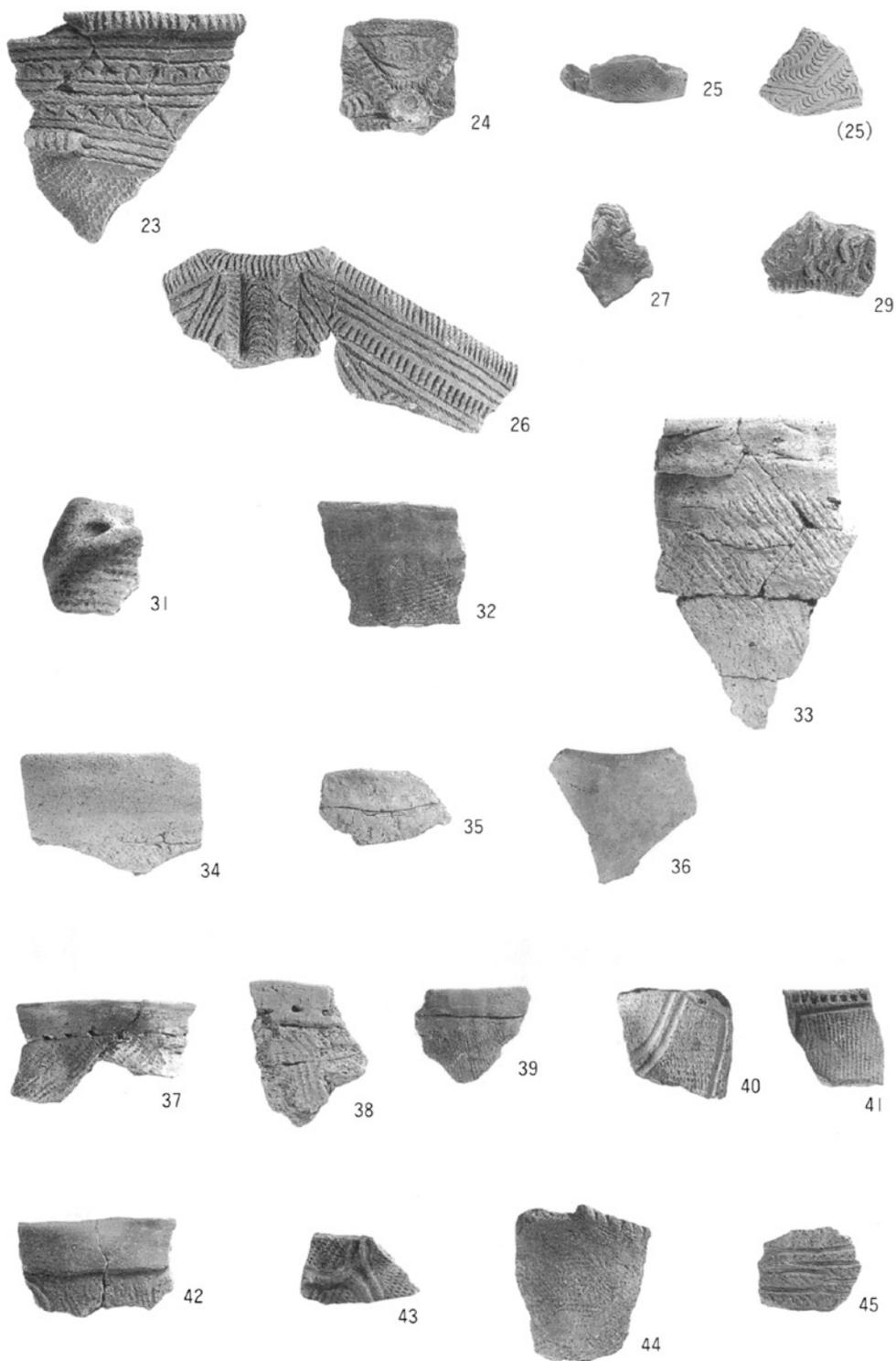
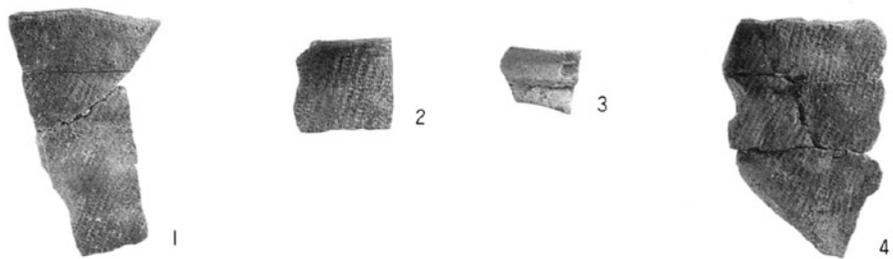
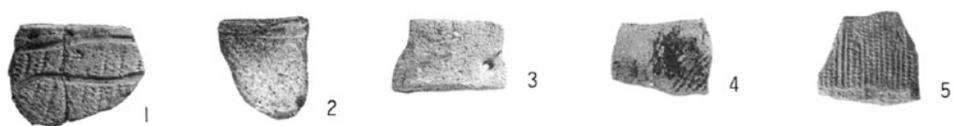


写真-22 第6号竖穴住居跡出土土器-4

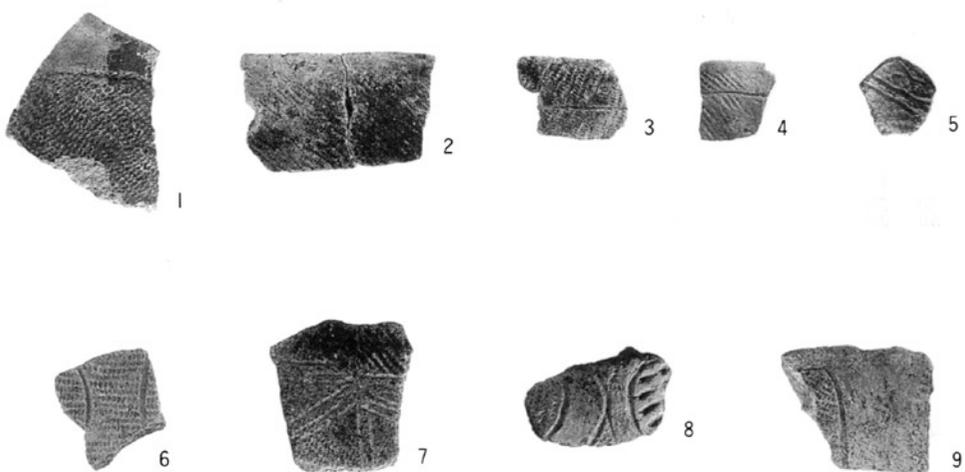
第1号土坑

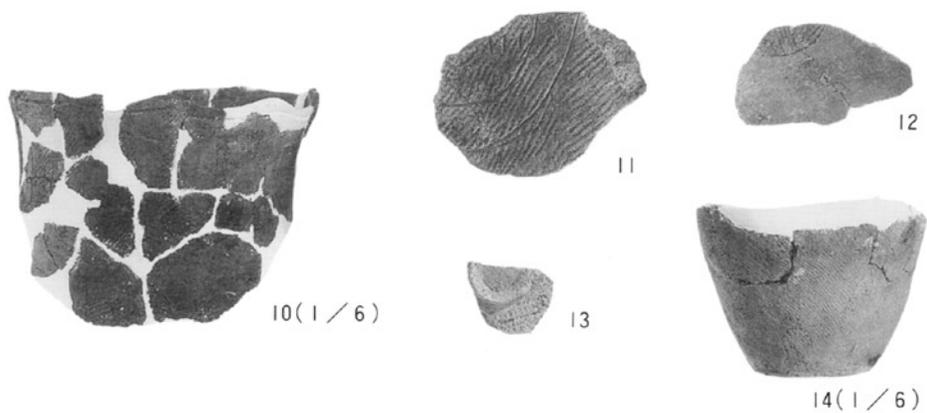


第2号土坑

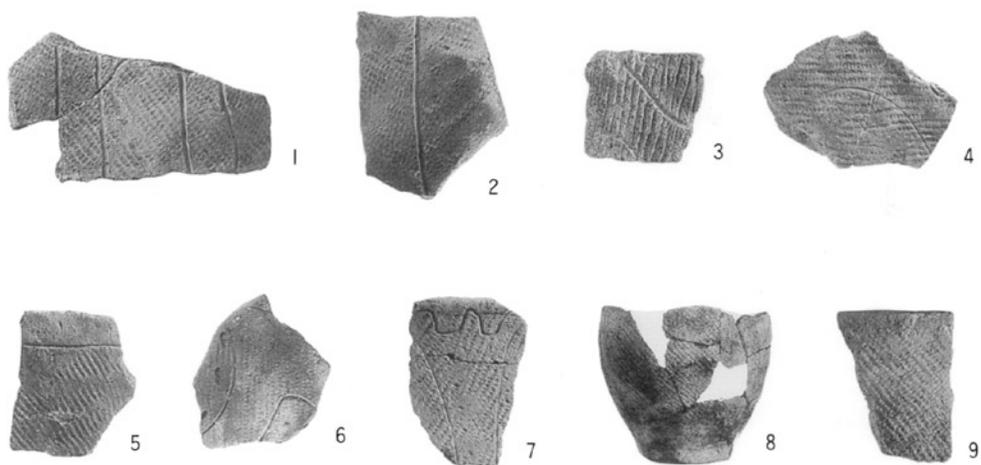


第3号土坑





第4号土坑



第6号土坑

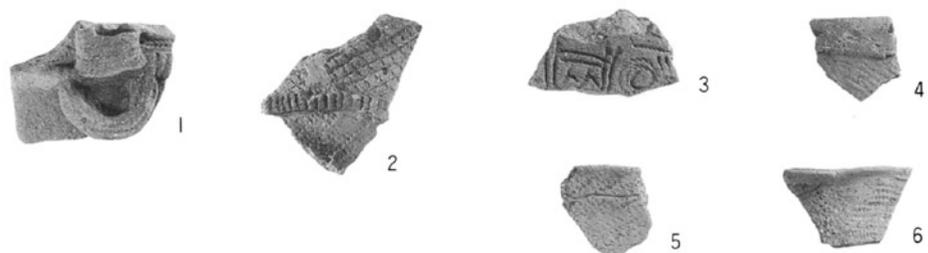
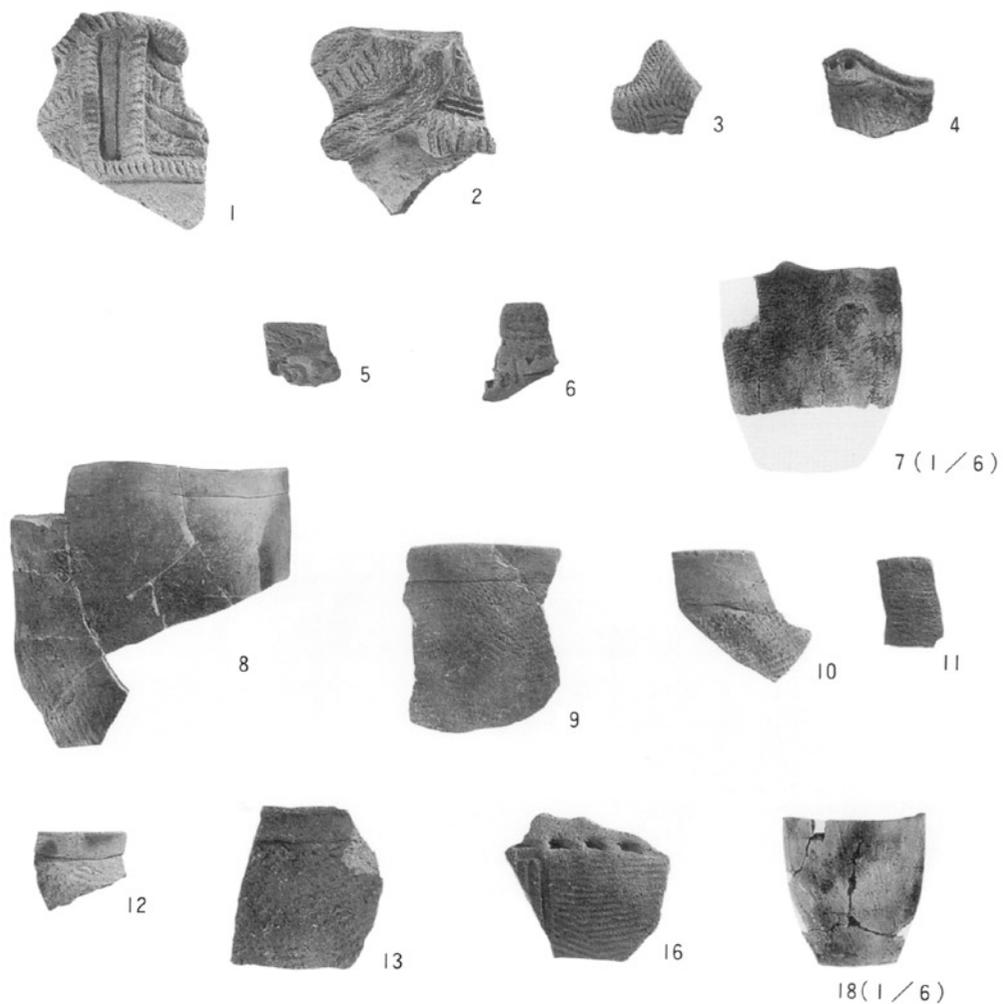


写真-24 土坑出土土器-2

第8号土坑



第9号土坑

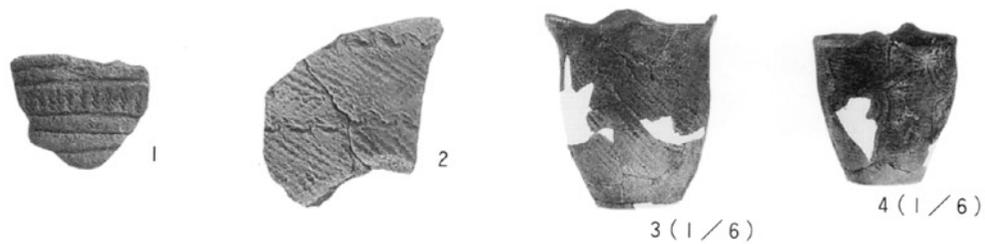


写真-25 土坑出土土器-3

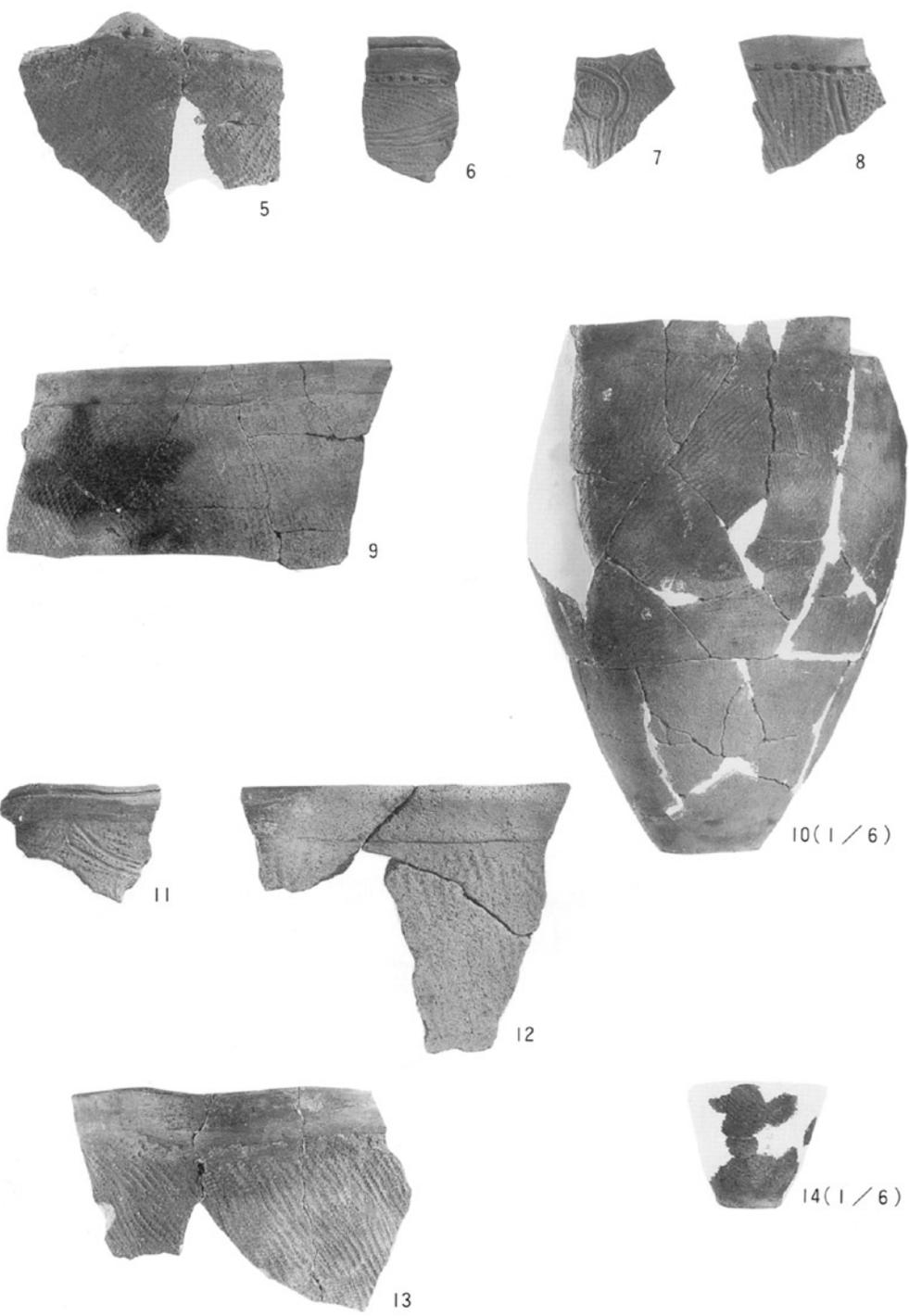


写真-26 土坑出土土器-4

第10号土坑



1 (1/6)



5 (1/6)

写真-27 土坑出土土器-5



埋設土器



第1号石配



第2号配石



写真-28 土坑・配石遺構出土土器、埋設土器

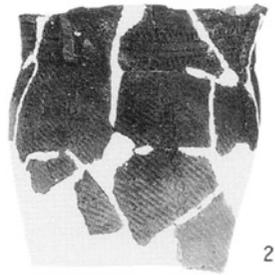
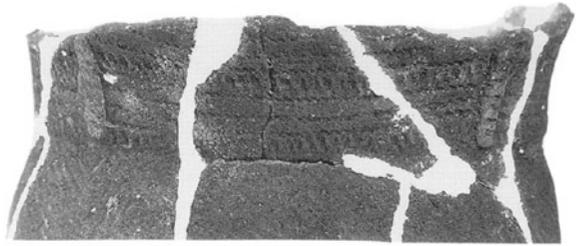


写真-29 遺構外出土器-1 (第II群)

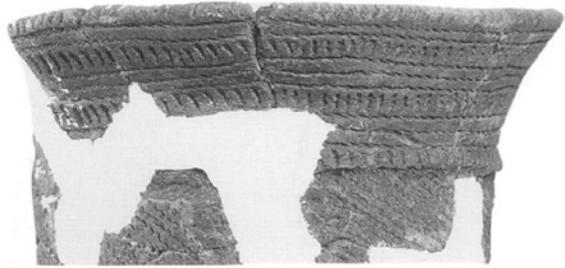
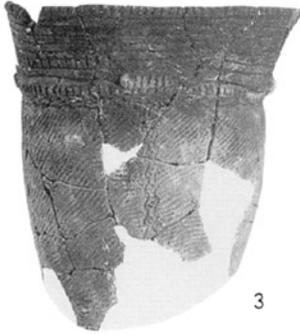
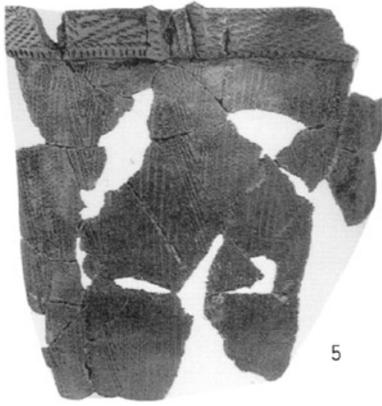


写真-30 遺構外出土土器-2 (第II群)



5



6 (1/4)



7



8 (1/4)



9 (1/4)



10

写真-31 遺構外出土土器-3 (第II群・第III群1類)



写真-32 遺構外出土土器-4 (第III群1類)

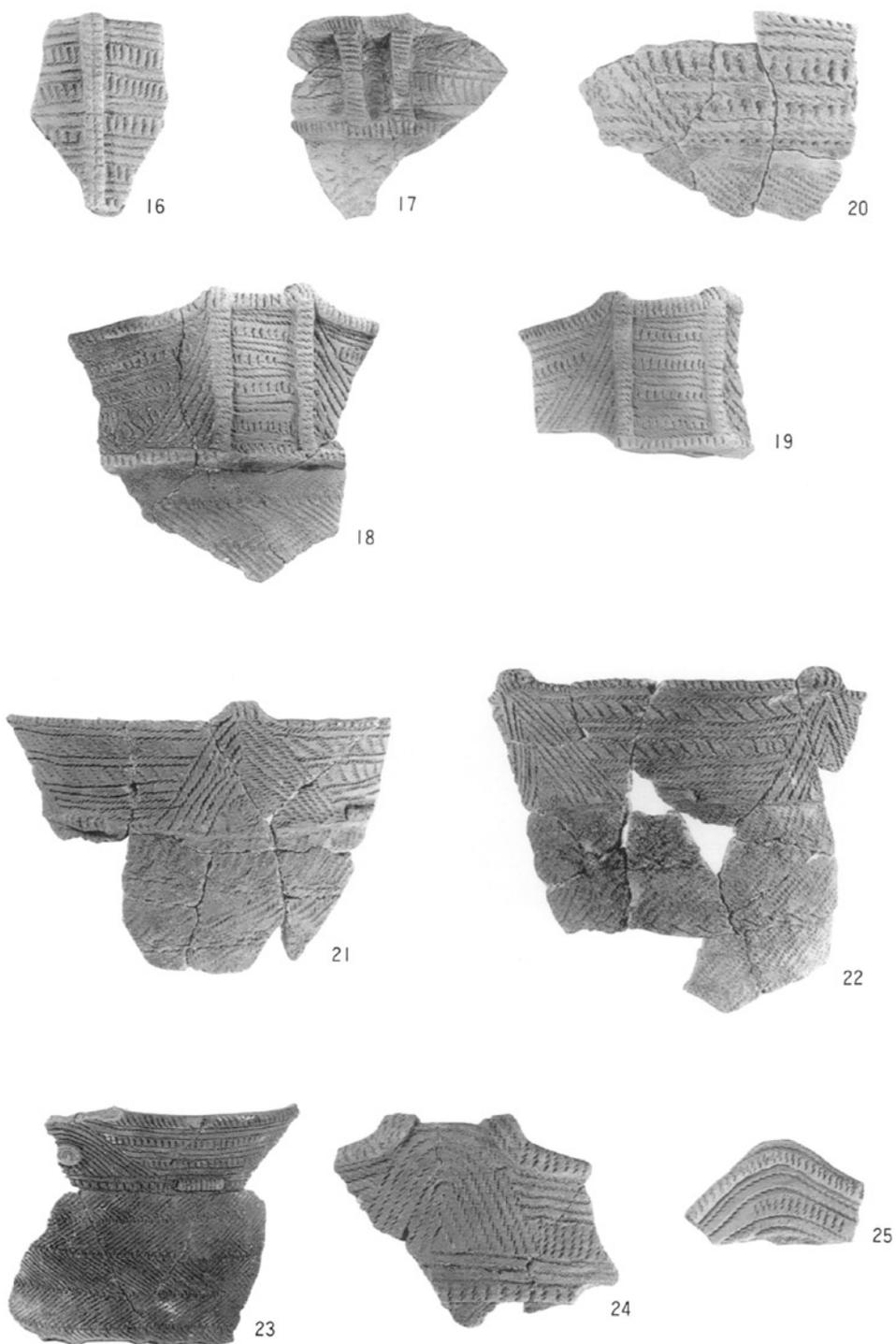


写真-33 遺構外出土土器-5 (第Ⅲ群1類)



26



27

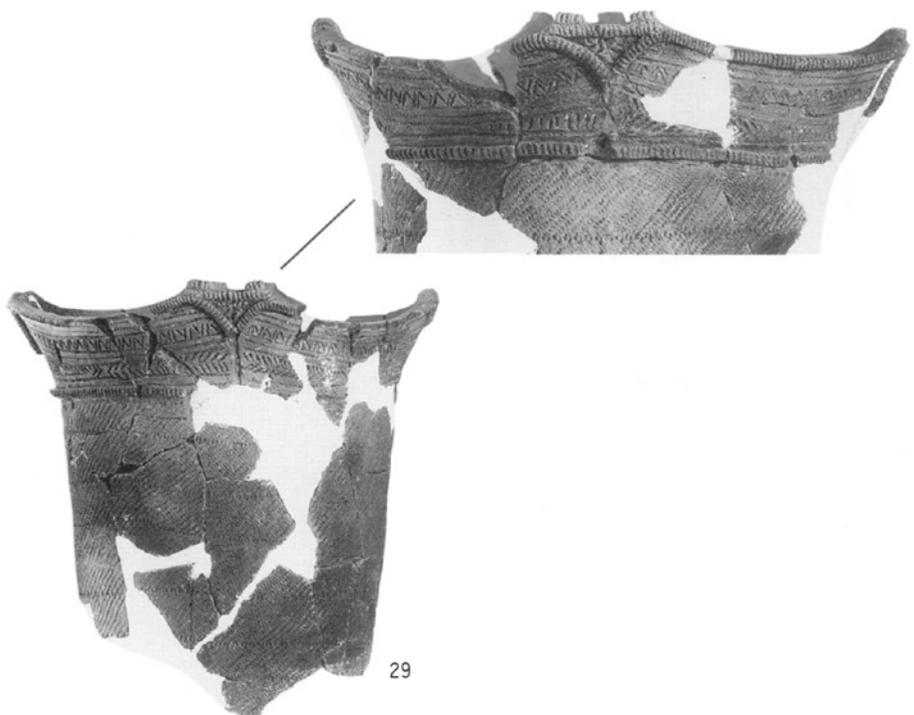


30

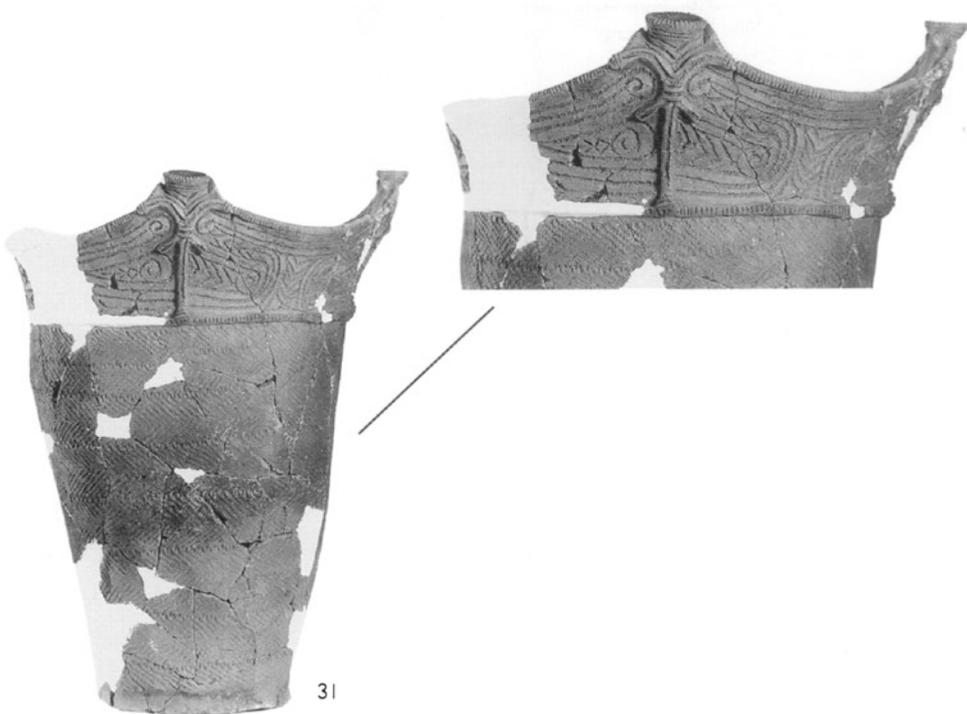


28(1/6)

写真-34 遺構外出土土器-6 (第Ⅲ群1類)

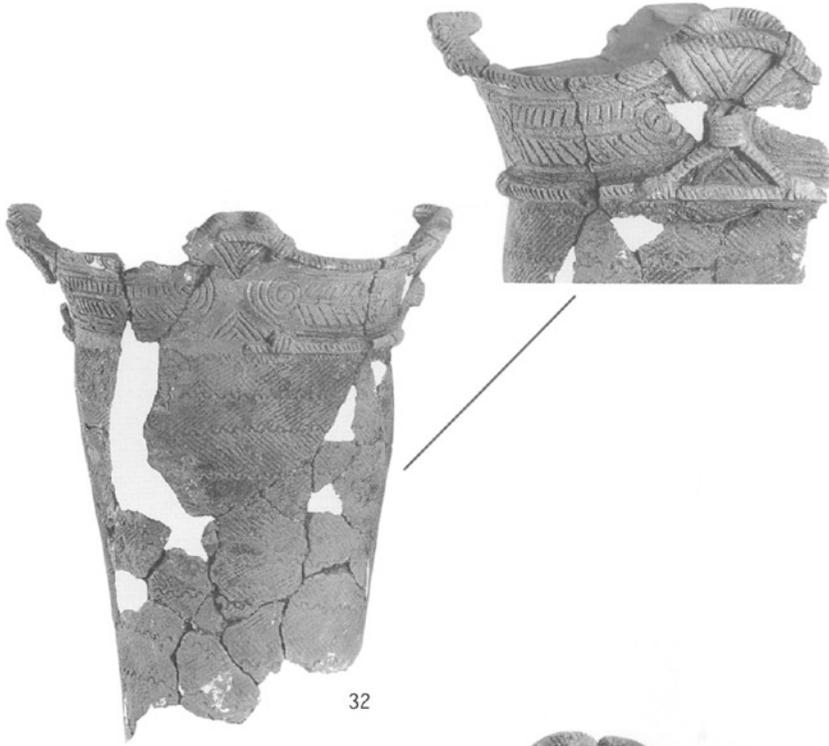


29



31

写真-35 遺構外出土土器-7 (第Ⅲ群1類)



32



33

写真-36 遺構外出土土器-8 (第III群1類)

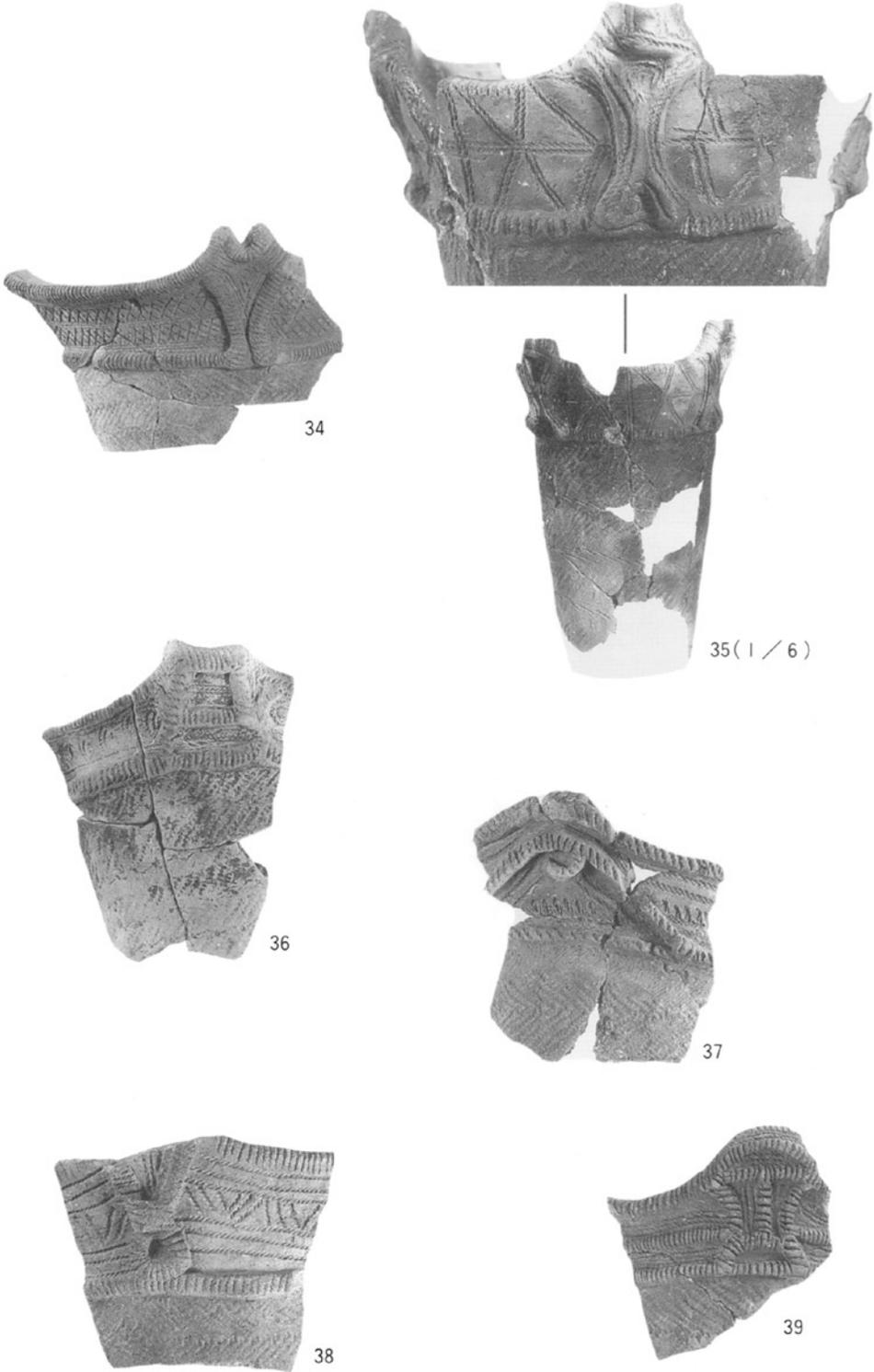


写真-37 遺構外出土土器-9 (第III群1類)



40



41



43



42



44



45



46



47



48



49



50

写真-38 遺構外出土土器-10 (第III群1類)

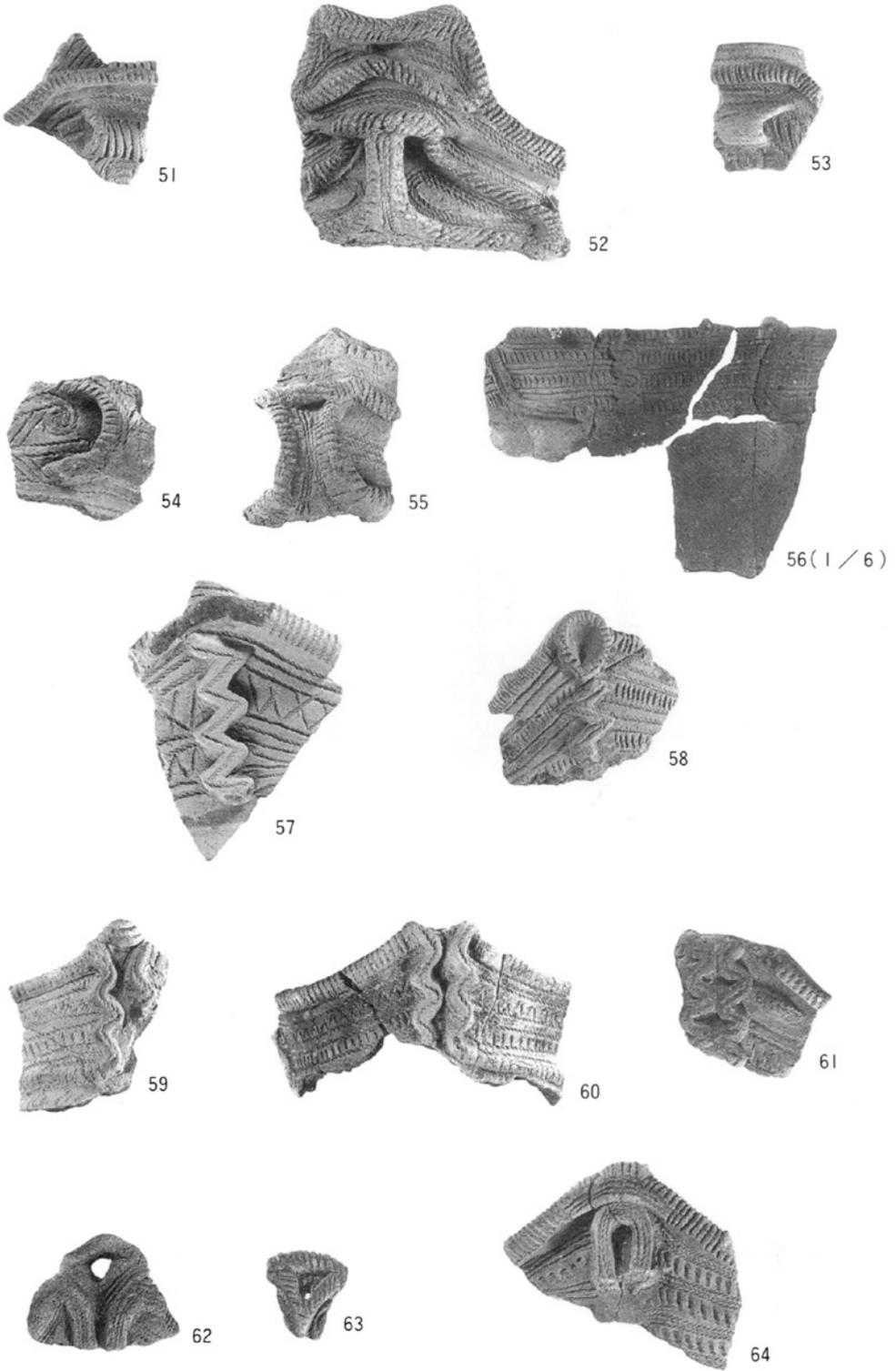


写真-39 遺構外出土土器-11 (第Ⅲ群1類)



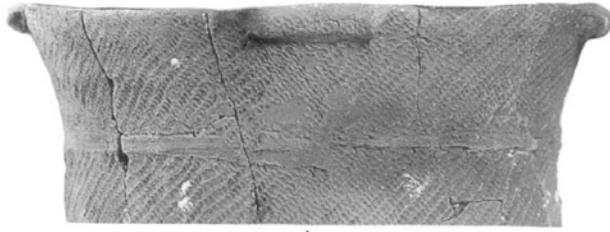
65



66



67



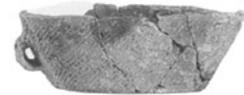
68(1/6)



69



70



71(1/6)

写真-40 遺構外出土土器-12 (第III群1類)

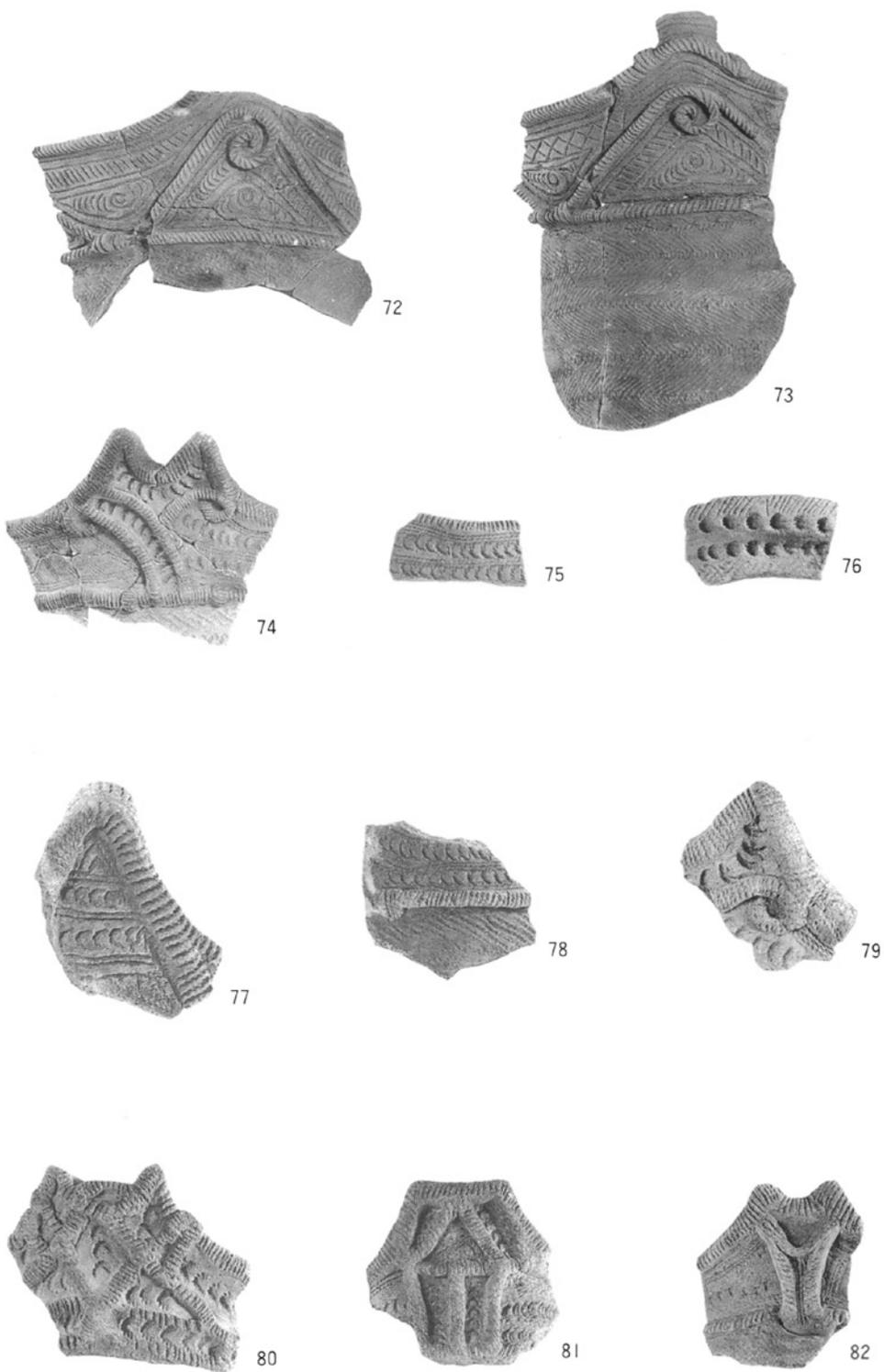


写真-41 遺構外出土土器-13 (第Ⅲ群2類)



83



85



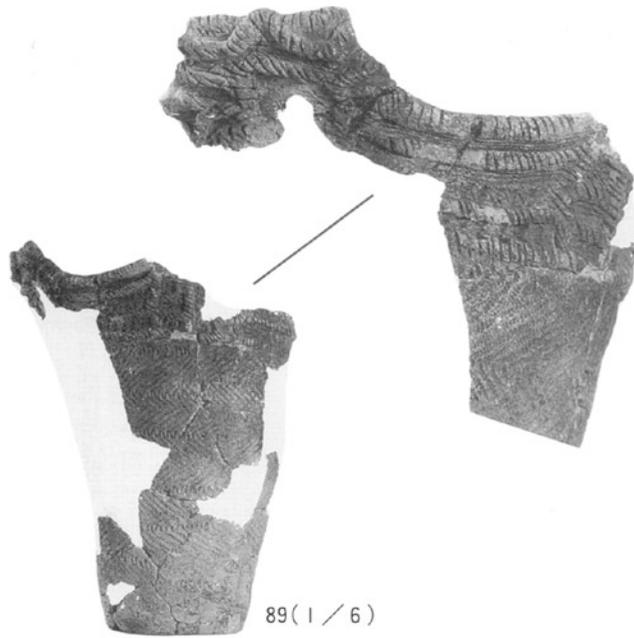
86



87



88



89(1/6)

写真-42 遺構外出土土器-14 (第III群 2類・3類)



90



92



93



94

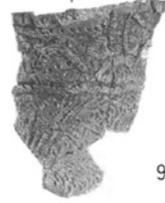


95(1/6)

写真-43 遺構外出土土器-15 (第III群3類)



96(1/6)



99(1/6)



97



98



100



101



102



103



104



105

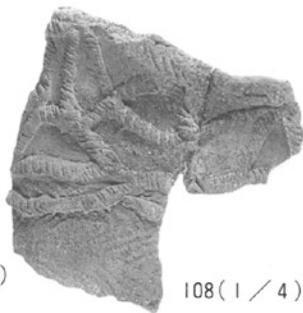


106

写真-44 遺構外出土土器-16 (第III群3類)



107(1/4)



108(1/4)



109(1/4)



110



111



112

写真-45 遺構外出土土器-17 (第III群3類・4類)

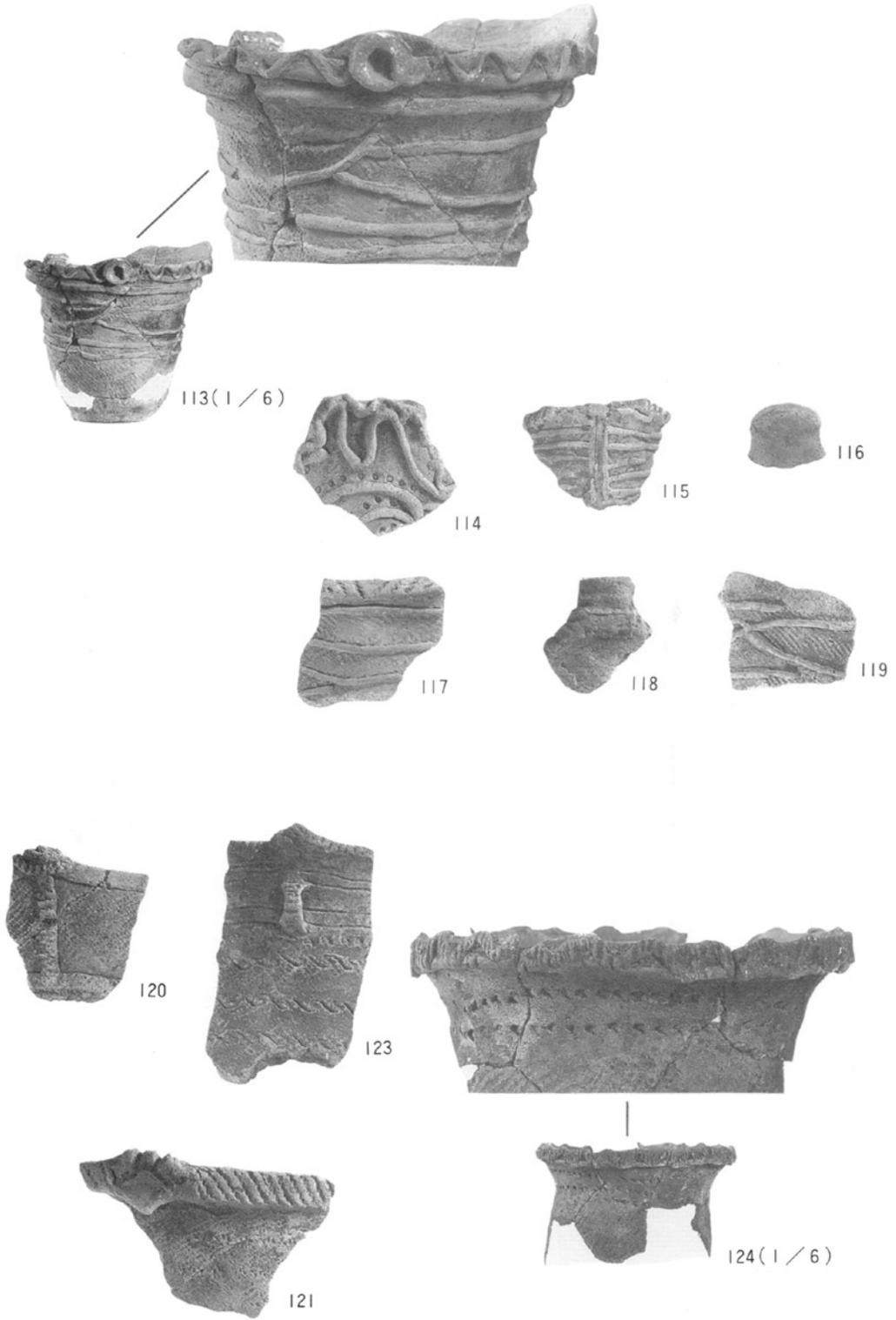


写真-46 遺構外出土土器-18 (第III群4類・5類)



125(1/4)



126(1/4)



128(任意)



129



131



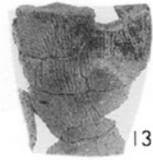
132



130



133

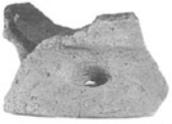


135



134

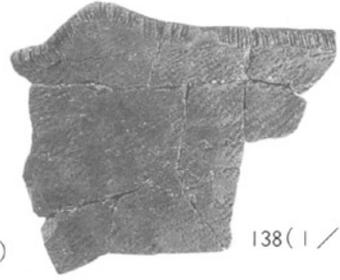
写真-47 遺構外出土土器-19 (第III群6類)



136(1/4)



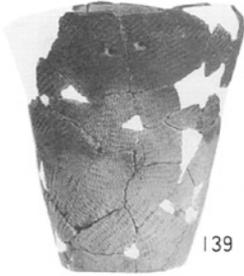
137(1/4)



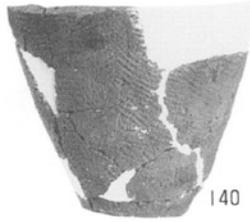
138(1/4)



122(1/4)



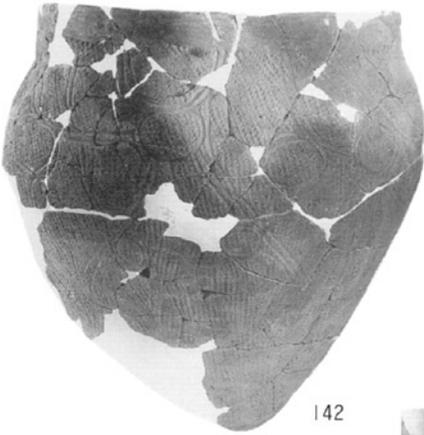
139



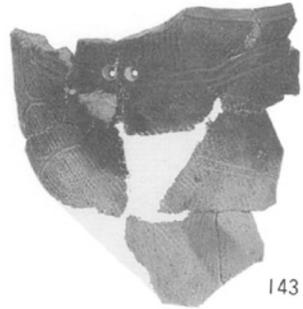
140



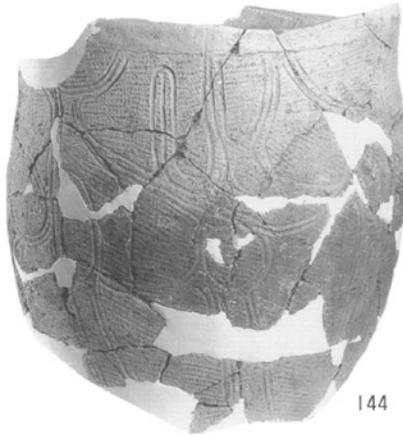
141



142



143



144

写真-48 遺構外出土土器-20 (第III群6類・第IV群1類)

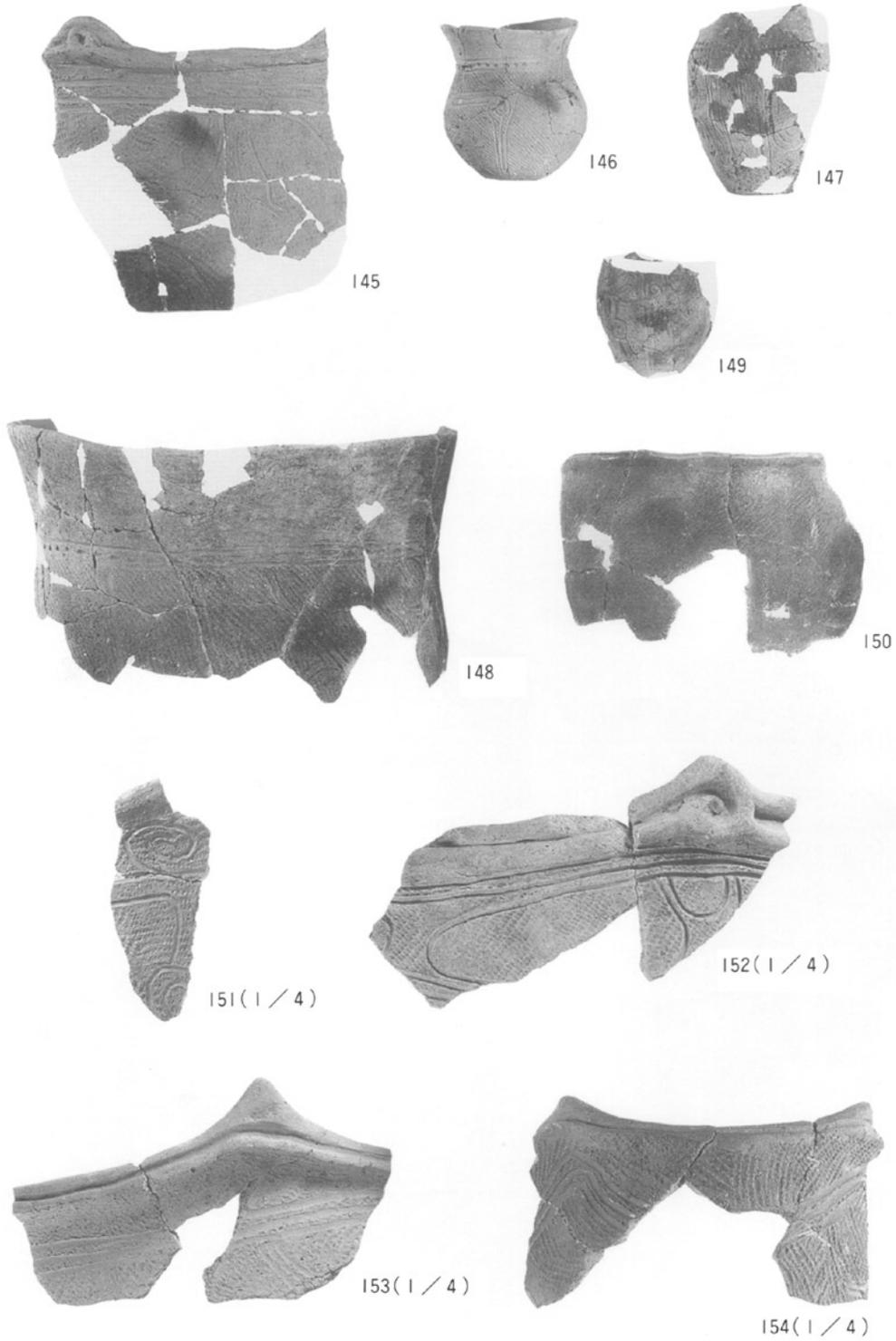


写真-49 遺構外出土土器-21 (第IV群1類)



155



156



157



158



159



160



161



162



163(1/6)



164(1/6)



165(1/6)

写真-50 遺構外出土土器-22 (第IV群1類)

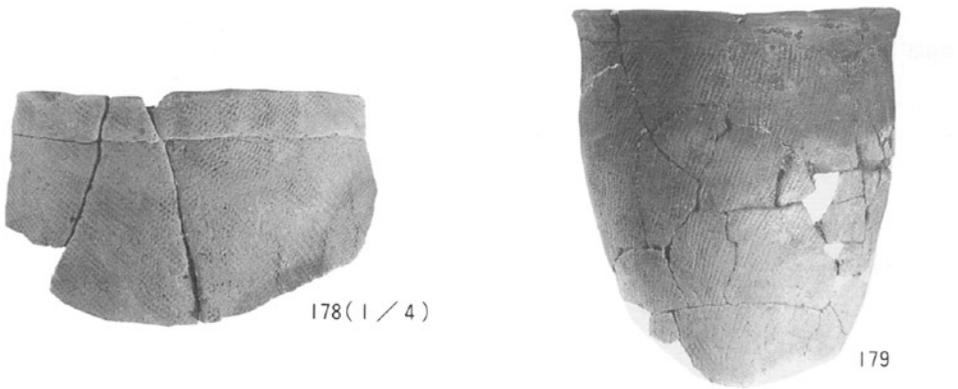
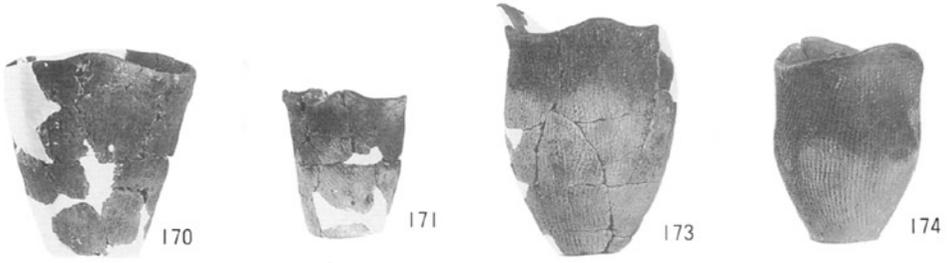
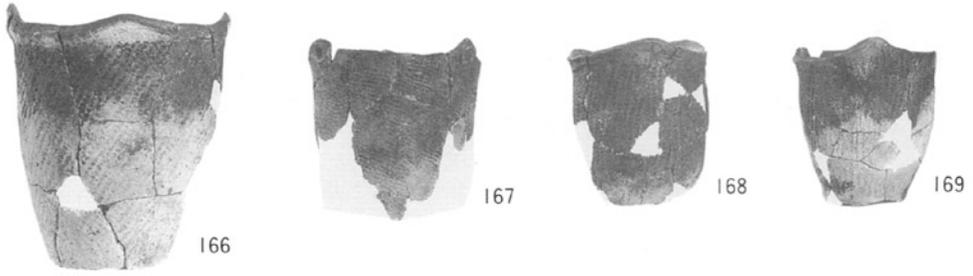
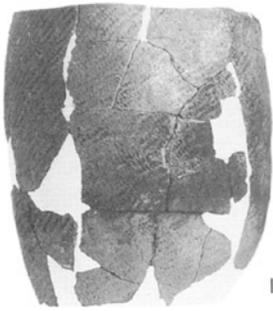


写真-51 遺構外出土土器-23 (第IV群1類)



180



181



183



184



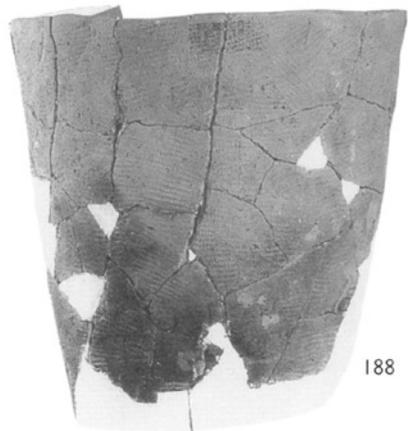
182(1/4)



185



186



188



187

写真-52 遺構外出土土器-24 (第IV群1類)

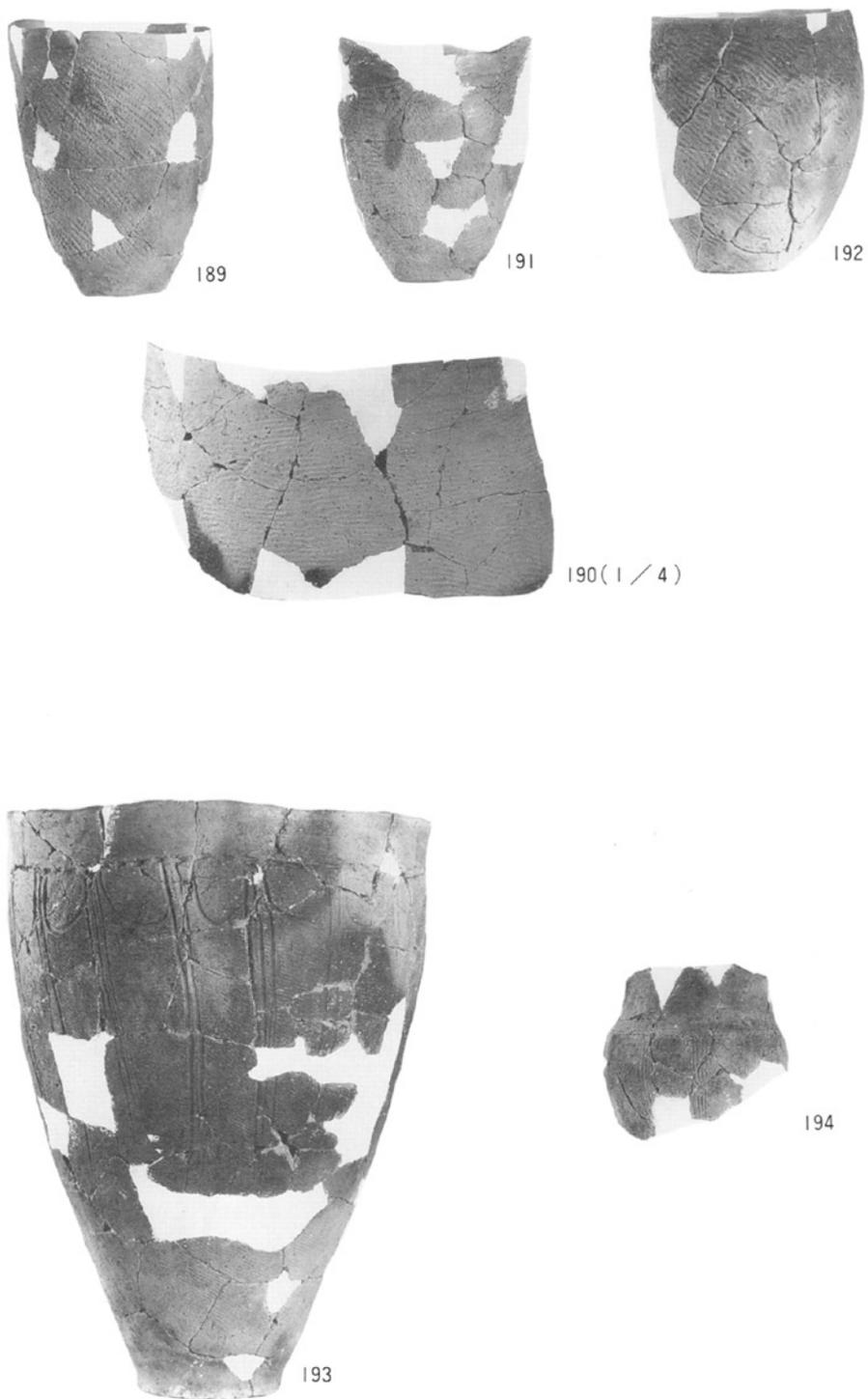


写真-53 遺構外出土土器-25 (第IV群1類・2類)

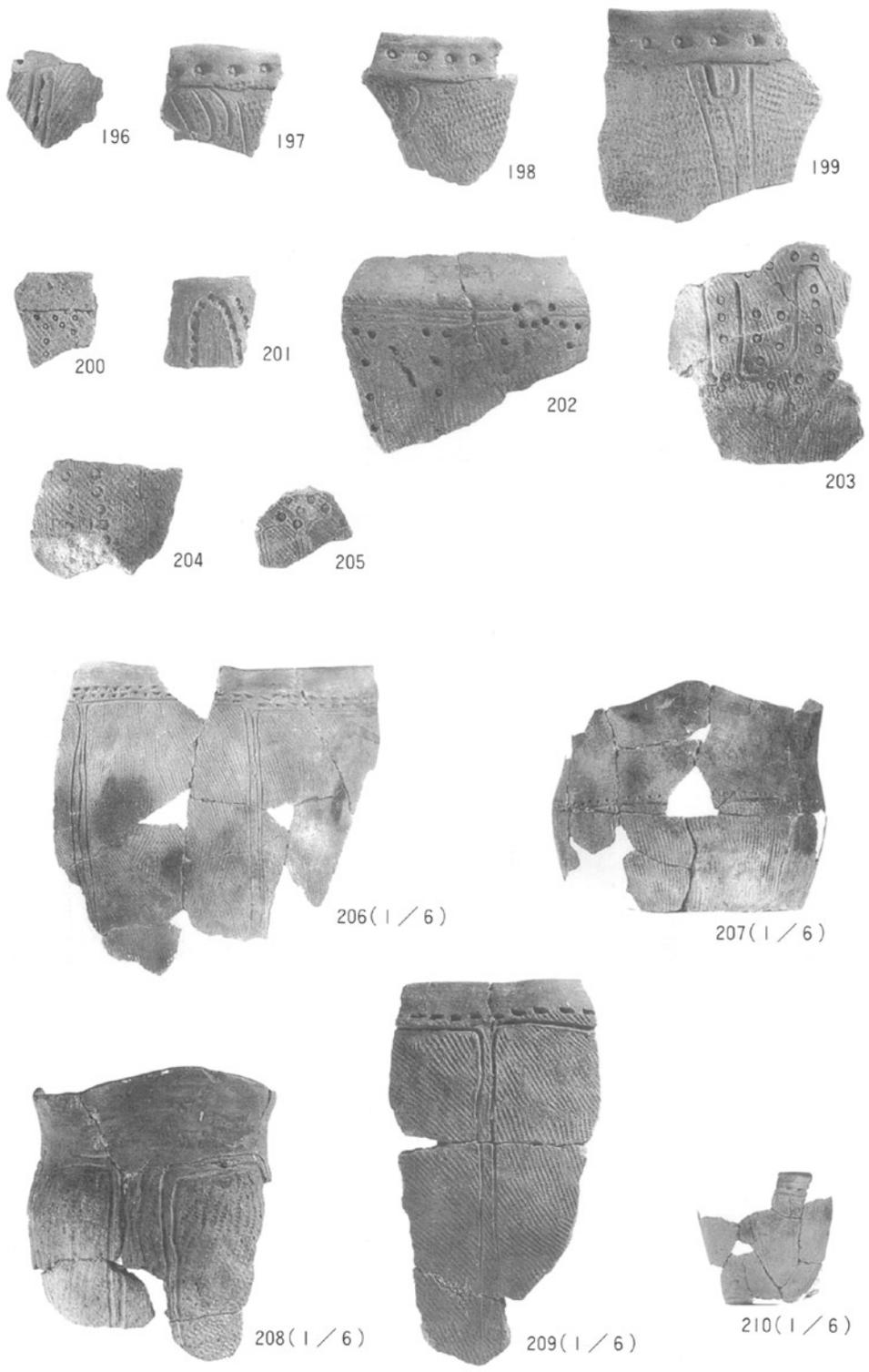


写真-54 遺構外出土土器-26 (第IV群2類)



211(1/4)



212(1/4)



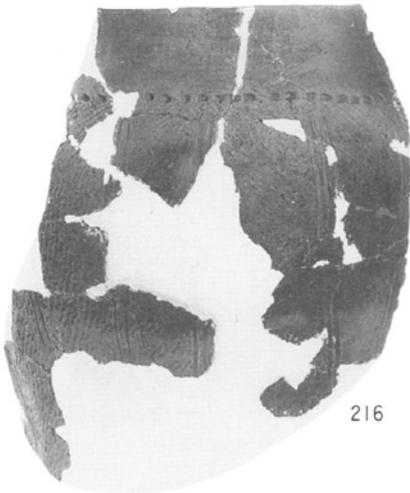
213



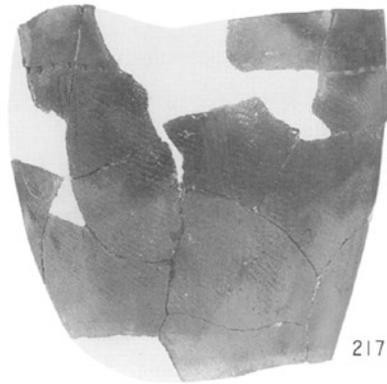
214



215



216



217



218



219

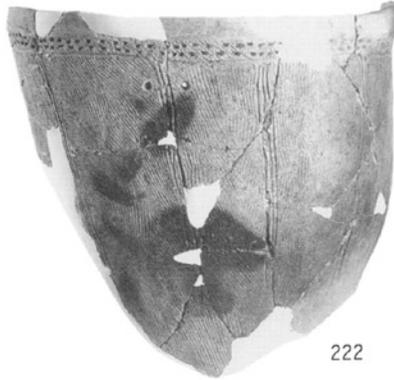
写真-55 遺構外出土土器-27 (第IV群2類)



220



221



222

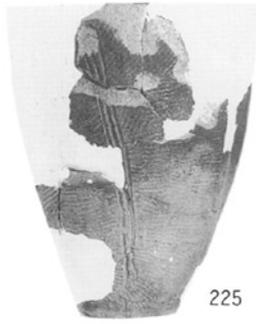


223



224

写真-56 遺構外出土土器-28 (第IV群2類)



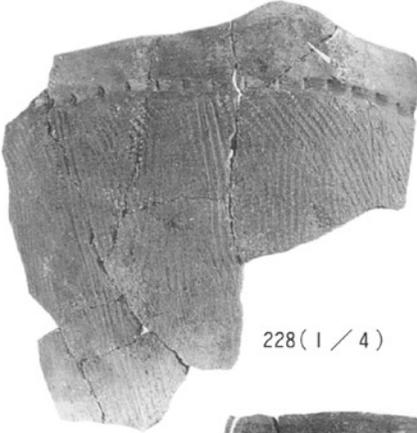
225



226(1/4)



227(1/4)



228(1/4)



229



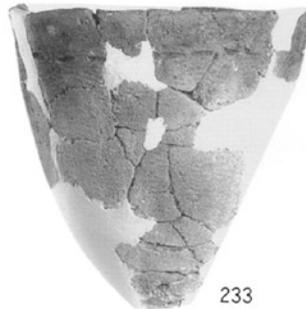
230



231



232



233

写真-57 遺構外出土土器-29 (第IV群2類)



234(1/6)



235



236



237



238



239



240(1/6)



241(1/6)

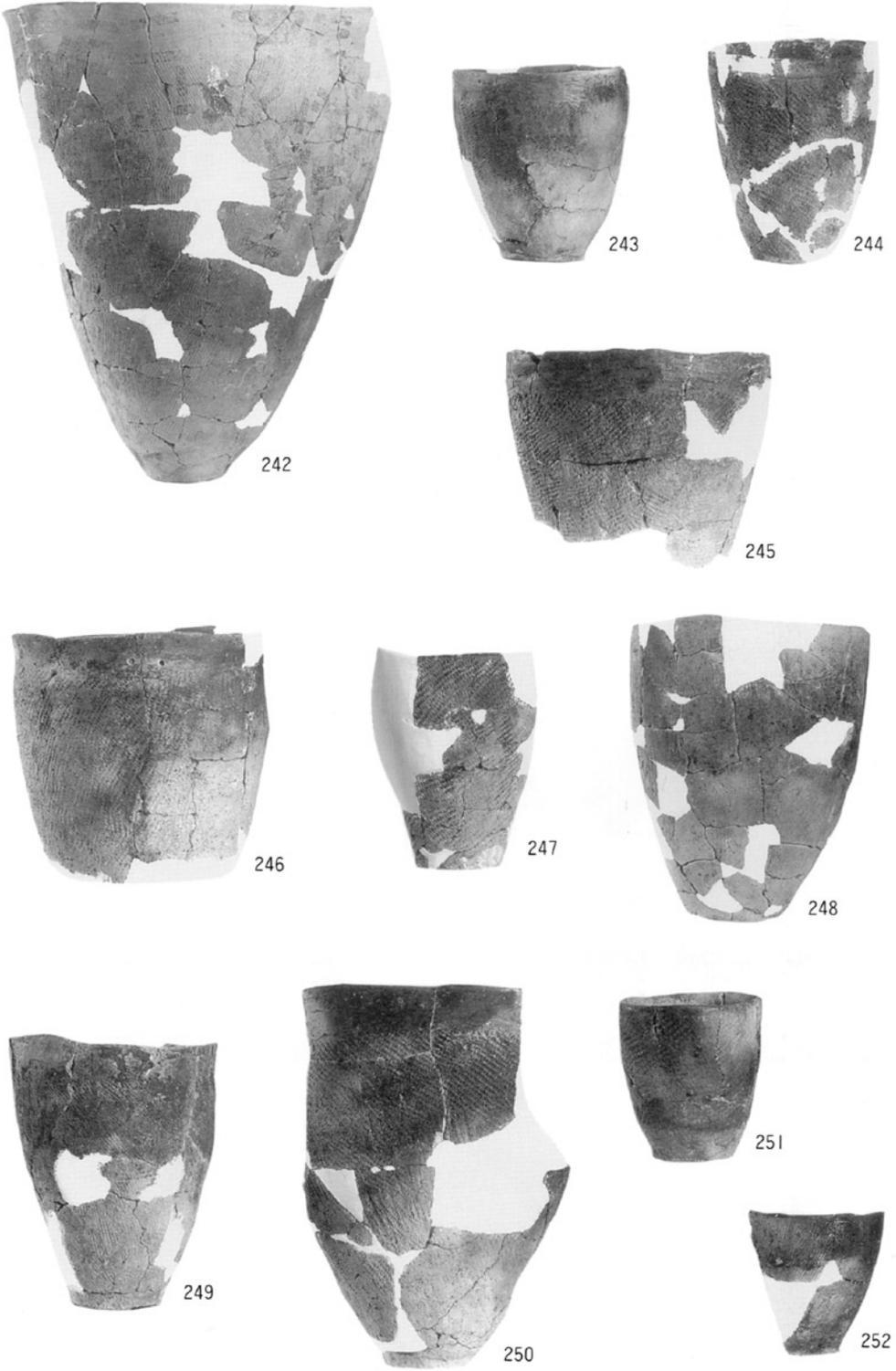


写真-59 遺構外出土土器-31 (第IV群2類)



253



254



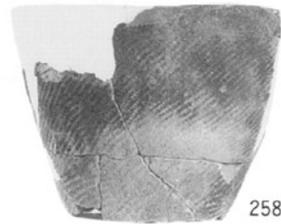
255



256



257



258



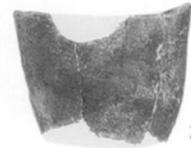
259



260



261



262



263



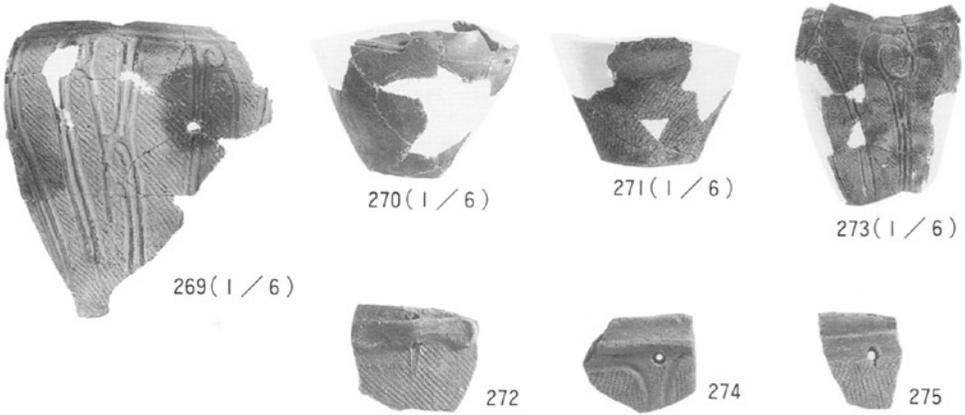
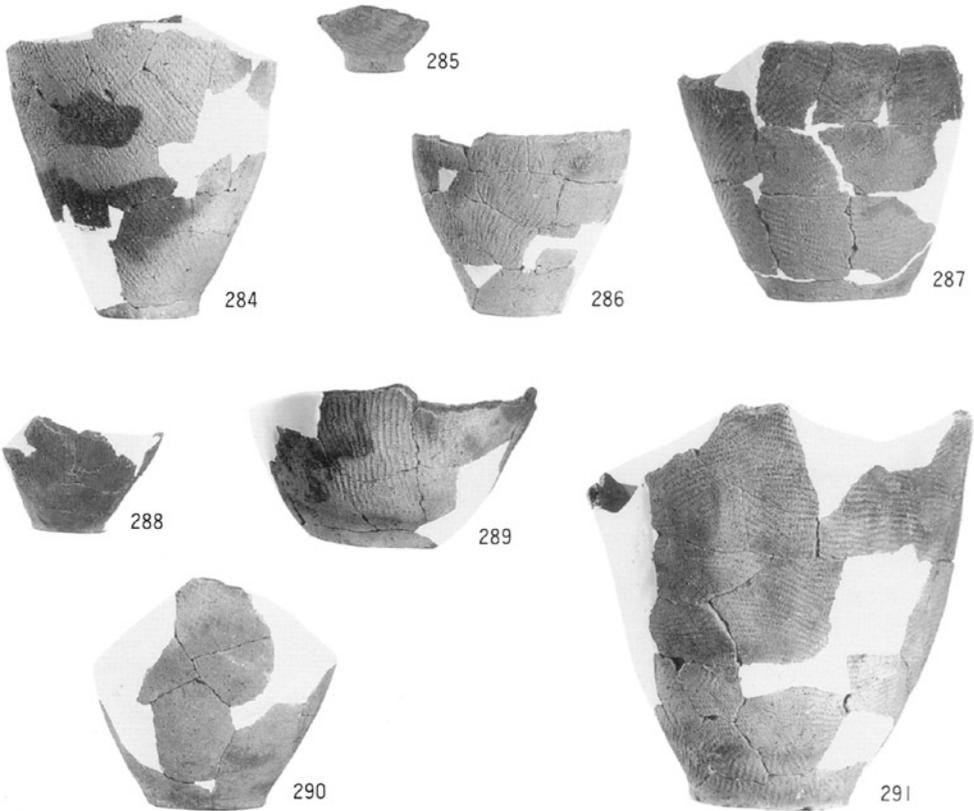
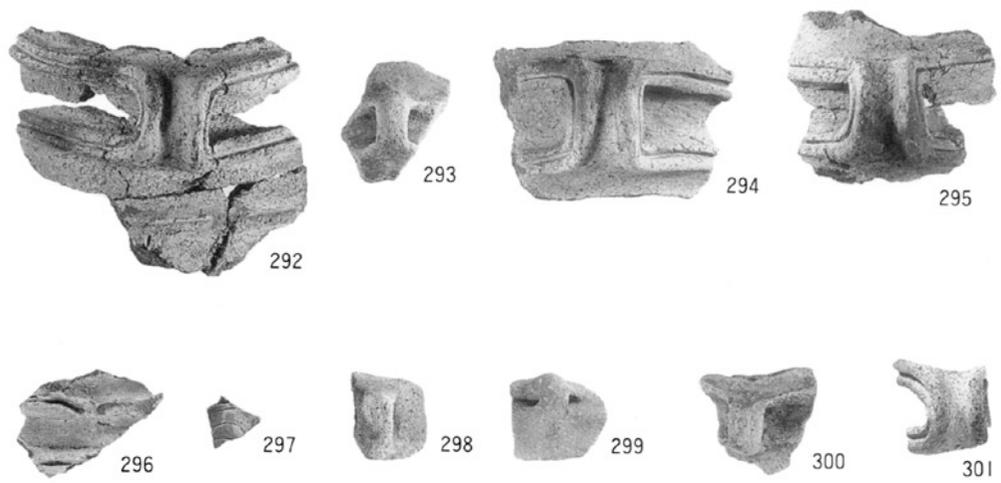


写真-61 遺構外出土土器-33 (第IV群3類)

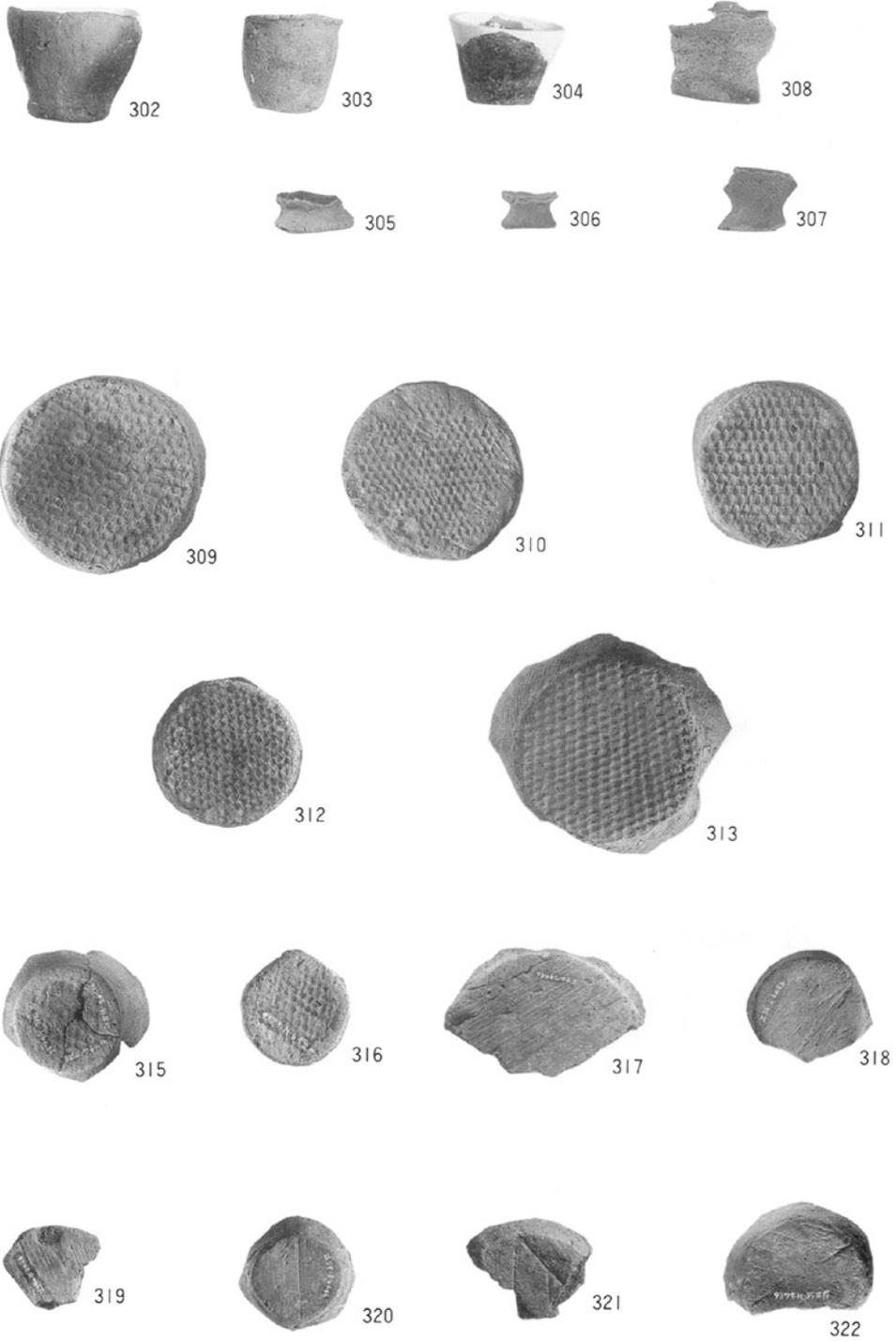


1 / 6



1 / 4

写真-62 遺構外出土土器-34 (第IV群4類・第V群)



1 / 4

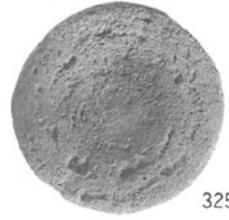
写真-63 遺構外出土土器-35 (第VI群・第VII群)



323



324



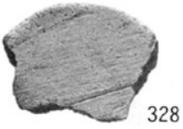
325



326



327



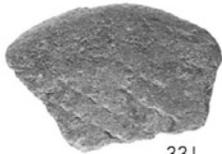
328



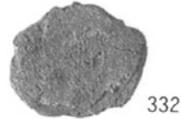
329



330



331



332

1 / 4

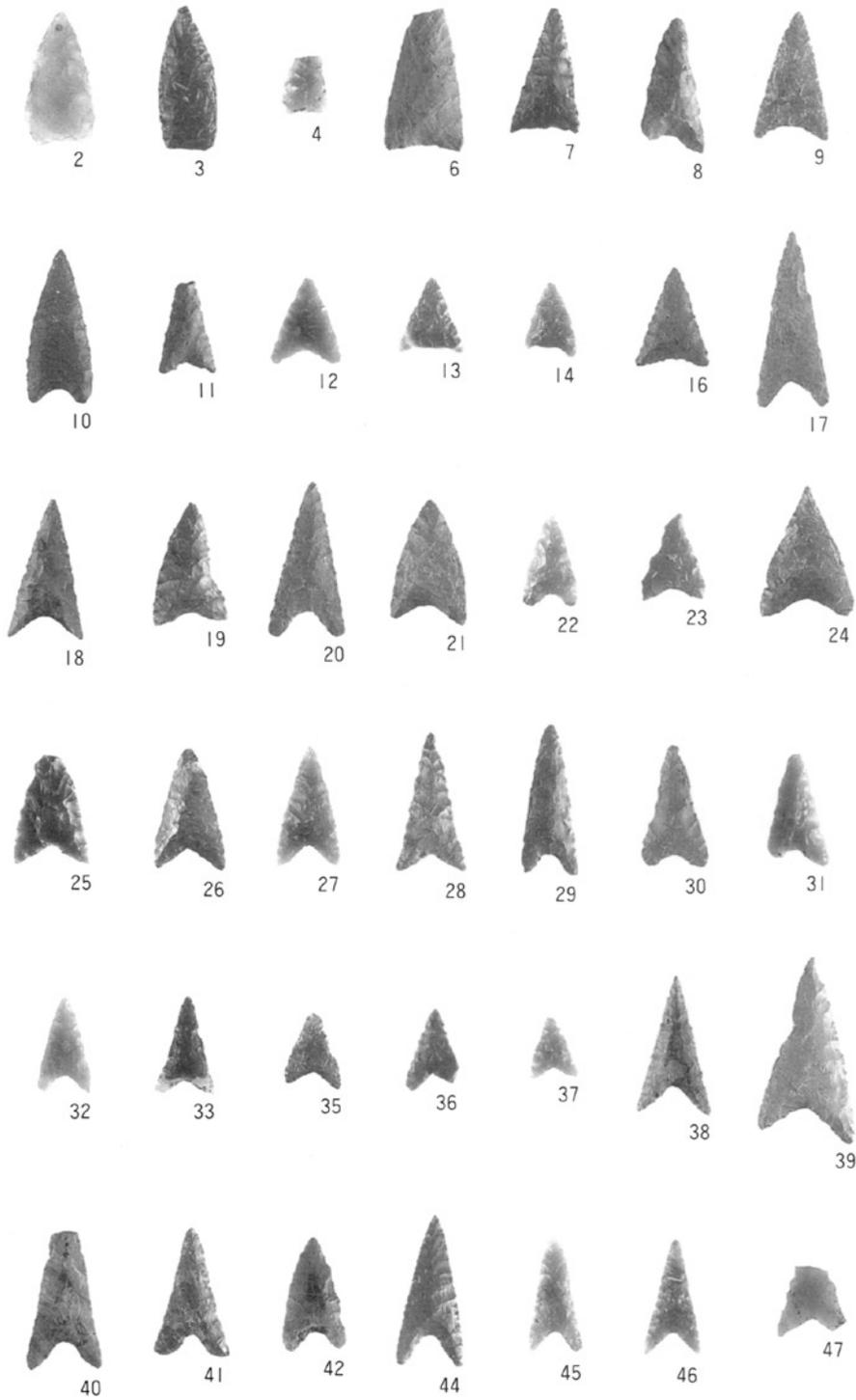


写真-65 遺構外出土石器-1 (石鏃-1)

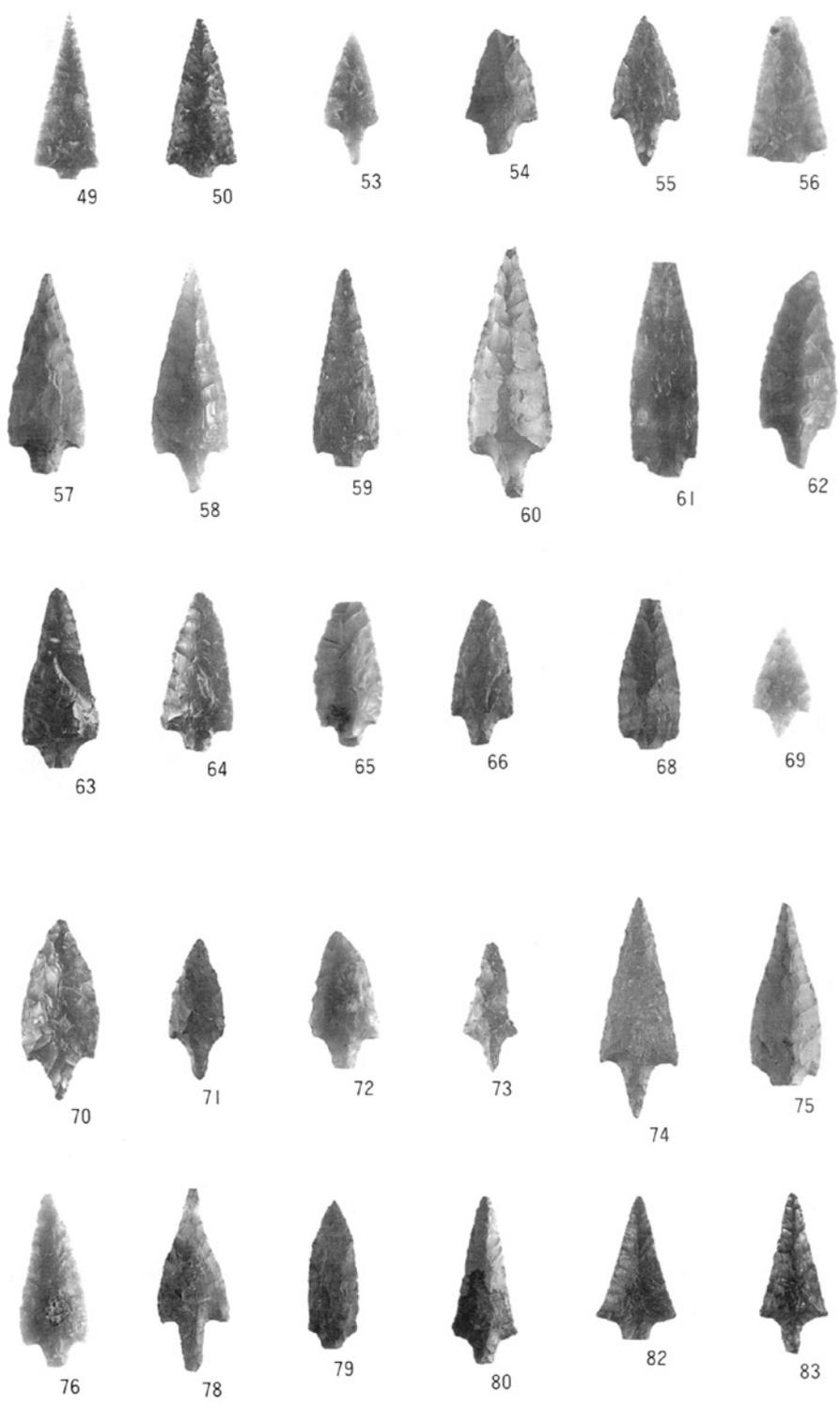


写真-66 遺構外出土石器-2 (石鏃-2)

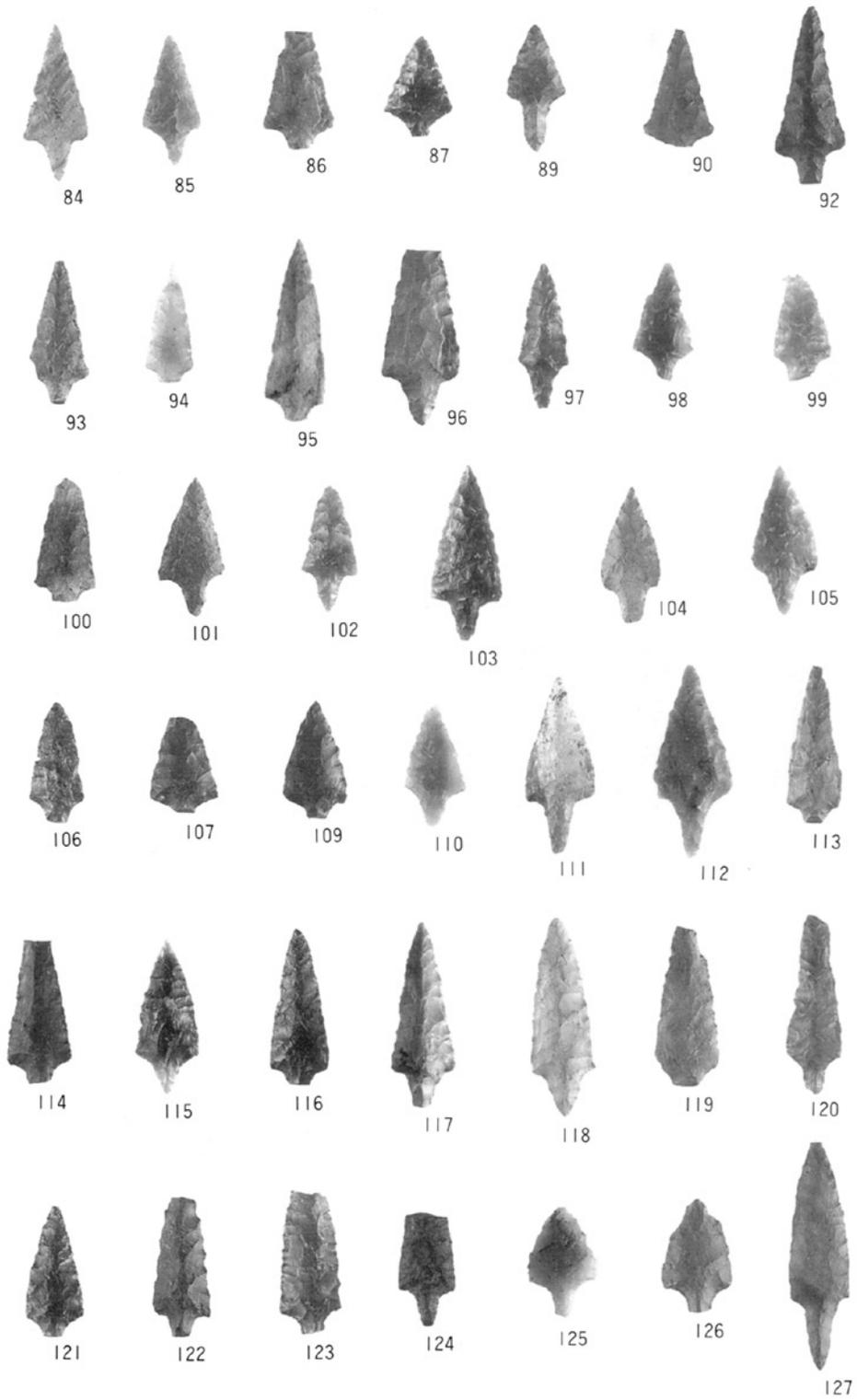


写真-67 遺構外出土石器-3 (石鏃-3)

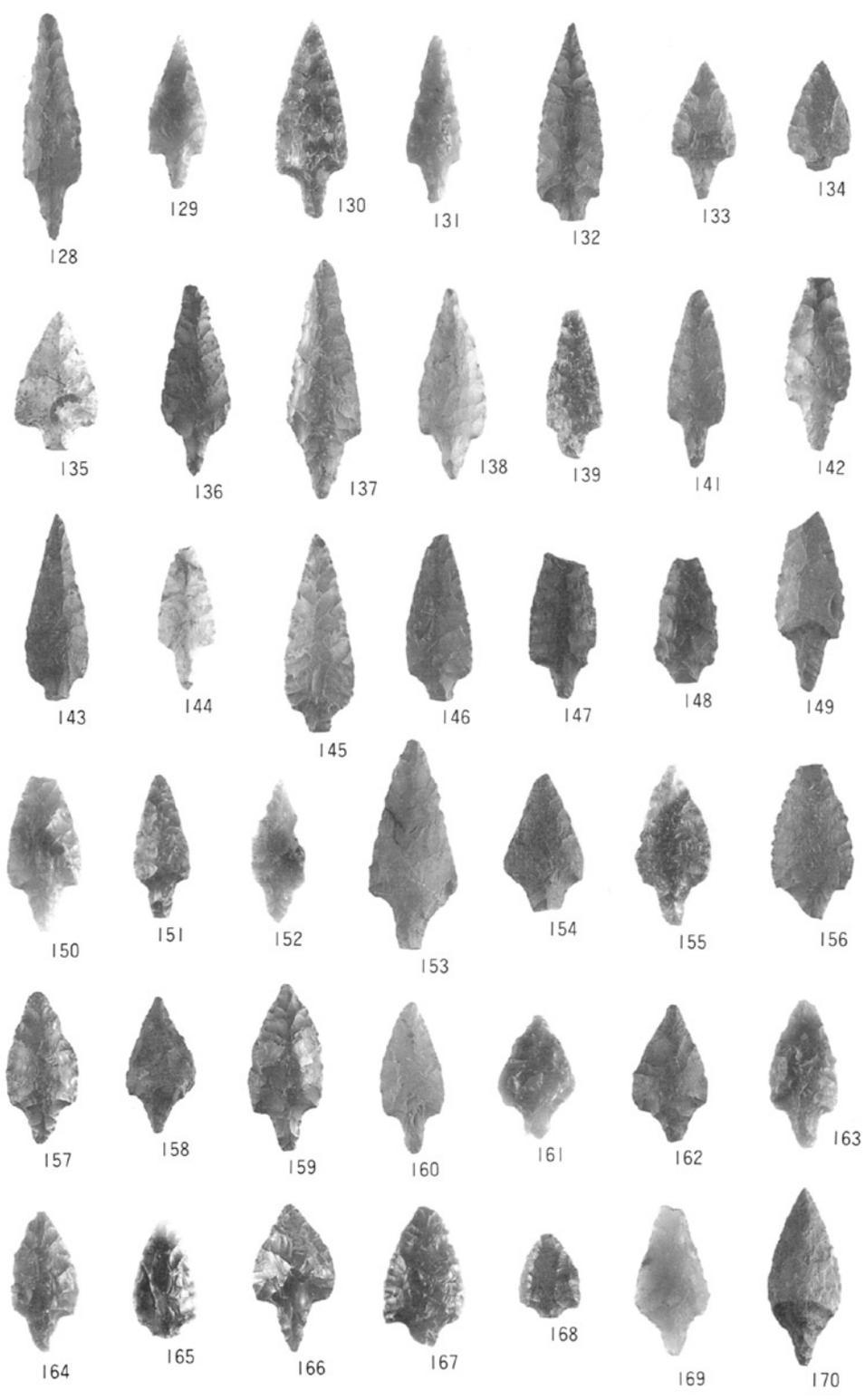


写真-68 遺構外出土石器-4 (石鏃-4)

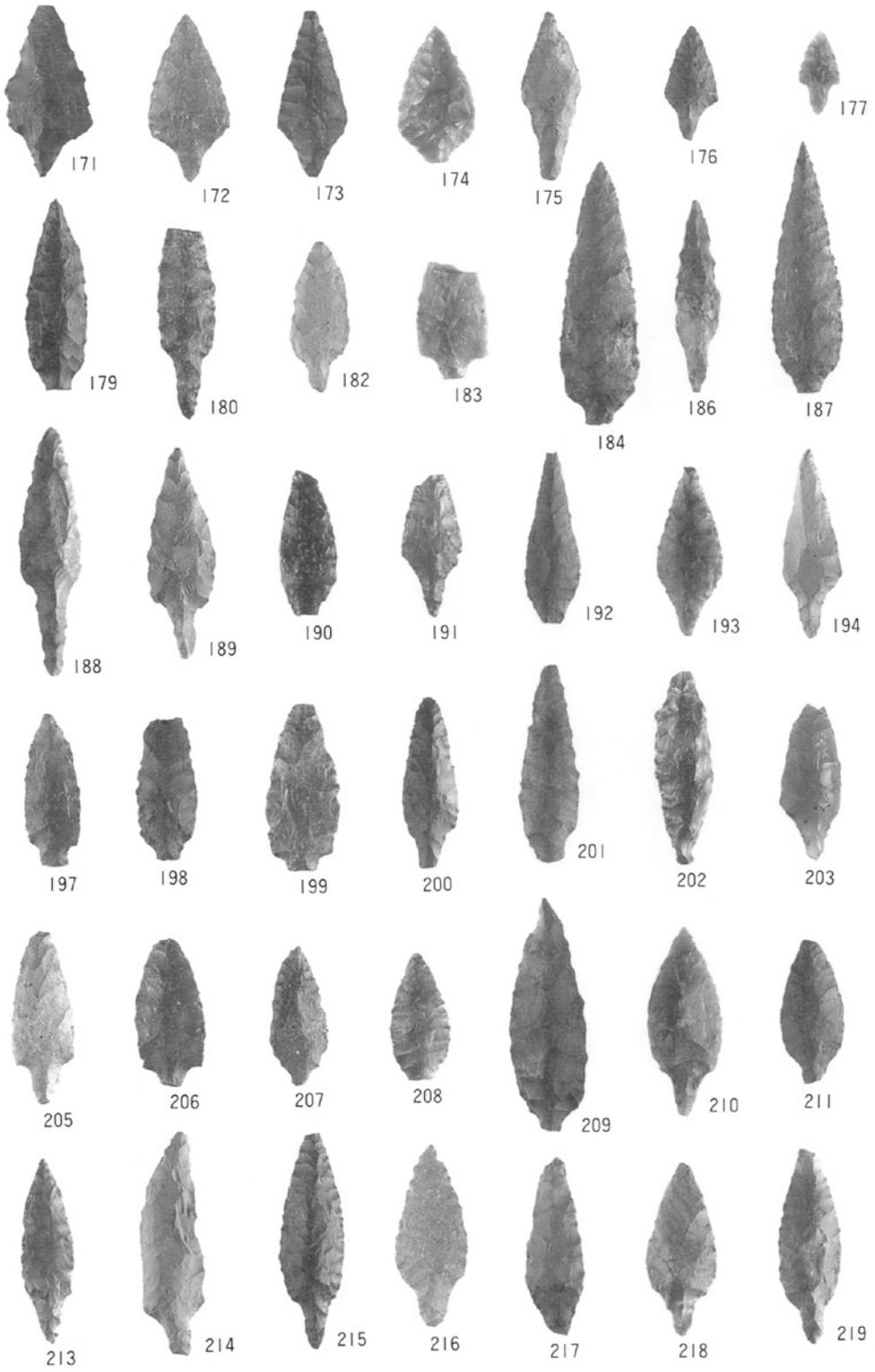


写真-69 遺構外出土石器-5 (石鏃-5)

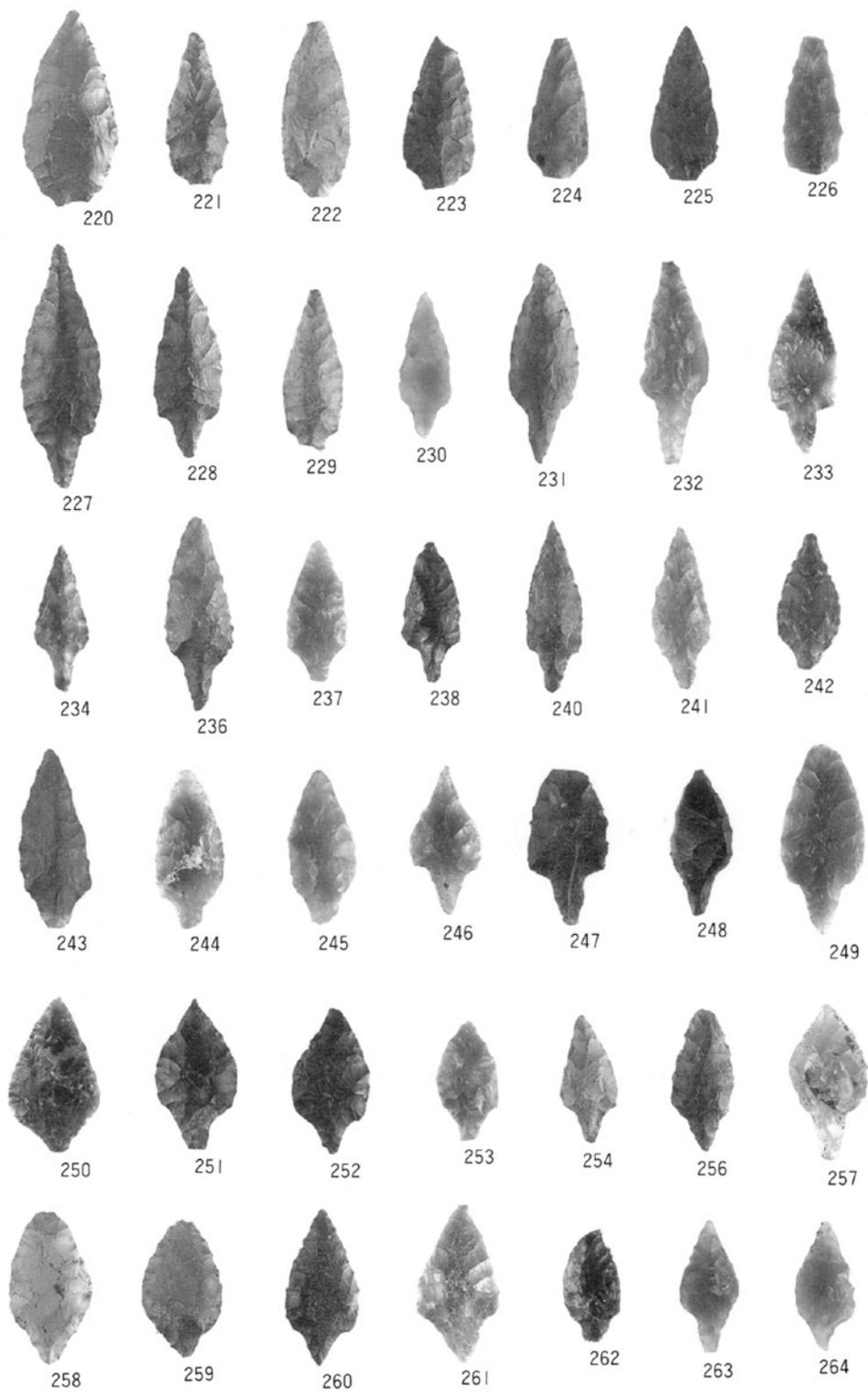


写真-70 遺構外出土石器-6 (石鏃-6)

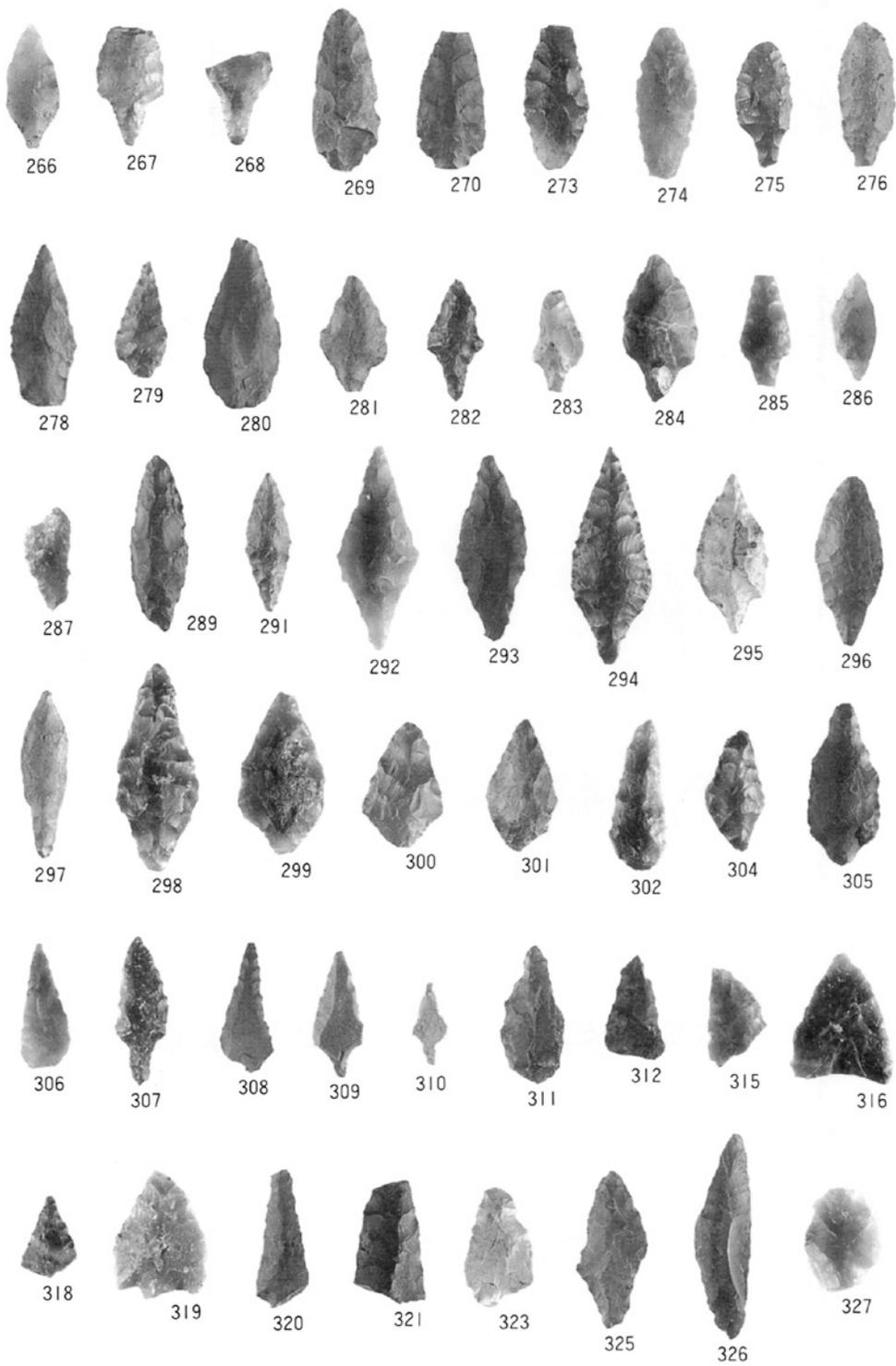


写真-71 遺構外出土石器-7 (石鏃-7)

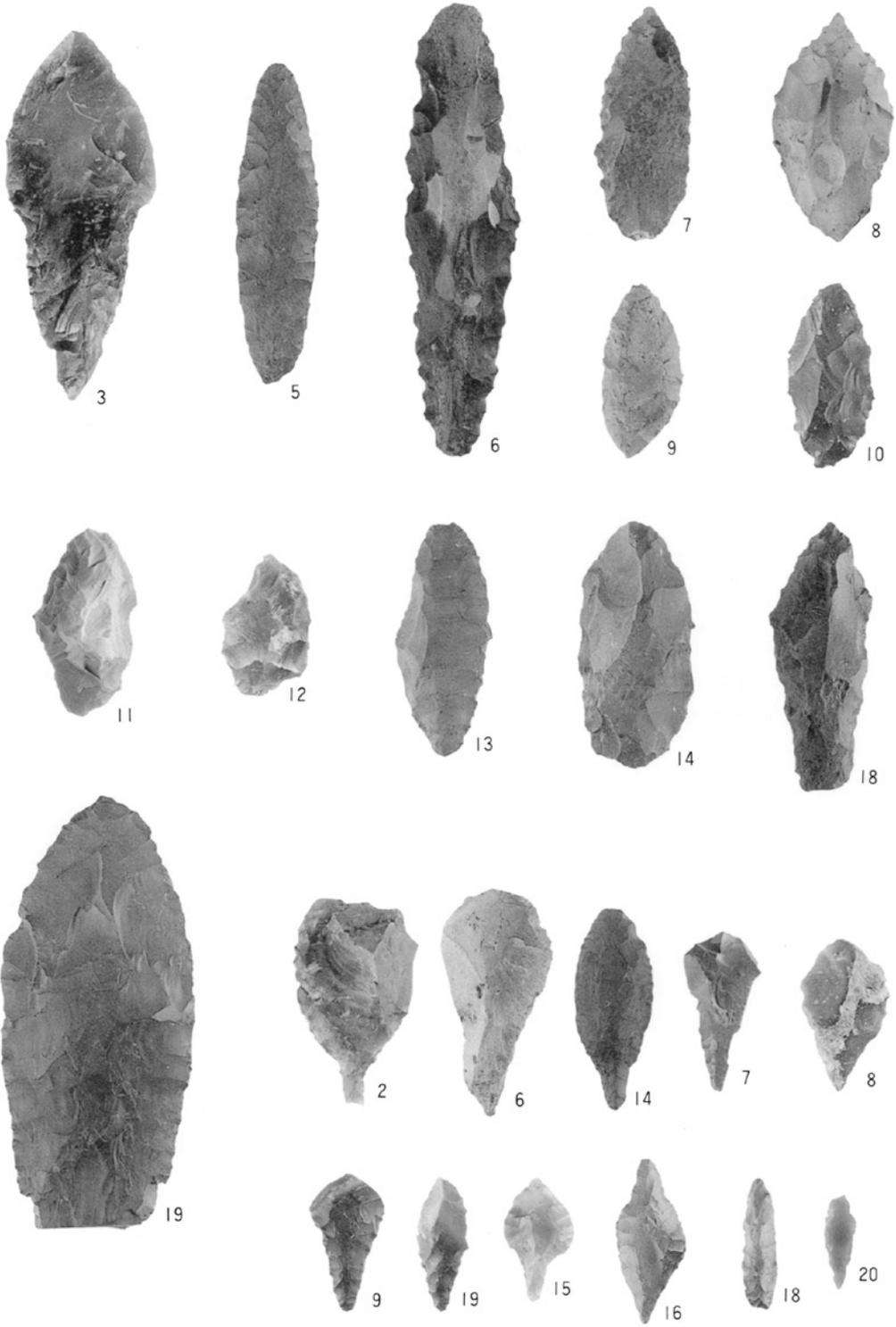


写真-72 遺構外出土石器-8 (石槍・石錐)

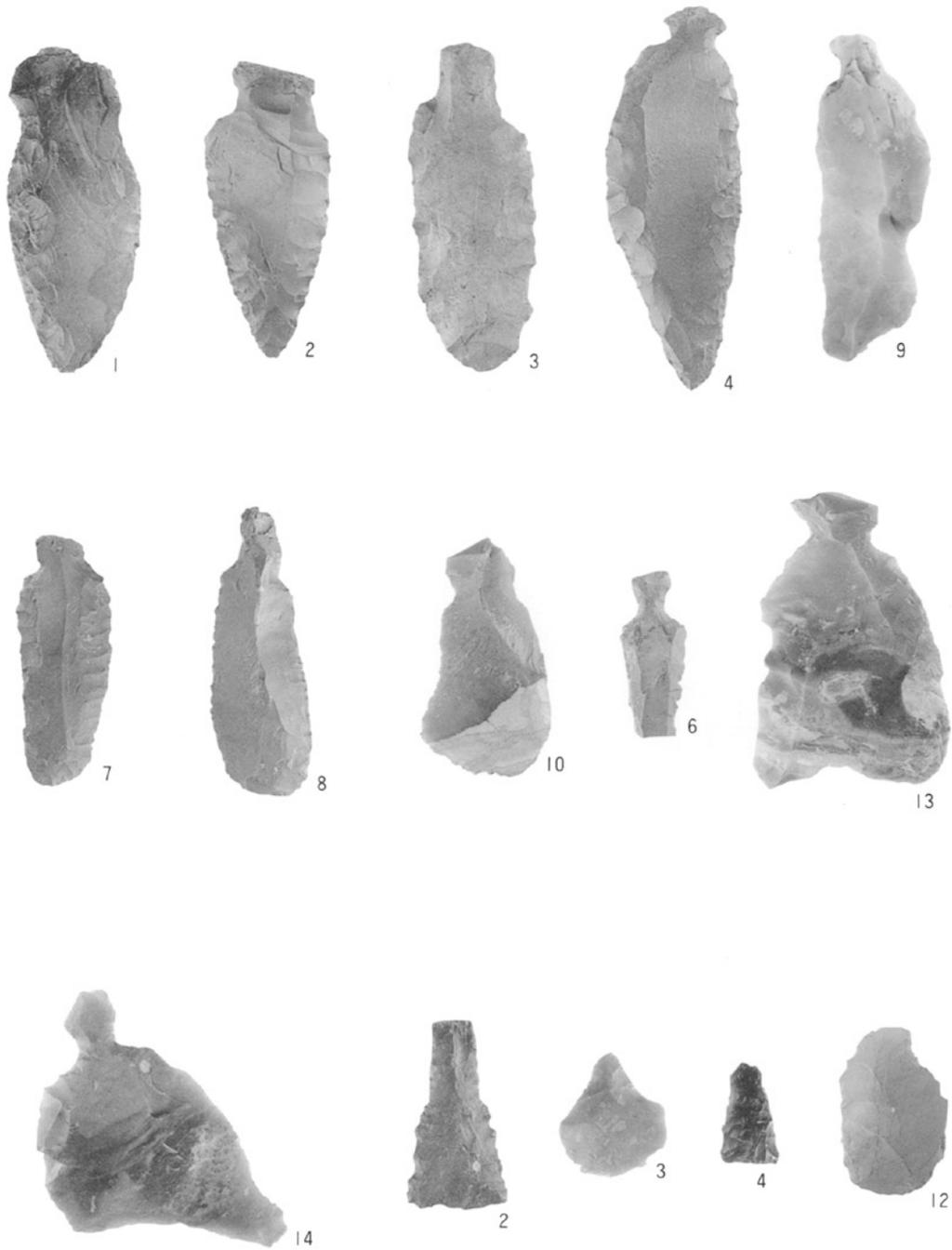


写真-73 遺構外出土石器-9 (石匙・石篋)



写真-74 遺構外出土石器-10 (石筥・異形石器)

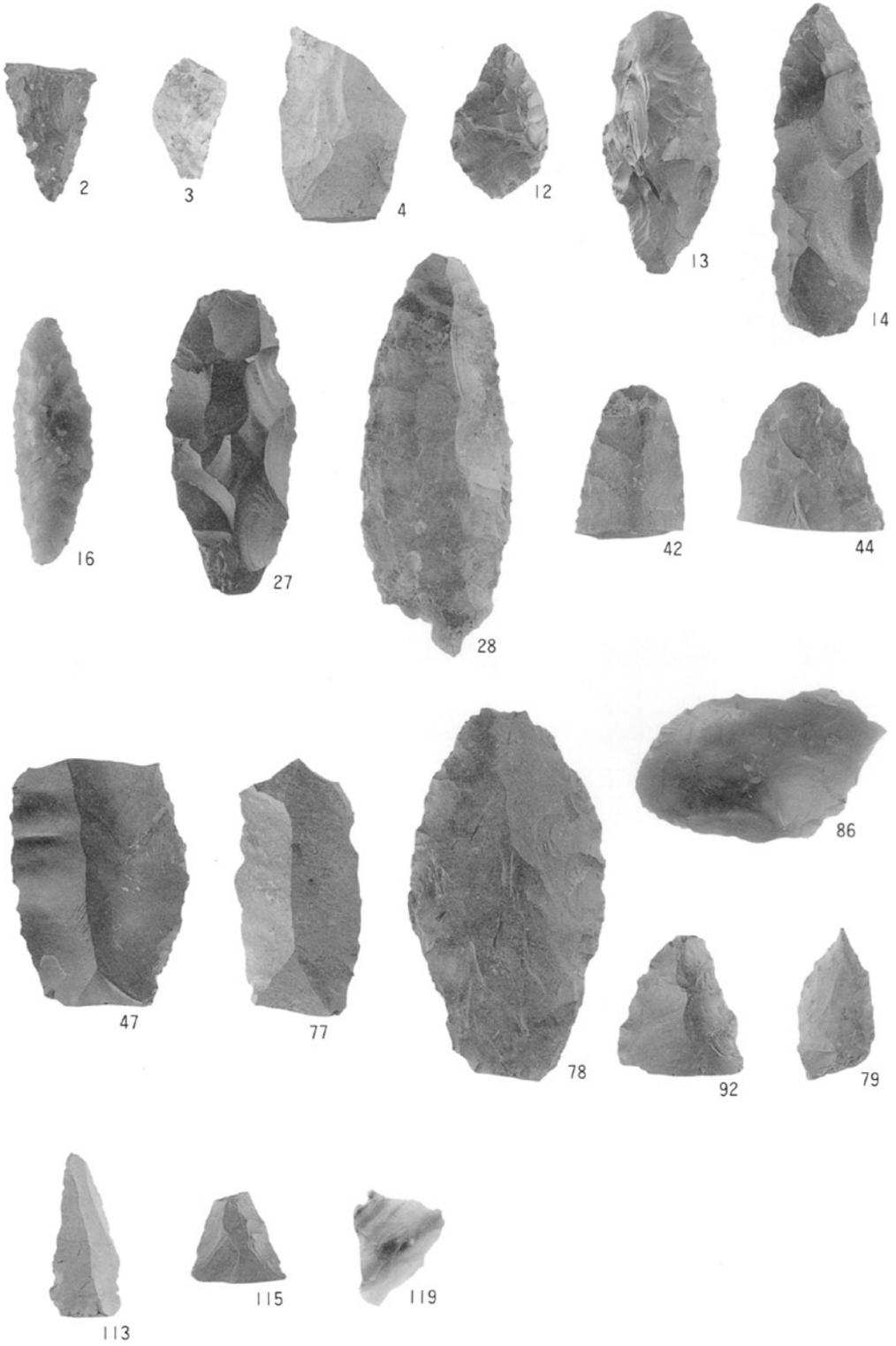


写真-75 遺構外出土石器-11 (不定形石器)

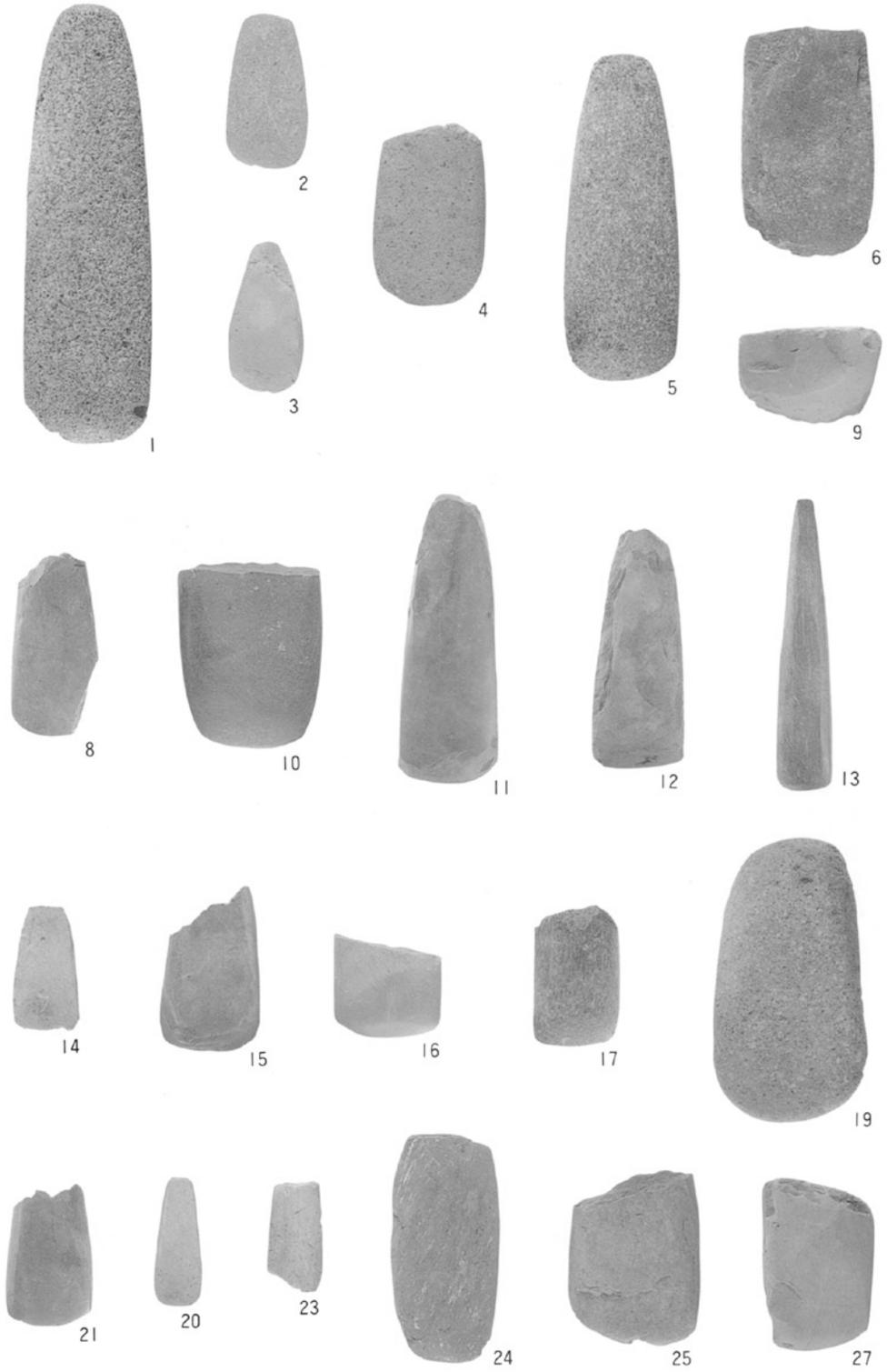


写真-76 遺構外出土石器-12 (石斧-1)

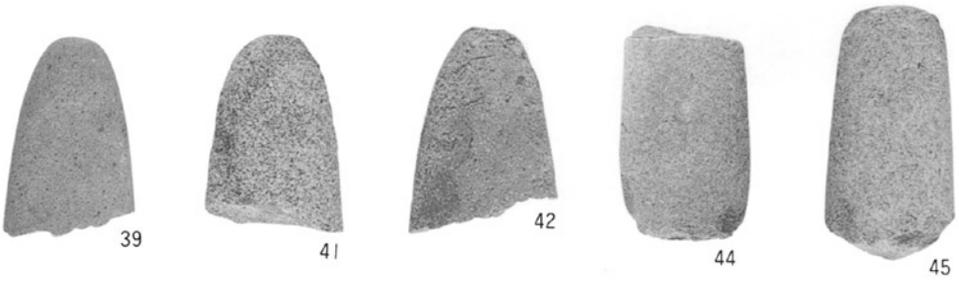
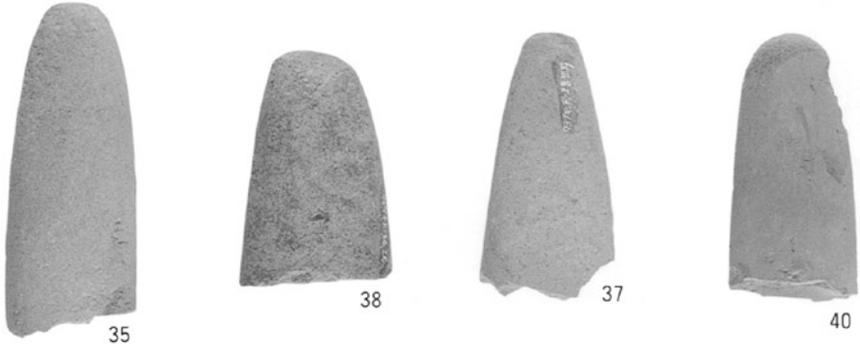
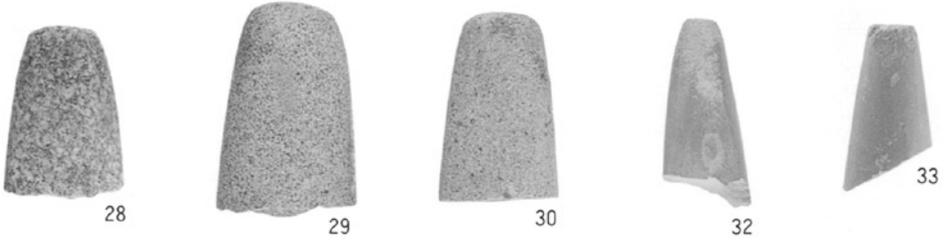
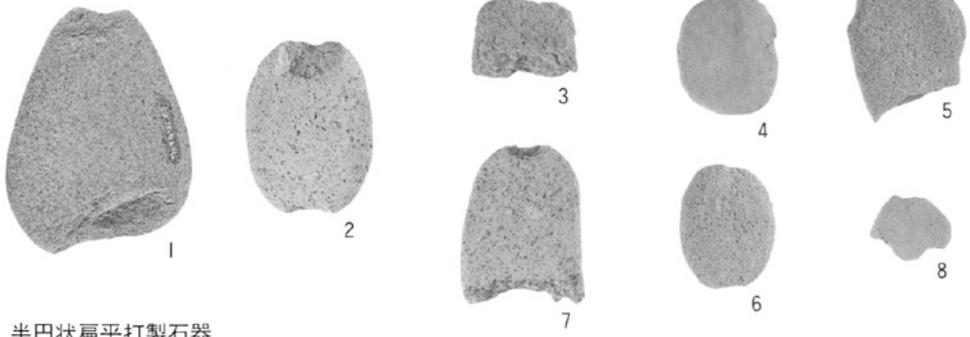
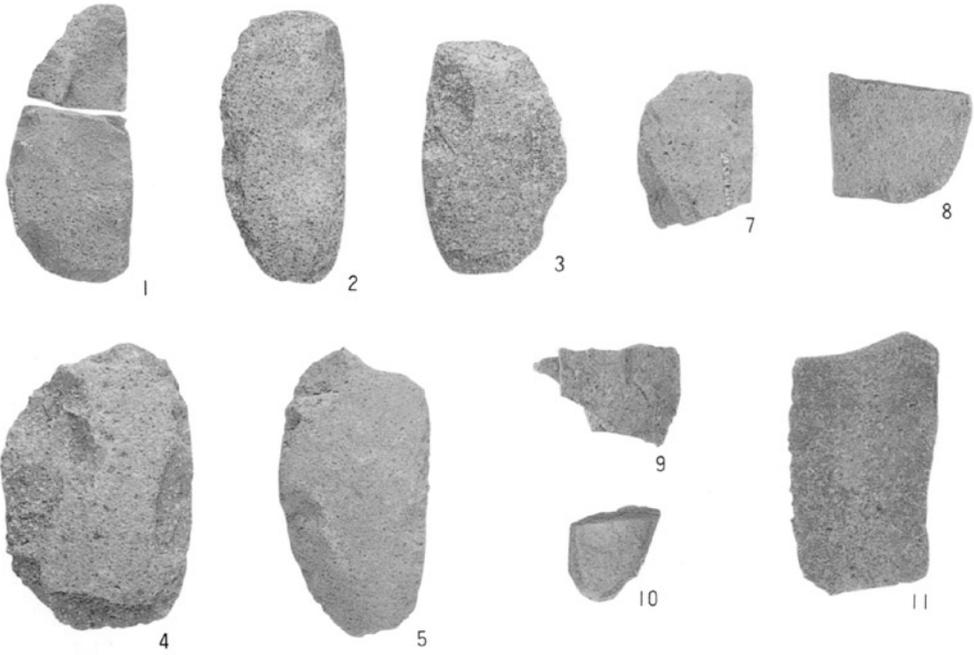


写真-77 遺構外出土石器-13 (石斧-2)

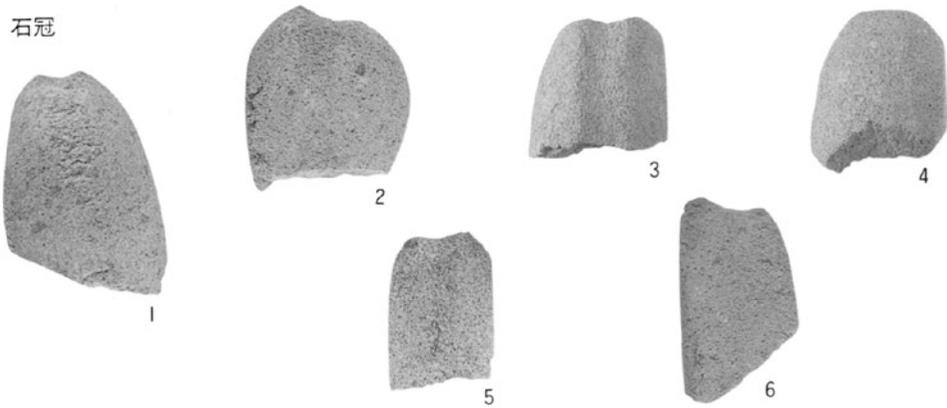
石錘



半円状扁平打製石器



石冠



S = 1/4.5

写真-78 遺構外出土石器-14 (石錘・半円状扁平打製石器・石冠)

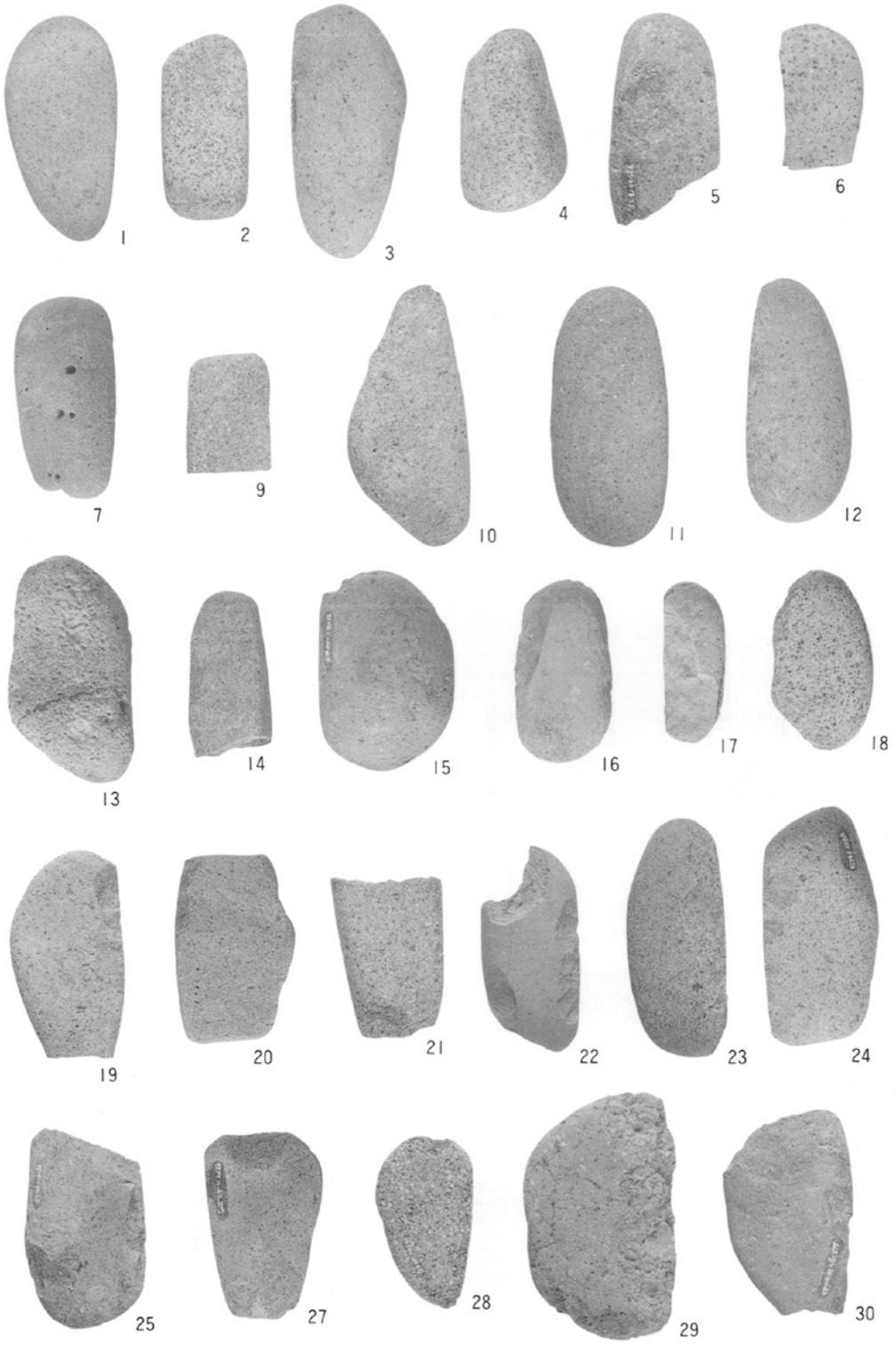
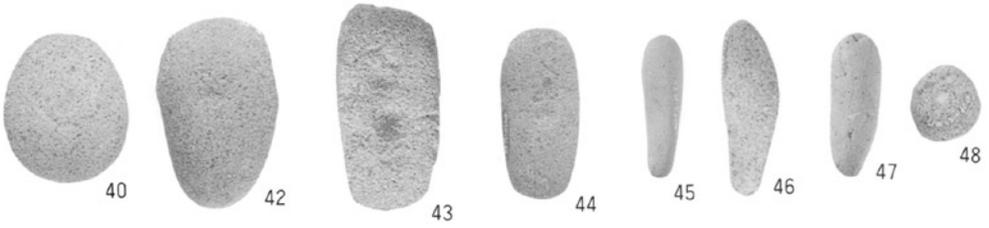
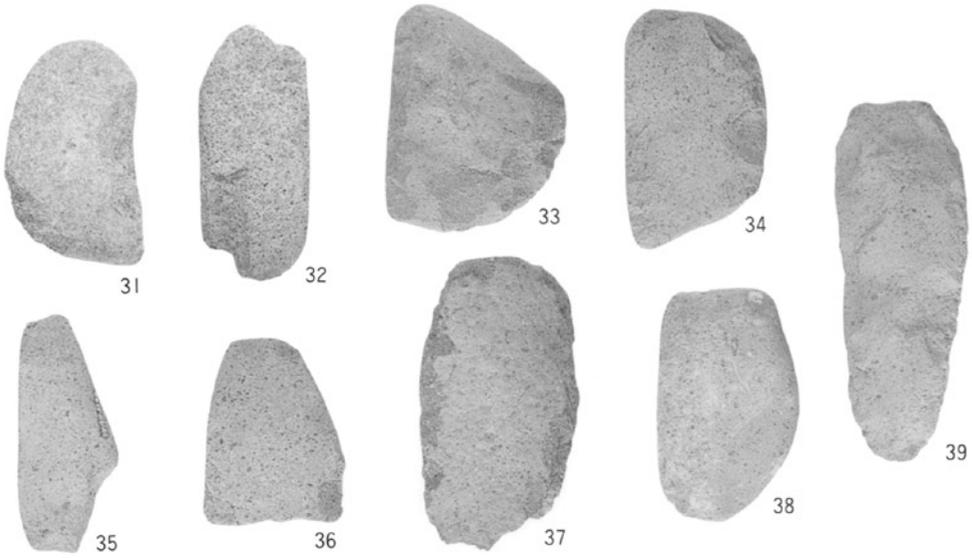


写真-79 遺構外出土石器-15 (スリ石)

S = 1/4.5



凹み石

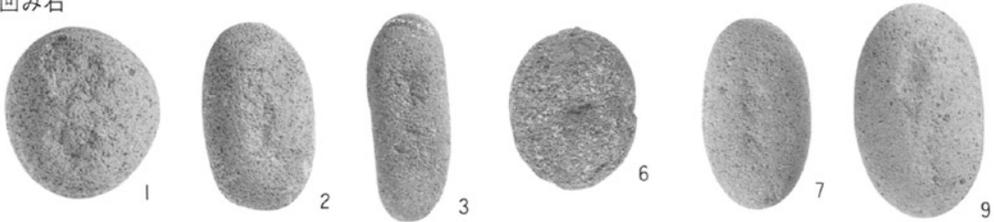


写真-80 遺構外出土石器-16 (スリ石・凹み石)

S = 1/4.5

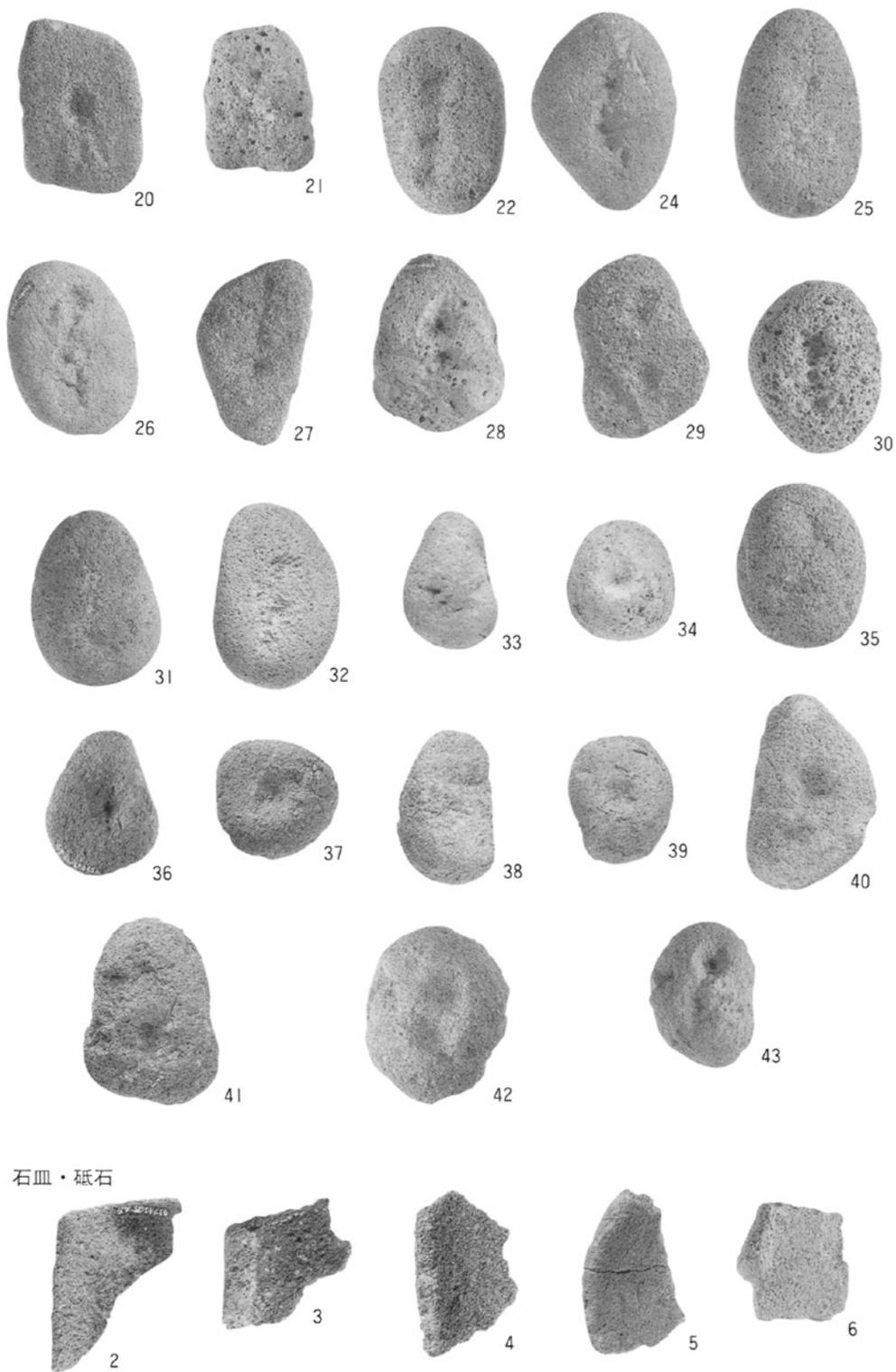


写真-81 遺構外出土石器-17 (凹み石・石皿)

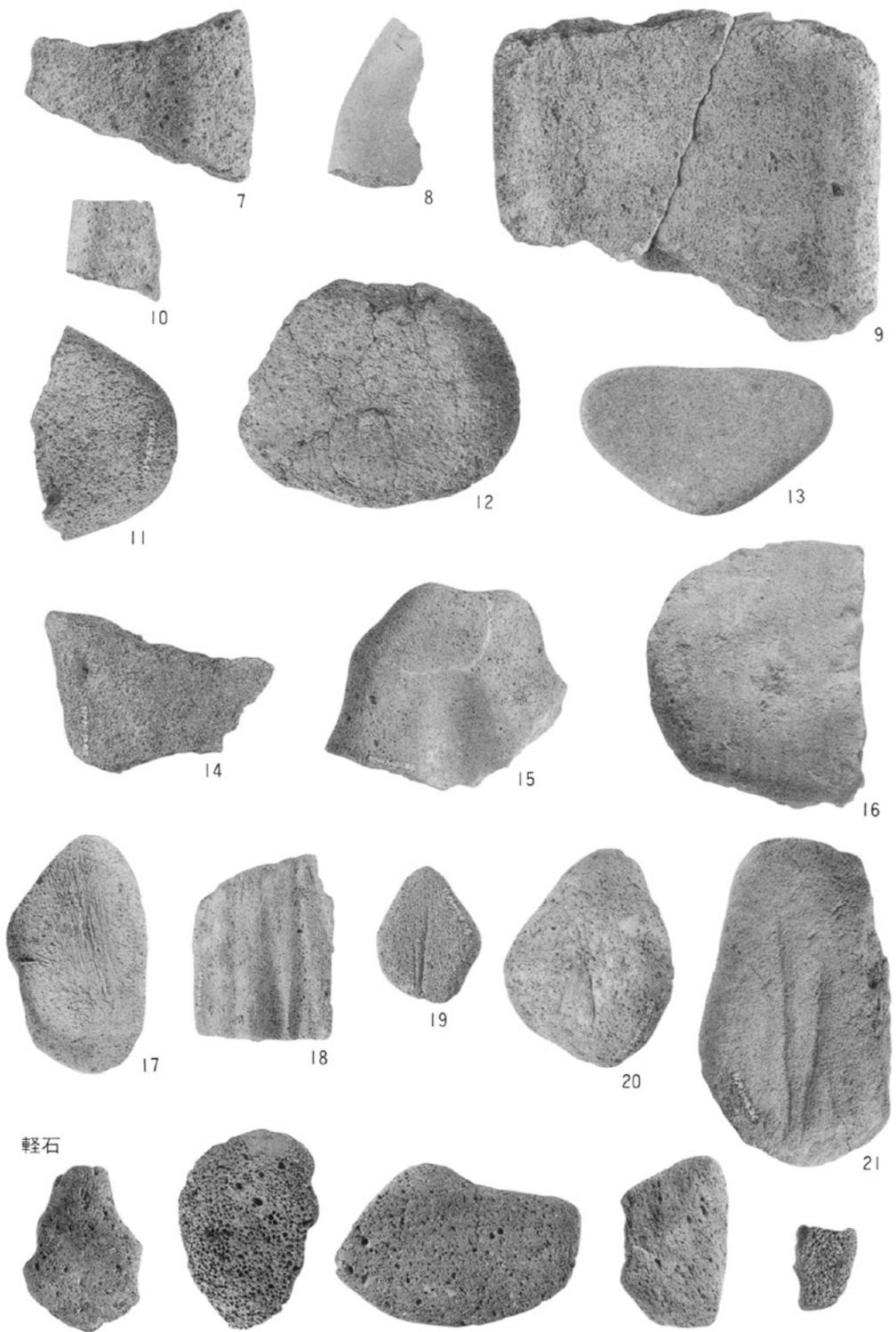
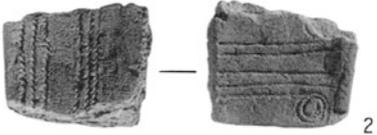


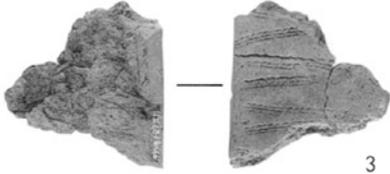
写真-82 遺構外出土石器-18 (石皿・砥石・軽石)



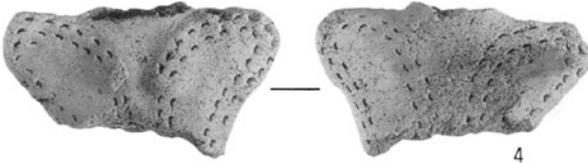
1



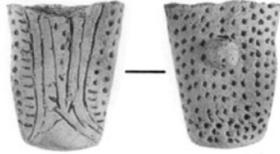
2



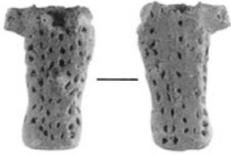
3



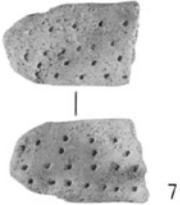
4



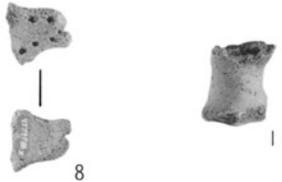
5



6

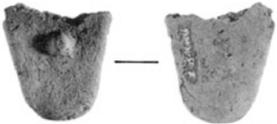


7

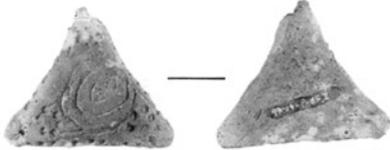


8

11



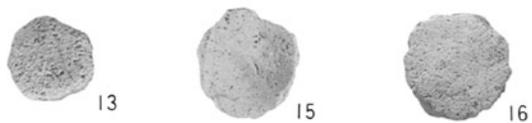
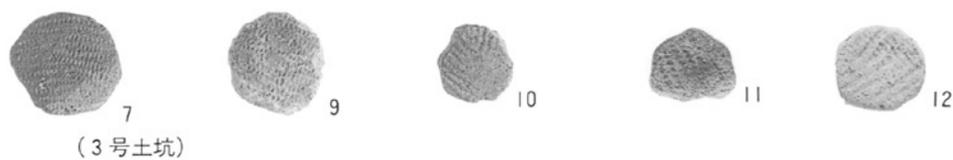
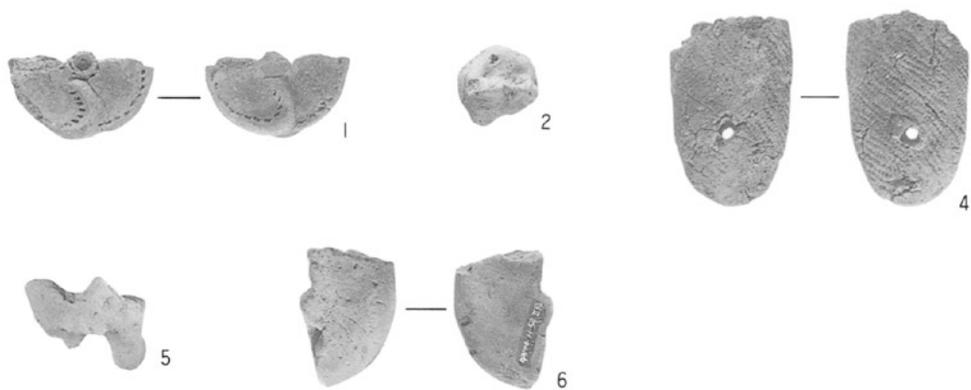
10



12

S = 1/3

写真-83 土製品-1 (土偶)

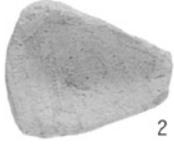


S = 1/3

写真-84 土製品-2 (円盤状・その他の土製品)



1



2



3



7



8



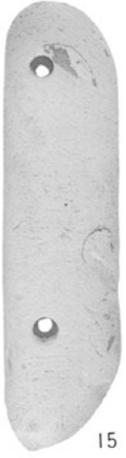
11



12



13



15



16



17



18



19



21



20

S = 1/2

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	つきのき(1) いせき							
書名	槻ノ木(1) 遺跡							
副書名	野辺地町近沢川砂防ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査センター							
シリーズ番号	第169集							
編著者名	白鳥文雄							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038 青森市大字新城字天田内152-15 TEL0177 (88) 5701							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
槻ノ木(1)	青森県 上北郡 野辺地町字 槻ノ木31 外	市町村	遺跡番号	40°	141°	19930705 ～ 19931118	5,176	野辺地町近 沢川砂防ダ ム建設事業 に伴う発掘 調査
		02401	40001	51′	05′			
				54″	44″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
槻ノ木(1)		縄文	竪穴住居跡 土坑 屋外炉 埋設土器遺構 配石遺構 溝状ピット	縄文時代中期の 土器・石器 土偶・土製品 石製品、 縄文時代後期の 土器・石器				

青森県埋蔵文化財調査報告書 第169集

## 槻ノ木（1）遺跡

－ 野辺地町近沢川砂防ダム建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 －

発行年月日 平成7年3月31日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038 青森市大字新城字天田内152-15

TEL 0177-88-5701

印刷所 青森オフセット印刷株式会社

青森市本町二丁目11-16

TEL0177-75-1431

